ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

V

（本文編）

1978

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

V

（本文編）

1978

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

001.2
Sh 27

はじめに

滋賀県下におけるほ場整備事業の進展は、旧来の田園風景を大きく変貌させており、それに伴なう埋蔵文化財の調査件数も年々増加の一途をたどっている。調査は早くも五年目を迎えるが、対象地域も湖北、湖西、湖東、湖南と県下全域におよび、調査成果も予想以上のものがある。しかし、ほ場整備事業の性格から、調査時期が一時期に集中したり、あるいは調査、整理、報告書作成等の日程が限られたり制約も多い。こうした条件の中ではあるが、その成果を少しでも早く公表し、地域の歴史を明らかにすることは、調査にたずさわったものに課せられた責務でもある。本年もまた、質量ともに前年度以上の報告書を刊行できることは、関係者一同喜びにたえない。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術、研究上の一助となれば幸いといえよう。

本調告書の作成には、地元教育委員会をはじめ地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得ることができた。記して感謝したい。

昭和53年３月

滋賀県教育委員会
教育長　中　山　　正

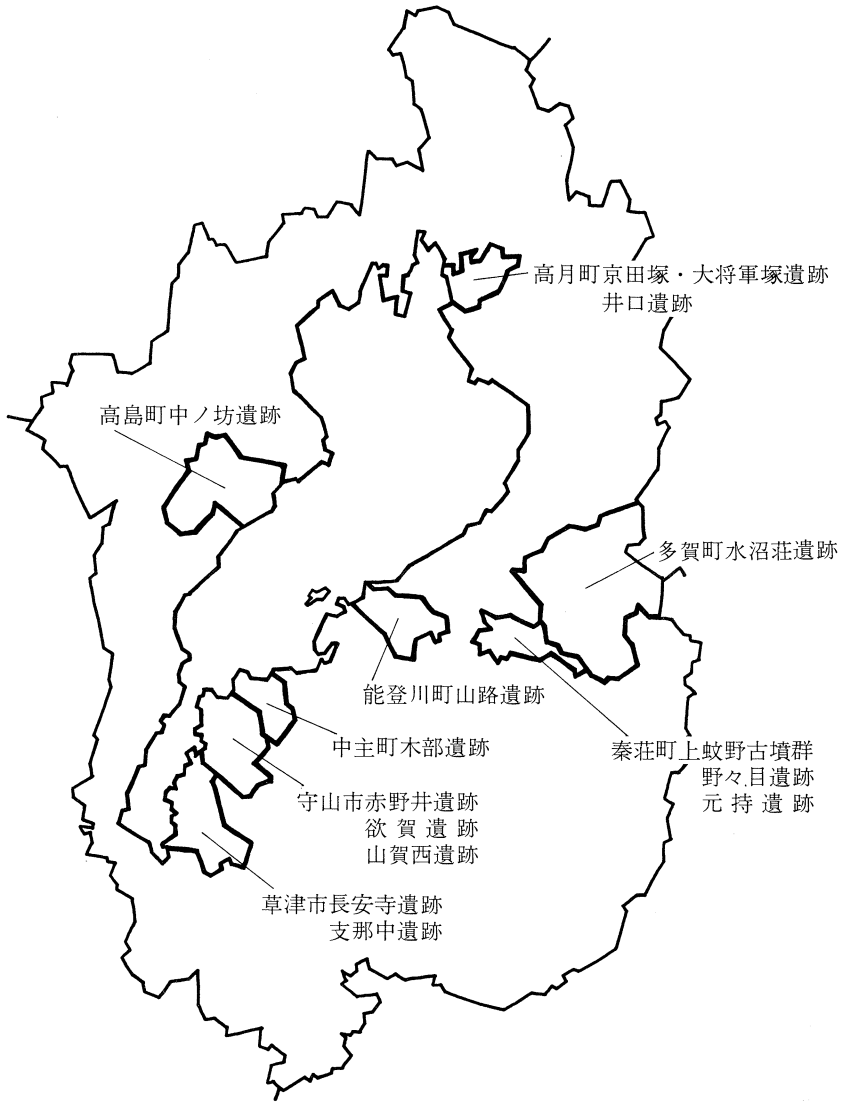
例　　言

1.本報告は、昭和52年度国庫補助事業対象となった、県営、団体営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果（第１章～第７章）と、昭和52年度県営ほ場整備事業に伴なう遺跡調査のうち、県農林部の費用負担にかかる発掘調査の成果（第８章～第16章）を収載したものである。

2.調査にあたっては、地元市町の役場、教育委員会、区長から種々の協力を得た。

また、現地調査は、本県文化財保護課技師近藤滋、大橋信弥、田中勝弘、兼康保明をそれぞれ担当者とし、特に赤野井遺跡、山賀西遺跡については、守山市教育委員会社会教育課主事山崎秀二氏にお願いした。

3.調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとにしるすとともに、報告の文責は文末に明記した。記して感謝の意を表す次第である。



目　　次

第１章　中主町木部遺跡

1．はじめに……1
2．調査経過―日誌抄―……1
3．遺　構……6
4．出土遺物……6
5．まとめ……7

第２章　草津市長安寺遺跡

1．はじめに……11
2．調査経過―日誌抄―……11
3．遺　構……14
4．遺　物……14
5．まとめ……14

第３章　守山市赤野井遺跡

1．はじめに……15
2．調査地区の概要……15
3．地　形……17
4．遺　構……17
5．遺　物……23
(1)弥生時代遺物　(2)古墳時代遺物　(3)歴史時代遺物
(4)黒色土器　(5)木製品
6．おわりに……28

第４章　能登川町山路遺跡

1．はじめに……29
2．位置と環境……29
3．遺構について……31

第５章　多賀町水沼荘遺跡

１．はじめに……36
２．遺　構……36
３．遺　物……39
４．まとめ……40

第６章　高月町京田塚・大将軍塚遺跡

１．はじめに……41
２．位置と環境……41
３．調査の結果……41
　Ⅰ．京田塚遺跡　Ⅱ．大将軍塚遺跡
４．結　語……43
５．おわりに……45

第７章　高月町井口遺跡

１．はじめに……47
２．位置の環境……47
３．調査の経過……49
４．調査の結果……49
５．遺　物……53
６．おわりに……58

第８章　高島町中ノ坊遺跡

１．はじめに……59
２．位置と環境……60
３．調査の経過……60
４．調査の結果……61
　(1)層位　(2)遺構
５．出土遺物……64
　(1)土器　(2)鉄製品　(3)土製品　(4)石製品　(5)その他
６．土師器の皿の検討……99
７．小　結……101
　(1)遺構の有無とその性格　(2)出土土器の傾向

第９章　守山市欲賀遺跡

1．はじめに…… 105
2．調査経過…… 106
3．遺　構…… 107
4．遺　物…… 108
5．まとめ…… 108

第10章　草津市支那中遺跡

1．はじめに…… 111
2．調査の経過…… 113
3．基本土層…… 113
4．遺　構…… 115
(1)建物　(2)井戸　(3)土坑　(4)溝
5．出土遺物…… 129
(1)弥生式土器(第Ⅳ様式)　(2)弥生式土器(第Ⅴ様式)
(3)古式土師器　(4)白鳳期の遺物　(5)平安時代の遺物
(6)鎌倉・室町期の遺物　(7)木製品
6．むすび…… 147

第11章　守山市山賀西遺跡

1．はじめに…… 163
2．位置と環境…… 163
3．調査の経緯…… 164
4．遺物…… 166
5．まとめ…… 168

第12章　守山市赤野井遺跡

1．はじめに…… 171
2．遺跡の地理的・歴史的環境…… 173
3．調査地区の概略…… 173
4．遺　構…… 175
5．遺　物…… 178
6．小　結…… 182
7．まとめにかえて…… 185

第13章　高月町井口遺跡

1．はじめに…… 191
2．調査結果…… 191
（イ）M地区　（ロ）P地区　（ハ）W地区　（ニ）X地区
3．遺　構…… 195
（イ）竪穴式住居跡　（ロ）掘立柱住居跡　（ハ）井戸
（ニ）大型土壙　（ホ）溝状遺構
4．遺　物…… 211
5．年　代…… 214
6．考　察…… 215

第14章　秦荘町上蚊野古墳群

1．はじめに…… 245
2．各墳の調査…… 245
(1)2 号墳　(2)3 号墳　(3)4 号墳　(4)5 号墳　(5)6 号墳
3．上蚊野古墳群の特色…… 261
(1)墳丘築成　(2)掘方　(3)石積み法　(4)床面の施設
(5)階段について　(6)分類
4．近江における「竪穴系横口式石室」…… 265
(1)近江の後期群集墳における横穴式石室
(2)「竪穴系横口式石室」について
(3)溯源を求めて　(4)まとめ
5．結　語…… 274

第15章　秦荘町野々目遺跡

1．はじめに…… 277
2．遺跡の位置と環境…… 277
3．遺構と遺物…… 279
4．まとめ…… 280

第16章　秦荘町元持遺跡

1．はじめに…… 281
2．位置と環境…… 281
3．遺構と遺物…… 283
4．まとめ…… 283

図版編Ⅰ　目次

中主町木部遺跡

1．(1)　調査前遺跡遠景（東より）
(2)　調査前遺跡遠景（北より）
2．(1)　トレンチ遠景（西より）
(2)　グリッド近景（北より）
3．(1)　トレンチ遠景（南より）
(2)　グリッド近景（南より）
4．(1)　トレンチ遠景（北より）
(2)　グリッド近景（南より）
5．(1)　近景（西より）
(2)　近景（南より）
6．(1)　近景（東より）
(2)　トレンチ設定状況（北より）
7．(1)　トレンチ断面（東より）
(2)　トレンチ内遺物出土状況
8．(1)　H001～C016
(2)　K017～K027

草津市長安寺遺跡

9．(1)　調査前遺跡全景（9号トレンチ）
(2)　調査前遺跡全景（10号トレンチ）
10．(1)　10号トレンチ全景
(2)　10－A近景
11．(1)　10－1号トレンチ全景
(2)　9－1－C近景
12．(1)　9－B近景
(2)　9－A東壁断面
13．(1)　K1～K12
(2)　K13～K23

3　守山市赤野井遺跡

14．(1)　幹線排水路E地区
(2)　幹線排水路部分
15．(1)　支線排水路F地区（G－1トレンチ）
(2)　支線排水路F地区（G－4トレンチ）
16．(1)　支線排水路F地区（G－6）
(2)　支線排水路F地区（G－7）
17．(1)　支線排水路F地区（G－7）
(2)　支線排水路F地区（G－10）
18．(1)　支線排水路F地区（G－10井戸跡）
(2)　支線排水路F地区（G－11～14）
19．(1)　支線排水路H地区（SB－H－1）
(2)　支線排水路H地区（SD－H－1・2）
20．(1)　出土遺物
(2)　出土遺物
21．(1)　出土遺物
(2)　出土遺物
22．　遺構実測図
23．　遺物実測図
24．　遺物実測図
25．　遺物実測図
26．　遺物実測図

4　能登川町山路遺跡

27．(1)　山路条里遺跡　調査前
(2)　山路条里遺跡　現在のクリーク
28．(1)　山路条里遺跡　旧畦畔および水路
(2)　山路条里遺跡　旧畦畔および水路
29．(1)　山路条里遺跡　水路跡
(2)　山路条里遺跡　水路跡

5　多賀町水沼荘遺跡

30．(1)　水沼荘古絵図（天平勝宝3年、正倉院蔵）
(2)　犬上郡条里と水沼荘域想定図
(3)　絵図荘域復原略図
31．(1)　高畑地区遠景
(2)　高畑東辺を流れる二ノ井幹線
32．(1)　昭和51年度　調査状況（西より）
(2)　昭和51年度　調査状況（南より）
33．(1)　水沼荘遺跡　調査区全景（東より）
(2)　水沼荘遺跡　遠景（南より）
34．(1)　水沼荘遺跡　近景
(2)　水沼荘遺跡　近景

35. (1) 水沼荘遺跡　近景
(2) 水沼荘遺跡　近景
36. (1) 水沼荘遺跡　土壙
(2) 水沼荘遺跡　土壙
37. (1) 水沼荘遺跡　南側溝検出状況（西より）
(2) 水沼荘遺跡　南側溝検出状況（西より）

6 高月町京田塚・大将軍遺跡

38. (1) 大将軍塚遺跡遠景（東より）
(2) 大将軍塚遺跡近景（西より）
39. (1) 大将軍塚遺跡トレンチ（西より）
(2) 大将軍塚遺跡断面土層（1）
40. (1) 大将軍塚遺跡断面土層（2）
(2) 大将軍塚遺跡断面土層（3）
41. (1) 京田塚遺跡断面土層（西より）
(2) 京田塚遺跡断面土層（南より）
42. (1) 京田塚遺跡断面土層（北西より）
(2) 京田塚遺跡断面土層（南西より）

7 高月町井口遺跡

43. (1) 遺跡全景
(2) R地区　作業風景
44. (1) A地区
(2) A地区
45. (1) H地区全景
(2) H地区大溝
46. (1) H地区大溝
(2) H地区大溝
47. (1) H地区土壙
(2) H地区土壙
48. (1) H地区大溝
(2) H地区耳塚
49. (1) M地区溝跡
(2) M地区溝跡
50. (1) H地区溝跡
(2) H地区溝跡
51. (1) N地区溝跡
(2) N地区小ピット
52. (1) P地区全景
(2) P地区溝状遺構
53. (1) W地区全景
(2) W地区竪穴式住居跡群
54. (1) W地区竪穴式住居跡
(2) W地区掘立柱建物跡
55. (1) X地区竪穴式住居跡群
(2) X地区竪穴式住居跡、大型土壙
56. (1) X地区竪穴式住居跡
(2) X地区ピット群
57. 出土遺物　須恵器埦・蓋
58. 出土遺物　須恵器埦・皿・壺等
59. (1) 出土遺物　須恵器埦
(2) 出土遺物　須恵器埦
60. (1) 出土遺物　灰釉陶器
(2) 出土遺物　土師器
61. (1) 出土遺物　須恵器甕・壺等
(2) 出土遺物　鉄製品・磁器等

8 高島町中ノ坊遺跡

62. (2) 遺跡全景（東より）
(2) 遺跡全景（西より）
63. (1) 第20トレンチ全景（西より）
(2) 第20トレンチ・整理坑（東より）
64. (1) 第102トレンチ西半部（北より）
(2) 第102トレンチ東半部（北より）
65. (1) 第102トレンチ東半部全景（北より）
(2) 第102トレンチ東端（南より）
66. (1) 第102トレンチ東半部（北より）
(2) 第102トレンチ東半部（南より）
67. (1) 火葬墳墓全景（西より）
(2) 火葬土壙全景
68. (1) 第20トレンチ出土土器(土師器・須恵器)
(2) 各トレンチ出土陶器(第102トレンチを除く)
69. 第102トレンチ出土土師器
70. 第102トレンチ出土土師器
71. 第102トレンチ出土土師器
72. 第102トレンチ出土土師器、黒色土器(111)、瓦器(121)
73. (1) 第102トレンチ出土土師器（底部）
(2) 第102トレンチ出土土師器（底部）

74. (1) 第102トレンチ出土土師器（外面）
(2) 第102トレンチ出土土師器（内面）
75. (1) 第102トレンチ出土土師器（外面）
(2) 第102トレンチ出土土師器（内面）
76. (1) 第102トレンチ出土黒色土器、瓦器（外面）
(2) 第102トレンチ出土黒色土器、瓦器（内面）
77. (1) 第102トレンチ出土緑釉陶器（外面）
(2) 第102トレンチ出土緑釉陶器（内面）
78. 第102トレンチ出土灰釉陶器
79. (1) 第102トレンチ出土灰釉陶器（外面）
(2) 第102トレンチ出土灰釉陶器（内面）
80. (1) 第102トレンチ出土灰釉陶器（外面）
(2) 第102トレンチ出土灰釉陶器（内面）
81. (1) 第102トレンチ出土須恵器（外面）
(2) 第102トレンチ出土須恵器（内面）
82. (1) 第102トレンチ出土須恵器、陶器（常滑）
(2) 第102トレンチ出土須恵器（外面）
83. (1) 第102トレンチ出土須恵器（内面）
(2) 第102トレンチ出土須恵器（外面）
84. (1) 第102トレンチ出土須恵器（内面）
(2) 第102トレンチ出土須恵器（外面）
85. (1) 第102トレンチ出土須恵器（内面）
(2) 第102トレンチ出土陶器・常滑（外面）
86. (1) 第102トレンチ出土陶器・常滑（内面）
(2) 第102トレンチ出土　陶器・常滑（外面）
87. (1) 第64・第102トレンチ出土陶器・常滑（内面）
(2) 第64・第102トレンチ出土陶器・常滑（外面）
88. 第102トレンチ出土陶器・常滑（内面）
89. (1) 第102トレンチ出土青磁（外面）
(2) 第102トレンチ出土青磁（内面）
90. (1) 第102トレンチ出土青磁（外面）
(2) 第102トレンチ出土青磁（内面）
91. (1) 第102トレンチ出土白磁（外面）
(2) 第102トレンチ出土白磁（内面）
92. (1) 第102トレンチ出土鉄製品、鉄滓
(2) 第102トレンチ出土鉄製品
93. (1) 土製品・石製品・銭貨・骨片
(2) 砥石
94. 第102トレンチ出土水晶
95. (1) 第102トレンチ出土瓦・鉄滓
(2) 第102トレンチ出土鉄滓
96. 遺構平面図
97. 遺構実測図
98. 遺構実測図

9 守山市欲賀遺跡

99. (1) Ａ－１グリッド近景（北より）
(2) Ａ－13グリッド近景（北より）
100. (1) Ｓ－１グリッド近景（北より）
(2) Ｓ－２グリッド近景（北より）
101. (1) Ａ－13グリッド近景（南より）
(2) 出土遺物

10 草津市志那中遺跡

102. (1) Ｋ－１トレンチ遺構全景（南より）
(2) Ｋ－１トレンチ北側遺構出土状況(北より)
103. (1) Ｋ－２トレンチ遺構全景（南より）
(2) Ｋ－２トレンチ遺構全景（北より）
104. (1) Ｋ－３トレンチ南側ピット群出土状況(南より)
(2) Ｋ－３トレンチ北側ピット群出土状況(南より)
105. (1) Ｋ－４トレンチ遺構全景（南より）
(2) Ｋ－５トレンチ南側遺構出土状況（南より）
106. (1) Ｋ－５トレンチ北側遺構出土状況（南より）
(2) Ｋ－６トレンチ南側遺構出土状況（北より）
107. (1) Ｋ－６トレンチ南側遺構出土状況（東より）
(2) Ｋ－８トレンチ遺構全景（南より）
108. (1) Ｓ－１トレンチ遺構全景（東より）
(2) Ｓ－２トレンチ遺構全景（西より）
109. (1) Ｓ－２トレンチピット群出土状況（西より）
(2) Ｓ－６トレンチ遺構全景（西より）
110. (1) Ｓ－７トレンチ遺構全景（西より）
(2) ＳＥ１出土状況
111. (1) ＳＥ２曲物井側出土状況
(2) ＳＥ２出土状況
112. (1) ＳＥ３曲物井側出土状況
(2) ＳＥ３曲物井側出土状況

113. (1) ＳＥ３曲物井側出土状況
(2) ＳＥ３出土状況
114. (1) ＳＥ４出土状況
(2) ＳＥ４出土状況
115. (1) ＳＥ５遺物出土状況
(2) ＳＥ５出土状況
116. (1) ＳＥ６遺物出土状況
(2) ＳＥ６遺物出土状況
117. (1) ＳＥ６出土状況
(2) ＳＥ７出土状況
118. (1) ＳＥ８出土状況
(2) ＳＫ２出土状況
119. (1) ＳＫ３出土状況
(2) ＳＫ５出土状況
120. (1) ＳＫ６出土状況
(2) ＳＤ16・ＳＤ17出土状況
121. 出土遺物
122. 出土遺物
123. 出土遺物
124. (1) E001～E006
(2) C007～E016
125. (1) E017～H028
(2) H029～C040
126. (1) C041～B053
(2) C054～C064
127. (1) C065～C069
(2) E070～E079
128. (1) E080～H090
(2) B091～H103
129. (1) E104～E116
(2) E117～E123
130. (1) E124～H131
(2) B133～B141
131. (1) B142～E149
(2) E162～C172
132. (1) C173～H184
(2) H185～E194
133. (1) H196～C207
(2) G208～C214
134. (1) 木器
(2) 銅銭
135. Ｋ－１・Ｋ－２トレンチ遺構全図
136. Ｋ－３～Ｋ－５トレンチ遺構全図
137. Ｋ－５～Ｋ－９トレンチ遺構全図
138. Ｓ－１・Ｓ－３・Ｓ－６・Ｓ－７トレンチ遺構全図
139. ＳＢ６・ＳＢ10平面実測図
140. ＳＢ12平面実測図
141. ＳＥ１・ＳＥ２実測図
142. ＳＥ３実測図
143. ＳＥ４・ＳＥ６実測図
144. ＳＥ５・ＳＥ７・ＳＥ８実測図
145. ＳＥ２曲物実測図
Ｋ－７トレンチ坪界断面図
146. 土壙・溝断面図

II 守山市山賀西遺跡

147. (1) 須恵器・黒色土器・土錘（７・８）
(2) 土師器・黒色土器・石鍋（１－６・９）

図版編II

12 守山市赤野井遺跡

148. (1) 調査区遠景
(2) 調査前遠景
149. (1) J－13トレンチ
(2) J－14トレンチ
150. (1) J－12トレンチ
(2) I地区全景
151. (1) I－6トレンチ・SB－I－1・I－2
(2) I－5トレンチ
152. (1) I－4トレンチ
(2) I－4、3トレンチ
153. (1) I－3トレンチ
(2) I－2トレンチ
154. (1) I－6トレンチ
(2) K－2トレンチ
155. (1) K－3トレンチ
(2) K－4トレンチ
156. (1) K－4トレンチ
(2) K－4トレンチ
157. (1) 出土遺物
(2) 出土遺物
158. (1) 出土遺物
(2) 出土遺物
159. 出土遺物
160. 出土遺物
161. 調査区配置図
162. K地区平面図
163. K地区遺構図
164. K地区遺構図
165. K地区遺構図
166. K地区遺構図
167. K地区遺構図
168. J地区遺構図
169. J－13・14トレンチ遺構図
170. I－4トレンチ遺構図
171. 遺物実測図
172. 遺物実測図
173. 遺物実測図
174. 遺物実測図　土器及び瓦類
175. 遺物実測図　瓦類

13 高月町井口遺跡

176. (1) 遺跡遠景
(2) 遺跡近景
177. (1) M地区　竪穴式住居跡(MT1)、北より
(2) M地区
178. (1) M地区　MT1カマド
(2) M地区　MT1遺物出土状態
179. (1) M地区　MT1遺物出土状態
(2) M地区　MT1遺物出土状態
180. (1) P地区　全景（南より）
(2) P地区　近景（南より）
181. (1) P地区　北部（南西より）
(2) P地区　南部（北より）
182. (1) P地区　溝状遺構（PM1)(北より）
(2) P地区　PM1（北より）
183. (1) P地区　竪穴式住居跡(PT1)全景(西より)
(2) P地区　PT1南部（西より）
184. (1) P地区　PT1北部（西より）
(2) P地区　PT1カマド
185. (1) P地区　PT1遺物出土状態
(2) P地区　PT1周溝内遺物出土状態
186. (1) P地区　PT1周溝内遺物出土状態
(2) P地区　PT1支柱穴内遺物出土状態
187. (1) P地区　PT1遺物出土状態
(2) P地区　PT1遺物出土状態
188. (1) P地区　PT2・PT3（西より）
(2) P地区　PT2・PT3（北より）
189. (1) P地区　PT2焼土壙
(2) P地区　PT2焼土壙

190. (1) P地区　PT2遺物出土状態
(2) P地区　PT2遺物出土状態
191. (1) P地区　PBP4
(2) P地区　PBP3
192. (1) P地区　PBP2
(2) P地区　PH1
193. (1) W地区　全景（東より）
(2) W地区　全景（南より）
194. (1) W地区　WT1～WT3（南より）
(2) W地区　WT4・WT5・WH2～WH4（南より）
195. (1) W地区　WT1～WT3（西より）
(2) W地区　WT1遺物出土状態
196. (1) W地区　WT1遺物出土状態
(2) W地区　WT1遺物出土状態
197. (1) W地区　WT1カマド
(2) W地区　WT4（西より）
198. (1) W地区　WT4遺物出土状態
(2) W地区　WT4遺物出土状態
199. (1) W地区　WT5（東より）
(2) W地区　WT5遺物出土状態
200. (1) W地区　WH2（南より）
(2) W地区　WH3（東より）
201. (1) W地区　ピット群（東より）
(2) W地区　土壙断面土層
202. (1) W地区　土壙断面土層
(2) W地区　土壙（東より）
203. (1) W地区　WH1
(2) W地区　トレンチ（西より）
204. (1) X地区　全景（南半分）、（東より）
(2) X地区　全景（中央部分）、（東より）
205. (1) X地区　全景（北半分）、（東より）
(2) X地区　近景（北半分）、（南より）
206. (1) X地区　近景（南東より）
(2) X地区　近景（南東より）
207. (1) X地区　XT2・XT3・XH2（東より）
(2) X地区　土壙
208. (1) X地区　XT1（西より）
(2) X地区　XT2（南より）
209. (1) X地区　XT3（東より）
(2) X地区　XT3遺物出土状態
210. (1) X地区　XT3カマド
(2) X地区　XT4（西より）
211. (1) X地区　XT5・XT6（南より）
(2) X地区　XH1（西より）
212. (1) X地区　XH2（南より）
(2) X地区　XH3（西より）
213. (1) X地区　XH3（南より）
(2) X地区　XP1（東より）
214. (1) X地区　XP2（南より）
(2) X地区　XP4（南より）
215. (1) X地区　XP3（南より）
(2) X地区　XP3遺物出土状態
216. PT1出土遺物
217. PT2出土遺物
218. W地区　竪穴式住居跡(WT3～WT5)出土遺物
218. W地区　竪穴式住居跡(WT3・その他)出土遺物
220. X地区　竪穴式住居跡(XT1－XT7)出土遺物

14 秦荘町上蚊野古墳群

221. (1) 上蚊野1号墳　調査前
(2) 上蚊野1号墳　調査前
222. (1) 上蚊野1号墳　奥壁
(2) 上蚊野1号墳　石室全景
223. (1) 上蚊野1号墳　階段
(2) 上蚊野1号墳　袖部遺物出土状況
224. (1) 上蚊野1号墳　棺台石および階段
(2) 上蚊野1号墳　玄室内遺物出土状況
225. (1) 上蚊野1号墳　玄室床断面
(2) 上蚊野1号墳　奥壁
226. (1) 上蚊野1号墳　墳丘盛土状況（西側）
(2) 上蚊野1号墳　袖石裏掘方検出状況

227. (1) 上蚊野1号墳　階段部
(2) 上蚊野1号墳　東側同溝検出状況
228. (1) 上蚊野2号墳　調査前（北東より）
(2) 上蚊野2号墳　天井石の遺存状況
229. (1) 上蚊野2号墳　全景（北より）
(2) 上蚊野2号墳　閉塞石（南より）
230. (1) 上蚊野2号墳　奥壁部
(2) 上蚊野2号墳　階段および閉塞部
231. (1) 上蚊野2号墳　墳丘登土状況
(2) 上蚊野2号墳　全景
232. (1) 上蚊野2号墳　階段後方掘方断面
(2) 上蚊野2号墳　西側壁裏の掘方（左立石は袖石）
233. (1) 上蚊野2号墳　羨道西側壁積石状況
(2) 上蚊野2号墳　羨道西側壁積石状況（階段後方掘方内）
234. (1) 上蚊野2号墳　全景（西より）
(2) 上蚊野2号墳　全景（北より）
235. (1) 上蚊野2号墳　周溝検出　墳丘西
(2) 上蚊野2号墳　周溝検出　墳丘北東
236. (1) 上蚊野2号墳　直刀片出土状況
(2) 上蚊野2号墳　須恵器蓋塚出土状況
237. (1) 上蚊野3号墳　調査前
(2) 上蚊野3号墳　玄室内埋土断面
238. (1) 上蚊野3号墳　全景（南より）
(2) 上蚊野3号墳　全景（北より）
239. (1) 上蚊野3号墳　奥壁および棺台石
(2) 上蚊野3号墳　玄門および閉塞石
240. (1) 上蚊野3号墳　全景（西より）
(2) 上蚊野3号墳　全景（東より）
241. (1) 上蚊野3号墳　閉塞石
(2) 上蚊野3号墳　閉塞石
242. (1) 上蚊野3号墳　棺台石
(2) 上蚊野3号墳　袖部遺物出土状況
243. (1) 上蚊野4号墳　調査前
(2) 上蚊野4号墳　全景
244. (1) 上蚊野4号墳　石室全景
(2) 上蚊野4号墳　奥壁
245. (1) 上蚊野4号墳　東側壁
(2) 上蚊野4号墳　西側壁
246. (1) 上蚊野4号墳　墳丘盛土断面（東側）
(2) 上蚊野4号墳　墳丘盛土断面（西側）
247. (1) 上蚊野4号墳　奥壁後方掘方検出状況
(2) 上蚊野4号墳　全景（東より）
248. (1) 上蚊野4号墳　墳丘外護列石（北より）
(2) 上蚊野4号墳　墳丘外護列石（東より）
249. (1) 上蚊野4号墳　金環出土状況
(2) 上蚊野4号墳　遺物出土状況
250. (1) 上蚊野5号墳　全景（東より）
(2) 上蚊野5号墳　全景（南より）
251. (1) 上蚊野5号墳　奥壁
(2) 上蚊野5号墳　階段
252. (1) 上蚊野5号墳　袖部石積状況
(2) 上蚊野5号墳　奥壁および東側壁掘方検出状況
253. (1) 上蚊野5号墳　玄関隅石積み状況(右奥壁)
(2) 上蚊野5号墳　奥壁後方掘方検出状況
254. (1) 上蚊野5号墳　階段後方掘方断面(東より)
(2) 上蚊野5号墳　階段後方掘方断面(南より)
255. (1) 上蚊野5号墳　階段後方掘方全掘状況
(2) 上蚊野5号墳　階段後方掘方内西側壁
256. (1) 上蚊野5号墳　石室全景（南より）
(2) 上蚊野5号墳　石室全景（北より）
257. (1) 上蚊野5号墳　玄室内遺物出土状況
(2) 上蚊野5号墳　玄室内遺物出土状況（奥壁部）
258. (1) 上蚊野5号墳　墳丘西裾部遺物出土状況
(2) 上蚊野5号墳　墳丘西裾部遺物出土状況（銀環出土）
259. (1) 上蚊野5号墳　東側周溝検出状況
(2) 上蚊野5号墳　西側周溝外土壙の遺物出土状況
260. (1) 上蚊野6号墳　調査前
(2) 上蚊野6号墳　玄室床面石敷状況
261. (1) 上蚊野6号墳　石室全景（南より）
(2) 上蚊野6号墳　西側壁積石状況

262. (1) 上蚊野6号墳　玄門部

(2) 上蚊野6号墳　玄門部

263. (1) 上蚊野7号墳　調査前

(2) 上蚊野7号墳　玄室床棺台および遺物出土状況

264. (1) 上蚊野7号墳　玄室床検出状況

(2) 上蚊野7号墳　石室全景

265. (1) 上蚊野7号墳　奥壁および両側壁

(2) 上蚊野7号墳　奥壁裏検出状況

266. (1) 上蚊野7号墳　羨道部遺物出土状況

(2) 上蚊野7号墳　羨道部遺物出土状況

267. (1) 上蚊野8号墳　調査前

(2) 上蚊野8号墳　東側玄室側壁

268. (1) 上蚊野8号墳　玄室床面遺物出土状況

(2) 上蚊野8号墳　奥壁

269. (1) 上蚊野8号墳　奥壁部遺物出土状況

(2) 上蚊野8号墳　西側周溝検出状況

270. (1) 上蚊野8号墳　東側壁裏検出状況

(2) 上蚊野8号墳　西側壁倒壊状況

15 秦荘町野々目遺跡

271. (1) 野々目遺跡　第1トレンチ遺構検出状況（東より）

(2) 野々目遺跡　第1トレンチ遺構検出状況（西より）

272. (1) 野々目遺跡　柱穴群

(2) 野々目遺跡　南北溝（北西より）

273. (1) 野々目遺跡　南北溝内遺物出土状況

(2) 野々目遺跡　南北溝断面

16 秦荘町元持遺跡

274. (1) 元持遺跡　遠景（北より）

(2) 元持遺跡　第1,第2トレンチ遠景(北より)

275. (1) 元持遺跡　第1トレンチ全景（東より）

(2) 元持遺跡　第1トレンチ倉庫跡(南より)

276. (1) 元持遺跡　第1トレンチピット群(南より)

(2) 元持遺跡　第1トレンチピット群(南より)

277. (1) 元持遺跡　性格不明土壙

(2) 元持遺跡　性格不明土壙

278. (1) 元持遺跡　第6トレンチ（北より）

(2) 元持遺跡　第7トレンチ（東より）

挿　図　目　次

第１章　中主町木部遺跡

第１図　位置図……1

第２図　地区設定図……2

第３図　グリッド断面図……2・3

第４図　Ｍ１・Ｍ３断面図……2・3

第５図　Ｍ２平面実測図……3

第６図　Ｍ３平面実測図……4

第７図　出土遺物実測図……5

第８図　出土遺物……6

第２章　草津市長安寺遺跡

第１図　位置図……11

第２図　地区設定図……12

第３図　出土遺物実測図……13

第３章　守山市赤野井遺跡

第１図　調査区位置図……16

第２図　トレンチ断面図……16・17

第３図　遺構実測図……18

第４図　断面図及び遺構……19

第５図　Ｈ－３溝断面図……28

第４章　能登川町山路遺跡

第１図　位置図……30

第２図　条里小字図……31

第３図　山路条里トレンチ配置図……32

第４図　各トレンチ土層図……33

第５章　多賀町水沼荘遺跡

第１図　遺跡位置図……35

第２図　トレンチ配置図……36

第３図　遺構図……36・37

第４図　建物配置図……37

第５図　溝跡内土層堆積図……39

第６図　土坑跡（ＳＫ01）内出土遺物実測図……39

第６章　高月町京田塚・大将軍塚遺跡

第１図　遺跡位置図……42

第２図　大将軍(左)、京田塚(右)遺跡墳丘及び断面土層実測図……43

第７章　高月町井口遺跡

第１図　井口遺跡位置図……48
第２図　トレンチ配置図……50
第３図　Ｈ地区溝、土坑、耳塚断面土層図……51
第４図　出土遺物実測図……55
第５図　出土遺物実測図……56
第６図　出土遺物実測図……57

第８章　高島町中ノ坊遺跡

第１図　遺跡位置図……59
第２図　中ノ坊遺跡土層模式図……60・61
第３図　銭貨出土状況……61
第４図　第20トレンチ整理坑実測図……62
第５図　第12トレンチ整理坑……62
第６図　第102トレンチ火葬墳墓実測図 ……63
第７図　第12トレンチ出土陶器片拓本……64
第８図　第20トレンチ出土土器実測図……64
第９図　堀川遺跡出土土器実測図……65
第10図　第102トレンチ出土(土師器･甕)……65
第11図　第102トレンチ出土土器実測図（土師器１）……66
第12図　第102トレンチ出土土器実測図（土師器２）……67
第13図　第102トレンチ出土土器実測図（黒色土器、瓦器、瓦質土器)……68
第14図　第102トレンチ出土土器実測図（緑釉陶器)……69
第15図　第102トレンチ出土土器実測図（灰釉陶器)……70
第16図　第102トレンチ出土土器実測図（須恵器１）……71
第17図　第102トレンチ出土土器実測図（須恵器２）……72
第18図　第102トレンチ出土土器実測図（陶器)……73
第19図　第102トレンチ出土土器実測図（陶器、磁器)……74
第20図　第102トレンチ出土土器拓本（土師器、須恵器、陶器)……75
第21図　鉄製品実測図……76
第22図　土製品実測図……77
第23図　滑石製円板・石匙実測図……77
第24図　砥石実測図……77
第25図　土師器小皿の変化……99

第９章　守山市欲賀遺跡

第１図　位置図…… 105
第２図　地区設定図…… 106
第３図　Ａ－１、Ａ－７、Ａ－13、Ｓ－２、平面断面実測図…… 107

第４図　出土遺物実測図…… 108
第10章　草津市支那中遺跡
第１図　遺跡位置図…… 111
第２図　トレンチ設定図…… 112
第３図　ＳＥ１出土土器実測図…… 130
第４図　ＳＥ２・ＳＥ３出土土器実測図…… 131
第５図　ＳＥ３・ＳＥ４出土土器実測図…… 132
第６図　ＳＥ５出土土器実測図…… 133
第７図　ＳＥ６出土土器・漆器、ＳＥ７出土土器実測図…… 134
第８図　ＳＫ１・ＳＫ２・ＳＫ３出土土器実測図…… 135
第９図　ＳＫ３・ＳＫ４・ＳＸ４出土土器実測図…… 136
第10図　ＳＫ６・ＳＫ７・ＳＫ８出土土器実測図…… 137
第11図　ＳＫ８、各トレンチピット内出土土器実測図…… 138
第12図　各トレンチピット内出土土器実測図…… 139
第13図　旧沼沢地出土木製品実測図…… 143
第14図　井戸跡・旧沼沢地出土木製品実測図…… 144
第11章　守山市山賀西遺跡
第１図　トレンチ配置図…… 165
第２図　遺物実測図…… 167
第３図　周辺遺跡分布図…… 169
第12章　守山市赤野井遺跡
第１図　遺跡分布図…… 172
第２図　遺構図及び発掘風景…… 176
第３図　服部遺跡出土土器実測図…… 183
第13章　高月町井口遺跡
第１図　遺跡位置図…… 189
第２図　発掘地区位置図及び周辺地形図…… 190
第３図　Ｍ地区遺構分布図…… 192
第４図　Ｐ地区遺構分布図…… 193
第５図　Ｗ地区遺構分布図…… 193
第６図　Ｘ地区遺構分布図…… 194
第７図　Ｍ地区Ｔ１実測図…… 195
第８図　Ｐ地区Ｔ１・Ｒ１・ＢＰ２・Ｍ２・Ｈ４実測図…… 196
第９図　Ｐ地区Ｔ２・Ｔ３・Ｐ１・Ｐ２・ＢＰ３・ＢＰ４実測図…… 197
第10図　Ｗ地区Ｔ１・Ｔ２・Ｔ３実測図…… 198
第11図　Ｗ地区Ｔ４実測図…… 199
第12図　Ｗ地区Ｔ５実測図…… 200

第13図　X地区T1実測図…… 201
第14図　X地区T2・BP1実測図…… 201
第15図　X地区T3・BP3実測図…… 202
第16図　X地区T4実測図…… 203
第17図　X地区T5・T6実測図…… 204
第18図　X地区T7実測図…… 204
第19図　P地区H1実測図…… 205
第20図　P地区H2・H3実測図…… 205
第21図　W地区H1実測図…… 205
第22図　W地区H2・H3実測図…… 206
第23図　W地区H4実測図…… 207
第24図　X地区H1実測図…… 207
第25図　X地区H2実測図…… 208
第26図　X地区H3実測図…… 209
第27図　X地区H4実測図…… 210
第28図　X地区H5実測図…… 210
第29図　X地区H6実測図…… 211
第30図　X地区H7実測図…… 212
第31図　PT1遺物出土状態実測図…… 213
第32図　WT1遺物出土状態実測図…… 213
第33図　WT4遺物出土状態実測図…… 213
第34図　WT5遺物出土状態実測図…… 214
第35図　P地区、M地区出土遺物実測図…… 218
第36図　P地区出土遺物実測図…… 219
第37図　W地区出土遺物実測図…… 220
第38図　WT3出土遺物実測図…… 221
第39図　X地区出土遺物実測図…… 222

第14章　秦荘町上蚊野古墳群

第1図　遺跡位置図…… 246
第2図　上蚊野2号墳石室実測図……246・247
第3図　上蚊野2号墳石室平面及遺物分布図…… 248
第4図　上蚊野3号墳石室実測図……250・251
第5図　上蚊野3号墳石室平面図……250・251
第6図　上蚊野4号墳石室実測図……252・253
第7図　上蚊野4号墳石室平面及遺物分布図……252・253
第8図　上蚊野5号墳石室実測図……254・255
第9図　上蚊野5号墳玄室内遺物出土状況図…… 255

第10図　上蚊野６号墳石室実測図……258・259
第11図　上蚊野６号墳床平面図……258・259
第12図　上蚊野２～６号墳墳丘断面図集成……264・265
第15章　秦荘町野々目遺跡
第１図　位置図……277
第２図　トレンチ設定図……278
第16章　秦荘町元持遺跡
第１図　遺跡位置図……281
第２図　トレンチ設定図……282

表　目　次

第１章　中主町木部遺跡
第１表　出土遺物観察表……8
第３章　守山市赤野井遺跡
第１表　遺物出土遺構一覧表……27
第８章　高島町中ノ坊遺跡
第１表　中ノ坊遺跡出土土器観察表……78
第２表　中ノ坊遺跡土師器皿一覧表……96
第３表　中ノ坊遺跡出土鉄製品観察表……98
第４表　土師器皿の法量変化……100
第９章　守山市欲賀遺跡
第１表　出土遺物観察表……109
第10章　草津市支那中遺跡
第１表　支那中遺跡出土井戸一覧表……127
第２表　出土遺物観察表……149
第13章　高月町井口遺跡
第１表　出土遺物観察表（ＰＭ１・ＰＰ15・ＰＰ１・ＰＰ14・ＭＴ１）……223
第２表　出土遺物観察表（ＰＴ１・ＰＴ２）……226
第３表　出土遺物観察表（ＷＴ１・ＷＴ２・ＷＴ４・ＷＴ５）……233
第４表　出土遺物観察表（ＷＴ３）……236
第５表　出土遺物観察表（ＸＴ１・ＸＴ２・ＸＴ３・ＸＴ４・ＸＴ５・ＸＴ６・ＸＴ７・ＸＰ14・ＸＰ39・ＸＢＰ３）……240
第14章　秦荘町上蚊野古墳群
第１表　玄室長／羨道長……276
第２表　袖石の形態と築造年代……276

第１章　中主町木部遺跡

1　はじめに

本報告は、中主町木部、西河原所在木部遺跡についての昭和52年度における試掘調査の結果を収めたものである。本遺跡の所在する中主町は、野洲川下流域の沖積地にあり、各所に、旧河道、微高地が散在し、付近にはいくつかの遺跡の分布が知られている。

とくに本遺跡の東には白鳳時代開基という「綿織寺」を中心に、八夫、虫生の集落跡が知られ、同じく北東300mに本町最大の木部古墳が所在し、本地域の中心的な位置を占めている。本遺跡についても、畑地を中心に従来より遺物の散布が知られ、上記の遺跡との関連が注目されていたが、このたび、この地域に、昭和52年度「ほ場整備事業」が計画され遺跡の一部が堀削される可能性が生じたため、昭和52年度国庫補助金を得て、試堀調査を実施することになったのである。

現地調査・整理については、本課技師大橋信弥が担当、指導し、滋賀県文化財保護協会が実施した。なお調査・整理にあたっては、滋賀県文化財保護協会調査員、別所建二、谷口徹両氏の全面的な協力を得、別記の諸君の参加を得て実施した。又、遺物写真については寿福滋氏を煩した。記して謝意を表したい。

2　調査経過　—日誌抄—

現地調査は、昭和52年10月3日より10月31日までの25日間を要して実施し、昭和53年3月31日まで整理業務を行なった。

10月3日　器材搬入、グリッド設定

34号支線排水路に10m間隔で5×6mのグリッドを11ケ所、(1G～11G) 設定

5日　1G、2G、9G、11Gの堀り下げ、耕土の下に旧耕土・床土、灰色粘質土、さらに下に灰青色砂層が堆積する。安定した遺構面なし。

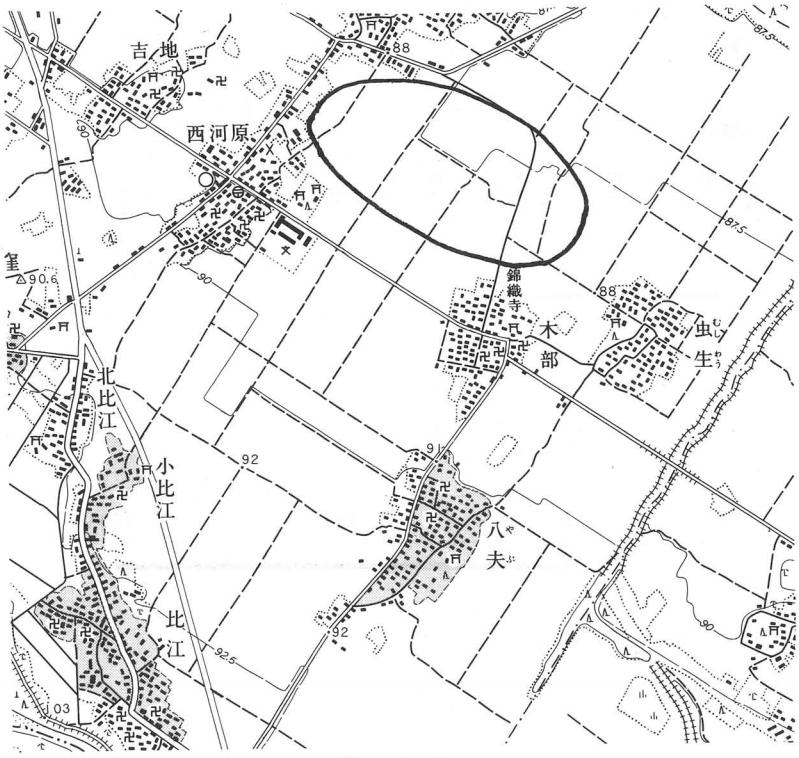
11日　9G、10G、11G、完了。8G、その他途中、11Gの下層に青灰砂層を確認。遺構依然未検出。

15日　7G、5G、4Gの堀り下げ　32号支線排水路に34号に準じて、グリッド設定（4×5m方形）

17日　7G堀り下げ　6G再堀り下げ。

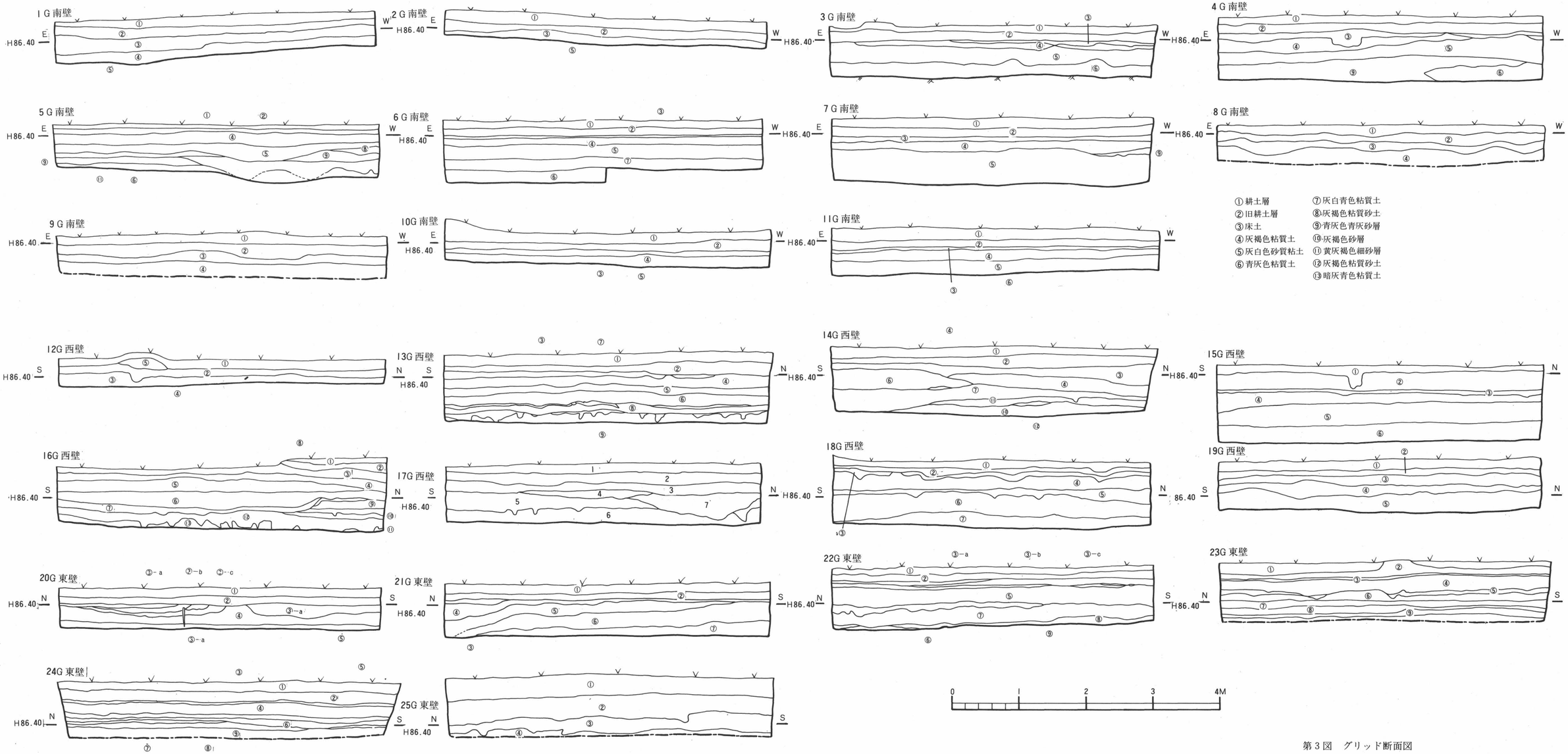
12G堀り下げ開始　各断面実測

18日　3G、12G継続

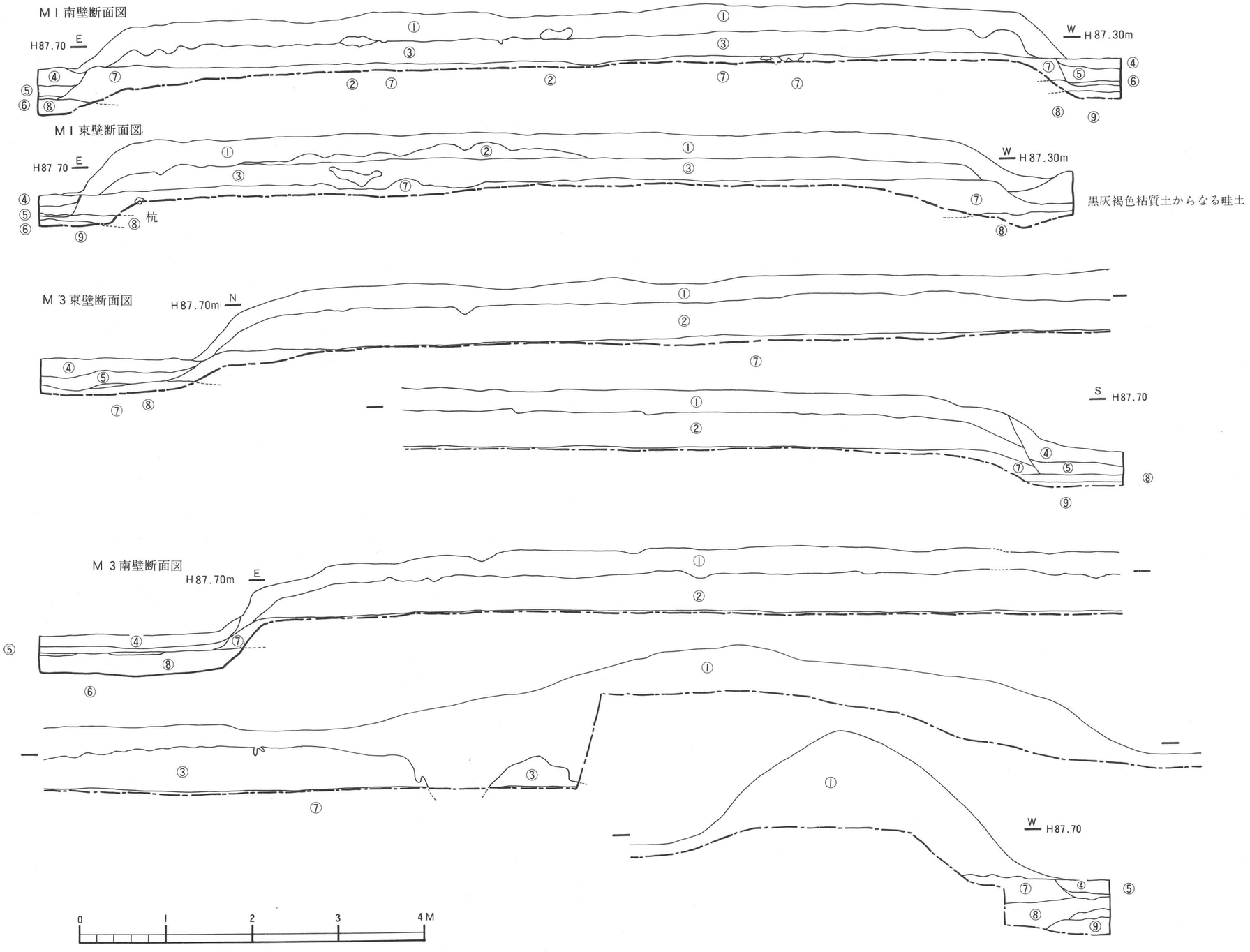


第1図　位置図

第２図　地区設定図

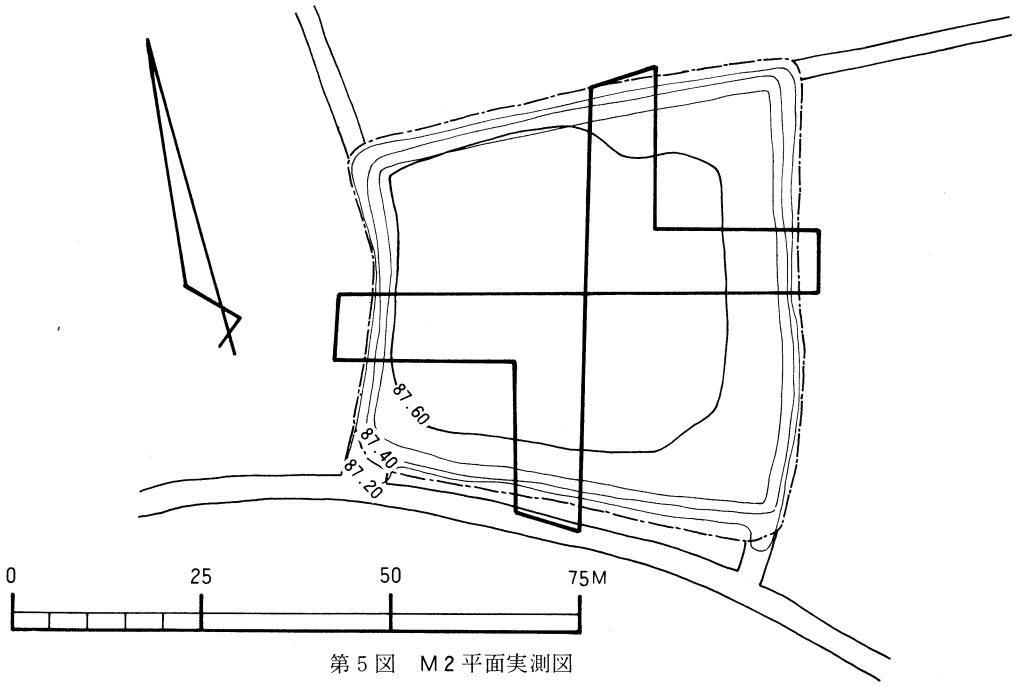

1G 南壁
2G 南壁
3G 南壁
4G 南壁
5G 南壁
6G 南壁
7G 南壁
8G 南壁
9G 南壁
10G 南壁
11G 南壁
12G 西壁
13G 西壁
14G 西壁
15G 西壁
16G 西壁
17G 西壁
18G 西壁
19G 西壁
20G 東壁
21G 東壁
22G 東壁
23G 東壁
24G 東壁
25G 東壁
H86.40
E
W
S
N
①耕土層
②旧耕土層
③床土
④灰褐色粘質土
⑤灰白色砂質粘土
⑥青灰色粘質土
⑦灰白青色粘質土
⑧灰褐色粘質砂土
⑨青灰色青灰砂層
⑩灰褐色砂層
⑪黄灰褐色細砂層
⑫灰褐色粘質砂土
⑬暗灰青色粘質土
0
1
2
3
4M

第３図　グリッド断面図



第4図　M I ・M 3断面図

①黒褐色粘質土層（いわゆる表土）
②黒色焼土層（かつて草etc.を集めて焼いたため成起したものと思われる）
③黄褐色粘質土層（しまりが良く硬い。若干の土器片を含むのが注目される）
④黒灰褐色粘質土層（耕土）
⑤青灰褐色粘質土層（旧耕土）
⑥黄灰褐色粘質土層（床土）
⑦灰褐色粘質土層（若干ながらMnO_2.Fe_2O_3の灰着がみられる）
⑦′は⑦層のやや灰色の強いものがブロック状に混入しているものである。
⑧灰色砂質粘土層（Fe_2O_3.MnO_2の沈着がみられややや軟質である）
⑨灰色砂層



第５図　Ｍ２平面実測図

13Ｇ、15Ｇ堀り下げ　32号も、安定した遺構面なく、①耕土、②旧耕土、③床土、④灰色粘質土、⑤灰青色砂質土⑥青灰色粘質土という堆積を示す。

19日　14Ｇ、15Ｇ、16Ｇ堀り下げ、水田に遺構の残りが悪いので、遺物散布のいちじるしい、畑地部分に、調査の重点を移す。畑地は、ブロックごとにＭ１～Ｍ５と仮称。

20日　Ｍ３の実測、41号支線排水路にも、念のため、グリッド設定（４×５ｍ方形）18Ｇ、19Ｇ、20Ｇ堀り下げ。

21日　Ｍ３の草刈り、41号は旧水路と一部重複して並行するため、水路の土手を堀り下げたところ、若干の遺物の包含がみられた。しかし、安定した遺構面はない模様。

22日　21Ｇ、22Ｇ、23Ｇ、24Ｇ堀り下げ　34、32号の平板実測完了。

24日　25Ｇ堀り下げ　Ｍ１、Ｍ３のトレンチ設定、24Ｇの④層より須恵器大甕破片出土。

25日　Ｍ１、Ｍ３のトレンチ堀り下げ。Ｍ１より　瓦・土師器・皿など出土。

26日　Ｍ１、Ｍ３トレンチ堀り下げ。いづれも表土を除去し上面を精査したが、遺構の検出はなく、さらに掘り下げる。

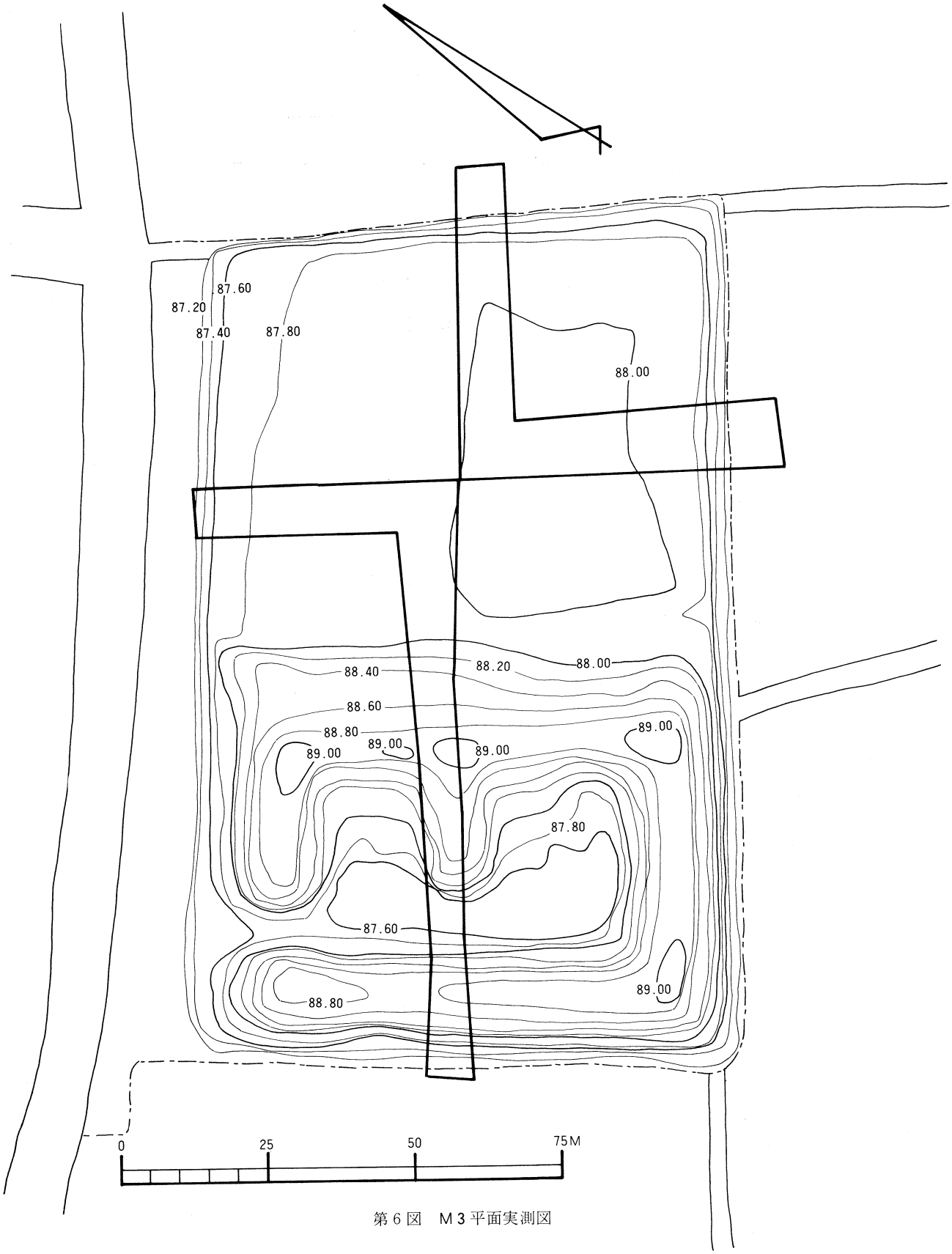
27日　Ｍ１、表土下の赤褐色土（第Ⅱ層）が約40cm堆積し、その下から灰色砂質粘土が検出をみた。これを一応ベースとし、第Ⅱ層を盛土と考えた。断面図作成。

Ｍ３、表土下の黄褐色粘質土（第Ⅱ層）は約１ｍ余あり、須恵器、緑釉片が出土。その下はベースと考えられる、灰色砂質粘土が堆積していた。

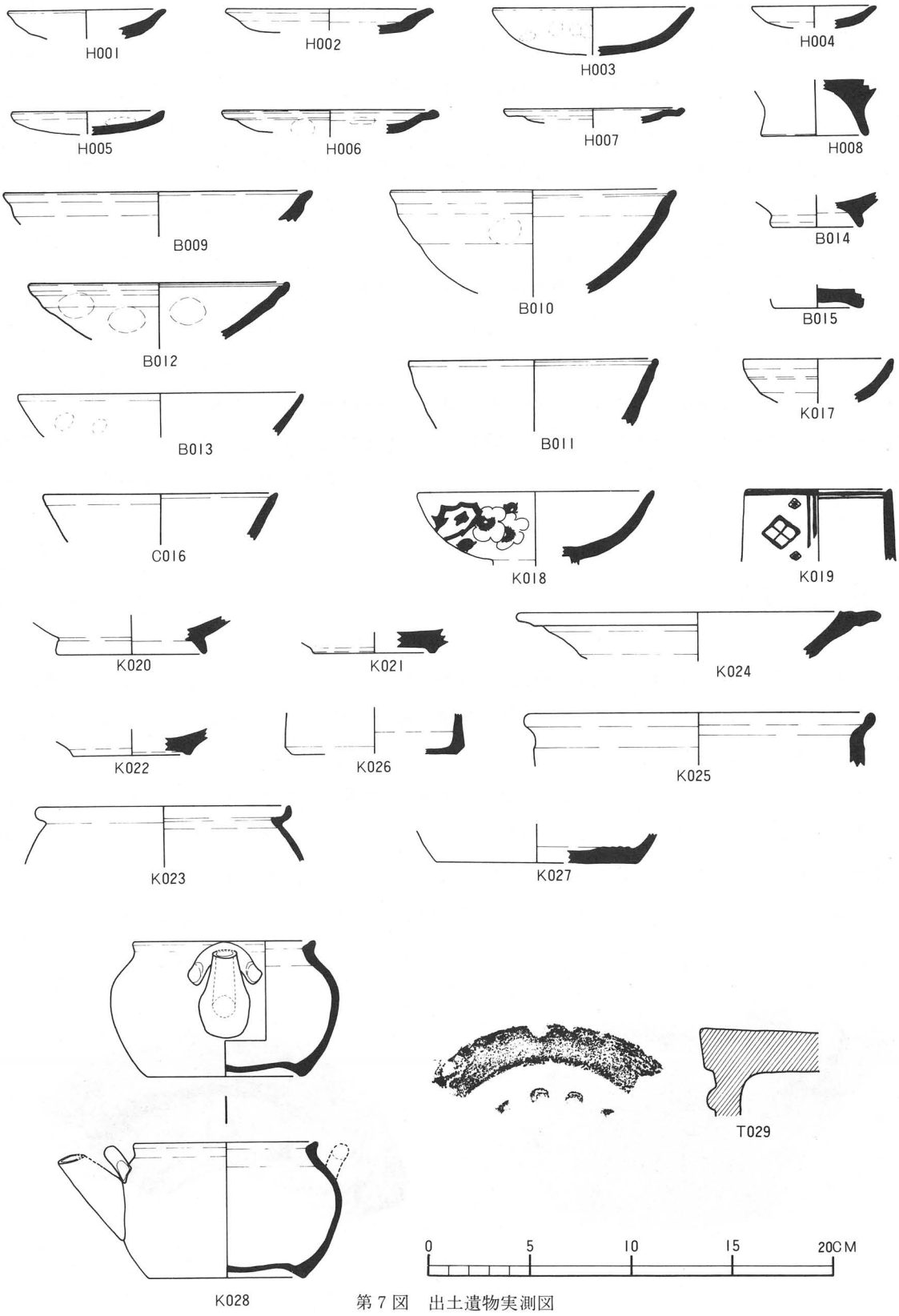
28日　Ｍ３の掘り下げ続行。Ｍ４、Ｍ５測量。

29日　Ｍ３の掘り下げ続行。

31日　Ｍ３掘り下げ。断面図作成。Ｍ４の一部掘り下げ、Ｍ１・Ｍ３とほぼ同じ層序を示し、第Ⅱ層には土器片が包含される。なお、第Ⅱ層の下部に円礫層が一部みられる。


87.20
87.60
87.40
87.80
88.00
88.40
88.20
88.00
88.60
88.80
89.00
89.00
89.00
89.00
87.80
87.60
88.80
89.00
0
25
50
75M

第6図　M3平面実測図


H001
H002
H003
H004
H005
H006
H007
H008
B009
B010
B014
B012
B015
B013
B011
K017
C016
K018
K019
K020
K021
K024
K022
K026
K025
K023
K027
K028
T029
0
5
10
15
20CM

第７図　出土遺物実測図

3　遺　　構

以上のように、今回の調査では当初予想と異なり、明確な遺構の検出はなかった。特に水田部分では若干の遺物を包含するものの、安定した遺構面はなく、砂質の強い旧河道的様相を示していた。ただ、旧水路の畦にはかなりの遺物の包含がみられ、水田化以前には一時集落の営まれた可能性も考えられる。一方、水田中に点在した畑地については、一応古墳の可能性も考えられたため、「L」字にトレンチを設定して精査したが、その痕跡はなく、畑地造成の盛土と判断した。おそらく本地域は、野洲川の旧河道の乱流等により、安定した集落の立地はなく、遺物の示す鎌倉時代以降水田化される段階に、床土の置きかえなどがなされ、その際にその余土をもって水路畦畔、畑地が造成されたと考えられよう。

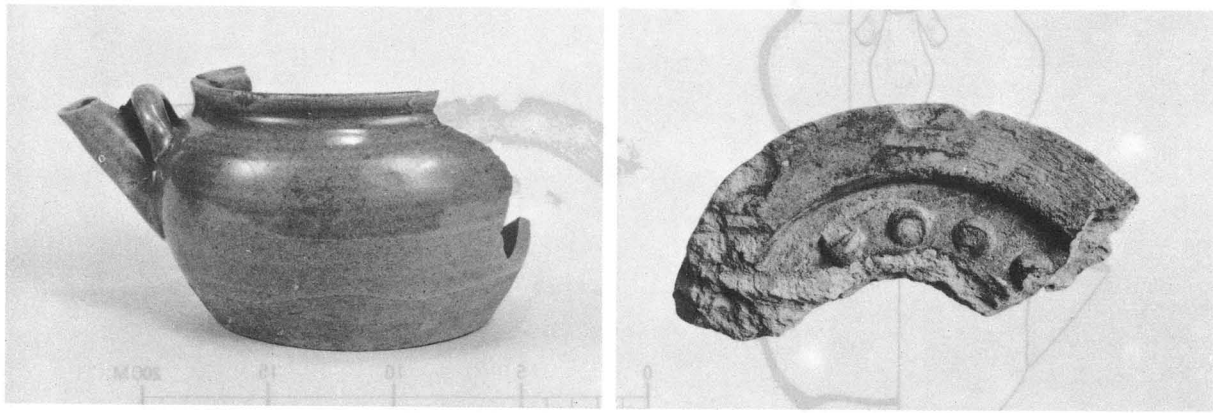
ところで、数ケ所にわたる畑地のうち、M３において、「火薬庫」とされる特異な構造物が認められたため、一応測量を実施し、一部で掘り下げた。すなわち、地元の古老の話によれば、戦前のある時期まで祭礼などで使用する火薬の保管のため、人里離れた水田中に「火薬庫」が設定されていたが、戦後になって廃棄されたというのである。「火薬庫」跡はM３の畑地の南半を利用し周囲に下幅約３m、高さ 2.5mの土塁をめぐらし、内部を二つに仕切って、中央で連続させたもので西側に入口があり、石柱を２本立てている。そして、この土塁に囲まれた中に「火薬庫」が立てられていたらしい。土塁の盛土の中からは近世以降の陶器片が出土しており、その前後に築造されたのであろう。

4　出土遺物

当調査において出土した遺物は、古代末～中世の日常雑器類、すなわち土師器小皿、脚付皿、黒色土器埦と、耕土層内より出土した近世陶磁からなる。いづれも、明確な遺構に伴うものではないが、この地域の歴史的な変遷を知る上で、参考になると思われる。

〔土師器〕　小皿・脚付皿の出土が知られる小皿は、形態より数種に分類されるが、いづれも、ぶ厚い手捏品で、最近野洲町のいくつかの遺跡で出土例があり、伴出遺物などからみて、鎌倉期のものと思われる。脚付皿は野洲町富波や久野部七ノ坪などで、若干の出土が知られるが、いづれも鎌倉期のものである。

〔黒色土器〕　いわゆるA類の埦が若干出土している。周知のように、近江では、瓦器埦が畿内で一般化する



第８図　出土遺物

11世紀以降も、依然黒色土器の生産を続けており、本遺跡例も瓦器生産並行期のもので、形態・手法からみて、瓦器で言うところの第Ⅱ段階、12世紀後半から、13世紀にかけての所産と考えられる、この時期のものとしては、近江においては、野洲町富波・同江部・守山市横江・草津市志那中などに類例が認められる。

〔須恵器〕　須恵器は、破片が若干出土している。図示し得たのは、坏1点のみで、詳細は明らかでないが、平安時代の所産であろう。

〔近世陶磁〕　主として耕土中より、かなりの出土が知られる、器形の判別しえないものもあるが、茶埦・土瓶・壺・皿などからなり、いわゆる染付が大部分で、瀬戸・伊万里系のものであろう。

5　ま　と　め

以上、概略述べたように、今回の調査では水田や水路畦・畑地などに、若干の遺物包含が認められたが、明確な遺構の検出はなく、安定した遺構面も検出されなかった。したがって、本地域は長い間、野洲川の旧河道の流路となっていたものと考えられ、一時的な居住の可能性はあろうが、永続化しなかったと思われる。この地域の集落としては、現集落および錦織寺周辺の微高地上に想定するのが妥当と考えられる。

（大橋　信弥）

追記

現地調査および整理業務に参加したのは上記のほか次の通りである。

水野敏昭・井入勉・中西和多隆・尾谷孝・美濃部力・谷口孝司・三宅治・大崎義彦・国松千夏・大橋美和子・中村明・山本芳正・福井昭彦・河村文章

第１表　出土遺物観察表

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	皿	A	H001	口径 3.7	○体部は、内湾し、口縁部は、やや外反する。 ○端部を丸くおさめる。	○粘土板成形。 ○内外面横ナデ調整。	○淡褐色。 ○胎土、焼成　良好。
		B	H002	口径 5.2	○体部は、短かく内湾し、口縁部は大きく外反。 ○端部を丸くおさめる。	○粘土板成形。 ○内外面横ナデ調整。	○淡赤褐色。 ○胎土、焼成　良好。
		C	H003 ～ H004	口径 5.0 口径 3.1	○体部は、ゆるやかに内湾、口縁部は、直線的に外上方へのびる。 ○端部を丸くおさめる。	○粘土板成形。 ○内外面横ナデ調整。 ○外面、体部下半、指押え。	○赤褐色（H003） 淡黄褐色（H004） ○胎土、焼成　良好。
		D	H005	口径 3.8	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部は内反する。 ○端部を丸くおさめる。	○粘土板成形。 ○内外面横ナデ、後内面、指押え。	○淡赤褐色。 ○胎土、焼成　良好。
		E	H006 ～ H007	口径 5.4 口径4.45	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部を外側に強くひき出す。 ○端部は、やや肥厚させて丸くおさめる。 ○口縁部内面に一条の沈線。	○粘土板成形。 ○内外面横ナデ、後指押え。	○淡褐色。 ○胎土、焼成　良好。
	脚付皿		H008	底径2.65 脚 2.1	○高い脚台、外方にゆるやかに開き、直線的にのびる。	○貼り付け高台、貼り付け後内外面ナデ。	○淡赤褐色。 ○胎土、焼成　良好。
黒色土器	椀	A	B009 ～ B010	口径 7.6 口径 7.2	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部はわずかに外反する。 ○端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。（B０１０）	○粘土細巻き上げ。 ○内外面ナデ、後外面指押え。	○内面　黒色。 外面　淡赤褐色。 （内、外）灰褐色（B009） ○胎土、焼成　良好。
		B	B011	口径 6.2	○体部は、直線的に斜上方へのび端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。	○粘土細巻き上げ。 ○内外面ナデ、後外面指押え。	○内面　黒色。 外面　淡黄褐色。 ○胎土、焼成　良好。
		C	B012	口径 6.5	○体部は、低くゆるやかに外上方へのび、口縁部をわずかに内湾させる。 ○端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。	○粘土細巻き上げ。 ○内外面ナデ、後指押え。	○内面　黒灰褐色。 外面　淡黄褐色。 ○胎土、焼成　良好。
		D	B013	口径 7.5	○体部は、直線的に斜上方へのび端部を丸くおさめる。	○粘土細巻き上げ。 ○内外面ナデ、後外面指押え。	○内面　黒色。 外面　淡赤褐色。 ○胎土、焼成　良好。
			B014	底径 2.2 高台 0.6	○断面逆三角形の高台	○貼り付け高台。	○淡黄褐色。

			B014			貼り付け後ナデ。	○胎土、焼成　良好。
			B015	底径2.25	○退化した低い断面逆三角形の高台。	○貼り付け高台。 貼り付け後ナデ。	○黄褐色。 ○胎土、焼成　良好。
須恵器	坏		C016	口径 5.8	○体部は、直線的に斜上方へのび端部は、内面に内傾の面をもち鋭どく収める。	○内外面横ナデ調整。	○灰青色。 外面に自然釉。 ○胎土、焼成　良好。
国産陶磁器	皿		K017	口径3.75	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部を丸くおさめる。	○内外面横ナデ調整。	○淡黄灰色。 ○内外ともうわ薬。 ○胎土、精良、焼成堅緻。
	埦		K018	口径 5.8	○体部は、ゆるやかに内湾、端部を丸くおさめる。	○内外面横ナデ。	○白色。 ○胎土、精良。 ○焼成、堅緻。
	茶埦		K019	口径 3.6	○体部は、ほぼ直線的に上方へのびる。 ○端部を丸くおさめる。	○内外面横ナデ。	○白灰色。 ○胎土、精良。 ○焼成、堅緻。
			K020	底径 3.7 高台 0.7	○断面三角形の高台、やや外傾する。	○内外面横ナデ。	○淡灰褐色。 ○胎土、精良。 焼成、堅緻。
			K021 ～ K022	底径2.9 高台0.25 底径2.9 高台0.35	○断面逆台形の低い高台。	○内外面横ナデ。	○縁黄灰色。 ○胎土、精良 焼成、堅緻。
	鉢		K023	口径6.25	○口縁部は短かく内湾し屈曲して体部へと至る。	○内外面横ナデ。	○淡灰緑色の釉がかけてある。 ○胎土、精良。 焼成、堅緻。
			K024	口径 8.9	○体部はゆるやかに斜上方へ開き口縁部を外側へ大きく引き出す。 ○端部上方を平担に収める。	○内外面横ナデ。	○淡灰黄褐色の釉。 ○胎土、精良。 焼成、堅緻。
			K025	口径8.45	○口縁部は、やや外反して丸味をもつ。	○内外面横ナデ。	○緑茶褐色の釉。 ○胎土、精良。 ○焼成、堅緻。
			K026	底径 4.1	○底部よりほぼ直角に立ち上がり直線的に口縁へと至る。	○内外面横ナデ。	○淡灰色の釉。 ○胎土、精良。 焼成、堅緻。
	壺		K027	底径 5.0	○平底の底部で屈曲して斜上方へとのびる。	○内外面横ナデ。	○淡赤褐色、白色の釉。 ○胎土、精良。 焼成、堅緻。
	土瓶		K028	口径4.45 底径3.85 器高6.75	○胴部は、ゆるやかな丸味を呈し、注口はほぼ胴部朱間にあり	○内外面横ナデ。	○淡赤褐色の釉。 ○胎土、精良。 ○焼成、堅緻。

第２章　草津市長安寺遺跡

1　はじめに

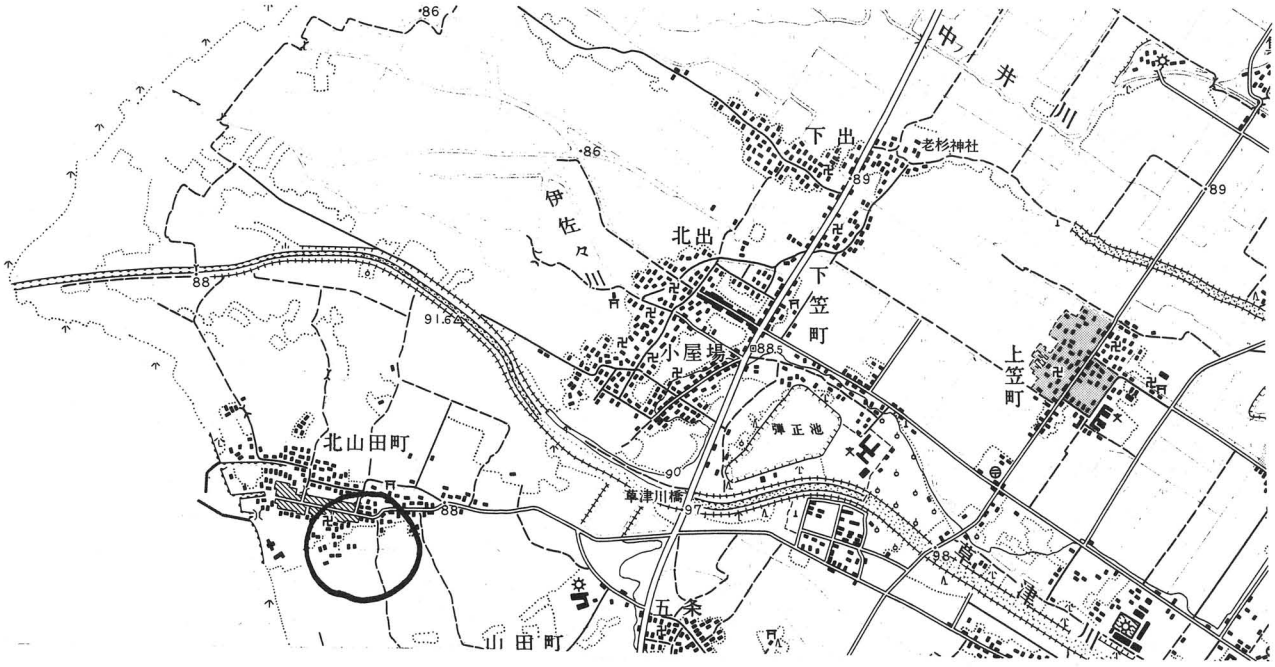
本報告書は、草津市北山田町所在長安寺遺跡についての、昭和52年度における試掘調査の結果を収めたものである。本遺跡の所在する北山田町はその「字名」とは異なり、湖南の良港山田港を擁する湖畔に位置し、本遺跡は現集落の南側の水田に所在するとされていた。この付近は、草津川、伯母川等の沖積作用によって形成された微高地上にあり、早くから生活地域として開かれていたと予想され、又、本遺跡は『扶桑略記』所載「近江栗太郡所在長安寺、他多良寺是也」の有力比定地でもあったのである。そして、今回この地域に昭和52年度の「ほ場整備事業」が計画されたため、昭和52年度国庫補助金を得て、範囲、性格解明のため、用排水路部を中心に試掘調査を実施したものである。調査・整理については、本課技師大橋信弥が担当・指導し、滋賀県文化財保護協会調査員別所健二、谷口徹両氏の全面的な協力を得た。なお遺物写真については寿福滋氏を煩わした。記して謝意を表したい。

2　調査経過　－日誌抄－

当調査は、昭和53年６月15日～同年７月16日の一ヶ月を要して現地調査を実施し、それ以降昭和54年３月31日までを要して、整理業務を実施した。

６月15日（土）地区設定、10号支線排水路に一辺６ｍの方形のグリッド（10－Ａ、10－Ｂ）を、９号支線排水路に一辺６ｍの方形グリッド（９－Ａ、９－Ｂ、９－Ｃ、９－Ｄ）をそれぞれ設定した。〈10－Ａ〉より掘り下げを始める。

６月20日（月）〈10－Ａ〉〈10－Ｂ〉掘り下げ、耕土・床土を除去すると、現畦畔に並行する鋤跡が検出される。この層は一応安定し、無遺物のため、一時掘り下げを中止し、〈９－Ａ〉〈９－Ｂ〉の掘り下げを開始する。

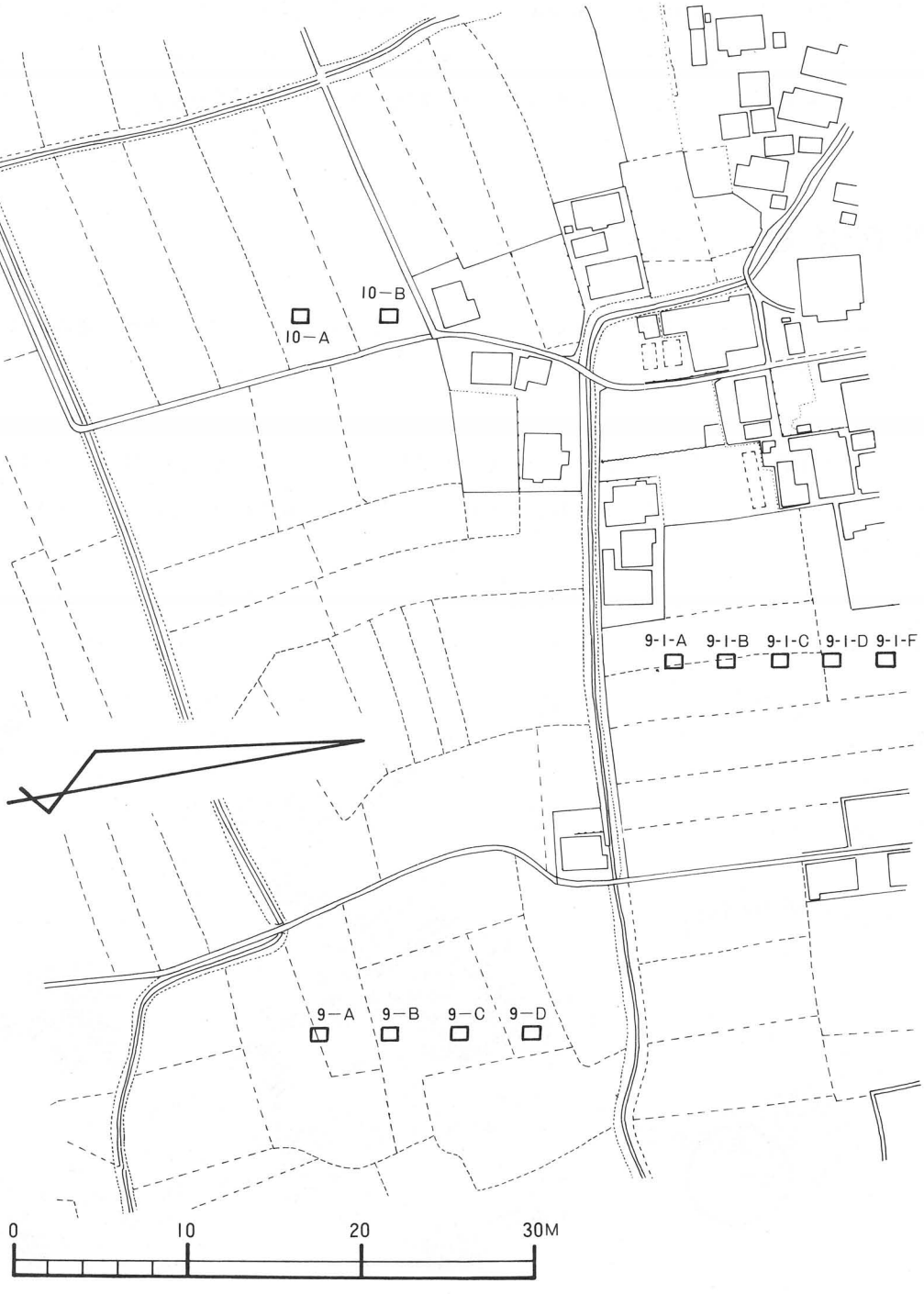


第１図　位置図

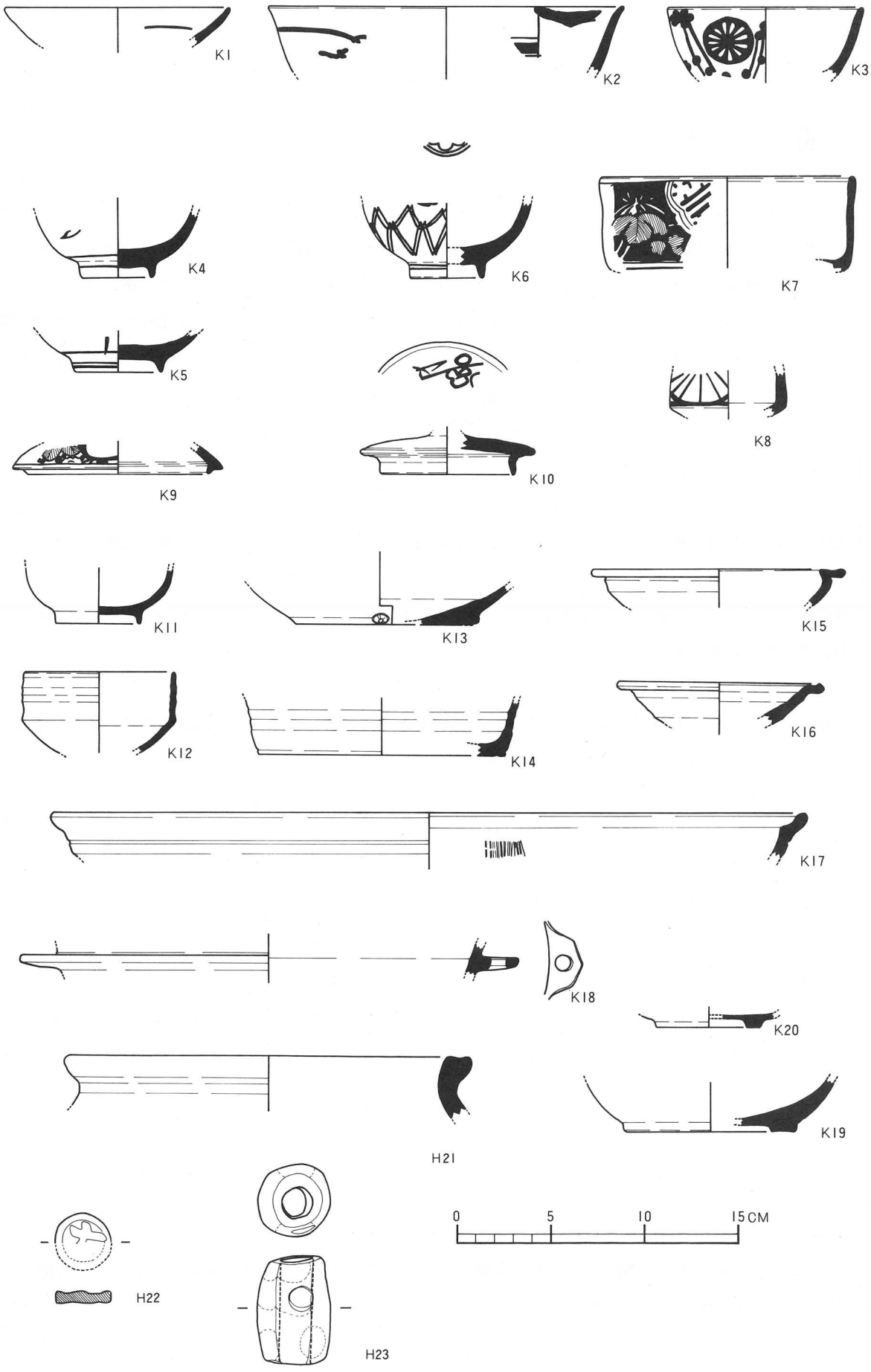
6月25日（土）〈9－A〉〈9－B〉の掘り下げ。耕土、床土の下より鋤跡検出。〈9－C〉〈9－D〉でも同様。新たに9号排水路の延長部分にグリッドを設定する（9－1－A～9－1－F）。

7月1日（金）〈9－1－A〉以下のグリッドを掘り下げる。いづれもやや耕土が深く鋤跡と考えられる痕跡は地山まで達していない。さきに調査した面は、一応地山と考えられたが、埋めもどしの前に〈10－A〉で深掘りを実施する。この結果、これまで地山と考えていた灰褐色砂質粘土が約20cm堆積し、それ以下に砂層、青灰色粘土層が形成されていることが判明。或る時期まで本地域が湖中であったことをうかがわせた。

7月6日（土）前日の雨のため、掘り下げは中止し埋めもどしを行う。〈10－A〉〈10－D〉〈9－A〉完了



第2図　地区設定図


K1
K2
K3
K4
K6
K7
K5
K8
K9
K10
K11
K13
K15
K12
K14
K16
K17
K18
K20
K19
H21
H22
H23
0
5
10
15CM

第３図　出土遺物実測図

7月11日（月）〈9－1－E〉〈9－1－F〉の掘り下げと並行し、〈9－B〉〈9－C〉〈9－D〉埋めもどし完了。

7月18日（月）残りグリッドの埋めもどしを完了。器材徹収を行う。

3　遺　　構

上述のとおり、今回の調査では当初予想していた遺構は全く発見できなかった。本遺跡の基本層序は、耕土、床土が比較的浅く約25cm（①、②）で、その直下に一応地山とした灰褐色砂質粘土（③）が約50cm余堆積している。その下層に約40cmの砂層（④）が形成され、それ以下は青灰色粘土を主体とするスクモ層（⑤）であった。③以下は若干の木片を含むほか、遺物もすべて③の上面より出土をみており、水田化は比較的おくれ近世以降と考えられた。おそらく、近世以前においては湖底であった可能性が大きいと思われる。なお、長安寺の故地については北山田の現集落に重なると思われるが、現状では全く不明とせざるを得ないのである。

4　遺　　物

本遺跡の出土遺物は、その大半を染付などの近世陶磁が占め、ほかに土師質土器、土錘、泥面子などで、いづれも床土ないし耕土層より出土したものである。

〔陶磁器〕　茶碗・鉢・蓋・壺・摺鉢などの器形がみられ、瀬戸・伊万里・信楽のものである。いづれも、近世における日常雑器類である。

〔土師質土器〕　塝の口縁部の出土が知られるのみである。

〔土錘〕　淡赤褐色の素焼の土錘で、最大径3.85cm、長さ 5.8cmをはかり、径 1.3cmの穿孔がある。表面に、竹管によると思われる施文が認められる。（H23）

〔泥面子〕　県内では、報告例はないが、近世の遺物としては、出土例の多いもので、径 3.0cm、厚さ 0.6cmの土製品、表面に、文字様の図案を配する。（H22）

5　ま　と　め

今回の調査では、以上のように、当初予想していた遺構は、全く発見できなかった。したがって、本遺跡の中心部は、現集落に重復する可能性が強いと考えられよう。本調査の結果、この地域の水田が、近世以降に造成されたことが、ほぼ推測され、湖辺の遺跡立地について、一例を加えることが出来たと考えられる。

（大橋　信弥）

追記

現地調査および整理業務に参加したのは、上記のほか次の通りである。

水野敏昭・井入勉・中西和多隆・尾谷孝・美濃部力・谷口考司・三宅治・大崎義彦・国松千夏・大橋美和子・中村明・山本芳正・福井昭彦・河村文章

第３章　守山市赤野井遺跡

1　はじめに

昭和五十一年度の調査[①]に引きつづいて、昭和五十二年度にも赤野井遺跡周辺において、圃場整備事業が行なわれることになり、事業の開始に先立って、国庫補助の発掘調査を行なった。原因者による調査も引きつづいて行なうので、国庫補助分は幹線排水路、支線排水路部分に限定した。昨年度の調査で推定した遺跡の広がりの他に古墳時代以前の集落跡も予想されていたので、その確認を目的として、両水路部分の調査を行なった。

その結果については、後に詳しく記すが、はじめに概略のみを明らかにしておこう。

幹線水路部分では、現在水田の地割から、最東端の南北畦畔が遺跡の東限にあたると考えていたのであるが、この推定を大きくはずれず、南北畦畔のわずか数mの地点で遺構の広がりが止まった。一方、古墳時代以前の遺構については前年度W地区で古墳時代前期の溝状遺構を検出し、更に南側に広がることを予想したが、この点についても遺構が広がり、赤野井町十二里の集落まで、広がっていることがわかった。しかし、遺構といっても溝や落ち込みがあるだけで、奈良・平安時代の遺構の下層か、更に南に認められると思われた。

調査の方法

今年度の調査は当初からバックホーを使用した。表土が遺構検出面約25cmあり、その除去を目的とした、バックホーの使用後に精査し、遺構を掘り下げた。ただし、G地区と呼ぶ地区は当初から人力で行ない、補足的にバックホーを使用した。

調査地の名称

前年度の調査地の名称はA・B・N・NW・Z・W地区としたので、重複しないように名称を付す。幹線排水跡部分をE地区、支線排水路部分をF・G・Hとした。

2　調査地区の概要

E地区

幹線排水路部分で、幅6mのトレンチとした。長さは、120mのトレンチで、4ケ所設定した。最初のE－1トレンチの西端で、ピットと溝状遺構を検出した。つづいて設定したE－2･3･4では遺構は全く検出されなかった。この結果、遺構・遺跡の存在もこのE－1トレンチを東限とできそうである。

F地区

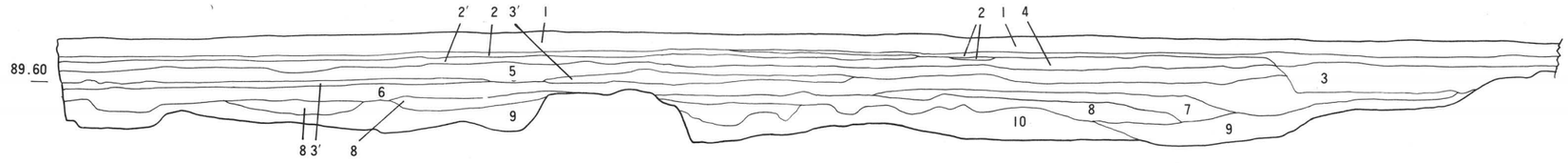
E地区の北側に設けられる支線排水路部分であるF地区では、幅4mのトレンチを設け、バツクホーで表土除去を行なった。結局は遺構は全く検出されなかった。

H地区

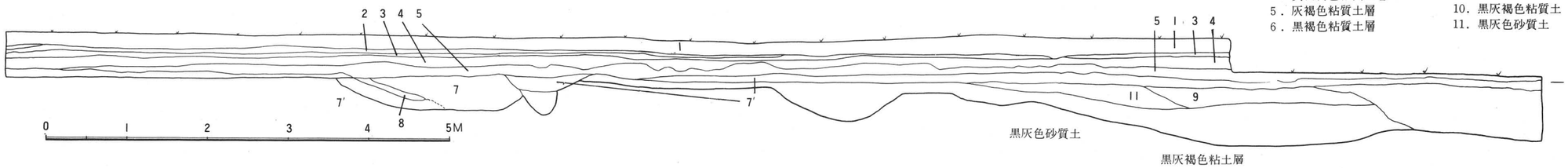
最西端の支線排水路部分で幅4mのトレンチとした。約80mの長さであり、溝状遺構・建物跡が検出された。

第1図　調査区位置図

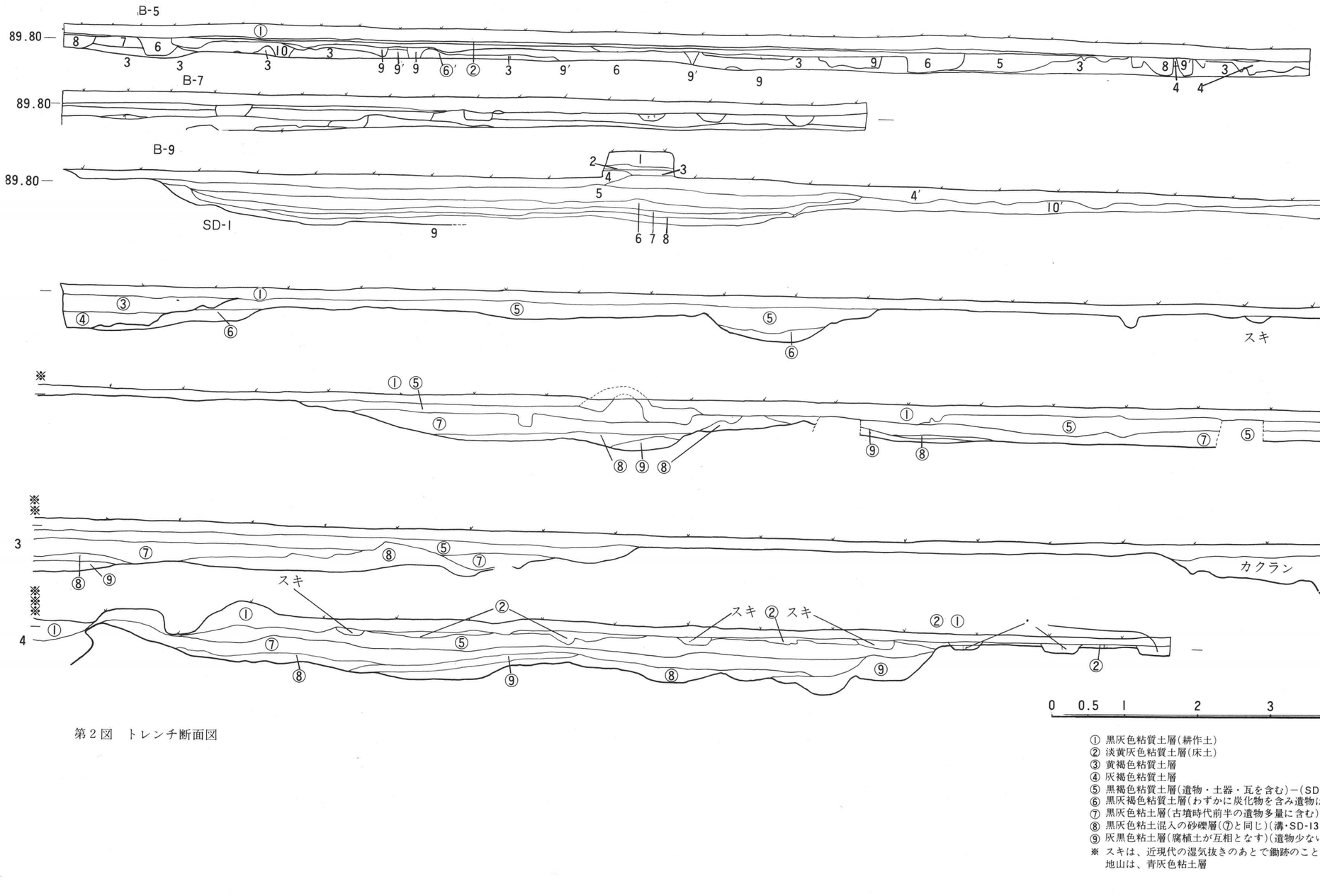
G－11トレンチ断面図



G－10トレンチ断面図



1．黒灰色粘質土（耕作土）
2．灰黄色粘質土（床土Ⅰ）
3．黄褐色粘質土（床上Ⅱ）
4．黄灰褐色粘質土層
5．灰褐色粘質土層
6．黒褐色粘質土層
7．黒灰色粘土層
7．7より濃い
8．黒色粘土層
9．黒灰褐色粘土層
10．黒灰褐色粘質土
11．黒灰色砂質土



1 灰黒色粘質土
2 褐色粘質土
3 灰褐色粘質土
4 暗灰褐色粘質土
5 黒紫色粘質土
6 灰色粘質土－6′はやや暗い
7 明灰褐色粘質土
8 暗黒紫色粘質土
9 黒灰色粘質土
10 暗灰褐色粘質土

1 黒灰色粘質土（耕作土）
2 灰褐色粘質土（床土Ⅰ）
3 灰褐黄色粘質土（床土2）
4 黒褐色粘質土
5 灰褐色粘質土
6 黒色粘土層
7 灰黒色粘土層（炭化物若干）
8 灰色粘土層
9 腐植土層（スクモ層）
10 地山・青灰色粘土層

第２図　トレンチ断面図

① 黒灰色粘質土層(耕作土)
② 淡黄灰色粘質土層(床土)
③ 黄褐色粘質土層
④ 灰褐色粘質土層
⑤ 黒褐色粘質土層(遺物・土器・瓦を含む)－(SD-10～14　SX-1の上層)
⑥ 黒灰褐色粘質土層(わずかに炭化物を含み遺物は少ない)(SD-10・SD-11の下層)
⑦ 黒灰色粘土層(古墳時代前半の遺物多量に含む)(SD-13・14・SX-1)
⑧ 黒灰色粘土混入の砂礫層(⑦と同じ)(溝・SD-13・14・SX-1)
⑨ 灰黒色粘土層(腐植土が互相となす)(遺物少ない・溝・SD-13・14・SX-1)
※ スキは、近現代の湿気抜きのあとで鋤跡のこと
地山は、青灰色粘土層

地形は複雑に変化し、南端では用途不明の落ち込みがみられ、中央付近では溝状の落ち込みの一部に旧地形の高まりが残り掘立柱式建物跡が残存しており、更に北側では大きく落ち込み、またその中に用途不明の掘り込みがみられ多量の遺物がみられた。またこの大きい落ち込みの中に琴状木製品や木製品が埋っていた。このH地区の基本土層（ベース）は砂礫層で特に落ち込みや溝跡の底は砂礫の礫が大きくなる。

3 地　　形

幹線及び支線排水路部分の旧地形と現地形について若干、紙面を費す。

現地形は大勢として、東高西低となり、南北間の比高差は少ない。特に、旧河道と思われる孤塚南側からH地区北半にまたがる地の東側は微高地を呈し、南北にのびる。奈良時代前期頃に施行された条理制地割、あるいはその後の耕地改良等により、概ね一町程で、数10cmの段差をもつ点は赤野井②の異方位地割地区にもみられ、異方位地割の中央を通る道路をはさんで両側、あるいは南北地割のそれぞれ東・西端ではわずかであるが段がみられる。なかでも、西側端ではその段差は大きい。現表土のレベルは東端（北東端 88.94m、南東端 89.76m、距離約 600m、）で、西端（南西端 88.88m北西端 88.73m距離約 250m）でやはり、南北に対して東西の比高差の大きいことがわかる。なお、旧河道の推定線については昭和五十一年度滋賀県文化財調査年報に記しておいた（守山市赤野井遺跡）。なお、水田の地割については遺跡の範囲と考えられる部分については原則的に東西・南北の方位が採られているが、周辺部はやや角度を振る。しかし、周辺部の幅も約50mも離れると周辺の野洲郡、栗太郡の条里地割に乗った畦畔となる。遺跡の南端（南北地割の南限）は十二里町の家が建っていてやや不明瞭である。ただ、特記するべきなのは、南北地割の南東端に張り出すように突き出ている畑地があることである。この畑地は周辺水田より約80cmも高くつくられている。この一帯の土地環境から特に客土して畑地にすることは必要でないと思われるが、この一画だけは後に述べる瓦の出土と関連して、注意深く考えねばならない高畑地である。

一方、旧地形については、既に一部触れたが若干だけ述べておこう。遺構は耕土、床土直下約20～25cmで検出されるため、大きな谷あるいは、微高地は埋没しておらず、現表土の地形が、おおよそ地下にみられると考えられる。しかし、大きな差異をあげれば、旧河道が2条みられ、溝状遺構があげられよう、全体にみて大きい旧河道によって形成された微高地に遺構が形成されていると言えよう。

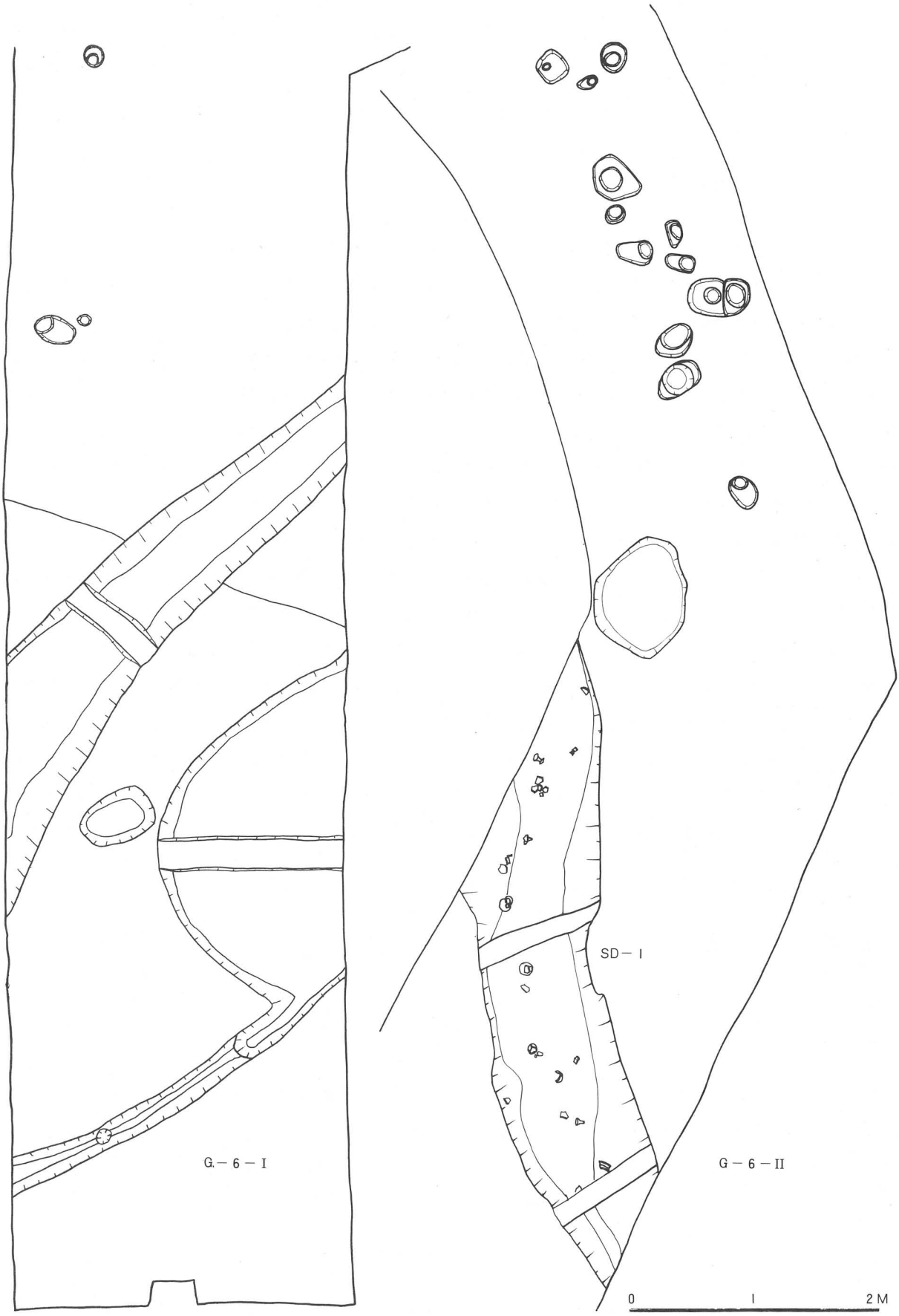
4 遺　　構

E地区

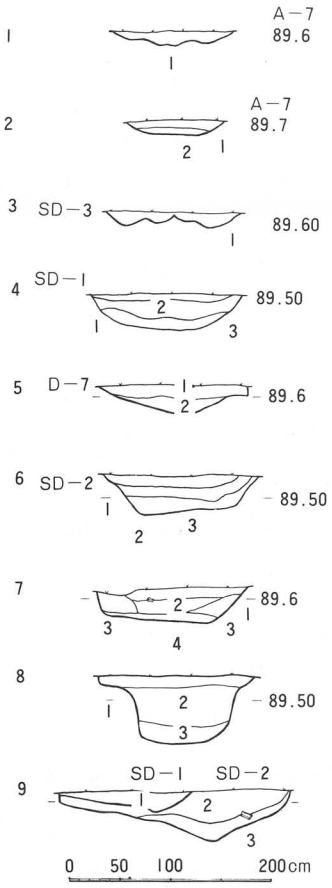
E－1トレンチで、溝状遺構とピットが検出された。溝状遺構は東西方向で幅約30cm、深さ15cm程度で全形は不明である。溝状遺構の西側にピットが若干みられたが、建物跡等を推定させるものではなかった。同じく、A－1トレンチの西端でも柱穴が検出された。柱穴は大小不ぞろいで、やはり、建物跡等を推定させるものではなかった。

E－2・3

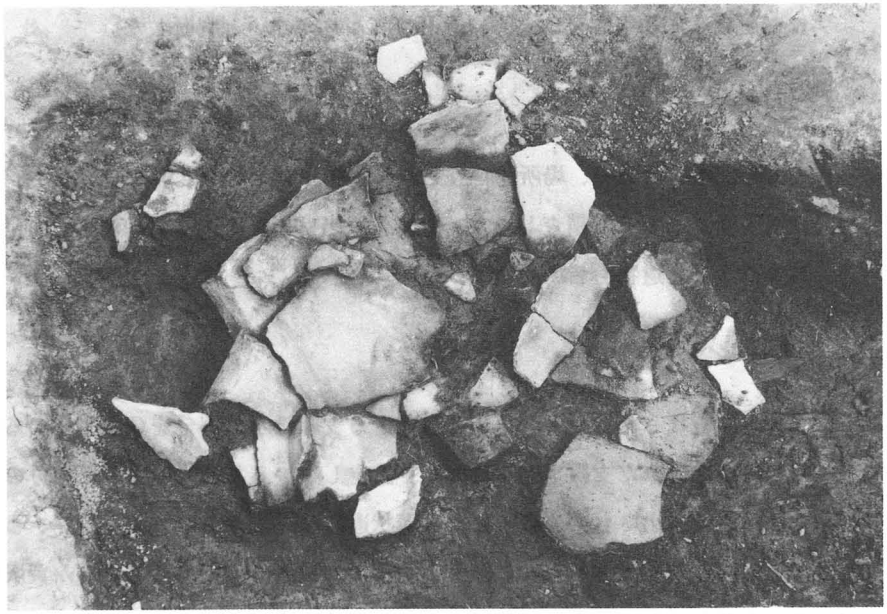
両トレンチでは、E－1トレンチの遺構ベース土まで掘り下げ精査したが、遺構は全く検出されず、更に下層

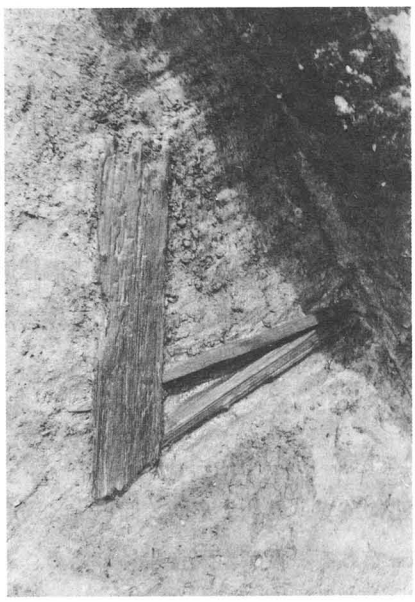


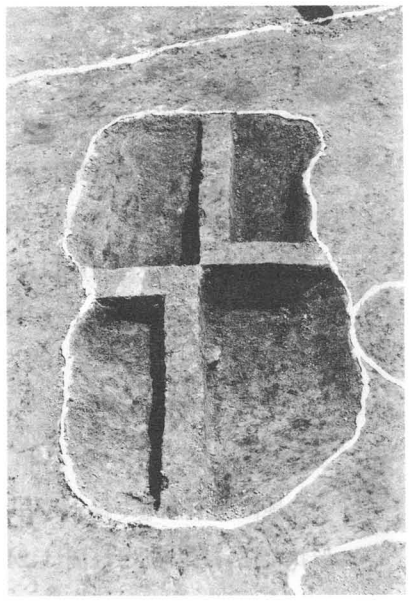
第3図　遺構実測図



1．黒灰褐色粘質土
2．暗黒灰包粘質土
3．灰黒包粘質土
4．黒褐色粘質土







第4図　断面図及び遺構

にも遺構、遺物包含層はなく、遺構の広がりがないと判断した。

F地区

支線排水路部分で、場所で言うと、E－3トレンチの北側に設けたトレンチで、やはり最初はE－1トレンチの遺構面にあわせて精査したが、遺構の検出は皆無であった。再度面を下げて調査したが、やはり遺構は認められなかった。遺物も皆無である。

Gトレンチ

E地区をはさんでFトレンチと対応する支線排水路部分をGとしている。本トレンチは小字「孤塚」を東に迂回して設定された支線水路に対応して設定しているため、限られた部分の遺構の検出となった。G－1トレンチでは遺構は検出されず、G－2から溝状遺構G－3からG－10トレンチまでは掘立柱式建物跡、溝状遺構、井戸跡、旧河道が検出された。これらの遺構の基本的な基盤はほとんどが黄灰色粘質土で、遺構埋土は黒褐色土である。ただし、旧河道内は破礫層であり、溝状遺構は砂層あるいは腐植土であった。遺構の時期も古墳時代前期から平安時代までと幅広く二層にわたった。また遺物は土師器、須恵器、施釉陶器、木器、黒色土器がみられた。

Hトレンチ

Gトレンチの西方200m離れた水田中に設計された支線排水路部分である。幅4mで長さは約80mである。旧地形は複雑で、黄灰色粘質土を基盤とする箇所、砂礫層をベースとする箇所があり、高低差に富んでいる。南端では黄灰色土をベースにして溝状遺構や不整形な落ち込みがみられ、黄灰色土を掘り込み砂礫層まで掘り込んだ溝が続き、その中間に黄灰色土をベースにした高い部分の残存（この部分に掘立柱式建物がみられる）があり、更に北では溝状の落ち込みや土壙状落ち込みがみられた。これらの遺構はその出土遺物から、古墳時代前期から平安期までにわたる。遺物は木製琴状品一、土師器、弥生式土器、須恵器がみられた。

H地区

SB－H－1

支線排水路部分の中で溝や不定形の落ち込みの多い中で長方形状の微高地が残存しており、この上に建物跡が検出された。全体の規模は不明であるが、南北2間・東西2間分が確認された。柱間は180cmで、柱穴掘り方はやや不ぞろいのようであるが40cmの正方形と考えられる。建築時期はSD－H－3、H－4の埋没後と考えられ、6世紀後葉以降で9世紀以前である。なお、この微高地周辺の溝状遺構は古墳時代後期（6世紀中頃）まで残存しており、溝が埋没した後（微高地の縁辺で下降する場所にも柱穴がみられる）に建築されたものである。

G地区

SB－G－1

G地区の南東端で検出された建物跡で、現状で東西2間以上・南北1間以上である。柱穴はほぼ40～50cmの方形状で柱穴は20cm、柱間は240cmである。東側が調査残外のため、あるいは2間×2間の倉庫になるか。

ＳＢ－Ｇ－２

ＳＢ－Ｇ－１の西側に約 130cm離れて存在する建物で、梁行２聞×桁行４間の規模である。約40cmの方形の柱穴掘り方内に20cmの柱穴がみられ、柱間はややふぞろいであるが、平均は桁行 180cm、梁行は 195cmである。南北棟。

ＳＢ－Ｇ－３

ＳＢ－Ｇ－２と重複する建物跡で、おそらく２間×２間の総柱の倉庫と考えられるが、現状では東西・南北とも１間のみである。他は調査外と一部地形が傾斜し落ち込むので検出できない。柱穴は約40cmの方形で、柱径は20cmをはかる。柱間は 230cmをはかる。

ＳＡ－Ｇ－１

ＳＢ－Ｇ－１及びＧ－２の北側にみられるもので、３間分だけが確認できる。ただし、東・西端はトレンチ外にあり、更にひろがると思われる。柱は35cmの方形の掘り方で柱径は20cm、柱間は 240cmである。ＳＢ－Ｇ－１・Ｇ－２と他を区別する目的で設けたものか。

ＳＢ－Ｇ－４

Ｇ－７トレンチ（孤塚南東部）で検出された建物跡で、一部は調査範囲外に出る。調査地の東端に位置し、南北２間×東西１間以上の規模で、総柱である。柱穴は掘り方40～60cmの円形で、柱径は30cmを測る。柱間は 220cmである。おそらく２間×２間の倉庫跡と思われる。

ＳＤ－Ｇ－１

Ｇ地区孤塚東側の支線排水路部分Ｇで検出された溝跡で最北端に位置する。幅約70cm、深さ25cmの小溝で古墳時代前期に属す。出土遺物は17・20・21で一部弥生時代後期に属す土器片をみるが、厳密には最古の土師器より一段階新しい時期に属す。

ＳＤ－Ｇ－２

ＳＤ－Ｄ－１と重複する溝跡でやや西にふれる角度で交差する。このＳＤ－Ｇ－２は遺物は少なく、詳しい年代を求めることはできないが、古墳時代前期の土器を包含するので、ＳＤ－Ｄ－１より古い時期に考えられる。ただし、ＳＤ－Ｄ１の時期を甚だ遡るものではない。

ＳＤ－Ｇ－３

ＳＤ－Ｇ２より更に南側に位置し、幅１ｍ、深さ40cmの溝である。北西・南東方向のほぼ直線状の溝跡で、両端は調査地外になるので明らかでないが、南端は直角に折れまがり、次のＳＤ－Ｇ－４に続くかも知れない。溝跡内の埋土はＳＤ－Ｇ－１・Ｇ２を類似しており、極端な時期差はないと考えられる。なお、溝内には土器はほとんどみあたらない。

ＳＤ－Ｇ－４

ＳＤ－Ｇ－３とほぼ直角にあたる状態で検出され、規模はＳＤ－Ｇ－３と同様である。発掘調査の状況からはＳＤ－Ｇ３と同一の溝で直角に折れまがる溝と判断した。この溝とＳＤ－Ｇ－３と同じ埋土で遺物は僅少で、細片のみである。

ＳＤ－Ｇ５

ＳＤ－Ｇ－４と直交する形で検出されたが、接点部分は調査地外にあたるので切り合い関係は不明瞭である。ただし、溝幅・深さ・埋め土はＳＤ－Ｇ－３、Ｇ－４と同様で、ＳＤ－Ｇ－４と続くような形態であるのであるいは、同一の溝であるかも知れない。

このＳＤ－Ｇ－３，４，５は前回調査で検出した第１号・２号方形周溝基と類似した埋土であるので、あるいは二基接した方形周溝基になる可能性もないわけでもない。ここでは一応、連続したW字状の溝跡と考えておく。

ＳＤ－Ｇ－６

孤塚東の支線排水路部分Ｇの南端にみられた溝状遺構で北側の肩が検出されたのみで、幅、深さは不明である。ただし、溝内埋土は灰褐色砂で比較的深いものになると思われる。遺物は僅少で、古墳時代前期に属す。

ＳＤ－Ｇ－７

孤塚南側から十二里町民家にのびる支線排水路部分の中にみられ、幅４ｍ、深さ 0.7ｍを測る。遺物は奈良時代末し平安期の須恵器がみられるので、ほぼ、この頃の溝と思われる、トレンチに対し、直交する溝である。

ＳＤ－Ｇ－８

ＳＤ－Ｇ－７と一部重複する溝状遺構で、ＳＤ－Ｇ－７の下層の溝である。幅は不明で、ＳＤ－Ｇ－７の北肩とＳＤ－Ｇ－８の南肩の幅は約11ｍを測る。下層は有機質黒灰色粘土層で、古墳時代前期の土器が破片で多数出土した。このことから、このＳＤ－Ｇ－８は古墳時代前期と判断される。この溝底に図版９に示す、井戸跡がみつかつた。掘り方、井戸枠内にみられた土器は古墳時代前期なので、井戸跡も溝跡をそう遠く離れない時期に掘られたものと考えられる。

ＳＤ－Ｈ－１

Ｈ地区、最南端に位置する溝で、東西方向に検出された。肩部は曲折しており、最小幅 1.9ｍ、最大幅 3.9ｍを測る。特に南側は後世の掘り込みによって壊されている。遺物はみあたらない。おそらく古墳時代に属す溝と考えられる。

ＳＤ－Ｈ－２

ＳＤ－Ｈ－１から北へ約７ｍ離れて存在する東西方向の溝で、一条から途中２条にわかれる。西側はおそらく別の掘り込みがあったのか、溝状の形がみられない。時期は古墳時代前期に属すると考えられる。

ＳＤ－Ｈ－３

ＳＤ－Ｈ－２の北方約10ｍ離れて検出された溝跡でやはり南北方向にのびる。溝幅は不明瞭であるが、およそ、1.4ｍ、深さ0.2ｍであった。遺物は古墳時代前期の土器師がみられた。

Ｄ地区は自然地形が複雑で、地山の土層も極端に変化する。ＳＤ－Ｈ－１、２の地山は灰色砂質土であるが、ＳＤ－Ｈ－３は砂礫層である。ＳＤ－Ｈ－３～６まではＳＢ－Ｈ－１の周辺の大きく広い落ち込みの中にみられる溝跡であるこの落ち込みの上層は須恵器が流れ込んでおり、下層には認められない。

ＳＤ－Ｈ－４

ＳＤ－Ｈ－３の北方にみられる溝でやはり東西方向にのびる溝跡である。深さは周辺全体がおちこんでいる中であるので定かでないが約25㎝をはかる。古墳時代前期の遺物が出土する。なお、一部弥生時代中期後葉の遺物もみられる。

ＳＤ－Ｈ－５

ＳＢ－Ｈ－１の地方周辺にみられる落ち込みの中にみられる溝で古墳時代前期に属す。

ＳＤ－Ｈ－６

Ｈ地区の北端に近い溝で、幅広く大きく落ち込む。中にＳＸ－１とＳＫ－１がある。溝内からは弥生時代前期新段階の土器をはじめ、同中期、古墳時代、奈良時代までの遺物が流れ込んでいる。

ＳＫ－Ｈ－１

H地区北端近くで検出された土壙で、SD－H－6の溝底で検出された。長径 1.3m、短径 0.8mのだ円形である。壙内からは弥生時代～古墳時代の遺物を含むが、古墳時代庄内式並行期より新しい時期と思われる。

SX－1

D地区北端近くで検出された落ち込みで、目的は不明瞭である。多量の土器を出土し、弥生時代前期から奈良時代遺物までがみられた。溝底で検出されるので、恐らく溝上から掘り込まれたのであろうか。あるいは、土器溜めか。

（山崎秀二）

5 遺　　物

(1)弥生時代遺物

弥生時代遺物は土器・石器がみられる。これらの遺物は調査域内の南西側、即ちC地区、H地区に出土する傾向を示向を示す。遺構は明確でなく、現在のところH－8トレンチに用途不明の不整形な落ち込み（SX－1）の中に多い。他ではH地区の溝内にみられた。これらの土器は古墳、歴史時代の遺構が掘り込まれる時に出されたものが再び落ち込む、あるいは流入しているものと思われ、いずれも表面が磨滅している。そのため、文様や調整が観察し難い。

前期

壺・⑯・㊺・㊷・㊵・⑰いずれも新段階に属すもので㊵は頸部にヘラの沈線が3条みられ、外面はヘラ磨きがわずかに観察できる。⑯・㊺・㊷は頸部に貼りつけ突帯を施すもので、㊷は2条・⑯・㊺は1条で、㊷は突帯の下にヘラ描き沈線が1条施されている。⑯・㊷は外面は刷毛目調整である。㊺は小型の壺で突帯の上・下に竹管による刺突文がみられる。

㊼は頸部に1条のヘラ描き沈線と口縁部上端と外面にヘラによる刻みが施こされたものである。⑰は外面が刷毛目調整で厚みのある安定した底部である。

甕、(㊹)外上方にひらく口縁部のみの残存である。外面は刷毛目調整で、口縁外面には刻みが施こされる。やや口縁の角度が前期的ではないが、類例があるので前期とした。

中期

壺、⑭・⑱・㊽・㊾・⑮・㊶・㊻

⑱は頸部に櫛描沈線文を施し、4条櫛と5条櫛とを使いわけている。⑭は6条の櫛描沈線文を2段、頸部に旋す。㊽は頸部から肩部にかけて櫛描沈線文を施こす。内面は櫛状の腰の強い刷毛目調整である。㊾は頸部に2段の櫛描沈線文を施す。内面は一部刷毛目が残るか指によるナデ調整である。⑮と㊶は無形壺で⑮は2段の櫛描沈線文がみられる。㊶は相当外面が剝離しており、沈線がわずかみとめられる。㊻は上げ底風の底部で、外面に刷毛目が観察される。

甕、⑬

外土方にのびる口縁部のみの残存で、外面は刷毛目調整で、口縁部外面にヘラによる刻みが施こされる。

石器

偏平片刃石斧、

緑色を呈す水成岩材を用いたもので、全長3.2㎝、厚み0.6㎝、全幅3㎝である。中期に属す石斧である。

砥石

長さ 12 ㎝、幅 8 ㎝、厚み1.6㎝の扁平な粘板岩系の水成岩を用いた砥石で、片面のみに擦痕がある。他面は自然面を残している。本砥石も中期に属すものであろう。

弥生時代遺物では、前期の遺物（土器）はやはり遠賀川系の土器で占められており、他の系統の土器は認められなかった。しかも、前期新段階の土器だけであった。第Ⅱ様式、第Ⅲ様式もやはり、近江の特色を徐々に打ち出しながらも伊勢湾地方の影響を受け成立していることは従来から指摘されている通りで赤野井遺跡も同様である。Ⅳ様式の土器は少ないが、受口状の口縁の形態をとるものが見られる。Ⅴ様式の土器は壺が畿内地方の影響であり、他の器種が少ないので明らかではないが、畿内地方の高坏や、近江の受口口縁の甕が伴なうと考えられる。石器はⅣ様式に伴なうものと考えられ、水成岩質の扁平片刃石斧は一般的に認められるものである。

(2) 古墳時代遺物

古墳時代遺物も大半は孤塚南側の支線水路部分（G系トレンチ）とH地区から出土している。いずれも溝内からの出土で、少々は流入があると思われる。

土師器

赤野井遺跡の土師器の出土量は多い。今年度の調査では古式土師器が、孤塚周辺と、K地区・H地区で出土し、前年度の古式土師器出土の傾向と合致した。前年度は直接遺構に伴なうものは少なかった。今回も主に溝からの出土であるが、量が多く、十二里町地先には間違いなく古墳時代の集落跡が存在するであろう。土師器の中では後に述べるように、庄内式土器の出土、伊勢湾地方のS字状口縁土器の出土もみられ、興味を示す資料もみられた。

次に各器形毎に特徴を記すが先ず断わっておかねばならないことは受口状口縁とS字状口縁の区別であるが、いわゆる伊勢湾地方の甕の形態をそのまま模す、あるいは、直接搬入されているものをS字状口縁と呼び、他を受口状口縁と呼ぶ。そして前者を模しているものを近江系S字状口縁、後者を単にS字状口縁と呼ぶ。

甕Ⅰ㉑

口縁径約19㎝の甕で、肩部から大きく灣曲して頸部に至り、水平方向に達した点で、ほぼ垂直に立ちあがり、やや外反しながら、端部を丸くおさめる。肩部以下には斜めのハケ目調整を行なうもので、底部はおそらく薄くやや上げ底風で小さく作られていると思われる。弥生後期の受口状口縁の系譜をもつもので、古墳時代の受口口縁の中では古いものと考えられる。

甕Ⅱ、①・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑫・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・

甕Ⅰに後続するものであるが、いわゆる直ぐ後のものでなく、布留式並行以前の、庄内式並行期の新しい段階であろうと思われる甕で、やはり受口状口縁である。

肩部から大きく外反し、外上方にのびる点から、角度を急に立て、端部を斜め、あるいは水平方向につまみ出す形態で、外面肩部には一部櫛による平行文が施される①を除いて文様は概して施されず、また外面の調整も⑦

は例外で斜め刷毛目がみられるが、ほとんど最終調整は指ナデである。内面も指ナデで仕上げる。なお、ほとんどが口縁部しか残存していないが、底部は丸底と考えられる。なお、この期の甕は小形丸底壺を伴出する。(山崎秀二―昭和50年波登里第4号)

甕Ⅲ・㉛・㉜、

甕Ⅱとは若干異なる口縁で、外面の形態は受口状口縁に類似するが、内面は端部近くでわずかに変化するのみで、器壁も甕土やⅡに較べると厚みがある。しかも、頸部から口縁部にかけての指ナデはていねいで、(指に布か皮をあてていると思われる) ナデの跡が明瞭である。㉛は、外面に斜めのハケ目調整がみとめられる。なおこの甕Ⅲは受口状口縁とは呼ばないが、その系譜を引くものである。

甕Ⅳ、④

肩の張る球形の体部から短かく外反して外面に段をもって、更に外反する口縁をもつ甕である。体部径に対して口径が小さく、また器壁もうすい。外面は、口縁の中心から放射状に腰の強いハケか、木口を使って強く縦方向に挽くような感じである。胎土は細砂粒が多く含まれ、色調は褐色である。搬入品と思われる。S字状口縁土器。

甕Ⅴ・②・㉓

いわゆる庄内式土器である。体部外面に左下りの細い叩きを施し、体部下半から叩き目の上を刷毛で調整する。口縁部はくの字形に近く、端部は短かくつまみあげられ、立つ。内面の調整は体部が横、あるいは斜めのヘラ削りで、口縁部は荒い刷毛を使用している。

(3) 歴史時代遺物

土師器

歴史時代の土師器は少なく、しかも細片で実測にたえるものは極めて少なかった。

碗、㊶

高台をもつもので、断面三角形状の高台から体部にかけて、ゆるく内彎する。胎土は極めて良好で、水ごしの土を用いている。この土器は近江国衙(注③)や掘川遺跡(注④)等で出土しており、暗文のない無高台の皿坏よりやや遅れて成立するもので10世紀後半代に求められるものと考えられる。なお、高台の底面(接地部)には良好に残存している場合、成形後に乾燥するのに細い棒状の台に置いたと考えられる円周上に4ケ所の凹みがみとめられる。

甕、㊷・㊸・㊺

いずれも長甕と呼ばれる長胴の甕である。ゆるく内彎する口縁部から外下方に伸びる形態で㊺だけは口縁端部が内にわずか肥厚する。外面は縦方向、斜方向の刷毛目調整がみられ、内面も斜め方向の刷毛目がみとめられる。口縁部外面は指ナデである。

甕、㊹

半球状の胴部から「く」の字形に屈折して外にのびる口縁をもつ形態で残存部分に1ケ所の把手がつく。胴部最大径部につく把手は小さく、上に向く。外面はかなり磨滅していてわかりにくいが、斜め方向の刷毛目、内面もやや斜めの刷毛目調整である。

皿・㊵・㊶

㊵は径10.4cmの浅い皿で、単調な形態で底部から、口縁部までゆるく内彎して丸くうすい端部へ至る、㊶は平坦な、やや厚い底部から一度屈曲して丸く、肥厚した端部に至る。屈曲するところはうすく、1㎜程の厚みであ

る。端部は少し、内側に折りかえしている。胎土は両方とも細粒の砂を少し含んでいる。

(4) 黒色土器

碗・㉜・㉝

いずれも内面が黒色を呈すもので、㉜は底部のみ・㉝は口縁部のみの残存である。台形状の高台をもつ㉜は平坦な底部がみられる。内面は一様に炭素を吸着させている。㉝はゆるく内彎する体部からやや直線的な口縁部に至り、端部を丸くおさめると同時に内面に沈線がみられる。外面は口縁部と体部の境にゆるい稜がみられる。内面の調整は横方向のヘラ磨きが観察され、その上に炭素が吸着させられている。（山崎秀二）

(5) 木製品

今回の調査では、多数の溝を検出したが、それらの溝の数例からは自然木に混じって若干の木製品も出土している。ここではそれらの木製品の中で比較的遺存の良好であった5例について考察を加えておこう。

1、櫂（W1）

現存長56.8cm、最大幅 8.9cm、現存厚 2.2cmを計る。上端、下端ともに欠損してはいるものの全体に遺存は良好で、表面の数ケ所には下から上へ向かう当り幅数cmの手斧様工具による加工の痕跡が認められる。又、両側面でも同じく下から上へ向かう断続的な削り出しの痕が明瞭である。櫂の出土例は数少ないが、琵琶湖をひかえた湖岸近くに居住する人々にとって、それは舟とともに漁労活動あるいは水上交通の上で心要不可欠な位置を占めていたであろう。G－11トレンチＳＤ－Ｇ８の黒灰色砂層内から出土したもので、古墳時代前半期の所産と解される。

2、杭（W2～W4）

W2は断面が不正確ながらも多角形を、又W3は四角形をなす。両者とも断面に木心が認められず、木目がほぼ平行に走るところから、比較的太い木の辺材部を原材としているように思われる。おそらくは、そうした原材に楔で縦に割裂した後、先端部にはさらに手斧様工具で数次にわたる削り落しが加えられたのであろう。W2では、両側面にも上から下へ向かう鋭利な削り出しの跡が明瞭である。

W4は、断面がW2同様、不正確な多角形を呈するが木心を中心としている点で大きく異なる。各面とも手斧様工具による上から下への断続的な削り出しの痕跡が確認される。W4は井戸のすぐ近くから出土しており、井側を固定するための隅柱の可能性がある。

W2、W4はG－11トレンチのＳＤ－Ｇ８から出土したもので古墳時代前期の、又W3は同じくG－11トレンチのＳＤ－７から出土したもので古墳時代前期の所産と解される。

3、琴状木製品（W5）

Ｈ－８トレンチの古墳時代前期の溝（ＳＤ－６）から出土したものである。竜尾に一部欠損がみられる以外は比較的遺存が良好である。長さ72.3cm、竜頭幅15.1cm、竜尾幅14.1cm、厚さ 1.6cmを計る。竜頭には、やや長さの異なる3本の突起が削り出されている。この突起から15cm前後竜尾に向かった箇所には、短辺に平行する細長い2孔が穿たれており、1孔には樹皮が挿入され木端を充塡して固定している。他の1孔にも木端片がわずかに遺存していた。こうした点は、県下森浜遺跡出土の2号・3号の各琴に類似する[注①]が、本例の場合2孔を1単位とする穿孔が竜頭寄りに1箇所存在するにすぎない。又、長辺の穿孔のある側に対する他の1辺では、そのほぼ中央に森浜の3号琴同様、長さ15cm余、深さ3cm程度の半月形の切り込みが確認された。その他留意すべき点とし

て、短辺の中央には年輪に沿う縦に走る割裂があり、それに対するように小さな2孔が穿たれている。樹皮等で補修して使用していたのであろうか。

さて、竜頭に削り出された3本の突起は、これらの突起間が弦の出る箇所つまり竜眼に相応すると考えた場合、2弦3節の琴が考えられる。しかし、これのみで完形品であると考えれば、先の穿孔や半月形の切り込みの存在が余り意味をなさないようにも思われる。従って、本例が完全な琴の半截品にすぎない、つまり半月形の切り込みがある長辺を対称軸とする同一個体を加えて完形品であったと仮定してみよう。その場合、突起は6本となり5弦6節の琴が想定される。その琴の中央には楕円形の切り込みが、又、両端には2孔を1単位とする穿孔がそれぞれ施されている事になる。中央に切り込まれた楕円形の穴は、現在の弦楽器等に散見される音響効果を意図した穴(サウンド・ホール)に相応するものとも考えることができよう。又、両端に穿たれた各孔は、水野正好氏が論じておられる[注②]ように、琴脚ともいうべき側板を綴じ合わせるための機能を持ったものと考えられ、両側に板脚をつけ安定と共鳴をはかった琴の存在が推定されるに至ろう。もちろん、以上の記述は仮定の上になりたつ虚像に過ぎず、その実体は類例の出土を待って結論を得たい。

なお、この木製品には表裏とも火を受けて焼けた跡が確認される。おそらく2次的なものと考えられよう。

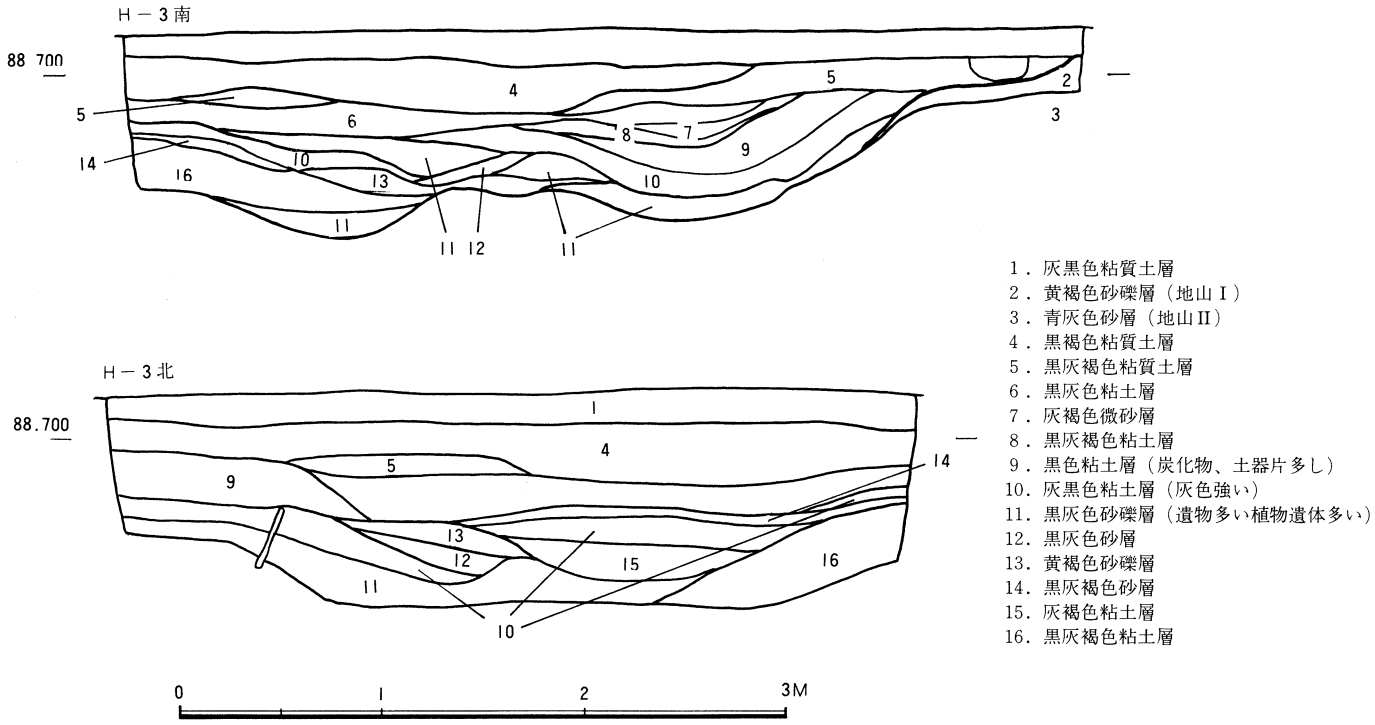
(谷口　徹)

注①兼康保明「古代の琴――森浜遺跡などの遺品をめぐって――」『月刊文化財』169号　1977

注②水野正好「埴輪に見る琴の三種の構造」『滋賀文化財だより』No.13　1978

第1表　遺物出土遺構一覧表

出土場所	遺物番号
H－8T　SX－1	13・14・15・16・26・29・33・43・47・53・55・56・57・58・50・60・石－1 石－2
H－6T　SD－D4	2・81・84
H－5T　SD－D4	12・19・20・24・25・30・31・32・34・45・46・65
H－4T　SD－D3	6・7・8・11・17・18・23・40
H－3T　SD－D3	22・27・28・35・38・39・41・42・44・48・49・50
H－8T　SK－1	61・62・63・64
G－7T　SD－G4	5・9
G－7T　包含層	4
G－7T　SD－G5	1・3
G－11T　SD－G8	W1・W2・W3・W4・21
H－8T　SD－6	W5



第5図 H－3 溝断面図

6 おわりに

国庫補助による赤野井遺跡の調査では排水路部分に限定したが、予想外の事実を把握することができた。多数の掘立柱式建物と溝跡、そして弥生時代から平安時代に属する遺物を確認し得た。遺跡がまた更に広がることと複合することがわかり、野洲川南流以南では最大級の遺跡と考えられそうである。わずかな調査地の中で琴状木製品が発見され、東海地方のS字状口縁甕が出土し、古墳時代の風習の一部や、流通の一端をみることができたと思う。ここでの報告は特に土器は弥生、古墳に限定した。今後資料の増加をまって、別の検討を試みたい。

（山崎秀二）

調査及び整理参加者

大橋信弥(県文化財保護課技師)、山崎秀二(市教委社会教育課主事)、谷口徹(県文化財保護協会調査員)、大崎義彦、三宅治、美濃部力、中西和多隆、谷口孝司、国松千夏、岩崎茂、山田謙吾、清水好洋、中原秀夫、北野悟、大崎隆志、原田良治、木村幸子、川端久栄、樋上政子その他の協力を得た。

註① 昭和53年『滋賀県文化財調査年報・昭和51年度』所収滋賀県教育委員会「赤野井遺跡」

② 昭和51年『波登里』1～6号 大橋信弥・山崎秀二他服部遺跡下流地区の調査で奈良時代前期に考えられる溝跡が検出された。

③ 昭和51年『滋賀県文化財調査報告第六冊』滋賀県教育委員会

④ 昭和50年『滋賀県文化財調査報告第五冊』滋賀県教育委員会

第４章　能登川町山路遺跡

1　はじめに

当該調査は、いわゆる遺跡とは異なり、条里制の遺構の確認、施行時期、1町当りの距離等を確認する目的で、ほ場整備に先立ち実施した。特に当該地区は神崎郡条里の8条12里に当たり、しかも小字名が一の坪から三十六坪まで完全に残された、県内唯一の地で、かつ、いわゆる水没条里として歴史地理学の分野では注目されている地域である。このため当初は、この区画の現状保存を地元と協議したが、地形的なことから困難となり今回の調査に到った。

調査は坪界に掘られたクリークの水位が高く、掘る直後から湧水で、しかも青灰色の粘土層のため困難を極めた。このため予定された日程を上まわる調査となった。

調査は県文化財保護課技師近藤滋が担当し松沢修氏の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

2　位置と環境

当該区域は神崎郡条里の8条12里に当たり東海道線能登川駅の北東約 1.5kmの能登川町山路地先にある。そして西端は乙女浜の集落に接し南端は、ほぼ大中ノ湖に面している。特に南西部の30や36坪は湖中に入いる状態である。一帯は言うまでもなく愛知川の沖積地で、周辺遺跡の立地においても特色が見られる。

周辺の遺跡としては北東約 600ｍの小川集落内に弥生時代後期の宮の前遺跡があり、同所に白鳳時代寺院跡としての小川遺跡がある。また、小川集落の北側には奈良時代から平安時代頃と思われる集落跡があり、さらに北500ｍの川南集落の南には同時期と思われる寺前遺跡がある。

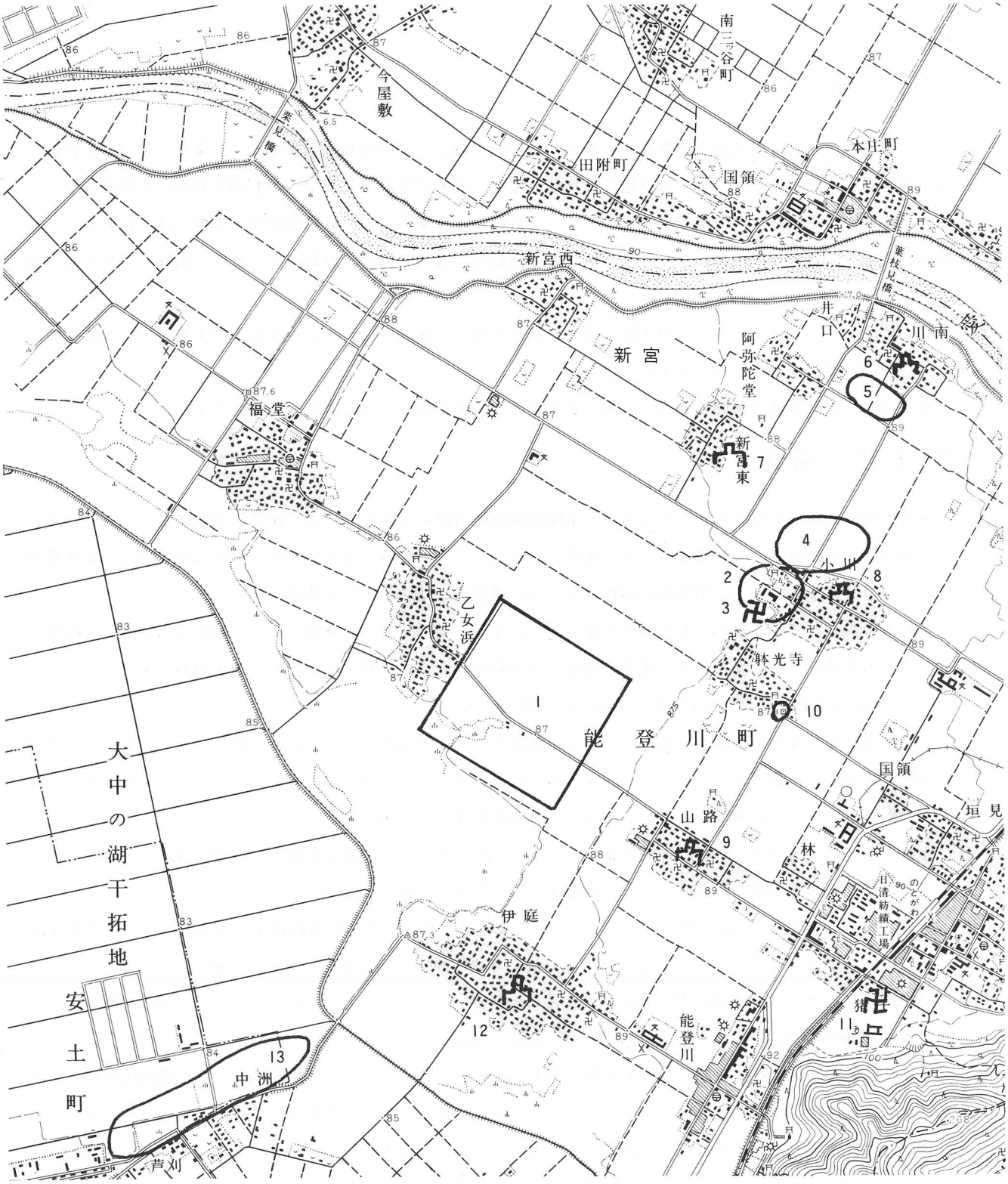
宮の前遺跡は昭和39年の調査で濠、ピット等が確認され、小川遺跡については瓦の散布があり、現在でも多量の遺物が散布している。また小字名にも西賀久堂、地蔵堂等があり、明らかに寺跡であることが判る。また庄地、寺前の両遺跡については遺物の散布があるのみで具体的な様子は不明である。

なお当該地域の南西 1.5kmには行政区画としては安土町に入いるが国指定史跡大中の湖南遺跡があり、この地より能登川、つまり山路よりには、さらに縄文式土器の散布等も報じられている。

さて、先に周辺遺跡の立地に特色がとしたが、まず先の弥生後期の宮ノ前遺跡以下、寺前遺跡までの立地は標高87.5ｍラインより上にある。そして佐々木氏の被官等の居館跡もほぼ同様のラインに重なっている。これ以外ゝ遺跡としては大中の湖南遺跡だけが低位にあるのが目立っている。そして南遺跡の調査では弥生時代中期の琵琶湖水位は海抜83.15ｍであり、住居地は83.35ｍ以上と推定された。

つまり琵琶湖は縄文時代後期から弥生時代中期まで水位が低かったが、弥生時代後期から古墳時代中頃にかけ水位が上昇し、と同時に集落も内陸部に入ったと思われる。そして奈良・平安時代には、また低下し、改めて、中世鎌倉頃に上昇したと思われるのである。この水位の上下の幅を現わしたとも思える遺跡立地の中央に、当該条里地域が含まれていることから、特に注目に価する条里遺制ではなかろうか。

（近藤　滋）



1．山路条里　2．宮の前遺跡　3．小川遺跡　4．庄地遺跡
5．寺前遺跡　6．川南城跡　7．新村城跡　8．小川城跡
9．山路城跡　10．西郡社古墳　11．猪子廃寺　12．伊庭城跡
13．大中の湖南遺跡

第1図　位置図

3　遺構について

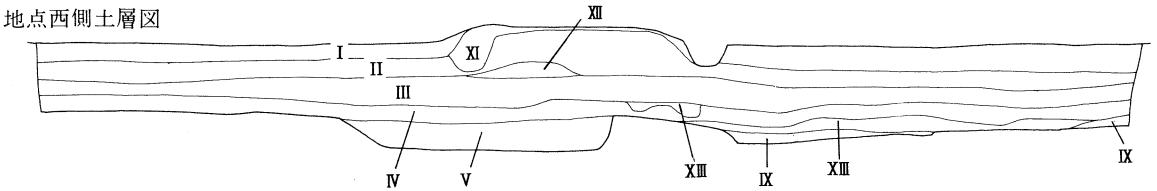
発掘地点は全体が広大な水田地帯で、条里制の遺産と考えられる地割り、水路が認められる。調査はその現況地割りがどの様な状況のもとに形づくられているかを確認する為、その畦畔部分、道路部分、あるいはそれらの推定される地点に巾約１ｍ、長さは各所で任意のトレンチを設定し、遺構の検出を行った。その結果、詳細は後述するが、各地点で現況地割り以前の遺構を検出し、各記録作業を行い終了した。以下、各地点毎に主に遺構について概述する。

Ｉ地点　条里遺制の最南部から、さらに１町南部分の道路を横断する形で設定した。水田下を掘り下げると各地点で小異はあるが、略々、耕土、床土、灰褐色土、暗灰褐色土の各層が堆積し、その下にピート系の黒褐色土があり、遺構はその面から掘り込まれて形づくられている。本地点ではこの旧地表と考えられる黒褐色土面は水田下約70cmに検出され、溝跡等が検出された。この溝跡は現在の道路と半分が重複する位置に形づくられ、上部巾240cm、下部巾約190cm、深さ約28cmの規模を各計る。内部にはその上部に堆積しているものとは別の緑灰色土混りの灰褐色土が堆積していた。又、その溝跡の北側が約60cm程高まりとなり、それ以北が除々に低くなり、別の土が堆積している点から、その高まり部分が畦畔跡、それ以北が旧水田面かと考えられた。本地点の遺構は上記の通りであるが、堆積土中の暗灰褐色上面の処々に砂溜りがあり、そこに10～11世紀の土師系土器、奈良期の須恵器、土師器の各小破片が微量採取された。

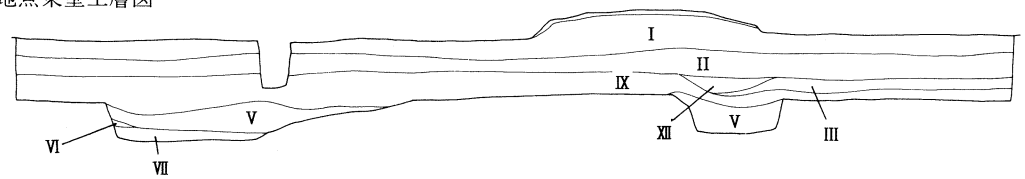
第２図　条里小字図

第３図　山路条里トレンチ配置図

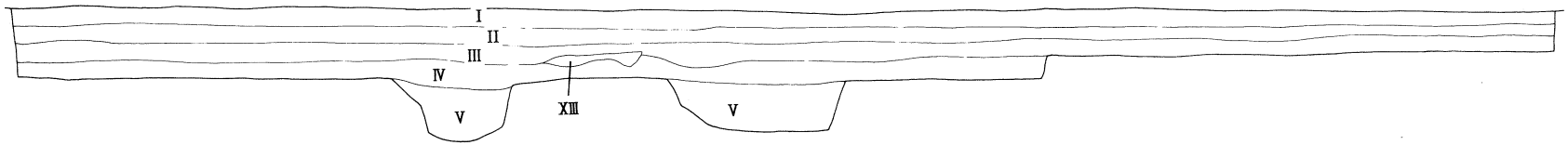
Ⅰ地点西側土層図



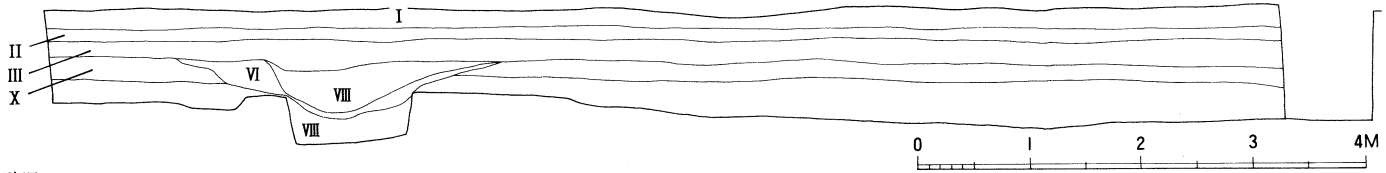
Ⅱ地点東壁土層図



Ⅲ地点東壁土層図



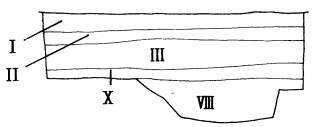
Ⅳ地点東壁土層図



凡　例

Ⅰ　灰褐色砂泥
Ⅱ　灰褐色砂泥（鉄分多く堅い）
Ⅲ　灰褐色粘質泥土
Ⅳ　暗褐色粘質泥土
Ⅴ　緑灰色砂泥
Ⅵ　青灰色泥砂
Ⅶ　緑灰色泥砂
Ⅷ　暗青灰色砂泥
Ⅸ　黒灰色粘質泥土
Ⅹ　青灰色砂泥
Ⅺ　Ⅰ・Ⅱ層混在
Ⅻ　暗灰色砂泥
ⅩⅢ　砂

同地点南壁土層図



第４図　各トレンチ土層図

II地点　条里遺制の里界で現況は道路がつけられている。トレンチはそれを南北に横断する形で設定した。トレンチ内の堆積土層はI地点と略々同一であるが、旧地表と考えられる黒褐色土層が極く薄く、その下部の緑灰色層の上面に1～2cm程度へばりつく様に認められた。その遺構面は地表下約60cmにあり、遺構は二条の溝跡とそれに挟まれた形で認められた道路跡である。それらのうち南側溝跡は上部巾80cm、下部巾70cm、深さ30cmを各計る、U字形に造られている。内部埋土は緑灰色砂泥層である。北側溝跡は北岸は略々垂直に掘りこまれているが南岸は現況では40cmの間をゆるやかな斜めに掘りこまれているが、本来は北岸と同様、垂直に近く掘りこまれていたと推定出来る。現況の上部巾は270cm、下部巾120cm、深さ36cmを各測る。又、この溝跡はトレンチ東壁部分で二段掘りとなり、現水路迄延びず終束すると見做される。これらの両溝跡間は道路跡と考えられる。発掘時には巾は約230cmであったが、北側溝跡の設定当初の巾が狭くなると考えられ、それを復元すれば約360cm巾の道跡と推定出来る。この道路跡も現況のそれから僅かにズレている。

III地点　現況では畦畔や道跡等の施設が無いが、本来は一町の地割が存在していたと推定される地点で、南北方向のトレンチを設定して調査を行った。トレンチ内堆積土は他のトレンチと略々同一で、現水田面下約70cmで二条の溝跡を検出した。遺構は黒褐色土で遺構内埋土は緑灰色土であった。溝跡のうち南側溝跡は上部巾170cmで南岸部は略々垂直に掘りこまれているが、北岸部は底部付近で約30cm程度ゆるやかな傾斜部分がつけられ、下部巾は110cm、深さは約50cmを各計る。北側溝跡は南側溝跡に比して狭く、上部巾は約120cmを測り、南側溝跡に相似て、南岸部は略々垂直に掘りこまれ、北岸は上辺部で約30cm程ゆるく下る部分がある。下部巾は約70cm、深さは中央部がやや深くなり、約50～60cmを各測る。これら二条の溝跡のうち南側溝跡はトレンチを拡張して調査した結果、現況水路に接続している事を確認した。本トレンチの顕著な遺構は上記の通りであるが、以上の溝跡に挟まれた150cmの面はその当時の道跡、もしくは畦畔跡と推定出来よう。なを、この地点でも暗褐色泥土の上面の処々に小さな砂溜まりが認められた。又、現況では畦畔等の土地割りは無いが、略々一町割りと考えられる地点に竹棒や杭等が打ちこまれ、遺構以後はそれにより土地の利用がなされていた事を付言しておく。

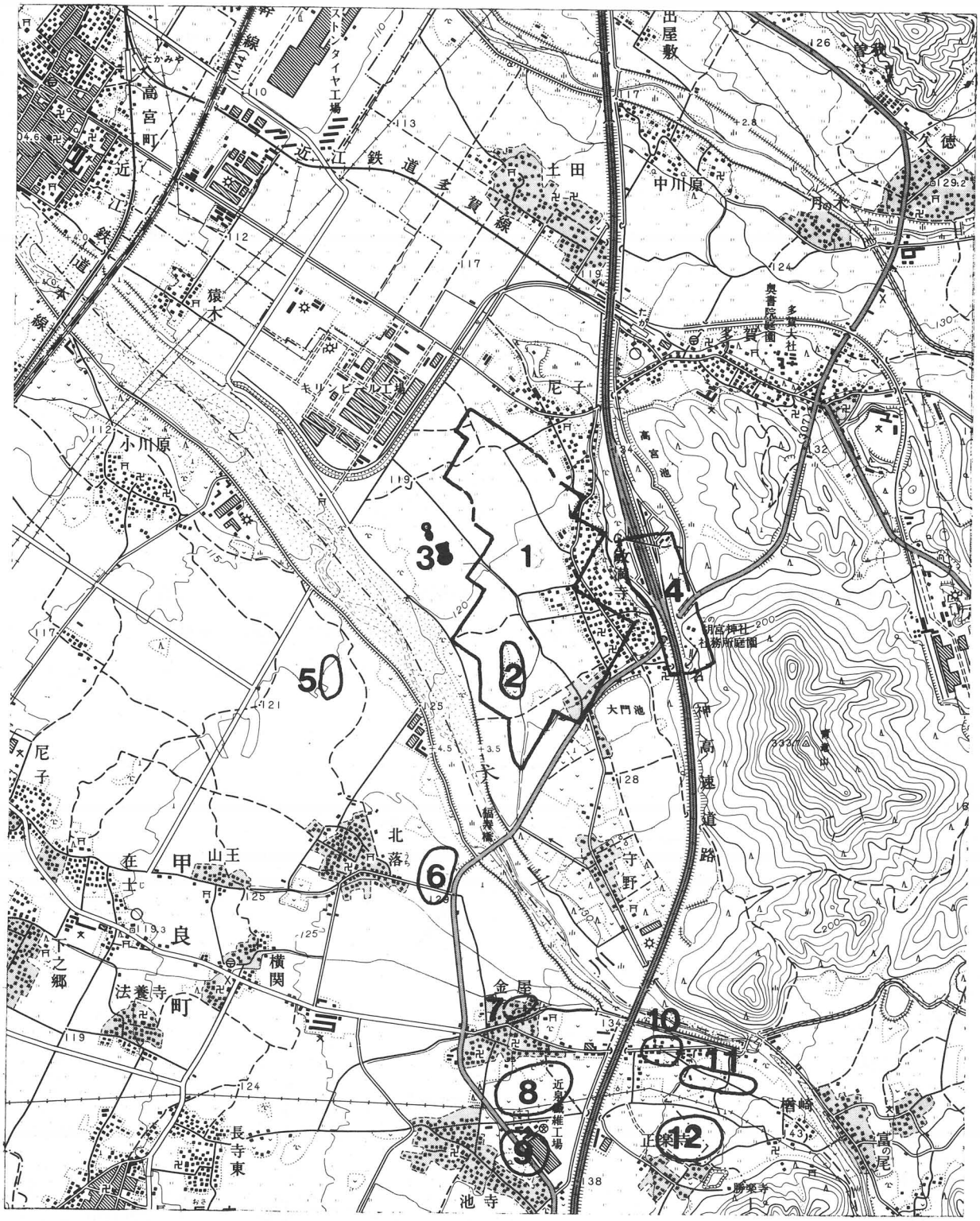
IV地点　現況では畦畔等の施設は無いが、この地点の西側の水路部分迄は道路がつけられ、本来は何らかの施設が存在した事が推定された地点で、南北方向のトレンチを設定し調査した。遺構は溝跡等で、遺構面は現水田下約80cmにあり、黒褐色土面がそれにあたる。溝跡のうち、一条は東西方向に設けられており、他の一条は南北方向に設けられている。東西溝跡は上部巾120cm、下部巾100cm、深さは約40cmを各測る略々垂直に掘りこまれている。この溝跡はトレンチ西側の現水路迄延びず、トレンチ中央部で終束する。南北方向の溝跡は東西溝の南岸から130cmの地点より掘りこまれるが、掘りこみ部は顕著でなく、南側に向けて除々に深くなり、トレンチ最南部では深さ30～40cmとなる。同部分での所見では東岸は斜めに、西岸は略々垂直に掘りこまれている。上部巾は130cm、下部巾は80cm、深さは30～40cmを各測る。又、この他に現況水路に平行して、先の南北溝跡の西側70cmに溝様のオチコミがあり、現水路の古形かと考えられる。この間の70cmは旧畦畔とも考えられる。又、東西溝跡と南北溝跡との間や、東西溝跡の北側の僅かな高まり、その北側の低み等も同様の遺構と推定される。

まとめ　調査では上述の他に、二本のトレンチを設けたが、湧水等の条件により調査を完遂出来なかった。以下、上述の点を簡単にまとめてみよう。

先づ、現在（調査時の）土地割り下には相対的に古い土地割＝溝跡や道路、畦畔跡等が認められ、僅かに規模は移動しながらも、現在の土地割りが古い地割りを相承している。古い地割りでは現在のそれに認められない道路わきの溝等が付設されている。それらの遺構面＝黒褐色土には葦状の植物の根等が残存している部分があり、その当時も現在の景観と略々同じ様相を示していたと推定出来る。又、遺構面は南から北に向けて徐々に低くなる。この点も現在と同様であった。これらの遺構を直接示す遺物は得られず、年代は推定出来なかった。以上である。

（松沢　修）

第５章　多賀町水沼荘遺跡



1．推定水沼荘域　2．高畑地区　3．大塚古墳　4．敏満寺跡
5．塚原古墳群　6．北落古墳群　7．金屋北古墳群　8．金屋南古墳群
9．外輪古墳群　10．金屋遺跡(縄文)　11．楢崎古墳群　12．正楽寺古墳群

第1図　遺跡位置図

1　はじめに

当該遺跡の発掘調査は前年の昭和51年度に引き続き、多賀町敏満寺土地改良区による団体営ほ場整備に先立ち実施したものである。

調査は県文化財保護課技師近藤滋が担当し、直接現場指揮は主任調査員の松沢修氏に依頼した。また調査に際しては山口利彦(滋賀大)、上田完二(竜谷大)両氏の参加、協力を得るとともに、土地改良区および地元区の多くの方々の協力を得た。ここ記して謝意を表したい。

なお最後に２ヶ年の調査により明らかにされた遺構について、幸いにも、その歴史的意義、重要性を理解頂き、現況保存を心良く、お引き受け頂いた地元住民の方々に、末筆ながら、ここに記して謝意を表したい。そして近い将来、当該地区が遺跡公園として整備され、地域住民の憩の場、あるいは学習の場として広く活用されることを望むものである。

（近藤　滋）

2　遺　　構

本年度の調査は、昨年度の調査により検出した遺構群の広がり、性格を追求する目的で、８月10日より開始し、一応の成果を得て12月14日に終了した。又、後述する遺構の他に周辺の遺構の有無を確認するため、表採作業を行った結果、キリンビール工場地の東側の田に於いて８世紀～10世紀にかけての稠密な遺物の散布を確認し、水沼荘絵図に関連する遺構が存在する事が想定せられた。

１．北側部分の調査　微高地の中央部を西流する溝の北側部分に於いて各所にトレンチを設け、遺構の検出を行ったが、遺構は検出されなかった。本部分は溝のすぐ北側から北西に向けて砂礫層が堆積し、安定した土地ではなく、当時は河川、もしくはその氾濫地帯であったと考えられる。なお、この溝は後述する如く建物跡を切っており、相対的に新らしいものである。

２．南側部分の調査　溝の南側部分は耕土下20～30cmで褐色粘質砂泥層が検出され、当時から安定した土地であり、溝跡、掘立柱跡、土坑跡等が検出された。以下、各遺構について概略する。

ＳＢ01　２×３間の南北棟の総柱建物跡。柱間は各間 2.1ｍを計る。柱自体は細く、15～20cm。南西隅で一回の建て替えがある。その構造から観察して倉庫と考えている。

第２図　トレンチ配置図

昭和51年度調査域

昭和52年度調査域

0 10 20m

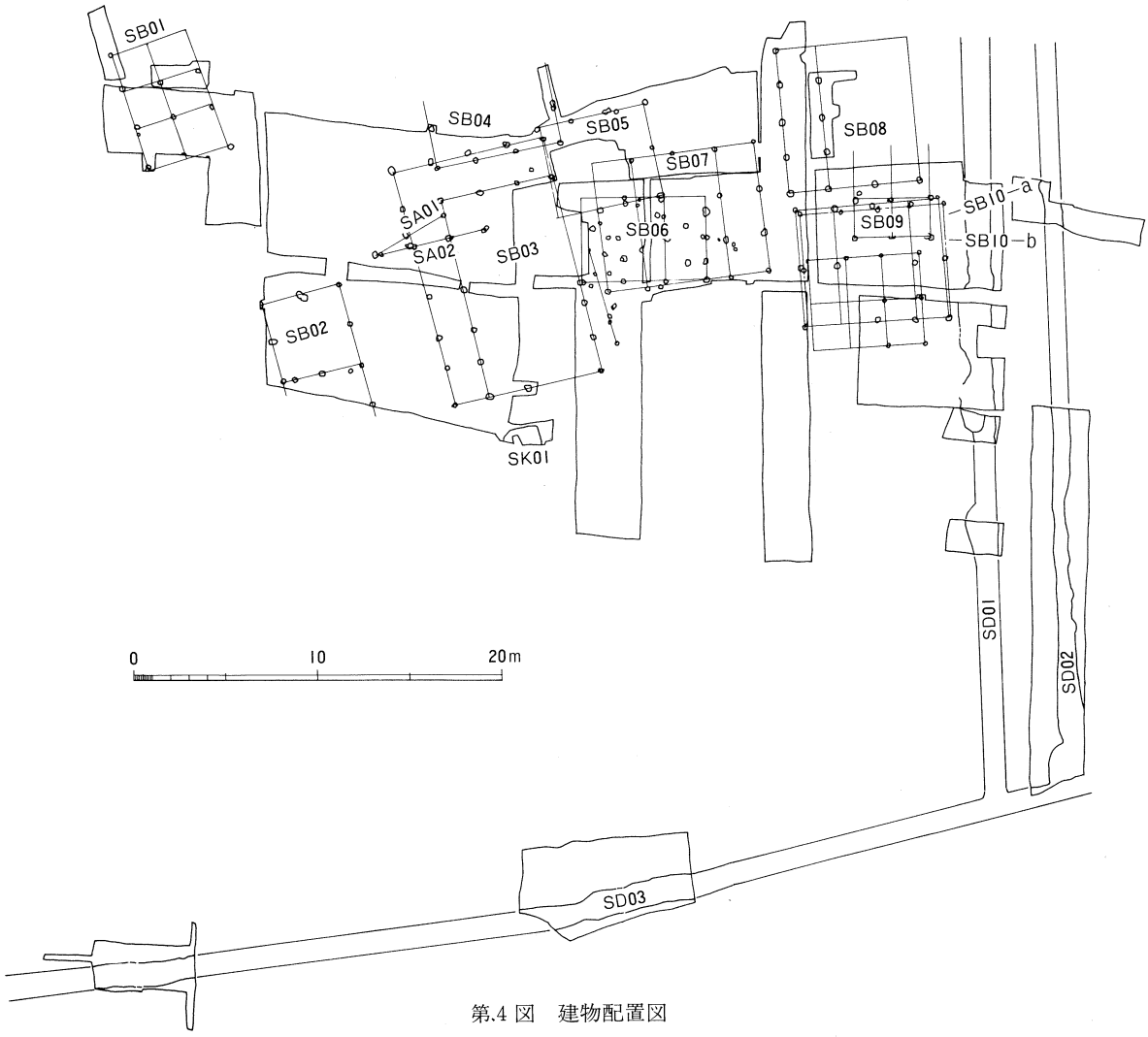
第3図　遺構図

ＳＢ02　４×６間の南北棟。西側と北側に廂がつき、東側は検出していないが廂のつく可能性もあり、二面乃至三面廂の当建物跡中で最大の規模の建物である。西側の北から二間目の間隔が広く、その部分に重複する柵ＳＡ01は方向が一致する点からあるいはこの建物の付属施設とも考えられ、この部分が出入り口とも考えられる。各間の寸法も微妙に異なり、各辺の交錯も直角性が失なわれている。

ＳＢ03　本調査では東西辺二間、南北辺三間を検出。南北辺は更らに南に伸びるものと考えられるが、東西辺は二間で完結すると観察した。南北辺二間～三間目に間仕切りを造っている。建て替えが一部の柱に認められる。以上三棟は方位が一致する。

ＳＢ04　東西三間、南北辺は二間分を検出したが、以北は現在当微高地の中央を西流する溝により削除されており、不明である。柱間は各2.1ｍで、南辺の西隅部のみ2.4ｍを計る。

ＳＢ05　東西三間、南北二間の東西棟建物跡。東西の柱間が1.9ｍ、南北の柱間が2.4ｍを計る。但しこの建物



第.4 図　建物配置図

跡の東西各辺の間隔が異なり、又、南辺の柱列が或いはＳＢ06の建て替えの柱とも考えられる点等に、このような建物跡として、不確定な要素も強く、或いは北方に延びる建物跡となる可能性もある。

ＳＢ06　東西三間、南北二間の東西棟建物跡。但し、北辺の両隅は削平により、ならびに西辺は未調査により検出していない。東側一間目に間仕切りを造っている。この建物跡、及び、ＳＢ09は南北溝ＳＤ01、ＳＤ02と方位が一致する。

ＳＢ07　東西四間、南北三間の東西棟建物跡。東西の柱間が2.2ｍ、南北は中央間が広く、2.4ｍを各計る。東西辺に各間仕切りを造る。又、南辺の二間目と三間目を区切る柱が検出されず、或いは出入り口状の施設のために広く造られていた可能性がある。

ＳＢ08　東西三間、南北四間の東西棟建物跡。西辺に廂が付く、東西の柱間は西から、2.1、2.4、2.4ｍ。南北は北から、1.8、2.1、2.1、1.8ｍを各計る。掘り方は当建物跡群中でも大きいが、柱は他の建物跡同様に、15～20cmの間のものを使っている。

ＳＢ09　東西四間、南北二間の東西棟建物跡。東辺と西辺に間仕切りを造る。この建物跡の北辺と西辺に建て替えが認められ、新旧で位置や各柱間の寸法に違いがある。旧建物跡は東西の柱間寸法が2.1、2.1、2.1、1.8ｍであるのに対し、新建物跡は各間とも1.8ｍとなり、南辺は不動であるが新建物跡は北辺を東に移動させている。南北の柱間は3.1ｍを計る。この建て方は後述のＳＢ11に類似し、その点から考えてこれは倉庫として造られている可能性が強い。

ＳＢ10　東西二間、南北は二間分を検出している。より北側の部分は不明であるが、総柱の建物跡で、倉庫として建てられたものであろう。柱間は各 2.1ｍを計り、大部分の柱に建て替えが認められる。

ＳＢ11　東西三間、南北二間の東西棟、総柱建物跡。東西の柱間２ｍ、南北 2.5ｍを各計る。倉庫と考えられる。掘り方は他の建物跡のそれに比して小型であるが、柱は15ｍ程度のものを用い、他に比して孫色ない。

その他　溝跡ＳＤ02の東側でも掘立柱跡を検出し、微高地の北縁にも建物跡が存在する事が知れるが、耕地の関係上それ以上を明らかにし得なかった。

ＳＡ01　ＳＢ03の西辺に取りついて存在する。二間分を検出、他の建物跡と方向も異なり、用途は明らかでない。

ＳＡ02　ＳＢ03の西辺に取りつく。三間分を検出。同建物跡と方位を一致させて造られており、同建物跡の施設の一部と考えられる。

ＳＡ03　ＳＢ03の東辺に並行して設けられており、垣根様の役割かとも考えられる。

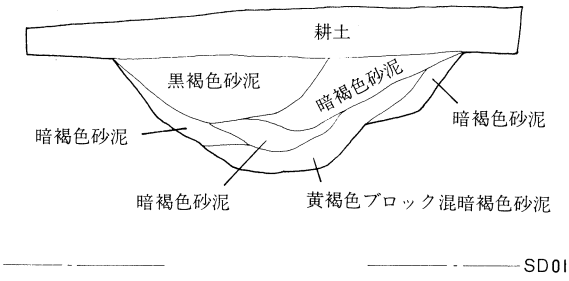
ＳＤ01　全体を検出していないが、建物跡群の東辺を南北に貫流するＵ字形の溝跡。幅員は各部分で異なるが、基本的には1～1.2ｍを計る。微高地の中央部が最も浅く、0.2ｍでそこから両端に向けて深く造られており、発掘区北端部では0.9ｍを計る。又、微高地南縁部ではＳＤ03と合流し、西流するものと考えられる。又、この溝跡には調査部分で三ケ所、土坑と複合するが、土層観察からは両者の時間差は考えられない。

ＳＤ02　ＳＤ01の東側３ｍの地点をそれと平行して南北に設けられている。断面はややＶ字形に近く、幅員はＳＤ01に比してやや狭く90cm前後、ＳＤ01と同様に微高地の中央部で最も浅く0.2 cmを計り、そこから南北に向けて深く掘穿されている。発掘区の北端では1.2ｍ、南端では1.8ｍを各計る。又、南端部では西側に折れており、それはそのままＳＤ03として西流するものと観察された。

ＳＤ03　微高地の南縁を西流する溝跡。浅いＵ字形に造られており、幅員は1.2～1.4ｍで、深さは40～60cmを各計る。この溝跡は上記の溝跡が建物跡に規制された方向を持つのに対し、むしろ、自然の地形―微高地の南縁

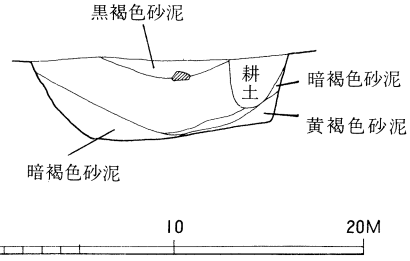
を貫流―に沿った形で造られている。

ＳＫ01　ＳＢ03の南辺に平行して掘られている。東西２ｍ、深さは30～35cm。内部には灰、焼土混の黒褐色砂泥が堆積し、多量の土師器と少量の無釉の陶器を検出した。ＳＢ03の付属の施設と考えられる。



3　遺　　物

二次の調査で出土した遺物は数少なく、又、内容も陶磁器と土師器に限られている。第二次の調査では土坑跡（ＳＫ01）よりの出土のものが大半で、他の調査部分からは微量の陶磁器（近、現代のものを含めて）と土師器が出土したに留まった。以下、土坑跡（ＳＫ01）内の遺物について概述する。

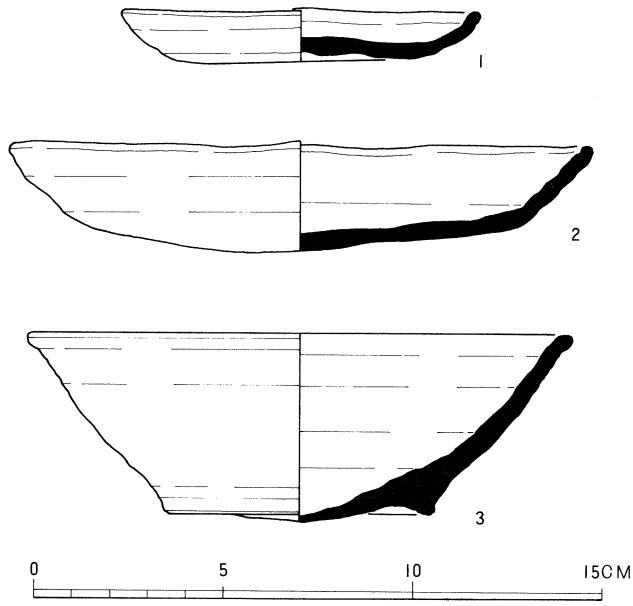


第５図　溝跡内土層堆積図

土師器（第６図１、２）

１、小型の皿で径9.5cm、高1.4cmを各計る。外面底部は指によるオサエ、他の部分は回転を利用したヨコナデにより調整して仕上げている。灯明皿であろう。

２、大型の皿で、径15.4cm、高2.9cmを各計る。器形は底部の中央部がややふくらむが略々平担につくり、口縁端部を内側に折り曲げて丸く収めている。外面底部は指によるオサエとナデ、内面底部は任意方向のナデで調整し、他の部分は回転を利用したヨコナデにより調整し、仕上げている。



第６図　土坑跡（ＳＫ01）内出土遺物実測図

陶器（第６図３）

高台坏。無釉の所謂山茶埦である。高台は低く、その断面は三角形を呈する。体部は略々直線的に外傾し、口縁端部は僅かに外反し、丸く収める。外面底部には糸切り痕が残る。他の部分は全てヨコナデ調整により仕上げている。その高台部には籾の痕跡がつき、又、内面底部、高台には使用によるものと考えられる摩滅が観察される。

土坑跡、ＳＫ01内より他に、灰釉陶器片も得られたが大半は１、２の如き土師器であった。又、それらが４、５枚重なって出土している点、あるいは埋土内に焼土粒、灰等を含む点などからそれらは一時的に同遺構内に廃棄されたものと考えられる。それらの年代は無釉陶器３の諸特徴から考えて13世紀に入るものと考えられる。

4　まとめ

二次の調査により検出した遺構は上述のとおり、掘立柱建物跡と溝跡等である。これらの遺構にはある程度のまとまりがある。これらの点を主に概述してまとめとしよう。

掘立柱建物跡は重複関係や方位により略々三棟が一時期的なまとまりと考えられる。その典型的な例は掘立柱建物跡群の西方に位置するＳＢ01～ＳＢ03の三棟の建物跡である。三面乃至二面に廂を有する主屋的な建物跡ＳＢ03、間仕切りを有する副屋的なＳＢ02、そして倉庫と考えられるＳＢ01の三棟である。これを基本にして東側建物跡群を観察すると同様の構成を持って建物が造られていた事が判る。先づ、これらのうち、ＳＢ06とＳＢ09は他の建物跡と方位が異なっており、明らかにその二棟が一時期の組み合わせである。但し、それは一棟づつの家屋と倉庫の組み合わせであり、先の例の如きもう一棟の家屋が欠除している。残る六棟の建物跡のうち、ＳＢ04とＳＢ05、ＳＢ10とＳＢ11とがそれぞれ重複して建てられ、明らかに二時期に分類できる。これらの六棟のうち、規模等から観察して、主屋と考えられるのはＳＢ07とＳＢ08であり、それぞれにＳＢ04とＳＢ05が付属すると観察される。残るＳＢ10、ＳＢ11は倉庫跡であり、いずれかの時期に付属したものであろうが、現時点では判断し得なかった。

	主　屋	副　屋	倉　庫	付　属　施　設
Ⅰ　期	ＳＢ06		ＳＢ09	ＳＤ01・ＳＤ02
Ⅱ　期	ＳＢ07	ＳＢ04	ＳＢ10a－b	ＳＤ01
Ⅲ　期	ＳＢ08	ＳＢ05	ＳＢ11	ＳＤ01
Ⅳ　期	ＳＢ03	ＳＢ02	ＳＢ01	ＳＡ02 ＳＤ01・ＳＡ03・ＳＫ01

各期遺構対照表

以上を綜合すると、該建物跡群は四期に分類出来る。これらの各期の先後関係は具体的に明らかではないが、ＳＢ06の掘立柱跡かＳＢ05のそれによって切られているが、ＳＢ06の方位の溝跡（ＳＤ01、ＳＤ02）と一致する点、あるいはその期の建物が二棟のみという点などから、これを当初のものと考えている。この時期は判然としないが、出土遺物から観察すれば、11世紀後半といえよう。それに続いて、ＳＢ07、ＳＢ08等の東側建物跡が造られ、更らに大きく西側に移動してＳＢ03期の建物跡が造られ、そこでこの地での生活は終了したものと考えられる。その時期はＳＢ03に付属すると考えられる土坑跡（ＳＫ01）出土の陶器から考えて、13世紀であろう。

これらの遺構は、その配置等から考えて、大規模な集団によるものではなく、ある一定の一族による何世代かにわたる生活を跡づけているものといえよう。

（松沢　修）

第６章　高月町京田塚・大将軍塚遺跡

1　はじめに

本報告書は、ほ場整備工事に伴う京田塚・大将軍塚両遺跡の発掘調査記録である。両遺跡は、古来より塚として伝承され、長い間耕作されずに残された部分であるが、周辺の田面よりわずかな高まりを示すのみで、以前に遺物が出土したという伝えもなく、昭和40年度刊行の『滋賀県遺跡目録[1]』においても、古墳か？とされていて、その性格の明確でなかったものである。しかし、ほ場整備工事に際して、事前に発掘調査を実施し、その性格について追求しておく必要があり、今回、国庫補助金を得て発掘調査を実施した。

この調査には、滋賀県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘が指導にあたり、調査補助員として宮崎雅美（京都産業大学考古学クラブ）の参加を得た。また、地元西阿閉区の方々には、調査に際して御援助していただいた。ここに記して謝意を表します。

2　位置と環境（第1図）

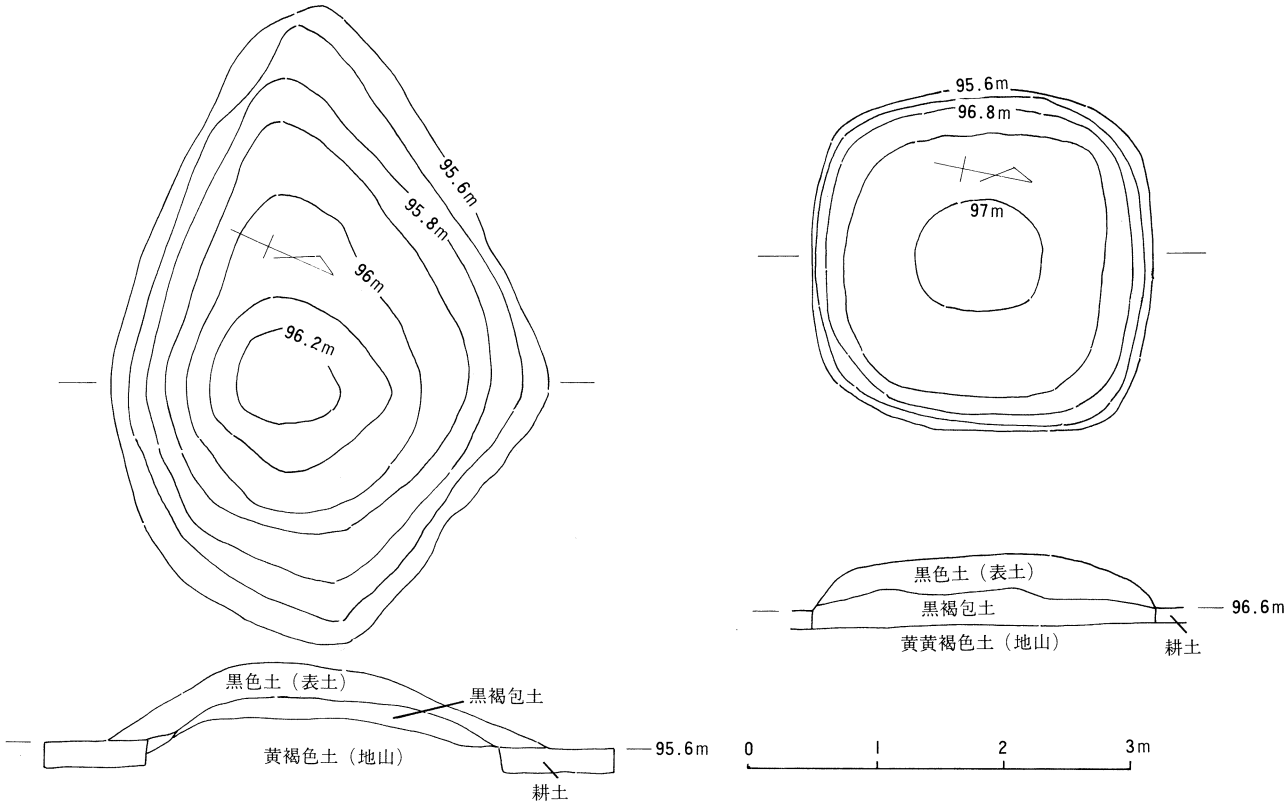
両遺跡は、行政上、伊香郡高月町大字西阿閉小字京田（きょうでん）及び大将軍（だいじょうご）に属し、西阿閉集落北方の水田中にある。塚として伝承されていたために、長い間耕作されず、水田中にあっても今日まで残されてきたものである。遺跡の西方 300m程のところには余呉川が南流しており、この余呉川によって、遺跡周辺は非常に段差の大きい水田地帯となっており、一種の河岸段丘を形成している。両遺跡はこの段丘上に丘置している。湖北平野には良く条里制地割が遺存しているが、この両遺跡周辺では全くそのおもかげを見ることができない。しかし、西阿閉から横山にかけての平地、遺跡北方の独立丘陵である涌出山、西方にあって琵琶湖との間を界している地累状の山丘には、前方後円墳を含む5・6世紀を中心とする多数の古墳があり、また、涌出山の西端や、その南側の地累状山丘から南東方向に突出した支脈などには、横穴式石室をもったいわゆる期古墳後群が分布している。さらに、西阿閉集落の北側及び南側、涌出山の南側唐川地先、地累状山丘支脈の南側松尾地先等には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が存在する等、条里施行以前の歴史的環境には良くめぐまれている。

3　調査の結果

I　京田塚遺跡

一辺2.7mの方形に近いプランで、現在の水田面より40cmの高さを持っている。横断面は逆皿底状で、上下2層の堆積土が認められた。上層は新しい堆積土で、厚さ約25cm、下層は黒茶褐色土で硬くしまっている。厚さ約25cmある。地山面は水平で、この下層もほぼ均一の厚味を持ち、その高さは現在の水田面と一致する。現在の耕作土がこの下層を切り込んだ状態にある。下層中に遺物の包含は全く認められず、また、地山面での造作も検出することができなかった。

第１図　遺跡位置図（１．京田塚遺跡、２．大将軍塚遺跡）



第２図　大将軍塚(左)、京田塚(右)遺跡墳丘及び断面土層実測図

長さ５m、幅33 mの不正形なダ円形プランを持ち、高さ60 cmある。地山面は両端を耕作により切られているが、高さ50 cm、上底1.2 cm、下底2.8 cm程の台形状を呈し、その上方に２層の堆積土が認められた。上層の厚さ25 cmは新しい堆積であるが、下層は黒茶褐色の硬質の堆積土で、本来のものと思われる。この下層も両端が耕作により切られていた。台形状の地山の上底レベルが現在の水田面にほぼ等しく、従って、下層は、現在の水田面より盛り上がった状況となっている。下層への包含遺物、地山面でのピット等の造作は全く認められなかった。なお、耕土中より奈良時代の須恵器椀、長頸壺等が小量であるが出土している。

4　結　　語

今回の調査では、両遺跡が奈良時代以降の墳墓であったのか、それ以前のいわゆる古墳であったのか、また、単に伝承地として今日まで耕作されずに残されてきたものか、あるいは塚以外の何等かの性格を以っていて、後世に塚とされるようになったものか、いずれについても明確な答を得ることはできなかった。調査の結果で見る限り、後世の堆積土、いわゆる表土下は、上面に起伏を持った単一層であり、その基底は現在の耕作土の床面と同じである。従って、両遺跡は周辺の水田化の段階で開墾から取り残された部分となっている。また、現耕土面からのわずかな高まりの部分は大半が表土であり、盛土の痕跡すら残していないのである。両遺跡は、本来、その規模はより大きく、開墾によって倭小化したとのことであり、より広大な部分が、水田中に不自然な状態で取り残されていたことになる。この取り残されてきた理由が問題になるわけだが、「塚」の持つ意味を『字源』[2]で

ひろってみると、1、墓の広大なるもの、2、大いなり、3、はれる、4、丘、山のいただき、5、祠、6、もりつち（封土）等がある。1は墳墓、古墳等がそうであり、同時にこれらは6の意味も包含している。2と3は1や4、6等から派生する意味であろうし、4はこの場合除外できる。5も伝承にすら存在しないものであるから、やはり除外しておく。従って、「塚」は古墳や墳墓を意味し、墓以外のものであっても、これらと同様の形状を持つものを指している。両遺跡の塚の伝承を重視するなら、本来、古墳や墳墓のように高まりがあったことになる。そこで、高月町内に限ってであるが、塚の伝承地をひろい上げてみよう。塚の伝承地には二通りあって、一つは小字名として残るものであり、他は、両遺跡のように、伝承として塚とされてきた部分である。まず、小字名に塚あるいは墓を含むものをあげてみると次の通りである。

平塚（1）、南塚町（1）、長塚（2）、千塚（1）、南狐塚（1）、下大塚（1）、上道塚（1）、下道塚（1）、塚町（1）、狐塚（4）、塚越（2）、生塚（2）、墓之町（4）、通塚町（1）、塚田（1）、墓（1）、イチヅカ（1）、朱墓（1）、墓ノ坪（1）

以上28カ所ある。このうち、字内に塚の痕跡を認め得るものは、2カ所の塚越、同じく2カ所の生塚で計4字だけである。塚越2カ所には各々瓢箪塚古墳、饅頭塚古墳、父塚古墳と3基の古墳があり、生塚2カ所には生塚古墳、大将軍古墳の2基の古墳が認められる。このうち、饅頭塚古墳のみが玉類、刀等を出土した横穴式石室をを持つ古墳であることの知れるものである。他については、明瞭でないが、大規模な盛土が残り、塚として伝承されてきたところから、古墳と見てさしつかえのないものとされている。その他の塚の字を含む小字個所については、現在水田と化し、何等の痕跡も表面に残していない。

次に、小字名としてではなく、現実に地表に何等かの痕跡を残しており、それが塚として伝承されているものについて見ると、以下の例が知られている。

瓢塚、姫塚、くるみ塚、みち塚、五位塚、耳塚、刀塚、首塚、京田塚、大将軍塚、これらの他に、上記に小字名内に痕跡を持つものとしてあげた瓢箪塚、饅頭塚、父塚、生塚、大将軍塚も同例である。従って、計15カ所が現在に痕跡を残し、塚として伝承されてきたものの例としてあげることができる。これらのうち、姫塚は南面する前方後円墳で、くるみ塚、みち塚はその南側に近接して位置し、培塚的存在となっていて、小グループを形成する古墳群である。饅頭塚も前述の通り、現在は痕跡程度にしか残っていないが横穴式石室を持つ古墳である。耳塚、刀塚、首塚は名々近接して存在し、やはり小グループを形成するものであるが、これらも京田塚、大将軍塚両遺跡同様に、塚として伝承されていて、耕作されずに残され、地表面にわずかの高まりを残していたものである。このうち耳塚について、ほ場整備工事に伴う事前調査で発掘を行なった。その結果、地表に出ているわずかな高まりは、やはり、後世の堆積土であって、径 3.8m程の規模でしかなかったが、以下において、径 7.5m、高さ 0.5m程の盛土を確認することができた。この盛土部は耕作土及びその下層の平安時代遺物包含層によって完全に被覆されており、平安時代以前の墓跡、それも古墳であった可能性の非常に強いものであることが明らかとなった。耳塚、刀塚、首塚は少なくとも3基から構成される古墳群である可能性が強い。その他の例については、明確ではないが、いずれも大きなマウドを持ち、古墳とし得るものである。

以上のように、小字名として残る場合、そこに元来塚が存在したかどうかは、現状では明らかでないが、塚として伝承され、何等かの痕跡を残すものについては、それらいずれも古墳である。このように見てくると、京田塚、大将軍塚両遺跡も、元来古墳であった可能性が強い。上記の耳塚は両遺跡と非常に近似した有り方を示すが、耳塚の場合、平安時代の遺物包含層により切られ、明らかにそれ以前に盛土されたものであった。同様のことが大将軍塚遺跡においても見られたのであり、共通した現象として注意される。ただ、年代的にどこまでさか

のぼるか。耳塚についてはすでに古墳としたが、「奈良時代の墳墓の一般に通じて、その主たる特色は主体が地表下に在るということは出来る[3]」とされ、耳塚、大将軍塚、京田塚ともに、基底面での造作は見られず、奈良時代墳墓である可能性は少ないのである。周辺には、西方の地累状山丘、北方の独立丘となっている涌出山等の丘陵尾根上には、前方後円墳を含む首長系列の古墳が130基以上存在し、平地においても、横山から東阿閉にかけて、兵主神社、瓢塚、姫塚、父塚等大型の前方後円墳や円墳が立地し、やはり、首長系列のものと考え得るものが分布している。これらは5世紀から6世紀にかけてのもので、当地が日本海地方へ通ずる交通の要衝に当るところから、早くから在地土豪の勢力圏に入り、後、大和朝廷の日本海地方への進出に伴い、物部氏系の有力な根拠地になったところと考えられるのである[4]。こうした歴史的環境の中で、京田塚・大将軍塚両遺跡が古墳であったとしても、何等不自然ではない。

5 おわりに

高月町内に限らず、全国的にも塚の伝承地は非常に多い。それらがいずれも古墳であるとは限らないが、発掘調査によってもその性格を明確にし得ない場合、あらゆる状況証拠を集め、それによって性格を推察する方法を取らねばならない。そうでなければ、多くの性格が明らかでない　痕跡程度の遺存状況しか示さない京田塚・大将軍塚両遺跡のような多くの伝承地は、何時か、その伝承地として存在していたことすら忘れ去られて消滅していくことであろう。両遺跡の場合、古墳ではなかったかと考えたが、それが正解であるなら、当地の古墳時代史に新たな資料を追加し得たことになろう。

（田中勝弘）

注

①滋賀県教育委員会編『滋賀県遺跡目録』(昭和41年)

②簡野道明『増補字源』(昭和33年)

③後藤守一、森貞成「奈良時代の墳墓」(『仏教考古学講座』第1巻、昭和46年)

④田中勝弘「伊香郡高月町古保利古墳群調査報告」(『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』、昭和50年)

第７章　高月町井口遺跡

1 はじめに

本報告書は、ほ場整備事業に伴う井口遺跡の試掘調査の結果である。井口遺跡は、南北 1.5km、東西１kmに及ぶ範囲に遺物の散布していることが知られている遺跡である。昭和51年度には、やはりほ場整備事に伴い、遺跡の南半分について、試掘及び発掘調査を実施した[①]。その結果、東西約400m幅で、南北約 500mの範囲で遺構を検出することができ、南北範囲については、さらに北方へのびることが予想された。今年度に入って、前年度の継続事業としてその北半分東西約１km、南北約 500mの範囲でほ場整備事業が計画されることになった。従って、前年度の試掘及び発掘調査の結果に基き、再度、ほ場整備工事による遺跡への影響の有無を確認する必要が生じた。試掘調査は、ほ場整備工事により、田面切り下げが予定されている部分、及び、排水路計画部分を中心に、２m×５mのトレンチを基本とするトレンチ調査により遺構の有無、ほ場整備工事による遺構への影響の有無等を確認することにした。

なお、調査対象範囲が約 250.000㎡の広大な地域に及ぶため、便宜上、田面の地割りに応じてA～Xの24地区に分け、各地区内で田面の切り下げ計画部分及び排水路計画部分のある個所を中心に試掘壙を設定した。従って、当初より、ほ場整備工事により田面下方への影響のない部分、地区については試掘壙を設定していないので、以下の記述においても、そうした個所、地区については報告を省略している。

本調査には、滋賀県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘が指導にあたり、また、調査員、補助員として下記の人々の参加を得ることができた。

調査員　林　　純（奈良大学学生）

補助員　阪口勝彦、川上真成、藤村善嗣、上羽基之、宮崎雅美、山岡一郎、吉元達成、小牧正明、斉藤和弘、丸岡一成、赤坂博之、北川禎之、橋田祐子、尾崎章子、田中聡一、石本好典、岡井誠、加藤栄司、野口千栄美、藤田早苗、芳村高史、飯野清士、（以上京都産業大学考古学クラブ）

また、調査にあたっては、高月町教育委員会、地元井口区の方々に御協力していただいた、ここに記して謝意を表します。

2　位置と環境（第１図）

井口遺跡は、行政上伊香郡高月町井口にあって、現在の井口集落の西側の水田地帯に存在する。遺跡の東側に沿って、国道 365号線（北国脇往還道）が走り、日本海側地方と関が原、さらには東海地方とを結ぶ交通上の要所を占める。付近には、北東 500m程のところに、古墳時代から平安時代にかけての保延寺大海道遺跡、南方300m程のところに、奈良・平安時代を中心とする柏原遺跡、渡岸寺遺跡、高月遺跡等があり、北国脇往還道に沿う約３kmの間に、ほぼ同時代幅の遺跡が密接して存在する。その中で、井口遺跡は南北 1.5km、東西 400mに及ぶ最大規模を有し、当時の都会的集落の繁栄がしのばれる。

第1図　井口遺跡位置図　　(スクリーントーンは調査対象範囲)

3　調査の経過（第2図）

今年度の調査対象地域は、井口遺跡の北側約2分の1であるが、およそ25万㎡に及ぶ広大な地域であるため、便宜上、田面の地割りに応じてA～Xの24地区に区分し、ほ場整備工事によって田面の切り下げや排水路によって深掘が予定されている個所を中心に、2m×5mのトレンチを基本にして遺構、遺物包含層等の有無を確認し、工事による遺跡への影響の度合を見ることにした。

4　調査の結果（第3図）

イ、A地区（小字西寺前）

17カ所にトレンチを設定したが、耕土下に黄褐色あるいは灰褐色の粘質土の厚い堆積が見られ、遺構、遺物包含層等は検出できなかった。ただ、耕土中に混入して、須恵器、土師器の小片が出土している。

ロ、B地区（小字上近道）

設定した25カ所のトレンチのいずれも、耕土下に黄褐色の細礫を含んだ粘質土で、耕土中より、須恵器、土師器等が出土したのにとどまった。

ハ、C地区（小字上イザリノ木）

設定した11カ所のトレンチでの所見はB地区と同様であるが、ただ、混入する礫がやや大きくなり、耕土中からの遺物もほとんど出土しなかった。

ニ、G地区（小字薮内）

ほ場整備工事によって田面切り下げが予定されている3枚の田圃にトレンチを設定した。ここでは、耕土下に黄褐色土を認めることができたが、耕土中より須恵器、土師器の細片が出土したのみで、遺構等は検出できなかった。

ホ、H地区（小字薮内、近瀬町、堂ノクボ、願田辺、高田）

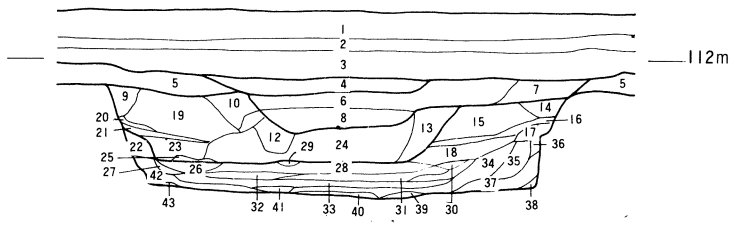
小字薮内に天満宮古跡があり、G地区はその西側、H地区はその北側にあたる。ここでは排水路計画部分に当り、その範囲内で、2m×80m、と2m×5mのトレンチ25カ所を設定した。ここでは、径 5.2m、深さ 0.9mの大型の土壙1基、幅4.65m、深さ0.8 mの大溝1条及び幅1.45m、深さ0.55m及び幅1m深さ0.55mの小溝2条を検出した。大溝は三重の掘り方を示している。まず、幅4.65m、深さ 0.8mの凵字形の掘り方で、溝底に厚さ30cmの間で砂質土と粘質土とが互層に堆積し、流水と停水が数回繰り返されていた様子を示めしている。次いで、1回目の掘り方のほぼ肩部まで土砂で埋り、その堆積土層を切って、幅 3.8m、深さ60cmの溝が形成されている。この2回目の溝は、短期間で埋った様で、1回目掘り方を覆って、比較的単純に3層程の堆積土が認められるにすぎず、また、溝底に砂層等の堆積がなく、流水はなかった様である。3回目は、皿底状の横断面形を示し、幅

X地区
W地区
R地区
N地区
P地区
M地区
L地区
K地区
H地区
G地区
C地区
B地区
A地区
0
100
200
300m

第２図　トレンチ配置図

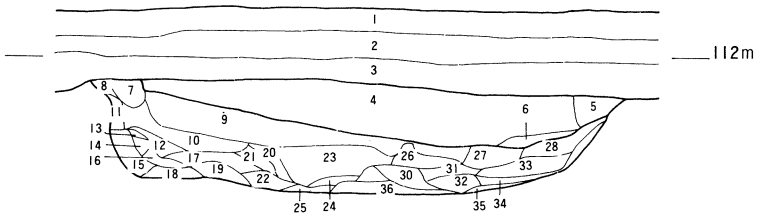
1.2m、深さ20cmを計る。この溝底中央には、厚さ20cmにわたって小礫が堆積し、明らかに流水の痕跡が認められた。また、この小礫層からのみ、須恵器、灰釉陶器の細片が出土している。この溝も、後に埋まり、現在の耕作土の床土面を形成している。なお、この南側に天満宮古跡があるため、それとの関連を追求したが、大溝はトレンチより南側５mでほぼ直角に東に屈折し、さらに　m東で再び南方に屈折する。以南では、約10m南方にのびた後、幅１mの支線溝が南西方向に派生し、本溝はさらに南方にのびるようであるが、天満宮跡附近で自然消滅しており、両者の関連を把握することができなかった。小溝は大溝の東側１m程のところで南北に走る。横断面U字形を示し、大溝とともに人工溝である可能性が強い。大型土壙は大溝の西側 2.5mのところに位置し、排水路計画予定地内にはおよそ２分の１が係る。壙内には、大別して６層程の堆積層が認められるが、壙底に砂等の堆積はない。堆積土中より若干の須恵器等の細片が出土し、大溝とほぼ同時期のものと考えられる。

H地区薮内地先には、『耳塚』と呼ばれ、塚の伝承を持つ径５m、高さ 0.3mの小丘が水田中に残されている。また、同様の塚伝承地が西方50mの間に、さらに２カ所ある。これらは東側のものが『刀塚』、西側のものが『首塚』と及ばれ、やはり、耳塚同様の小丘が耕作されずに残されている。このうち、耳塚が排水路計画予定部分に係るため、発掘調査を実施した。この附近は、耕土下に黒褐色の泥質土の堆積があり、若干の土師器、須恵器の



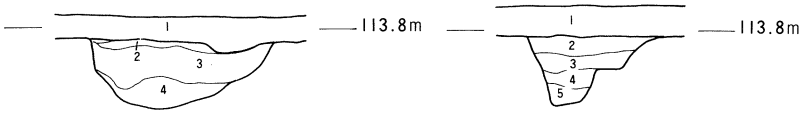
1．H地区大溝断面土層図

1 耕土
2 床土
3 茶褐色土（遺物包含）
4 黄灰色土
5 茶褐色土
6 黄灰色土
7 黒色土混黄灰色土
8 茶褐色土混黄灰色礫層（遺物包含）
9 黄灰色土
10 黒色土混黄灰色土
11 暗灰色土
12 茶褐色土混暗黄灰色土
13 黄灰色土
14 黒色土混暗黄灰色土
15 黄灰色土
16 黄灰色土
17 黒色土混暗黄灰色土
18 暗黄灰色土
19 黒色土混黄灰色土
20 暗黄灰色土
21 暗黄灰色土
22 黄灰色土
23 暗灰色土
24 茶褐色土混暗黄灰色土
25 淡黄灰色土混黒灰色土
26 茶褐色土混淡黄灰色土（粘質）
27 暗黄灰色土（〃）
28 淡黄黄灰色土（〃）
29 黒色土（〃）
30 黄灰色土（〃）
31 黄灰色土（〃）
32 茶色土混黄灰色土（〃）
33 暗灰色土（〃）
34 暗黄灰色土（〃）
35 黒色土混黄灰色土
36 黄灰色土
37 黒色土混暗黄灰色土
38 黄灰色土
39 〃
40 〃
41 暗灰色土
42 茶色土混暗灰色土
43 黄灰色土



2．H地区大型土坑断面土層図

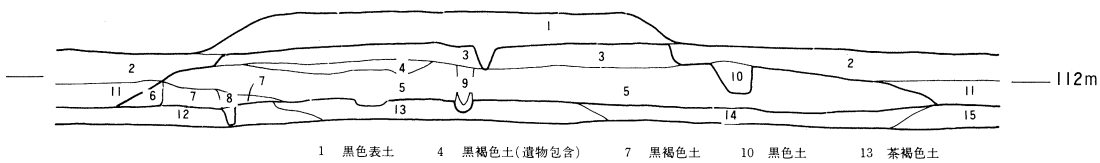
1 耕土
2 床土
3 茶褐色土（遺物包含）
4 黒褐色土（〃）
5 〃
6 〃（遺物包含）
7 〃
8 暗黄褐色土
9 黒褐色土
10 暗黄褐色土
11 〃
12 黒褐色土
13 〃
14 暗黄灰色土
15 淡黄灰色土
16 暗黄灰色土
17 黒褐色土
18 淡黄褐色土
19 暗黄褐色土
20 〃
21 黒褐色土
22 黒色土
23 黒褐色土
24 暗黄褐色土
25 〃（粘質）
26 黒褐色土
27 〃
28 暗黄褐色土
29 黒色土
30 黒褐色土
31 黄褐色土混黒褐色土
32 黒褐色土
33 黒色土
34 黒褐色土
35 淡黄灰色土
36 黒色土（粘質）



3．H地区　　4．H地区

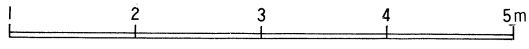
1 耕土
2 黄褐色土
3 茶褐色粘土
4 黒色砂質土

1 耕土
2 暗茶褐色粘質土
3 暗茶褐色土
4 黒褐色砂礫
5 黒褐色砂質土



5．H地区耳塚断面土層図

1 黒色表土
2 耕土
3 暗褐色土
4 黒褐色土（遺物包含）
5 〃（〃）
6 〃
7 黒褐色土
8 灰褐色土
9 〃
10 黒色土
11 茶褐色土
12 〃
13 茶褐色土
14 〃
15 〃



第３図　H地区溝、土坑、耳塚断面土層図

小片を含んでいる。耳塚の小丘はこの堆積土層の下部土層上に形成されている。小丘には2層の堆積層が認められ、下層は暗褐色～黒褐色土で、土師器の細片を含み、上層は耕土を含む後世の堆積である。下層の厚さは、0.5mあり耕作土により一部切られ径 7.5mが残っている。従って、小丘は、現耕作土レベルと同じ高さにあって、径7.5m、 高さ 0.5mの土饅頭状を呈することになる。このマウンドを切る耕土下の黒褐色の泥質土中に含まれる土器片には平安時代中期のものがあり、附近の水田化はこの時期以降である。従って、耳塚が塚として伝承され、今日に残されたのも平安時代中期以前とすることができる。

なお、耳塚以西及び小字願田辺地先に設定したトレンチでは、遺構、遺物の包含層は検出できなかった。

へ、K地区（小字東寺前）

7カ所に設定したトレンチのいずれも、耕土下に灰褐色粘質土が厚く堆積し、遺構等は検出できなかった。

ト、L地区（小字エンノコシ）

排水路計画部分に当り、2m×40mのトレンチを設定した。耕土下は砂礫層で、若干の土器片を出土した程度で、遺構は検出できなかった。

チ、M地区（小字近瀬町）

排水路計画部分に2m×50m、のトレンチ1カ所、2m×5mのトレンチを6カ所に設定した。ここでは、2m×50mトレンチで竪穴式住居跡1棟と若干のピントを検出した。住居跡の南北両側は、南が礫を含む茶褐色土、北がやはり礫を含む灰褐色土に変化し、遺構、遺物の包含も認められず、また、2m×5mトレンチ6カ所においても同様であった。

リ、N地区（小字森本）

排水路計画部分に4カ所のトレンチを設定した。黒褐色の泥質土の堆積が厚くあり、遺構等何等検出できなかった。

ヌ、P地区（小字東寺前）

排水路計画部分で、2m× 100mのトレンチを設定した。ここでは、トレンチの南側約3分の2程の範囲内で、竪穴式住居跡3棟、掘立柱建物跡と思われる柱列3棟分、溝跡2条、方形大型土壙3基、円形大型土壙1基、その他、多数の小ピットを検出した。このうち、竪穴式住居跡2棟に切り合関係が認められ、また、溝跡の1条は、ピット等すべての遺構を切っていることを確認した。

ル、R地区（小字長生田）

排水路計画部分7カ所にトレンチを設定した。いずれも耕土下に黒褐色泥質土の厚い堆積が認められ、遺構等を検出することができなかった。

オ、W地区（小字シレ田）

排水路計画部分で2m×70mのトレンチを設定した。ここでは、トレンチ西半分で、竪穴式住居跡5棟、掘立

柱建物跡２棟分、土壙１基を検出した。竪穴式住居跡のうち３棟に切り合いが認められ、掘立柱建物跡は、1棟は方形、他は円形の柱穴掘り方を示すものである。トレンチ東半分では、土壙１基を検出したのみで、他に何等遺構の分布は認められなかった。

ワ、X地区（小字シレ田）

田面切り下げ部分に当り、２ｍ×５ｍのトレンチを６カ所に設定し、遺構の有無を追求した。６カ所のトレンチのうち２カ所で竪穴式住居跡各１棟、その他トレンチで小ピット多数を検出し、田面切り下予定範囲内（約25ｍ×55ｍ）全域に遺構の分布することが予想された。

5　遺　　物（第４図・第５図・第６図）

出土遺物は、すべて耕土及び床土、あるいは遺構面直上のもので、須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、磁器、弥生式土器等がある。須恵器が最も多く、磁器、弥生式土器は極めて少ない。灰釉・緑釉等の施釉陶器の量が比較的多く、一つの特色といえる。遺構に伴うものは、遺構を完掘していないので、出土していないが、出土遺物は５期に大別でき、各地区各トレンチで検出した遺構の時期分布を把握することができる。５期をⅠ期～Ⅴ期とし、以下でその年代をおさえておく。なお、個々の観察結果については観察表を作成しておいた。

イ、Ⅰ　　期

杯身（第４図－４・５）、蓋（第４図－１・２）、埦（第４図－７）等があり、量的には少ない。蓋はツマミを持たず、天井部と口縁部との境界が不明瞭なもの、杯身は、口縁部の立ち上りが小さく、内傾度の大きいもので、いずれも大阪府陶邑古窯跡②のＴＫ 217に比定できよう。大型甕（第６図－３）や器台（第６図－４）等もこの頃のものと思われる。

ロ、Ⅱ　　期

埦（第４図－10～17）、蓋（第４図－６～９）、無高台埦（第５図－８～10）、大型甕（第６図－２）等がある。埦は比較的高い高台を持ち、外方へ踏ばっている。蓋は扁平な宝珠ツマミを持ち、口縁部に屈曲がなく、端部は下方へ短かく折れ曲っている。無高台の埦は、体部が外方へ開き、底部との境界を篦削りして稜を取っている。大型甕は、口縁部の開きは小さく、端部を上下に肥厚させて面を取っている。これらは、陶邑古窯跡のＭＴ21に当ると考えられる。

ハ、Ⅲ　　期

埦（第４図－30～34）、蓋（第４図－18～28）、花瓶（第５図－12・13）、長頸壺（第５図－14）等が主なものである。埦は、高台がいずれも体部下端に付き、横断面長方形で、外方への踏んばりがみられる。蓋は、天井部と口縁部との境界に段を持ち、端部が下方へ短かく屈曲する。ツマミは扁平で、付け根のクビレが小さい。花瓶、長頸壺も高台付埦と同様の特徴を持つ。短頸広口壺（第５図－11）も同様で、陶邑古窯跡ＴＫ７に相当すると考える。

ニ、Ⅳ　　期

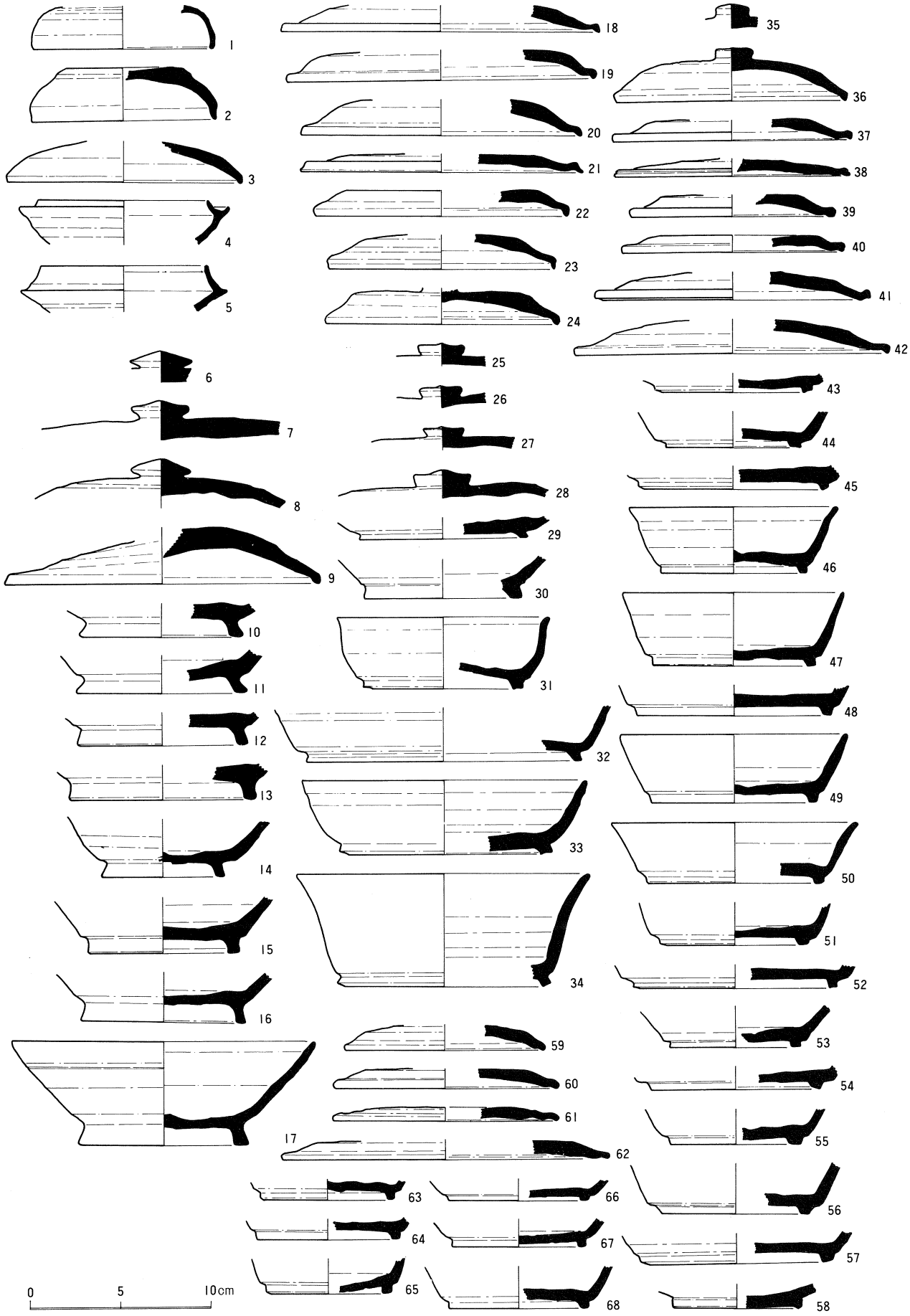
埦(第4図—43～58)、蓋(第4図—35～42)が主なもので、埦は横断面長方形の高台で、体部下端にほぼ垂直に付く。蓋は、円筒状のツマミを持ち、天井部と口縁部との境界に段を持つ。口縁端部は短かく下方へ屈曲するが、屈曲部は横断面が三角形あるいは半円形の稜のにぶいものとなっている。京都府長岡京跡ＳＤ51③に近いが、蓋の口縁部の屈曲が甘く、新しい様相を呈している。奈良県平城宮跡ＳＤ　650の蓋Ａ④等に近似している。

ホ、Ⅴ　　期

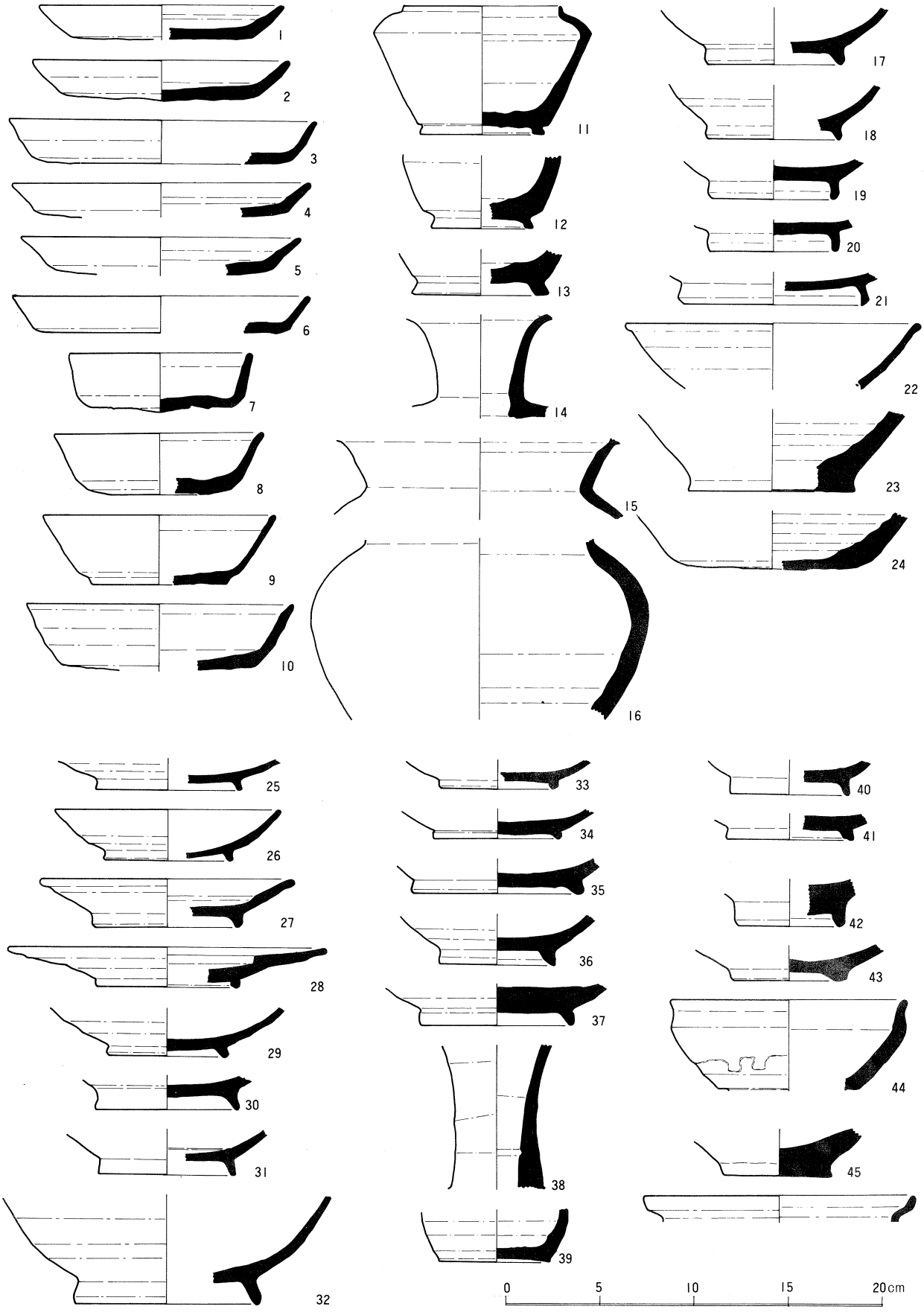
蓋(第4図—59～62)、埦(第4図—63～68)等の須恵器に灰釉陶器(第5図—25～39)が加わる。蓋は扁平で、天井部と口縁部との屈曲が小さく、端部もわずかに折り曲げた程度のものである。埦は、低い高台を持ち、端面に丸味を持つものである。灰釉陶器は皿、段皿、埦、長頸壺、花瓶があり、皿と埦が大半を占める。段皿は愛知県黒笹90号窯跡及至折戸53号窯式⑤、埦もほぼ同じ形式のものである。陰刻文様の見られないところから、その流行の盛期を過ぎた頃のものと思われる。愛知県猿投窯跡と平城宮跡東三坊大路東側溝との編年上の差異が1世紀～1世紀半のずれがあるといわれ⑥、猿投窯跡に従うと、11世紀後半、平城宮跡では10世紀前半頃となる。井口遺跡の須恵器を見る限りでは後者の年代、10世紀前半頃を当てるのが妥当のように思われる。灰釉陶器の東海地方以外への拡がりは奈良時代後半以降とされ、近江国では南滋賀廃寺出土例が平安時代初期で、早い例とされている。また、遠隔地への流通は平安時代中・後期とされている。湖北地方は、近縁の地でありながら、平安時代初期のものは知られていない。灰釉陶器は調の対象として中央に運ばれ、二次的に周辺諸地方に分配されたといわれるが、実際一般集落に及ぶ流通商品としては、近縁地域であっても、案外10世紀前後である可能性がある。井口遺跡の場合、遺跡の性格としては、現在のところ一般集落として把握でき、Ⅳ期には灰釉陶器を伴わず、Ⅴ期に入ってからであり、灰釉陶器の流通商品としての一時期をおさえることができよう。

以上のように、井口遺跡出土土器は5期に大別でき、およそⅠ期は7世紀前半、Ⅱ期は8世紀前半、Ⅲ期は8世紀後半、Ⅳ期は9世紀、Ⅴ期は10世紀に当てることができ、未発掘のものも含めて、井口遺跡の遺構の年代的分布を知ることができる。

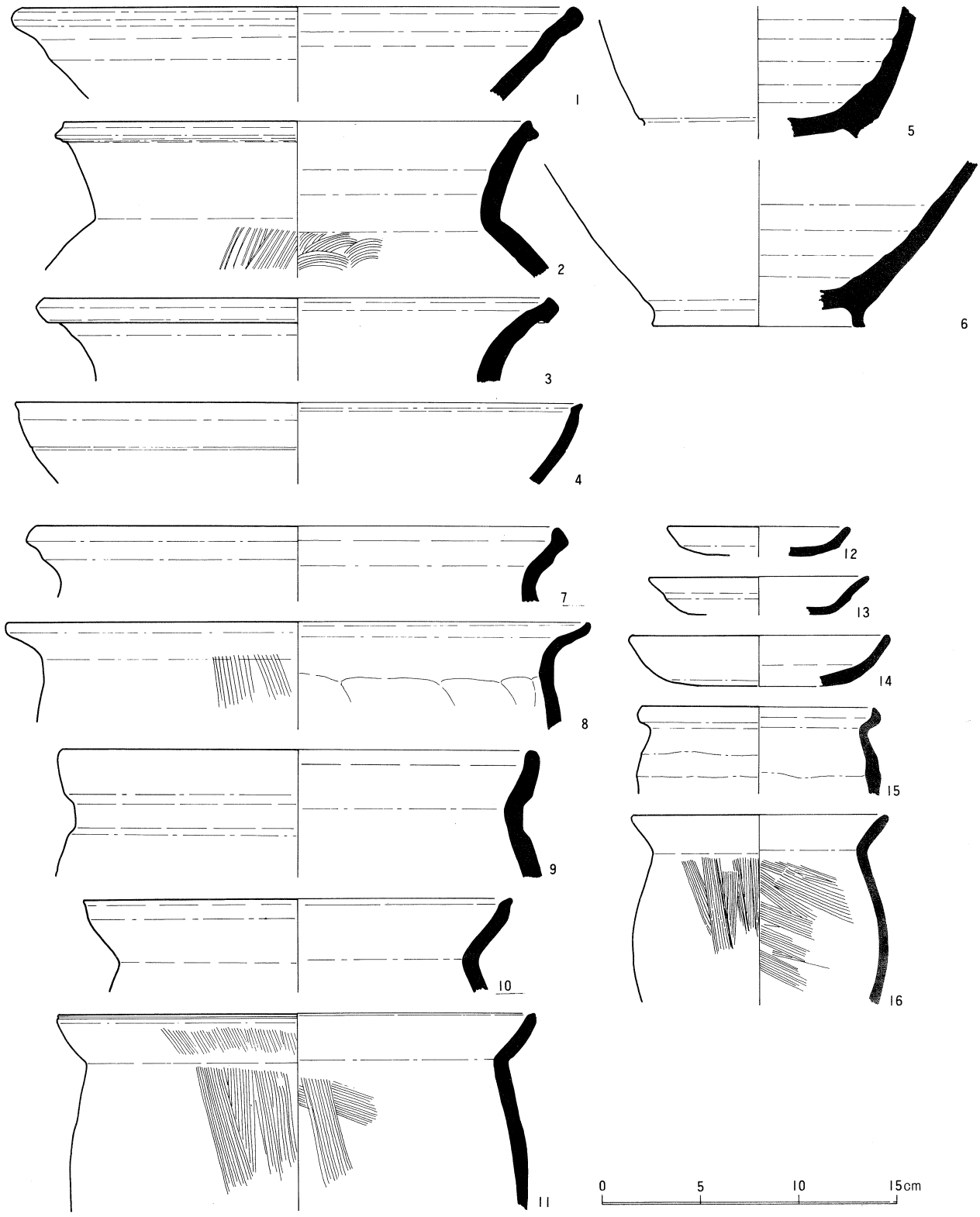
最後に土師器であるが、皿、長胴甕、小型甕等がある。皿は大小2種類あり、小型のものはⅤ期、大型のものはⅣ期に相当すると考えられる。ただ、長胴甕は、①口縁部が途中で内側にカーブして開くもの、②口縁部がほぼ垂直に立つもの、③口縁端部が上方へ肥厚するもの、④口縁端部が小さく上方へ屈曲するものの4種類あり、このうち①は近江地方特有のものである。この4タイプのものは、体部外面の上半を刷毛目調整し、下半から底部にかけて篦削りするという手法においても、湖北地方では7世紀初当の諸頭山2号墳⑦以降ほとんど変化を見ない。長胴甕は竪穴式住居跡にカマドが付設されて以降出現する器形とされるが、井口遺跡では8世紀末頃のカマドを持つ竪穴式住居跡が確実にあり、食生活の恒常性が土器器形、手法に影響を及ぼしたものであろうか。ともかく、長胴甕の編年的位置付けは後考を期したい。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
0
5
10cm

第4図　出土遺物実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
5
10
15
20cm

第5図　出土遺物実測図



第6図　出土遺物実測図

6 おわりに

井口遺跡は、今回の試掘調査によって、7世紀前半から10世紀に及ぶ集落跡であることを再確認することができた。また、遺構の遺存状態も非常に良好で、遺跡はほぼ完存しているものと思われる。住居跡の分布とその生活基盤たる水田の位置等今後に解明すべき問題は多々あるが、古代集落論に寄与することの非常に多い集落跡といえ、今後の遺跡の保存とその有効な活用を期待したい。（田中勝弘）

注

①田中勝弘「高月町井口遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ－Ⅱ、滋賀県教育委員会、昭和52年)
②田辺昭三『陶邑古窯址Ⅰ』(平安学園考古学クラブ、昭和41年)
③徳丸始朗他「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、昭和51年)
④『平城宮発掘調査報告』Ⅵ（奈良国立文化財研究所、昭和49年)
⑤楢崎彰一『猿投窯』(昭和44年)
⑥高島忠平「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」(『考古学雑誌』第57巻第1号、昭和46年)
⑦田中勝弘「諸頭山古墳群の発掘調査」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会、昭和49年)

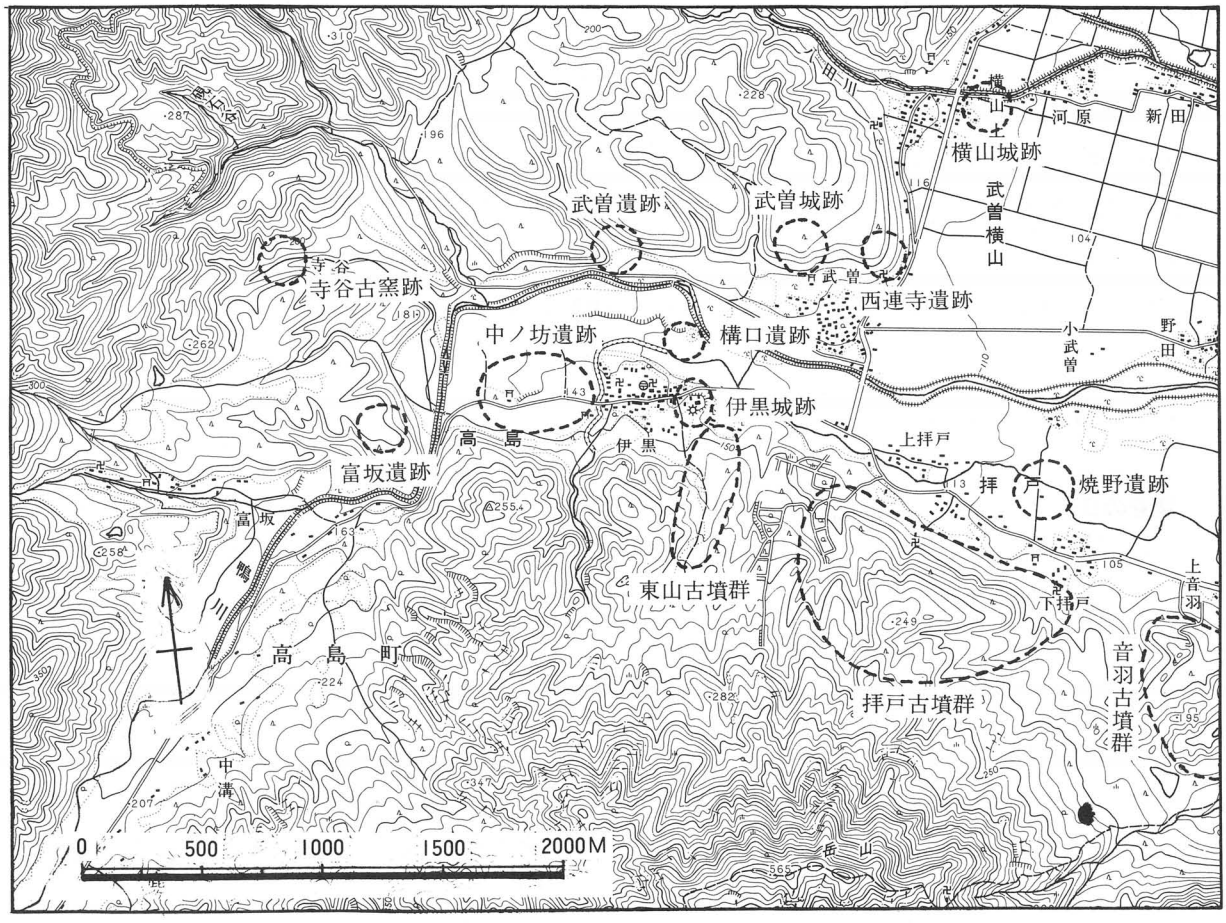
第８章　高島町中ノ坊遺跡

1　はじめに

今回、ほ場整備の対象となり、発掘調査を実施した中ノ坊遺跡は、高島郡高島町高島（伊黒）[①]字中ノ坊および城垣内の171,320,33㎡の水田である。

本遺跡は、昭和40年発行の『滋賀県遺跡目録』（滋賀県教育委員会）に、「中ノ坊」の字名が残っていることから寺院跡として記載されている周知の遺跡で、その立地から伝承にある比良三千坊の一つではないかとの推察もなされていた。

昭和51年度より鴨川の上流に位置する高島（伊黒）より、順次ほ場整備が実施されることになり、初年度に日吉神社の西、県道より南の地域のほ場整備がなされた。工事終了後、県道沿いの新しい畦畔の中に土器片が含まれていることが判り、高島町教育委員会によって立会い調査の結果、サヌカイト製の石匙（第23図）と歴史時代の土師器片が確認された。この採集地点は、『滋賀県遺跡目録』に記載されている中ノ坊遺跡の赤丸より約300m南東にあたる。そのため、高島町教育委員会では、これまで伝承地であった中ノ坊遺跡が、かなり広範囲にわたる遺跡となりそうなことから、その処置について県教育委員会に指導をあおいだ。連絡をうけた県教育委員会では、現地確認調査を実施した結果、単に寺院跡だけではなく河岸段丘上の立地や石器の出土などから、複合遺跡の可能性も十分にあると判断した。そこで、昭和52年度のほ場整備の事前に発掘調査を実施し、遺跡の実態を把握することになった。



第1図　遺跡位置図

2　位置と環境

中ノ坊遺跡の所在する高島町高島（伊黒）は、湖西の湖岸に沿ってそびえる比良山地の北端の山麓にあたり、鴨川右岸の河岸段丘上に位置している。この地は、武奈岳に端を発する鴨川が、狭隘な山間部の谷間から流れを東に変えて、高島平野にむかって流れ出ようとするまさにその位置にあたっている。そのため、鴨川の過去にひきおこした氾濫の跡は明瞭で、各所に旧河道の跡を留めている。

このような自然条件の中ではあるが、付近には原始時代から中世までの遺跡が、断続的に知られている。

この地域で現在知られている最も古い時代の遺跡としては、鴨川の対岸に位置する武曽横山の山麓に武曽遺跡がある。この遺跡の詳細は判らないが、弥生式土器の散布が報告されている。続いて古墳時代になると、鴨川右岸の山麓には、高島東山の丘陵を西端として、東山古墳群、拝戸古墳群、音羽古墳群と三つの古墳群が岳山々麓をめぐって形成されている。これら古墳群中の古墳は、古いものでも５世紀後半を遡ることはないようで、その大半の時期は古墳時代後期の６世紀代に求められよう。このうち伊黒の集落の背後に所在する東山古墳群は、横穴式石室を内部主体に有する円墳２基が確認されている。

注目すべき遺跡として、現在の鴨川の方向転換地点から北西に入り込んだ寺谷に所在する平安時代初期の須恵器の窯跡群があげられよう。この遺跡は、中ノ坊遺跡の発掘調査中に、地元の方々の案内により明らかになったものである。そして昭和52年11月に、高島町教育委員会から寺谷古窯跡として遺跡発見通知が提出されている。詳細な分布状況はまだ十分に把握されていないが、少なくとも２基以上の窯が存在するようである。湖西地方における須恵器窯は、これまでに今津町小俵山古窯跡が知られているのみである。小俵山古窯跡も、寺谷古窯跡とほぼ同様な時期にあたり、時期的に近似する両古窯跡②の存在は、今後各方面に新たな視野を与えるであろう。

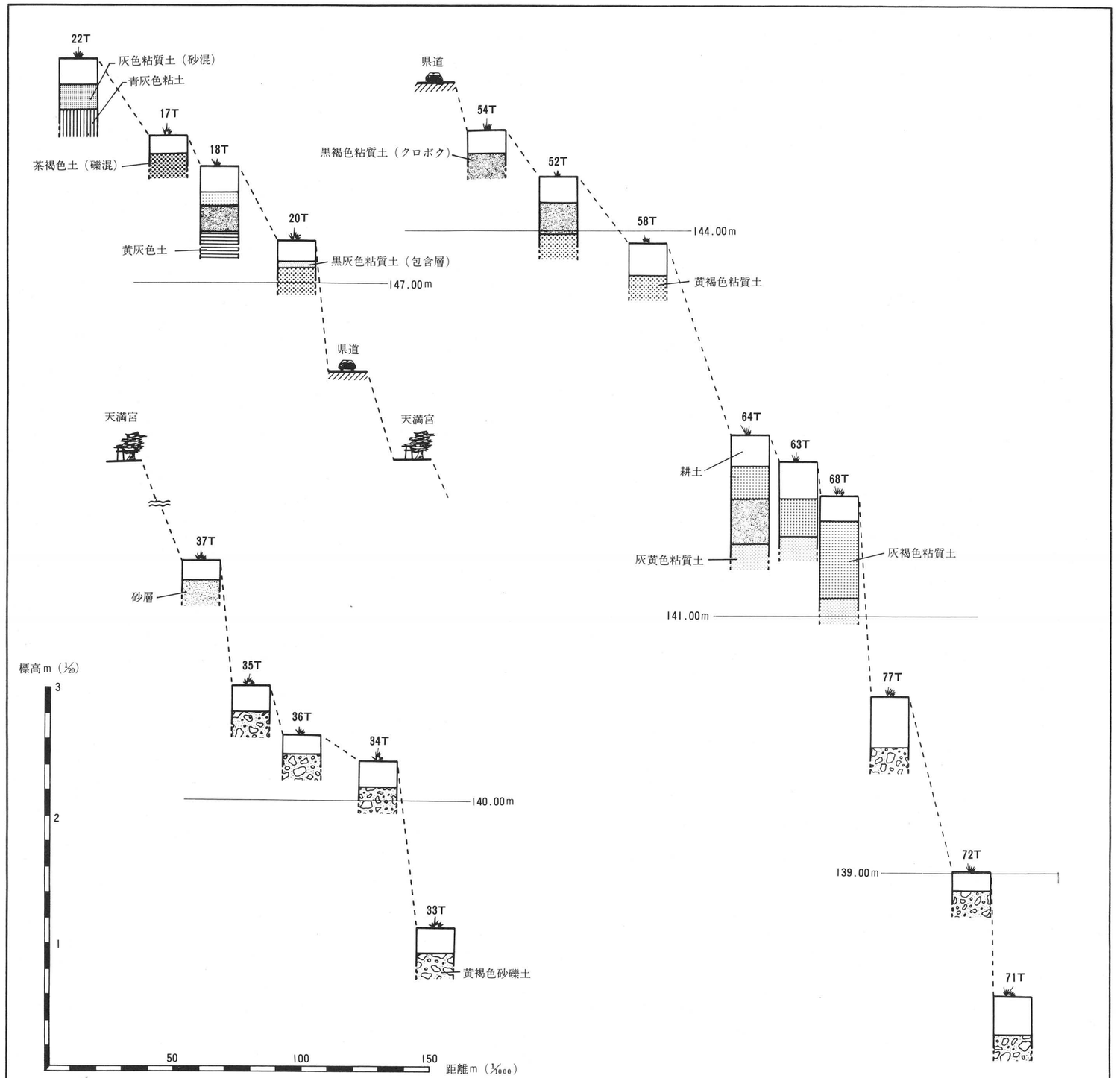
中世の遺跡として比較的良く分布の判っている城跡は、鴨川右岸に伊黒城跡（天正年間に落城）、左側の武曽横山に高島六城に数えられた武曽城跡と横山城跡（平城で、現在も段丘状地が残存している。）がある。また、遺跡の時期は不明であるが、地名から寺院跡の所在が推定されている遺跡は、中ノ坊遺跡をはじめとして、富坂の丘陵地に「講堂」の地名が残っている富坂遺跡、武曽横山の西連寺遺跡などがあげられよう。

3　調査の経過

調査の目的　調査は、約171,320㎡におよぶ昭和52年度のほ場整備地域の中に、遺物包含層がどのような広がりを持ち、それが工事によってどのような影響を受けるかをまず明らかにせねばならなかった。そのため、まず今津県事務所土地改良課の協力を得て、ほ場整備予定地域内の削平部分と削平深度を、地図上に記入し色分けを行った。その結果をもとに、削平が行われる各水田については、トレンチを穿ち包含層の有無を確認して行った。このような条件ではあるが、今回の発掘調査では次の２点に主眼を置いた。

(1)遺構の有無とその時期

昭和51年度の工事によって若干遺物が採集されているとはいうものの、包含層や遺構の存在については、けっして明確なものではなかった。そのため、包含層の状態とその広がり、遺構の有無の確認――もし遺構があった場合は、その時期の決定が今回の調査の最大の課題である。



第２図　中ノ坊遺跡土層模式図

(2)遺構の性格

遺構の存在が確認された場合、それがはたして寺院に関係するものかどうか。また、そうでなければ、どのような性格を有するものであるのかを明確にする。

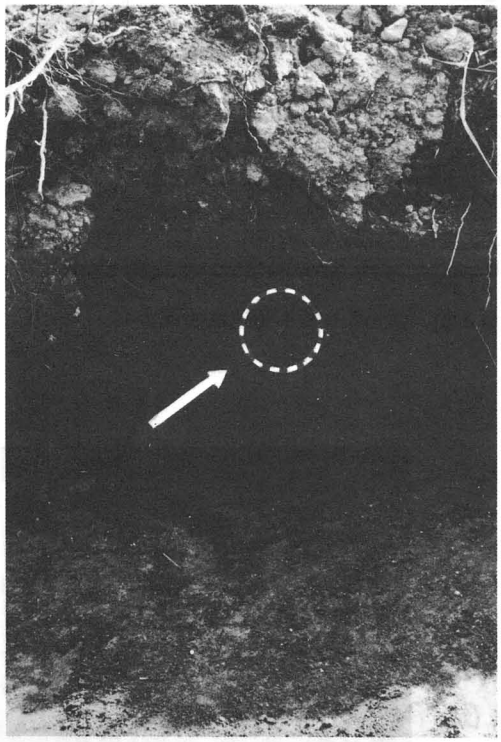
調査の実施　発掘調査は、ほ場整備に先立って、昭和52年10月５日から開始し、10月29日に終了した。なお調査のために穿った各トレンチの配置は、図版35に示すように104ヵ所におよび、そのうち包含層の検出された第20トレンチと第102トレンチについては、遺構の確認を行うためにトレンチを拡張した。

発掘調査の方法は、包含層の確認されたトレンチでは、包含層の上面までバックホウによって排土を行い、その後、人力によって遺構検出作業を実施した。調査した遺構の大半は、工事の際に削平されるか、あるいは削平がわずかでも工事中にブルドーザーのキャタピラに蹂躙され損傷をうける公算が強いため、完掘して記録保存の処置をとった。しかし、ピット等で削平あるいは損傷しても、深いものについては一部分残る可能性のあるものもあるため、調査終了後各遺構は砂で埋戻した。また、包含層の確認されなかったトレンチについては、一応バックホウによって削平面まで掘下げ、土層のみを記録した。

4　調査の結果

発掘調査の結果、県道をはさんで天満宮の南側に設けた第20トレンチと、昨年度高島町教育委員会によって遺物の散布が確認された地点の北側に、県道をはさんで相対する位置に設けた第102トレンチで、遺物包含層と遺構が認められた。両トレンチで検出された遺構は、共に中世の火葬墓と考えられる。

なお、両トレンチの包含層の面的な広がりは、第20トレンチの場合、東西約35m、南北約30m以上、第102トレンチでは、東西約20m、南北約30m以上の範囲に広がるものと推定される。



第３図　銭貨出土状況

こうした結果から判断すると、ほ場整備の対象となる広い地域全体に、小規模な遺跡が散在しているといった状態である。そして、当初予想された寺院跡と直接結びつくような遺構や遺物は確認されなかった。この点については、次年度の調査における一つの課題となろう。

(1)　層位（第２図）

昭和52年度に発掘調査を行った中ノ坊遺跡の層位を、模式的に組立てると第２図のようになる。この模式図に面的な広がりを加えて総観すると、河岸段丘上に地元で「クロボク」と通称されている黒褐色粘質土が、広く認められたことが第一にあげられよう。何ヶ所かのトレンチで「クロボク」層を掘下げたところ、その下に黄あるいは褐色系統の色調をおびた粘質土層があり、さらに掘ると、ひとかかえもあるような大きな河原石を含む層に変わる。ただ、「クロボク」層の広がりは、集落に近づくほどしだいに薄くなり消えていくようで

ある。また、旧河道跡の一段低い部分では、耕土直下ですぐに砂礫層になり、場所によっては湧水があった。

なお、遺構の検出された第20トレンチと第102トレンチの層位は、次のとおりである。

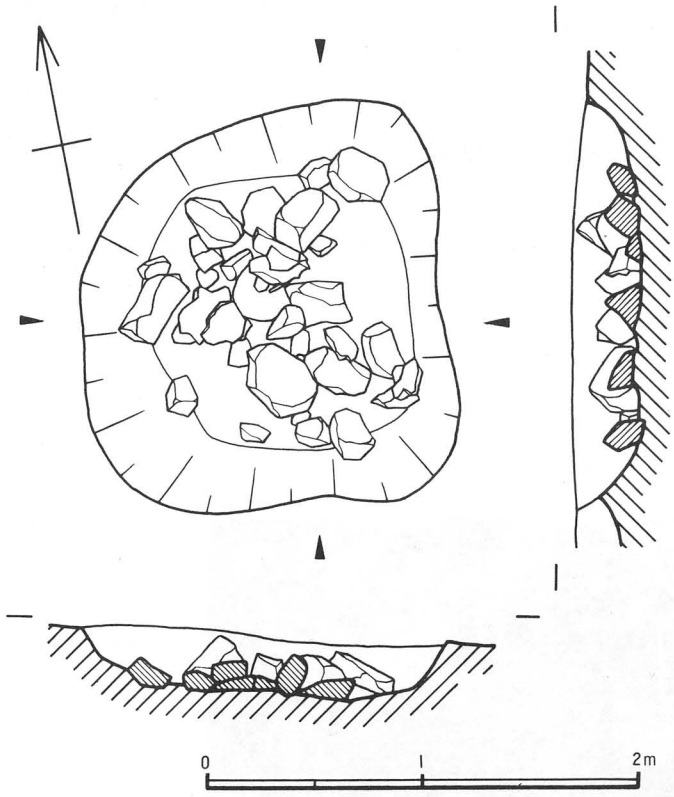
（第20トレンチ）　耕土（第Ⅰ層）を除去すると、第Ⅱ層は「クロボク」に似た暗黒灰色の粘質土である。この層は、厚さが約25cmあり、土師器片等の遺物を含む。第Ⅲ層は黄褐色土で、この層の上面をベースに遺構が形成されている。

（第102トレンチ）　表土を除去すると、第Ⅱ層は暗灰褐色土で、多くの土器片を含む。第Ⅲ層は淡黄灰色砂質土、第Ⅳ層は淡灰黄色砂質土、第Ⅴ層は淡灰青色砂質土で、各々遺物は含まない。また、第Ⅲ層上面をベースに多くのピット様のものが認められるが、壁面の観察から判断して、その大半は遺構面の自然の窪みと考えられる。

(2) 遺　　構

（第20トレンチ）　第Ⅱ層（暗黒灰色粘質土）中より土師器の小破片が出土するが、明確な遺構は検出されなかった。

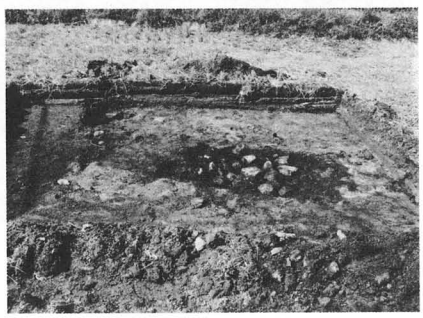
火葬墓　トレンチ内で検出された大小のピットは、第Ⅲ層上のかっての地表面の窪みと思われるものも少なくない。しかし、注意すべき点として、Ｐ－１からは炭、Ｐ－２からは刀子と鉄釘、Ｐ－６，10からは鉄釘が出土している。さらに、土器の九割以上が中世の土師器で、しかも皿に限られていること、また、包含層中に微細な火葬骨片が数点認められたことなどから判断して、ピットのうちあるものは、木箱や曲物などに火葬骨を納めて埋置した火葬墓の可能性が強い。



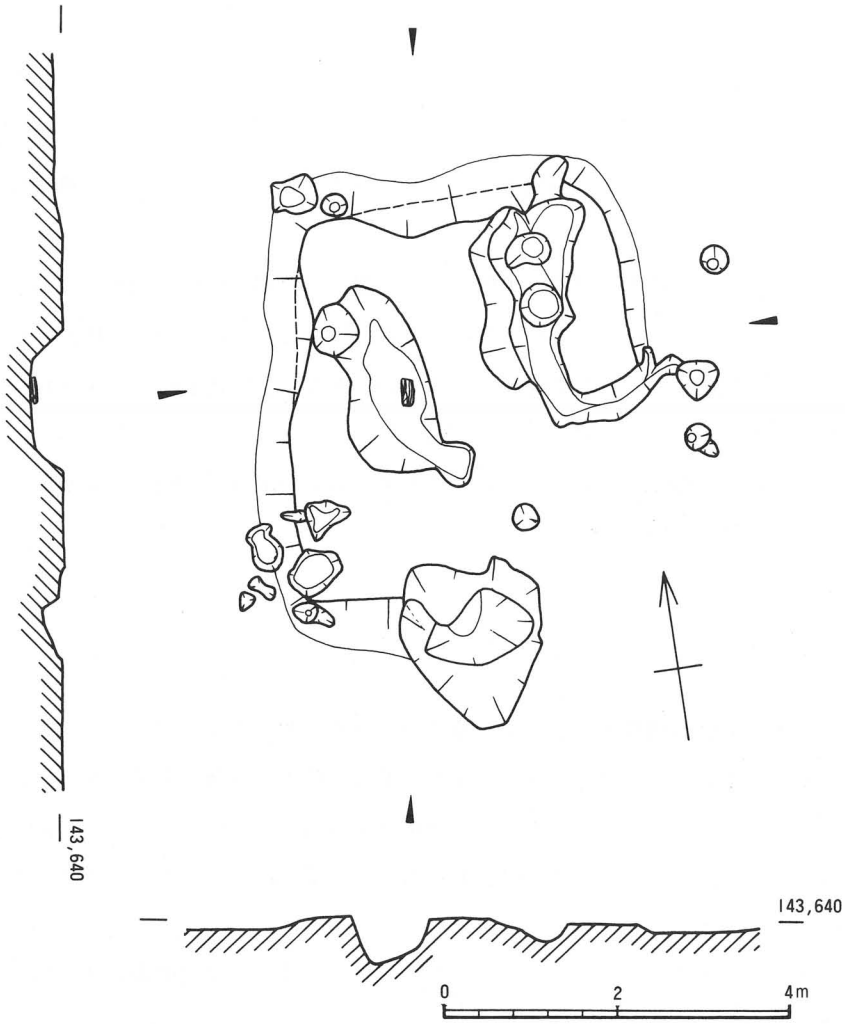
第４図　第20トレンチ整理坑実測図

それ以外にも、Ｐ－４からは砥石、Ｐ－９からは鉄滓と土錘が出土している。

整理坑　直径約1.8m、深さ約40cmの大きな土坑は、付近の整地か掘削の際に出た石を集めて埋めた整理坑と考えている。土坑内からは、常滑と考えられる陶器片が出土している。なお、同様な整理坑は、第12トレンチでも検出されており（第５図）、ここでは、中世かそれ以降のものと思われる信楽の破片を伴出している。（第７図、Ｆ－３）


第５図　第12トレンチ整理坑

（第102トレンチ）　包含層が明確に確認できた第102トレンチ（試掘坑）を、包含層が薄くなってほとんど遺物が出土しなくなる範囲ま



第６図　第102トレンチ火葬墳墓実測図

で、四方に拡張した。結果的には、第81トレンチをも含みこんだ本調査中最大の面積となった。

遺構は、火葬墳墓１基と大小の土坑、ピット、溝状遺構などが検出されたが、明確に遺構と断定できるものは少ない。土坑やピットについては、「層位」の項でも触れたように、第20トレンチと同様、第Ⅲ層上の地面の窪みに第Ⅱ層の包含層の土が入り、ピットのように見えるものも多数含まれていると考えられる。

遺物の出土状況は、トレンチの全域からほぼまんべんなく出土する。しかし、四方の壁面に近づくにつれてしだいに減少し、西側ではやがて出土しなくなる。トレンチ内で遺物の散布密度が高かったのは、火葬墳墓の北側――トレンチの中央に南北方向に残した土層観察用畦の、東西の地域である。

火葬墳墓　外形は、ほぼ南北方向に主軸をもつ東西辺4.5m、南北辺5.8m、高さ20cmの南北にやや長い方形基壇である。基壇には、列石や周濠等の外部施設は見られず、地形の高まりを巧みに利用して、周囲を整形している。(なお、地形の整形については、旧地形がやや高まりを残す南西～西南部分では、不明瞭である。）そして、整形の後に、その上にある程度の盛土をして基壇を整備したものと考えられる。

方形基壇内に穿たれた土壙は、基壇の中央よりやや北西に位置し、長さ１m×2.3m、深さ35～55cmの不整形な楕円形をしている。土壙内には炭と焼土が充満しており、第102トレンチ内の他の土坑やピットの土（礫混りの暗灰褐色土）とは明らかに異なっている。また、土壙の壁面は火をうけて赤く焼けただれており、床面には長さ30cm、幅10cmほどの炭が何本か残っていた。なお、土壙内には遺物や人骨は残っていなかったが、付近の包含層（第Ⅱ層）中から微細な火葬骨片が出土している。

この火葬墳墓の年代は、第Ⅱ層を除去して検出されたことと、包含層の遺物などから、13世紀前半を下限とするものである。

溝状遺構　トレンチの中央に残した土層観察用畦の東側に、幅約３m、深さ約20cmの溝状の落込みがある。しかし、この溝状の落込みは、地形の傾斜方向と一致していることや、また溝自体に人為的なものと判断する要素がないため、旧地形に伴う窪みと考えられる。

5　出土遺物

出土遺物のほとんどは、第20トレンチと102トレンチからの出土で、それ以外のトレンチから出土した遺物はごくわずかな量である。

遺物の出土量は第102トレンチが最も豊富で、種類も土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉、緑釉、磁器、陶器、石製品、鉄製品、銭貨などバラエティに富んでいる。これら遺物を時期的に見ると、10世紀から13世紀までの各時代のものがあるが、同一包含層内に混在しているため層位的には分類できない。型式学的に分類すれば、大きく10世紀、11世紀、12世紀後半～13世紀前半の３時期に区分が可能である。

第20トレンチは出土量も少なく、種類も土師器の皿が主で、それに鉄製品と若干の須恵器と陶器が加わる。遺構に伴うと考えられる遺物は、14世紀ごろの一時期のものである。

(1)　土　　器

（第20トレンチ）

土器の大半は土師器で、その他に須恵器の鉢の破片１点、常滑の甕の破片２点が出土している。

土師器はすべて皿で、大きさから概ね大小２種類に分類できる。また小皿は、胎土、色調に大差はないが、形態の特色から、２～６と７の２つのタイプに分けることができる。出土量は前者が多く、後者は少ない。前者は、口縁部が大きく外反し、底部が比較的平らなやや上げ底気味の特色ある器形で、第102トレンチ出土の皿よりも後出的なものである（第８図）。

須恵器の鉢（８）、常滑の甕（図版68、Ｆ－１，Ｆ－２）はいずれも小破片で、はたして土師器に伴う時期のものか、それよりも古い時期の遺物が混在しているのか明確でない。

（第12トレンチ）

整理坑の集石内から、器形は不明であるが、信楽の底部が１点出土している。底部外面に、いわゆる下駄印が認められる（第７図）。

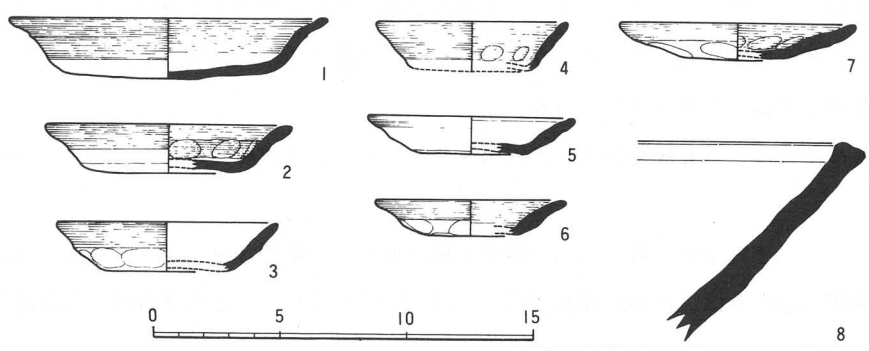
第７図　第12トレンチ出土陶器片拓本

（第57トレンチ）

第２層（褐灰色粘質土）から、信楽の鉢の口縁部の小破片１点が出土している（図版７、Ｆ－４）。

（第91トレンチ）

第２層（灰黄色粘質土）から、信楽の鉢の口縁部の小破片１点が出土している（図版７、Ｆ－５）。



第８図　第20トレンチ出土土器実測図

（第102トレンチ）

A　土師器（第11、12図）

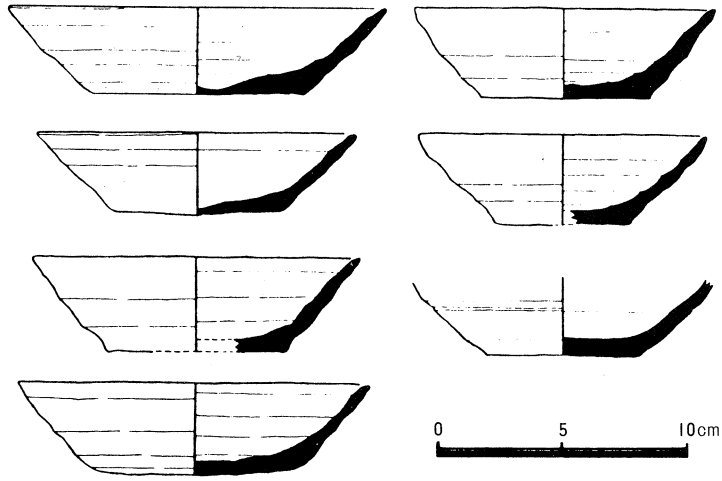
皿、椀、甕、鍋、釜などがある。各器形とも類似した形態のものが多いが、詳細に観察すると、細部に相違が認められるものもあり、型式学的に分類が可能である。

a、皿（9～74）　土師器の中では最も出土量が多く、その形態や整形の特徴などから、大きく3種類に分類できる。

Ⅰ類（9～71）　口縁部は外反し、外面底部は不調整で、やや雑な仕上げのもの。

Ⅱ類（72、73）　口縁部は屈曲して外反し、端部が嘴状に内側に巻きこむ。器壁は薄く、本遺跡出土の皿の中では一番作りが良い。

Ⅲ類（74）　大きく外反する口縁部と平底の底部をもつ。ロクロ整形で、底部に糸切り痕が残る。



第9図　堀川遺跡出土土器実測図

Ⅰ類は、形態と整形の若干の差異によって、さらに2種の細分が可能である。

(1)（9～19、21～69）　口縁端部外面に面取りを行い、端部を直立あるいはやや内傾させるもの。

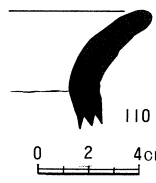
(2)（20、70、71）　口縁端部に面取りを施さず、口縁部を外反させたもの。

また法量から見ると、大皿（9）、中皿（10～20）、小皿（21～71）の3種類に分類できる。これらの出土量は、大・中皿は⅛以上、小皿は¼以上の残部のある破片で総計をとると、大皿　1、中皿　11、小皿　51となり、小皿が圧倒的に多い。また小皿の中には、口径8.5cm、高さ1.7cmを中心とする一群（21～63）と、口径7.5cm、高さ1.0cmを中心とするやや小型の一群（64～69）が認められる。

b、椀　器形を完全に復元できるものは1点もない。高台のある底部と糸切り痕を残す平底のもののうち、内弯気味のカーブを描くものを便宜上〝椀〟と考えている。

高台付きの底部（75～79）は、体部をロクロ成形で作った後に高台を貼り付けたものである。高台は外開きで、高さも近江型の黒色土器椀や同型の土師器椀などに比べ比較的高く、仕上りもシャープである。1例だけ高台径の小さなものがある（79）。

平底に糸切り痕の残るものは、底部径の¼以上の残部があるものだけで18点を数え、小破片をも含めると約2～3倍の量となる。74のように口縁部まで復元できるものもあるが、底部の状態を比較すると、必ずしも74と同じような皿とは言い難いものもある。同じ高島郡内の新旭町堀川遺跡から出土した、比較的深いロクロ成形の土師器の皿（第9図）などから見て、あるいは類似した器形のものかとも推定できる。

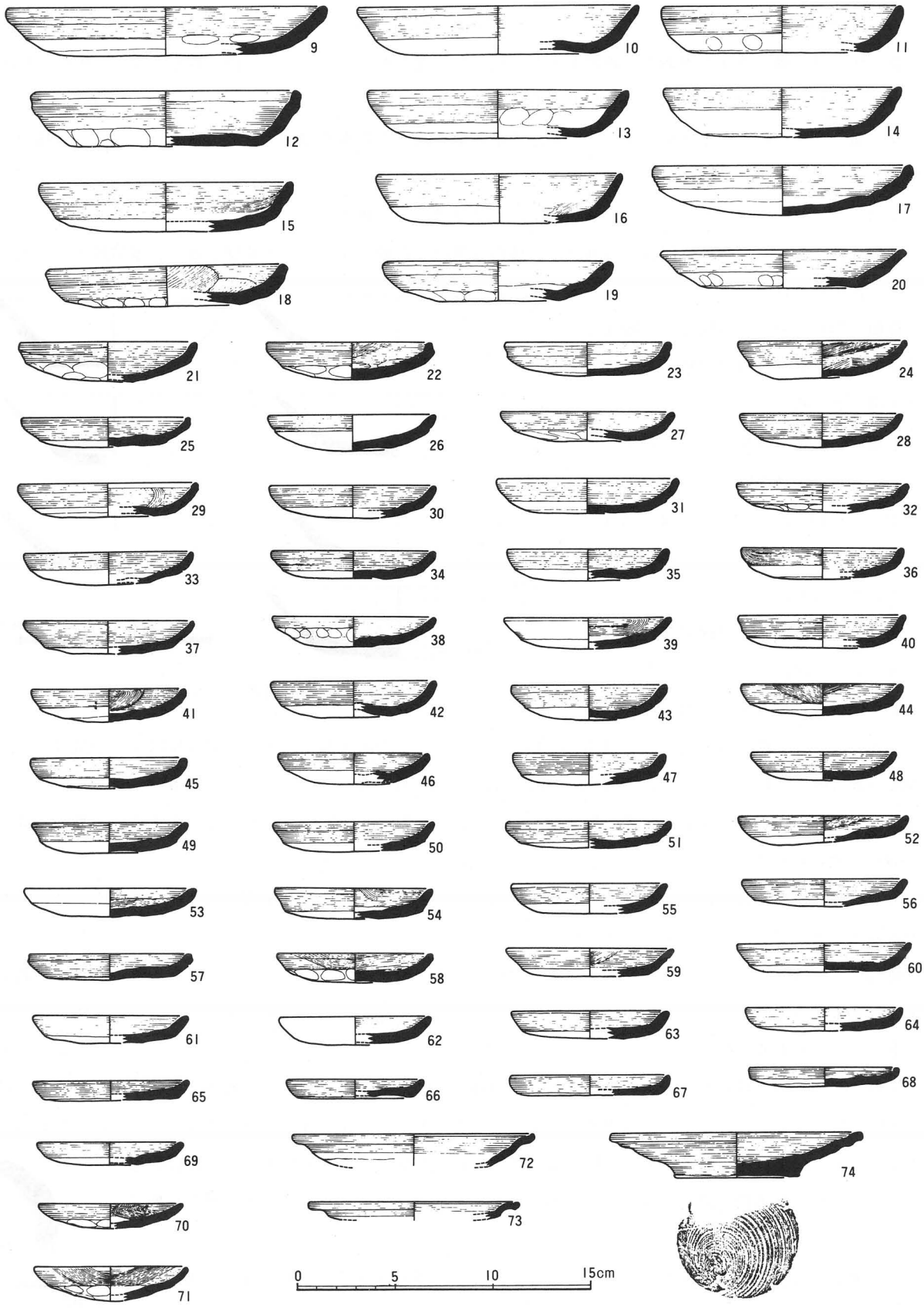


第10図
第102トレンチ出土
（土師器　甕）

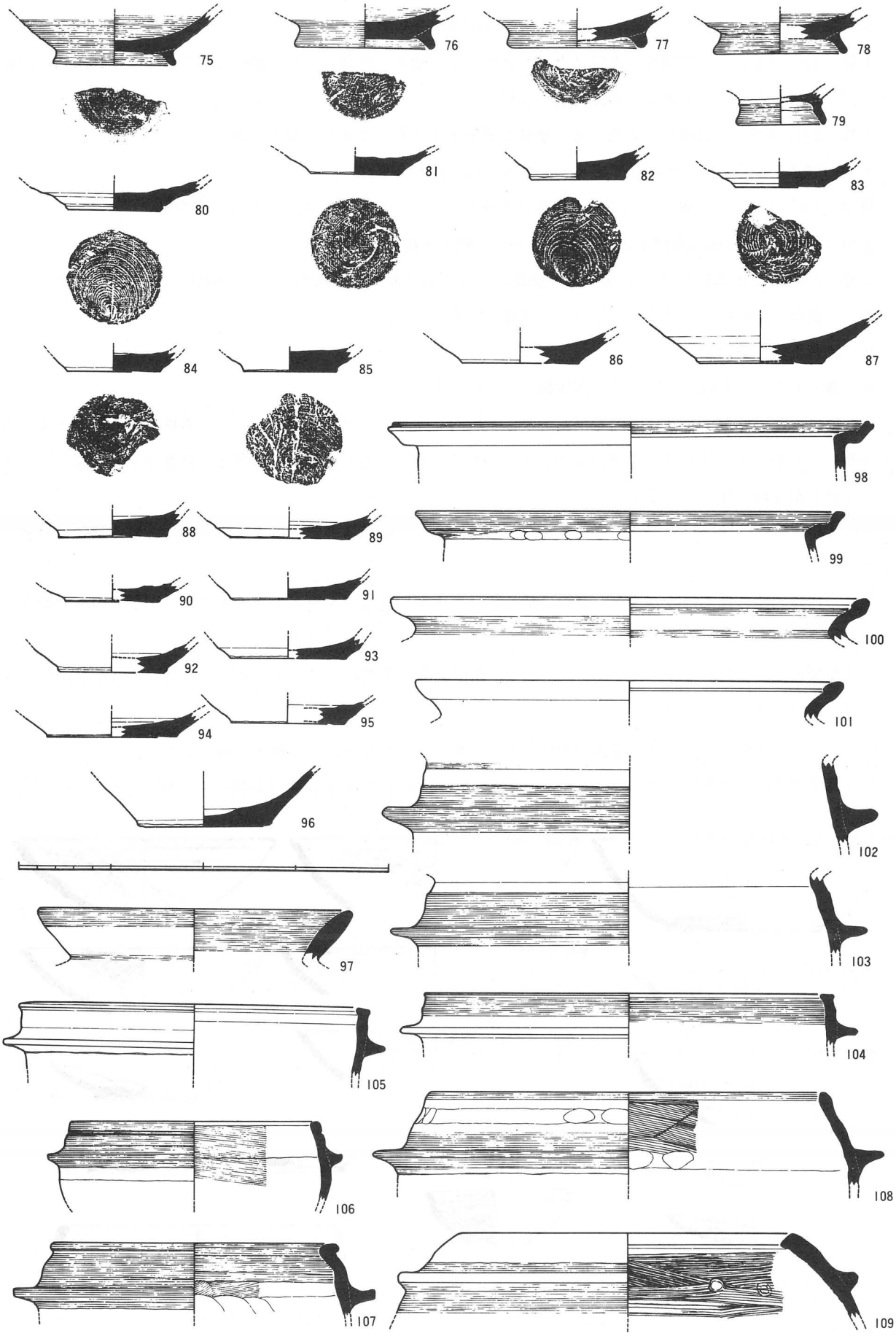
c　甕　口縁部の破片が2～3個体分あるが、器形全体を推定できるものは無い（97、110）。その他、胴部に叩き目を施した破片が少量認められる（225～230）。

d　鍋（98、99）　口縁部が受け口状をしたもので、器壁は薄い。量的には2～3個体である。

表面は火を受け、器壁の剝離あるいは磨滅が著しいため不明確であるが、あるいは瓦質であったかもしれない。



第11図　第102トレンチ出土土器実測図（土師器１）



第12図　第102トレンチ出土土器実測図（土師器２）

e　釜　　形態や胎土・焼成などから、大きく５種類に分類できる。

Ⅰ類（100～103）　口縁端部を内側に丸くおりかえす。胎土・色調などから100、101の口縁部は102、103の胴部と同一器形をなすものと考えられる。胎土は粗い。

Ⅱ類（104、105）　口縁部の直立する、単純な器形をなすものである。胎土は精良。

表面が磨滅しているため不明確であるが、瓦質の可能性がある。

Ⅲ類（106、107）　口縁部は内傾し、端部に丸味を帯びたやや小型の釜。胎土は、やや粗。

Ⅳ類（108）　口縁部の内傾するやや大型の釜で、胎土は粗い。

Ⅴ類（109）　口縁部は内傾し、最大径が胴部にある。羽は断面が三角形に近く、短い。

また、脚部の小破片が１点出土している（図版74、Ｆ－６）。

B　黒色土器（第13図）

椀と甕があるが、小破片を含めても個体数はわずかである。

椀を焼成技法で分類すると、畿内で平安時代に一般的な内黒色の黒色土器Ａ類と、内黒色ではあるが炭素の吸着状態のやや異なる「近江型」の黒色土器に分けられる。甕は、胎土・色調、黒色化の状態などから見て、前者――黒色土器Ａ類に伴うもの③である。

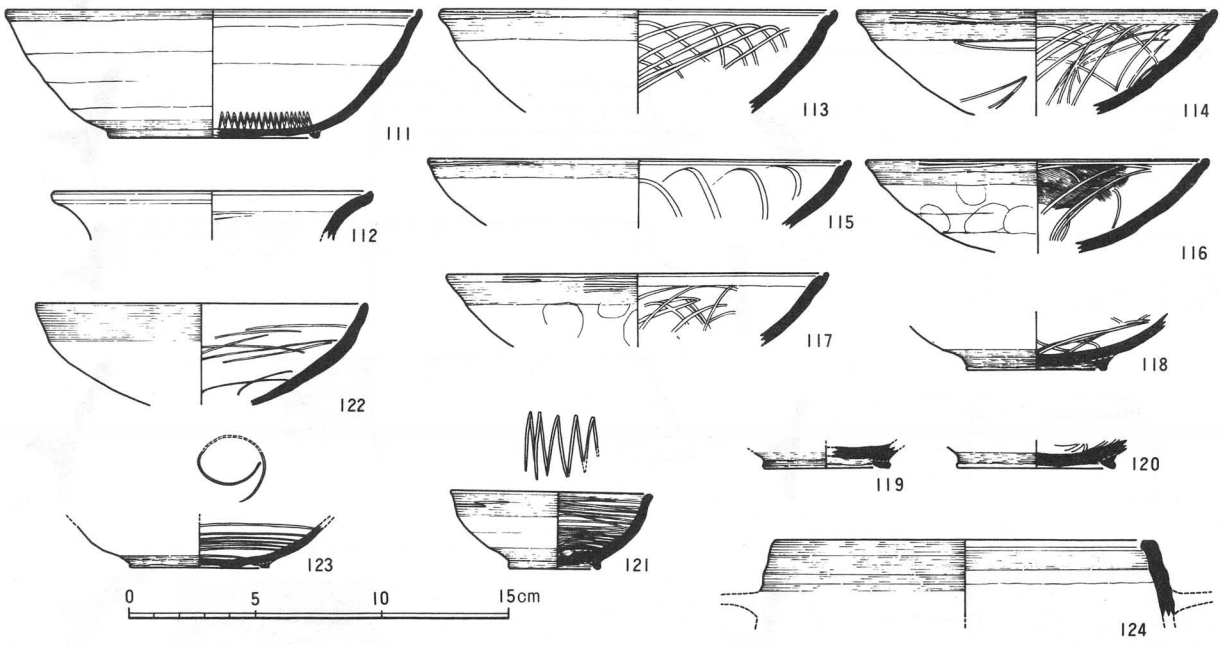
黒色土器Ａ類は、椀（111）と甕（112）を合わせても４～５個体ほどで、出土土器全体に占める割合は非常に小さい。

椀は、口縁内側の端部に段がつき、高台は低く広い。内面には暗文を施さず、内底面にジグザグのヘラ磨きを行う。

近江型黒色土器（113～120）については、近年、湖南東部の調査によってその実例が増加しているが、その分布は県下各地に認められている④。

椀には、内底面を中心として口縁部内面付近まで、特徴ある花弁状のヘラ磨きを施している。

出土量は湖南東部の遺跡に比べて少なく、実測可能なもの８点で、それ以外は10数点の小破片があるにすぎない。



第13図　第102トレンチ出土土器実測図（黒色土器、瓦器、瓦質土器）

C　瓦器・瓦質土器（第13図）

椀、小椀、釜の３種類が認められるが、小破片も含めて５～６個体分ほどしかない。

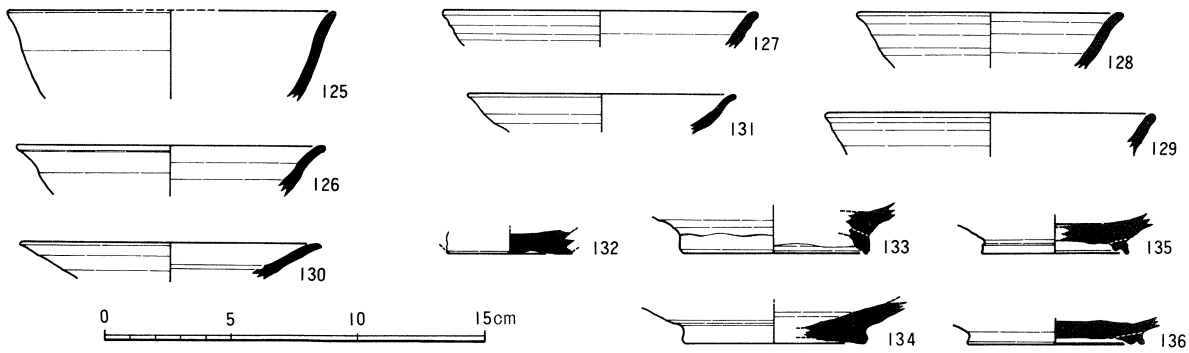
椀（122、123）は、内面のヘラ磨きが粗く、内底面の暗文も単純な渦巻きである。口縁端部は丸く終り、端部の内面には段がつかない。また、高台も低くなりはじめ、シャープさがなく、全体に粗製化の傾向が見られる。

小椀（121）は、椀に比べて、高台はしっかりとしており、内面のヘラ磨きも密で、内底面にはジグザグの⑤暗文を施している。こうした諸点を比較すると、小椀の方が椀より型式的に古い様相を示している。

釜（124）は、土師器の釜Ⅱ類に類似する口縁部の直立した単純な器形のもので、小破片で⑥はあるが、本遺跡出土遺物中瓦質と断言できる唯一の遺物である。

D　緑釉陶器（第14図）

椀と皿がある。いずれも小破片であるが、10数個体の出土量がある。形態・胎土・色調などの特色から判断して、愛知県尾北・篠岡窯（125、126、130、132）、岐阜県東濃・恵那窯（127、131）、京都府・亀岡窯（128、133、134？）、滋賀県水口町・山ノ神⑦窯（129、135、136）などに生産地が求められる。



第14図　第102トレンチ出土土器実測図（緑釉陶器）

E　灰釉陶器（第15図）

出土遺物のほとんどは椀と皿で、わずかに１点瓶（137）が認められる。椀と皿は、法量、器形の差異などでさらに椀（139、140、142、164、168、169）、小椀（138、141、143、144）、皿（145～153）、段皿（154～160）などに細分される。

出土量は土師器についで多い。

各器形でも、形態的には多少の差異が認められるとは言うものの、器形の減少と均一化、成形及び施釉の粗雑さなどから見て、灰釉陶器としては、終末に近い量産化の時期の特色が諸々に見うけられる。楢崎彰一氏の鑑定によれば、本遺跡出土の灰釉陶器は岐阜県東濃系窯のもので、11世紀に編年されるものである。さらにこのうち、灰釉の色調に特徴のある151～153は、東濃・永田窯に比定される。

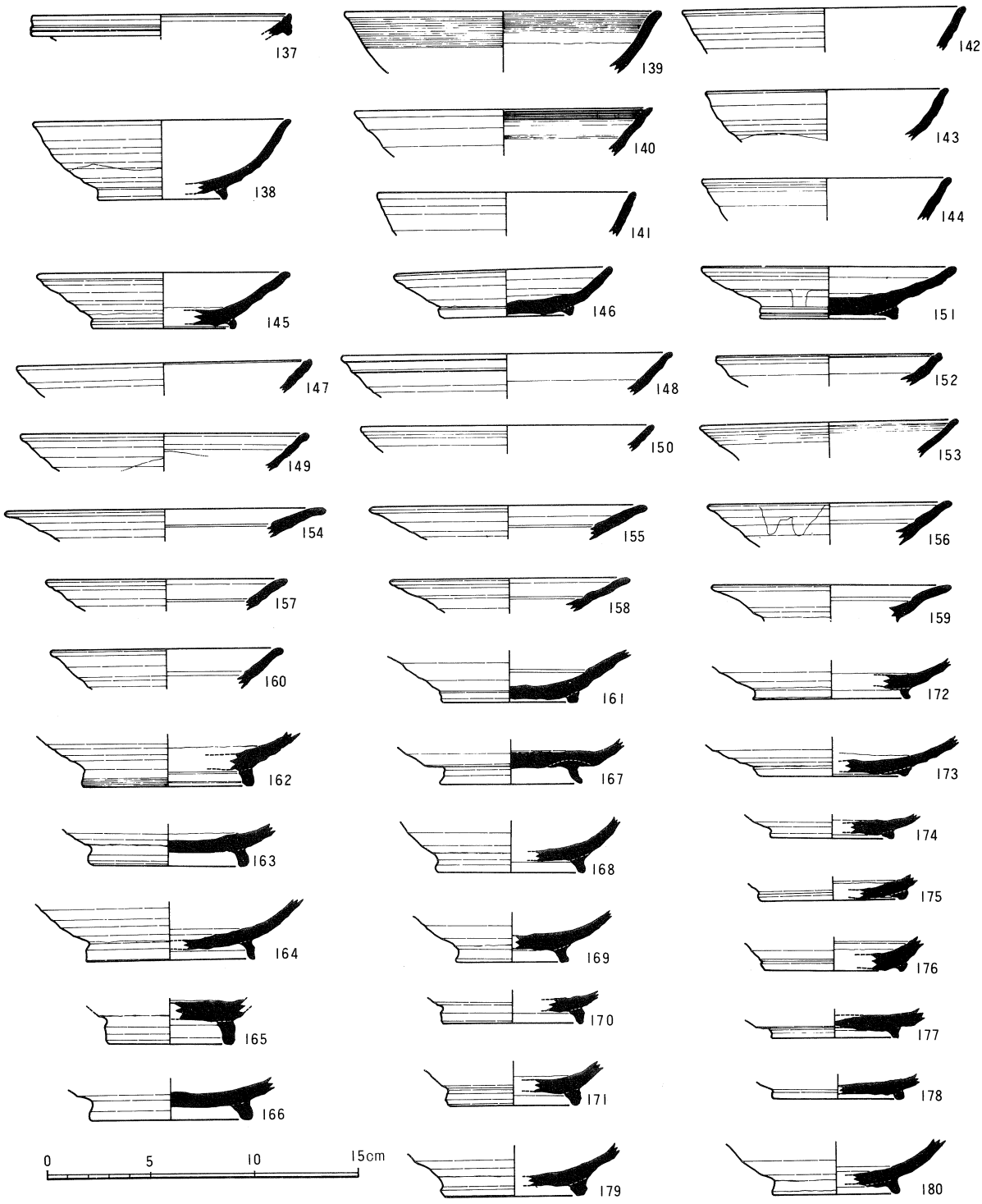
山茶椀（179、180）　　本遺跡で多量に出土する東濃系の灰釉陶器も、12世紀代になってより粗雑化した山茶椀に変わると、出土量が激減しわずか数点となる。

F　須恵器（第16、17図）

椀、壺、甕、鉢などがある。

出土量は実測可能なもので椀約10数個体、壺２個体、甕約７個体、鉢約10個体とあまり多くはない。

椀（181～192）　　底部に高台が付くものと糸切り痕を残した平底のものがある。高台がつくものはわずか２点と少なく、高台がつかず平底のものが大半を占める。



第15図　第102トレンチ出土土器実測図（灰釉陶器）

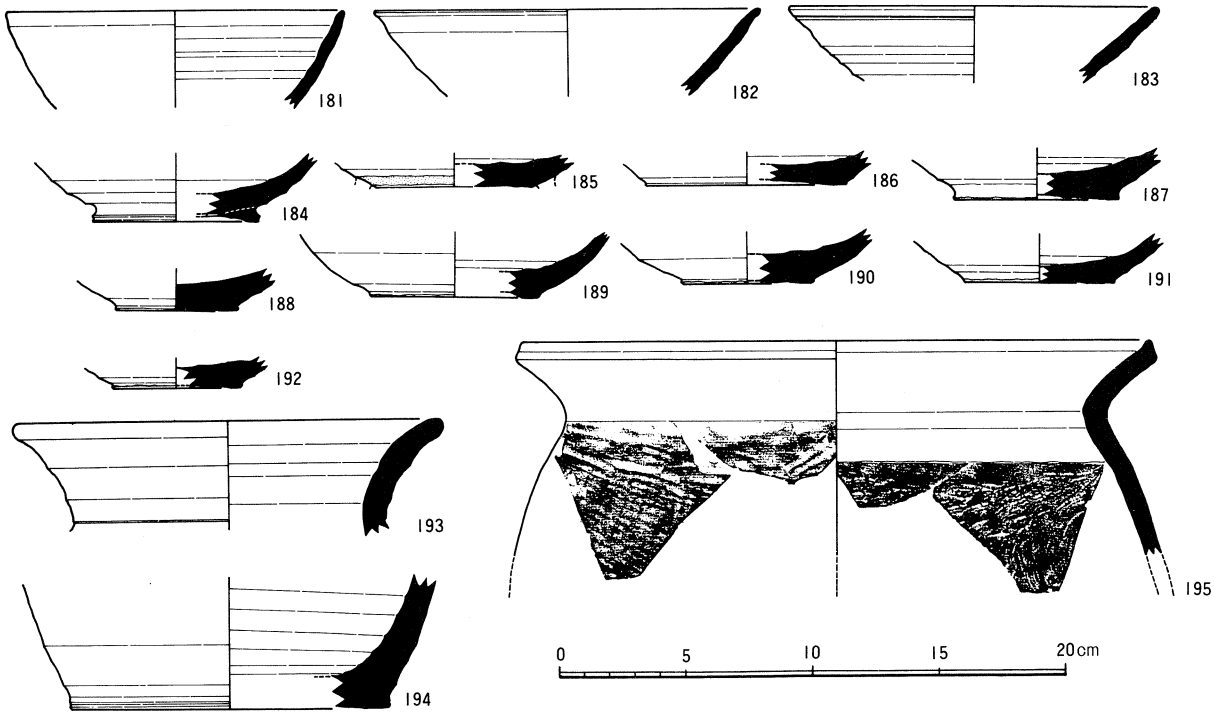
壺（193、194）　　口縁部は外反し、端部を丸くおさめた比較的小型のものが認められる。

底径が小さく胴部のあまり張らない、平底の底部をもつ破片も壺と考えられる。

壺と考えられるものは、小破片も含めてこの２点のみである。

甕（195、231～240）　　口縁部の残るものは１個体だけであるが、その他胴部の破片から推定して何種類かの甕のあったことが考えられるが、出土量は少ない。

胴部にみられる叩き目には、平行叩きと格子叩きが見られる。236は内面の整形に、太い平行線が扇型にひらく



第16図　第102トレンチ出土土器実測図（須恵器１）

特異な内型を使用している。

鉢（196～205）　口縁部が肥厚し、この部分のみ色調が濃く黒ずんだ、特徴的な片口の鉢である。底部は平底で、内面には使用による磨滅が認められる。胎土は５㎜程の小石を含んだ粗いもので、焼成も甘い。

兵庫県・神出窯の製品と推定される。

G　陶器（第18、19図）

鉢、壺、甕などがあり、大半は常滑窯の製品である。小破片も含めて、出土量は約20個体ほどである。

鉢（206～213）　口縁部は外反し、端部外側に沈線をもつものともたないものとがある。破片からみて、片口の可能性が強い（208～211）。底部も、平底と高い高台がつくものとがあり、内面には使用による磨滅が認められる。

中に、形態的には類似するが、焼成・色調などから須恵器かと思われるものがある（206、207、213）。

同様な形態の鉢の出土量を産地別にみると、常滑窯１に対し神出窯1.5と、神出窯の方がやや多い。

壺（214）　小破片の復元から、常滑窯の三筋壺が１点出土している。

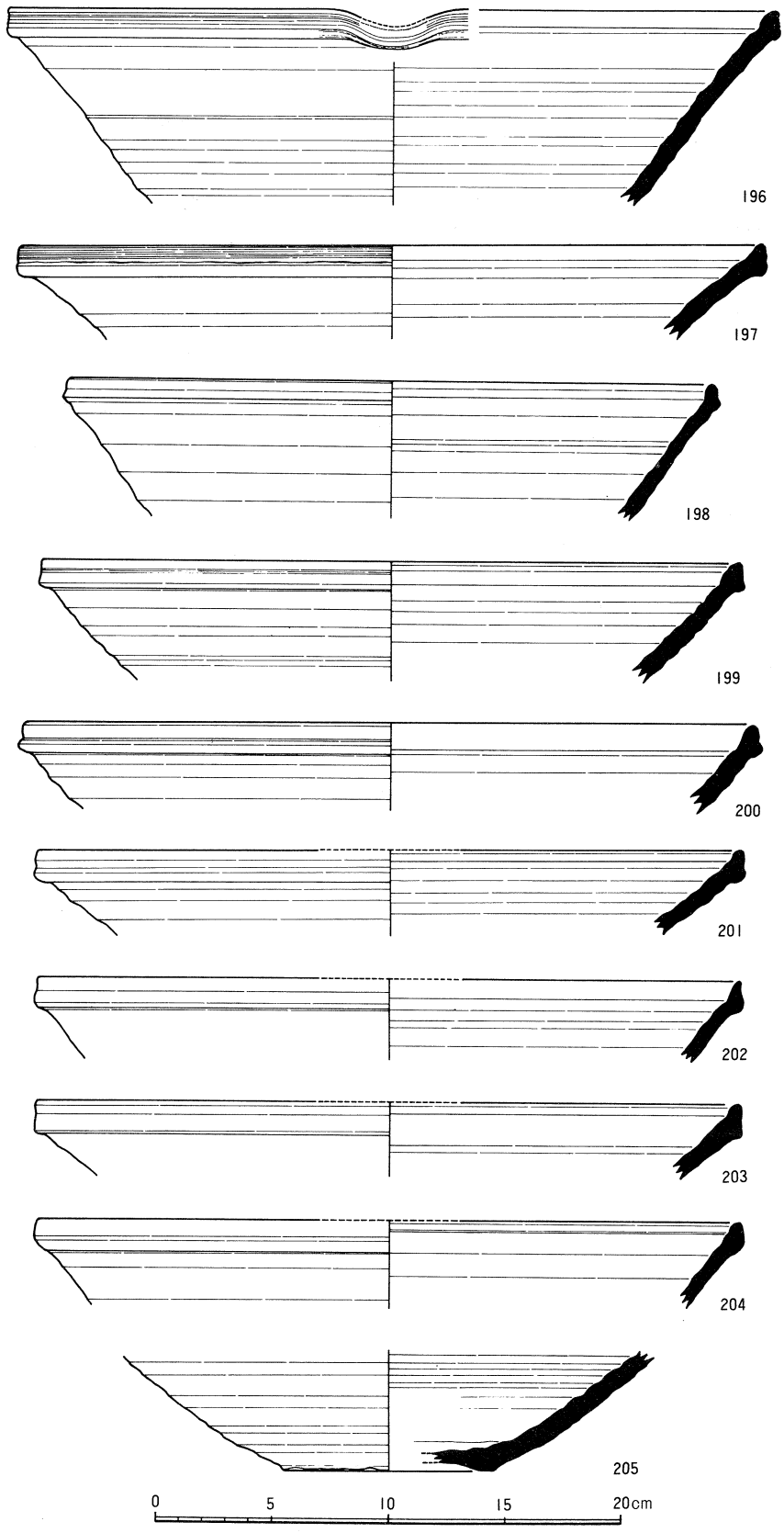
甕（215）　口縁部の残るものは１個体だけであるが、各部の破片から推定して、大甕が数個体あったものと考えられる。

胴部外面には、常滑に多くみられる格子状の押印が認められる。また、外面平行叩きで、内面に粗い平行線の内型の痕を残すものもみられる（241、244）。これについては、須恵器の可能性もある。

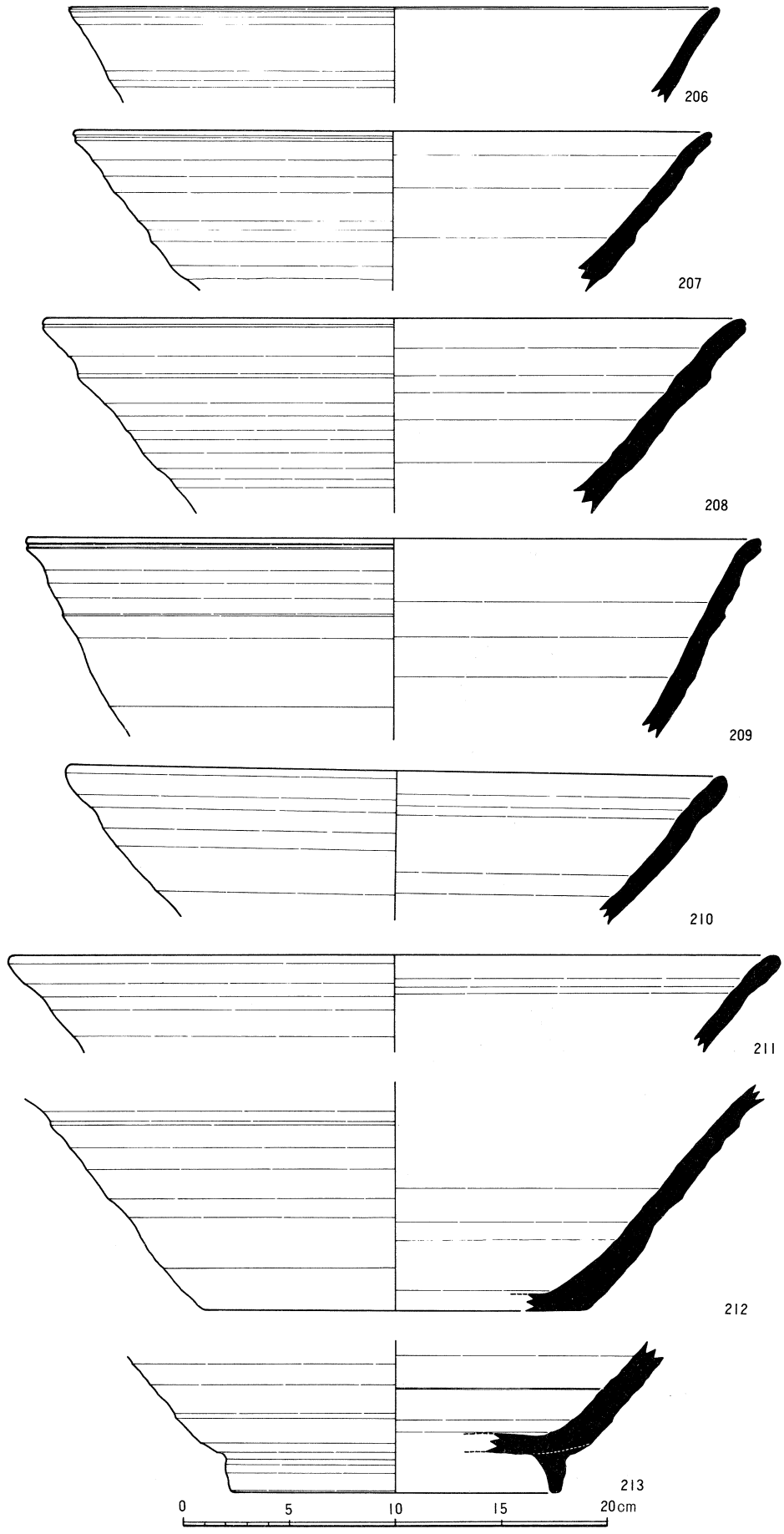
H　磁器（第19図）

青磁　椀が大半を占め、若干の皿と合子の破片が１点認められる。

椀は約10数個体程認められるが、そのうち実測の可能なものは５個体程である。椀の内側につる草状の彫文の見られるものや、外面に蓮弁文、猫掻とよばれる櫛描文を施すものもある。形態、色調、胎土等から、龍泉窯のものと同安窯のものが描出できる（216～219、221）。また、産地のわからないものも多い。



第17図　第102トレンチ出土土器実測図（須恵器２）



第18図　第102トレンチ出土土器実測図（陶器）

皿は、内底面に櫛描きを施した底部のやや厚いものである。龍泉窯のものと考えられる。

合子は、受け部を作り出した身の小破片で、外面には菊花文を浮き出した清楚な作りである。景徳鎮窯と考えられる。

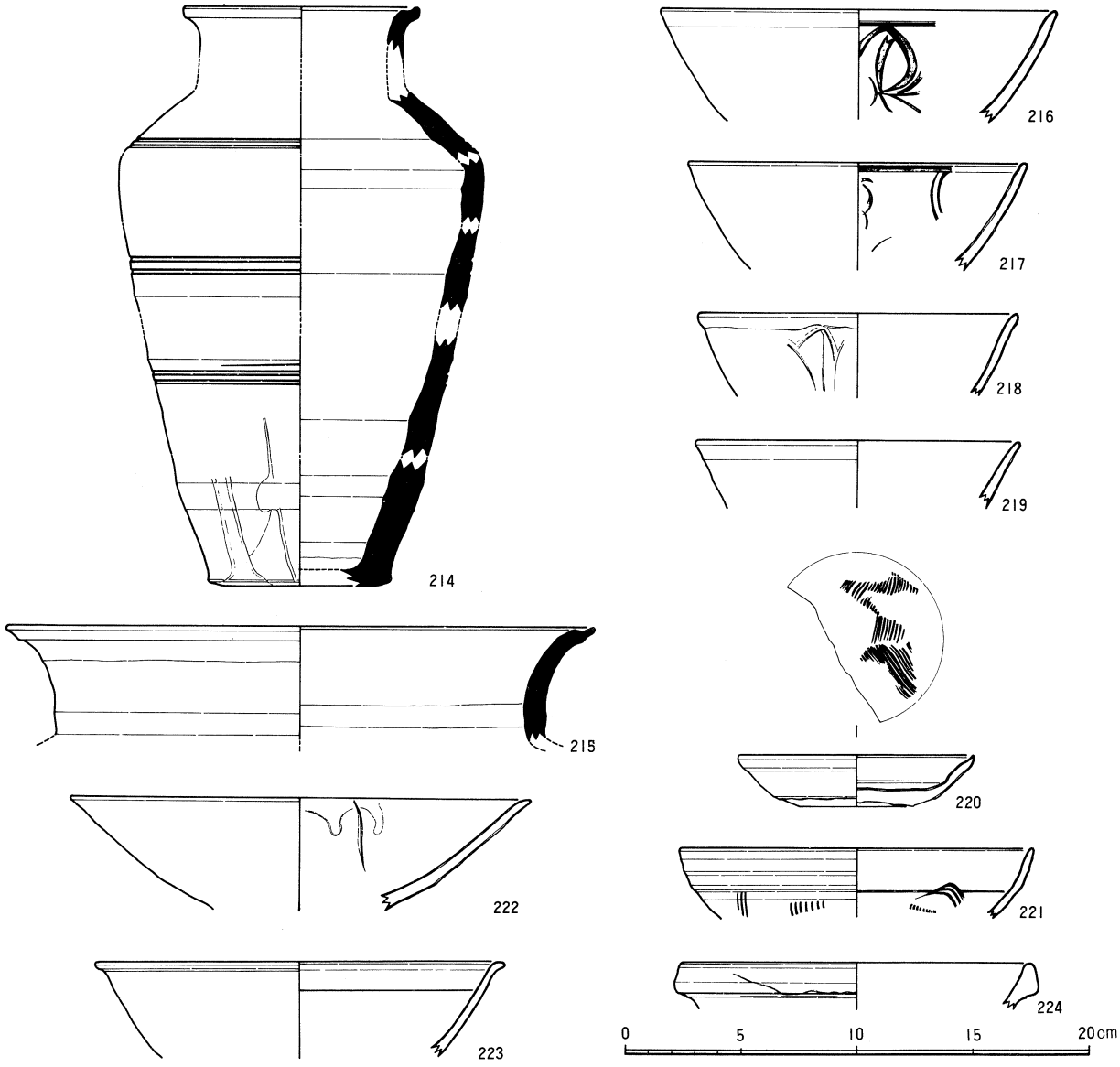
白磁　　器形は椀のみで、小破片を含み12個体を数える。そのうち実測可能なものは３個体で、口縁端部を外方へ引き出したものと、口縁部外面を肥厚させるものとがある。福建付近の窯と考えられる。

(2)　鉄製品（第21図）

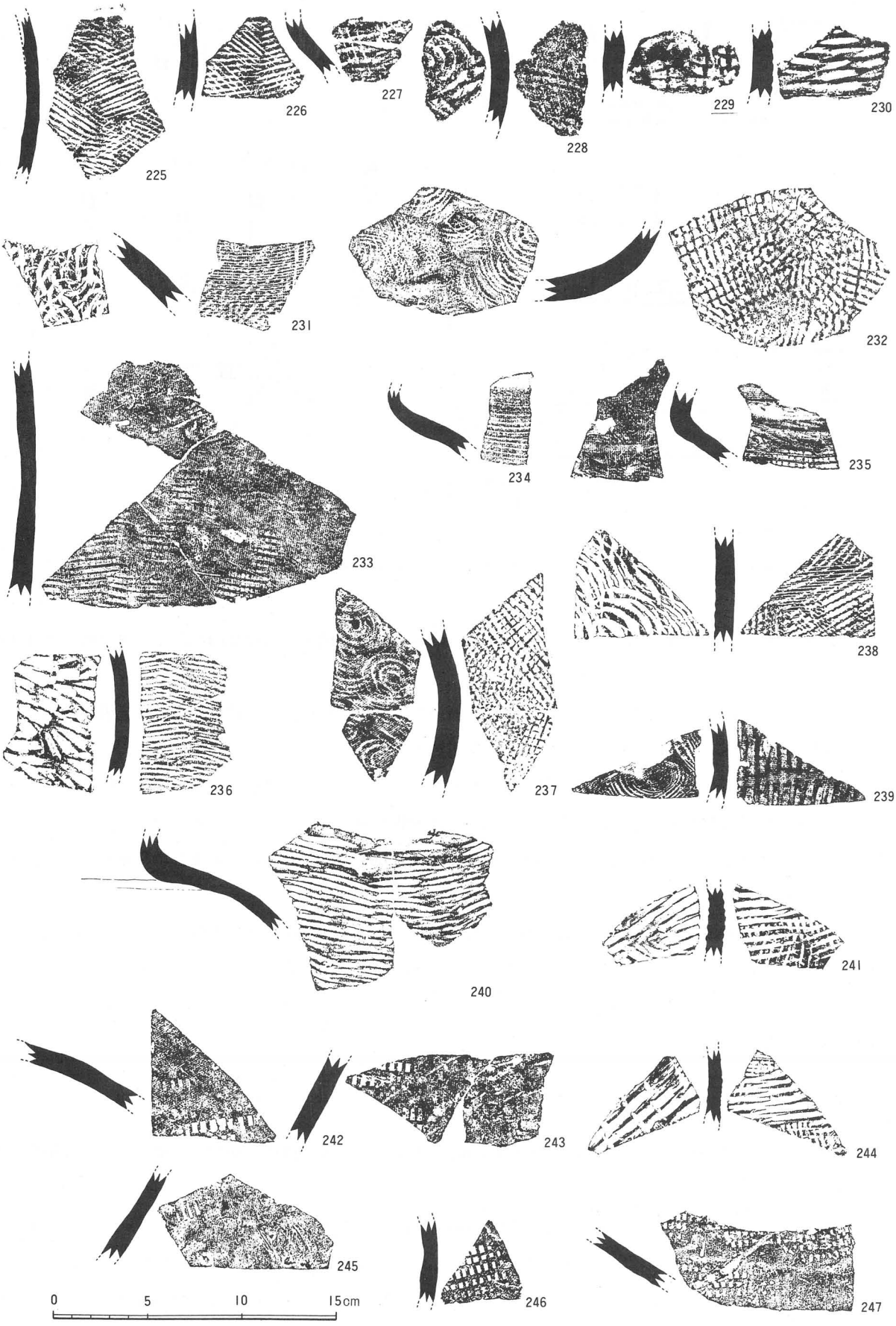
（第20トレンチ）

刀子　(1)　Ｐ－２から出土した。切っ先と柄端部が欠損しているが、現長15.35cmを計り、柄部には木質が残る。刃は折り曲げて作ったと思われ、断面が中空になっている。

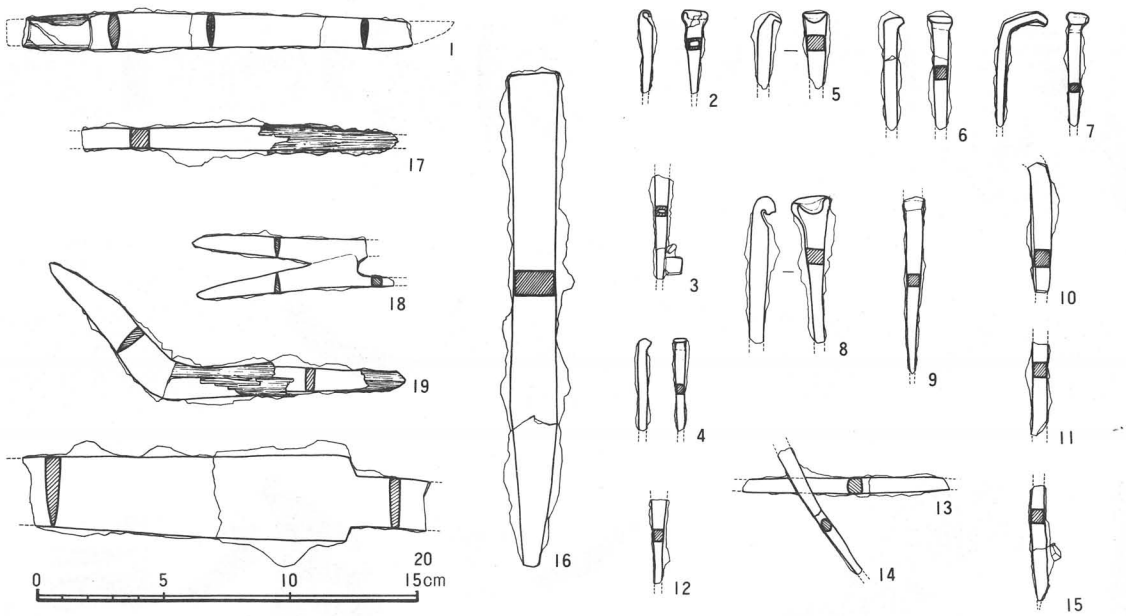
釘（２、３）　２はＰ－６、３はＰ－10から出土した。釘はいずれも角釘で、一端を薄くし折り曲げて頭部を作る。本体は一枚の鉄板を折り曲げて作ったと思われ、断面が中空になっている。



第19図　第102トレンチ出土土器実測図（陶器、磁器）



第20図　第102トレンチ出土土器拓本（土師器、須恵器、陶器）



第21図　鉄製品実測図　　1～3　第20トレンチ出土　5～20　第102トレンチ出土
4　第57トレンチ出土

（第57トレンチ）

釘　(4)　第２層褐灰色粘質土から出土した。角釘で、一端を折り曲げて頭部を作る。

（第102トレンチ）

刀　(20)　現長16.1cm、刃渡り12.2cm以上、刃最大巾3.45cmを計り、柄部の巾は２cmである。刃の残存部はほぼ真っ直ぐで、そりがあるかどうかは不明確である。

鋏　(18)　形態から鋏かと推定される。細長く端部の鋭い片刃が、２枚重なって錆付いている。刃は内側についており、相対している。握り部と思われる所は、断面四角形をなす。

不明鉄製品　(19)　「く」の字状に曲げて作られたもので、片刃の工具かと推定される。刃渡り6.9cmで、刃は「く」の字状に曲がった外側につけられている。柄部には木質が残り、ほぼ完形品と考えられる。

鑿　(16)　全長19.4cmであり、握り部は巾1.7cmの断面長方形をなす。頭部は平らで、先端部は先細りになる。先端は使用時に磨滅したものと思われ、平らである。ほぼ完全な形で残る。

大釘　(17)　両端が欠損しているが、現長12.4cmを計る角釘である。残部中程より先端にかけて木質が残る。

小釘　（５～15）　12はＰ－18から出土したが、それ以外は包含層中からの出土である。現長は8.2～3.1cmまで各種あるが、いずれも角釘で、頭部を折り曲げて作る。

(3)　土製品（第22図）

第20トレンチ・Ｐ－９から土錘１点が出土し、第98トレンチ・第２層の黄褐色粘質土の落ち込みの中から土製円板１点が出土した。

土錘　(21)　小型の紡錘形で、全長1.7cm、最大径0.8cmである。中央部に直径２mmの孔を穿つ。胎土は精良、色調は赤褐色を呈す。

土製円板　(22)　信楽焼の擂鉢の口縁部に近い部分の破片を円形に整形したもので、直径2.7cm、厚さ0.55cmである。色調は淡赤褐色で、胎土には少量ながら微砂が混っている。焼成は硬。整形は、陶器片を打割った後、側面を磨いて丸く仕上げている。陶器の時期と、他の包含層出土遺物から見て、室町時代以降の遺物ではないかと推定され、その用途は冥銭かと推定される。

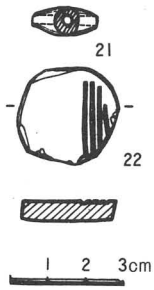
⑧

(4) 石製品（第23、24図）

滑石製円板 (23) 第64トレンチ・第３層の黒褐色粘質土より出土した。破損しており、全体の約¼ほどが残っている。頂部には、格子に切込みがある。

砥石（25～30） 第20トレンチのＰ－４より１点（25）、第56トレンチ・第２層の灰褐色粘質土より１点（26）、第102トレンチの包含層より４点出土した。

石質より見て、表面のなめらかな仕上砥と、多少ザラザラして粗い粗砥の二種類が考えられる。このうち仕上砥の石質は、粘板岩質であるが炭素を含まないアブノール板岩とよばれるものである。また粗砥は、徴花崗岩（アプライト）とよばれるもので、石英粒が多く削り易い石質である。材質は、各トレンチとも共通する（アブノール板岩25～27、徴花崗岩28～30）。



第22図 土製品実測図

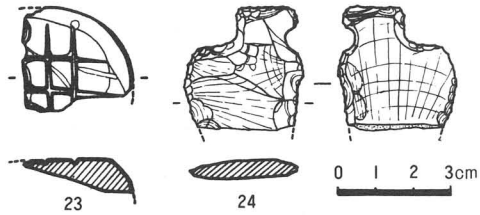
石匙 (24)

昭和51年度工事地区で採集されたもので、サヌカイト製の縦型の石匙であるが、先端部分が折れて欠損している。

(5) その他

銭貨（図版93）

第102トレンチの包含層中より５枚重なった状況で出土した（第３図）。腐蝕が著しく、各々付着した状態で判別できるものは、は、「開元通宝」と「元豊通宝」各１点であった。



第23図 滑石製円板・石匙実測図

水晶（図版94）

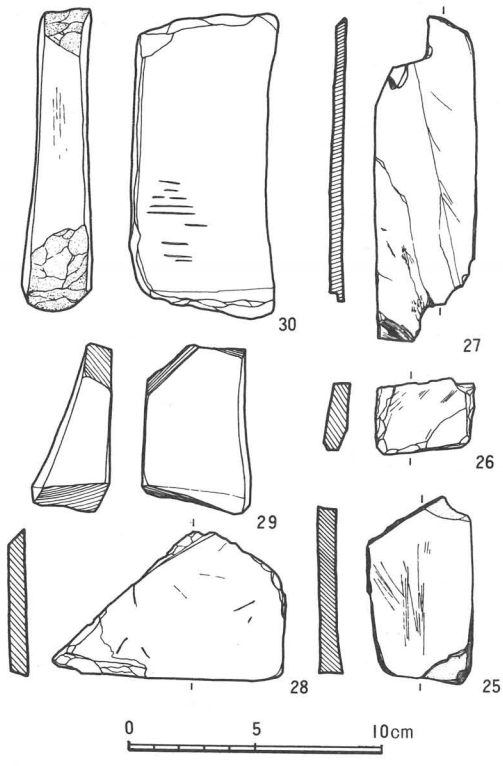
黒味がかった約 6 cmほどの水晶と、白く透き通った約3.5 cmほどの小破片がある。両者ともに自然とは思われない打撃の跡があるが、石器のような法則性は認められない。第102トレンチの包含層より出土した。

瓦？（図版95－Ａ，Ｂ）

第102トレンチの包含層中に、きわめて磨滅の著しい平瓦と思われる破片が２点認められた。

鉄滓（図版92、95）

第20トレンチで１点（Ｆ－10）、第102トレンチで数十点の鉄滓が包含層中より出土している。小鍛治に伴う鉄滓と考えられる。



第24図 砥石実測図

第１表　中ノ坊遺跡出土土器観察表

第20トレンチ

器形	No.	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器					
皿	1	口径　12.5 器高　2.3	○体部は、くの字状に大きく外反する。 ○底部は平底。	○体部内外面は強い横ナデ。 ○底部外面は不調整。 ○内底面の仕上げはナデ。	○詳細は別表参照
	2 ～ 6	口径2　9.6 3　8.6 4　7.5 5　8.2 6　7.5 器高2　1.9 3　1.9 4　1.9 5　1.4 6　1.4	○体部は、くの字状に大きく外反する。 ○底部は、わずかに上げ底。	○体部内外面は強い横ナデ。 ○体部に指圧痕が残る。 ○内底面の仕上げはナデ。	
	7	口径　9.3 器高　1.4	○体部・底部の境界は不明瞭。	○体部内外面は強い横ナデ、指圧痕が著しい。 ○底部外面は不調整。	○詳細は別表参照
須恵器					
鉢	8	口径　不明 残存器高7.9	○口縁端部は面とりする。 ○口縁端部内面が、わずかに肥厚する。	○内外面ロクロナデ。	（色調）淡青色 （胎土）１mm程度の砂粒を含む。 （焼成）硬 ※気泡多し。
陶器					
甕？	F－1 2		○不明	○内外面ナデ。	（色調）外）褐黄色 内）暗黄灰色 （胎土）１～２mmの砂粒を含むが良。 （焼成）硬 ※常滑

第12トレンチ

陶器					
不明	F－3			○片面ロクロナデ。 ○片面剥離。	（色調）淡赤褐色 （胎土）１～２mmの砂粒を含むが良。 （焼成）硬 ※信楽

第102トレンチ

土師器					
皿	9		○口縁端部は丸くおさめる。 ○体部は内弯気味に、ゆるやかに立ち上がる。	○体部内外面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。 ○内底面の仕上げはナデ、指圧痕が残る。	○詳細は別表参照
	10 ～ 19		○口縁端部が面とりによって、つまみ上げたように直立するものがある。 （12・17・18） ○体部は内弯気味に、ゆるやかに立ち上がる。 ○底部は平底であるが、わずかに上げ底気味のものもある。	○口縁端部に面とりを行なう。 ○体部内外面は横ナデ。 ○体部に指圧痕の強く残るものがある。 （12・13・18・19） ○底部外面は不調整。	○詳細は別表参照
	20		○体部は直線的に外方へ開く。 ○底部は平底。	○体部内外面は横ナデ。 ○体部外面に、わずかに指圧痕が残る。	○詳細は別表参照
	21 ～ 63		○口縁端部は丸くおさめる。 ○体部は内弯気味に、ゆるやかに立ち上がる。 ○底部は平底であるが、わずかに上げ底気味のものもある。	○体部内外面は横ナデ。 ○体部に指圧痕の残るものがある。 （21・22・32・38・58） ○底部外面は不調整。	○詳細は別表参照
	64 ～ 69		○底部は平底。 ○器高は、21～63のものに比べて浅い。	○口縁端部に面とりを行なうものがある。（68） ○体部内外面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。	○詳細は別表参照
	70 71		○体部・底部の境界は不明瞭。	○体部内外面は横ナデ。 ○底部外面は不調整、指圧痕が残る。	○詳細は別表参照
	72 73		○口縁部は屈曲する。 ○口縁端部は内側に巻き込む。 ○器壁は薄い。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は不調整。	○詳細は別表参照
	74		○口縁端部は丸くおさめる。 ○体部は直線的に外方へ開く。 ○底部は厚みのある平底。	○ロクロ成形。 ○糸切り底。	○詳細は別表参照
椀	75 ～ 78	底径75 6.6 76 7.6 77 7.6 78 7.3	○体部は内弯気味に開く。 ○高台をもつ底部。 ○高台は少し外方へ開く。	○体部内外面はロクロナデ。 ○糸切り底。 ○はり付け高台。	（色調） 75・78、白黄色 76・77、淡褐色 （胎土） 75、精良 76・77、良 78、精良（殆ど砂粒を含まず） （残部） 75・77、⅓、76・78、¼

	79	底径　4.9	○高台は75～78に比べて高く、径は小さい。 ○高台は半ほどから外方に開く。	○器壁は、やや薄手。 ○はり付け高台。 ○高台内外面は横ナデ。	(色調) 淡赤黄色 (胎土) 精良 (残部) ¼弱
椀 または 皿	80 ～ 95	底径80 5.3 81 4.8 82 5.2 83 4.8 84 5.0 85 5.0 86 5.3 87 7.0 88 5.8 89 6.4 90 5.1 91 6.3 92 5.9 93 6.2 94 7.0 95 6.1	○底部は平底。	○ロクロ成形。 ○糸切り底。	(色調) 80·89、淡白赤色 81、淡白褐色 82·83·84·86·91·92·94、以上白黄色 85、淡赤褐色 87、淡白黄色 88·95、淡黄赤色 90、淡褐色 93、淡黄褐色 (胎土) 80·82·83·84·85·87·89·91·92·93·94·95 以上精良 86·88·90、良 81、1㎜程度の砂粒を含むが良 (残部) 80·81·82·83·84·85 以上底部完存 88、½ 86·87·92、⅓ 89·90·93、¼ 91、¼弱 94·95、⅕
	96	底径　7.4	○体部は、やや深い。 ○底部は平底。	○ロクロ成形か？ ○糸切り底。	(色調) 淡白灰色 (胎土) 精良 (残部) ½強 ※全体に磨滅著しく、整形観察不能。
甕	97	口径　17.0	○口縁部は外反する。 ○口縁部は、やや肥厚する。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○内外面は横ナデ。	(色調) 淡黄橙色 (胎土) 砂・小石を含み粗。 (残部) 1/13
	110		○口縁部は大きく外反する。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○大型の甕か？ ○F－7と同一個体。	○口縁部外面に粘土紐の跡が残る。 ○内外面は横ナデ。	(色調) 白黄色 (胎土) 砂粒・小石を含むが良。 (残部) 小破片 ※復元不能
(拓本)	225		○胴部。	○外面に、細手の平行タタキを左右交互に行なう。	(色調) 外) 赤褐色 内) 黄白色 (胎土) 1㎜程度の砂粒を含む。
	226		○胴部。	○外面に、細手の平行タタキを左右交互に行なう。	(色調) 外) 淡赤褐色 内) 乳白色 (胎土) 1㎜程度の砂粒を含む。

	227		○肩部あるいは頸部	○太めの平行タタキ。	（色調）乳白色 （胎土）１～２㎜の砂粒を含む。 ※鍋か？
	228		○胴部。	○外面に、わずかに太めの平行タタキが残る。 ○内面は同心円タタキ。	（色調）外）明茶褐色 内）乳白色 （胎土）１～２㎜の砂粒を含む。
	229		○胴部。	○外面に格子タタキ。	（色調）淡黄色 （胎土）精良
	230		○胴部。	○太い平行タタキ。	（色調）外）乳黄色 内）淡赤白色 （胎土）１㎜程度の砂粒を含む。 腐り礫を含む。 ※鍋か？
鍋	98 99	口径 98　38.4 99　23.2	○口縁部は、やや外反する受け口。 ○口縁端部は窪む。（98） ○胴部は下方へ、ほぼ垂直に伸びる。	○口縁部は横ナデ。 ○胴部内外面は不明。	（色調） 98、外）黒色 （スス付着） 内）白黄色 端部）淡黒褐色 99、淡灰色 （胎土） 98、精良 雲母を含む。 99、１㎜以下の砂粒を若干含む。 （残部） 98、1/25　99、1/8 ※98、全体に磨滅。 瓦質か？ 100･101と同一個体か？
羽　釜	100 101	口径 100　25.9 101　23.2	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は内側へ折り返り、肥厚する。	○内外面は横ナデ。	（色調） 100、外）淡赤黄色 内）黄褐色 101、外）黄褐色 内）淡黒褐色 （胎土） ともに１㎜前後の砂粒を含み粗。 （残部） 100、1/18　101、1/16
	102 103	羽径 102　26.9 103　25.9	○羽は水平に伸びる。	○外面は横ナデ。 ○内面はナデ仕上げ。 ○羽は、はり付け。	（色調） 102、外）暗褐色 内）淡褐色 103、外）明白褐色 内）淡褐色 （胎土） ともに１～２㎜の砂粒を含み粗。

					（残部） 102、1/10　103、1/16 ※102、羽より下方にスス付着。
	104 105	口径 104　22.2 105　19.0	○口縁は上方へ伸びる。 ○口縁端部は肥厚し、内端が、やや突出する。 ○羽は水平に伸びる。	○内外面は横ナデ。 ○羽は、はり付け。	（色調） 104、外）灰黒色 （イブシか？） 内）白黄色 105、黄橙色 （胎土） 104、精良 105、1㎜程度の砂粒を含むが、きめ細かく良。 （残部） 104、1/16　105、1/10 ※104、瓦質か？ 105、内外面磨滅。
	106	口径　11.6	○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は丸味を帯びる。 ○口縁端部外面に沈線を施す。 ○羽は短い。	○内外面は横ナデ。 ○羽は、はり付け。	（色調）外）暗灰色 内）淡褐色 （胎土）1㎜以下の砂粒を含み、やや粗。 （残部）1/10
	107	口径　15.6	○口縁端部は外方へ丸く折り返す。 ○口縁端部の外面折り返り部が、沈線状になる。	○内外面は横ナデ。 ○胴部下方に指圧痕が残る。 ○羽は、はり付け。	（色調）黄褐色 （胎土）1㎜以下の砂粒を含み、やや粗。 （残部）1/12 ※口縁部外面にスス付着。
	108	口径　21.4	○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○羽は水平に伸びる。	○口縁端部内外面は横ナデ。 ○口縁内面はハケ仕上げ。 ○胴部内面はナデ。 ○口縁部外面及び胴部内面に指圧痕が残る。 ○羽は、はり付け、横ナデ。	（色調）外）淡黒褐色 内）黄褐色 （胎土）2㎜程度の砂粒を含み粗。 （残部）1/16 ※羽より下方にスス付着。
	109	口径　17.6	○口縁部は強く内傾する。 ○口縁部内端が突出する。 ○胴部に最大径。 ○羽は短い。	○口縁部内面は粗いハケ。 ○口縁端部及び外面は横ナデ。 ○羽は、はり付け。	（色調）外）淡褐色 内）暗褐色 （胎土）最大3㎜程度の砂粒を含みやや粗。 （残部）1/8
黒色土器・瓦器・瓦質土器					
椀	111	口径　16.5	○口縁部は、やや外反気味に開く。 ○口縁端部内側は沈線状に窪む。 ○体部は、ゆるやかに内彎する。 ○断面方形の、低い高台がつく。	○口縁部は横ナデ。 ○体部は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○底部内面は、ジグザグのヘラミガキ。 ○はり付け高台。	（色調）外）暗赤褐色 内）黒色 （胎土）良 （焼成）硬 （残部）1/3 ※黒色土器A

甕	112	口径　12.6	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は、わずかにつまみあげる。	○横ナデ。	（色調）外）暗赤褐色～チョコレート色 内）黒色 （胎土）精良 細かい黒雲母・金雲母を含む。 （焼成）硬 （残部）1/12 ※黒色土器A
椀	113 ～ 117	口径 113　15.6 114　14.2 115　16.8 116　13.6 117　15.1	○口縁端部内側が沈線状に窪む。 ○体部は内弯気味に伸び上がる。	○口縁部は横ナデ。 ○口縁部内面はナデ仕上げの後、花弁状のヘラミガキを施す。 ○口縁部外面に、横方向のヘラミガキを施す。 ○体部外面は不調整。 ○体部外面に、ヘラミガキを施すものもある。(114)	（色調） 113、外）淡黄色（薄黄土色） 内）黒色 114、外）黄褐色 内）黒色 115、外）淡黄色（他よりやや白味がかる） 内）黒色 116、外）淡黄色 内）黒色 117、外）淡黄色 内）黒色 （胎土） 113、1～2㎜程度の砂粒を若干含むが良。 114、精良。 115、2㎜程度の砂粒を若干含むが精良。 116、良 117、2㎜程度の砂粒を若干含むが良。 （焼成） 113·114·115·117、硬 116、やや軟 （残部） 115·116·117、1/5 114、1/6 113、1/8 ※近江型黒色土器
	118 ～ 120	底径 118　5.4 119　5.0 120　6.2	○断面三角形の付け高台。(118·120) ○断面方形の付け高台。(119)	○高台は内外面とも横ナデ。 ○内底面に、花弁状ヘラミガキが残る。(118·120)	（色調） 118、外）白黄色（淡白褐色） 内）黒色 119、外）白黄色の素地 内）黒色 120、外）黄白色の素地 内）黒色 （胎土） 118·120、精良

					119、小石を含むが精良。 （焼成） すべて硬。 （残部） 118、底部完存 119、½ 120、½ ※近江型黒色土器
椀	121	口径　7.4	○口縁部は、ゆるやかに外反する。 ○体部は、ゆるやかに内弯する。 ○断面三角形の、やや外開きの高台が付く。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は不調整。 ○体部内面は横方向のヘラミガキ。 ○内底面はジグザグのヘラミガキ。	（色調）黒色（ミガキ部は銀化し、内面は灰黒色に見える。） （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）⅔強 ※瓦器
	122	口径　13.0	○口縁部は、やや内弯気味に開く。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○口縁部は横ナデ。 ○体部外面は不調整。 ○体部内面は、横方向の細く粗いヘラミガキ。	（色調）灰黒色 （胎土）精良 （焼成）やや軟（全体に溶けて器面が荒れるが、器体自体は固い。） （残部）¼ ※瓦器
	123	底径　5.5	○断面方形の低い高台。	○体部外面は不調整。 ○内底面は一重のヘラミガキ。	（色調）外）黒色 内）灰黒色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）½強 ※瓦器
釜	124	口径　15.0	○口縁部は、やや内傾する。 ○口縁部内端は、やや突出する。	○内外面は横ナデ。	（色調）灰黒色 （胎土）精良 （焼成）やや軟 （残部）¼ ※瓦質
緑　　釉					
椀	125 ～ 129	口径 125　9.3 126　12.2 127　12.4 128　10.5 129　12.9	○口縁部は外反して開く。 ○口縁部と体部との境に、わずかに稜がつく。(126)	○ロクロナデ。	（色調） 125、淡緑色 断面）灰色 126、暗緑色 断面）暗灰色 127、暗緑色 断面）灰色 128、濃鶯に近い緑色 断面）淡黄色 129、暗緑色 断面）暗灰色 （胎土） 125･126･127･129、良

					128、精良 （焼成） すべて硬 （残部） 128・129、1/12 126、1/13 125・127、1/16 ※125、小破片のため、 推定復元。 ※125・126、尾北・篠岡 127、東濃・恵那 128、丹波・亀岡 129、近江・山ノ神
皿 （段皿）	130	口径　13.8	○口縁部は強く外傾して開く。 ○体部と底部との境に段がめぐる。	○ロクロナデ。	（色調）緑色 断面）暗灰色 （胎土）良 （焼成）硬 （残部）1/16 ※尾北・篠岡
	131	口径　11.0	○口縁部は、ゆるやかに外反する。	○ロクロナデ。	（色調）緑色 断面）灰色 （胎土）良 （焼成）硬 （残部）1/10 ※東濃・恵那
椀 または 皿	132	底径　5.0	○平底で、底部がやや窪む。	○小破片のため不明。	（色調）緑色 断面）暗灰色 （胎土）良 （焼成）硬 （残部）1/4 ※尾北・篠岡
	133	底径　7.2	○しっかりした高台をもつ。 ○高台の内面端に、ゆるい稜をもつ。 ○高台上部に、波状の釉の厚い部分がある。	○ロクロナデ。 ○付け高台。	（色調）やや黄味がかった暗緑色 断面）硬質黄褐色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/9 ※丹波・亀岡
皿？	134	底径　7.1	○蛇ノ目高台。	○ロクロナデ。	（色調）淡黄緑色 断面）淡黄褐色 土師質 （胎土）精良 （焼成）やや軟 （残部）1/5 ※丹波・亀岡か？
	135 136	底径 135　5.8 136　7.0	○高台は、やや外方に伸びる。(133に比べ低い高台) ○高台内面に段をつける。	○ロクロナデ。 ○糸切り底。（135）	（色調） 135、淡緑色 136、暗緑色 断面）淡灰色 （胎土）ともに良

					（焼成）ともに硬 （残部）135、⅕ 136、¼ ※ともに近江・山ノ神
灰　　釉					
瓶	137	口径　12.4	○口縁部は外傾する。 ○口縁端部は垂下し、外面はわずかに窪む。	○ロクロナデ。	（色調）白灰色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/14 ※東濃系
椀	138 〜 144	口径 138　12.4 139　15.0 140　14.4 141　12.2 142　13.6 143　11.6 144　11.8	○口縁端部は、わずかに外反する。 ○口縁部が、やや直立気味。（141・142・144） ○体部は、ゆるやかに内弯する。 ○高台は、ゆるやかに外方へ開く。（138）	○口縁部内面に強いナデの条痕。（139・140） ○はり付け高台。 ○糸切り底か？（138） ○ロクロナデ。	（色調） 138、白灰色 139、暗白灰色（釉は灰かぶりのような淡緑色） 140、淡黄褐色 141、淡白灰色 142、淡白灰色 143、外）淡青白色 内）淡緑白色 144、外）淡白灰色の素地に暗黄緑色の自然釉 内）白灰色 （胎土）すべて精良 （焼成）すべて硬 （残部） 138、1/6弱　140、1/14 141、1/9　142、1/12 139・143・144、1/10 ※すべて東濃系
皿	145 〜 153	口径 145　12.0 146　10.3 147　14.2 148　15.8 149　13.6 150　14.0 151　12.0 152　10.8 153　12.2 器高 146　2.3 151　2.5	○口縁部は外傾して開く。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○口縁端部が外反するものもある。（148・149） ○高台端部が、やや内弯する。（145） ○高台は断面三角形を呈し下方に伸びる。（146・151）	○はり付け高台。 ○糸切り底。（146・151） ○糸切り底か？（145） ○内面に重ね焼きの跡が残る。（146・151） ○ロクロナデ。	（色調） 145、灰色 146、青白色（釉） 147、灰色 148、淡白灰色 149、白色（外面は、やや青味がかる） 150、暗灰色（部分的に暗緑色の釉） 151、外）淡青白色 内）黄緑色 152、淡青灰色（全体に光沢） 153、灰色（全面釉） （胎土）すべて精良 （焼成） 147、軟 145・146・148・149・150・151・152・153、以上硬 （残部）

					146、完形 151、底部完存、口縁部わずか 145、1/6　147、1/10 148、1/16　149、1/12 150、1/13　152、1/11 153、1/10 ※145・146・147・148・149・150、以上東濃系 151・152・153、以上東濃・永田
段皿	154 〜 160	口径 154　15.2 155　13.0 156　11.4 157　11.6 158　11.2 159　11.4 160　11.0	○口縁部は強く外傾して開く。 ○体部内面に段をもつ。	○ロクロナデ。	(色調) 154、白灰色、全面釉 155、淡白灰色、〃 156、淡灰色 157、淡黄白色 158、淡黄灰色 159、淡灰白色 160、淡灰色 (胎土) すべて精良 (焼成) 154・155・156・157・158・160、以上硬 159、やや軟 (残部) 154・158、1/8　156、155・157、1/12　159、1/5 160、1/11 ※すべて東濃系
	161	底径　6.5	○体部は外反する。 ○体部は内面に段をもつ。 ○高台は断面方形で、下方に伸びる。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。 ○糸切り底。	(色調) 淡灰色 (胎土) 精良 (焼成) やや軟 (残部) 1/2 ※東濃系11C後半
皿？	162 163	底径 162　8.2 163　7.2	○高台は外方へ開く。 ○高台は断面方形。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	(色調)　162、淡白灰色 163、白灰色 (胎土) ともに精良 (焼成) ともに硬 (残部) ともに1/4 ※東濃系
椀	164	底径　8.0	○体部は内弯する。 ○高台は、わずかに外方へ開く。 ○高台は薄く、外面半ばに稜をもつ。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	(色調) 淡灰色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/4 ※東濃系
椀？	165	底径　5.8	○高台は、ほぼ直立する。 ○他の底部に比べ高台は高く、径は小さい。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	(色調) 白色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/6 ※東濃系

皿？	166	底径　7.8	○高台は外方へ開く。 ○高台は断面方形で、やや丸みをもつ。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	（色調）淡灰色 （胎土）良 （焼成）硬 （残部）½ ※東濃系
椀？	167	底径　6.8	○底部は平担で、体部の立ち上がりとの境界に稜がつく。 ○高台は薄く、大きく外方へ開く。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	（色調）白灰色 （胎土）1～2㎜の砂粒を含むが良。 （焼成）硬 （残部）¼ ※東濃系
椀	168 169	底径 168　6.7 169　5.4	○体部は内弯する。 ○高台は外方へ開く。(168) ○高台は断面方形で、端部がやや窪む。（169）	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	（色調） 168、淡灰色 169、外）灰色 内）黄緑色（緑色が班点状） （胎土）ともに精良 （焼成）ともに硬 （残部） 168、⅓　.169　½ ※東濃系
皿？	170 171	底径 170　6.7 171　5.9	○高台は、上部外方に稜がつき、下方に伸びる。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	（色調） 170、淡白灰色 171、淡灰色 （胎土）ともに精良 （焼成） 170、やや甘いが硬 171、硬 （残部） 170、⅓　171、⅕ ※東濃系
皿？	172	底径　7.4	○体部は、ゆるやかに外方に開く。 ○高台は低い。 ○高台端部は外方に開く。	○ロクロナデ。 はり付け高台。	（色調）淡白灰色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）⅐ ※東濃系11C後半
	173 ～ 176	底径 173　7.0 174　6.0 175　7.0 176　6.6	○体部は、ゆるやかに外方に開く。（173） ○高台は断面三角形で、低い。 ○高台は、内傾するもの(173･176)と、やや開くもの（174･175）とがある。 ○端部にキザミが回る。（175） ○段皿か？（176）	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	（色調） 173、白灰色 174、淡灰色 175、淡青白色 176、緑黄色 （胎土） 173、5㎜程度の砂粒を含むが精良 174、2㎜程度の砂粒を含むが精良 175･176、以上精良 （焼成）すべて硬 （残部） 173、½弱　174、⅓ 175、⅙　176、¼強 ※東濃系

	177	底径　6.1	○底部は平坦で、体部の立ち上がりとの境界に稜がつく。 ○高台は断面方形で、低い。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	(色調) 灰色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/3 ※東濃系
	178	底径　6.3	○高台は断面方形で低く、やや外方に開く。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	(色調) 暗黄灰色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/4 ※東濃系
椀 (山茶椀)	179 180	底径 179　6.6 180　6.1	○体部は、ゆるやかに内弯する。 ○高台は外方へ開く。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。 ○施釉せず。	(色調) 179、外) 淡灰色 内) 白味が強い 180、淡白灰色 (胎土) ともに精良 (焼成) ともに硬 (残部) 179、1/3強　180、1/4 ※ともに東濃系 180、高台端部にモミ痕あり。
須恵器					
椀	181	口径　13.4	○体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯する。	○ロクロナデ。	(色調) 灰色 (端部外面は淡黒灰色) (胎土) 良 (焼成) 硬 (残部) 1/12
	182 183	口径 182　15.2 183　14.6	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸くおさめる。(183)	○ロクロナデ。	(色調) 182、淡灰色 183、淡灰色 (端部外面はやや暗) (胎土) 182、良 183、微砂を含む。 (焼成) ともに硬 (残部) ともに1/12
	184	底径　6.6	○高台は低く、外反する。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。 ○高台端部外面は、横ナデによって面とりを行なう。	(色調) 暗灰色 (胎土) 砂粒を多く含む。 (焼成) 硬 (残部) 1/5
	185		○高台は欠損。	○ロクロナデ。 ○糸切り底。 ○はり付け高台。	(色調) 白灰色 (胎土) 良 (焼成) 硬 (残部) 1/3
	186 187	底径 186　8.0 187　6.6	○底部中央が窪む平底。	○ロクロナデ。 ○糸切り底。	(色調) ともに灰色 (胎土) 186、良 187、砂粒を含むが良。 (焼成) ともに硬

					(残部) 186、1/10　187、1/2 ※187、播磨・久留美か
	188 〜 192	底径 188　4.9 189　6.6 190　5.3 191　6.0 192　5.2	○体部は内弯気味に開く。(189・190) ○平底。	○ロクロナデ。 ○糸切り底。	(色調) 188・190・192、暗灰色 189、淡灰色 191、淡白灰色(若干黄味がかる) (胎土) 191、精良 188・190、良 189、微砂を含むが良。 192、砂粒を若干含む。 (焼成) 188・190・191・192、硬 189、やや軟 (残部) 188・189・192、口上1/4 190、1/5　191　1/6 ※188・189、端部にワラの圧痕あり。
壺	193	口径　17.0	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○器壁は、やや厚みをもつ。	○ロクロナデ。	(色調)淡青灰色 (胎土)2〜3㎜の砂粒を含む。 (焼成)やや硬 (残部)1/9
	194	底径　12.6	○体部は、内弯気味に立ち上がる。 ○平底。	○ロクロナデ。	(色調)外)淡白灰色 内)淡灰色 (胎土)1〜3㎜の砂粒を含む。 (焼成)硬 (残部)1/5
甕	195	口径　25.2	○口縁部は外反気味に開く。 ○口縁端部は、上方にやや突出する。	○口縁部から頸部にかけて内外面は横ナデ。 ○胴部外面は、浅い平行タタキ。 ○胴部内面は、細かい同心円文か？	(色調)青灰色 (胎土)精良 (焼成)硬 (残部)1/8
(拓本)	231 238		○胴部。	○外)平行タタキの上からカキ目。 内)同心円文。	(色調)ともに淡灰色 (胎土)ともに1〜2㎜の砂粒を含む。 (焼成)ともに硬 ※238、外面に釉が付着。
	232 235 237		○頸部。(235) ○底部に近い。(232・237)	○外)格子タタキ。 内)やや粗い同心円文。	(色調) 232、外)淡青灰色 内)暗青灰色 235、外)淡灰色 内)淡青灰色 237、淡灰色 (胎土)すべて精良 (焼成) 232、硬 235・237、やや硬

	233		○胴部。	○外）平行タタキの上からナデ。	（色調）青灰色 （胎土）１～２㎜程度の砂粒を含む。 （焼成）硬
	234		○頸部。	○外）粗いカキ目か？	（色調）青灰色 （胎土）１㎜程度の砂粒を含む。 （焼成）硬
	236		○胴部。	○外）細かい平行タタキ。 内）太い平行線が扇型に開く、特異な内型。	（色調）淡灰色 （胎土）１㎜程度の砂粒を含む。 （焼成）硬 ※外面の一部に釉付着。
	239		○胴部。	○外）やや太い平行タタキの上から、部分的にナデ。 内）粗い同心円文。	（色調）青灰色 （胎土）精良 （焼成）硬
	240		○頸・肩部。	○外）やや太い平行タタキ。	（色調）淡灰色 （胎土）１～２㎜程度の砂粒を含む。 （焼成）やや硬
鉢	196 ～ 204	口径 196(推)32.9 197　31.8 198　29.0 199　27.5 200　31.1 201・202 203・204 －推定30.0 以上	○口縁端部は肥厚し、端部内面が上方に突出する。 ○口縁端部を外方に折って注口を作る。（196） ○口縁端部内面の立ち上がりは、シャープなもの（198･202）と、丸味を帯びたもの（199･204）とがある。 ○体部は、やや外反する。 ○器壁の厚いもの　（200･203)と、薄いもの（196･198）とがある。	○ロクロナデ。	（色調） 196、暗灰色 197･199･201、以上淡青灰色 198、灰色（口縁部外面は濃青灰色） 200、やや青味を帯びた淡灰色（口縁部外面は淡灰黒色） 202･204、青灰色 203、淡黄灰色 （胎土） 196、５～７㎜の小石をはじめ、砂粒を多く含む。 197、１～３㎜の砂粒を含む。 198･204、１～２㎜の砂粒を含む。 199、２～３㎜の砂粒を含む。 200、砂粒を含むが良。 201･202、１㎜程度の砂粒を含む。 203、１～２㎜の石英・長石片等を含む。 （焼成） 197･200･202、硬 198･201･204、やや硬 196･199、硬いが、やや焼きが甘い。 203、やや軟

					（残部） 196、¼弱　198、1/13 199、1/16　200、1/24 202、1/15　204、1/20 197·201·203、小片 ※すべて播磨・神出
	205	底径　9.0	○体部は、ゆるく内弯気味に立ち上がる。 ○底部は窪み気味の平底。	○体部はロクロナデ。	（色調） やや青味がかった暗灰色 （胎土） 5㎜程度の小石をはじめ、砂粒を多く含む。 （焼成） 硬いが焼きが甘い。 （残部）¼ ※内面は、すり減っている。 ※播磨・神出
陶　　器					
鉢	206	口径　30.6	○口縁部は外反して開く。	○口縁部に自然釉の跡がある。	（色調）外）暗灰色 内）淡白灰色 （胎土）2㎜以下の長石・雲母を含む。 （焼成）硬 （残部）小片 ※須恵器か？
	207 208 209	口径 207　30.0 208　32.7 209　34.4	○口縁端部は外方に開く。 ○口縁端部外面が窪む。 ○口縁部と体部との境が肥厚する。 ○体部は内弯する。	○ロクロナデ。	（色調）207、淡灰色 208、白灰色 209、淡黄灰色 （胎土） 207、1～6㎜の砂粒を含む。 208、微粒砂を含む。 209、気泡が多いが精良。 （焼成）207、軟 208、やや硬 209、硬 （残部）207、¼弱 208·209、1/5 ※207、須恵器か？ 208·209、常滑
	210 211	口径 210　30.7 211　35.6	○口縁部は外反し、やや肥厚する。 ○体部は内弯して開く。	○ロクロナデ。	（色調）ともに淡灰色 （胎土） ともに、1～2㎜の砂粒を含む。 （焼成） ともに、やや軟 （残部）ともに小片 ※ともに常滑 ※210、常滑12C前半 211、常滑12C

	212	底径　17.6	○口縁部近くは外反する。 ○体部は内弯して開く。 ○平底。 ○210・211と同一器形か？	○ロクロナデ。	（色調）淡灰色（一部淡黄灰色） （胎土）１～２㎜の砂粒を含む。 （焼成）硬 （残部）¼弱 ※内面に使用痕が残る。 ※常滑12C
	213	高台径14.6	○体部は斜め上方に伸びる。 ○体部と底部との境外面に稜がつく。 ○内弯気味の高い高台。	○ロクロナデ。 ○はり付け高台。	（色調）白灰色 （胎土）１～２㎜の砂粒を含む。 （焼成）硬 （残部）⅕強 ※常滑12C後半か？
三筋壺	214	口径　10.2 最大復径　15.7 底径　7.9 復元高25.0	○頸部は直立し、口縁部は外反する。 ○口縁端部は上方へ突出する。 ○口縁端部内面に、一条の沈線を施す。 ○肩部と、胴部二カ所に、２本ずつの沈線を施す。 ○平底。	○ロクロナデ。 ○口縁部は灰かぶり。 ○外面に釉の流れ落ちが見られる。	（色調）外）黒褐色 内）赤褐色 （胎土）最大３㎜の砂粒を含む。 （焼成）硬 ※小破片、図上復元。 ※常滑12C
甕	215	口径　25.4	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は、つまみ出す。 ○口縁端部内面が窪む。	○ロクロナデ。 ○一部灰かぶり。	（色調）外）灰色 内）淡灰色 （胎土）１～２㎜の砂粒を含む。 （焼成）硬 （残部）1/18 ※常滑
（拓本）	241 244		○胴部。	○外）やや太い平行タタキ。 内）太い平行タタキ。	（色調） 241、外）濃茶褐色 内）青灰色 244、外）茶褐色 内）青灰色 （胎土）ともに精良 （焼成）ともに硬 ※産地不明、須恵器か ※241、第64トレンチ
	242 243 246 247		○肩部（242・247） ○胴部（243・246）	○外）格子の押印。（242・243は、やや幅広）	（色調） 242、外）淡赤褐色 内）淡茶褐色 243、外）暗褐灰色 内）淡茶褐色 246、外）淡灰色 内）淡茶褐色 247、黒灰色 （胎土） 242、長石・雲母片等を含む。 243、微粒砂を含む。

					246、1～2㎜の砂粒を含む。 247、精良 （焼成）すべて硬 ※常滑
	245		○胴部	○外）櫛目の押印。	（色調）外）暗青灰色 内）暗赤茶褐色 （胎土）1㎜程度の砂粒を含む。 （焼成）硬 ※常滑
磁　　器					
椀 （青磁）	216	口径　16.9	○体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯しながら立ち上がる。	○ロクロびき。 ○口縁部内面下に、一条の圏線が入る。 ○内面に彫文を施す。	（素地）灰白色 （釉調）淡灰緑色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/9 ※産地不明
	217	口径　14.7	○体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯しながら立ち上がる。 ○F－8と同一個体と思われる。	○ロクロびき。 ○口縁部内面下に、一条の圏線が入る。 ○内面に彫文を施す。	（素地）淡白灰色 （釉調）淡青緑色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/8 ※龍泉窯
	218	口径　13.7	○体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯しながら立ち上がる。	○ロクロびき。 ○外面に蓮弁文を施す。	（素地）淡灰色 （釉調）淡黄緑色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/13 ※龍泉窯
	219	口径　13.9	○体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。	○ロクロびき。	（素地）淡白灰色 （釉調）淡青白色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/14 ※龍泉窯
皿 （青磁）	220	口径　10.1 底径　4.7 器高　2.2	○口縁部は上方にややつまみ上げ、シャープにおさめる。 ○体部は外反気味に立ち上がる。 ○底部は他と比べて厚く作り、中央部がやや窪む。	○ロクロびき。 ○外面の施釉は底部上半まで。 ○内底面に櫛目文を施す。	（素地）灰色 （釉調）淡青緑色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/2弱 ※龍泉窯
椀 （青磁）	221	口径　15.2	○口縁部と体部のと境に、弱い稜がつく。 ○体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯させておさめる。	○ロクロびき。 ○体部の内外面に櫛目文を施す。 ○釉調は、くすんだ感じである。	（素地）淡黄灰色 （釉調）淡黄緑色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/9 ※同安窯

椀 （白磁）	222	口径　19.8	○口縁部は薄く、尖り気味におさめる。 ○体部から口縁部にかけて直線的に伸びる。	○ロクロびき。 ○口縁部から体部にかけて内面に一条の隆線が見られる。 ○施釉はやや雑で、気泡が見られる。	（素地）淡灰白色 （釉調）乳白色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/16 ※福建窯
	223	口径　17.8	○口縁部は外方へ水平に引き出し、シャープにおさめる。 ○体部は、ゆるやかに内弯しながら立ち上がる。	○ロクロびき。 ○口縁部下内面に、弱い沈線を施す。	（素地）淡白灰色 （釉調）淡黄緑色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/8 ※福建窯
	224	口径　15.1	○口縁部外面が肥厚する。	○ロクロびき。	（素地）淡白灰色 （釉調）淡乳白色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）1/8 ※福建窯
合子 （青白磁）	F－9		○受け部のみの破片。 ○口縁部内面を折り返して受け部を作る。 ○極薄い作り。	○ロクロびき。 ○体部外面に菊花紋を浮かす。	（素地）白色 （釉調）淡青緑色 （胎土）精良 （焼成）硬 （残部）小破片 ※景徳鎮窯

第2表　中ノ坊遺跡土師器皿一覧表

第20トレンチ

No.	直　径	高　さ	残　部	色　調	胎　　土	焼　成	備　　考
1	12.6	2.4	口縁部1/8	灰黄色	良	やや軟	
2	9.8	1.9	〃　1/8	白黄色	白色砂粒を少量含む。	〃	
3	8.7	1.9	〃　1/5	灰黄色	良	やや硬	
4	7.6	1.9	〃　1/6	白黄色	〃	〃	
5	8.2	1.4	〃　1/4弱	淡赤黄色	〃	軟	
6	7.6	1.4	〃　1/4	〃	〃	やや軟	
7	9.4	1.4	〃　1/5	白黄色	〃	軟	

第102トレンチ

9	16.3	2.5	口縁部1/6	明白黄色	良	やや軟	
10	14.4	2.4	〃　1/7	白黄色	〃	〃	
11	12.1	2.3	〃　1/7	淡赤黄色	〃	硬	内面にタール状のスス付着
12	13.2	2.8	〃　1/6	灰黄色	〃	やや軟	
13	13.2	2.4	〃　1/8	白黄色	〃	〃	
14	12.0	2.5	〃　1/4	灰黄色	〃	〃	
15	12.8	2.5	〃　1/4	暗白黄色	白色砂粒を含む。	やや硬	
16	12.4	2.5	〃　1/5	淡白黄色	良	やや軟	外面スス付着
17	13.1	2.5	〃　1/4	灰黄色	白色（石英・長石）・黒色砂粒を含む。	硬	外面中心部スス付着
18	12.0	2.0	〃　1/4	白黄色	良	やや軟	
19	11.4	2.0	〃　1/5	淡赤黄色	〃	〃	
20	12.3	1.9	〃　1/5	淡赤黄色	〃	〃	
21	9.0	2.0	〃　1/4	暗赤黄色	〃	硬	
22	8.5	1.9	完形	暗白黄色	〃	やや硬	内面は半分スス付着
23	8.6	1.7	口縁部1/3強	赤黄色	〃	やや軟	
24	8.7	1.9	完形	淡赤黄色	白色砂粒を少量含む。	やや硬	
25	8.6	1.4	口縁部1/2	赤黄色	石英または長石の白色砂粒を含む。	硬	
26	8.6	1.8	〃　1/3	赤黄色	白色砂粒を含む。	軟	
27	8.9	1.5	〃　1/4弱	暗白黄色	良	やや硬	全体にスス付着
28	8.4	1.7	〃　1/3	白黄色	〃	やや軟	
29	9.2	1.7	〃　1/4	淡赤黄色	白色砂粒を少量含む。	〃	
30	8.5	1.6	〃　1/2弱	赤黄色	良	やや硬	
31	9.2	1.7	〃　1/2弱	淡灰黄色	〃	硬	
32	8.8	1.5	〃　1/4	灰黄色	〃	〃	
33	8.7	1.6	〃　1/4	赤黄色	〃	やや硬	

34	8.4	1.4	口縁部1/3	暗黄白色	良	軟	
35	8.3	1.6	〃 1/3	淡白黄色	〃	やや硬	
36	8.4	1.5	〃 1/2弱	暗白黄色	〃	やや軟	
37	8.7	1.7	〃 1/4	淡赤黄色	〃	〃	
38	8.4	1.5	〃 1/2強	淡白黄色	白色砂粒を少量含む。	〃	
39	8.5	1.6	〃 1/4	黄灰色	白色・黄赤色砂粒を少量含む。	硬	内面スス付着
40	8.6	1.6	口縁部1/4	黄白色	良	軟	
41	7.9	1.6	ほぼ完存	淡赤黄色	〃	やや硬	
42	8.5	1.8	口縁部1/2強	淡赤黄色	〃	やや軟	
43	7.9	1.7	〃 1/4	淡白黄色	〃	〃	
44	8.2	1.6	完形	暗白黄色	〃	硬	
45	7.8	1.5	口縁部1/3	白黄色	〃	〃	
46	7.8	1.5	〃 1/4	灰黄色	〃	〃	
47	7.9	1.5	〃 1/2弱	白黄色	〃	軟	
48	7.3	1.4	〃 1/4	赤黄色	〃	やや硬	
49	8.0	1.6	〃 1/2弱	暗白黄色	白色砂粒を含む。	硬	
50	8.1	1.5	〃 1/3弱	暗白黄色	良	やや軟	
51	8.3	1.3	〃 1/4	白黄色	〃	やや硬	
52	8.6	1.5	口縁部完存	白黄色	〃	やや軟	
53	8.8	1.4	口縁部1/4	黄白色	〃	〃	
54	8.0	1.5	〃 1/4	灰黄色	〃	硬	
55	7.9	1.5	〃 1/4強	暗灰黄色	〃	〃	
56	8.3	1.4	〃 1/4	白黄色	〃	やや硬	
57	8.3	1.3	〃 1/4	白黄色	石英または長石の砂粒を少量含む。	〃	
58	8.0	1.5	〃 1/2弱	淡白黄色	白色砂粒を含む。	やや軟	
59	8.6	1.4	〃 1/4	暗白黄色	良	硬	
60	8.9	1.4	〃 1/4	暗白黄色	白色・黄赤色砂粒を含む。	やや硬	
61	8.0	1.4	〃 1/4	灰黄色	白色・黒色砂粒を含む。	やや硬	
62	7.7	1.3	〃 1/5	白黄色	白色砂粒を含む。	軟	
63	8.1	1.4	〃 1/4	赤黄色	白色・黒色砂粒を含む。	硬	
64	7.9	1.2	〃 1/4	赤黄色	良	やや硬	
65	8.0	1.0	〃 1/4	白黄色	〃	〃	
66	7.0	0.9	〃 1/5	淡黄褐色	〃	硬	
67	8.1	1.0	〃 1/3	暗白黄色	白色砂粒を少量含む。	やや軟	
68	7.6	1.0	〃 3/4	白黄色	白色砂粒を含む。	軟	
69	7.5	1.1	〃 1/5	淡赤黄色	良	硬	内面スス付着
70	7.4	1.3	〃 1/4強	淡灰黄色	〃	やや硬	〃
71	7.9	1.7	〃 1/4	淡灰黄色	〃	硬	
72	12.3	1.7	〃 1/18	白黄色	〃	やや軟	外面中心部スス付着
73	10.8	0.7	〃 1/16	赤黄色	〃	〃	〃
74	13.0	2.3	〃 1/8	明黄赤色	〃	硬	糸底

第3表　中ノ坊遺跡出土鉄製品観察表

第20トレンチ

種　類	No.	法量（cm）	形態上の特徴	備　考
刀子	1	現長　15.35	○刃渡り10.35cm以上の片刃。 ○柄部4.8cm以上。 ○柄部に木質が残る。	○P－2出土
釘	2	現長　4.1	○角釘。 ○頭部及び先端部欠損。	○P－10出土
	3	現長　3.4	○角釘。 ○頭部は折れ曲がる。	○P－6出土

第57トレンチ

釘	4	現長　4.55	○角釘。 ○頭部欠損。	

第102トレンチ

釘	5 〜 15	現長 5　3.1 6　4.65 7　4.4 8　5.8 9　7.0 10　5.15 11　3.7 12　3.35 13　8.2 14　5.15 15　4.45	○角釘。 ○頭部は折れ曲がる。（ト） ○頭部は厚く作り、やや曲がる。（リ） ○頭部は薄く作り、折れ曲がる。（ヌ） ○頭部の幅は広く作り、折れ曲がる。（ル） ○頭部の折り曲げが甚しく、あるいは曲がっているのか？ ○頭部欠損。（ホ・ヘ・チ） ○頭部と先端欠損。（カ・ヨ）	○P－18出土（ホ）
	17	現長　12.4	○角釘か？ ○両端欠損。 ○中程より木質が残る。	
鑿	16	現長　19.4	○一端に面を作り、断面は長方形を成す。 ○方錘形を成す端部は、やや磨り減っているか？	
鋏？	18	現長　7.8	○端部は丸く尖り、両内側に刃が作られる。 ○刃から断面方形の柄が伸びる。	
不明	19	現長　14.25	○刃部と柄部に分かれ、くの字状に折れ曲がる。 ○刃は、曲がった外側に作られる。 ○柄部に木質が残る。	
鉄刀	20	現長　16.1	○刃部最大幅3.45cm。 ○柄部幅2cm。 ○刃渡り12.2cm以上。	

6　土師器の皿の検討

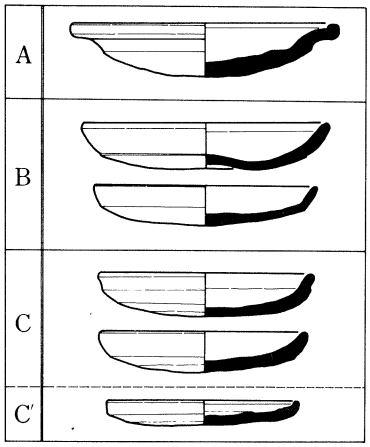
第102トレンチ出土土器の内、土師器の皿は出土量が最も多い。しかし、その器形の単純さのため、他の器種や器形の土器にくらべその年代がとらえにくい点をもっている。ここでは、土師器の皿Ⅰ～Ⅲ類とロクロ整形による土師器について検討を加えてみたい。

まず　皿Ⅰ類についてみてみよう。

皿Ⅰ類については、きわだった特色のない形態であるが、まずその口径からすでに見たように大(大皿、中皿)、小二種に分類できる。ここではまず第一に、量的に最も多い小皿について検討を加えてみよう。

小皿の大半を占めるI_1類（21～69）は、整形時に二段のヨコナデを施すことから、口縁部にヨコナデによる稜をもつものも少くない。この整形については、京大病院の調査による出土品の考察においても一つの特色としてとらえている。多くの類例は示さないが、畿内で第Ⅱ期の瓦器椀に伴出する小皿を中心に広く認められる。瓦器椀の年代観[9]などから見て、12～13世紀に盛行していたものと理解できる。しかし、後にはI_2類にみられるように、ヨコナデのさらに簡略化が行われ、より単純な器形へと変化する。あるいは、20トレンチ出土の皿に見られるように、形態が著しく変化するようになる。こうした点を考慮するなら、小皿I_1類の時期は、比較的限定されよう。

平安時代の土師器は、時代が下降するにつれて、これまで多彩であった供膳形態の器形が減少し、しだいに整理統合される傾向にある。皿についても、瓦器の時期には、大・中・小の三種か、大・小二種にまで整理され、なおかつ縮少、簡略化の道をたどっている。それでは、その変化を第25図と第4表で具体的に見てみよう。



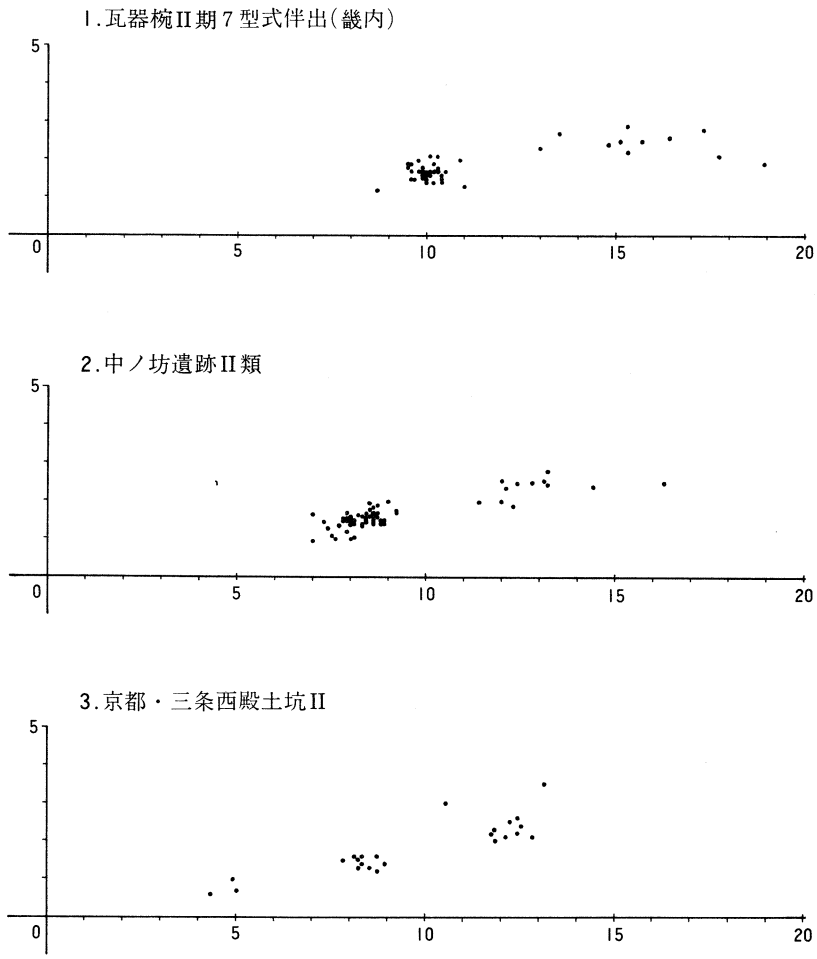
A　近江国衙
B　興福寺菩提院大御堂
C C′　中ノ坊遺跡
（実測図は各報告書による。）

第25図　土師器小皿の変化

第25図は、11･12世紀の小皿と中ノ坊遺跡第102トレンチの小皿の比較である。Aの小皿は、口縁部が屈曲し、端部が丸く巻きこむ特長的な形態を示しており、畿内では瓦器椀のⅠ期のものに伴出する。また、奈良県興福寺食堂の調査では、永承4年の焼面から検出されており、その年代観を11世紀中～後半を中心[10]とする時期に考えらている。県下での出土例も、湖南・湖西・湖北と広く分布し、まとまった資料も多いことから、普遍的な小皿と理解してよいだろう。Bは、県下に類例が豊富に認められるが、年代を明確にとらえうる良好な資料[11]がない。ここでは便宜上、時期の明らかな奈良県興福寺菩提院大御堂の鎮壇具として使用された土師器の小皿をあげておく。この年代は、治承4年[12]を上限とする12世紀末葉の時期が考えられており、伴出した瓦器椀第Ⅱ期7型式の年代観ともよく合致している。Cは中ノ坊遺跡出土の小皿のうち最も平均的なものである。こうしてAからCまでの小皿を比較すると、Cが一番小型化している。AとBの形態の変化が時期的なものであるなら、Cも同様に考えて誤りはなかろう。

次に土師器の皿の動きをグラフ化し、法量の変化を見てみよう。第4表の1は、畿内の瓦器椀Ⅱ期第5型式に伴う土師器の皿の法量（口径残部⅓以上）で、12世紀中葉ごろにあたる。小皿の形態は、第25図Bと大きな差はない。2は、中ノ坊遺跡第102トレンチの土師器の皿（I_1類，大､小皿とも）である。第25図で見たように、B、Cの両者の形態や整形には大きな差違はなく、第4表1、2で種類を比較しても、ほぼ大小二種類である点など共通性も多い。しかし、ドットであらわされた各土器の法量の集中は、大小共に中ノ坊遺跡の方が口径が小さく、小皿については器高もやや低くなっている。この法量の変化は、すでに見たように時期差の反映であり、鎌倉時

代に近ずくほど縮小化の傾向が認められる。こうした2つの検討より、中ノ坊遺跡の小皿は、12世紀末葉の小皿より後出的なものと理解できよう。また、第4表2、3で見るように、14世紀の土師器の皿と比較すると、法量は比較的近似するが、14世紀の後出的な皿の方が形態の変化が著しい。また、新たにこれまでの小皿[13]より極端に小さい皿の一群が出現するなど、異った様相を示している。その意味では、法量の類似は、縮小化傾向の極限と見てよいのではないだろうか。こうして、上限と下限の一つの目安を得たわけである。13世紀の遺物として、年代を求める上で本遺跡にも瓦器椀が認められることから、これら土師器の皿がそれに共存するとするなら、13世紀前半を中心とする時期に位置ずけられよう。ただ、小皿の中にもすでに見たように、口径8.5cm、高さ1.7cmを中心とする一群と、口径7.5cm、高さ1.0cmを中心とするやや小型の一群とがある。小皿の縮小化傾向の中で見るなら、後者については新しい様相を示しているといえよう。ただ、この二群が、時期的な差異によるのか、個体差であるのかは現段階では決定し難い。また、I_2類とした、ヨコナデの簡略化された小皿についても、量的に少なく、またどの時期にでも個体差として生じる可能性のある特色であるため、一応ここでは、同時期の差異として理解しておきたい。大皿についても、整形、法量の比較などに特記すべき点はなく、小皿との共通性が強い。ただ小皿でも認められたように、大皿についても法量のやや小さいものや、I_2類に含まれるものも若干ある。しかし、総体的に見て、小皿とほぼ同時期と考えてよいであろう。



第4表　土師器皿の法量変化

皿II類については、口縁部を屈曲させ、端部が嘴状をなす独特の器形であり、また器壁の薄さなど特長が多い。これら特長を一つのよりどころとして、畿内の類例と比較してみよう。皿II類の比較的早い例は、奈良市平城京東三坊大路側溝上層に求めることができる。ここでは、伴出した皇朝十二銭のうち延喜通宝が最も新しいことから、銭貨の時期をより[14]どころとして、10世紀前半の年代が考えられている。同様な銭貨の伴出例は、京都市内や兵庫県金楽寺貝塚[15]などにおいても認められており、やはり皿II類に延喜通宝が伴出している。また伴出する土器の中でも、黒色土器[16]など比較的編年の進んでいる土器から見ても、やはり10世紀に求められるものである。皿II類の下限を示す資料については、奈良市薬師寺の天禄4年に焼亡した増坊跡出土の土器の一括資料があげられよ[17]

う。ここでは、それまで特長的であった皿II類の形態が単純化しはじめており、加えて法量にも変化が認められることから、おそらくこの時期を一つの区切りと考えてよいと思う。もっとも中ノ坊遺跡例は小破片でもあり、また復原時のひずみ等を考慮するなら、詳細は比較検討に用いるには問題をかかえている。そのためここでは、諸特長などから、漠然とではあるが10世紀代の時期を示すものとして把握しておきたい。

ロクロ成形による土師器の椀、皿類については、畿内に比較すべき資料がほとんど見られない。畿内において例外的に見られるロクロ成形の底部に糸切り跡のある土師器は、小皿——先に見た皿I類にわずかばかり認められる。それらは、12～13世紀代の瓦器椀に伴出することがあるが、中ノ坊遺跡の同成形の皿にくらべると、形態、法量などやや後出的なものである。ただ畿内に隣接する播磨の兵庫県立岡遺跡[18]で出土した口径11cm、高さ3cmのロクロ成形の皿の場合は、畿内のものよりも古相を呈している。また、立岡遺跡例の場合は、伴出した文字の判読できない古銭が延喜通宝の可能性をもっており、10世紀代にまでさかのぼりうることを示している。

中ノ坊遺跡例の場合、底部のみでその全貌が必ずしも明確ではないが、「出土遺物」中でもふれたように、新旭町堀川遺跡出土例を考えるなら、立岡遺跡同様10世紀代を一つの上限と見ることもできる。

高台付のもの[19]については、比較すべき資料がないため、年代観については保留しておきたい。ただ、ロクロ成形ではないが、野洲町久野部遺跡七ノ坪地区[20]で出土した土師器の椀にくらべれば、中ノ坊遺跡例のものの方が作りもシャープで古相を呈している。また、近江国衙[21]で見られる逆梯形をした高台付椀にくらべると、やや作りも粗雑で、高台径の高さなどに小型化の傾向が認められる。

7　小　　結

中ノ坊遺跡とその周辺部の発掘調査は、昭和53年度以降にも継続して実施する予定である。そのため現時点で遺跡の全体像を描くには、まだ時期尚早の感がないでもない。以下、昭和52年度の調査によって明らかにされた点と、今後に残された問題点を列記するにとどめたい。

(1)　遺構の有無とその性格

昭和52年度のほ場整備予定地域で検出された遺構は、第20, 102トレンチ共に墓跡と推定されるもので、当初地名から予想された寺院跡については、その存在をうらずけるものは何も発見されなかった。

墓跡は、中世の火葬墳墓で、そのまとまりも小規模で、時期によって墓域を移動させている感がある。昭和53年度の調査地域内に、中世墓地の一画が含まれており、その調査によって墓域の問題はより明確となろう。

第102トレンチの包含層については、10～13世紀にわたる時期の、各器種、器形のものを含んでおり、付近に生活跡の存在することを暗示している。地形的に見て、道をへだてた山寄りの、昭和51年度ほ場整備実施地域か、川をへだてて隣接する現在の集落と重複する可能性が強い。

最後に、遺物包含層の広がりは、地域的にも限定され比較的狭い範囲である。また、遺物包含層の発見されなかった広い地域は、「クロボク」とよばれる粘質土か砂礫層で、中世以降の開発によって水田化したものと考えられる。

(2)　出土土器の傾向

第102トレンチの包含層の遺物を分類すると、次の3期に大別できる。

Ⅰ期　10世紀を中心とするもので、土師器の皿Ⅱ類、ロクロ成形による土師器の皿，椀類、黒色土器A類の椀と甕など。出土量は少ない。

Ⅱ期　11世紀を中心とするもので、圧倒的に灰釉陶器の皿，椀類が多く、それに少量の緑釉陶器の皿，椀類、須恵器の椀，甕類などを伴う。ロクロ成形の土師器は、この時期にまで下降する可能性がある。[22]

Ⅲ期　12世紀後半～13世紀前半を中心とするもので、器種、器形ともにバラエティに富む。土師器の皿Ⅰ類、羽釜類，近江型黒色土器，瓦器の椀類、瓦質土器の羽釜，鍋類、須恵器の鉢，椀類、陶器の鉢，甕，壺類、磁器の椀類などがあげられる。

第20トレンチの土器は、以上3期に続くものである。

土器の時期大別の中で、注目すべき点は、Ⅱ期とⅢ期の土器の生産地の問題であろう。Ⅱ期には、岐阜県下の東濃系の灰釉陶器が大半を占め、緑釉陶器においても尾北、恵那産の品が混り、東海地方一辺倒の感すら与える。それに対してⅢ期になると、東海地方産の土器も常滑が主流を占め、Ⅱ期とは異る器形の鉢や甕、壺を供給するようになる。また、灰釉陶器の流れをくむ山茶椀については、ごく少量出土するにすぎない。それに対して、畿内を経由して供給された遺物も少なくない。瓦器や瓦質土器、舶載の磁器、播磨系の須恵器などはおそらくそうしたものであろう。Ⅲ期を畿内の流通網の拡大と理解するなら、砥石の中に含まれるアブノール板岩製のものも同一の供給ルートに乗って入ったものと考えられる。アブノール板岩の産地としては、京都府の愛宕山が古くから有名で、記録によればまさにこのⅢ期にこの仕上砥石の普及が認められるのである。[23]

本調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者として実施した。

調査および整理作業には、本田修平、奥野宗寛、堀内宏司、柏田三枝子、山口順子、酒井和子、藤野道成、坂井秀弥、岡野慶隆、勢田広行の諸氏の協力を得た。遺物写真は、杉本敏昭氏によるものである。

また、遺物の整理にあたっては、樽崎彰一、宇野光　、西田弘の諸先生より有益な御教示をうけたほか、調査中は、高島町教育委員会、今津県事務所土地改良課、地元高島（伊黒）より種々の援助があった。記して、厚くお礼申しあげたい。

（兼康　保明）

〈註〉

① 高島町高島の旧称。

② 古川与志継「今津小俵山古窯址調査報告」(『近江』1－1 近江考古学研究会 昭和48年)

③ 近江の黒色土器には、畿内で平安時代に認められるA類、B類以外に、時期的にやや後出する内面黒色の土器がある。ところが、すべて黒色土器の名称が用いられているため、黒色土器A類と後出的な内面黒色の土器が混同されていることも多い。そこで、形態、整形、焼成等の異なる後者に対して、その分布が概ね近江一国に限定されることから、便宜上「近江型」黒色土器の名称を用いて区別しておきたい。

なお同様な視点からの分類として、久米雅雄氏は「野洲式A類」の名称を提唱されている。 久米雅雄「富波遺跡出土の鍑」(『滋賀文化財だより』3 滋賀県文化財保護協会 昭和52年)

④ 大橋信弥・別所健二・谷口徹『久野部遺跡発掘調査報告書—七ノ坪地区—』(滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会 昭和52年)

⑤ 白石編年の第Ⅲ段階の7型式。白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」(『古代学研究』54 古代学研究会 昭和44年)

⑥ 兼康保明「高島町中ノ坊遺跡出土の瓦器椀」(『滋賀文化財だより』5 滋賀県文化財保護協会 昭和52年)

⑦ 丸山竜平・山口利彦「春日山の神古窯跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度 滋賀県教育委員会 昭和50年)

⑧ 兼康保明「小型円板」(『日本仏教民俗基礎資料集成』第4巻 中央公論美術出版 昭和52年)

⑨ 宇野隆夫「京大病院遺跡出土の土器—古代から中世—」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 昭和53年)

⑩ 坪井清足・鈴木嘉吉『興福寺食堂発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第7冊 奈良国立文化財研究所 昭和34年)

⑪ 第25図Aに示した皿の県下における分布、年代観、問題点等については近刊予定の、『延暦寺発掘調査報告』Ⅰ(仮題)中に詳述したので参照されたい。

⑫ 森郁夫「地下調査」(『興福寺菩提院大御堂復興工事報告書』 興福寺 昭和50年)

⑬ 平安京三条西殿跡土坑Ⅱ出土資料による。

白石太一郎・伊藤玄三・近藤喬一「平安京三条西殿跡発掘調査報告」(『平安博物館研究紀要』第3輯 古代学協会 昭和46年)

⑭ 坪井清足・町田章他『平城宮発掘調査報告』Ⅵ(奈良国立文化財研究所学報第23冊 奈良国立文化財研究所 昭和50年)

⑮ 註⑧によれば、京大北部構内での出土が紹介されている。

⑯ 村川行弘『金楽寺貝塚発掘調査概要』(尼崎市文化財調査報告第3集 尼崎市教育委員会 昭和38年)

⑰ 「薬師寺西僧房地区の発掘調査」(『平城宮跡発掘調査部発掘調査概要』昭和49年度 奈良国立文化財研究所 昭和50年)

⑱ 櫃本誠一・大村敬通他「立岡遺跡出土の遺物」(『川島・立岡遺跡』 太子町教育委員会 昭和46年)

⑲ 中西常雄「皿・坏・埦形土器の観察」(『高島郡新旭町堀川遺跡調査報告』滋賀県文化財調査報告第5冊 滋賀県教育委員会 昭和50年)

⑳ 註④に同じ。

㉑ 丸山竜平「遺物(土師器、須恵器、その他)」(『史跡近江国衙跡発掘調査報告』滋賀県文化財調査報告書第6冊 滋賀県教育委員会 昭和52年)

丸山竜平・辰己勝『史跡近江国衙跡調査概要』(滋賀県教育委員会 昭和53年)

㉒　本遺跡の場合、土師器の時期を下げる以外に、灰釉陶器の年代観を上げることも考えてみる必要があろう。と言うのは、11世紀以に圧倒的に多い灰釉陶器とくらべて、同時期に比定される土師器がほとんどなく、土器の構成上はなはだしいアンバランスを呈している。11世紀代の土師器については、昭和53年に調査された安曇川町上古賀遺跡や、新旭町堀川遺跡出土品中に多く見出される。そのようなことから、今後の良好な資料の出土が、灰釉陶器、土師器の編年観を修正する可能性を持っており慎重な検討を要するものである。

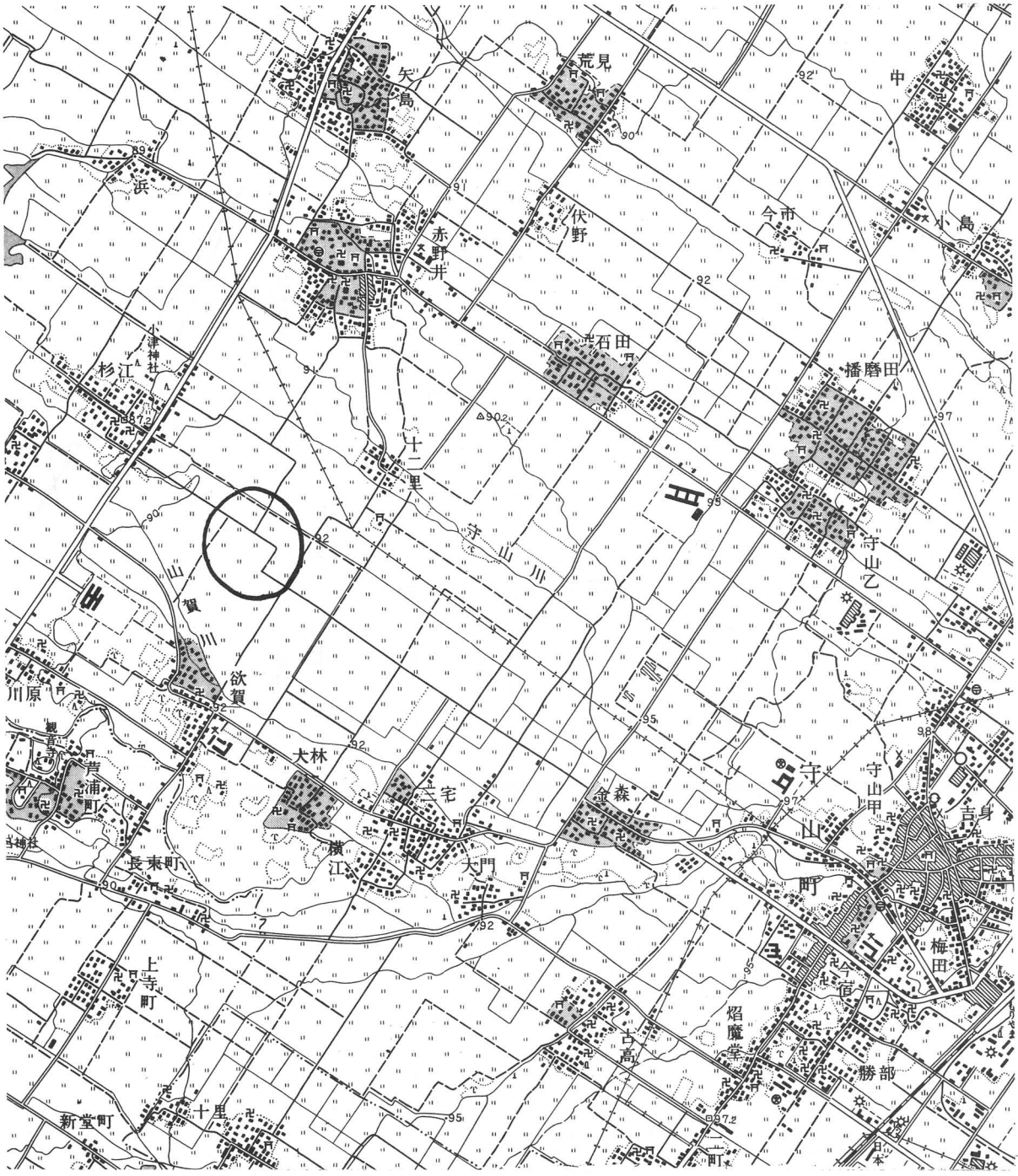
㉓　村松貞次郎『大工道具の歴史』(岩波新書　昭和49年)

P175に「さらに源平のころから鎌倉時代に入って日本刀の研磨のためトイシの需要が急激に起こり、この地方のトイシの名声がいよいよたかまった。」とある。

第９章　守山市欲賀遺跡

1　はじめに

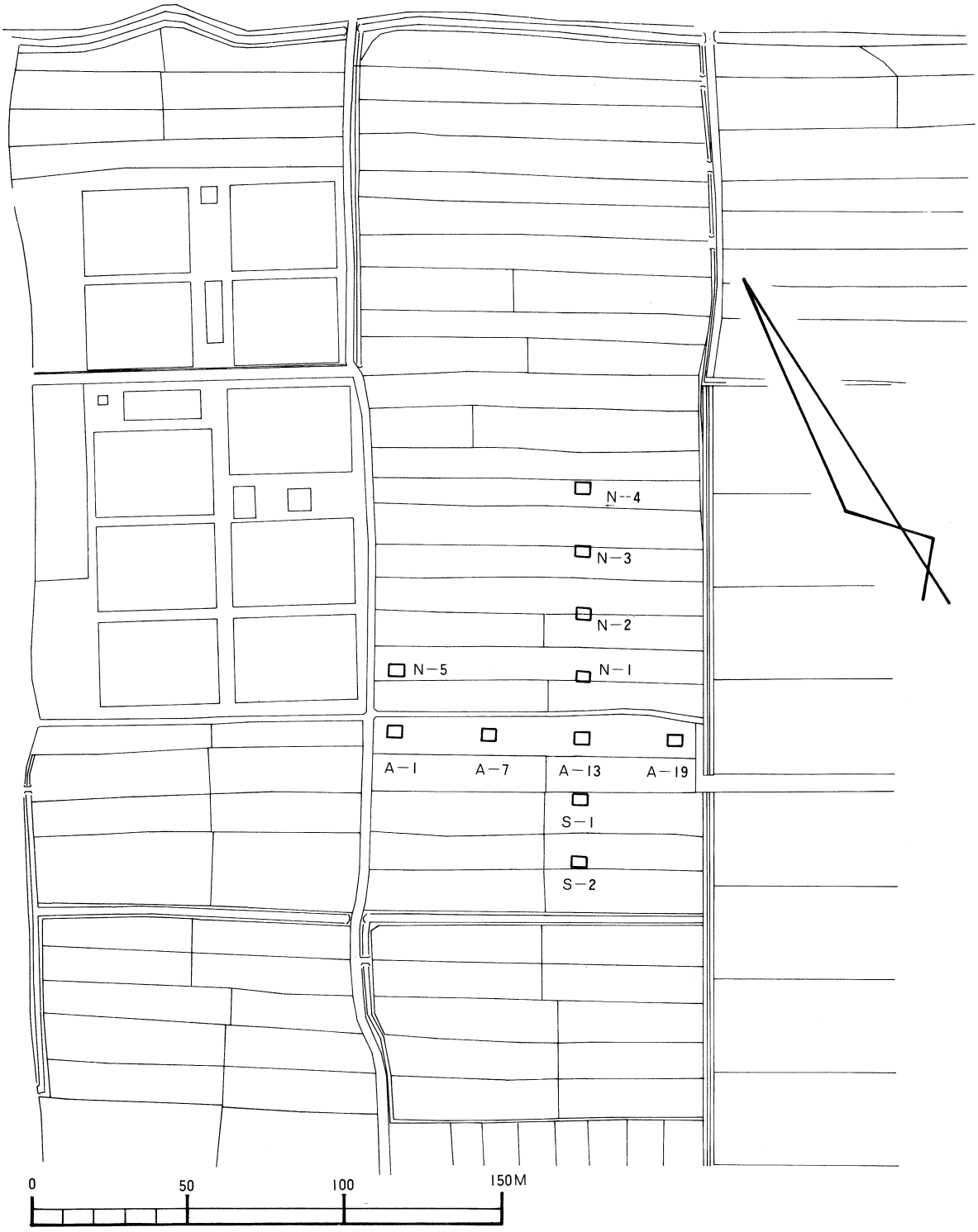
本報告は、守山市欲賀町所在、欲賀遺跡についての、昭和52年度における試堀調査の結果を収めたものである。本遺跡は、野洲川の旧河道の一つと考えられる「守山川」の北の微高地に所在し、従来より遺物の散布が周知されるところであった。今回、昭和52年度「ほ場整備事業」がこの地域にも計画されることになり、支線排水路部を中心に、試堀調査を実施した。現地調査および整理については、本課技師大橋信弥が担当、指導し、滋賀県文化財保護協会調査員別所健二氏の全面的な協力を得て実施した。なお、遺物写真は、寿福滋氏を煩した。記して謝意を表したい。



第1図　位置図

2　調査経過

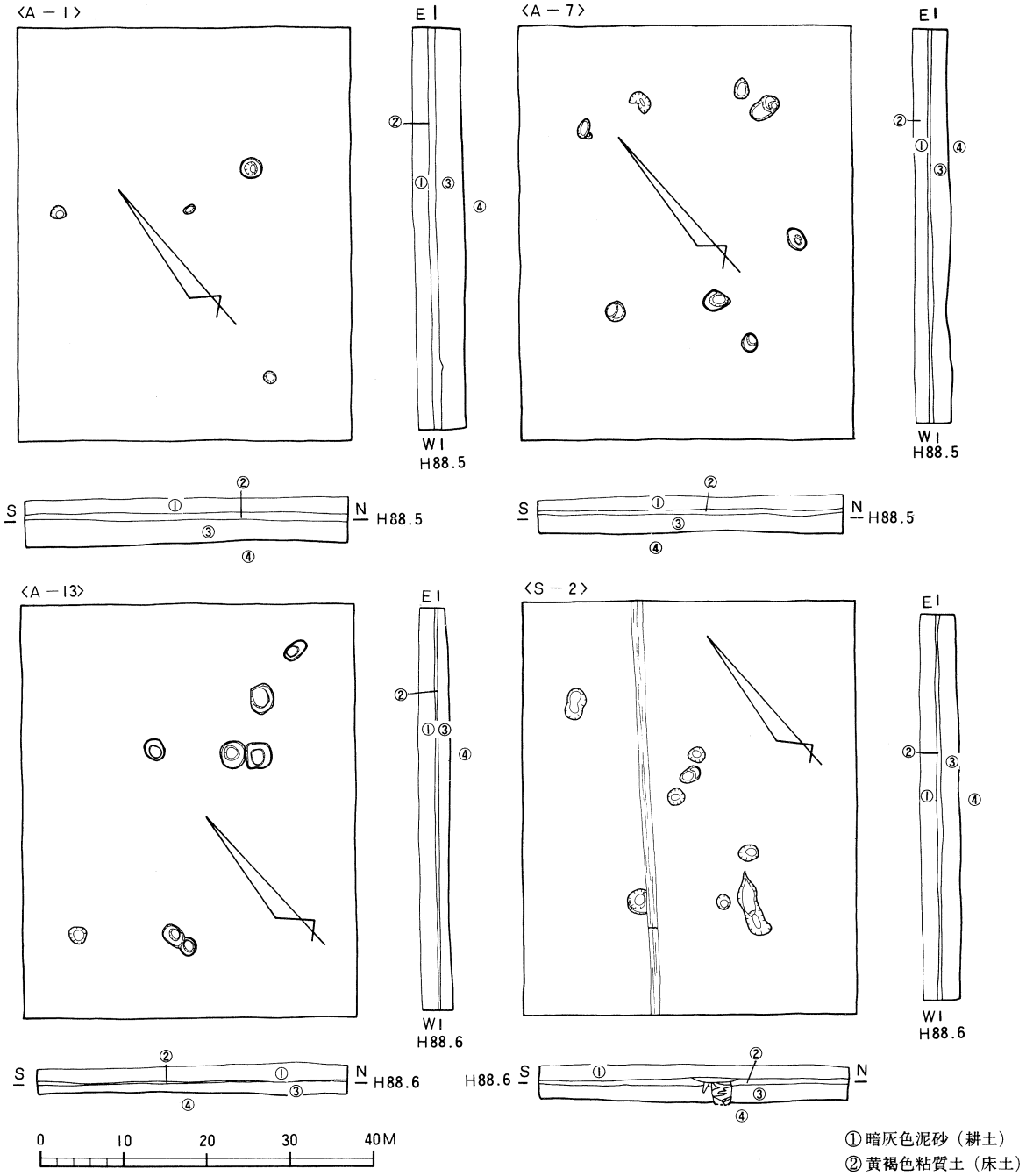
調査は、1号支線排水路および2号支線排水路を中心に実施したが、それぞれ、6m方角のグリッドを8m間隔で設定し、1号の西端より〈A－1〉～〈A－13〉、2号の南端より北に〈N－1〉～〈N－5〉南に〈S－1〉・〈S－2〉と仮称した。〈A－1〉～〈A－13〉で、耕土、床土の下に遺物を包含する暗紫色粘質土が約20㎝堆積し、その下に暗黄褐色粘質土の地山があり、これを堀りこんで、若干の小ピットが検出された。



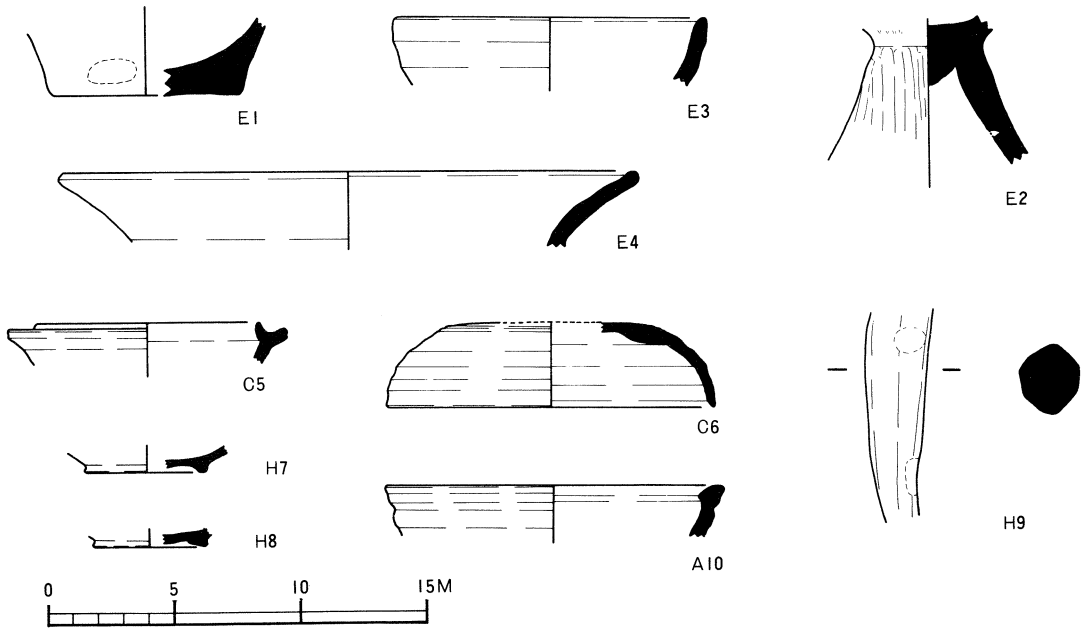
第2図　地区設定図

3　遺　　構

上述のとおり、本調査においては若干の遺物の出土はあったものの、小ピットのほか明確な遺構の検出はなかった。一、二のグリッドで検出された小ピットも、すべて掘り込みで建物としてまとまるものはなく、何らかの抗状の用途が想定される。包含層の存在や、調査地の立地からみて、周辺に集落の立地することは確実であるが、以上の状況からして、本地域は、遺物の示す鎌倉時代後期には水田化されていた可能性が大きいと考えられた。



第３図　Ａ－１、Ａ－７、Ａ－13、Ｓ－２、平面断面実測図



第4図　出土遺物実測図

4　遺　　物

出土遺物は、包含層より、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉などが若干出土している。いづれも小破片で、周辺地域よりの流入と考えられるが、詳細は明らかでない。

〔弥生土器〕　いづれも小破片で、後期のものと思われる。高坏は、中実化しておらず後期でも中葉は降らないと考えられる。

〔古式土師器〕　〈A－1〉包含層より、端部の肥厚した、布留式に通有な甕が出土している。飛鳥地域の坂田寺跡下層例に類似するものである。

〔須恵器〕　古墳時代の須恵器が、包含層より若干出土しており、坏身・坏蓋各1点を図示し得た。いづれも、陶邑の型式で、TK217 に類似のあるもので、7世紀前半の所産と考えられる。

〔土師器〕　歴史時代の土師器が若干出土している。器形としては、皿・三足塝のカナエが出土している。鎌倉末～室町期のものと考えられる。

〔黒色土器〕　いわゆるA類の底部破片を2点図示し得た。いづれも低い断面三角形の高台をもち、鎌倉末～室町期のものであろう。

5　ま　と　め

以上のように、今回の調査では、明確な遺構は検出されず、本地域が徴高地縁辺の低温地であったことが明らかになった。したがって、出土遺物は、北東に広がる微高地からの流入品と考えられ、弥生～鎌倉期の集落の存在が予想されよう。おそらく、この地域は、鎌倉末以降、水田化されたと考えられる。

（大橋信弥）

第1表　出土遺物観察表

＜A－13＞Ⅲ層

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
弥生土器	壺		E 1	底径 3.7	○安定した平底で、体部へはわずかに屈曲してのびる。	○体部外面　指押え	○外面　淡赤褐色 ○内面　黒色 ○胎土、焼成　良
	高杯		E 2		○背の比較的低い付根から大きく「ハ」字状に開く脚部。	○外面　ヘラみがき	○淡黄褐色 ○胎土　細な粒を含む ○焼成　良好

＜N－3＞

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	皿		H 3	口径6.15	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部は丸くおさめる。	○内外面　横ナデ調整	○外面　淡灰褐色 ○内面　淡褐色 ○胎土、焼成　良

＜A－1＞・包含層

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	甕		H 4	口径11.3	○口頸部は、大きく「く」字状に外反して、端部を内側にわずかに肥厚させて丸くおさめる。	○内外面　横ナデ調整	○淡赤、褐色 ○胎土、焼成　良好
	坏身		C 5	口径 4.4	○口縁部立ち上りは、強く内傾し低い。 ○受部は、湾曲気味に外方へのびる。	○内外面　横ナデ調整	○暗灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
須恵器	坏蓋		C 6	底径6.45	○扁平な天井部及び体部に、やや上方へ流れる口縁部がつく。 ○端部は内側に内傾する。	○外面　ヘラ削りの上から横ナデ調整、内面横ナデ	○暗灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
黒色土器	埦		B 7	底径 2.3 高台0.35	○逆台形の低い高台。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	○淡赤褐色 ○胎土、焼成　良
			B 8	底径 2.2 高台 0.3	○断面逆三角形の低い高台。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	○淡赤褐色 ○胎胎土、焼成　良
土師器	鍋		H 9		○三足鍋の脚破片か。 ○断面円形で、やや内湾。	○外面横ナデ調整	○淡灰褐色 ○胎土、焼成　良

＜N－3＞

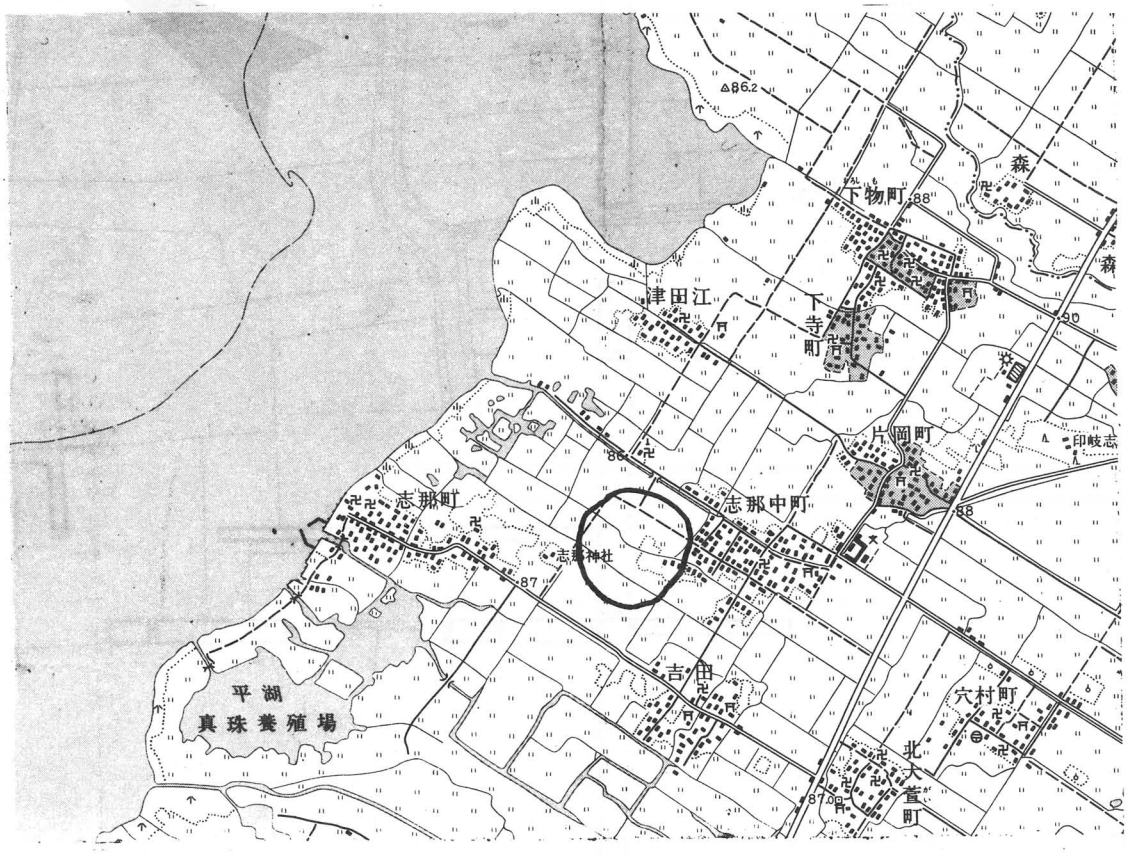
器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
灰釉			A10	口径6.65	○体部は、直線的にのびる。 ○端部は内側にやや肥厚させて内傾する面をもつ。	○内外面横ナデ	○灰色の釉か全面にかかる。 ○胎土、焼成　良

第10章　草津市志那中遺跡

1　はじめに

本報告は、草津市志那中町所在、志那中遺跡についての、昭和52年度における調査結果をまとめたものである。当遺跡は、草津市の西、琵琶湖に近い水田中に所在し、従来より白鳳時代の瓦の出土が知られ、『正倉院文書』等の文献にみえる「大般若寺」跡に比定されていた。そして、昭和46年に実施された湖南地方の分布調査では、瓦片とともに、弥生土器・須恵器・黒色土器・土師器などが、周辺一帯に散布することが確認されており、弥生～平安期の重複遺跡であることが予想されるところであった。そして今回、昭和52年度のほ場整備事業(注1)により、遺跡南端と推定される部分に、幹線排水路および支線排水路が計画され、ほかに一部畑地の移転等が計画された。このため、水路部分を中心に調査を実施したところ、掘立柱建物・井戸・土拡・溝などが多数検出された。調査は昭和52年10月28日　から、昭和53年２月７日まで、およそ３ヶ月を要して実施したが、調査・整理にあたっては、滋賀県文化財保護協会調査員、別所健二・谷口徹両氏の全面的な協力を得たほか、別記の学生諸君の参加を得た。また、遺物写真については、今回も寿福滋氏を煩した。記して謝意を表したい。なお、地元ならびに県土木部(注2)の好意により、遺構が良好に残存すると予想される畑地2,000㎡について、設計変更の上、保存処置のとられたことを、とくに付記しておきたい。

（大橋　信弥）



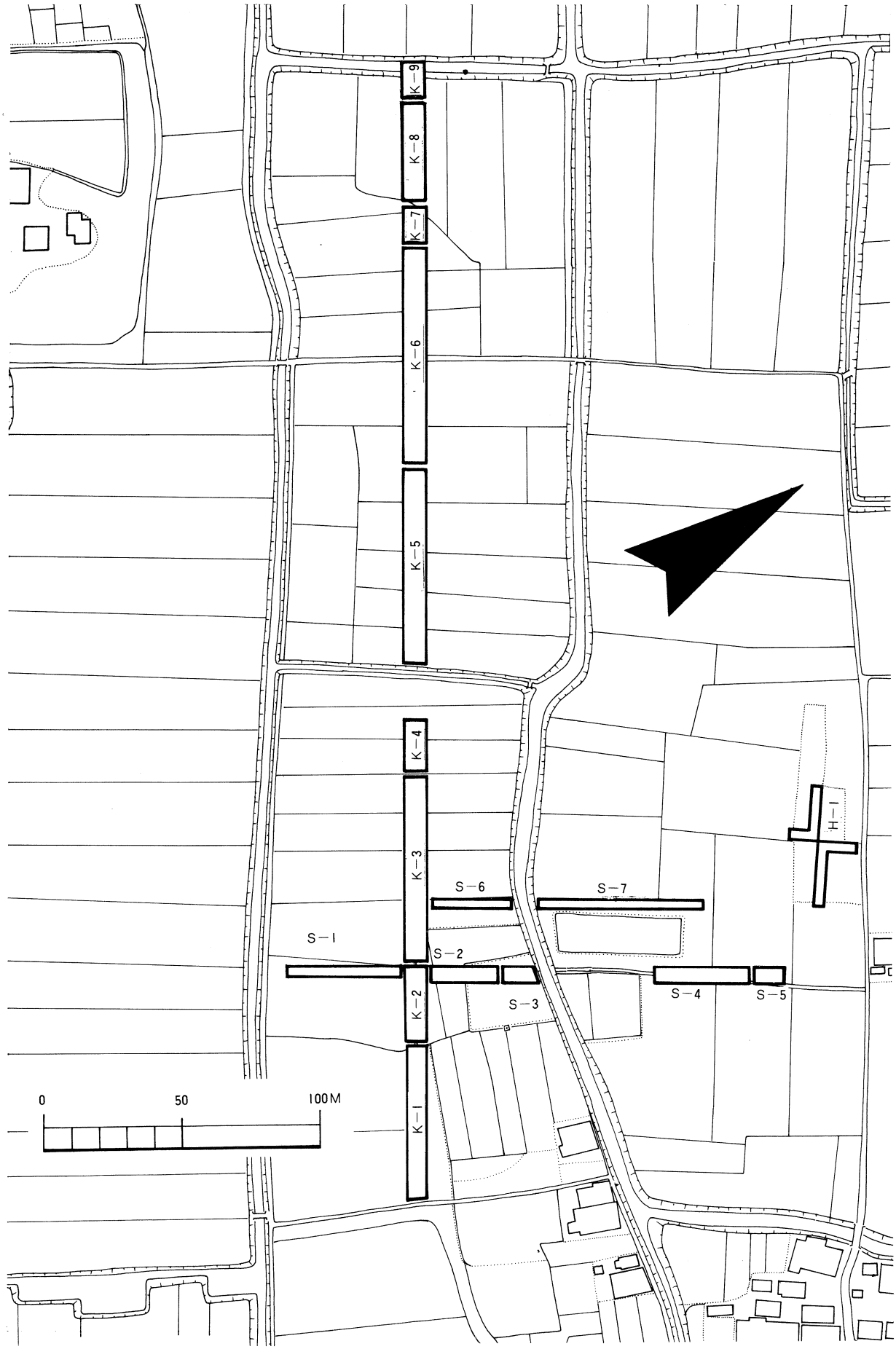
第１図　位置図

注

(1)　田中重久「滋賀県の寺址とその出土瓦・心礎」(『古代学』14－３・４)『滋賀県遺跡目録－湖南地区－』(昭和46年度、滋賀県教育委員会)

(2)　現地調査および整理業務参加者は以下の通りである。

水野敏昭・中西和多隆・尾谷孝・井入勉・谷口考司・三宅治・大崎義彦・美濃部力・中村明・山本芳正・国松千夏
大橋美和子・福井昭彦・出場栄治・河村文章・辻　浩



第２図　トレンチ設定図

2　調査の経過

本調査は、ほ場整備事業に伴う幹線、支線両水路建設のための事前調査であり、従って調査範囲は狭長なトレンチ調査を主とした。当初、南東の幹線水路予定地より調査を開始し、適宜、支線水路予定地を調査しながら、しだいに北西へと進んでいった。幹線水路予定地は若干の変動は存在するものの、幅を原則として８ｍとし、長さは地所に応じて任意に設けた。南東のＫ－１から順次北西へ設定してＫ－９に至る。支線水路予定地は、幅を水路の掘削幅に応じて４ｍないし６ｍとし、支線水路予定地の南西側にＳ－１を、又北東側にはＳ－２～Ｓ－５及びＳ－６、Ｓ－７の各トレンチをそれぞれ設定した。又、各水路以外に削平が予想される畑地（Ｈ－１）に関しても、四分法に基づくトレンチを設定した。

基本土層の項で詳述するように、水田では耕土（Ⅰ層）とその床土（Ⅱ層）を、又畑地では耕土（Ⅲ層）と包含層（Ⅳ）をおのおの掘削した段階で、灰褐色粘土（Ⅴ層）からなる遺構面が露呈した。その間おおよそ50cm前後を計る。その結果、トレンチ設定箇所のほぼ全域でおびただしい数にのぼる遺構を検出し、しかもそれら各遺構が弥生時代中期末から鎌倉時代に至る複合状態を呈することを確認した。従って、切り合い関係は複雑多岐を極め、調査関係者の頭を悩ます所でもあった。なお、下層から新たに遺構の検出される可能性もあるため、断面観察及び排水等を兼ねて壁沿いに一部試掘溝を設けたが、粘土・砂あるいは礫等からなる野洲川の河川堆積層が連綿と続いているものの、人為性を考慮し得る層は確認できなかった。結局、唯一Ⅴ層を切り込んで構築された各遺構を精査することで終始したが、1977年10月28日より調査を開始し、翌年２月７日に至って調査を終了するまでの間３ヶ月以上を要した。

（谷口　徹）

3　基本土層

支那中遺跡は湖東平野の南部、野洲川左岸の三角洲上に位置し、草津市集から北大萱をへて支那中へと島状に断続する微高地列に属している。近在は水田への往来に利用されたクリークが縦横に発達し、水田としての土地利用が著しいが、一部は土盛りをして畑地としている。

水田では耕土（暗黒灰色粘質土層・Ⅰ層）と、その床土（黄灰色粘質土層・Ⅱ層）の直下に灰褐色粘土層（Ⅴ層）が広がる。畑地では土盛りの結果と推定される淡褐色砂質土層（Ⅲ層）が水田面よりひときわ高く、かつ厚く堆積して耕作に供されており、次いで暗灰褐色砂質土層（Ⅳ層）が露呈する。Ⅳ層は、いわゆる包含層であり、直下に広がるⅤ層上に構築された各期の遺物が混入している。

以上のように、水田ではⅠ層とⅡ層が、又畑地ではⅢ層とⅣ層がおのおの堆積するが、両者ともその直下には灰褐色粘土からなるⅤ層が広がり、各遺構のすべてはこの地山を切り込んで構築されている。ただし、畑地は水田に比して後世の削平が相対的に浅く、既述のような包含層を残すと同時に、Ⅴ層上における各遺構の遺存状態も比較的良好であった。深く切り込まれた遺構での地山観察の結果、Ⅴ層下部では酸化した褐色部とグライ化した青灰色部とがモザイク状に混じり合っており、酸化と還元が反覆する地点であることを示していた。事実、この層の下には停滞水による還元状態のため鉄化合物が還元された結果生じた青灰色グライ粘土層（Ⅵ層）が、次いで青灰色グライ砂層（Ⅶ層）が堆積していた。なお平面的にみた場合には、Ｋ－２・Ｋ－３近在を頂部とする微高地の縁辺に近づくにしたがって、しだいに比高を減じると同時に遺構面がグライ化を強め、Ⅴ層が薄くなる反面Ⅶ層が相対的に厚くなり、所によってはⅤ層が消失してⅥ層が遺構面を形成していた。最も深く切り込まれ

た井戸での地山観察の結果、Ⅶ層下にはさらに灰白色砂層（Ⅷ層）や黒灰色礫層（Ⅸ層）などいづれも湧水を伴う地山の存在を確認しており、狭長なトレンチ調査にもかかわらず、8例に及ぶ井戸を検出した理由の一端がうかがえた。

こうして確認できたⅠ層～Ⅸ層に至る地山の内、耕作の影響を受けない遺構面（Ⅴ層）以下のすべての土層は、いづれも野洲川の流路がいまだ固定されることなく乱流して三角洲を発展させていた段階での河川堆積層と考えられよう。それは近在のボーリング調査から推定しても、おそらく10数メートルにわたって連綿と続いているものと予想される。

なお、水田下のⅤ層では上部に黄橙色の糸根状を呈する酸化鉄の斑文が、又、下部に焦茶色の管状を呈する酸化マンガンの斑文がそれぞれ顕著にみとめられた。このような鉄・マンガン両斑文の分化・発達は灌漑水利用の水稲農耕に起因しており、現耕土がそのために水田土壌化作用をかなり長期にわたってこうむった結果であると考えられる。おそらく開田年次の比較的古い水田であろう。

（谷口　徹）

〈参考文献〉

1　松井健「岡山県津島遺跡における弥生時代の灌漑水利用水田の存在について」（『考古学研究』64）

2　八賀晋「古代における水田開発」（『日本史研究』96）

3　小林健太郎「地形と地質」（『草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告』）

4　遺　　構

K－1

遺構番号	観　　察	時　　期	関連図版番号
ＳＢ１	ＳＤ５等に切られたため遺存しない柱穴もあるが、梁行２間以上、桁行４間の掘立柱建物である。柱間は梁行1.3m（４尺）、桁行 1.0m （３尺）のほぼ等間隔をなす。方位をＮ－70°－Ｗに保つ。柱穴は、掘り方が40cm前後、柱根が20cm前後を計り、いづれも円形を基調とし、おのおの黒灰褐色粘質土、黒褐色粘土が覆っていた。一部土師質土器椀、皿等の小片が混入していたが、明確な時期を決し得るまでには至らなかった。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＢ２	梁行２間、桁行２間以上の掘立柱建物である。桁行はＳＤ１に切られているため、その全様は不明である。柱間は梁行 1.9m （６尺）、桁行 1.3m （４尺）のほぼ等間隔を成す。方位をＮ－48° －Ｅに保つ。柱穴は、掘り方が60cm前後を計り、大型の円形を成す点が注目されるが、柱根は明瞭ではない。梁行の中央柱穴が他の柱穴に比して小形であることが留意されよう。各柱穴からの遺物は皆無であるが、近在のＰ１から鎌倉時代の土師質土器を出土しており、同期の建物である可能性が高い。	不　　明 （鎌倉時代？）	
ＳＥ１	１辺 1.3mの正方形の掘り方のやや北東よりに、厚い板材を4枚、縦に方形に組んで井側としている。いわゆる方形縦板型木組井戸と称するものである。井側の組み方をさらに詳細に検討すると、対する２枚の縦板を設置した後、残りの２枚を先の２枚の内側へ押し込む様に設置し、つづいて井側のまわりに土を充填したものと思われる。おそらく相当の力をこめて充填したものと考えられ、土圧で各井側は例外なく内側に向かって反っている。井側を支える横桟ないし添板といったものはみられない。 井側を形成する各板材は、上部を腐蝕のため欠損しているが、長さ１m以上、幅40～50cm余、厚さ４～５cmを計る。外側の下部25cm前後の間は、いづれの板材にも手斧様工具による縦方向の断続的な削痕が明瞭である。ある程度規格化された長さに切断した材を楔を使用して均等な厚さに割裂し、外側の下部のみ新たに手斧様工具で調整していたようである。 井側内には、②暗黒灰色腐植土層が単一の堆積を示しており、掘り方には、⑤黒灰色及び青灰色グライ粘土のブロック状混入層、④青灰褐色砂層、③黄褐色粘質土層がその順に充填されている。②層及び⑤・③の両層から古墳時代前期の土器片が出土しており、他に②層の下部では２枚貝片や植物遺体を検出している。②層が掘り方の上面にまで堆積した後、①黒褐色粘質土層によって井戸は完全に埋没しているが、①層内から比較的古い形態を保つ須恵器片が出土しており、この井戸が完全に埋没した時期を教えている。 掘り方は、地山Ⅴの灰褐色粘土層より切り込まれて、地山Ⅶの青灰色グライ砂層中にその底部を置いている。因に地山Ⅶは湧水を伴う砂層である。	古墳時代前期	PL.137

ＳＥ２	径 1.3mの円形の掘り方の中央に径の異なる曲物を２段に組んで井側としている。いわゆる円形曲物型木組井戸である。井側を形成する曲物は、内径55cm、高さ33cmと、内径33cm、高さ23cmを計る２例よりなり、前者を上段に後者を下段に配置している。前者の曲物は、厚さ 0.5cm程度の薄板を曲げて円筒形に作ったものであり、16cm前後を重ね合わせ、幅 0.8cmの樹皮で縦に綴り合わせている。薄板を曲げるにあたっては、曲物の内側に幅 1.2～ 1.4cmの間隔で縦及び斜めに走る鋭い線刻が厚さの半分に達する程度に刻み込まれて、曲げるのを容易なものにしている。 曲物の下部には高さ 11.8 cm、厚さ 0.4cm前後を計る〝タガ〟が周囲に捲かれ、曲物を締め固める役割を果している。重ね合わせ部は曲物のそれに対する位置にあり、樹皮による縦綴りは入念に往復しなおかつ他所でもう一度簡単に綴っている。タガ故の所為であろう。なお、この曲物には、上部に１孔を単位とする９孔、下部に２孔を単位とする６孔がほぼ等間隔に穿たれている。孔内には一部木片が遺存しており、かって上板、底板に打ち込んでいた木釘の跡であろう。このことからもこの曲物は井側として２次的な利用に供されているものであることが理解されよう。小形の曲物も、〝タガ〟が上・下２例存在する以外、その細部の作りは類似している。 さて、以上詳細に観察してきた曲物からなる井側の内には、④黒灰色腐植泥土層が単一の堆積を示しており、掘り方には、⑦灰白色礫層、⑥灰褐色粘土及び青灰色グライ砂層の混入層、⑤黒灰褐色粘土層がその順に充填されている。⑦層は井側の底を安定させると同時に浄水を得るため、意識的に敷詰めたものと考えられ、径３～５cmの円礫が主体である。⑥層は、地山Ⅶ′層の一時的な流入によるものと思われる。④層及び⑤層から平安時代末～鎌倉時代の土器片が出土しており、他に④層では動、植物遺体を多数検出している。いづれも井戸使用時、あるいは廃絶後入り込んだものであろう。④層が掘り方上面まで堆積した後、③暗黒灰色粘土層、②黄褐色粘質土層、①黒褐色粘質土層が順に覆って井戸は完全に埋没している。 掘り方は、地山Ⅴの灰褐色粘土層より切り込まれて、Ⅶ層Ⅶ′層を経て地山Ⅸの黒灰色礫層中にその底部を置く。Ⅶ層、Ⅶ′層、Ⅸ層は、いづれも湧水を伴っている。	平安時代末～鎌倉時代	PL.137 PL.141
ＳＫ１	ＳＤ１及びＳＤ５に切られているが、平面は円形を呈し、比較的深いものである。覆土は黒褐色粘土を基調としながらも、わずかな色調差から数層が確認でき、いづれもレンズ状堆積をなす。覆土全般にわたって 古墳時代前期の土器片が混入していた。	古墳時代前期	
ＳＸ１	トレンチ北側で不定形に広がる浅いレンズ状の落ち込みである。暗黒褐色粘土で覆われており、古墳時代前期を中心に鎌倉時代に至る各期の土器が混入していた。古墳時代前期の土器は遺構底面に敷き詰めたように群在していた。	古墳時代前期	
ＳＸ２	当トレンチ北端からＫ－２トレンチ南側にまたがって存在する不定形の浅いレンズ状の落ち込みである。暗黒褐色粘土で覆われており、炭化物片とともに古墳時代前期の土器が多量に出土した。	古墳時代前期	
ＳＸ３	トレンチ南端でＳＤ１の西側に不定形に広がる浅いレンズ状の落ち込みである。わずかに炭化物片を混入するものの明	不　　明	

	確に時期を決し得るに足る土器の出土に恵まれない。ただＳＸ１、ＳＸ２と同様、暗黒褐色粘土で覆われており、同期の落ち込みである可能性が高い。		
ＳＤ１	南東から北西へ、ほぼ直線的な流路を保つ溝である。通常、幅約 4.0m、深さ約 0.6mを計る椀状を呈し、床土直下の灰褐色粘土層（Ⅴ層）から切り込まれて、青灰色グライ砂層（Ⅶ層）にその底部を置く。覆土は基本的に、①黒褐色粘質土層、②淡灰褐色粘土層、③青灰褐色粘土層、④黒灰褐色粘土層、⑤黒灰色泥土層よりなるが、北西へ向かうにしたがって、④・⑤両層は薄くなる傾向にある。⑥層は、全体に腐植を帯びた層である。全層から多量の土器片を検出しており、その時期も古墳時代前期から鎌倉時代に至る。ただ、古墳時代前期のそれは、比較的量が少なく、近在に同期の遺構が多数存在していることから考慮して、その流入と考えられる。従って、白鳳時代前後に掘開され、鎌倉時代頃に、ほぼその姿を消失したと考えるのが最も妥当であろう。	白鳳～鎌倉時代	PL.142
ＳＤ２	南側では、南東から北西へ保ち、ＳＤ１に接するあたりで、曲折して、その流路を一時南から北へ変え、再び北西へ流れる溝である。南側では、幅約 2.0m、深さ約 0.3mの比較的広く浅い溝であるが、流路を変えた北側では、幅を約 1.0mに狭める一方、深さが 0.6mと倍増し、狭く深い観を呈する。灰褐色粘土層（Ⅴ層）から切り込まれて、浅い箇所では、次の青灰色グライ粘土層（Ⅵ層）中に、又深い箇所では、青灰色グライ砂層（Ⅶ層）を経て、黒灰色礫層（Ⅸ層）中にその底部を置く。覆土は、①黒灰褐色粘質土層、②黒褐色粘質土層、③暗灰褐色粘土層、④灰黒色粘土層、⑤暗灰褐色粘土層、⑥黒灰色泥土層よりなるが、南側では、①層が覆われているに過ぎない。③及び⑤の両層は、地山Ⅴ層の一時的流入と考えられ、④層は炭化物片が含まれ、灰白色砂層が薄く層状に介入している。⑥層はＳＤ１の⑤層と同じく、全体に腐植を帯びた層であり、植物遺体が検出される。 全層から土器片が出土し、その時期も古墳時代前期から鎌倉時代に至るが、ＳＤ１同様、白鳳～鎌倉時代に埋没したものと考えるのが妥当な様である。なお、黒色土器は、ほとんどすべてが②層から出土したものである。	白鳳～鎌倉時代	PL.142
ＳＤ３	流路を１度変えて南方で消失してしまう小さな溝である。黒灰褐色粘土の単純層からなる。鎌倉時代の土器以外に、古墳時代のものを若干出土しているが、ＳＤ３がＳＸ１を切り込んで掘開しているための２次的な流入と考えられる。	鎌倉時代？	
ＳＤ４	流路を東から西へ保つ小溝であるが、他の遺構が近在に錯綜しており、確認できたのはわずかである。黒灰褐色粘土の単純層からなり、ＳＤ３よりやや深く掘開している。鎌倉時代の土器片が出土している。	鎌倉時代	
ＳＤ５	南側ではＳＤ１にほぼ平行して南東から北西へ保ち、ＳＤ１に接するあたりで曲折して、その流路を南から北へ変えてトレンチ外に伸びる溝である。幅約 1.5m、深さ 0.3m前後を計る溝である。灰褐色粘土（Ⅴ層）中に底部を置く浅い溝であり①黒褐色粘土層、②黒灰褐色粘土層の両層が堆積する。両層から鎌倉時代の土器片を出土する。	鎌倉時代	PL.142

ＳＢ３	梁行２間、桁行３間以上の掘立柱建物である。桁行はトレンチ外に伸びるため、その全様は不明である。柱間は、梁行1.6m（５尺）、桁行 1.3m（４尺）のほぼ等間隔をなし、総柱の倉庫である可能性がある。方位をＮ－58°－Ｅに保つ。柱穴は、柱根が30cm前後の円形を基調とし、黒褐色粘質土が覆っていた。Ｐ２から平安時代後期の土師質土器が比較的まとまった形で出土しており、同期の倉庫様建物であろう。	平安時代後期？	
ＳＢ４	梁行１間以上、桁行３間以上の掘立柱建物である。梁行、桁行ともに他の遺構に切られたり、トレンチ外に伸びているため全様は不明である。柱間は桁行が東から1.6m(５尺)、1.9m（６尺）、1.6m（５尺）とやや変則的である。方位をＮ－67°－Ｅに保つ。柱穴は、柱根が30cm前後の円形を基調とし、黒褐色粘質土が覆っていた。一部土師質土器椀、皿等の小片を包含するものの、明確な時期を決し得るまでには至らなかった。	不明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＢ５	梁行２間以上、桁行２間以上の掘立柱建物である。梁行、桁行ともに遺構に切られたり、トレンチ外に伸びているために全様は定かではない。柱間は、梁行 1.6m（５尺）、桁行 1.9m（６尺）を計る。方位をＮ－27°－Ｅに保つ。柱穴は、柱根が30cm前後の円形を基調とし、黒褐色粘質土が覆っていた。一部、土師質土器の小片が混入していたが、明確な時期を決し得るまでには至らなかった。	不明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＥ３	長径 4.5m短径 3.9mの大きな楕円形の掘り方の北よりに、径のほぼ等しい曲物を３段に組んで井側としている。いわゆる円形曲物型木組井戸である。井側を形成する曲物は、上段の径がやや大きく下段のそれがやや小さいが、３者を固定するために細い丸竹が随所にさし込まれている。 井側内には⑧暗黒褐色泥土層、⑨黒色泥土層、⑩暗黒灰色泥土層、⑪黒色褐土層、⑫黒灰色微砂層、⑬淡黒灰色泥土層の各層が類々と堆積しており、掘り方には⑭淡黒灰色砂質土層が充填されている。⑧～⑬層に至る各層は、いづれも有機質に富み動植物遺体の混入が著しい。ただ、ほとんど土器片が検出されず、掘り方の⑭層から鎌倉時代後期の遺物がわずかに出土した。井側内が泥土で満ちた後、⑦黒灰褐色粘土層、⑥淡黒灰色粘土層、⑤黒色粘土層、④黒灰褐色粘土層、③黄褐色砂礫層、②暗黒褐色粘質土層、①黒褐色粘質土層が順に堆積して井戸は完全に埋没している。ただ①～③層は堆積として不自然な点があり、人為的に埋めもどした可能性が強い。①層から鎌倉時代後期の土器片が出土している。 掘り方は、地山Ⅴの灰褐色粘土層より切り込んで地山Ⅸの黒灰色礫層中にその底部を置く。もっとも掘り方自体は２段掘りの形をとっており、当初大きく地山Ⅸまで切り込んで、さらに曲物の井側を埋置するため地山Ⅸを 0.6m余掘り込んでいる。結局、大きな掘り方の片隅に小さな井側をさらに深く埋置している訳で大へんな労働力を要したと思われる。湧水に恵まれなかったためであろうか、あるいは又別の理由が存在したのであろうか。	鎌倉時代後期	PL.138
ＳＥ４	径 2.4m深さ 1.5m余を計る素掘りの円形井戸である。地	鎌倉時代	PL.139

	山Ⅴの灰褐色粘土層より切り込まれて、地山Ⅸの黒灰色礫層中にその底部を置く。覆土は①暗黒褐色粘質土層、②黒褐色粘質土層、③黒灰褐色粘質土層、④暗灰褐色粘土層、⑤淡灰褐色粘土層、⑥灰色粘土層、⑦黒灰色粘土層、⑧灰褐色粘土層、⑨青灰褐色砂泥層よりなる。④・⑤・⑧の各層は地山Ⅴの一括流入により成起した土層である。③・⑦両層でも地山Ⅴのブロック状混入が著しい。鎌倉時代に比定される土器片が上層の①層及び②層から集中的に出土している。		
ＳＫ２	約半分がトレンチ外に伸び全様は明らかではないが、おそらく平面は円形を呈するのであろう。比較的深いものであり、覆土は黒褐色粘土を基調としながらも、わずかな色調差から数層のレンズ状堆積が確認できる。やや下部から自然木、木製品に混って古墳時代前期の土器片が出土した。	古墳時代前期	
ＳＫ３	長軸 2.0m、短軸 0.8mの小判形を呈し、比較的深い土坑である。覆土は黒褐色粘土で充填され、炭化物片を多量に混入している。やや下部で、古墳時代前期の土器が一括出土した。	古墳時代前期	
ＳＫ４	Ｋ－２・Ｓ－２両トレンチにまたがる形で検出したもので、径 3.0m、深さ 0.9mを計る比較的大形の円形を呈する土坑である。覆土は黒褐色を基調とするが、厳密には①黒灰褐色粘土層、②黒褐色粘土層、③黒色粘土層、④暗灰褐色粘土層、⑤黒灰褐色粘土層、⑥灰褐色粘土層、⑦淡灰褐色砂質土層の７層が色別される。①～③層に至る上層部に古墳時代前期の土器片が混入しており、④層では炭化物片が多量に検出された。⑥層は地山Ⅴの灰褐色粘土が一括流入して形成された層であり、⑦層は、地山Ⅶへの沈着の結果生じた層である。	古墳時代前期	PL.142
ＳＤ６	トレンチに直交するように北東から南西へ流れる溝である。幅約２m、深さ約 0.6mを計り、地山Ⅴの灰褐色粘土層中にその底部を置く。暗灰褐色砂質土からなる単純層であり、古墳時代前期の遺物が出土している。	古墳時代前期	
ＳＤ７	トレンチに平行するように南東から北西へ流れるが、ＳＤ６及びＳＫ４に接する直前で流路をいづれも北東へ変える。覆土は、①暗灰褐色砂質土層、②黒褐色粘質土層の２層から鎌倉時代の土器が出土し、又、古墳時代の土器の混入も若干存在するが、これは２次的な流入の様相が強い。	鎌倉時代	PL.142
ＳＤ８	トレンチに直交するように北東から南西へ流れる溝である。幅約 0.8m、深さ約 0.2mを計る。暗灰褐色砂質土からなる単純層であり、古墳時代前期の遺物が出土している。	古墳時代前期	
ＳＤ９	トレンチにほぼ直交するように北東から南西へ流れる溝である。幅約 1.0m、深さ約 0.4mを計る。地山Ⅴより切り込んで、地山Ⅵの青灰色グライ粘土層中にその底部を置く。覆土は、①黒灰褐色粘質土層、②黒灰色粘質土層、③黒褐色粘質土層④黒灰色粘土層⑤暗黒灰色粘土層といづれも黒色味が強い。全体に遺物の出土がみられるが、⑤層で最も多く、層内には炭化物片が多量に混入している。出土遺物より古墳時代前期の所産と解される。	古墳時代前期	PL.142
ＳＤ10	同じくトレンチにほぼ直交するように北東から南西へ流れる溝である。幅約 0.6m、深さ約 0.4mを計り、地山Ⅴ層内にその底部を置く。覆土は、①暗灰褐色粘質土層、②黒褐色粘	古墳時代前期	PL.142

	質土層の両層よりなり、両層から古墳時代前期の土器片が出土する。		

K－3

ＳＢ６	梁行１間、桁行２間以上の掘立柱建物である。桁行は、トレンチ外に伸びるため、その全様は明らかではない。柱間は梁行 2.9m（９尺）、桁行 2.0m（６尺）のほぼ等間隔をなし、やや大型である点が留意される。方位をＮ－40°－Ｅに保つ。柱穴は、掘り方がいづれも明確な方形プランをなし、１辺40㎝前後を計る。柱根は20㎝前後の円形である。掘り方には黒灰褐色粘質土が、又、柱根には、黒褐色粘質土が覆っていた。掘り方内から、土師質土器の小片が若干出土したが、明確な時期を決しうるまでには至らなかった。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	PL.135
ＳＢ７	梁行１間、桁行２間以上の掘立柱建物である。桁行は、トレンチ外に伸びるため、その全様は定かではない。柱間は梁行 2.3m（７尺）、桁行 2.3m（７尺）を計る。方位をＮ－64°－Ｅに保つ。柱穴は、掘り方が不正な円形ないしは隅丸方形をなして一定しないが、いづれも径20㎝前後の円形の柱根を持つ。掘り方には黒灰褐色粘質土が、又柱根には黒褐色粘質土が覆っていた。Ｐ６及びＰ７より鎌倉時代の土師質土器が比較的まとまった形で出土しており、同期の建物と考えられる。	鎌倉時代	
ＳＥ５	径 0.8m、深さ 1.0mを計る円形素掘りの井戸である。地山Ⅴの灰褐色粘土層より掘り込まれて、地山Ⅵ′の青灰褐色粘土層中にその底部を置く。地山Ⅶは青灰色グライ砂層であり湧水がみられ、放置すれば地山Ⅴまでが完全に水没する。覆土は、上部を計測できなかったが、①黒灰褐色粘質土層、②黒灰色泥土層、③青灰褐色粘土層、④黒色腐植土層の４層からなる。遺物は①・②両層で検出され、②層でおびただしいものがある。②層には腐植土の薄い層状介入がみられ、着柄鋤出土直下には径２～３㎝の円礫が散布していた。③層は地山Ⅵ′と同色同質であり、無遺物かつ堅緻な層である。おそらく④層の腐植土が堆積した後、地山Ⅵ′が一時大幅に崩れ落ちて形成された層であろう。	弥生時代中期末	PL.140
ＳＫ５	幅 0.7mの南北に伸びる溝状の土坑である。深さは 0.2m前後と浅く、黒褐色粘土が覆っている。上層から弥生時代中期末の土器片が点在するような形で検出された。	弥生時代中期末	

K－4

ＳＥ６	径 2.5m前後、深さ 1.3mの不正円形をなす素掘りの井戸である。南西側にはテラス部が設けられて、二段掘りの様相を呈している。現在は地山Ⅴの灰褐色粘土層に掘り込まれて、地山Ⅷの灰白色砂層中にその底部を置く。地山Ⅶ・Ⅷ・Ⅸはいずれも湧水の砂あるいは礫層であり、現状でも放置すれば地山Ⅵ層まで水没することが知られた。覆土は、①黒褐色粘質土層、②灰白色泥土層、③淡白色泥土層、⑤黒灰色泥土層の５層からなり、③層では広葉樹の葉を主体とする腐植土が数条にわたり層状に介入し、若干の土師質土器片と共に曲物底部、竹片などが出土した。⑤層でも腐植土の層状介入がみ	鎌倉時代後期	PL.139

	られ、羽釜、土師質小皿、漆塗花弁文付椀を始め、数点の曲物底部を検出した。又、①層には地山Ⅴの、②層には地山Ⅵのブロック状混入が著しく、軟質地盤での素掘り井戸が、比較的短期間に埋没したことを想起させる。		
ＳＸ４	西側はトレンチ外に伸びるため、全様は明らかでないが、不定形な広く浅い落ち込みである。平安時代中期の土器片を若干混入しているが、おそらく自然の窪地に土器を意識的に投入したか、ないしは流入したのであろう。	平安時代中期	

Ｋ－５

ＳＢ８	梁行１間以上、桁行２間の掘立柱建物である。梁行はトレンチ外に伸びるため、全様は明らかではない。柱間は梁行 1.9m（６尺）を計り、桁行は南から 2.6m（８尺)、2.0m（６尺）と不ぞろいである。方位をＮ－34°－Ｗに保つ。柱穴は、１例が方形プランを保つ以外は、いづれも20cm前後の円形であり、黒褐色粘質土で覆われていた。柱穴内から若干の土師質土器片が出土しているが、時期を断定するまでには至らなかった。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＢ９	梁行２間、桁行１間以上の掘立柱建物である。桁行はトレンチ外に伸びるため、わずかに１間を確認したに留まった。柱間は梁行 2.3m（７尺)、桁行 2.0m（６尺）を計る。方位をＮ－34°－Ｅに保ち、条里制地割にみる方位に一致しており、その規制の下で構築されたものであるのか否か留意されよう。柱穴は、２例が抜き取りのためか楕円形プランを呈する以外は、正円形をなし径20cm前後を計る。 いづれも、黒褐色粘質土で覆われていた。柱穴内からは若干の土師質土器片が出土しているが、いづれも小片であり明確な時期を決するまでには至っていない。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＢ10	梁行２間、桁行２間の掘立柱建物である。西側の桁行中央はＳＤ13に切られており、確認できなかった。柱間は梁行 1.6m（５尺)、桁行 1.9m（６尺）を計るが、おのおの各柱間で微差がある。方位をＮ－73°－Ｗに保つ。柱穴はやや変則的ながらも方形プランの掘り方を基調としており、その１辺は50cm前後を計る。柱根は径20cm前後の円形をなす。掘り方には黒灰褐色粘質土が、又柱根には黒褐色粘質土が、それぞれ覆っており、いづれからも遺物の出土をみない。ただ、ＳＢ10を切り込んで掘開されたＳＤ13内より、平安後期の土器片が若干出土しているところから、少くとも、それ以前に構築されていた建物であることが理解される。	平安時代	ＰＬ.135
ＳＥ７	径 1.1m、深さ 1.4mを計る円形素掘りの井戸であるが、底部には曲物を設置して井筒としている。地山Ⅵの青灰色グライ粘土層から掘り込んで、地山Ⅷの灰白色砂層中にその底部を置く。覆土は①青灰色及び黒色粘土の混入層、②黒色粘土層、④黒色泥土層、⑥黒灰色粘土層、⑦黒灰色泥土層で、③・⑤両層は①層に同様である。④層はやや腐植味を帯びており、この層近在の中層で各種木製品を始め、平安時代後期に比定される土器片が出土した。	平安時代後期	ＰＬ.140
ＳＥ８	径 0.6m、深さ 0.8mを計る円形素掘りの井戸であるが、底部には掘り方にほぼ等しい曲物を設置して井筒としている。曲物を据えてその内側だけを掘り、曲物本体を順次下げて構	不　　明	ＰＬ.140

	築された可能性がある。地山Ⅵの青灰色グライ粘土層より掘り込んで地山Ⅷの灰白色砂層中にその底部を置く。覆土は、①暗青灰褐色粘土層、②青灰褐色粘土層、③暗黒灰色腐植土層、④灰褐色粘土層、⑤黒灰色腐植土層、⑥黒色腐植土層、⑦黒褐色腐植土層、⑧青灰褐色粘土層の８層よりなり、全体に腐植味を帯びている。⑧層は地山Ⅵの一括流入の可能性がある。⑤層下部で〝タガ〟状の木製品が出土した以外遺物は皆無であるため、井戸が掘開された時期を決し難い。		
ＳＸ５	トレンチ南側で、北の低平地に向かって不定形に広く浅く落ち込んでいる。人為的な掘開である可能性は少いが、覆土である黒灰褐色粘土層内から鎌倉後期の土器片が出土している。	鎌倉時代後期	
ＳＤ11	トレンチに直交するように北東から南西に流れる溝である。幅約 0.8m、深さ約 0.4mを計り椀状をなす。地山Ⅵの青灰色グライ粘土層より切り込まれて、同層内にその底部を置く。覆土は、①青灰褐色砂質土層、②暗青灰褐色砂質土層、③淡黄褐色砂質土層よりなり、いづれもレンズ状堆積をなす。各層より鎌倉前期の土器片が出土している。	鎌倉時代前期	ＰＬ.142
ＳＤ12	流路を東から西へ保つ溝であり、先のＳＤ11に切られている。幅約 3.5m、深さ 0.6m前後の浅く広い溝である。覆土は大きく２層が色別され、上層には淡灰褐色粘土が、下層には黒灰褐色粘土がそれぞれ堆積している。下層を中心に平安時代後期の土器片が出土している。	平安時代後期	
ＳＤ13	流路を東から西へやや弧状に保つ溝である。ＳＢ10の桁行の中央ピットを切り込んで掘開しており、幅約 1.9m、深さ約 0.3mのレンズ状を呈している。暗灰褐色粘土に覆われた単純層で、ＳＤ12同様、平安時代後期の土器片を若干包含していた。	平安時代後期	

Ｋ－６

ＳＢ11	梁行１間以上、桁行２間以上の掘立柱建物である。梁行、桁行ともにトレンチ外に伸びるため、その全様は確認できていない。柱間は梁行 2.3m（７尺）、桁行 1.9m（６尺）を計る。方位をＮ－10°－Ｅに保つ。柱穴は径30cm前後の不定形な掘り方内に、径20cm前後の円形の柱根が存在する。おのおの、黒灰褐色粘質土と黒褐色粘質土で覆われている。柱穴内より若干の土師質土器の小片が出土しているが、明確な時期を決し得るまでには至らない。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＢ12	梁行２間、桁行３間の掘立柱建物である。柱間は、梁行 1.9m（６尺）、桁行 1.6m（５尺）を計る。方位をＮ－74°－Ｗに保つ。柱穴は円形・方形両プランの掘り方内に、径20cm前後の柱根が存在する。掘り方には黒灰褐色粘質土が、又柱根には黒褐色粘質土が、それぞれ覆っていた。柱穴内には、まわりの各ピットと同様、若干の土師質土器片が流入していたが、時期を断定し得るに足る資料には恵まれなかった。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	ＰＬ.136

Ｋ－７

坪　界	この坪界は、呼称としては近江国栗太郡５条14里の23ノ坪と29ノ坪の坪界に相応する。	不　　明	ＰＬ.141

K－8

ＳＢ13	梁行２間以上、桁行２間の掘立柱建物である。梁行はトレンチ外に伸びるため全様は定かでない。柱間は、梁行 2.3m（７尺）、桁行 2.3m（７尺）を計る。方位をＮ－59°－Ｗに保つ。柱穴は径20～30cmの円形の柱根を遺存するが、一部、抜き取りのためか、上方が大きく開いて摺鉢形をなすものもみられる。柱根内には黒褐色粘質土が覆っており、近在のピット同様、土師質土器片を混入するが、明確な時期を決定する資料に乏しい。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＢ14	梁行１間以上、桁行３間の掘立柱建物である。梁行は小溝、不定形土坑に切られ、あるいはトレンチ外に伸びるため、その全様を確認していない。柱間は、梁行 1.6m（５尺）、桁行 1.9m（６尺）を計る。方位をＮ－73°－Ｗに保つ。柱穴は20～30cmの円形の柱根が遺存し、黒褐色粘質土が覆っている。近在のピット同様、土師質土器の小片が出土していたが、その明確な時期を決し得るには至っていない。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	

S－1

ＳＤ14	東から西へ直線的な流路を保つ溝である。幅約 3.0m、深さ約 0.3mの広く浅い溝であり、地山Ⅴの灰褐色粘土層中にその底部を置く。覆土は、①暗灰色砂質土層、②淡黄褐色砂質土層の両層よりなり、平安時代前期の土器片を包含する。各ピットが、いづれもＳＤ14を切り込んで掘開しており、ピット群が少くとも平安時代前期以降の所産であることを物語っている。	平安時代前期	ＰＬ.142
ＳＤ15	ＳＤ14同様に、東から西へ直線的な流路を保つ溝である。幅約 1.1m、深さ約 0.3mを計る。地山Ⅴの灰褐色粘土層中にその底部を置く。覆土は、①暗灰色砂質土層、②黒褐色粘土層の両層よりなり、②層を中心に平安時代前期の土器片が出土している。	平安時代前期	ＰＬ.142

S－2

ＳＢ15	梁行１間以上、桁行２間以上の掘立柱建物である。梁行・桁行ともにトレンチ外に伸びるため、その全様を確認していない。柱間は、梁行 2.3m（７尺）、桁行 1.9m（６尺）を計る。方位をＮ－２°－Ｅに保ち、ほぼ正南北を示す点で留意される。柱穴は、方形・不定円形のプランの掘り方と、径20cm前後を計る円形の柱根よりなる。掘り方には黒灰褐色粘質土が、又、柱根には黒褐色粘質土がそれぞれ覆っていた。覆土内には、近在の各ピット同様、土師質土器片が流入しているが、明確な時期を決しうる資料には恵まれなかった。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＫ６	径 2.4mを計るやや浅い土坑である。覆土は黒褐色粘土を基調とし、底面は凹凸が著しい。上層で古墳時代前期の土器片が数個体分出土した。	古墳時代前期	
ＳＤ16	東から西へほぼ直線的な流路を保つ溝である。ＳＤ17に北肩部を切り込まれており全様は明らかではないが、幅約 2.6m、深さ約 0.3mの広く浅いレンズ状の溝である。覆土は、⑫黒褐色粘土層、⑬黒灰色粘土層の両層からなり、⑬層に酸	古墳時代前期	ＰＬ.142

	化マンガンの沈着がみられる。両層から古墳時代前期の土器片が若干出土している。		
ＳＤ17	ＳＤ16の北肩部を重複しながら、同じく東から西へほぼ直線的な流路を保つ溝である。幅約 1.3m、深さ約 0.7mを計り不定形ながらもU字状を呈している。地山Ⅴ層の灰褐色粘土層より切り込んで、地山Ⅶ層の青灰色グライ砂層中にその底部を置く。覆土は複雑な堆積を示し、①暗褐色粘土層、②茶褐色粘土層、③黒灰褐色粘土層、④黒灰色粘土層、⑤青灰褐色粘土層、⑥灰褐色砂質土層、⑦暗黒灰色粘土層、⑧暗青灰褐色粘土層、⑨黄灰褐色粘土層、⑩灰白色砂泥層、⑪黒褐色砂泥層の11層よりなる。④⑦⑧⑩⑪の各層は腐植物の混入のためやや有機質に富む。⑦層以下で土器片や木製品の出土がみられ⑪層で黒色土器の完形品を検出した。		PL.142
ＳＤ18	Ｓ－２トレンチ東側を東から西へ流れながら、北端近くで急に流路を北へ変えてＳ－３トレンチ西端をかすめる溝である。幅、深さともに変則的である。覆土は黒灰色の粘土を基調とし、上層に古墳時代前期の遺物を多量に包含している。	古墳時代前期	

Ｓ－３

旧沼沢地	当トレンチの中央には、幅10m余、最深部 0.5mを計る比較的広くて浅い沼沢地が広がっていた。断面観察の結果、覆土として11層を確認しているが、大きく上層と下層に分けて掘開した。上層はやや黒みを帯びた灰褐色粘土を基調としており、鉄・マンガン両斑文の形成が著しい。炭化物片とともに古い形態を保つ須恵器、及び土師器等が出土している。下層は、黒灰色粘土を基調とし、最下部には腐植を帯びた砂層が広がっていた。多量の古式土師器とともに自然木や木製品各種が出土した。	古墳時代前・中期	

Ｓ－６

ＳＢ16	梁行１間以上、桁行２間の掘立柱建物である。幅わずか４mの狭長なトレンチ調査でもあり、梁行の全様は把握し得ていない。柱間は、梁行 1.6m（５尺）、桁行 1.9m（６尺）を計るが、１ないし数次にわたる建て変えの痕跡が認められる。方位をＮ－34°－Ｅに保ち、ＳＢ９同様、条里制地割にみる方位に一致しており、その規制によるものであるのか、あるいは又単なる偶然の所産に過ぎないのか留意される所である。柱穴は、径30～40cmの円形掘り方内に径20cm前後の同じく円形の柱根を遺存している。掘り方には、黒灰褐色粘質土が、又、柱根には黒褐色粘質土が覆っており、両者から土師質土器の小片が出土している。比較的まとまった形で土器が出土した近在のＰ33やＰ34から考慮しても、平安～鎌倉時代の建物址と考えるのが妥当であろう。	不　　明 （平安～鎌倉時代？）	
ＳＸ６	トレンチ西南で確認した浅く広い落ち込みである。おそらくは自然が形成した窪地であろうが、覆土からの土器片が若干出土している。		

Ｓ－７

ＳＫ７	一部トレンチ外に伸びているが、楕円形をなす土坑であろ	古墳時代前期	

	う。短軸 0.8m、長軸 1.0m前後を計るものと思われる。覆土は黒灰褐色粘土を基調とするがやや泥質化している。地山Ⅵの青灰色グライ粘土層から切り込んで地山Ⅶの青灰色グライ砂層中にその底部を置く。下部で自然木とともに古墳時代前期の土器が出土している。		
ＳＫ８	ほぼ正円形をなす土坑であるが、西側約半分をＳＸ７により切り込まれている。径 1.8m前後、深さ約 0.8mを計る。覆土は、黒褐色粘土を基調とするが、わずかな色調差から数条のレンズ状堆積が確認できる。ＳＫ７と同じく全体に泥質化しており、下部の層では腐植物の混入がみられる。地山Ⅵの青灰色グライ粘土層から切り込んで、地山Ⅶを経て地山Ⅷの灰白色砂層中にその底部を置く。中層から古墳時代前期の甕数個体が出土している。	古墳時代前期	
ＳＤ19	トレンチ西側で、幅約10m、深さ約 0.8mの南北に伸びる広くて浅い溝を検出した。地山Ⅵの青灰色グライ粘土層から切り込んで、地山Ⅶの青灰色グライ砂層中にその底部を置く。覆土は、①暗灰褐色粘土層、②黒灰色粘土層、③暗黒灰色粘土層、④灰白色砂層 ⑤黒灰色砂層 ⑥黒灰褐色泥土層 ⑦暗黒灰色砂層の７層よりなる。各層とも腐植物の混入のためやや有機質に富む。③層以下で多量の土器片及び自然木を出土した。 ただ、人為的に掘開された溝というよりも、自然が形成した旧河道と考えるのが妥当であろう。	古墳時代前期	PL.142

（１） 建　　物

今回の調査は、狭長なトレンチ調査であったにもかかわらず、Ｓ－３・４両トレンチを除くすべてのトレンチからおびただしい数にのぼるピットを検出した。ただいづれのピットも現調査の段階では遺構面を同じくしており、又、覆土の色調が極めて類似していて識別し難いものがあった。従って各種ピットの時期決定は、流入した土器及び若干の切り合い関係にゆだねる以外に方法をもたなかった。その結果 ①Ｋ－３トレンチのＳＥ５の北西に広がる径20cm未満の掘り方を持たない円形小ピット群、②Ｓ－１トレンチのＰ29を始めとする若干のピット、③ほぼ全域から多数検出し、ＳＢ１～ＳＢ10の建物址を始めとするピット群の３期が確認されるに至った。

まず最初に、ＳＥ５北西のそれはＳＥ５と同期、つまり弥生時代中期末に位置付けられる。このピット群は、当時普遍的に存在した竪穴式住居の残骸と考えるのが最も妥当であろうが、平地式・高床式住居あるいは高床式倉庫である可能性も残しておきたい。

平地式住居については、今日その類例は縄文時代にまでさかのぼり得るが、弥生時代以降、生産活動の主要な舞台がしだいに低湿地ないし低平地に固定化するに伴い、住居も又それに近い位置環境、従って地下水位の相当に高い位置環境に立地するようになる。このことが住居構築に際して考慮され、平地式住居の相対的増加の傾向を喚起したことが十分推察されるであろう。今回検出の困難であることも手伝って、その平面プランを確認するまでには至っていないのが実情であるが、ピット群の幾例かはこうした平地式住居の可能性が指適されようし、さらにその一部は湖岸における民俗例としてしばしば見聞する高床式住居、あるいは又、弥生時代前期以降に報告例のある高床式倉庫であるかもしれない。今後、困難な課題ではあるが、こうした方面へのさらに多面的で詳細な検討が必要であろう。

さてこの期のピット群の近くには、ＳＥ５を始めＳＫ５等若干の土坑も存在し、他所に同期の遺構が皆無であ

ることから考慮して、この近在が当時の人々の居住域であったと想定される。おそらくはそう遠くない所に水田域や墓域が広がって、大きく1つの集落を形成していたであろう。

次いで、P29を始めとするピットには、古墳時代前期の土器片が流入していた。後述するように、K－1・K－2及びS－2・S－3近在は同期の井戸・土坑・溝・不定形落ち込み等が群在しており、おそらく、この地が当時の人々の居住の地であったのだろう。他に、同期の遺構としては、遠く離れてS－7トレンチで土坑・溝等を確認しているに過ぎない。

最後に、ほぼ全域からおびただしい数で検出された各種各様のピットは、平安～鎌倉時代という比較的長期にわたる時間内に包括することができる。それらのピットの中で、建物址と確認できたものに限ってもSB1～SB16に至る16棟を数える。今回の調査が狭長なトレンチ調査に過ぎないことを考えれば、さらに多くの建物址が存在したことは想像に難くない。

ただ、ほぼ全域に広がると称した多数のピットもさらに詳細に検討してみると、K－1・K－2を中心とするピット群（A群）、次いで既述のK－3トレンチ中央の弥生時代中期末の居住域をへだてたK－4トレンチを中心とするピット群（B群）、K－5トレンチ中央の低平地をへだてたK－6・K－8トレンチを中心とするピット群（C群）の3群が確認される。3群は、地理的には微高地上の最も高い位置に立地しており、わずかに低い低平地は意識的に避けていたように思われる。なおこうした各群のピットから出土する土器等から考えて、3群を時間的な推移の下に理解するのは困難である。3群が平安時代から鎌倉時代の長期にわたって、いづれも連綿と存続していたとするのが妥当であろう。

こうして微高地上の最も高い位置を選んで小さく、いくつかの群にまとまりながら生活していた人々はその生活基盤を何に求めていたのであろうか。当該域が条里制地割を整然と残している地であってみれば、当時最も普遍的な水稲農耕に日々の糧を求めていたのであろうか。確かにそれを否定するものではないにしろ、それとは別の生産活動にも従事していたのではないかと考えられる注目すべき事例が、今回の調査においても、又古い文献からも知られる。

今回の調査において、この期のピットを始めとする各種の遺構及び包含層などから多数の土錘を検出している。現在、当調査地区から数 100メートル行けば、琵琶湖岸に到達することができることを考えれば、当時の人々が漁労活動を主体的に推し進めていたと考えるのは、いわば当然であろう。今でこそ、琵琶湖の汚染が遅ればせながら叫ばれているものの、当時の人々にしてみれば、淡海は自然がもたらす〝天与の一大宝庫〟であっただろう。

又、古い文献には古代・中世にかけて支那の港が山田港や矢橋港とともに、対岸坂本港等を結ぶ湖上交通の要所として栄えた事例が、再三記載されている。おそらく、この地の人々は漁労活動に従事する一方で、湖上交通がもたらす利益に浴していたであろう。

（2）　井　　戸

当遺跡は、既述のように古代野洲川が形成した三角洲上に位置しており、下層一帯に湧水の砂層（Ⅶ・Ⅷ層）及び礫層（Ⅸ層）が広がっている。このことが狭長なトレンチ調査にもかかわらず8例に及ぶ井戸を検出した大きな自然的要因であろう。個々の井戸を整理すると表1のごとくであるが、それらは井側の構造からみて、方形縦板型木組井戸（SE1）、円形曲物型木組井戸（SE2・SE3）、円形素掘り井戸（SE4・SE5・SE6・SE7・SE8）に分類され、さらに円形素掘り井戸は井筒(曲物)の有無から、曲物井筒を保つ円形素掘り井戸（SE4・SE5・SE6）と曲物井筒のない円形素掘り井戸（SE7・SE8）の二様に細分が可能である。

SE1は古墳時代前期の方形縦板型木組井戸で、板材4枚を縦に方形に組んだだけの簡易な造りである。井側

を支える横桟ないし添板といったものの存在しない原初的な様相を呈している。

井戸番号	時期	掘り方		井側				井筒(cm)	井桁
		形態	規模(m)	素材	形態	構造	規模(cm)		
SE1	古墳時代前期	隅丸方形	1.3×1.3	木組	方形	縦板	40×50		不明
SE2	平安時代末～鎌倉時代	円形	φ1.3	木組	円形	曲物2段	内径55・高33 内径33・高23		不明
SE3	鎌倉時代後期	楕円形	4.5×3.9	木組	円形	曲物3段	内径61・高43 内径49・高32 内径42・高32		不明
SE4	鎌倉時代	円形	φ2.4	素掘り					不明
SE5	弥生時代中期末	円形	φ0.8	素掘り					不明
SE6	鎌倉時代後期	円形	φ2.5	素掘り					不明
SE7	平安時代後期	円形	φ1.1	素掘り				曲物内 内径37・高16	不明
SE8	不明	円形	φ0.6	素掘り				曲物 内径50・高12	不明

第1表　支那中遺跡出土井戸一覧表

SE2は平安時代末から鎌倉時代の、又SE3は鎌倉時代の円形曲物型木組井戸である。井側を形成する曲物は、SE2で2段、SE3で3段におのおの重ね合わせているが、重ね部の間隙がもたらす不安定をタガの利用によって、さらにSE3では細い丸竹を随所に挿入することによって固定している。又、SE2では、井側の底を安定させると同時に浄水を得るため、井側の底に円礫を敷いている。このように曲物を井側とする場合には、先の方形縦板型木組井戸が当初より井側用に材から調整しているのに対し、既製のものを二次利用しているようである。

SE5は弥生時代中期末の、SE4は鎌倉時代の、又SE6は鎌倉時代後期のそれぞれ円形素掘り井戸である。最も初源的な井戸として弥生時代より存在するが、今日まで遠々と命脈を保ちつづけている形態でもある。SE7は平安時代後期の井戸であるが、SE8については遺物に恵まれずその時期は不明である。SE7・SE8は同じく円形素掘り井戸ではあるが、両者とも井筒として曲物を設置している点で前例と異なる。SE8の場合、掘り方が曲物径にほぼ等しく、曲物を据えてその内側だけを掘り曲物本体を下げていった可能性が考えられた。

以上、8例の井戸を3形態4類に分けて若干の考察を加えてきたが、こうした各井戸は、他の遺構との関連においてどうであろうか。確かにそれぞれの井戸の周辺には同期の遺構が散在しており、居住域内の一隅に掘開されていたことは明らかである。ただ、井戸が居住域内に占める明確な位置、そして、それから想起される井戸の占取ないし所有形態にまで論及するには、狭長なトレンチ調査にすぎない現況では困難至極と言わざるをえない。

（3）　土　　坑

時期の明らかとなった土坑は8例を数えるが、SK5が弥生時代中期末に比定される以外は、いづれも古墳時代前期のものであり、空間的には、K－2トレンチを中心とする微高地上の一角に集中するものと、遠く離れたS－7トレンチ近在に位置するものとの2群が確認される。不定形落ち込み（SX）に関しては、時期を明確にするものは4例を数えるが、SX1・SX2は古墳時代前期を主体とし、SX4・SX5は平安～鎌倉時代のものである。SX1・SX2は先の土坑の場合におけるK－2トレンチを中心とする1群に包括され、SX4・S

Ｘ５はおそらくＳＢ１～ＳＢ16を始めとする建物址との関連で理解されよう。

これら土坑・不定形落ち込みは、平面円形ないし小判形を呈し比較的深いもの、不定形な広がりを保ち浅くて、人為的な掘開というより自然の窪地と考えられるものなど、形態上種々の偏差を伴っているが、いわゆる土壙墓の可能性を持つものは存在しない。又、その空間に占める位置からすれば、屋外土坑の範疇に属し、おそらく貯蔵ないし廃棄物処理の用途に供されたと考えられる。

（４）　溝

調査区のほぼ全域にわたって多数の溝が検出されているが、概ね古墳時代前期及び平安～鎌倉時代の２期に分けることが可能なようである。ただ例外的にＳＢ１・ＳＢ２が白凰～鎌倉時代の遺物を含んでおり、両者が仮に白凰時代に掘開された溝であるとするならば、この付近一帯が寺跡に比定されている「大般若寺」との関連で注目される。

各溝の流路は、Ｋ－２トレンチで古墳時代前期の４条の溝（ＳＤ６・ＳＤ８・ＳＤ９・ＳＤ10）がいづれも北東から南西へと平行して流れている以外、他は自然地形に左右される形で各方向に錯綜している観がある。建物の項等で若干考察した各期の居住域の内外を、溝がどのように流れているかは留意される所だが、狭長なトレンチ調査でもあり、それを追求する事は現況では不可能に近い。

（谷口　徹）

〈参考文献〉

1．山本　博『神秘の水と井戸』　1978

2．広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡』－第18～20次発掘調査概要－　1976

3．　同　上　「草戸千軒町遺跡第21次発掘調査概要」『草戸千軒』No.53　1977

4．　同　上　「草戸千軒町遺跡第22次発掘調査概要」『草戸千軒』No.56　1978

5．小都　隆「草戸千軒町遺跡の井戸Ⅱ－製作方法を中心として－」『草戸千軒』No.49　1977

5　出土遺物

(1)　弥生土器（第Ⅳ様式）

①　ＳＥ５の一括遺物

Ｋ－３で検出されたＳＥ５の②層より、畿内第Ⅳ様式に並行する弥生土器が、着柄鋤と考えられる木製品１点とともに出土した。器種としては、壺（Ａ・Ｂ・Ｃ）、無頸壺、甕（Ａ・Ｂ・Ｃ）、高坏などがあり、総数18点を数える。

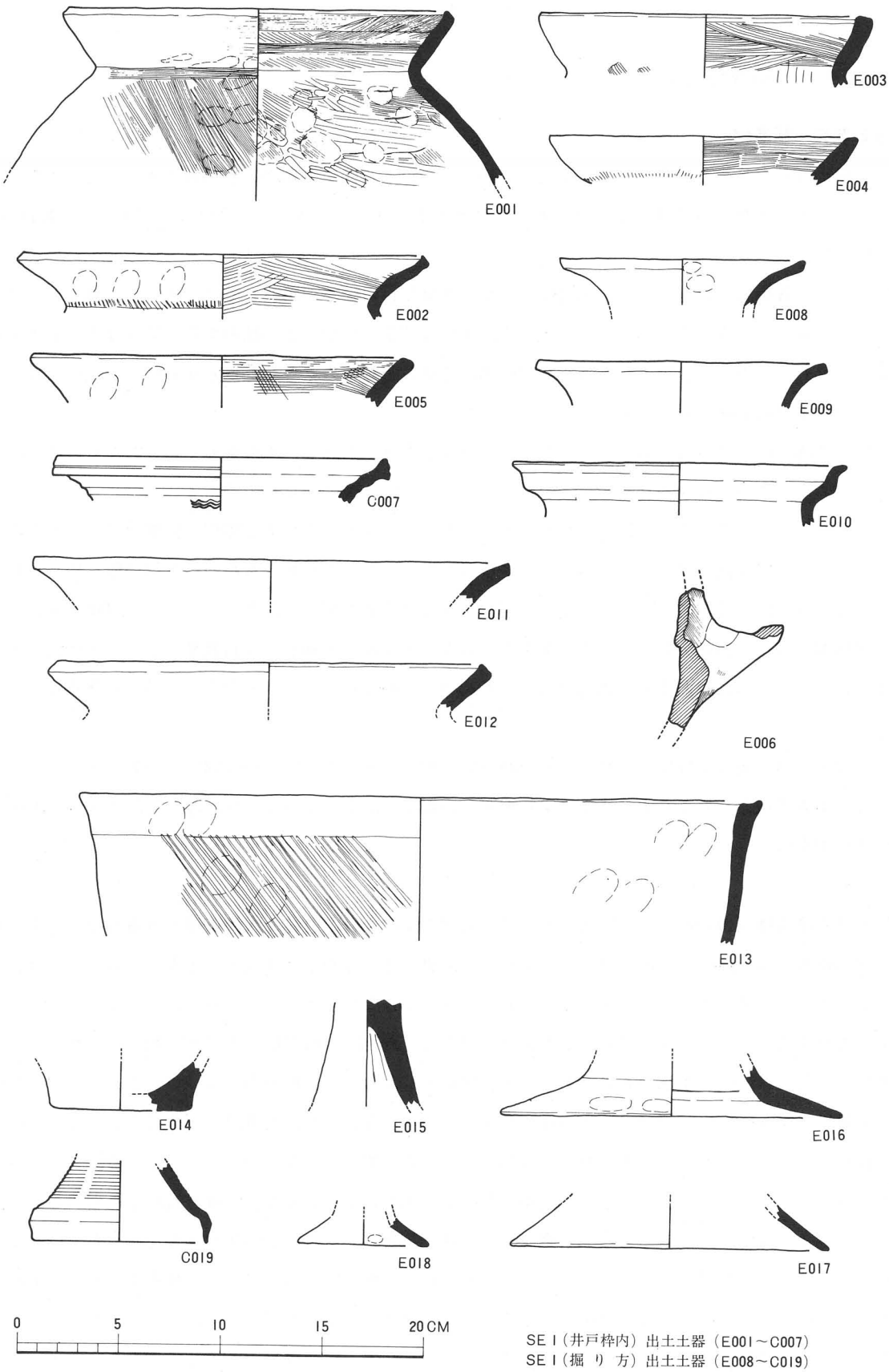
まず壺には、第Ⅳ様式に典型的な、頸部がゆるやかに外反し、口縁部が屈曲して立ち上がり、頸部下位にヘラ状工具による斜線文帯を施すＡと、大きく外反する口縁の端部を、やや上下に拡張する、第Ⅲ様式の系譜を引くＢ、口頸が「く」字に外反し、上下に拡張した口縁部に２条の凹線をめぐらせたＣとがあり、壺底部には、平底のものと、やや上げ底気味のものがある。

無頸壺は、体部がゆるやかに内湾しつつ立ち上がり口縁が大きく内曲し、端部を丸くおさめたもので、口縁から体部にかけて、６条の凹線をめぐらす。この種のものとしては、後出的なものである。(注１)

甕にも、器形から三つのタイプが認められる。Ａとしたのは、大きく外反する頸部に屈曲して立ち上がる受口状口縁のつくもので口縁内面に、斜刺突列点文や刻み目をめぐらし、内外面とも粗いハケ目調整を施したもの、Ｂとしたのは、Ａと同じく頸部は大きく外反するが、口縁はそのまま短かくおさめるもので、口縁端部に刻み目、頸部および体部上半に、斜刺突列点文や凹線文をめぐらす。内外面とも粗いハケ目調整。Ｃとしたのは、やや内湾する体部に、「く」字に屈曲する口頸部のついたもので、口縁端部を上下に拡張している。内外面ともナデによる調整。

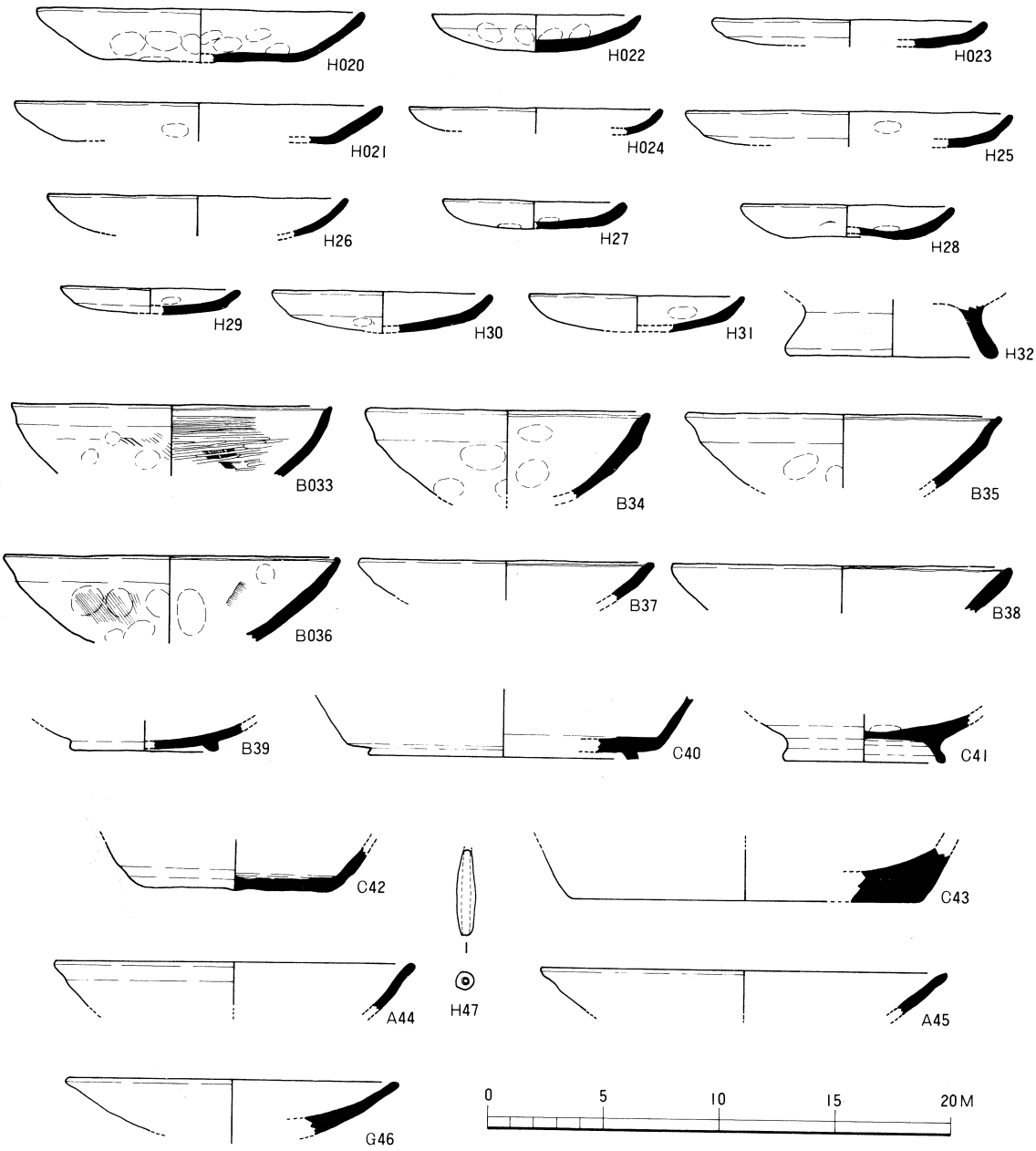
高坏は、坏部口縁が大きく外反し、端部をやや斜方向に垂下させたもので、口縁内側に一条の突帯をめぐらし、垂下部には二条の凹線文をめぐらす。ほかに中空裾開きの脚部が出土している。柱状部と裾部の区分は不明瞭で、内面にしぼり痕を残す。

近江における第Ⅳ様式の資料は、長浜市鴨田遺跡、大津市堅田春日山遺跡、大津市南滋賀遺跡などで出土が知られる。鴨田遺跡では、溝１とされる自然水路より、壺、甕、高坏等が、ほぼ完形で出土しており、壺は、本遺跡でＡとしたものがみえ、大型品で、頸部に棒状列点文をめぐらして全体にしっかりしたつくりを示しており、本遺跡例に先行するものであろう。甕にも、本遺跡で甕Ａとした「受口状口縁」のものが多数みえ、粗いハケ目調整、刺突列点文等、ほぼ同じ手法のものである。又、甕Ｃとしたものも、鴨田例ではいづれもしっかりしたつくりで、口縁端部に刻み目をめぐらすなど、古い様相を示している。高杯では、本遺跡でみえるものはなく、口縁の内湾する鉢形のものが知られる。(注２)一方、春日山遺跡からは、壺、甕、高杯などの出土が知られる。このうち、まず壺は本遺跡でＡとした、口縁立ち上がりに凹線文をめぐらすものがみえるが、凹線を省略したものもあり、鴨田例、本遺跡例より後出するものであろう。甕は、本遺跡で甕Ａとした、粗いハケ目調整を施した受口状口縁甕で、小破片のため明確に指摘できないが、そのつくりからみて、鴨田例、本遺跡例より後出するものであろう。高坏も本遺跡と同じく、受部に一条の突帯をめぐらせ、口縁端部を垂下させたものの出土が知られている。ただ本遺跡例にくらべ、垂下の角度がより鈍角で短いことなどからして、やや後出する可能性があろう。(注３)次いで、湖



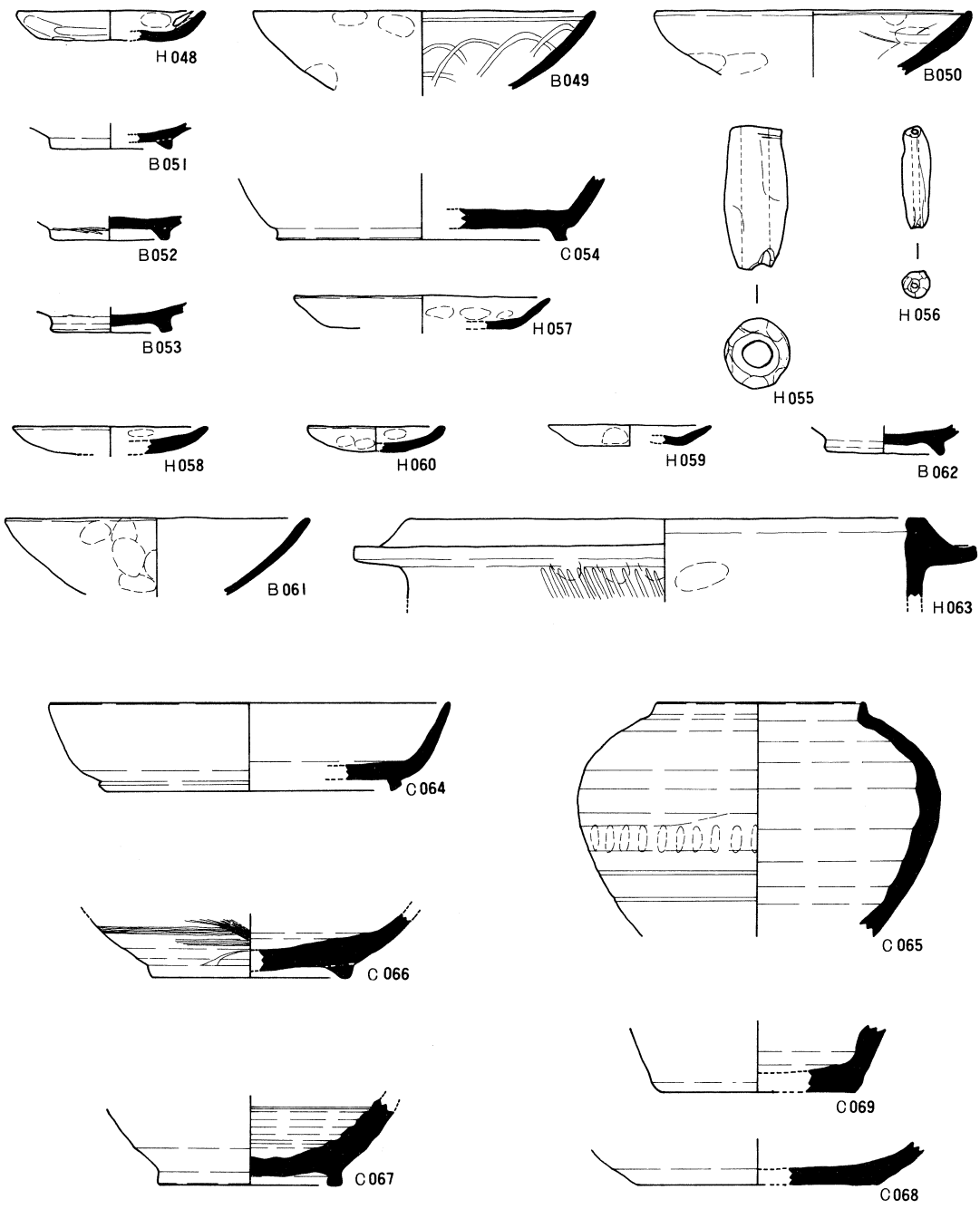
SE 1（井戸枠内）出土土器（E001～C007）
SE 1（掘 り 方）出土土器（E008～C019）

第3図　ＳＥ１出土土器実測図



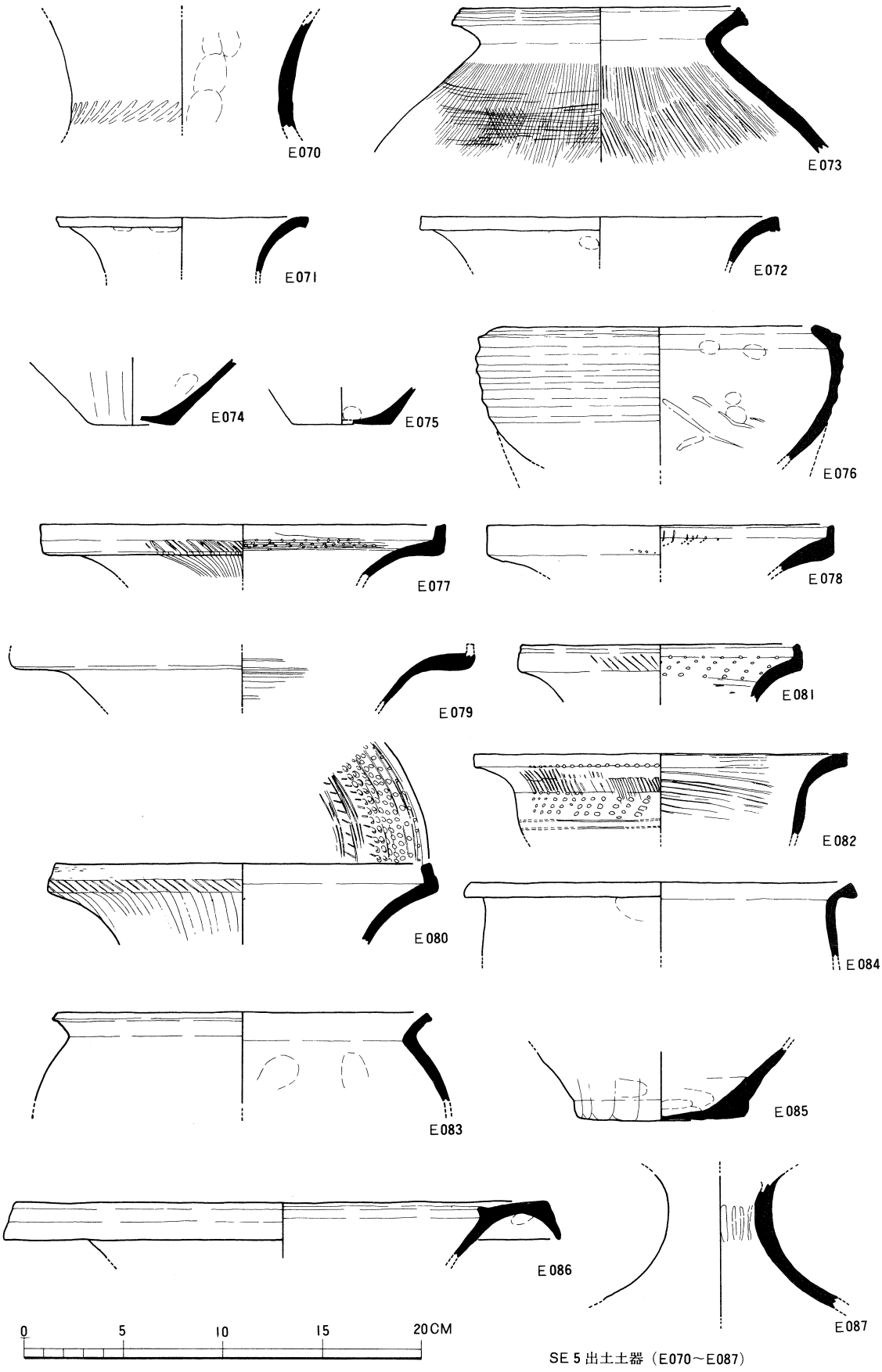
SE 2（曲物内）出土土器（H020～H024）
SE 3（上　層）出土土器（H025～H047）

第4図　ＳＥ２・ＳＥ３出土土器実測図

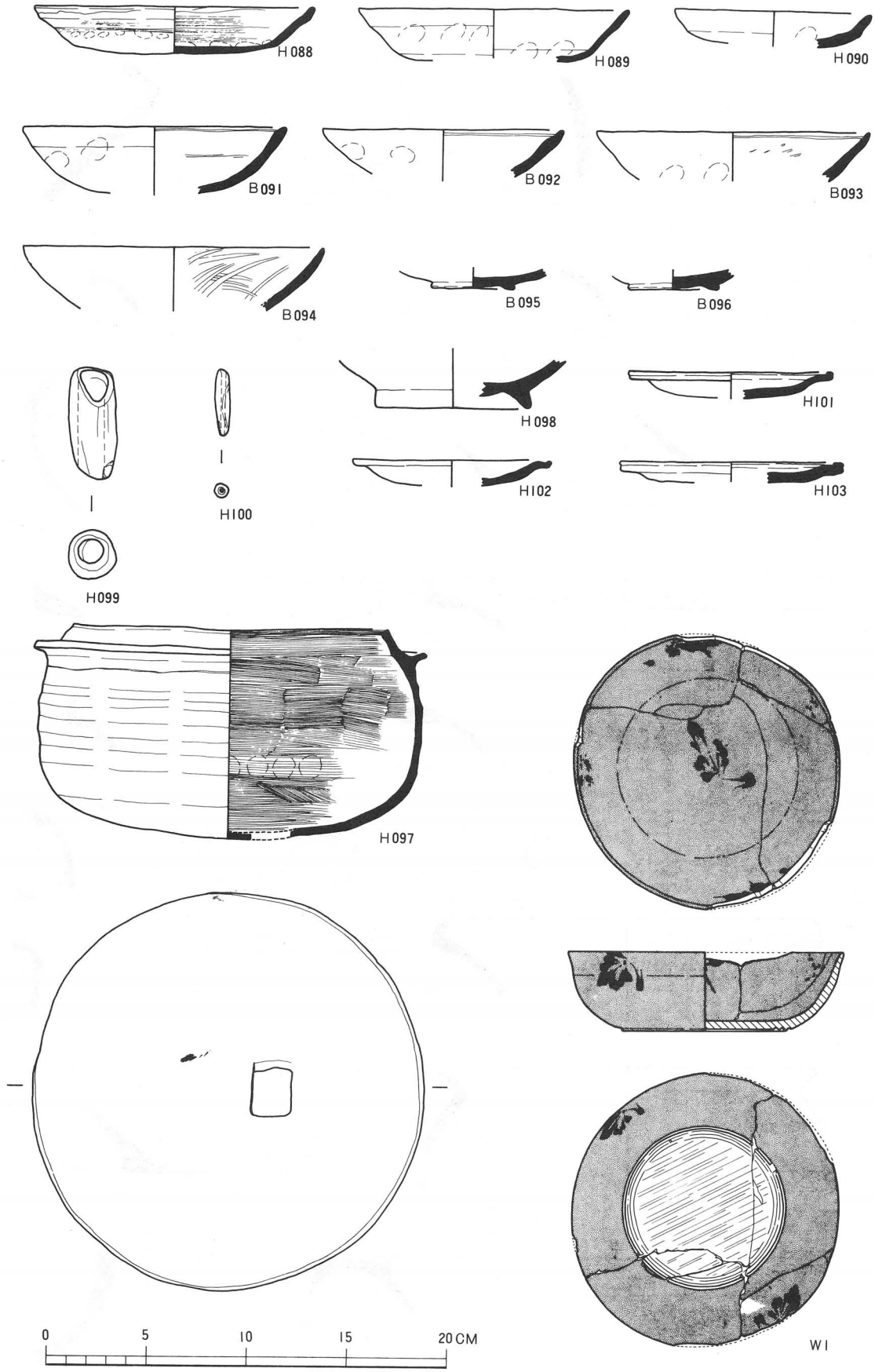


SE 3（下層）出土土器（H048～H056）
SE 4 出土土器（H057～C069）

第5図　ＳＥ３・ＳＥ４出土土器実測図

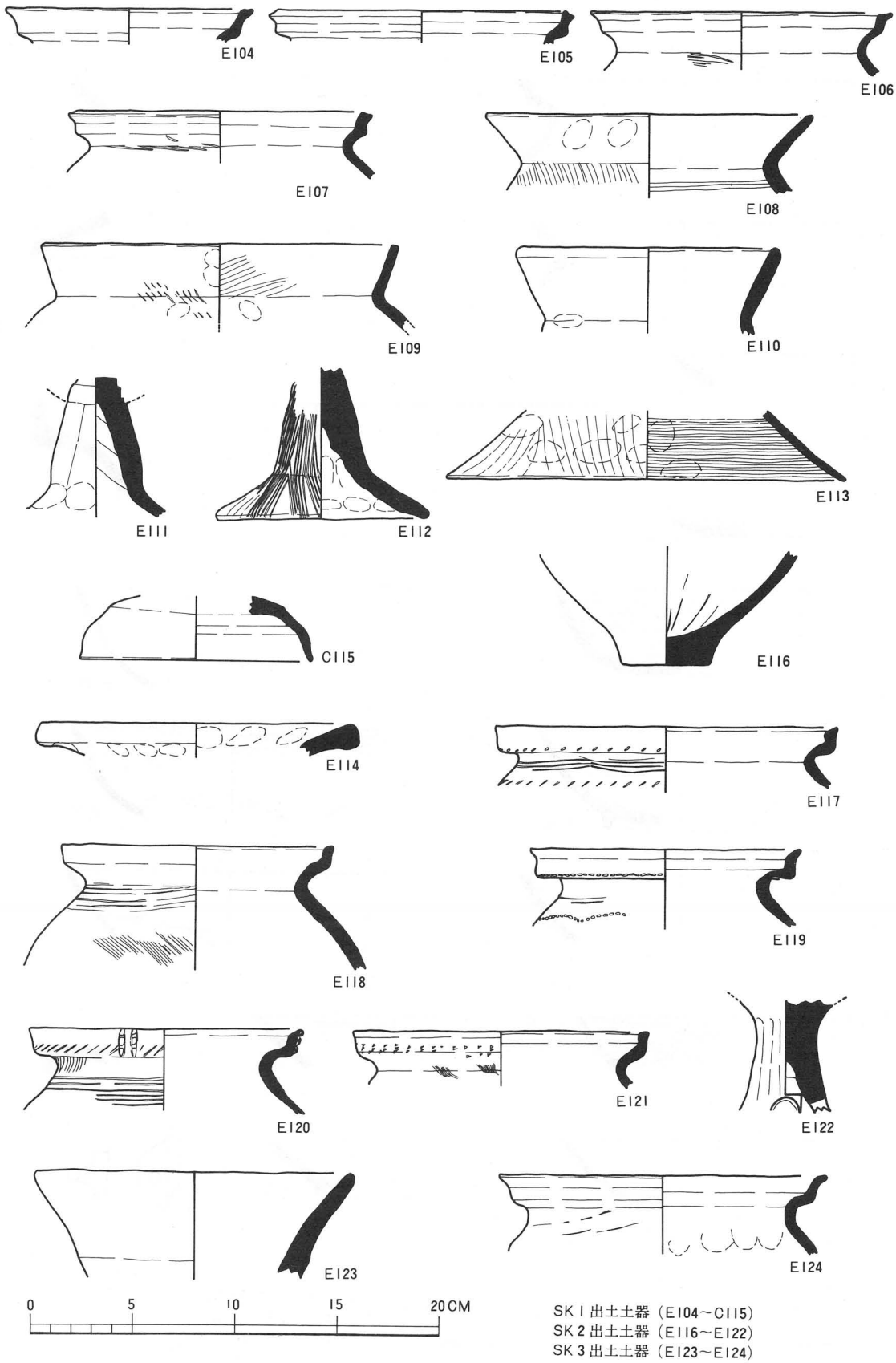


第6図　ＳＥ５出土土器実測図

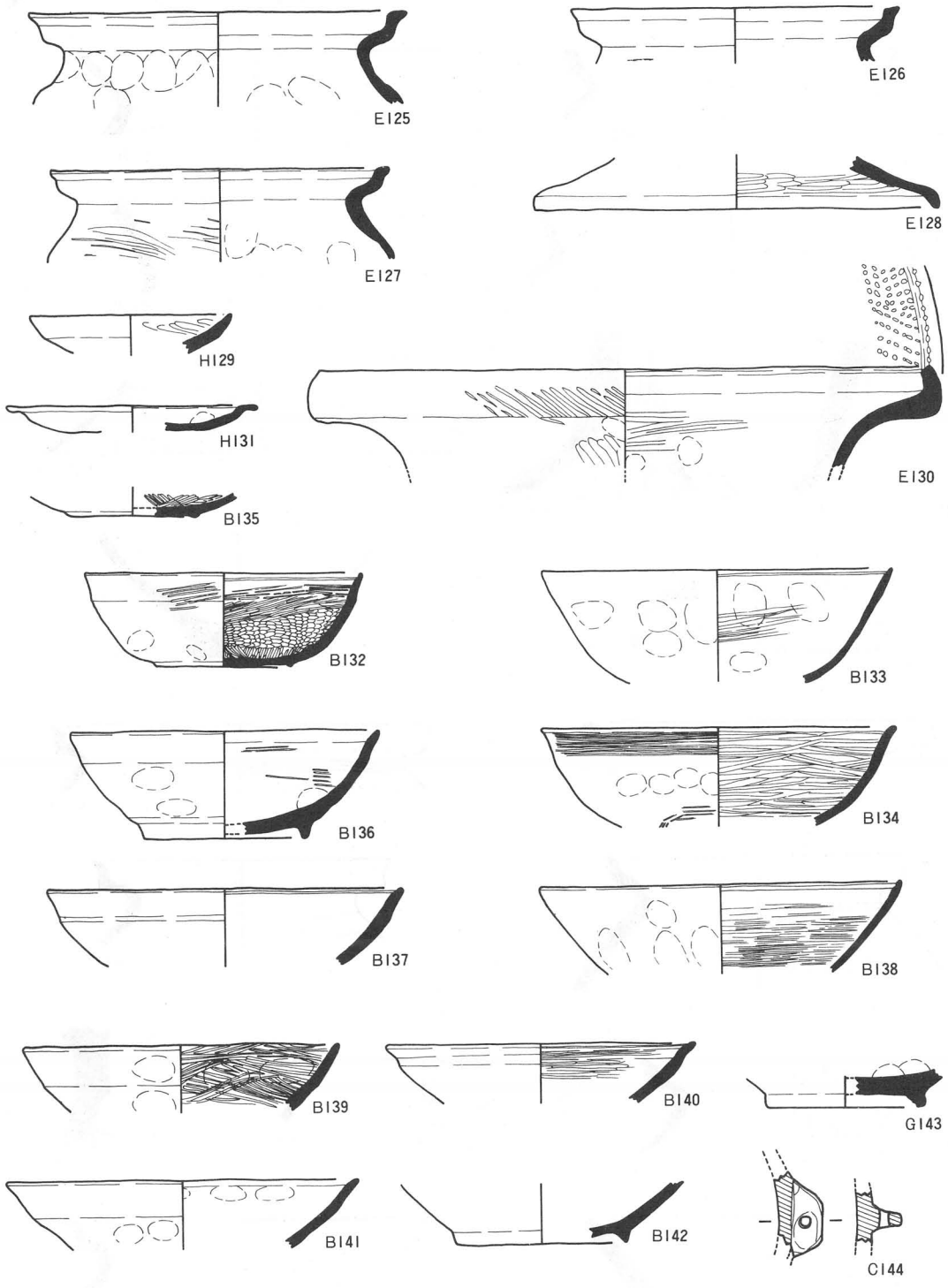


SE 6 出土土器（H088～H100）
SE 6 出土漆器（W1）
SE 7 出土土器（H101～H103）

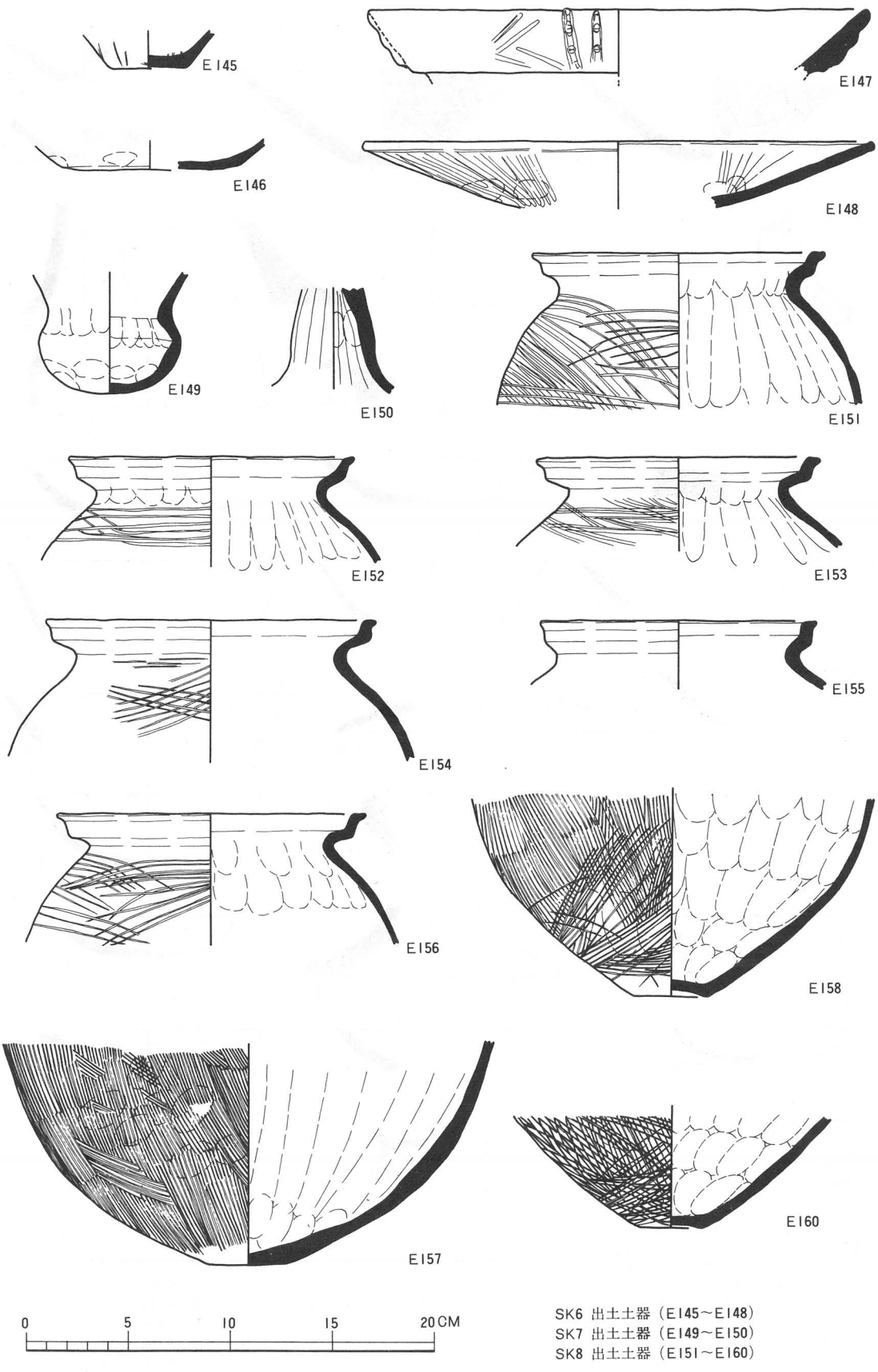
第7図　ＳＥ6出土土器・漆器、ＳＥ7出土土器実測図



第８図　ＳＫ１・ＳＫ２・ＳＫ３出土土器実測図

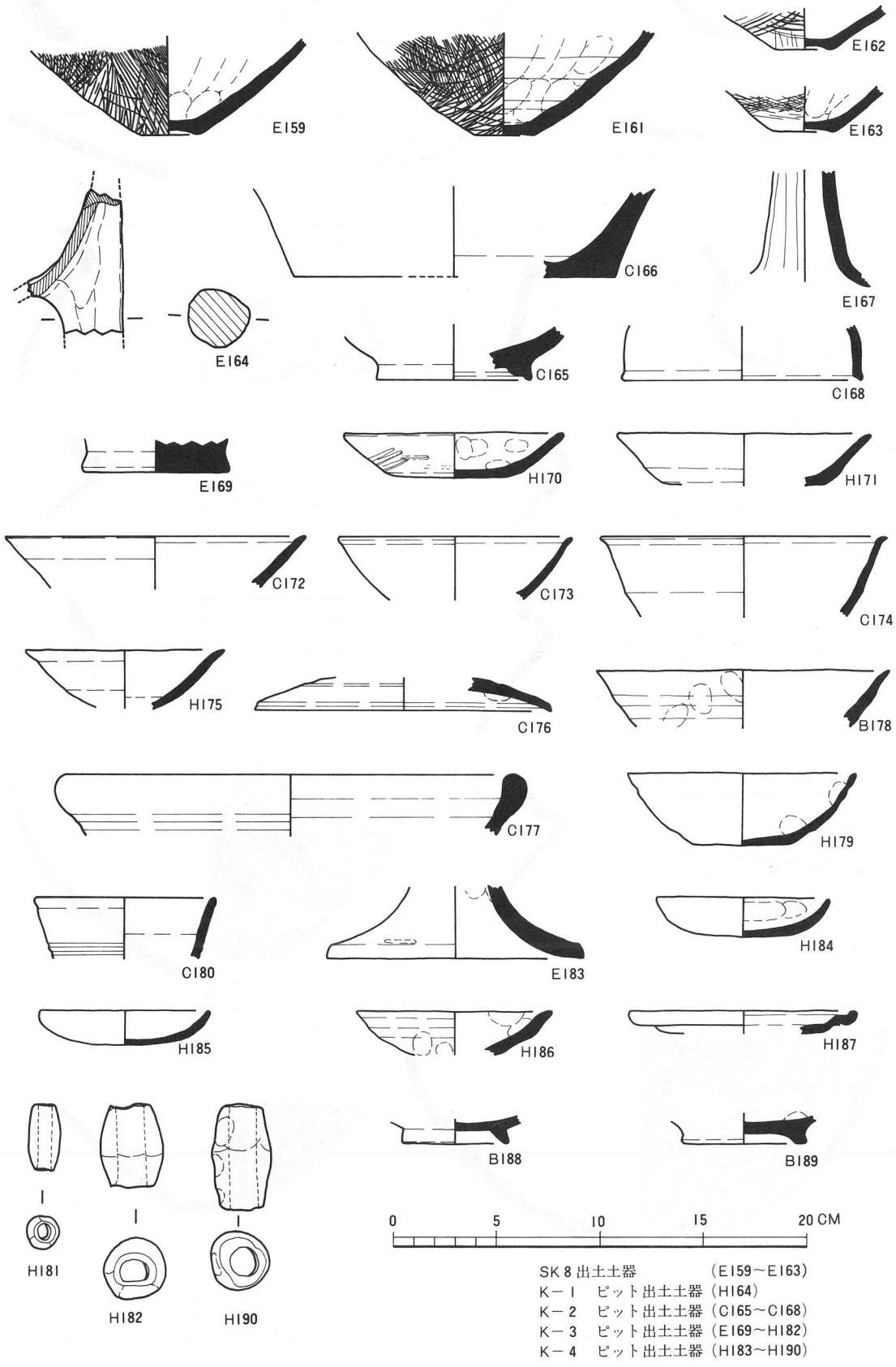


第9図　ＳＫ３・ＳＫ４・ＳＸ４出土土器実測図

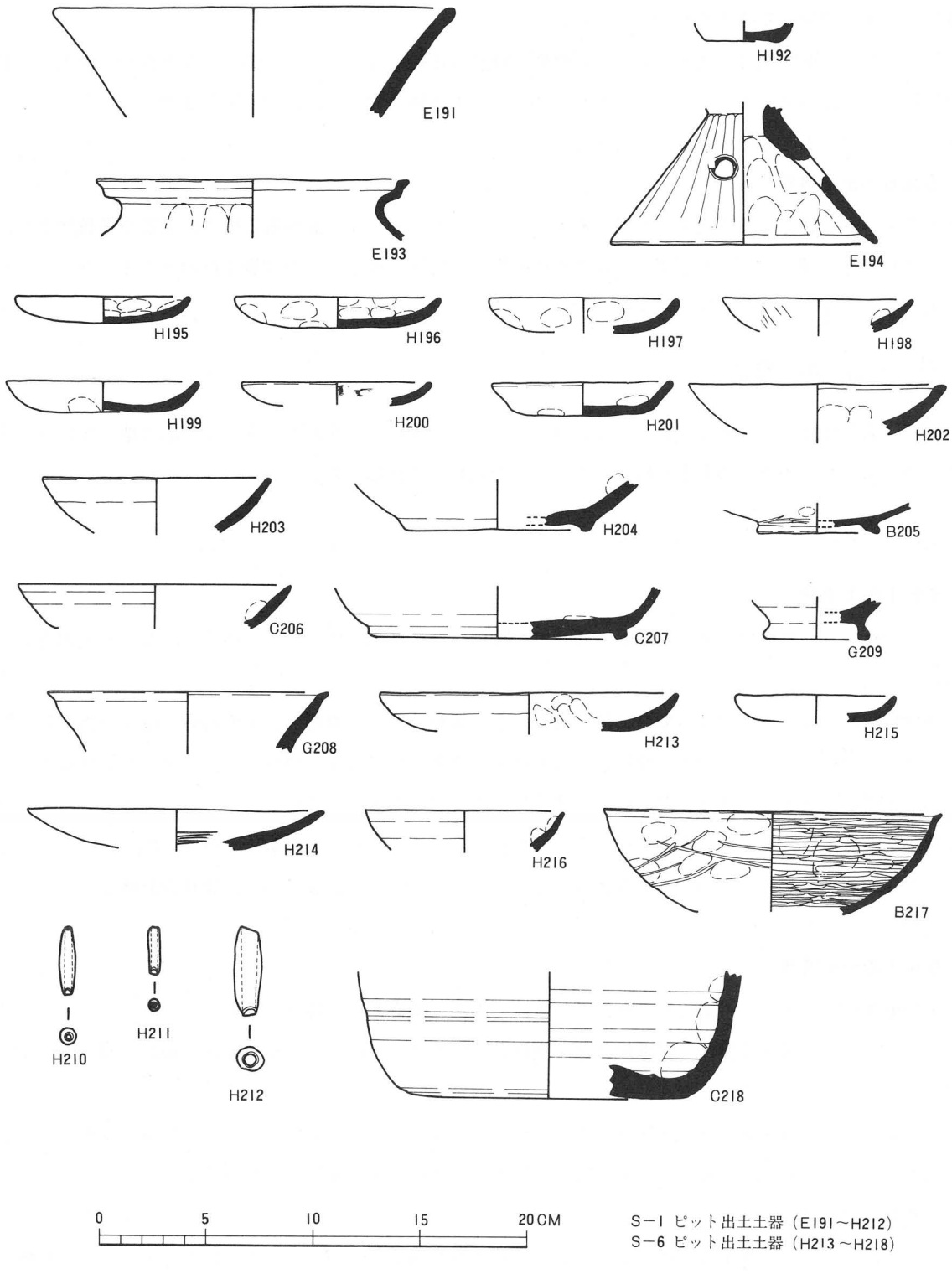


SK6 出土土器（E145～E148）
SK7 出土土器（E149～E150）
SK8 出土土器（E151～E160）

第10図　ＳＫ６・ＳＫ７・ＳＫ８出土土器実測図



第11図　ＳＫ８、各トレンチピット内出土土器実測図



第12図　各トレンチピット内出土土器実測図

西線建設に先立って調査された南滋賀遺跡の11号周溝基からは、独特な壺とともに、本遺跡で甕Aとした受口状口縁をもち、粗いハケ目で調整されたものや、甕Cとした「く」字に外反して、口縁端部を上下に拡張したものが出土し、いづれも鴨田例に近いしっかりした形態のものである。したがって、南滋賀例は、鴨田例に並行ないし、やや後出し、本遺跡例に先行するものと考えられる。(注4)

以上のように、本遺跡例は、県下における同時期の資料と比較するなら、ほぼ鴨田、南滋賀例に後出し、春日山例に先行することが明らかとなった。(注5)したがって、一応本遺跡の弥生土器は畿内第Ⅳ様式の中でも、その中葉から後半にかけてにおくことができると考える。

② ＳＫ５の出土遺物

ＳＥ５の東７ｍに所在する不整隋円を呈する土坑であり、ＳＥ５と同じ畿内第Ⅳ様式の土器が多数出土した。器種としても、壺、甕、高杯などが認められるが小破片で、図示し得うるものは甕１点のみであった。いづれもＳＥ５出土例と同類で、ほぼ並行するものと考えられる。

(2) 弥生土器（第Ⅴ様式）

弥生後期（第Ⅴ様式）の土器は、Ｋ－１のＳＤ１、ＳＤ３、ＳＤ５、ＳＸ１、Ｓ－３の沼沢地、ＳＤ18、Ｓ－７のＳＤ19、などからかなりの出土が知られている。次回報告で詳細に果したい。

(3) 古式土師器

① ＳＥ１出土遺物

Ｋ－１で検出された板材の井戸枠をもつ井戸で、堀り方、井戸枠内よりかなりの古式土師器、古式須恵器の出土をみた。

まず井戸枠内からは、単純口縁の甕が２種（甕Ｂ－Ⅰ・甕Ｂ－Ⅱ）、甕把手、須恵器壺口縁等が出土し、堀り方からはラッパ状に開く口縁の壺Ａ、受口状口縁を有する甕Ａ、単純口縁の甕Ｂ、大型の鉢（？）、高杯脚部などが出土し、須恵器高坏１点が伴う。井戸枠内と堀り方の両者より出土した甕Ｂはほぼ同手法によっており、短期間に埋没したと考えられるが、枠内、堀り方のいづれからも、やや古式の須恵器が１点づつ出土しており、後世の流入でないかぎり、存続していた可能性はのこる。(注6)なおＳＥ１の中心的な年代は、甕Ｂの形態などから、一応庄内Ⅰ式期としておきたい。(注7)

② ＳＫ１の出土遺物

Ｋ－１の東端に所在する、不整円形の土坑で、多数の古式土師器および若干の須恵器を出土した。古式土師器では、口縁が受口状を呈する甕Ａと、単純口縁の甕Ｂが全体の過半を占め、ほかに高坏の脚部、器台などが出土し、須恵器では坏蓋１点を図示した。

古式土師器のうち、甕Ａは、受口状縁がかなり退化し、高坏の中実化もすすんでおり、布留式段階のものであろう。(注8)須恵器坏蓋は、陶邑のＴＫ 208型式に類品がみえ、(注9)およそ五世紀後半代のものであろう。

③ ＳＫ２の出土遺物

Ｋ－２のＳＥ３の南に所在する、隋円形の土坑で、その第③層より、若干の古式土師器を出土した。器種としては、壺底部、受口状口縁の甕Ａ、高坏などがあり、甕Ａは、鋭く屈曲して立ち上がり、口縁外面を、刻目文、列点文、棒状浮文などで飾ったもので、庄内段階のものであろう。(注10)

④ ＳＫ３の出土遺物

ＳＫ２の西に接して所在する、不整円形の土坑で、その第②層より、古式土師器若干を出土した。器種としては壺、受口状口縁の甕Ａ、高坏の裾部などで、甕Ａは、やや退化した受口状口縁で、無装飾であり、布留式段階のものであろう。ほかに上層より、歴史時代の土師器小皿が出土している。

⑤　ＳＫ６の出土遺物

Ｓ－２の中央に所在する、ほぼ円形の浅い土坑で、若干の古式土師器を出土している。器種としては、壺底部、高杯口縁、器台受部などがあり、資料的に不十分であるが、一応庄内式段階と考えられる。

⑥　ＳＫ７の出土遺物

Ｓ－７の南辺に所在する土坑で、若干の古式土師器を出土した。器種は、小型丸底壺と高杯で、いづれも布留式段階のものである。(注11)

⑦　ＳＫ８の出土遺物

ＳＫ７の南に所在する不整円形の土坑で、下層より完形に近い古式土師器をかなり出土した。器種はすべて甕で、受口状の口縁部と球形で上げ底気味の底部が相半ばしており、同一個体の可能性も考えられる。これも一応布留式段階におくことができよう。(注12)

この時期の遺物は、以上のほか、Ｋ－１のＳＤ１、ＳＸ２、Ｋ－２のＳＤ６、ＳＤ７、ＳＤ８、ＳＤ９、ＳＤ10、ＳＸ２、Ｓ－２のＳＤ16，ＳＤ18、Ｓ－３の沼沢地、Ｓ－６のなどから出土しており、この時期の遺跡の規模が大きくなったことが推測される。

(4)　白鳳期の遺物

この時期の遺物は、Ｋ－１、Ｋ－２を中心にかなりの出土が知られる。とくに、Ｋ－２のＳＤ１からは若干の平瓦が出土している。この地域に比定される「大般若寺」に関連するものであろう。(注13)

(5)　平安時代の遺物

①　ＳＥ７の遺物

Ｋ－５の西端で検出された素掘りの井戸で、その第④層より、口縁端部を折り曲げた、平安後期に一般的な土師皿（Ｆタイプ）が３個体出土した。

②　ＳＸ４の出土遺物

Ｋ－４の西端、ＳＥ５に南接する不整隋円の落ち込みで、土師器小皿、黒色土器埦がかなり出土した。土師器小皿では、口縁端部を内側に折り曲げたＦタイプが、黒色土器埦では、内面を丁寧にヘラミガキした器壁の薄い浅埦（Ｆタイプ）のほか、やや厚手ながら、ヘラミガキを施したＡ、Ｂタイプが出土している。したがって、これらは平安後期にその中心的年代をおくことができるであろう。(注14)

以上のほか、Ｋ－１のＳＤ１、ＳＤ２、ＳＤ５、Ｋ－２のＳＤ１、ＳＤ７、Ｋ－５のＳＤ12、ＳＤ13、Ｓ－１のＳＤ14、ＳＤ15などからこの時期の遺物が出土している。次年度報告書で詳細を報じたい。

(6)　鎌倉、室町期の遺物

①　ＳＥ２の出土遺物

Ｋ－１のＳＥ１の西５ｍに所在する、曲物を二重に使用した礫床の井戸で、その第③層より若干の土師器を出土した。土師器はすべて小皿であり、平底で口縁の内反する、やや大形のもの（皿ＡⅠ）、丸底で口縁の内湾する

もの（皿B）、やや内湾気味の底部で、口縁の内反するもの（皿D）などがみえる。いづれも粘土板を手捏により成形したもので、鎌倉時代以降のものである。皿AⅠは脚付皿の可能性もあり、鎌倉時代でも前半の可能性が高い。(注15)

②　SE3の出土遺物

K－2の南よりに所在する井戸で、曲物を使用している。埋め土は大きく二層に分かれ、上層より土師器、黒色土器、須恵器、灰釉、緑釉、土錘、下層より土師器、黒色土器、須恵器、土錘が出土している。土師器では上層より丸底の皿C、口縁の内反する皿Dと有脚皿が、下層より平底の皿Aが出土し、黒色土器では、上層より口縁の外反する椀C、直線的な口縁に浅い断面三角形の高台を付ける椀Eが、下層からも椀Eの出土が知られる。須恵器は、上層より坏、椀、皿、甕が、下層より坏1点が出土し、ほかに上層から灰釉椀、緑釉皿が出土している。須恵器、灰釉、緑釉は一応平安後期のものと考えられるが、土師器皿、黒色土器椀は、鎌倉後期に一般的なものである。(注16)(注17)

③　SE4の出土遺物

SE3の西に、K－2とK－3にまたがって所在する素掘りの井戸。その第⑤層より土師器、黒色土器、須恵質土器が出土した。

土師器では、大部分が小皿で、A、D、Eの三タイプがみられ、ほかに羽釜1点の出土が知られる。須恵器では、低い高台のついた高坏のほか、瓶底部が出土している。高台付のものをA、ないものをBとした。このうち須恵質土器については、平安後期の年代が与えられるが、土師器、黒色土器は鎌倉後期に類例の多いもので、(注18)(注19)おそらく、埋没の年代を示すものと思われる。

④　SE6の出土遺物

K－6の中央に所在する素掘りの井戸でその第⑤層より、土師器小皿、黒色土器椀、羽釜、土錘などが出土した。土師器小皿にはやや大型の平底を呈するもの（AⅠ）、口縁の外反するもの（C）がみえ、椀も、やや浅椀のCタイプ、直線的な口縁をもったEタイプがあり、Eタイプが多い。羽釜は、口縁が内傾するAタイプで、土錘にも大型のものと小型のものがある。土師器小皿や黒色土器椀の形態からみて、鎌倉後期ないし、室町期に属するものであろう。

これらのほか、K－1のSD1、SD2、SD4、SD5、SX1、K－2のSD1、SD7、K－5のSD11などから、この時期の遺物が出土しており、合わせて、次回報告で検討を加えたい。

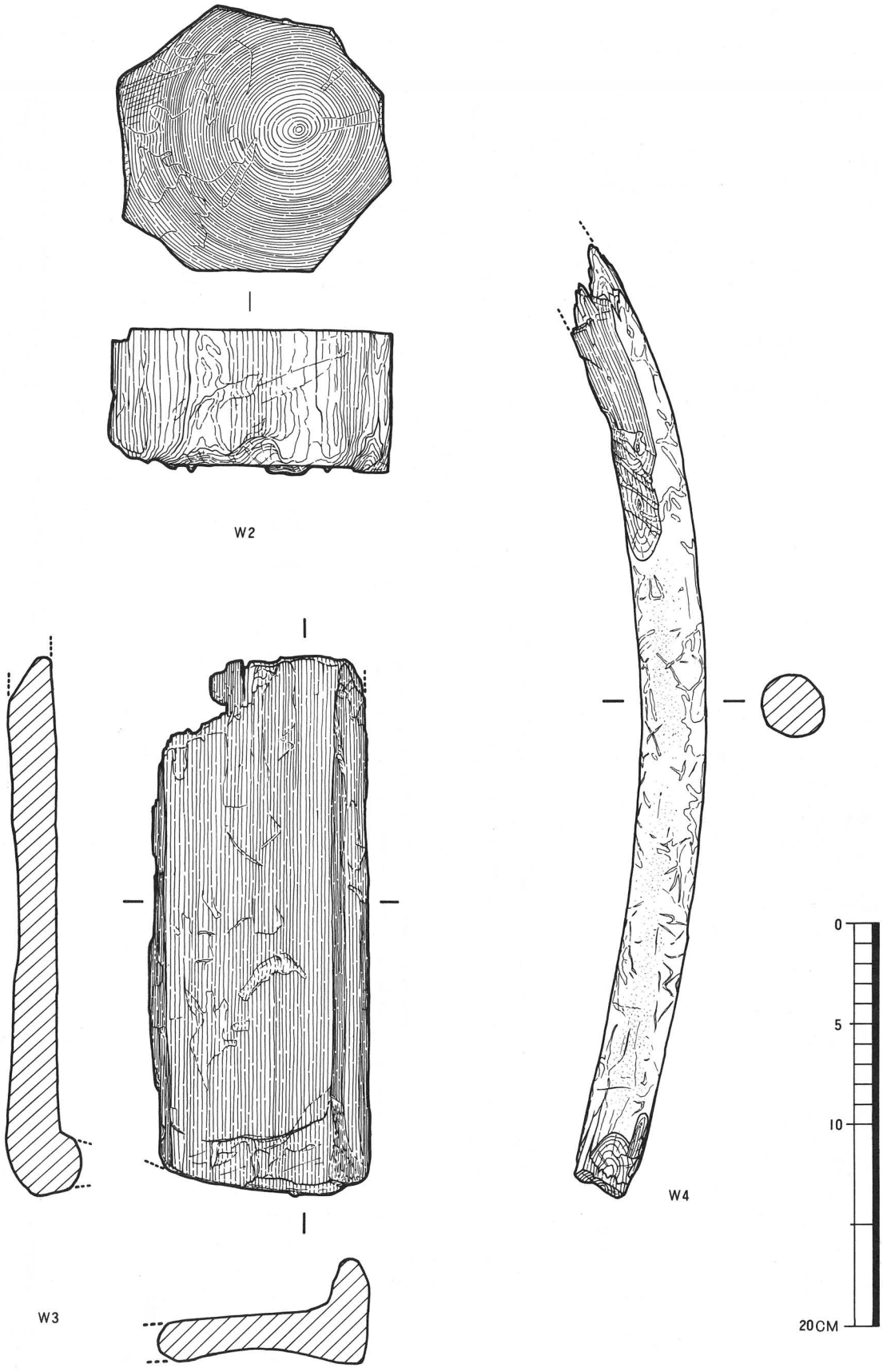
（大橋　信弥）

(7)　木製品

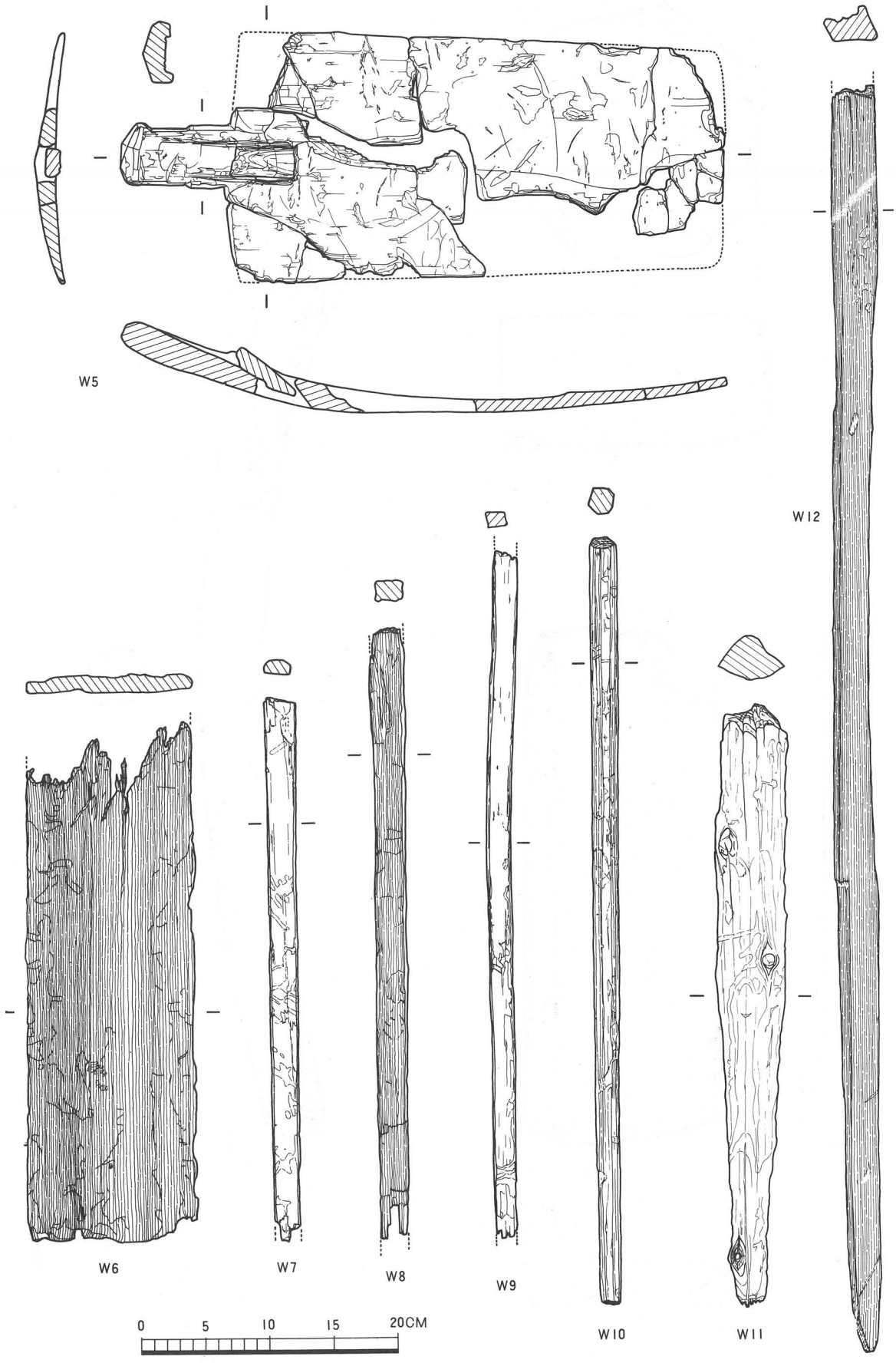
今回の調査で木製品を出土したのは、井戸跡と旧沼沢地に限られる。ここでは、それらの中で比較的遺存の良好であった12例について概括しておこう。

①　漆塗花弁文化椀（W1）

SE6から羽釜等とともに出土したものである。平底の高台をわずかに削り出した木製の椀で、高台底面は木肌が露呈するが、内外面とも黒漆を塗り、さらに赤漆による華麗な花弁文が描かれている。花弁文は、外側面に2例、内側面に4例、底内面に1例を配している。漆塗りの技術は縄文時代晩期にまでその存在をさかのぼり得るようだが、4000年以上の歴史を持つといわれる中国のそれが新たに導入されて、既に相当高度な技術が獲得さ



第13図　旧沼沢地出土木製品実測図



第14図　井戸跡・旧沼沢地出土木製品実測図

れるに至っていたものと考えられる。また内面では、幅 0.4cm前後を計る同心円状の削痕が確認でき、ロクロの巧みな使用が想起された。こうした漆塗りやロクロにみる高度な技術は社会的分業体制の一端を担う専業工人集団の存在を彷彿させて興味深いものがある。

口縁部の直径13.8cm、器高 4.0cmを計り、材質はケヤキと思われる。他の伴出遺物から考えて、鎌倉時代後半の所産と解されよう。

② 八角柱状木製品（W２）

ほぼ木心を中心に木取りをし、縁辺を不正確ながらも八角に削り出した柱状の木製品である。直径14.0cm、高さ 7.0cmを計る。上面は比較的遺存が良好で、一部、斜方向に数条の傷痕が確認されるが、下面は腐蝕が著しい。台状品として利用に供されたかとも考えられるが、定かでない。旧沼沢地から出土したもので古墳時代中期のものである。

③ 鉢（W３）

約半個体分を欠損しており全様は明らかではないが、内部をくり抜いて作った深さ 3.0cm余を計る浅鉢と考えられる。復元すれば平面を長方形とし、上端をやや開き気味とする枡状の器形を呈するのであろう。ただ短辺の中央に柄が付き、対する一辺が斜方向に削り落されているようであれば、浅掬いの可能性がある。内外面とも摩耗が著しく、加工及び使用痕を残していない。旧沼沢地からの出土品であり、古墳時代中期の所産と考えられる。

④ 丸木弓（W４）

末弭側の約半個体分を欠損しているが、丸木のままの両端に弭を削り出して作られた丸木弓である。本弭は、弓身の背・腹両側面を断続的に削り落として先細りとなる。弦の圧痕は確認できない。弓身中央の腹側は断続的な削剝が施されて、撓みを調整している。弓柄に関する痕跡は見い出せない。直径３cm前後、現存長48.0cmを計り、１mを超える長弓が想定される。旧沼沢地からの出土品で、古墳時代中期の所産と考えられる。

⑤ 着柄鋤（W５）

本例は、鋤身と柄を別木で作る着柄鋤の一形態をなすもので、鋤身のみ遺存していた。最大長47.4cm、最大幅19.6cmを計り、材質は堅緻なカシである。鋤身は湾曲して匙形をなし、中央には表から裏面に抜ける斜めの１孔が穿たれ、楔と思われる木片が挿入されていた。楔は、柄を鋤身に着装する際打ち込んだものと考えられ、鋤身の一端を削り出して作られた鉤形の突起とともに、柄の緊縛に効果があっただろう。この場合、鋤身と柄は、おそらく一直線というよりも、やや鈍角気味に着装されていたと思われる。

弥生時代の当初より、農耕具は機能や用途に応じて各種の形態のものを含んでいたことが知られるが、当時の水稲農耕における技術経験および社会関係の未発達は農耕の対象を湿田ないし半湿田経営に限定しており、必然的に排水作業を必要不可欠の重要な一工程としたであろう。本例のような着柄鋤は、こうした排水用の溝をきるのに最も適した形態を保っており、おそらくは、そうした用途に供されていたであろうと思われる。湖東平野の一部では、本例の発展形態と思われる「江州鋤」が長い歴史を秘めて現在なお使用されているのを見ることができる。ＳＥ５から出土したもので弥生時代中期末の所産である。

⑥ 板状木製品（W6）

最大長49.8cm、幅13.5cm、厚さ 1.8cmを計る板状品である。短辺の一端を欠損しており、長さはさらに伸びるものと考えられる。木取りは、木心に近い辺材を用いており、楔等を使用して荒く縦割りした後、手斧様工具で加工していたものと思われるが、表裏とも腐蝕が著しく、その痕跡を留めない。旧沼沢地からの出土品で、古墳時代中期のものと考えられる。

⑦ 棒状木製品（W7～W10）

W7～W9は断面が四角形を呈し、W10は不正確ながら多角形をなす。いづれも、断面に木心が認められず木目がほぼ平行に走るところから、比較的太い木の辺材部を原材としているように思われる。おそらくは、そうした原材に楔を加えて縦割りしたままの製品であろう。ただ比較的堅緻な材質でもあり、柄などとしても十分使用に耐え得よう。4例とも旧沼沢地から出土したもので、古墳時代中期の所産と解される。

⑧ 杭（W11・W12）

W11は荒く枝を払っただけの簡易な丸木杭である。先端は多方面から斜めに削り落して尖らせていたのであろうが、摩耗が著しく現状ではその痕跡を確認できない。

W12は極めて長細い杭であり、W11と異なって断面が四角形を呈する。おそらく原材を楔で縦に割裂した後、先端部にはさらに手斧様工具で数次にわたる削り落しが加えられたのであろう。同様のものを地中に多数突き刺せば、新たに柵としての利用価値が生まれる。

2例とも旧沼沢地から出土したもので、古墳時代中期に属するものであろう。

（谷口　徹）

註

(1) 唐古の資料によれば、古式のものは、体部が直線的に内傾し、新しいものほど内湾気味になっている。(末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』、京都帝国大学考古学研究報告第16冊 1941)

(2) 中谷雅治ほか「鴨田遺跡」(『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』II　滋賀県教育委員会　1972)

(3) 丸山竜平「春日山遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和五十年度、滋賀県教育委員会　1975)

(4) 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会　1972)

(5) 最近調査された野洲町五之里遺跡では、T－5地区4号方形周溝墓周溝内や、T－1地区土坑15などから、南滋賀例に類似した甕・高坏・壺などが出土しており、本遺跡例に先行するものであろう。(丸山竜平ほか「野洲町五之里遺跡調査報告」・『滋賀県文化財調査年報』昭和五十二年度、滋賀県教育委員会　1977)

(6) 陶邑のTK－47に類例の認められるものである。(田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1965)

(7) 石野博信・関川功『纒向－奈良県桜井市纒向遺跡の調査－』(桜井市教育委員会　1976)

(8) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』60－2)

(9) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(前掲)

(10) 注(7)に同じ

(11) 注(8)に同じ

(12) 田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会　1977)

(13) 田中重久「滋賀県の寺址とその出土瓦・心礎」(前掲)

(14) 平安京藤原国明邸の井戸（ＳＥ－７Ａ）の一括資料に類例が認められる。(田辺昭三『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』平安京調査会　1975)

(15) 丸山竜平ほか「野洲町富波遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和四十八年度、滋賀県教育委員会　1975)

(16) 注(14)参照

(17) 大橋信弥・別所健二・谷口徹『久野部遺跡発掘調査報告書－七ノ坪地区－』(滋賀県教育委員会　1977)

(18) 田辺昭三『須恵』(陶磁大系４　1975)

(19) 注(17)に同じ

6　むすび

以上、概略を述べたように、本調査は、ほ場整備事業の幹線排水路・支線排水路を主たる対象としたものであり、きわめて限られたものであったが、各時期の遺構が重複して、広範囲に確認された。最後に、検出された遺構の性格について、若干の検討を加えたい。

上述のように、今回の調査は、遺跡中央を東西に貫くように設定された幹線水路、およびそれに直交するように設計された支線水路部について実施したものであり、おのずから遺跡の範囲確認を行うことにもなった。調査の結果、幹線水路部では、東西約 200ｍ余にわたって遺構が検出された。東辺は、やや不明確であるが、西辺では、琵琶湖の旧汀線が検出され、旧湖岸にまでのびていることが判明した。一方南北については、後世の開墾との関連が、クリークにはさまれた約 200ｍ余の部分において遺構が検出され、クリークの外では、若干の遺物が発見されたのみであった。したがって東辺においては、現集落と重複して不明な点が多いが、東西200ｍ、南北200ｍという範囲が、当遺跡の残存部分とすることができるであろう。

本遺跡で発見された最も古い時期の遺構は、Ｋ－３トレンチで検出された弥生中期後葉の井戸・土坑各１基であった。標高86ｍの微高地の縁辺に立地し、いづれも上部が削平を受けていた。かかる時期の遺構は、従来において周辺地域では発見されておらず、わずかに西方 200ｍの支那中湖底遺跡において中期前半とされる袈裟襷文の小銅鐸が漁師によって引き上げられているのみであった。しかし、今回の発見で、志那中遺跡の周辺(注1)において弥生期の大集落が埋没していることは確実となり本遺跡もその一部と考えられよう。

弥生後期の遺物は、各トレンチの溝跡からかなりの出土がみられるが、明確な遺構は検出されていない。これは、遺構が、削平されたか、またはトレンチ内で検出されなかっただけで、中期以降の集落が存続していたことを示すものであろう。

古墳時代に入るとＫ－１で、板材を使用した方形井戸が検出されたほか、各トレンチで、土坑・溝などが検出され、各々から大量の遺物を出土している。おそらく、この時期にムラの拡大がかなり進んだと考えられよう。(注２)

古墳時代中期から奈良時代にかけての遺構・遺物は、今回の調査ではほとんど検出されておらず、この時期はなんらかの事情でこの地域の集落が中絶した可能性も考えられるのである。

平安時代の遺構で、明確なものは、Ｋ－４トレンチの土坑、Ｋ－５トレンチの井戸（ＳＥ－７）各１基で、いづれも後期のものである。又、後述する鎌倉時代に埋没した井戸のいくつかは、平安後期から存続していた微証があり、その点を考慮するなら、かなりの規模のムラが予想される。又、各トレンチで検出された柱穴のうち、この時期に遡るもので、一応想定する必要もあろう。又、溝からも若干ではあるが遺物がみえ、平安時代後期頃から再びこの地域が、居住地域となってきたことが予想される。

鎌倉～室町時代の遺構は、各トレンチ全般にわたって、井戸・土坑・溝および掘立柱建物の一部と思われる柱穴が多数発見されており、集落規模の拡大したことが推測されよう。ただ、各遺構とも改修等によりかなり長期間にわたって存続しているため、建物との関連など今一つ明らかにしがたい。しかも、建物の全貌がトレンチ幅に規制を受け、今一つ明らかにし難いため、詳細は指摘し難いのである。

以上のように、本遺跡においては、弥生中期後半から古墳前期、平安後期～鎌倉・室町の二時期にわたってかなり大規模な集落が、形成されたことが明らかになった。本地域は、周知のように花摘寺跡をはじめとする白鳳期の寺院が群立しており、当然、その時期の遺構・遺物の検出が予想された。ところが、今回調査では、かかる遺構の発見は、ほとんどなく、わずかに一部の溝などから布目瓦片が若干出土をみたのみであった。これらの点を含め、この周辺地域の解明は、今後の調査・研究に委ねられていると言えよう。

（大橋　信弥）

註

(1) 梅原末治「　近江発見の小銅鐸　」(『人類学雑誌』50－10)

(2) この時期になると、当遺跡の北に接して、片岡遺跡、さらに下物遺跡など、多くの遺跡が認められる。(丸山竜平ほか「片岡遺跡」・『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅲ－Ⅱ 滋賀県教育委員会　1976)

第2表　出土遺物観察表

K－1　SEI（井戸枠内）

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器		BI	E001 E002	(E001)口径18.6 (E002)口径19.8	○「く」字状に外反する口頸部、口縁端部がやや内反する。	○内外面ハケ目調整、口縁部上からナデ継ぎ目に指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
	甕	BII	E003 ～ E005	口径　15.2～18.2	○「く」字状に外反する口頸部を有する。 ○口縁部はややぶ厚く、内湾するもの（E004）と外湾気味のものがある。	○内外面共ハケ目調整、上からナデ、及び指押え	○暗褐色 ○胎土・焼成良好
	把手		E006		○外上方へするどく屈曲する。	○体部内面ヘラ削りの上から横ナデ ○把手上面にハケ目調整を施す	○茶褐色 ○胎土・焼成良好
須恵器	壺		C007	口径　16.2	○頸部はゆるく外反して口縁部は端部をやや拡張、沈線をめぐらす。 ○頸部下半にくし状工具による波状文を有する。	○内外面横ナデ調整	○外面　暗赤褐色 内面　黒褐色 ○胎土　精良 ○焼成・堅緻

K－1　SEI（堀り方内）

古式土師器	壺	A	E008 E009	E008 口径　12.0 E009 口径　14.0	○頸部は、ゆるやかに外湾して斜上方へ伸び上がり、短かく立ちあがる端部は、やや内反する（E008）。	○内面指押え及び、ナデ調整	○褐色 ○胎土・焼成良好
	甕	A	E010	口径　16.2	○ゆるく外反する頸部に、ゆるやかに屈曲して、受口状を呈する口縁、端部を引き出す。 ○口縁部外面は指で強くなでるため凹状を呈する。	○内外面横ナデ調整	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		BII	E011 E012	(E011)口径23.4 (E012)口径21.0	○直線的に外上方へ伸びる口縁部。 ○端部を外下方へやや外反させるもの（E011）と内面上方に肥厚させるもの(E012)がある。	○内外面横ナデ調整	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
	鉢		E013	口径　33.5	○体部はほぼ直線的に伸び上がる。 ○端部は、わずかに外反し、上端を凹状に収める。	○体部外面にハケ状工具で斜めに粗いハケ目調整 ○体部内面に指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
	甕底部		E014	底径　6.8	○ほぼ平底で、わずかに外側に接地しない面が残る。	○調整不明	○褐色 ○胎土・焼成良好
	高坏		E015		○円錐形の外反気味にひろがる中空の脚部である。	○調整不明	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好

古式土師器	高坏		E016	底径 16.8	○大きく「ハ」字状に開く裾部で端部を丸く収める。 ○支柱部と裾部の境は明瞭で、内側に稜を形成する。	○外面横ナデ後指押え	○暗赤褐色 ○胎土・焼成良好
			E017	底径 15.6	○大きく「ハ」字状に開く裾部。	○調整不明	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好
			E018	底径 6.3	○「ハ」の字状に開く小さな裾部で端部を丸く収める。	○内面指押え	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好
須恵器	高坏		C019	底径 8.6	○短脚高坏の脚部か？ ○脚部は「ハ」字状に開き、裾部に至ってより外方に角度を変え、さらに内傾して下方に向い接地する。 ○端部は鋭い。	○外面にカキ目調整 ○内面ヨコナデ	○灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻

K－1　SE2（曲物内）

土師器	皿	AⅠ	H020 H021	(H020)口径14.0 (H021)口径16.0	○底部は、平底気味で体部は直線的に斜上方へのび、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面横ナデ後指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		B	H022	口径 9.0 器高 1.6	○底部は丸底で、体部はゆるやかに内湾、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面横ナデ後指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		D	H023 H024	(H023)口径12.0 (H024)口径11.0	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は内反して直線的にのびる。	○粘土板成形 ○内外面横ナデ	○淡褐色 ○胎土・焼成良好

K－2　SE3（上層）

土師器	皿	AⅠ	H025 H026	(H025)口径14.0 (H026)口径13.0	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は内反して直線的にのび、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面ナデ後指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		D	H027 ～ H029	口径7.8～9.2 器高1.2～1.3	○底部は、平底気味で体部はゆるやかに内湾し、口縁部は内反する。 ○端部を丸く収める。 ○H028 の底部は凹底気味。	○粘土板成形 ○内外面ナデ、後指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		C	H030 H031	口径 9.5	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部は内反して直線的にのびる。	○粘土板成形 ○内外面ナデ、後指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
	脚付皿	A	H032	高台 2.2 底径 9.6	○高い脚台、外方にゆるやかに開き端部を丸く収める。	○内外面ナデ調整	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
黒色土器	埦	C	B033 ～ B035	口径 12.2～13.8	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。 ○口縁内側に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ ○内外面指押え ○内面にヘラミガキ（B033）	○内面及一部外面黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好

黒色土器	埦	C	B 036 ～ B 038	口　径　12.6～13.6	○体部は直線的にのび口縁部はわずかに内反、端部を丸く収める。 ○口縁内側に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ ○口縁部内側ナデ ○体部内外面に指押え	○内面及び一部外面黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
			高　台 B 039	高　台　0.4 底　径　6.4	○断面逆台形の低い高台でやや外傾する。 ○端部を丸くおさめる。	○貼り付け高台 ○貼り付け後、ナデ	○内面　黒色 外面　乳褐色 ○胎土・焼成良好
須恵器	坏		C 040	高　台　0.3 底　径　11.6	○断面逆台形の低い高台でやや外傾する。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○灰色 ○胎土・精良 ○焼成・堅緻
	埦		C 041	高　台　0.9 底　径　7.0	○高台は、やや湾曲気味に外下方にふんばり、先端部は丸く収める。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ ○底部切り離しはヘラ切りにする	○淡灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
	坏		C 042	底　径　10.0	○安定した平底の坏身。 ○底部から体部への屈曲は丸味を有し、外上方へ直線的にのびる。	○底部はヘラ切り不調整 ○内外面横ナデ調整	○灰青色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
	甕		C 043	底　径　15.0	○安定した平底の底部。	○内外面横ナデ調整 ○底部糸切り	○淡灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
灰釉	埦		A 044	口　径　15.5	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部は外反してのび、端部を丸く収める。	○内外面横ナデ調整	○淡灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
			A 045	口　径　17.6	○体部はゆるやかに外上方に開き口縁部は外反して端部を丸く収める。	○内外面横ナデ調整	○淡灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
緑釉	皿		G 046	口　径　14.2	○体部はゆるやかに外上方に開き端部を丸く収める。	○内外面横ナデ調整	○淡緑色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
土師器	土錘	A	H 047	直　径　0.8 長　さ　3.6	○中ぶくれの棒状を呈す。 ○ 0.2㎝の円孔を穿つ。	○手づくね	○赤褐色 ○胎土　良好 ○焼成　良好

K－2　SE3（下層）

黒色土器	埦	A	H 048	口　径　8.2	○底部は平底気味で、口縁部は内反して端部を丸く収める	○内外面指押え ○粘土板成形	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		E	B 049 B 050	(B 049)口径15.0 (B 050)口径13.8	○体部は、直線的にのび、口縁部はわずかに内反し、端部を丸く収める ○口縁内側と一条の沈線	○粘土紐巻き上げ ○内外面指押え ○体部内面ヘラミガキし、暗文を施す	○内面及び一部外面黒色 ○内面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
			B 051	高　台　0.4 底　径　5.2	○断面逆三角形の低い高台	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面　黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
			B 052 B 053	高　台　0.5～0.7 底　径　4.8～5.0	○断面逆台形の低い高台 ○B 053 は下端内面で着地、外面を外上方へわずかに引き出す	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面　黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好

須恵器			C 054	高　台　0.6 底　径　12.6	○安定した平底の坏身で断面逆台形の低い高台を有す。 ○高台は、やや湾曲気味で端面全体が接地する。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○淡灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
土師器	土錘	B	H 055	直　径　2.8 長　さ　6.2	○中ぶくれの円柱状を呈す。 ○直径 1.3cmの円孔を穿つ。	○手づくね	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		A	H 056	直　径　1.3 長　さ　4.4	○やや中ぶくれの棒状を呈す。 ○直径 0.2cmの円孔を穿つ。	○手づくね	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好

K－2　SE4

土師器	皿	A	H 057	口　径　11.0	○口縁部は内反してのび、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内面指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		D	H 058	口　径　8.4	○体部は内湾し、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面横ナデ後内面指押え	○淡紫色 ○胎土・焼成良好
		E	H 059	口　径　7.2	○口縁部は、直線的に斜上方へのび端部を丸く収める。 ○底部はやや凹底気味か。	○粘土板成形 ○外面指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		D	H 060	口　径　6.0	○底部は丸底で、体部は内湾し、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面横ナデ後指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
黒色土器	椀	E	B 061	口　径　13.2	○体部は、直線的にのび口縁部はわずかに内反し、端部を丸く収める。	○粘土紐巻き上げ ○外面　指押え	○内面及一部外面黒色 外面　淡赤褐色 ○胎土・焼成良好
			B 062	高　台　0.6 底　径　5.2	○断面逆台形の高台。 ○下端外面が斜めに削られる。	○貼り付け高台	○内面　黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
土師器	羽釜	A	H 063	口　径　22.5	○口縁部は内傾し、端部は方形を呈する。 ○つばは断面三角形を呈し、端部は丸い。	○粘土紐つみ上げ ○体部外面ハケ目調整 ○体部内外面指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
須恵器	坏		C 064	口　径　17.4 器　高　3.9 高　台　0.5 底　径　12.4	○安定した平底の坏身。 ○底部から体部への屈曲は丸味を有し外上方へ直線的にのびて口縁部に至る。 ○端部を丸く収める。 ○高台は、低く、内先端で接地・下端外面が斜めに削られる。	○内外面横ナデ調整	○灰青色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
	壺		C 065	口　径　9.0	○体部中上位に最大径があり、やや肩の張った器形で、口縁部は、短かく内傾して立ち上がり、端部を丸く収める。 ○体部外面下半に楕円形の沈線文。	○内外面横ナデ調整	○灰色（口縁部、体部下半内面に緑色の自然釉） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻

須恵器	壺	A	C 066	高　台　0.6 底　径　8.6	○断面逆三角形の高台。 ○体部は、ゆるやかに内湾する。	○貼り付け高台 ○内外面ナデ	○灰色（内面部分的に緑色の自然釉） ○胎土　精良 焼成　堅緻
			C 067	高　台　0.5 底　径　8.0	○断面逆台形の高台。 ○体部はゆるやかに内湾する。	○貼り付け高台 ○内面ヘラケズリ、後内外面ナデ	○暗灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
		B	C 068 C 069	(C 068)　口径 10.4 (C 069)　口径 10.6	○底部は、平底で、体部はゆるやかに内湾する。 ○C 069 は、体部が直線的に斜上方へのびる。	○内外面横ナデ	○灰青色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻

K－3　SE5

弥生土器	壺	A	E 070		○頸部は、ゆるく外反し、口縁部へと至る。 ○頸部外面にヘラ状工具による斜線文帯をめぐらす。	○内面指押え ○内外面ハケ目調整	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		B	E 071 E 072	(E 071)口径12.8 (E 072)口径18.0	○頸部は短かく口縁部は大きく外反してほぼ水平になり端部を上下に若干広げる。	○内外面ハケ目調整 ○外面に指押え	○灰白色 ○胎土　細砂多量含有 ○焼成　良好
		C	E 073	口　径　14.0	○短かく外反する頸部に、端部がわずかに肥厚する口縁を有する。 ○口縁上端面に２条の沈線をめぐらす。	○口縁部は、内外面共横ナデ調整 ○体部内外面共ハケ目調整	○暗褐色 ○胎土・焼成良好
			E 074	底　径　4.0	○底部は、上げ底で、体部は直線的に斜上方へのびる。	○内面指押え	○灰褐色 ○胎土　細砂含有 ○焼成　良好
			E 075	底　径　5.0	○底部は、平底で、体部は直線的に斜上方へのびる。	○内面指押え	○淡褐色 ○胎土・細砂含有 ○焼成　良好
	無頸壺		E 076	口　径　15.6	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は丸く内曲する。 ○体部上半に６条の凹線文をめぐらす。	○体部外面横ナデ ○内面指押え	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好
	甕	A	E 077 ～ E 081	口　径　14.0～20.0	○頸部は、大きく外反し、口縁部は端部をほぼ垂直に立ち上がらせ受口状を呈する。 ○受け部内面に刺突列点文をめぐらせる。	○内外面共粗いハケ目調整 ○口縁部内外面横ナデ	○淡茶褐色 ○胎土　良好 ○焼成　良好
		B	E 082	口　径　18.8	○口頸部は大きく外反し、口縁部は短かく収め、体部はほぼ直線的に下方にのびる。 ○口縁端部に刻目、頸部及	○内外面粗いハケ目調整	○褐色 ○胎土・焼成良好

弥生土器	甕				び体部上半に刺突列点文凹線文をめぐらす。		
		C	E 083 E 084	口　径　18.6～19.0	○「く」の字状に外反してのびる口縁部を有する。 ○端部は下方にわずか拡張する。	○外面横ナデ ○内外面共指押え	○茶褐色 ○胎土・焼成良好
			E 085	底　径　8.4	○安定した平底で、体部はやや外反気味に上方へのびる。	○外面ヘラケズリ ○内外面指押え	○茶褐色 ○胎土・焼成良好
	高坏		E 086	口　径　27.0	○坏部口縁は大きく外反し、端部はやや下方に垂下する。口縁内側に一条の突帯をめぐらし、垂下した口縁端部には2条の凹線がめぐる。	○内外面ナデ調整	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好
			E 087		○中空裾開きの脚部で柱状部と裾部の区分は不明瞭。	○しぼり目が残る	○淡赤褐色 ○胎土　砂粒多 ○焼成　良

K－4　SE6

土師器	皿	AⅠ	H 088 H 089	(H 088)口径14.0 器高 2.4 (H 089)口径13.6	○底部は平底で、体部は内湾してのび口縁部はやや内反して端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面横ナデ後指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		C	H 090	口　径　9.8	○体部は内湾し、口縁部は内反して端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内面　指押え	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好
黒色土器	埦	C	B 091	口　径　13.2	○体部はゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。 ○口縁部内側に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ ○外面指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		E	B 092 ～ B 094	口　径　12.0～15.0	○体部は、直線的にのび、口縁部はわずかに内反、端部を丸く収める。 ○口縁部内面に一条の沈線。	○内外面ナデ後、指押え ○体部内面ヘラミガキ、暗文を施す（B 094）	○内面及び一部外面黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
			B 095 B 096	高　台　0.3 底　径　4.2～4.4	○低い断面逆三角形の高台。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面　黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
	羽釜	A	B 097	口　径　15.8 器　高　10.6	○口縁部は短かく内傾して立ち上がり、つばも短かく上方にのびる、体部はゆるやか内湾しつつ底部に至り、やや下ぶくれの隋円形を呈する。 ○底部に意識的と思われる皿角の穴が穿たれている。	○口縁部内外ナデ調整 ○内面はハケ状工具により調整される	○黒色 ○胎土・焼成良好
土師器	埦		H 098	高　台　0.9 底　径　7.8	○断面逆三角形の安定した高い高台。	○内外面ナデ調整	○淡褐色 ○胎土・焼成良好

土師器					○やや外傾する。		
	土錘	A	H099	直　径　2.5 長　さ　5.6	○円柱状を呈する。 ○直径 1.3cmの円孔を穿つ。	○手づくね	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
		B	H100	直　径　0.7 長　さ　3.3	○やや中ぶくれの棒状を呈する。 ○直径 0.2cmの円孔を穿つ。	○手づくね	○灰色 ○胎土・焼成良好

K－5　SE7

土師器	皿	F	H101 ～ H103	口　径　10.0～ 11.2	○体部はゆるやかに内湾、口縁部は大きく外反し、端部を内側に折り曲げ丸くおさめる。	○内外面ナデ後、指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好

K－1　SK1

古式土師器	甕	A	E104 ～ E107	口　径　12.0～ 14.2	○受口状の口縁で立ち上がりがやや外反気味のもので、口端部をやや外方へ拡張する。 ○上端の面は凹面または段状を呈する。	○内外面横ナデ、E106E107の頸部にハケ目調整	○褐色 ○胎土・焼成良好
		B	E108 ～ E110	口　径　12.3～ 17.6	○「く」字状に外反する口頸部を有する。 ○端部を丸く収めるもの、平担に収めるものがある。	○内外面ハケ目調整後、ナデ ○及び指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
	高坏		E111 E112	(E112) 底　径　10.3	○支柱部と裾部の境界は、不明瞭「ハ」字状にゆるく外反して端部に至る。	○外面ハケ目調整(E112) ○内面は、絞り目痕巻上げ痕を指ナデで消す	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
			E113	底　径　19.6	○大きく「ハ」字状に開く脚部。 ○端部は丸く収める。	○内外面ヘラミガキ後指押え	○淡灰褐色 ○胎土・焼成良好
	器台		E114	口　径　15.4	○大きく外反する頸部に、やや下方へ拡張して肥厚させた口縁部を有する。	○内外面指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
須恵器	坏蓋		C115	口　径　11.4	○天井部と体部は、やや甘い段によって分かれる。 ○体部はやや湾曲気味に外方へ開き口縁部は、さらに外方へ流れる。 ○先端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	○暗灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻

K－2　SK2

古式土師器	壺		E116	底　径　4.3	○やや凸出気味の平底で、体部はゆるやかに内湾してのびる。	○内面ヘラケズリ	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
	甕				○大きく外反する頸部にするどく立ち上がる口縁を	○体部外面、頸部などにハケ目調整痕	○淡茶褐色 ○胎土・焼成良好

古式土師器	甕	A	E117 ～ E121	口　径　13.2～16.8	有するもので、いわゆる受口状口縁を呈する。 ○口端部に内傾する面を有するものもあるが、平担に収めたものもある(E121)。 ○口縁部下半、又体部上半に刺突文を有するものや、頸部にヘラ描き沈線を有するものがある。 ○E120は、口縁部にヘラによる斜線文、棒状浮文などを有し、体部上半にヘラ描沈線を施す。	を残す ○口縁部内外面共横ナデ	○淡茶褐色 ○胎土・焼成良好
	高坏		E122		○柱状部上端から外下方へゆるやかに開く脚部。 ○柱状部下端に円孔を4個穿つ。	○外面ヘラミガキ ○内面に巻き上げ痕を残す	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好

K－2　SK3

古式土師器	壺		E123	口　径　15.2	○大きくゆるやかに開く口縁部。	○内外面共横ナデ調整	○淡褐色 ○胎土　細砂含有 ○焼成　良好
	甕	A	E124 ～ E127	口　径　14.6～16.8	○いわゆる受口状口縁で、大きく外反する頸部に、するどく立ち上がる外反気味の口縁を有する。 ○口端部をやや外方へ拡張して平担に収める。	○口縁部内外面共横ナデ ○体部内外面に指押え ○E 127の体部外面ハケ目調整	○淡褐色 ○胎土・焼成良好
	高坏		E128	底　径　18.0	○ゆるやかに外下方に外反しながら開く裾部で、下端部をわずかに屈折させて垂下させ平担に収める。	○外面ナデ調整 ○内面ヘラミガキ	○淡赤褐色 ○胎土　細砂含有 ○焼成　良好
土師器	皿	B	H129	口　径　9.0	○体部はゆるやかに内湾、口縁部は内反して端部を丸く収める。	○外面横ナデ調整 ○内面ヘラミガキ	○淡赤褐色 ○胎土1㎜大の砂粒含 ○焼成　良好

K－2　SK4

弥生土器	甕		E130	口　径　27.2	○大きくゆるやかに外反する頸部に内湾して立ち上がる口縁部を有する ○口端部は内傾して面をもつ ○口縁部外面にヘラによる斜線文を施す ○口縁部内面には櫛状工具による刺突列点文を施す	○頸部外面ヘラミガキ後指押え ○内面ハケ目調整後、指押え	○褐色 ○胎土・焼成良好

K－4　SX4

土師器	皿		H131	口　径　11.2	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は大きく外反して端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内面指押え	○淡灰褐色 ○胎土・焼成良好
黒色土器	埦	F	B132 ～ B135 B139	(B132)口径12.4 器高4.2高台0.2 底　径　6.0 口　径14.0～15.6	○体部は、るゆやかに内湾し、口縁部はわずかに外反して端部を丸く収める。 ○断面逆台形の低い高台。	○粘土紐巻き上げ ○内面にていねいな横方向のヘラミガキ ○内外面共指押えを施す ○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面及び一部外面黒色 ○B132は内外面共黒色 ○胎土・焼成良好
		A	B136 ～ B138	(B136)口径13.2 器高4.5、高台0.8 底　径　7.2 口　径15.8～16.0	○体部は、ゆるやかに内湾、口縁部は内反して、端部を丸く収める。 ○断面逆台形の安定した高台。 ○口縁部内面に一条の沈線。(B137、B138)	○粘土紐巻き上げ ○内外面指押え ○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面及び一部外面黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
		B	B140 B141	口　径　13.8～15.7	○体部は直線的に外上方へのび、口縁部はやや外反して端部を丸く収める。	○粘土紐巻き上げ ○内外面指押え	○内面　黒色 外面　淡茶褐色 ○胎土・焼成良好
			B142	高　台　0.6 底　径　7.6	○断面逆三角形の高台。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面　黒色 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
緑釉			G143	高　台　0.6 底　径　7.0	○断面逆台形の安定した高台、高台内側に段をつくる。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○褐色（緑釉） ○胎土・焼成良好
須恵器	把手		C144		○平面台形の把手 中央部に円孔を穿つ。	○把手上面に指圧痕が残り本体の内面にも指頭圧痕が残る	○灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻

S－2　SK6

古式土師器	壺		E145	底　径　3.6	○やや上げ底気味の底部。	○外面ヘラケズリ	○淡茶褐色 ○胎土　1㎜～2㎜大の砂粒含 ○焼成　良好
	甕		E146	底　径　5.8	○底部は、やや平底気味で、体部はゆるやかに内湾してのびる。	○内外面横ナデ後、指押え	○茶褐色 ○胎土・焼成良好
	高坏		E147	口　径　24.4	○口縁部は大きく外反してのび上がり端部を丸く収める。 ○口縁部外面に棒状浮文を貼り付ける。	○内外面ヘラミガキか。	○茶褐色 ○胎土　砂粒含む ○焼成　良好
	器台		E148	口　径　25.0	○口縁部は、大きく外上方へ開き、端部をわずかに拡張する。	○内外面共ヘラミガキ ○内外面共に指押え	○淡褐色 ○胎土・焼成良好

S－7　SK7

古式土師器	壺		E 149		○「く」字状の頸部から外上方へのびて口縁部へと至る。 ○体部中上位に最大径を有する球形で底部は丸底である。	○手づくね	○淡灰褐色 ○胎土・焼成良好
	高坏		E 150		○中空のやや中ぶくれの脚部、柱状部と裾部の境界は不明瞭。	○外面ヘラケズリ ○内面指押え	○淡赤褐色 ○胎土・焼成良好

S－7　SK8

古式土師器	甕	A	E 151 ～ E 156	口　径　13.6～16.2	○いわゆる受口状口縁を呈し短かく外反する頸部に、急速に立ち上がる口縁部を有し、端部をやや外方へ引き出す。 ○端部は、内傾面を有するものと平担に収めるものがある。 ○頸部内面に稜を有する（E 152 、153 、156）	○口縁部内外面横ナデ調整 ○外面粗いハケ目調整 ○内面　指押え	○暗茶褐色 ○胎土・焼成良好
			E 157	底　径　3.8	○矮小化した平底で胴部は大きく開く。	○外面粗いハケ目調整、上から指押え ○内面指ナデ	○淡赤褐色 ○胎土　良好 ○焼成　堅緻
			E 158 ～ E 163	底　径　28～3.8	○上げ底気味の矮小化した底部で、胴部は大きく開く。	○外面粗いハケ目調整 ○内面　指ナデ	○暗褐色 ○胎土・焼成良好

K－2　ピット内

土師器	堝		H 164	直　径　3.0	○三足堝の脚破片か。 ○断面円形でやや内湾。	○外面指押え	○黒灰褐色（P 1） ○胎土・焼成良好

K－2　ピット内

須恵器	埦		C 165	高　台　0.8 底　径　7.6	○断面逆三角形の安定した高台 ○やや外湾気味で、下端部内面に段を持つ。	○内外面共横ナデ	○淡灰色（P 36） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
			C 166	底　径　15.8	○底部は、平底で、体部は、直線的に外上方へのびる。	○内外面共横ナデ	○淡灰色（P 36） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
古代土師器	高坏		E 167		○「ハ」字状におだやかに開く支柱部。	○外面ヘラケズリ	○淡灰褐色（P 36） ○胎土・焼成良好
須恵器	坏蓋		C 168	口　径　11.8	○体部は、やや外湾気味に外方に開くが口縁部はさ	○内外面横ナデ	○黒灰色（P 2） ○胎土　精良

					らに開く。 ○口縁部内面には甘い段を有し、先端部は鋭角的に丸く収める。		○焼成　堅緻

K－3　ピット内

古式土師器	甕		E169	底　径　7.0	○平底の底部で、底部と体部との境界は明瞭で屈曲しつつのびる。	○外面横ナデ	○淡褐色（P3） ○胎土・焼成良好
土師器	皿		H170 H171	口　径10.2～12.2 器高 2.2(H170)	○平底の底部で、体部は、直線的に斜上方へのび端部を丸く収める。	○外面ヘラミガキ、後ナデ ○内面ナデ後、指押え	○淡赤褐色（P6） ○胎土・焼成良好
須恵器	埦		C172	口　径　14.8	○体部は、直線的に斜上方へのび、端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ	○淡灰色（P8） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
			C173 C174	(C173)口径11.4 (C174)口径14.0	○体部はゆるやかに内湾、口縁部はやや外反し、端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ	○淡灰色（P14） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
土師器	皿		H175	口　径　9.6	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反して端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面共横ナデ	○淡褐色（P29） ○胎土・焼成良好
須恵器	坏蓋		C176	口　径　14.5	○扁平な天井部及び体部にやや内湾気味に下方に折曲げた口縁部がつく。	○内外面共横ナデ調整	○灰色（P13） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
			C177	口　径　21.8	○口端部を内面に折曲げて肥厚させた口縁部。	○内外面共横ナデ調整	○灰色（P7） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
黒色土器	埦		B178	口　径　14.2	○体部は、ゆるやかに内湾、口縁部は外反して、端部を丸く収める。	○内外面横ナデ後、指押え ○粘土紐巻き上げ	○内面黒色（P10） ○外面　褐色 ○胎土・焼成良好
土師器	皿		H179	口　径　11.0 器高3.5,底径5.0	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。	○内面　指押え	○濃褐色（P4） ○胎土・焼成良好
須恵器	壺		C180	口　径　8.8	○口縁部は、直線的に斜上方へのびやや外反して、端部を丸く収める。 ○口縁部下半に2条の凹線文をめぐらす。	○内外面横ナデ	○暗灰色（P5） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
土師器	土錘	A	H181	直　径　1.2 長　さ　3.2	○やや中ぶくれの棒状を呈す。 ○直径 0.7cmの円孔を穿つ	○手づくね	○淡褐色（P11） ○胎土・焼成良好
		B	H182	直　径　2.2 長　さ　4.0	○やや中ぶくれの円柱状を呈す。 ○直径 1.4cmの円孔を穿つ	○手づくね	○淡灰色（P12） ○胎土・焼成良好

K－4　ピット内

古式土師器	高坏		E183	底　径　12.4	○支柱部と裾部の境界不明瞭。 ○脚部は「ハ」字　にゆるく外反して裾に到る。	○内外面指押え	○淡茶褐色 ○胎土・砂粒含有 ○焼成　良
土師器	皿	B	H184 H185	口　径　8.2 器　高1.7～1.9	○底部は、丸底で体部はゆゆるやかに内湾し、端部は丸く収める。	○内面　指押え	○淡褐色（P18） ○胎土・焼成良好
		C	H186	口　径　9.6	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部はやや外反して端部を丸く収める。	○内外面指押え	○淡褐色（P15） ○胎土・焼成良好
		F	H187	口　径　10.8	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部は、大きく外反して、端部を上方へつまみ上げ丸くおさめる。	○内外面共ナデ後、指押え	○淡褐色（P16） ○胎土・焼成良好
黒色土器	埦		B188	高　台　0.7 底　径　5.0	○断面逆三角形の安定した高台で、外反する。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面　黒色（P17） ○外面淡褐色 ○胎土・焼成良好
			B189	高　台　0.5 底　径　5.8	○断面逆台形の低い高台で、下端部外面を斜めに削る。	○内面指押え ○貼り付け高台	○内面　黒色（P15） ○外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
土師器	土錘	B	H190	長　径　2.2 長　さ　5.0	○やや中ぶくれの円柱状を呈す。 ○直径 1.4cmの円孔を穿つ。	○外面指押え	○淡褐色（P17） ○胎土・焼成良好

S－1　ピット内

古式土師器	壺		E191	径　18.2	○直線的に斜上方へのびる口縁部で端部を丸く収める。	○内外面横ナデ調整	○淡灰褐色（P29） ○胎土・0.5～1mm位の細石粒を多く含む ○焼成　良好
	甕		H192	底　径　3.4	○平底の底部。	○外面ナデ調整	○淡褐色（P30） ○胎土・焼成良好
		A	E193	口　径　14.8	○頸部は短かく外反してのび、口縁部は急速に立ち上がって端部を強く外へ引き出し、平坦に収めるいわゆる受口状口縁である。	○内外面横ナデ調整 頸部外面に指押え	○淡褐色（P29） ○胎土・焼成良好
	高坏		E194	底　径　12.5	○大きく「ハ」字状に開く脚部、脚部中位に3個の円孔を穿つ。	○外面ヘラケズリ ○内面指押え	○淡灰褐色 ○胎土・焼成良好
土師器	皿	B	H195 ～ H197	口　径8.2～9.6 器　高1.3～1.5	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面指押え	○淡褐色（P25） ○胎土・焼成良好
			H198	口　径　9.0	○体部は、ゆるやかに内湾	○粘土板成形	○褐色（P24）

					し、端部を丸く収める。	○内外面指押え	○胎土・焼成良好
土師器	皿	B	H199	口径 9.2 器高 1.4	○やや上げ底気味の底部で、体部はゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。	○内外面共ナデ調整 ○外面指押え	○淡灰褐色（P20） ○胎土・焼成良好
			H200	口径 8.8	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。	○内面ナデ調整	○淡赤褐色（P23） ○胎土・焼成良好
		A	H201	口径 8.6 器高 1.6	○底部は、平底で、体部は、直線的に外上方へのび端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整後、指押え	○褐色（P23） ○胎土・焼成良好
			H202	口径 12.0	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部を平担に収める。	○内面　指押え	○淡赤褐色（P31） ○胎土・焼成良好
	椀		H203	口径 10.8	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部はやや内反して端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	○淡灰褐色（P27） ○胎土・焼成良好
			H204	高台 0.5 底径 8.5	○低い、断面逆台形の高台で、内傾する。	○貼り付け高台 ○内面　指押え	○濃褐色（P32） ○胎土・焼成良好
黒色土器	椀		B205	高台 0.5 底径 5.6	○下端部を強く外方へ引き出し、内面に甘い段を形成する低い高台。	○貼り付け高台 ○貼り付け後内外面共ナデ ○外面ヘラミガキ	○内面　黒色（P23） 外面　淡褐色 ○胎土・焼成良好
須恵器	坏		C206	口径 12.8	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部をやや鋭どく収める。	○内面指押え	○暗灰色（P28） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
			C207	高台 0.5 底径 11.2	○断面逆台形の高台で、外面下端を斜めに削る。	○貼り付け高台 ○内外面横ナデ調整 ○内面指押え	○暗灰色（P27） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
緑釉	椀		G208	口径 13.2	○体部は、直線的に外上方にのび、口縁部は外反する。 ○口端部は内傾する。	○内外面共横ナデ	○内面　暗緑色（P26） 外面　淡灰色 ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
			G209	高台 0.8 底径 4.8	○断面逆台形の高い高台で、外反する。 ○外面下端を斜めに削る。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○淡緑色の釉をかける（P21） ○胎土　精良 ○焼成　堅緻
土師器	土錘	A	H210	直径 0.4 長さ 3.2	○やや中ぶくれの棒状を呈す。 ○直径 0.4cmの円孔を穿つ。	○手づくね	○淡褐色（P19） ○胎土・焼成良好
			H211	直径 0.4 長さ 2.2	○細い棒状を呈す。 ○直径 0.2cmの円孔を穿つ。	○手づくね	○褐色（P22） ○胎土・焼成良好
			H212	直径 1.3 長さ 4.2	○やや中ぶくれの円柱状を呈す。 ○直径 0.7cmの円孔を穿つ。	○手づくね	○淡褐色（P30） ○胎土・焼成良好

S－6　ピット内

土師器	皿		H213	口　径　14.0	○体部はゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。	○内面　指押え ○粘土板成形	○淡赤褐色（P34） ○胎土・焼成良好
須恵器	瓶		C214	底　径　13.4	○底部から体部へは、丸い屈曲をもって立ち上がり、外上方へのびる。	○内外面共横ナデ調整 ○底部糸切り	○淡灰色（P33） ○胎土・焼成良好
土師器	皿		H215	口　径　7.6	○体部は、内湾し、端部を丸く収める。	○粘土板成形	○淡褐色（P34） ○胎土・焼成良好
			H216	口　径　9.4	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部は内反して端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内面指押え	○淡褐色（P33） ○胎土・焼成良好
黒色土器	埦		B217	口　径　16.0	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部はやや外反して、内傾する。	○粘土紐巻き上げ ○内外面共ヘラミガキ後、指押え	○黒色（P34） ○胎土・焼成良好
土師器	皿		H218	口　径　14.0	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。	○粘土板成形	○淡褐色（P35） ○胎土・焼成良好

第11章　守山市山賀西遺跡

1 はじめに

昭和52年度県営圃場整備事業、山賀、森川原第Ⅰ工区内に、守山市教育委員会が昭和51年度に実施した遺跡分布調査で発見した山賀西遺跡が存在することがわかり、昭和52年12月に野洲川沿岸土地改良事務所と守山市教育委員会とが協議をもち、更に後、守山南部土地改良事務所を加え、市教委が試掘調査を実施することになった。この試掘調査は県教委が諸事情により実施できなかったため市教委に依頼したものである。なお、現地調査にあたるまで守山市農政課にも協力を得た。

調査には守山市教育委員会社会教育課山崎秀二があたり、地元山賀町、森川原町の方に作業員として協力して頂いた。整理は山崎が行ない執筆した。

2 位置と環境

山賀西遺跡は守山市山賀町内に位置し県道大津、能登川線から山賀町へ入る道路の西端、丁度森川原町と赤野井町を結ぶ農免道路との交点近くに位置する。遺跡は特にこの農免道路沿いの畑地にのみ限られる。昭和51年度に市教委が実施した分布調査ではこの畑地の周辺や天満宮の南側にも遺物が分布していて、およそ、天満宮を中心に直径 300～ 500mの範囲と推定していたが、今回の調査で遺構の存在する部分が畑地に限定されることがわかった。なお、この畑地は周辺の水田に比して40～70cm程も高いレベルであり、また山賀の家々も土盛りのためか、あるいは元々高いレベルにあったのか隣接する水田や畑地よりは数10cm高い。このことは遺跡の広がりが集落の中にも広がっていくことを示しているようである。さて、この遺跡の南側、西側には境川が流れており、栗太、野洲旧郡界周辺を沖積して、その両岸に大きな自然堤防と後背湿地を形成し、その堤防上には多数の遺跡を営造させ、野洲川、境川流域の人間生活を成立させた豊かな川である。山賀西遺跡もこの境川の形成した自然堤防上であったと考えてよいであろう。そして遺跡と境川との間の水田は後背地 or 河川敷であったと思われる。さて、地理的な位置を概観したので、次に歴史的な環境をみてみよう。主に境川流域を中心にみると、この山賀西遺跡の北方約1kmには弥生時代前期の遺物を出す赤野井浜遺跡、同じく前期から中期の遺物を出土する赤野井浜北遺跡が 1.5kmに存在し、低湿地を耕作し、農耕を営んだ弥生時代の集落がみられる。更に赤野井町の南側の水田、畑地には昭和51、52年の2年間にわたって圃場整備事業が行なわれ、同時に発掘調査が実施され、第1次調査では方形周溝墓5基(古墳時代)、溝、奈良時代～平安時代の掘立柱式建物跡約45棟がみつかった。第2次の調査では多量の白鳳時代の瓦が出土し瓦葺き建物の存在が予想たれたが検出されず、古墳時代の溝、奈良時代～平安時代の建物跡が多数検出された。古墳時代の溝からは琴状木製品や櫂が出土している。この遺跡はその建物跡が全て南北軸によって規制されており、特殊な目的をもったものと思われた。更に上流部分には金森町に埴輪を出土する庭塚古墳があり、その古墳に近接して金森西遺跡があり、数年前に小型の珠文鏡が出土しており、古墳時代の祭祀遺跡かと考えられている。この境川の流域には更に古高古墳群（円墳3基）大門遺跡、金森遺跡（平安時代末）等々の遺跡があって、弥生時代前期から鎌倉時代以前まで、豊かな水系を求めて連綿と、しかも多様な遺跡群がみられ、境川流域遺跡群ともよべる様相をみせ、もし、古代の令制郷を想定するに際してもまとまりのある地域と考えることができよう。また、交通の便をみても境川筋の自然堤防上の野道と共に琵琶湖の水運を利用したであろうことも予測できよう。境川流域遺跡群は野洲川流域でも1つの時代を越えた連続した生活址

であり、極めて重要な地域と言えることは特筆しておこう。

3 調査の経緯

昭和52年も押しせまった12月23日に県野洲川土地改良事務所からの連絡で至急調査の必要があるとのことで、現地でトレンチの設定を行ない、幹線排水路部分に６ケ所、Ａ～Ｆとした。５米×５米とした。翌24日には山賀町、森川原町の有志の方の協力を得、更に（株）安田産業にユンボ使用の協力を得た。25日には幹線排水路の調査が終わり、午後に畑地の調査にとりかかり、土地改良組合長の立ち合いのもとで、調査可能部分を定め、２ケ所だけ、Ｇ、Ｈトレンチを設けた。

幹線排水路部分（Ａ～Ｆ）

天満宮の南側に計画された幹線排水路において、約10ｍ置きにＡ～Ｃ、農免道路を越えて西側にＤ～Ｆを設けた。Ｄ～Ｆも約10ｍ置きに５×５ｍのトレンチとした。標高86.0ｍ前後の水田であり、耕土は約20cmをはかった。分布調査時に遺物を採集していたので、耕土下の比較的浅い層から遺構検出できると考えていたが、ユンボによる表土除去の結果は次のようであった。Ａトレンチは表土（耕土）は約20cm、その下に淡黄褐色粘質土がみられ、この層と耕土との間に須恵器、土師器、陶器、磁器を包含する層がみられ（耕作による攪乱により残った包含層であり、これは単純な包含層ではないことがわかった。）この淡黄褐色粘質土は約25cm堆積しており、その下には黄褐色粘質土があり、この層に、８世紀後半の須恵器を数点包含しており、この当時に形成された層であることがわかった。この層は厚く45cmであった。この層の下は灰青黒色粘質土が15cm堆積しており、灰青色土中には黄土色の異物が多量に混入しており、その異物は外面に貝殻様のものが付着しており、あるいは蜊（田螺）かも知れない。この下には青灰色強粘質土が10cm、その下に青灰色砂質土15cm、青灰色粘質土10cm、青灰色砂30cmがみられた。この層序の中で青灰色強粘質土中で１点土師質土器を採集した。このことで平面を広げたが遺構と考えられるものはまったく検出されなかった。

Ｂトレンチ

Ａトレンチの西側約10米離れて５×５米のトレンチを設定した。本トレンチも最初、耕土を除去し、平面を整えた。この面では須恵器、土師器、陶器片が出土したが単一の包含層ではなかった。また遺構は全く検出されなかった。それで、次の層をはずし、面を整えたが遺構は検出されなかった。

Ｃトレンチ

Ｂトレンチの西側約10米離れて５×５米のトレンチを設定し、Ｃと称した。耕土除去後面を整えたが、遺構は検出できなかった。この後、約30cm掘り下げ、再度整面したが、やはり遺構は検出されなかった。この後、北側にそって、ユンボにより深掘りをした。基準になる層はＡトレンチとかわらなかった。ただ、最下層の青灰色砂質層の更に下には黒灰色砂があり、更に下には青灰色砂、黒灰色砂と互相になっているようである。遺物、遺構は検出されなかった。

第1図　トレンチ配置図

Dトレンチ

農免道路の西で5×5米のトレンチを設定し、Dとした。2回整面したが遺構は検出されず、耕土、耕土下で遺物が若干出土した。

Eトレンチ

農免道路の西側で5×5米のトレンチを設け、遺構の検出に努めた。このトレンチでは耕土下では黒色土が薄くひかれたようにみられた。これは地元の人の話では植物灰であるとのことであり、部分的に深く残ったものも遺構ではなく、この植物灰のたまりであると考えられた。その他はA～Dと変わりはない。

Fトレンチ

Eトレンチの西側、15m離れて5×5米のトレンチを設け、Fとした。Eと同じく黒色植物灰層がみられた。その他は他トレンチと同じく、大差はなかった。

畑地部分

圃場整備事業は農免道路沿いの畑地を削平し、1部を水田に、残りを集中させ形状を変更する計画であったので、遺構の集中が予測されたこの畑地にもトレンチを設定し、遺構の存在を確かめた。しかし、この畑地におけるトレンチの設定には山賀町土地改良組合長、西村宗司氏の立ち合いで、作付のない部分とした。GトレンチとHトレンチの2箇所に限ることにしたため、検出した遺構の性格は充分つかみえなかった。

Gトレンチ

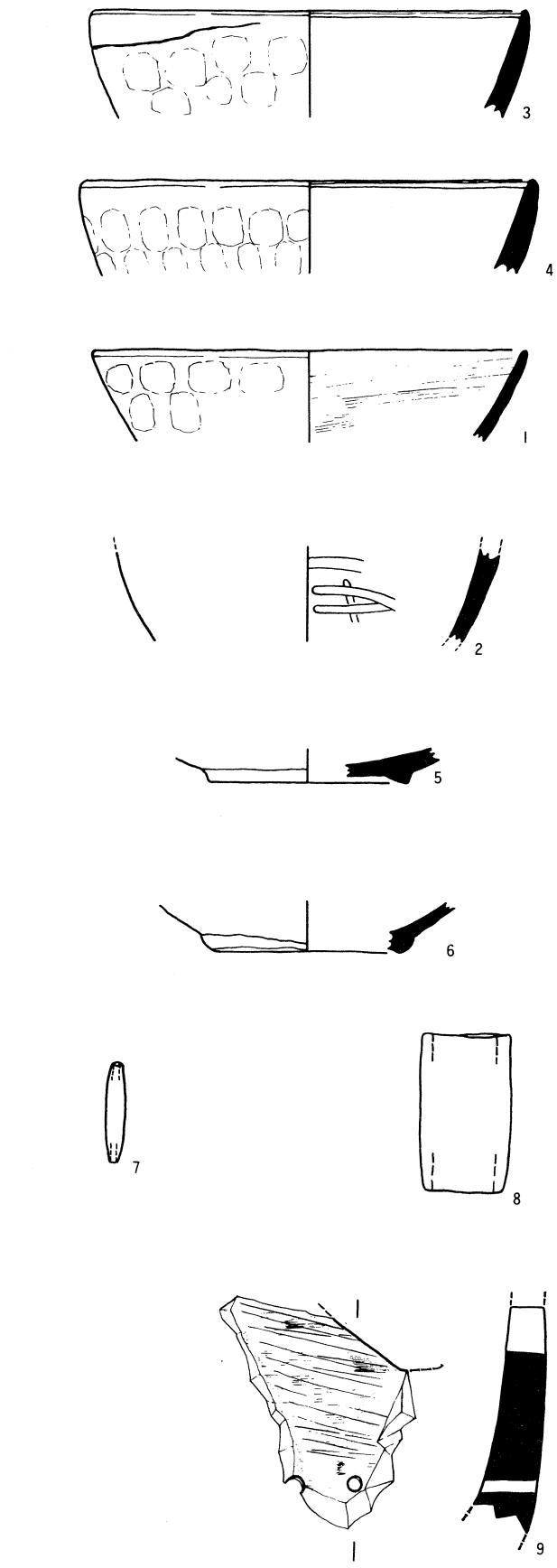
畑地の南端近くに設定したもので、幅3米、長さ7mのトレンチとした。耕土は深く、黒褐色土が約70cmありごぼう等の作付があったらしく、50cm程度まではやわらかい土であった。70cmから下は黄褐色土が約10cm、その下に黒褐色土が20cm堆積し、この層には多量の黒色土器、土師器を包含していた。この下層は不明瞭であるが、やや黄色味をおびた黒褐色土が続き、深さはつかめなかった。しかし、相かわらず土器は多量に含んでおり、あるいは溝状の落ち込みかとも思われた。

Hトレンチ

Gトレンチの東南東約5米離れて、2米×4米のトレンチとした。このトレンチでもGと類似しており、約70cmの黒褐色耕土、10cmの黄褐色土、そして遺物包含層の黒褐色土、その下は黄灰色土であった。この土はベース土と考えられ、トレンチの南東隅に20cm方形のピットが検出された。トレンチと設定場所の都合で拡張はできなかったが、恐らく建物跡の柱穴と思われる。

4 遺　　物

遺物はトレンチの設定の少なさに影響されて量は少なかった。出土場所もG、Hトレンチに集中した。G、Hでは遺構が検出されたこともあって量も多いが、包含層が厚いわりに遺物は細片ばかりであった。



第2図　遺物実測図

土師器、１・２

いずれも碗と考えられるものである。１は径12・６cmでうすくつくられ、外面には粗雑で、指痕が多くのこる。内面は手の上で回転したと思われる指横ナデがみられる。胎土は精良で、水ごしをしていると思われる。２は体部のみであるが、内面に暗文がみられた。やや幅のひろい暗文で縦方向を先に横方向を後に施している。胎土は精良で硬く焼かれている。

黒色土器、３・４・５・６

３・４はほぼ同様な形態で、３は外面に粘土紐痕がみられ、３・４とも外面に指痕がのこる。内面口縁には１条の沈線が施される。５・６はいずれも底部で粗雑な高台を貼りつけて形態をつくっている。３・４もこのような底部をもつと思われる。３－６ともいわゆる内黒の黒色土器である。この種土器は野洲町久野部遺跡(『久野部遺跡発掘調査報告書』－1978年、滋賀県文化財保護協会）のそれよりも後出であると思う。

土製品、７・８

いずれも土錘と思われるが、著しく形状が異なる。７は径６mm、長さ３cm、８は径 3.2cm、長さ 4.6cmである。錘として使う場合の機能別による形状差であろうか。

石製品、９

石鍋と考えられるもので、全体の法量、形状は不明であるので、変則的であるが図のようにあらわした。体部に２孔みとめられ、この孔の外面側に外につながる紐ずれのような痕があるので紐をくくるための孔が他に２孔以上あると思われる。また上端はおそらく片口状の凹をつくり出していると思われ研磨し斜めになっている。内面は研磨痕の他に使用中に遺存した研磨痕より深く広い条痕状のキズがみられる。

他に須恵器が若干みとめられた。しかし小破片で図示できない。青磁・白磁も各１点ずつ出土している。

５ま　と　め

山賀西遺跡は湖岸に近い、また境川筋に近い位置にあり、居住条件の点では不利だと考えられたが、調査の結果では境川の形成した微高地を利用した集落跡であり、遺跡は更に東側の高所に拡大してゆくと考えられた。年代も中世に求められ、この種遺跡の発見例が少ない中にあって貴重な資料を提供したと言える。県内では守山市内に金森町金森遺跡、同今浜町出土遺物がある（この遺物は不時発見であり、遺構は今のところ不明）、野洲町では上野南遺跡（城跡）、福泉寺遺跡（寺院跡か）、大津市では延暦寺遺跡、高島郡新旭町では阿弥陀寺墓地、阿弥陀寺跡、高島町中ノ坊遺跡、蒲生郡日野町大谷遺跡、安土町大中ノ湖南遺跡等々があげられる。しかしながら、集落跡は今のところ、金森遺跡をあげるしかない。山賀西遺跡も詳細な実像は把握していないがもし、明らかになればよく似た形態の集落構造が検出されるであろう。ところで、中世の集落は大阪府高槻市で資料が報告されているし実態が明らかになりつつあるが、当近江での実態は仲々明らかになりそうもない。近江での中世の動きは活発であり、阪本の馬借一揆、一向一揆、安土城建築、小谷城、宇佐山城等の著名武将の築城等が中世後期に多くみられる。これらの事件遺跡は限って有名な人物がからんでおり、田舎（在地）の人々の生活はなかな

か具体的に浮びあがらない。今回、発掘された山賀の中世前半の集落も調査例が少ないため、比較検討し得ないが。守護、地頭の支配下にあって、名主層の厳しい日常圧迫の中でいうごめいた農民層の思影がひたよせる住いの跡ではなかっただろうか。野洲川の分流で湖岸に接した簡素な住居は今、陽の目を見て、永久に保存されることになった。黒色土器、石鍋、土師器の雑器をかたわらに、琵琶湖の鮮魚や麦飯に箸をつつつき、赤子や老いた親と共に苦しい生活を強いられた中世の農民の姿が……。

（山崎秀二）

第3図　周辺遺跡分布図　1／20,000

5　石田遺跡	37　赤野井浜遺跡	50　森川原遺跡	55　山賀西遺跡
34　杉江遺跡	38　寺中遺跡	52　狐塚遺跡	60　欲賀寺遺跡
36　赤野井遺跡	45　三宅北遺跡	54　杉江東遺跡	

第12章　守山市赤野井（もりやま　あかのい）遺跡

1 はじめに

昭和51年度の第一次調査の結果、赤野井遺跡は赤野井町、杉江町、十二里町、石田町と広範囲にわたる遺跡であることが判明した。昭和52年度も前年の調査地の南隣接地において圃場整備事業が実施されることが計画され、調査を実施することになった。前年の調査面積が約1万3千平方米であったのとほぼ同様、今年度の面積も広範なものとなった。これは遺構面が耕土直下であり、圃場整備の地均化で削平されれば遺構が破壊されるので、10糎の削平をうける部分は全て対象としたことと、幹線排水、支線排水路の部分があるためである。幸いなことに、特殊な遺構が存在すると地元住人が伝える小字「狐塚」が事業対象地から除外された。この「狐塚」は外周支線水路部分の調査の結果、古墳時代の溝が存在することが判り、一段高い畑地にも古墳時代以降の遺構が存在すると思われ、これらの遺構が保存（現状）されたのである。今回の調査はⅠ～Kまでの調査区に分け、Ⅰは狐塚周辺、Jは狐塚の南方、Kは狐塚西方を示す。

発掘調査は7月1日から9月中旬までの約2ケ月半を費したが、予想以上の成果を得ることができた。詳しくは後章にゆずるが、掘立柱式建物群、溝などの諸遺構とともに、多量の遺物、中でも前年の調査では僅かであった瓦が、今回、十二里町近くのJ、K区で多量に出土した。

これらの結果、赤野井遺跡は大複合遺跡で弥生古墳時代の集落、奈良、平安期の集落、寺院跡等、極めて多様な性格をみせるのである。

前年度の成果

1、古墳時代前期から平安時代までの複合遺跡である。
1、掘立柱式建物跡が45棟検出され、全てが南北、東西を軸にし、最古の建物は六世紀後葉である。
1、方形周溝墓が五基検出された。
1、出土遺物から、地方官衙的色彩が濃いと考えられる。
1、遺跡の範囲（建物）は東西2町、南北8町と考えられ、古墳時代以前は更に南と西に広がると思われる。

調査の方法

今回の調査は最初から昨年の反省のもとに重機を用いて表土を除去した。約20～30cmの耕作土をユンボによって掘削し、能率向上をはかった。表土除去後、人力によって遺構検出を行ない、遺構の掘り下げを行なった。ただし、場所によって遺構面の深い地点では、一部のトレンチを穿ち、年代と性格について最低限の究明を実施した。これは、水用耕作中にも遺構が損傷をうけないため、後世に保存するためである。調査対象地である部分のうち、水路部分と遺構面の浅い箇所については遺構の完全掘り下げを行ない、記録をとった。地形上、ユンボの進入が不可能なところは人力で表土を除去した。

現地調査参加者

大橋信弥（県文化財保護課）、山崎秀二（市社会教育課）、谷口　徹（県文化財保護協会）大崎義彦、三宅　治、美濃部力、中西和多隆、谷口孝司、国松千夏、岩崎　茂、山田謙吾、清水好洋、中原秀夫、北野　悟

整理参加者

大崎隆志、岩崎　茂、清水好洋、山田謙吾、中原秀夫

1　赤野井遺跡
2　寺中遺跡（弥生前期～平安）
3　赤野井浜遺跡（弥生前期）

第1図　遺跡分布図

文　　責

山崎秀二、谷口　徹が担当した。それぞれの稿末に氏名を記した。

2　遺跡の地理的・歴史的環境

中・近世の宗教的中心村落であった赤野井はその名の源が阿迦井―仏教用語で清い霊泉が湧くところ―であるという説があり、野洲川の地下伏流水が湧出する条件下にあったと言えよう。あたかも、そのことを証明するかのように境川からの支流（旧河道）や、地下水位が高いために水田に暗渠を設けているし、古い井戸も一昔は滾々と湧き出たと言う。赤野井は野洲川の旧分流の江西川と境川の中洲地に所在し、遺跡は境川の分流の右岸の微高地に集中し、一部は左岸にも認められる。遺跡は東・西側は段差があって低く、南北に長い自然堤防上に所在すると言える。デルタ地帯の中にありながら地形は複雑で、琵琶湖側から山側にかけて少しずつ階段状に高くなりながら、遺跡の内ではほとんど高低はなく、遺跡の東側では少し低くなり更に少しずつ高くなる。南側もあまり変化はなく、北も変化は少なく、遺跡を離れると低くなる。今回調査した範囲の中には狐塚と呼ばれる畑地があり、周辺とは70～100cmも高い。この畑以外で最低位は85.0m・最高位は88.2mで、調査地で200m間でも約2mの比高がみとめられる。野洲川の沖積地の中には、現在、認められない微高地や、谷がひそんでおり、集落跡や水田跡と現家屋、田畑とは一目では一致しないところが多い。

歴史的環境

服部遺跡の調査と相前後して守山市を襲った開発の波はここ数年はしずまり、代わりに土地改良（ほ場整備）事業が多発し、不時発見や闇に葬られた遺跡の数も多い。赤野井近隣では赤野井浜、矢島町寺中が昭和50年に工事終了後に連絡があり、遺跡が発見されたし、赤野井浜遺跡の北にも赤野井浜北遺跡（小字弘前を中心とする）でも改良工事に際して多量の遺物が出土した（地元民が採集しており、弥生・古墳時代の遺物を中心とする）。山賀町でも中世初期の集落（山賀西遺跡）が昭和52年12月に調査されたし、境川流域の現集落の近くでは必ず、遺跡が存在する。すぐ南の欲賀町では、古墳時代後期の古墳が確認され（欲賀町史編集者の寺田靖氏他の採集）、境川から西、江西川から南のデルタ内の歴史も次第に明らかになりつつある。江西川の上流の播磨田町地先にも弥生～古墳時代の大集落跡がみつかり、弥生時代前期から平安時代―中世初期の連綿とした流れのあることが把握され、沖積地内の好適地を逐次開発し、居住、生産地の拡大や移動を繰り返したのであろう。中世以降は宗教一色に染まるように言われるが、欲賀城跡や山賀西遺跡のように決して蓮如や道西によってではなく、この地の住人によって歴史がつくられていったのである。　　（山崎　秀二）

3　調査地区の概略

Ⅰ地区は支線排水路G地区西側に表土削平部分が存在したため平面的に調査を広げた。Ⅰ―1～Ⅰ―6までがこの範囲である。Ⅰ―1ではG―6と接しており一連のピット群があらわれた。この中で建物跡となるものが多く、約10棟分が考えられた。ただしⅠ―1の北端は地形が下降し、当時も自然の傾斜があり、段上に建物跡がみつかるわけである。建物は後に詳述する。掘立柱式建物跡とは別に、幅30cm程の溝状遺構が多数検出された。この遺構は削平される高さが少ないので一部のみを掘り下げた。大半がU字乃至皿状の溝であった。溝の方向はほ

ぼ限定され東西あるいは南北方向である。幅及び深さは多様で小規模なもので25cm、深さ5cm、大規模な溝は70～80cm、深さ20cm程度である。このⅠ—1は建物が4棟みられた。Ⅰ—2では、柱穴数はかなり減って、建物の数も少ない。また小規模な溝状遺構がみられる。この次のⅠ—3でもⅠ—1・2と類似するが、柱穴は少なく、その分建物跡も少なくなる。Ⅰ—4では更にこの傾向は強くなる。Ⅰ—5・6ではピットは激減し、溝状の遺構が目立つようになる。またベース土はⅠ—1～6において、南が低く砂礫層であるのに対し、北側は高く灰黄褐色砂質土である。遺物の出土は少なくピット内と遺構面に若干出土をみたのみで極めて少量である。

J　地　区

J—1～4は狐塚の南側で削平される場所に設けたトレンチである。一部支線排水路部分Gと重複する。というのは排水路部分の拡張をJ—1～3としているからである。遺構は南端のJ—1では少数のピット、土壙と小さな溝状の遺構がみられた。この範囲は瓦の出土がやや多くみとめられた。しかし、瓦に伴なう遺構はなく、ここから南、南西方向から移動したものと思われた。トレンチの西半では幅60cmの溝が西端から東に伸び約4mで南に折れ、また 3.5m で東に折れる形でみつかった。この溝状遺構を南北方向の幅1mの溝が走る。この溝から東にのみ柱穴が認められる。トレンチの南端では約15cmも下降する段がみとめられた。東端では長径 2.5m、短径 1.7m の長だ円の土壙がみられた。

J—2ではトレンチの南半はベース土がみられ、ピットが認められた。北半は（最大約8m、最小 3.5m）の溝がみられ、黒褐色粘質土で埋められていた。この溝の底は深く、強粘質土であったが遺物はなく、自然遺物が若干みられたのみであった。J—3は南側でJ—2の溝の肩部がみられるだけで、他には遺構は認められなかった。J—4はG—10に直交するトレンチで、遺構は認められなかった。

J—5はG—11トレの北西に設けたトレンチである。このトレンチはベースの土層が島状に認められ、他は一段低くなる。この島状のベース上に柱穴が散在するのである。建物は明確に認められないが、一段低いベースになっているため消滅しているのであろう。

K　地　区

K地区は支線道路（狐塚西側）の西側の削平予定地である、幅10mのトレンチを4ケ所設定したが、水田の形状により、整った形をとらなくて、四辺形、あるいは三角形状を呈する。道路に近い方から1～4と番号を付したので、順に説明を加える。

K—1

本トレンチでは幅10m、長さ25mのトレンチを設けることができ、その分、遺構の検出も容易で、多数にわたった。遺構は別に詳述するが建物（掘立柱式建物跡）が5棟、柵列1、溝状遺構等で、建物の周辺は不整形な段があり、一段低くなっている。これらの建物跡はすべて、東西、南北に軸をもち、時期的な差によってわずかに東あるいは西にふれるにすぎず、基本的な軸は東西、南北の方位にあると言えよう。柵列や溝もやはり基本的な方位は建物跡と同様である。

K—2

本トレンチにおいてもやはり建物跡4棟、溝状遺構と自然の地形の変化（北にかけてゆっくり落ち込み、浅い皿状の凹みができる）がみられた。このC列トレンチからは瓦片が多数出土し、中でもこの落ち込みや柱穴ピットからも出土している。中でもSB—K10は柱穴内から出土しており、瓦の出現する以前のものであることがわかった。

（山崎秀二）

4 遺　　構

掘立柱式建物

各調査区の全域にわたり柱穴、掘立柱式建物が検出された。これらの遺構の年代は柱穴内あるいは掘り方内の出土遺物によって、6世紀後半後葉から10世紀におよぶことが判明している。そして、一部には瓦が柱穴内一ぱいに入っており、おおよその年代を求められる建物もあり、更に、柱穴埋め土の色調差によってもおおよそ分類しうる。掘立柱式建物群の基準の方位は東西・南北（磁北）にあり、時期差によって、多小、西・東にふれる程度である。次に、各地区毎に掘立柱式建物の説明をしよう。

J　地　区

J—5トレンチ、J—2トレンチで建物跡が確認された。

SB—J—1

J—5トレンチの北端に存在する掘立柱式建物で、現状で確められる規模は梁行2×桁行　間の規模である。柱穴は40cmの長方形状の堀り方で、柱間は 240cmを測る。東西棟と思われる。

SB—B—2　SB—B—1の南側に存在する建物跡で、現状では南北2間、東西2間分が確認できるが、柱穴の大きさからみて、東西南北とも更に柱がのびるものと思われる。柱穴は径約50～60cmの掘り方で、柱間は180cmを測る。あるいは南北棟か。

SB—J—3　SB—J—1とJ—2との間に存在する建物跡で、桁行3間、梁行2間の東西棟で、径約25～40cmの円形の掘り方の柱穴がみられ、柱間はやや不ぞろいであるが、240cmと考えられる。

SB—J—4　SB—J—2と重複する位置にある建物で、東西棟と考えられる。直径約35cmの円形掘り方の柱穴で梁行2間、桁行2間以上が確認できる。柱間は 210cmである。なお、SB—J—2との前後関係は柱穴の切り合い関係からJ—2が古く、J—4が後行する。

SB—J—5　B—8トレンチの南東端に所在する建物跡で、東西3間、南北1間以上の規模である。柱穴は30～40cmの円形掘り方で、柱間は 230cmである。

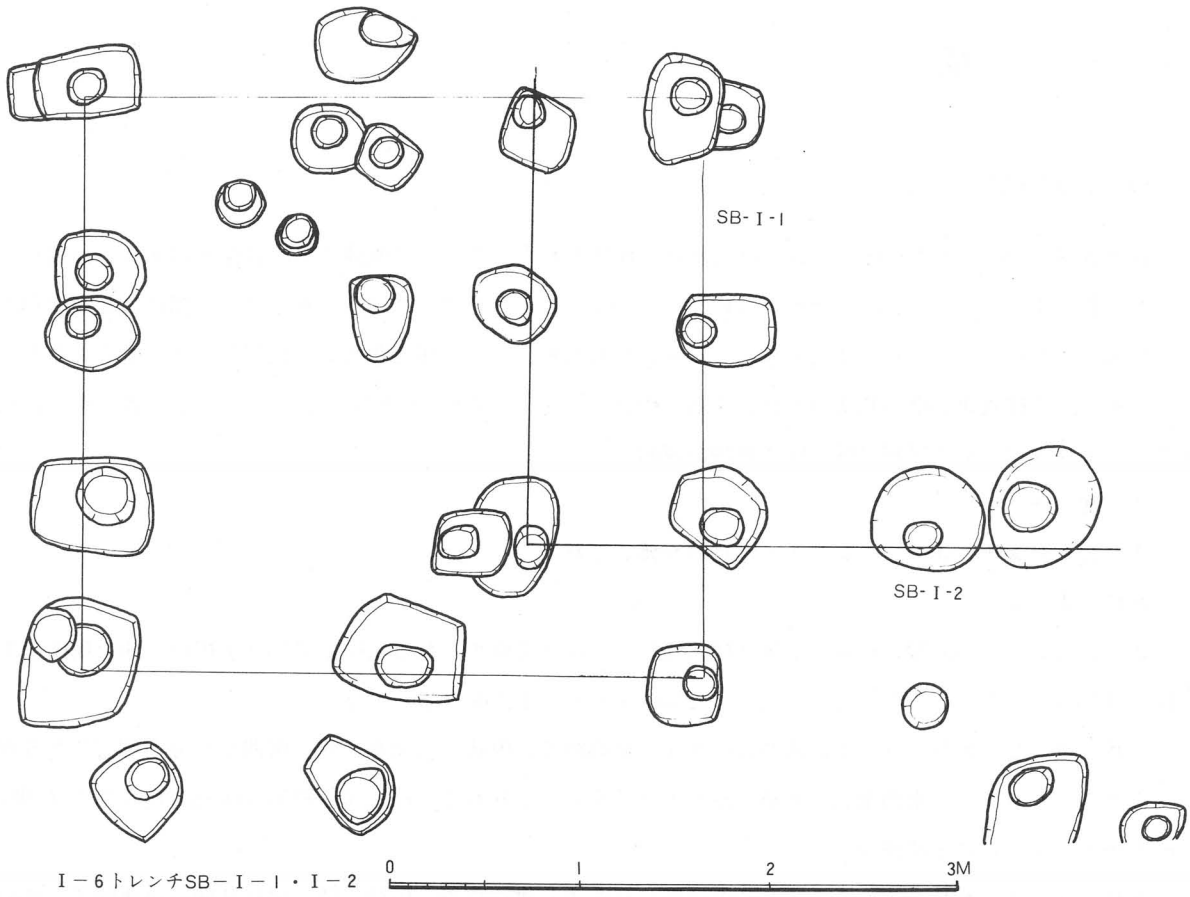
SB—J—6　SB—J—5と重複する建物跡で、柱穴の切り合いからJ—5より先行する。現状で、東西2間、南北1間以上の規模である。柱穴は40cmの円形掘り方で、柱間は 260cmである。あるいはB—5建物はJ—6を増改築したものか。

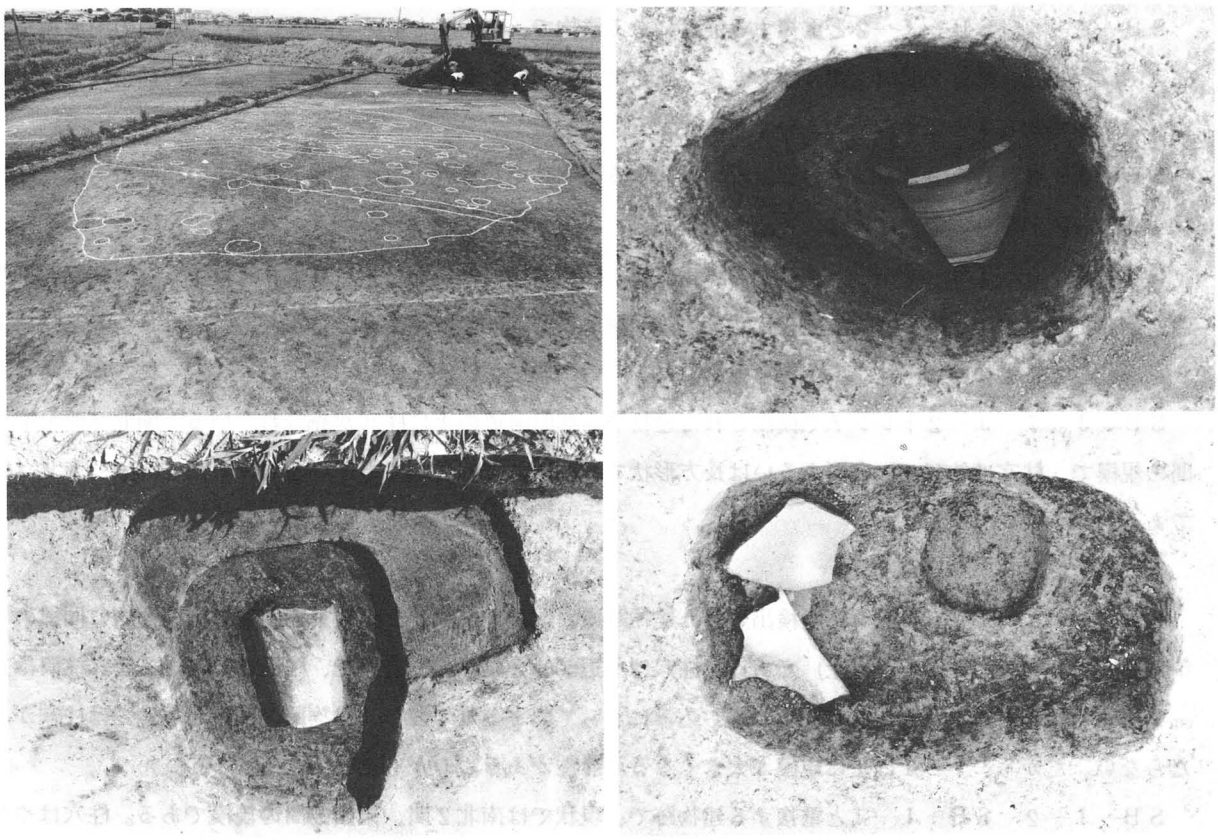
SB—J—7　J—2トレンチで検出された建物で一部旧河道の上に柱穴が掘られている。南北2間×東西1間の規模で、柱穴は約40cmの方形あるいは長方形状で、柱径は15～20cmである。柱間は東西 200cm、南北 160cmである。

I　地　区

SB—I—1　I—5トレンチで検出された建物跡で、現状で、南北2間×東西1間以上（西側に同種のピットがみられるので4間かそれ以上）である。柱穴は一辺60cm×40cmの長方形で、柱径は25cmである。柱間は 230cmである。このI—1は周辺部が後世の落ち込みによって削平されており、建物跡の西半と北側では柱穴がみあたらない。だから、I—1は更に規模が大きくなる可能性がある。しかも総柱である。

SB—I—2　SB—I—1と重複する建物跡で、現状では南北2間、東西2間の規模である。柱穴はややふ





第２図　遺構図及び発掘風景

ぞろいであるが、50cm径の楕円形に近く、柱径は20cmである。総柱の建物で、柱間は 160cmである。西接するⅠ—4 トレンチには柱穴が検出されていないので恐らく2間×2間の規模と推定される。

ＳＢ—Ⅰ—3　ＳＢ—Ⅰ—2の東側に所在し、G—6 トレンチにみられる建物跡で南北2間、東西2間(以上)が確認できる。柱穴掘り方は約40cmの円形あるいは楕円形で、柱径は20cmを測る。柱間は 200cmである。東西棟か。

ＳＢ—Ⅰ—4　ＳＢ—Ⅰ—3と一部重複する建物跡で、現状で南北2間、東西1間（以上）が確認できる。柱穴掘り方は約40cmで柱径は不明瞭である。柱間は 200cmである。東西棟か。

K　地　区

調査地区内で最も西よりの地区であるC地区ではほぼ全面にわたって柱穴が検出され、前年度のZ地区のほぼ南側にあたり、遺構（堀立柱式建物群）が、最も集中する一帯であることがわかった。なお、掘立柱式建物の検出面には柱穴以前の幅の細い溝等があり、古墳時代以前の遺構が存在したことがわかった。なお、柱穴検出面やわずかに落ち込むところでは白鳳から奈良時代前期の瓦があり、一部堀り方内にも瓦が出土するので、建物跡の中には白鳳期以前の建物があることが判明した。

ＳＢ—K—1　K—3 トレンチで検出された建物で、東西棟と思われる。柱穴は方形で一辺約50cmで、柱径は25cmである。柱間は3間の平均が 140cm（南北)、確認できる2間分の柱間は 120cmである。柱穴は重複があり、ほぼ同じ位置に建て替えられた建物が存在する。

ＳＢ—K—2　ＳＢ—K—1に重複する建物で、南北3間×東西2間分が認められる。柱穴は不ぞろいである。柱間はＳＢ—K—1と同じで南北 140cm、東西 120cmである。

ＳＢ—K—3　ＳＢ—K—2の東、約3ｍ離れて存在する建物で、南北2間以上、東西2間が確認できる。柱穴は不整円形で約30cmの楕円形か、それに近い形で、柱径は18cmである。柱間は東西 180cm、南北 180cmである。北側は後世の溝がみられるので全体規模は確実ではない。

ＳＢ—K—4　ＳＢ—K—3の内側で重複する位置にあるもので、東西2間、南北1間以上がみられる。柱穴は約40cmの楕円形で、柱径は20cmである。K—4 建物は北側が後世の堀り込みか、当時も低地であったのか（おそらく前者)、柱穴が検出されず建物の規模は不明瞭である。

ＳＢ—K—5　ＳＢ—K—3・K—4と重複する建物で、現状で、東西3間、南北2間分が確認される。ただし、南北は2間以上にのびると思われる。柱穴は、ややふぞろいであるが、30～45cmのほぼ円形である。柱間は東西が平均 190cm、南北が2間の平均 190cmである。東西棟か。

ＳＢ—K—6　ＳＢ—K—3の南側に接して存在する建物で、東西4間、南北3間の完結した東西棟である。柱穴は約30cmの円形である。柱間は東西 165cm、南北 180cmを測る。

ＳＢ—K—7　K—4 トレンチ内で検出された建物で、南北2間、東西3間の東西棟である。柱穴は不ぞろいで、方形や円形がみられるが、後世の変形もあろうから建物として完結するものと考える。柱間は南北 180cm、東西 180cmである。東側は調査外となるので東端柱列は不明であるが一応2間×3間と考えた。

ＳＢ—K—8　ＳＢ—K—7の西側約 2.5m離れて存在する建物で、現状で、東西1間、南北2間分が確認できる。柱穴は円形で直径約30cmで、柱径は約15cmである。柱間は東西 180cm、南北 210cmである。

ＳＢ—K—9　ＳＢ—K—8と重複する位置でやや東側に移動した形で存在する建物で、現状で東西1間、南北2間がみとめられる。柱穴は直径約30cmの円形で、柱穴は約15cmである。柱間は東西 160cm、南北 210cmを測る。この建物は、ＳＢ—K—8の建て替えとしてつくられたものであろうか。前後関係は明瞭ではないが、K—

8の南西端の柱穴からはすり消しの丸瓦が柱内に入っており、白鳳時代後期以後の掘り込みと考えられる。ＳＢ—K—7とK—8とは並存していた可能性があり、後にK—9を建て替えたものではないかと思われる。

ＳＢ—K—10　小規模な建物で、ＳＢ—K—7の北東約4ｍ離れて存在する。南北2間、東西1間が確認できるが東西の柱は更に東に伸びると思われる。柱穴掘り方は30×40のだ円形で、柱径は18cm程度である。柱間は140cmで、東西・南北とも同じである。

ＳＢ—K—11、Ｃ地区で北東端に位置する建物で、東側柱列は後世の削平でみとめられないが、現状で、南北3間・東西3間が確認できる。柱穴掘り方は約30cmの円形で、柱径は15cm程度である。柱間は東西 170cm、南北 170cmである。

ＳＢ—K—12・ＳＢ—K—7と重複する建物で、柱穴は大小不ぞろいであるが、円形である。現状で南北2間、東西1間がみられ、更に規模が広がるものと考えられる。現状での柱間は南北 230cm・東西 230cmである。

ＳＢ—K—13、ＳＢ—K—7の北側に接してみられる建物で、現状で南北3間、東西1間の規模だが、東西方向は更にのびるものと考えられる。柱穴掘り方はやや大きく、30×50の方形乃至だ円形で、柱径は15cmである。柱間は南北 200cm、東西 210cmである。

ＳＢ—K—14、ＳＢ—K—11と重複する位置にある建物で、東西2間、南北3間がみとめられる。この規模で完結するかは明瞭ではなく、更に大きな建物となるかも知れない。

柱穴掘り方は30cmの円形で、柱径は15cm程度である。柱間は東西 180cm、南北 175cmである。南北棟か。

ＳＤ—Ｊ－1

Ｊ－1トレンチで検出された溝跡で、一部（排水路部分のみ）底まで掘ったところ、黒色の強粘質土で占められ、肩部は人工的に掘り込まれているように思われるのに、溝内は人工の遺物は皆無で、炭化しかかった木片が数点出土した。このことから断定はし得ないが、人工的に掘られたか、あるいは自然の流路を肩部だけ修復した溝跡であり、遺物が皆無なので時期は明らかでない。

ＳＫ—Ｋ－1

Ｋ地区に所在する長辺 1.2ｍ、短辺65cmの長方形（隅丸）の土壙で深さは中央でやや深くなるが15cm程である。古墳時代前期に属す土師器が細片で出土し、中に1点のみ碧玉製管玉が出土した。管玉は長径 0.7mm、長さ 1.8cmを測る。碧玉製で完存である。出土土器は図版の25に類似する。　（山崎秀二）

5 遺　　物

(1) 出土遺物の概要

今年度調査分の遺物は多く、コンテナで40箱に及ぶ。中でも瓦の出土量は多く約4分の1に達した。遺物の年代的出土場所は、瓦がＪ・Ｋ地区・弥生式土器・石器がＫ・Ｈ地区、古墳時代がＧ・Ｈ地区、奈良・平安時代はほぼ全域にわたる。

遺物のうち弥生時代が全遺物の約5％、古墳時代が40％、奈良・平安時代が30％、瓦は25％である。詳細は後記するが、弥生時代の土器はⅠ様式新からⅤ様式までみられ、Ⅱ様式～Ⅳ様式の石器がある。Ⅳ様式の土器は明瞭ではないが、細片で凹線文の壺がみられた。(Ⅴ様式土器については4点あり壺2点・甕2点である。) 古墳時代

遺物は多く、土師器須恵器ともほぼ時代全体を網羅できる。最古の土師器と判断できる一群から庄内式土器、S字状口縁土器、受口状口縁土器、小型器台、小型丸底壺、布留式土器などをあげることができる。遺物の残存状態は総じて良くないので細部の特徴を詳しく説明できない点があるが種類については豊富である。須恵器ではTK23型式からTK 209の古墳時代各型式、奈良・平安時代のTK 207～TK 7 型式がある。施釉陶器も多く、近江の型式①と呼ばれる高台に段をもつもの、そうでない丸味をおびた高台をもつ縁釉陶器や灰釉陶器も各種ある。前年度もそうであったが、全体的に施釉陶器の出土量が多いことも特徴である。瓦については、斜格子の叩きが瓦の中1％点弱、格子叩きが35％強、縄目が23％、すり消し25％、不明16％であった。時期的には斜格子が先行するが、他の手法による瓦も大きな差がなく後続するものである。ただ軒先瓦は少なく、軒丸瓦は1点、軒平瓦3点である。

他の遺物では、竈（カマド）の破片一部2点、須恵器の四耳壺1点、管玉1点がある。竈の時期は明瞭ではないが通常の大きさであり、伴出遺物から7世紀前後のものと思われる管玉はK地区の土壙内から出土し、古墳時代前期の庄内式土器に伴なう碧玉製品である。

木製品はG・H地区に限られ、古墳時代前期から中期にかけての製品である。

以下、個々に遺物の特徴を記す。

(2) 土器

須恵器、㉑～㊿

須恵器の出土量は多い。今回の須恵器の特徴は、古墳時代の土器が多いという点、大型の環状つまみの蓋、4耳壺、合子の出土にあると思われる。前回の調査では多量の須恵器の中で成形上の技法の点で興味ある点が指摘することができた。また、容量の多い坏（陶邑古窯址の報告では碗に入れてあるものもある）や、鉢状の器形がみられた。それぞれの土器の中で、注目されるのは、いわゆる搬入された土器が認められることである。このことは後に個別に説明することにするが、遺跡の性格とも関わって重要な点となろう。

坏身㉑～㉝

㉑～㉔は陶邑古窯址群でいうTK23期に並行するもので、立ちあがりが高く、受け部も外上方に少しのび、底部の多くをヘラ削りする。㉓は若干遅れるものと思われる。㉕～㉙は受部が内傾化し、口径が大きくなるもので陶邑古窯址群のTK10からTK43期にあたるものである。㉚～㉝は、立ちあがりが更に短かく、内傾したもので底部は平坦で浅い。明瞭なヘラ削りはなく、底部外面は未調整である。陶邑古窯址群のTK 217にあたる。

坏蓋、㉞～㊺

㉞～㊲・㊴は口縁部がほぼ直立し、口縁端部が外にひき出されるような形態のもので、内に面をもつ。天井部は大半をヘラ削りするもので、薄手である。TK23期に並行するものである。㉟・㊱・㊳・㊵はやはり口縁部は直立するが、口縁端部はひき出されず、内側に面をもつ。その面の中には凹みがみられる。天井部の大半はヘラ削りを行なう。口径は小さく12cm未満である。陶邑TK23期か。㊷は口径12.4、高さ 4.5cmで、全体に丸く、口縁部も丸くおさめられている。口縁部と天井部を分ける稜はみとめられない。天井部は未調整で部分的に横ナデがみられる。㊶・㊸・㊹は高さが低く、口縁部と天井部との境で段をなし、㊹以外は垂直に立ち、端部は丸くおさめる。TK 217期か、㊺は、有蓋高坏の蓋で、つまみの部分のみ残存している。MT15並行か。つまみ部の接合部分以外はヘラ削りがみられる。

高坏・㊻～㊾

短脚一段の高坏の脚部㉖で、ゆるく内彎した脚部の外面にはカキ目調整が施こされ、透孔は三方で円形である。類似したものでは新旭町二子塚古墳出土の高坏がある。TK23期。㉘も短脚一段で方形の透孔で、脚端は欠損しているが外面に段をもつ。TK23期か。㉗は脚端が大きくひらく脚部で、内外面ともていねいな横ナデで仕上げている。㉙はやや外下方にひらく脚部で、内外面ともていねいな横ナデで仕上げる。㉗・㉙ともTK 209か。

平瓶 ㉚

口縁部のみの残存で体部との接合部は大きく張り出す。口縁部は約5㎝の高さで若干彎曲して、端部は丸くおさめる。

器台、㉛

脚部の一部のみの残存である。端部は内面にやや肥厚し内側が浮く。中段で段をもち、その上に沈線がみられ、沈状文が施こされる。TK23期か。

甕 ㉞・㉟・㉙・㊵

㉞はわずかに外反する頸部から口縁部にかけて残存する甕で、口縁は内傾する面をもつ。外面はカキ目調整で、内面はやや荒い横ナデである。㉟は大きく外反する口頸部で、端部は三角形状である。内外面は横ナデ調整で、内面に自然釉が付着し、外面は火ぶくれのあとがみとめられる。㉙は外上方に直線的にのびる口頸部で、口縁部は平坦面をもら、内側にふくらむ。頸部には3条以上の沈線がみられる。内外面とも、ていねいな横ナデ調整である。㊵は外上方にひらく口縁部で、外面に突帯状のふくらみがつくられ、端部は三角形状である。内外面とも、ていねいな横ナデである。

壺、㊱・㊲ ㊳

㊱は短頸壺で、直立した短い口縁と外下方にゆるく内彎する体部がみられる。青灰色を呈したこの壺は内外面とも、ていねいな横ナデ調整によって仕上げられている。㊲・㊳は低い高台付の壺で237は形のととのった四角形の高台が付き、内面に強い横ナデ調整のあとがみられる。㊳は三角形状の高台が、ぶ厚い底部にはりつけられているものである。

坏、㊷～㊽

良好に残存しているものが少ないが、いずれも高台付の坏である。㊽はやや高い高台で体部はゆるく内彎して直線的に外上方にのび端部を丸くおさめる。㊷～㊼はやや小型で、外にひらく低い高台付の坏で、高台底面が凹むものもある。

蓋、㊾～㊿

㊾は内面にかえりのみられる蓋で、やや口径が大きい。かえりは三角形状で鋭く、天井部から口縁にかけて大きく内彎する。端部は丸くおさめる。天井部はわずかにヘラ削りがみられ、後に横ナデで仕上げている。㊿～㊿は天井部から口縁部にかけて1度彎曲し、口縁部に至る。端部が三角形状で、外にひらくもの（㊿・㊿～㊿・㊿）と他の丸くおさめる形状の蓋とに分けることができる。

施釉陶器 (301)～(335)

施釉陶器は多く、灰釉・緑釉両種がみられる。直接、遺構に伴なったものは少ないが、包含層から多数出土している。昨年度の調査でも約100点の出土をみたが、今回の調査においても細片をあげれば、その程度の数になる。9・10世紀代の繁栄を示すこの遺物の出土は、官衙や貴族層の居住地に多いと言われる。その基本的使用法について諸説がみられるし、供給源地の問題も考えてみなければならない。灰釉については近江の蒲生郡山ノ上遺跡が一例明らかにされており、緑釉とともに焼かれていることが報告された。ここでは、各々の特徴を記し、②

明らかにできることがあれば、その都度述べたい。

灰釉陶器、㉚1～㉘

碗㉚1～㉜1

高台の高い㉚9は約1.5cmもあり、体部は大きくゆるく内彎する。高台端部は丸くおさめる。㉛4は本来緑釉陶器に特徴的な高台と内面に沈線状の凹みをもつもので、糸切り底に外下方にひらく高台は底面に凹みをもつ。ほぼ水平な底部の内面は1条沈線がみられる。半透明の灰釉がかけられ、胎土は淡灰色である。㉚4はぶ厚い高台が特徴で体部は大きく内彎する。㉚8㉛1は内彎する体部から口縁部で向きをかえて外反して端部となり、丸くおさめるもので、胎土は極めて精緻で、うすい透明の灰釉がみとめられる。㉛2・㉜1は内彎する体部から、ほぼ直線的に口縁部となり、わずかに端部のみ外反する感じである。胎土は精良で、灰白色である。他は、外下方にひらく高台をもつもので、それぞれに若干の差をもつが（高台の径や高さ）ほぼ共通している。やはり、胎土は精選された胎土を選んでおり、色調は灰白色～乳白色に近いもので、透明に近い。

皿、㉜2～㉜5

いずれも底部を中心とした残存部分で、㉜3は段皿で、低く四角い高台と段が特長で、体部の内外面は強い横ナデがみられる。㉜4は薄くつくられており、外にひらく細い四角形の高台がみられる。内外面とも横ナデ調整。㉜2㉜5は低い高台である。

瓶、

㉜6は外面底部をていねいにヘラケズリした後にうすく灰釉をかぶせたものである。㉜7は底部で、大きい高台と体部の一部の残存で、外面にうすい緑色の灰釉がかぶる。内面は強い横ナデがみられる。外面はていねいなヘラ削りの後に弱い横ナデがみとめられる。㉜8は長頸瓶の口頸部で、口縁端部がうすくなっている。内外面にうすく灰釉がかぶる。

緑釉陶器、㉜9～㉝5

碗　㉝1～㉝5

やや低い高台をもつもので、㉝1以外は高台に段をもつ。また内面には沈線をみとめることができる。㉝4はやや変形の高台で高い。㉝1・㉝2は軟陶で㉝3～㉝5は硬陶である。

皿　㉜9～㉝0　ぶ厚い底部と大きい高台をもつものである。内面にも沈線はなく、従って重ね焼きのあとがない。しかし、㉜9は内面にも釉がみられるから口の広い器形になる。㉝0は高台底面にわずかに段がみとめられる。

瓦

瓦は多く出土した。コンテナでおよそ20箱に達する。この中でみられる種類は軒丸瓦1点、軒平瓦4点、磚3点、丸瓦、平瓦である。丸瓦は行基式と玉縁式の2種がある。軒丸瓦は複弁蓮華文で、周縁部は欠損していて不明瞭である。内区は珠文があり、短かい複弁と中房がみられる。相当磨滅しており、肉薄になっている。瓦当と丸瓦を接合するタイプで平坦な瓦当裏面に丸瓦を当て粘土で接合する形がみられる。

一方、軒平瓦は3点が重孤文軒平瓦で、1点が均正唐草文軒平瓦である。重孤文軒平瓦は灰色に焼かれ、相当磨滅している。無顎式で薄手である。叩きは観察できないが、5㎜格子の叩きと思われる。均正唐草文軒平瓦は黄褐色に焼かれ、文様がわずかに観察し得るのみで図・拓影では表わせないので割愛した。厚さから有顎式と思われる。

丸瓦、平瓦については時間の関係上、詳細な検討を加えられなかったが、平瓦においてはすりけし、斜格子叩き1種、格子叩き2種、縄目叩き2種を認めることができた。丸瓦においてはすり消し、縄目を認め、中に玉縁式の瓦のあることもみとめられた。

これらの瓦の中で、最も古いものは斜格子のやや大きい叩きの瓦で、白鳳期に属すと思われ（天智朝頃）、格子叩き瓦も後続する時期にあると思われる。縄目の瓦については白鳳期に既に出現していると言われるが、在野の地では主流は格子であり、徐々に交替すると考えられ、白鳳期の後葉か奈良時代前期に属すと思われるのである。このことを示すものとして土器の年代を考えると、白鳳期の遺物は極端に少なく、奈良末～平安期に属すものが多い。

この瓦を伴なう遺構は未だ明らかにできない。瓦の出土はA→Cと進む程多くなる傾向にあるので、おそらく瓦をともなつた建物は十二里町民家下か更に南の畑地に広がるのだろう。（山崎秀二）

6 小　　結

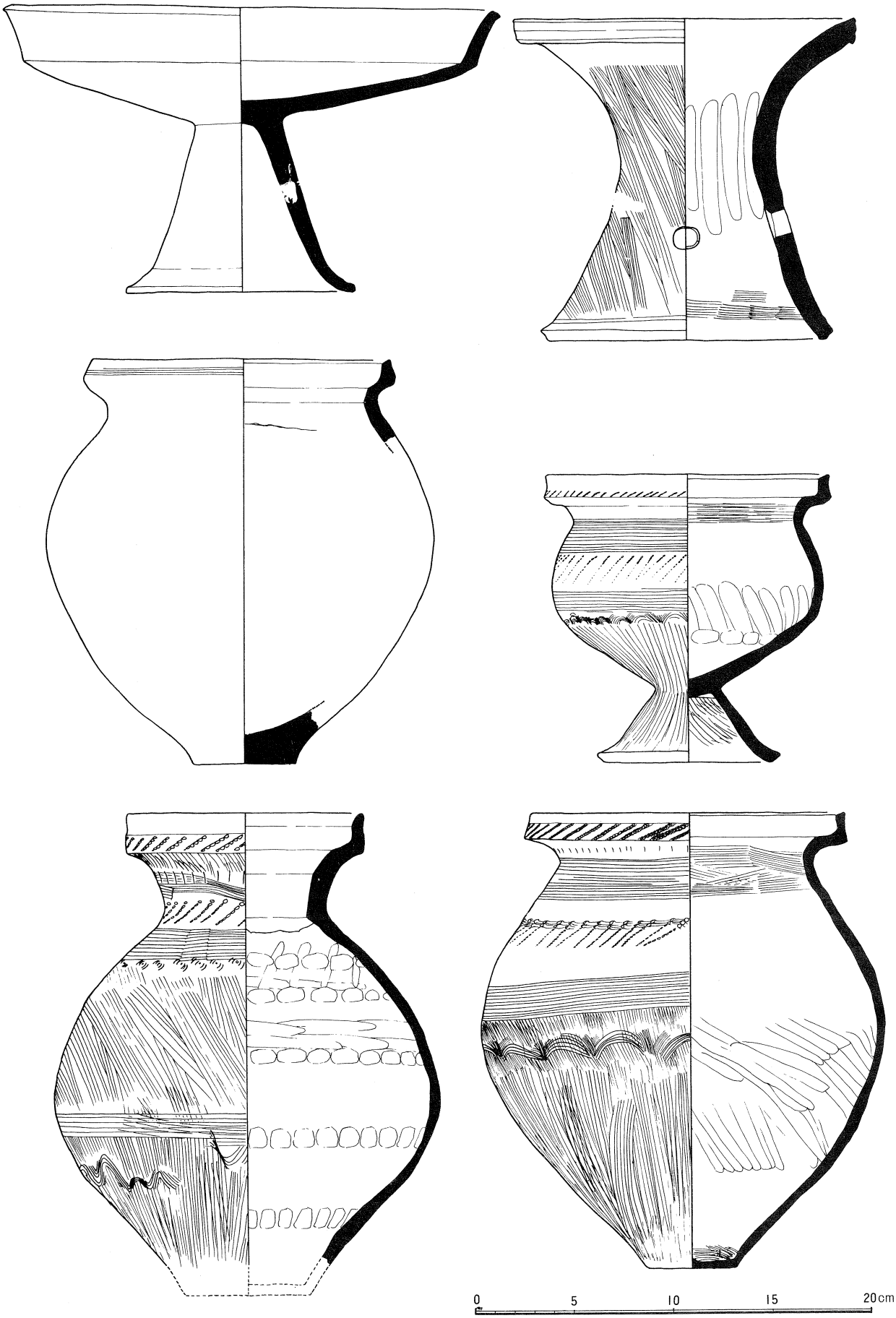
赤野井遺跡では昨年度の第1次調査では出土しなかった弥生時代前期・中期、庄内式並行期の土器、石器、木器の出土があり、北方の矢島町寺中遺跡の弥生遺跡とともに、広範な遺跡が確められた。遺物は弥生土器Ⅰ様式新段階、Ⅱ様式、Ⅲ様式、Ⅳ様式、Ⅴ様式と弥生時代のほぼ全般にわたって認められ、中期に属す小型扁平片刃石斧も出土しており、奈良・平安時代、あるいは古墳時代の遺構の下層に弥生時代の遺構が存在すると思われる、弥生時代の前・中期の遺跡は近辺には、北約1km離れ寺中遺跡、西約1kmにも赤野井浜遺跡があり、いずれも前期新段階以降の集落跡である。この他では服部遺跡にみられる。報告書は未刊行であるが、筆者も調査に加つているので概略だけを記しておこう。約12万㎡の調査地に弥生時代中期の方形周溝墓群、竪穴式住居跡群があり、前期末～中期前葉の水田跡も検出された。遺物は縄文時代晩期からみられるが、遺構が確められるのは前期新段階以降である。大規模な墓域である。水田址は約10～ 100㎡で地形にあわせた畦畔をつくり、四辺形、長方形状に採っている。この方形周溝墓群の上層に弥生時代中期後半、後期の竪穴式住居跡群（2群）がみられる。更に、弥生時代中期の銅鐸4口を出した新庄の遺跡も服部遺跡の南側1kmに位置する。これらの4遺跡は野洲川の沖積地の中にあり、服部遺跡でみられた水田に類似した水田で水稲農耕をしていたであろう黒色粘土が赤野井浜、寺中、赤野井遺跡でもみられ、それぞれの遺跡で精査されれば検出されるものと思われる。

古墳時代の遺物の中で注目されるのは庄内式土器の出土と東海系のS字状口縁甕の出土である。後者は胎土が近江のそれとは異なり、きめ細かい砂粒で、色調は褐色系で近江系のものとは明らかに異なる。更に外面の調整技法は全く別種で近江の甕は口縁部外面に櫛による刺突文、平行文、頸部に櫛描き平行文など（ただし、布留式並行の時期にはほとんど見当たらない）そして、それらの間には工具による乱雑なハケ目調整（というよりは土を削り落とすような）がみられるが、今回出土したS字状甕は腰の強いハケ目で調整しており、手法や文様も異なる。そして形態も口径が小さく胴部が球形に近く、肩が張る感じがあり、またこの点でも、搬入品であることが知れる。従来、調査されてきた古墳時代の遺跡の中で、確実に東海地方からの搬入品と言えるものは少なく、当赤野井遺跡の出土例が極めて貴重な資料となる。搬入のルートや目的等はなかなか明らかになりそうもないが、調査中の服部遺跡の古墳時代溝からも東海系の土器（搬入品ではない）があり、ルート上の1つの暗示を与える。

一方、庄内式土器の出土についても類例が増加しつつある現在、明確なことは言えないが、古墳時代前期にたびたび発生したであろう大王の交替（中央政権内）や河内方面での首長層内の内乱等によって引き起こされた農民層の移動や首長層の指示による一部共同体成員の移住（技術者など）によるものかも知れない。なおこれは今後の資料的増加による分析や文献などから検討してゆかねばならない。

古墳時代の前期（庄内式並行）の遺物は文化財だより9号で紹介されている遺物と極似しており、野洲川流域

③



第３図　服部遺跡出土土器実測図

では数少ない出土例である。細かい左下りの叩き目にハケ目調整を加えた技法も同様である。この土器はH区の溝及び性格不明瞭な落ち込み内から出土していて確実に共伴する遺物をあげることは出来ない。恐らく図版9—甕に示す土器群にあたるものと考えられる。ただし、この叩きを有す甕が、最古期土師器かどうかについては断をひかえる。

庄内式土器の範囲については「いわゆる庄内土器」と呼び胎土・色調の特徴をもつものの他に形態は極似しても胎土、色調が異なるものも含めておられるので、赤野井遺跡の例もこれに加えることができる。なお、庄内式土器の赤野井遺跡の出土数は3点である。いずれも、金雲母・黒雲母片を含まず、色調は黄褐色系である。ただし、V様式のあらい叩きをもつ甕の出土はない。

受口の口縁の土器は多量に出土しており、種々のタイプに分かつことができる。これらの各タイプの土器のうち別所健二氏が述べておられる点④は、やや納得しがたい。先ず、長頸壺の時代における甕のタイプのあり方が問題となる。即ち、受口の口縁の源流が弥生Ⅱ様式土器にあると云いながら、長頸壺の時代には明確でない。Ⅳ様式には甕や壺に内傾する受口の口縁、V様式には直立する口縁などがあるにもかかわらず、文様の多いB類を河内地方から逆輸入されたような考えをもつのは考えにくいことであり、連綿とした受口状口縁の系譜の中でⅣ様式の後半の時期に、即ち西之辻H地点⑤よりも前に文様の多いB類が成立し、後、次第に内面未調整（指おさえのみ）で文様の少ないタイプに移行してゆくものと考えるべきであろう。小型の丸底壺や布留式甕に伴なう従来呼んでいたS字状口縁の土器はA類に似、しかも丸底である点は筆者の考えに妥当であろうと思われる。服部遺跡では厚手の受口口縁の甕には口縁外面に棒状浮文が付き、胴部中位やや下に貼り付け突帯がつく。この土器は壺を伴っておらず、V様式前半には未に突帯のつく甕が出現していなかったことが想定される。

服部遺跡出土の弥生第V様式の土器の土器を参考に掲示しておこう。この資料は服部遺跡B地区の弥生時代Ⅵ～V様式の住居址間を通る（1棟は溝が壊す）溝（SD—20）内の一括遺物で、溝内埋土の中層に集中し、下層、上層にはほとんど遺物はなく、短期間に埋った溝である。遺物の種類は壺・甕・高坏・器台があり、それらの中でも数種に分類できるが、それぞれの中において、極端な時期差がなくまとまったものであることがわかる。

いわゆるV様式の前半と呼ばれる土器の種類を網羅している。壺Ⅰは、同じく服部遺跡中期方形周溝墓群の供献土器の中でⅣ様式の土器壺に類似した形態と文様、胎土をもち、Ⅳ様式の内容をそのまま写しているものである（近江系）。一方甕については、Ⅳ様式の甕の影響を明瞭に受け継ぎ、口縁の内傾化が弱い点以外は全く類似している。(近江系) ただし、甕3は口縁外面や頸部、体部に文様を施さず、また調整の荒いハケもみとめられない。高坏はV様式の典型である。甕の中で小型で厚く、底部も明瞭で、畿内の影響に近いものもある。

これらの土器をみる限り、壺や甕にみられる複合口縁の受口状口縁はⅣ様式に確立し（祖型はⅡ様式か）、V様式には、はっきりと存在し、古墳時代に次第に形態を変化させながら更に特徴づけられていくと思われる。

この土器からみて、西の辻Ⅰ地点出土の土器でV様式の中に受口状口縁34があげられているものは、服部遺跡の出土例よりも後出ではないかと思われる。あるいは並行するとみても、服部遺跡では長頸壺は無く、西ノ辻Ⅰ地点、壺11に類似する壺がある点で時期的には若干の差しかないものと思われる。

ここで時代の区分の問題と土器の変遷について僅かに紙面を割いてみる。時代区分の指標は、社会構成体の分析と一致するとして、「生産力と生産関係」の社会生活に対する制約・規定である。これは発展度を示す（労働力・分業や協業・生産要具、労働対象などの性格や状態の生産力と生産手段の所有形態、そしてそれに制約された生産手段の所有者と直接生産者との結合関係を示す生産関係との問題である。それは、日本における時代区分が欧州史のように原始共同体—奴隷制社会—等の区分のように分けるのではなく、縄文・弥生時代と分ける次元に

おいても、基本的には通用する概念であろう。要するに生産力と生産関係は常に存在する範ちゅうであるから。

昨年度（昭和51年）の調査は6世紀後半以降の掘立柱式建物群を検出し、その性格を「屯倉」の成立とともに形成されてくる建物で、「屯倉」の崩壊（発展消滅）によって郡内の公（地方官衙）的性格—ここでは明見荘あるいは明見郷か—変換してゆくものを考えた。それは、硯・墨書土器、ヘラ描き文字、供膳形態土器の多いこと、遺構では倉庫の規模、建物の方位などから判断したのであった。今回の調査では更に建物が増加し、しかも、地方官衙に多いと言われる瓦の出土があり、条件を満たしつつある状況と言える。前回の調査の中で推定した遺構の範囲も今回の調査でますます強まったと言える。今のところ、あまりにも柱穴が多く検出されるので、建物としてまとめるのに甚だ困難を生じているが、実際にはもっと錯走した建物の重複があると思われる。しかし。建物の方位の基準はかわらず、唯一残る欠点は桁行の長い建物がないことであるが静岡県藤枝市　　遺跡は中枢的建物以外は比較的小規模な建物であることが知られている。この点では、赤野井遺跡の検出遺構が中心をはずれている（中心部は前回調査分の更に北側）ためであるなら、官衙として充分考えられる条件をもつ。

別に問題となる点については、瓦の出土がある。前回の調査ではじめて出土し、白鳳期寺院址の数が増えると判断したが、今回の調査でも、やはり、瓦葺きの建物は検出できず、掘立柱式建物跡の柱穴内にも白鳳期瓦が埋っているものがあったことにより、7世記後半代以前の建物が南にも広がることが確認されたのである。先の記述と関連するが、官衙における瓦の出土も官衙性格の1条件であるらしい。

瓦の種類については、詳しい分析をしていないのであるが、軒丸瓦は複弁蓮華文で、平瓦は均正唐草文・重孤文で、重孤文は川原寺式（ただし、顎（ガク）のつくり方は別）である。いずれも僅かな出土であり、セットは明瞭ではないが、重孤文軒平瓦＝複弁蓮華文軒丸瓦のセットであろう。(均正唐草文軒平瓦は調査中に確認したが整理中に紛れてしまって、報告書に掲載できなかった。別の機会に紹介したい。)

遺物の中で注目されるのは、竈の出土があげられる。小破片で図面に表わせないが、日常品で大きいものである。炊口周辺部と思われる部分の残存であり、荒い刷目調整がみとめられる。年代は7世紀前後に属すと思われる。集落跡あるいは他種遺跡では後期古墳から、しかも群集墳の横穴式石室内副葬品[6]として出土することが多いようである。残存部分が少ないので特長を指摘、具体化しがたいが、貴重な資料となろう。

須恵器では、最初にも記したが、四耳壺と合子が興味を引く。4耳壺は、体部のみの残存で、耳1箇がみられる。胎土は精良で、焼成は堅徴である。本遺物は他遺跡でみると圧倒的に少なく本遺跡が特殊な性格を示す遺構として考えられよう。

一方、合子はやはり残存部分が少ないので明確な特徴を挙げられないが、低く小さい高台から伸びる体部外面下部にはヘラによる刻線が斜目方向に施されている。本例は県内では例をみない。他府県については詳しく調べていないが、やはり僅少であろう。　　（山崎秀二）

7　まとめにかえて

圃場整備事業に伴なう赤野井遺跡は前回の調査と今回の調査で約2万5千平方米の調査を実施したことになる。その結果、野洲川流域で2番目の大複合遺跡であることがわかり、沖積地の開発の歴史を知る上で極めて良好な資料を提供することとなった。服部遺跡では縄文晩期最終末から定着しはじめ、以降、途切れることなく居住を続ける。現在は野洲川によって埋没させられている遺跡の中で赤野井遺跡のように掘立柱式建物が多数検出された遺跡では、服部遺跡、和田遺跡（野洲町）があげられ、旧野洲郡では3遺跡である。もっとも調査の機会がな

く、良好に保存されている遺跡が多いのは好ましい。これら3遺跡の旧郷名を考えてみると、和田遺跡は御上郷・服部遺跡は服部郷・赤野井遺跡は明見郷に該当すると思われる。和田遺跡の場合は隣接地に、郡衙推定地が存在し、性格がやや不鮮明になる。ただし、郡衙推定地の一部調査では、郡衙に確定し得る成果は公表されておらず、果して郡衙となり得るかどうか。郡衙とされても遺構の年代から野洲北郡の役所なのであろうか。和田遺跡も年代的には平安時代の遺構が多く、前期庄園の衰退する時期に近い。

服部遺跡は奈良時代のⅠ群建物と平安時代Ⅱ群建物があり、奈良、平安時代の移行期に条里制地割の施行があり、周辺の大改造とともに住宅の建てかえ等も行なわれ、1種の計画的な建物配置をとるようになった。その性格は大安寺の懇田の管理者の集落を琵琶湖畔の物資の集積を兼ねた半官的集落ではなかったかと考えられる。一方、赤野井遺跡での、総数80棟の建物についてはどうなのであろうか。前回の調査では屯倉の成立と関連し、歴史時代には郷役所（末端官衙）から、庄園の建物に変化してゆくのではないかと考えた。この考えに依る根拠は地割の残存状態、建物の方位と年代（6世紀後半～10世紀）などである。この根拠は今回の調査においてもかわることはなく、更に強固になったと思う。つまり，K地区の建物に奈良時代前期の瓦が柱穴埋め土に入り込み、7世紀代の建物の存在を明確にしたし、別の柱穴では6世紀後半の建物を考えさせた。これらから、6世紀後半代からの掘立柱式建物（倉庫ではない）をもつ遺跡のないことから特殊な（屯倉）性格を考えたのであった。今次では白鳳期（天智朝）の瓦の出土から湖南には少ない瓦の確認を得ることができた。このことは、大津北郊（大友郷)に所在する天智朝期の寺院址と関係が深く、成立したものと考えられる。今、この期の瓦を出土する遺跡を大津北郊以外で掲げてみる余裕がないが決して、氏寺の菩提寺というだけでなく、近江朝との関連で成立する寺院なのではなかろうか。赤野井遺跡の瓦の出土は遺構が直接検出されなかった点で決め手を欠くが、寺院址か、官衙の瓦葺き建物を推定できるであろう。なお、参考の資料として、野洲川現南流以南の瓦出土遺跡を挙げると、欲賀町欲賀寺遺跡（南滋賀廃寺、穴太廃寺など大津北郊の廃寺で出土する方形瓦が出土)、益須寺遺跡（昭和48年に調査、持統紀にみられる益須寺と推定され、同期の瓦を出土)、服部遺跡（白鳳期の瓦が数点出土、近くの神社に礎石と思われる石材がある)。播磨田東遺跡（昭和52年に守山市教委が調査し、白鳳から奈良前期の瓦が出土）がある。これらの遺跡は旧野洲郡内7郷の中に6遺跡の瓦出土地があることを示し、数で割ると言わば一郷一寺ということができる。しかし、具体的な建物の規模、構造は一例も明らかでなく今1つ明らかにし得ない。

この他、今回の調査では東海地方からの搬入品であるS字状口縁甕1点や、庄内式土器3点、琴状木製品がある。S字状口縁甕は纒向遺跡⑦でⅢ式と呼ばれる土器に類例し、近江の土器では、図版㉓と並行する期に求めることができると思われる。庄内式土器は野洲川流域で3例目で、貴重な資料を追加した。琴状木製品の出土は県内で3例目で、県内第1号の服部遺跡の例とは異なり、新旭町森浜の例と似た製品である。琴状木製品については兼康保明氏が『月刊文化財169号』に詳しく説明されているが、赤野井遺跡の出土は紹介された直後であり、時期も森浜例に近く、服部遺跡よりも古い。出土例がその出土状態がまちまちであるため、どのような場所で、どのように使用したのか、またどのように埋没したのかが不鮮明であるが、唯一、服部遺跡の琴だけが明らかにしている。赤野井遺跡では、古墳時代布留式並行期の溝に埋没しており、また古墳や古墳の残がいも検出されなかったので、葬送時に使われたものが埋没したとは言えず、不時に溝に没したものと考えられるが、日常の生活の中で、楽器として使用されていたものであろうと考えるのは早計であろうか。

以上のように、赤野井遺跡は境川の支流の微高地（自然堤防）上に立地した弥生前期から平安時代にわたる長期間の大複合遺跡であることがわかり、周辺の遺跡と深い関わりをもって成立、存続していることがわかった。今、その大半が圃場整備事業のため破壊されてしまったが、一部はなお良好に保存されている。調査の成果とともに今後、保存に努めねばならない貴重な遺跡であることを心に念じ、まとめとする。（山崎秀二）

調査の成果

1、E地区の調査で遺跡の東限が確認され、旧来の道路から1町である。

1、掘立柱式建物は今回の調査で36棟が確認された。

1、遺構は弥生時代前期から平安時代にわたる複合遺跡である。

1、遺物では弥生時代前期新段階の土器が新たに確認され遺構の存在を予想させた他、古墳時代の遺物も多く伊勢湾地方のS字状口縁の甕が出土した。

1、白鳳～奈良時代前期の瓦も多く出土し、近隣に瓦葺き建物の存在を予想させる。

1、木製品の中に琴状木製品が出土した。

註① 昭和44年『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

② 昭和49年『滋賀県文化財調査年報昭和49年度』滋賀県教育委員会

③ 昭和53年『文化財だより9号』所収本田修平他滋賀県文化財保護協会

④ 昭和53年『久野部遺跡－十ヶ坪』所収　滋賀県教育委員会

⑤ 昭和30年　『弥生式土器集成』小林行雄他

⑥ 副葬品としてはほとんどミニチュアで、大津北郊の古墳に多い。

⑦ 昭和52年『纒向』橿原考古学研究所編

第13章　高月町井口遺跡

第1図　遺跡位置図　(●▨ 古墳及び古墳群　○ 集落跡)

1．井口遺跡　2．保延寺大海道遺跡　3．柏原遺跡　4．渡岸寺遺跡　5．玉作遺跡　6．唐川遺跡　7．重則遺跡
8．熊野遺跡　9．円通寺遺跡　10．里の内遺跡　11．津里遺跡

第２図　発掘地区位置図及び周辺地形図

1 はじめに（第1図・第2図）

本報告書は、昭和52年度に実施したほ場整備事業に伴う井口遺跡の発掘調査記録である。井口遺跡は、伊香郡高月町井口地先にあって、現在の井口集落の西側で、南北約1.1km、東西約400mにわたる広大な遺跡である。昭和51年度には、やはりほ場整備事業に伴い、遺跡南半分の試掘及び発掘調査を実施し、7世紀後半から8世紀にかけての竪穴式住居跡群、8世紀末から9世紀にかけての掘立柱建物跡群、8世紀前半の瓦溜り、11世紀の祭祀関係遺構等多様な遺構群を検出している。昭和52年度には、遺跡の北半分についてもほ場整備事業が継続実施されることになり、国庫補助金を得て実施した試掘調査の結果をもとに、遺構保存のできない排水路計画部分及び切土による田面の切り下げ部分の発掘調査を実施することにした。

本調査には、滋賀県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘が指導にあたり、また、調査員、調査補助員として下記の人々の参加を得た。

調査員　林　純（奈良大学学生）

調査補助員　阪口勝彦、川上真成、藤村善嗣、上羽基之、宮崎雅美、山岡一郎、吉元達成、小牧正明、斉藤和弘、丸岡一成、赤坂博之、北川禎之、橋田祐子、尾崎章子、田中聡一、石本好典、岡井誠、加藤栄司、野口千栄美、藤田早苗、芳村高史、飯野清士、（以上京都産業大学考古学クラブ）

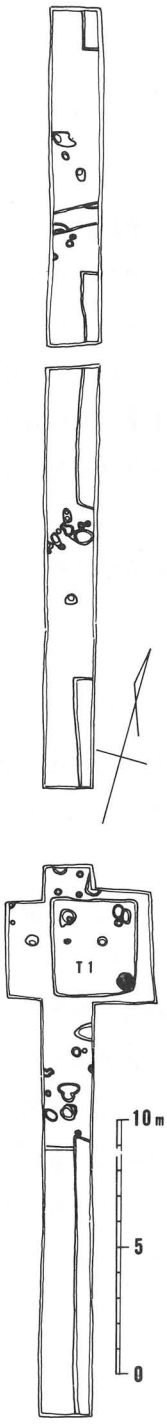
また、調査にあたっては、高月町教育委員会、地元井口区の方々の御援助をいただいた。ここに記して謝意を表します。

本報告書は、昭和51年度に実施した同じ井口遺跡の北半分の調査記録であるため、遺跡の位置及び地理的、歴史的環境等については、昭和51年度分の『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』に譲り、ここでは省略する。また、試掘調査の段階で、水田の地割りに応じて、便宜上A～Yの25地区に区割りしたが、以下に記す地区名はその地区内に係る排水路計画用地及び切土計画部分を指す。本文では、1．調査結果として、各地区毎に遺構の分布状況を説明し、次いで、2．遺構、3．遺物、4．年代、5．考察の順で記すが、2．遺構の項では竪穴式住居跡をT、掘立柱建物跡をH、溝跡をM、大小の土壙や井戸跡をPであらわし、地区名をそれぞれに冠した（たとえば、X地区の1号竪穴式住居跡はXT1とあらわす）。

2 調査結果

(イ) M 地 区（第3図）

M地区は南北に走る排水路計画部分で、幅2m、長さ55mの範囲で発掘調査を実施した。ここでは、竪穴式住居跡1棟と若干のピットを検出したにとどまった。竪穴式住居跡はカマドを持つもので、南北軸線はN16度Wにある。カマド内の堆積土中及びその周辺より土師器の甕、須恵器の埦、蓋等が出土している。ピット群は住居跡周辺に集中し、内7基が住居跡を切り込んでいる。柱痕の認められるものが1.7mの間隔で2基検出できたが、調査範囲では、これと並んで建物跡を思わせる配列を持つピットは検出できなかった。



第３図
M地区遺構分布図

㈡　P　地　区（第４図）

P地区はやはり排水路計画部分で、M地区の南側延長線上にある。長さ100m に及ぶ範囲を発掘したが、北側40m程の間では若干の不整形なピットを検出したのにとどまり、遺構は南半分に集中して分布している。ここでは、竪穴式住居跡３棟（ＰＴ１～３ ）、掘立柱建物跡４棟（ＰＨ１～４）、溝状遺構１条、井戸跡３基（PBP２～4）、大型土壙１基（PBP１）、その他多数のピットを検出した。

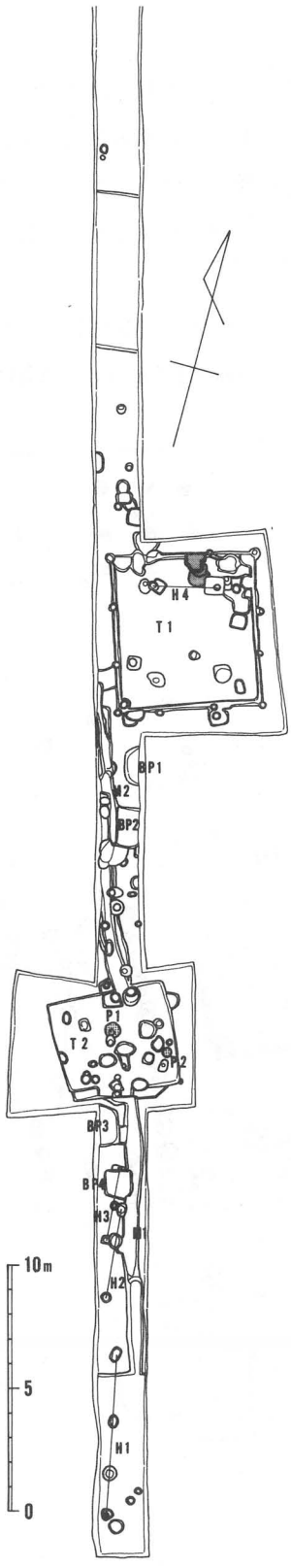
竪穴式住居跡はＰＴ１とＰＴ２が約11ｍの間隔にあり、南北軸線がＰＴ１でN17度30分W、ＰＴ２でN28度Wと約11度の開きがある。ＰＴ３はＰＴ２により切られ、南側壁がわずかに遺存していた。ＰＴ１は 6.2～6.45m×5.8～5.9mとやや南北に長く、主柱穴４本の他に、側壁に沿った支柱穴を12本持っており、特異な構造を示すものである。北側壁にカマドがあり、土師器の甕、須恵器の平瓶、蓋、杯等が出土している。ＰＴ２はカマドを持たず、焼土の入ったピットを２基持ったもので、出土遺物も小型の土師器甕と数個の河原石があり、他地区で検出しているものと若干様相を異にしている。埋土中からは多量の灰釉陶器、須恵器等が出土している。

井戸跡は、ＰＴ２の南側に約１ｍの間隔を持って２基（PBP３、PBP４）、ＰＴ１の南側約４ｍのところに１基(PBP１)があり、いずれも、ほぼ同じ方向にある。遺物はPBP４からのみ出土しており、出土した須恵器、土師器、灰釉陶器等はＰＴ３の年代に近似している。又、PBP１はその西辺より北方へのびる溝が走る。溝の方向はＰＴ１の軸線方向に一致し、又その西側壁より約70cm程西側を通っている。

掘立柱建物跡はＰＴ２の南側で３基とＰＴ１に重復しものとを検出している。いずれも建物として完結していないので全体規模は不明である。ＰＨ２とＰＨ３は切り合いがあり、ＰＨ３が先行し、又、ＰＨ３はＰＰ１に切られている。ＰＨ４はＰＴ１を切り込んでいる。方向はＰＨ２とＰＨ３がＮ４度Wで一致する。他については、ＰＨ１がN10度W、ＰＨ４がN12度30分Wで、一致しない。溝状遺構は、ＰＴ２、ＰＴ３、ＰＨ２、ＰＢＰ４、ＰＢＰ２、その他多数のピットを切り込んで、ほぼ北北西－東南東方向に走っている。南北の高低差はほとんどない。その他、多数のピットを検出しているが規則的な配列を示すものはない。ただ、ＰＴ１とＰＢＰ２の中間で径16ｍの大型土壙（ＰＢＰ１）があり、土器類の他に灰、木炭、焼土等が認められた。

㈢　W　地　区（第５図）

W地区を東西に走る排水路計画部分である。長さ約70mにわたって完掘したが、遺構は西側に集中している。ここでは竪穴式住居跡８棟（ＷＴ１～ＷＴ８）、掘立柱建物跡４棟（ＷＨ１～ＷＨ４）、大小の若干のピットを検出した。竪穴式住居跡で完掘したものは５棟（ＷＴ１～ＷＴ５）である。ＷＴ１～３は重複し、ＷＴ３→ＷＴ２→ＷＴ１と新しくなる。WT5とWT6との間にも切り合いがあり、ＷＴ５が先行している。軸線の方向はＷＴ１、ＷＴ２、ＷＴ４がＮ５度～５度30分Wとほぼ一致し、ＷＴ３、ＷＴ５がN10度～13度Wの間にあるが、見かけ上はさほど大差はない。ＷＴ１、ＷＴ２は切り合いのため欠失しているが、他にはいずれもカマドが認められる。ＷＴ



第４図　Ｐ地区遺構分布図

１にはカマドの焚口に石材を使用し、石材に横架して二つ重ねの土師器の長胴甕が、又、カマドの南横より球形に近い広口の土師器甕が正位置で出土した。ＷＴ４ではカマドの南横に貯蔵穴状の正円形のピットがあり、鉢型品・土師器が出土している。ＷＴ４、ＷＴ５ともカマドは痕跡程度の遺存状況であったが、その附近より長胴甕が出土している。完掘した５基にはいずれも柱穴痕を認めることができなかった。　掘立柱建物跡は４棟検出しているが、ＷＨ２は２間×5間(4.75～4.9ｍ×8.3～8.75ｍ）の南北棟で、方形の柱穴掘り方を示し、最も規模が大きい。ＷＨ１とＷＨ４はともに全体規模は明らかでないが、円形の掘り方を持っていて柱規模も小さい。特に、ＷＨ４は束柱を持っていて、２間×２間の倉庫の可能性が強い。ＷＨ３はＷＨ２の柱穴によって切り込まれている。ＷＨ２同様方形の柱穴掘り方である。ＷＨ1・2・4は軸線がＮ４度Ｗにあり、同時期の建物である可能性がある。また、ＷＨ２、ＷＨ４ともにＷＴ５を切り込んでおり、竪穴式住居跡より後出である。

その他、焼土、炭化物を含んだ大型の土壙を２カ所で検出している。WBP1はＷＴ５より西 4.5ｍのところにあり、WBP3は、ＷＴ１より東方20ｍのとこにあって、ともに不整形である。WBP3からは、比較的良好な状態で小型の土師器甕が出土している。

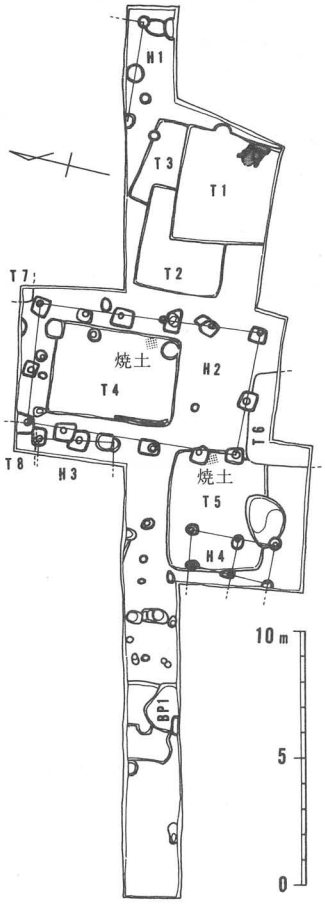
なお、ＷＨ１とWBP3との間、および、WBP3以東では遺構の分布は認められなかった。

㈡　Ｘ　地　区（第６図）

Ｗ地区の東隣りに当り、ほ場整備工事により、遺構保存が困難であるため東西24ｍ、南北54ｍの範囲の完掘をはかった。

ここでは、竪穴式住居跡７棟、掘立柱建物跡７棟、大型の土壙５基、その他多数の小ピット検出した。

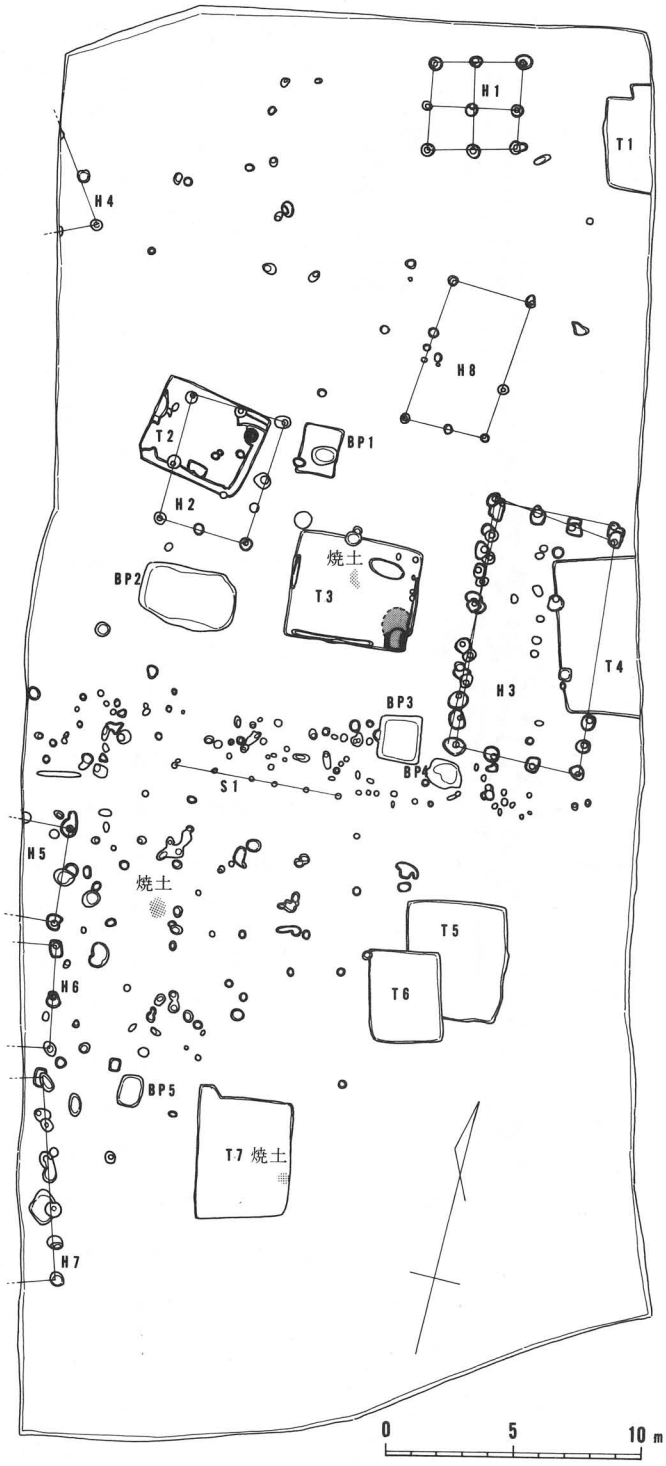
竪穴式住居跡はＸＴ５とＸＴ６とに切り合い関係がある以外、独立している。ＸＴ１、ＸＴ４～７の５棟は軸線がＮ10度～14度Ｗにあって、ほぼ、同じ方向に向いている。ＸＴ２はＮ10度Ｅ、ＸＴ３はＮ４度50分Ｗでやや方向を異にしている。方位の同じＸＴ１、ＸＴ４～７の５棟は約14ｍ、８ｍ、６ｍの間隔をとって、４分の１円弧状に並ぶ。方位の異るＸＴ２、ＸＴ３の２棟はその円弧の内側に位置する。掘立柱建物跡では規模の知れるものは３棟のみで、他は一辺あるいは２辺の柱通りが知れるのみである。このうち、ＸＨ２はＸＴ２を切り、ＸＨ３はＸＴ４



第５図　Ｗ地区遺構分布図

によって切られている。XH1は2間×2間で束柱を持ち、倉庫跡と思われるものである。ＸＨ２は２間×２間で束柱はない。５ｍ×3.5~3.8ｍと南北にやや細長いが、倉庫跡の可能性が強い。ＸＨ４は３間×９間の南北棟で大型の建物である。ＸＨ４～ＸＨ６は２間×ｎ、ＸＨ７は５間×ｎで全体規模は明瞭でない。これらすべて、柱穴掘方は円形で、柱規模は径20㎝前後と小さい。また、軸線方位はＮ３度40分～22度30分Ｗ及びＮ３度Ｅとそのずれが大きい。

その他大小多数のピットを検出しているが、これらピット相互の関連は明確でない。ただ、全体的な分布は、XT２～ＸＴ７に囲まれる内側に集中している点に特徴がある。また、ピット群のうち、1.9m×1.5m及び、(XBP1)1.7m×1.6m（ＸＢＰ3）の長方形のものが２基みられる。これらの軸線方位はＸＴ３に近似し、また、ＸＴ３に対し、北西コーナーより北 2.2m及び南東コーナーより南 2.9ｍの位置にあって、ＸＴ３を中心に対称的な位置にある。北側のものからは焼土、炭化物等、南のものから須恵器埦がほぼ完形に近い状態で出土している。さらに、ＸＴ３の西側２ｍのところには、長軸長3.8m、短軸長2.3ｍのダ円形の大型土壙（ＸＢＰ２）がある。この長軸の方向は、やはり、ＸＴ３の南北軸に直交している。なお、遺物等の包含は皆無であった。



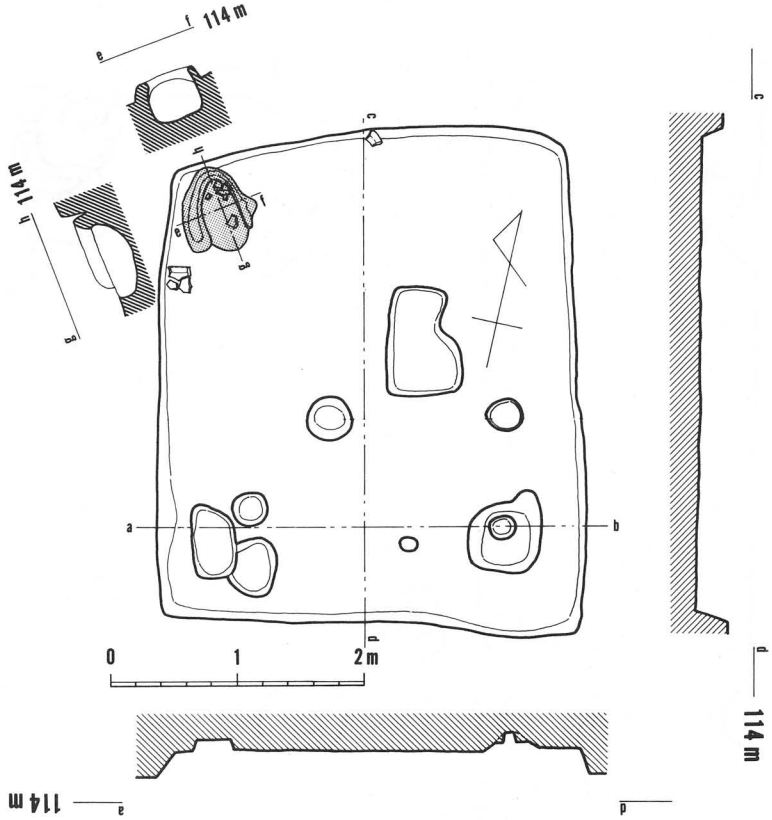
第６図　Ｘ地区遺構分布図

3　遺　　構

(イ)　竪穴式住居跡

ⅰ　M地区

MT1（第7図）南北長3.55～4.2m、東西長3.1～3.4mとやや南北に長い方形プランを持つ。南東コーナーに、焚口を住居跡中心部に向けたカマドが付く。カマドは馬蹄形に焼土塊が残り、舟底状の凹みを持つ。周溝、柱痕は認められなかった。遺物は、カマド内堆積土中及びその北側より、土師器の長胴甕、須恵器の宝珠ツマミを持つ小型の蓋、高台付の椀等が出土している。なお住居跡の南北軸はN16度Wにある。



第7図　M地区TI実測図

ⅱ　P地区

PT1（第8図）南北6.2～6.45m、東西5.8～5.9mの規模を持ち、南北軸はN17度40分Wにある。カマドは北壁に接して、その中央よりやや東寄りに設けられている。カマドは、60cm×80cm程の大きさの落ち込みとその東及び西辺に遺存していた焼土塊、及び、その南側に焼土、炭、灰の溜りがあることによって認められた。主柱は4本あり、北側を底辺とした台形状に配されている。また、住居跡の4つのコーナー部分及び、各辺に2本ずつ、計12本の支柱が配されている。支柱の掘り方は径18～30cmの小規模なものである。住居跡各側壁に沿って溝がめぐる。幅約20cm、深さ約10cmで、落差はない。この周溝はカマド部分でその落ち込みに続く。

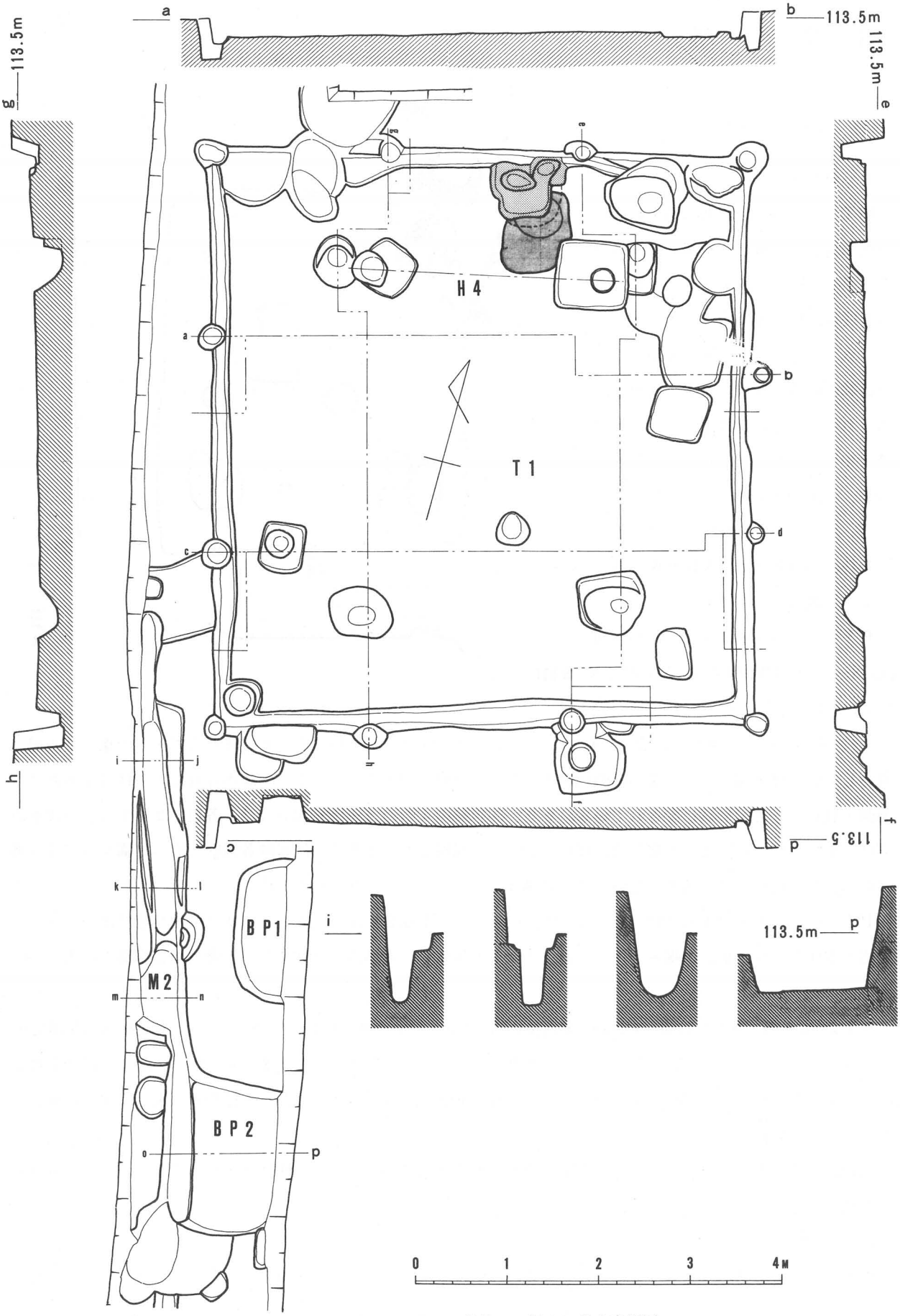
PT1の時代を決定する遺物としては、西側に沿って、平瓶2点が正位置で、南北に縦列状態で出土した。又、北辺の支柱のうち、東側の掘り方内から蓋、カマドの西側で、周溝内より杯身及び土師器の長胴甕が出土している。

PT2（第9図）南北長3.65～4.25m、東西長4.53～4.8mとやや東西に長いプランを示す。南北軸線はN28度Wにある。ここではカマドは認められず、別に焼土のみを充填した浅いピット2基があった。一基は住居跡中央よりやや北寄りにあり、径56cm、深さ10cmを計る。他は東壁に沿って南寄りにあり、径40cm、深さ15cmを計る。ともに皿底状の横断面形を持つ。

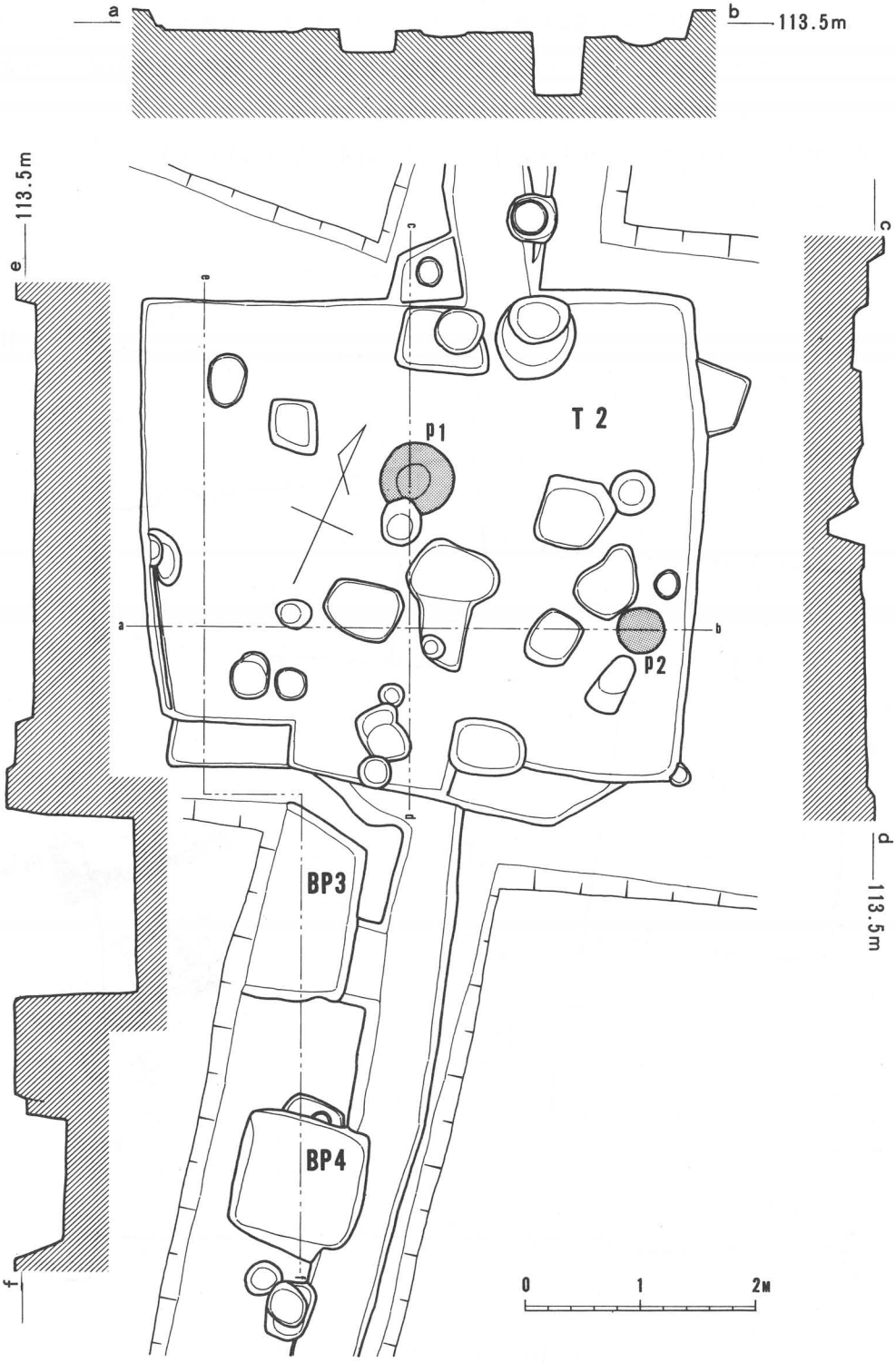
遺物は北側に集中し、小型の土師器の甕が2個体分出土している。また、性格は明らかでないが、自然河原石が数個散在していた。

ⅲ　W地区

WT1（第10図）WT2とWT3を切って構築されている。住居跡の南辺を明らかにすることができなかったが、



第8図　P地区T1、P1、BP2、M2、H4実測図

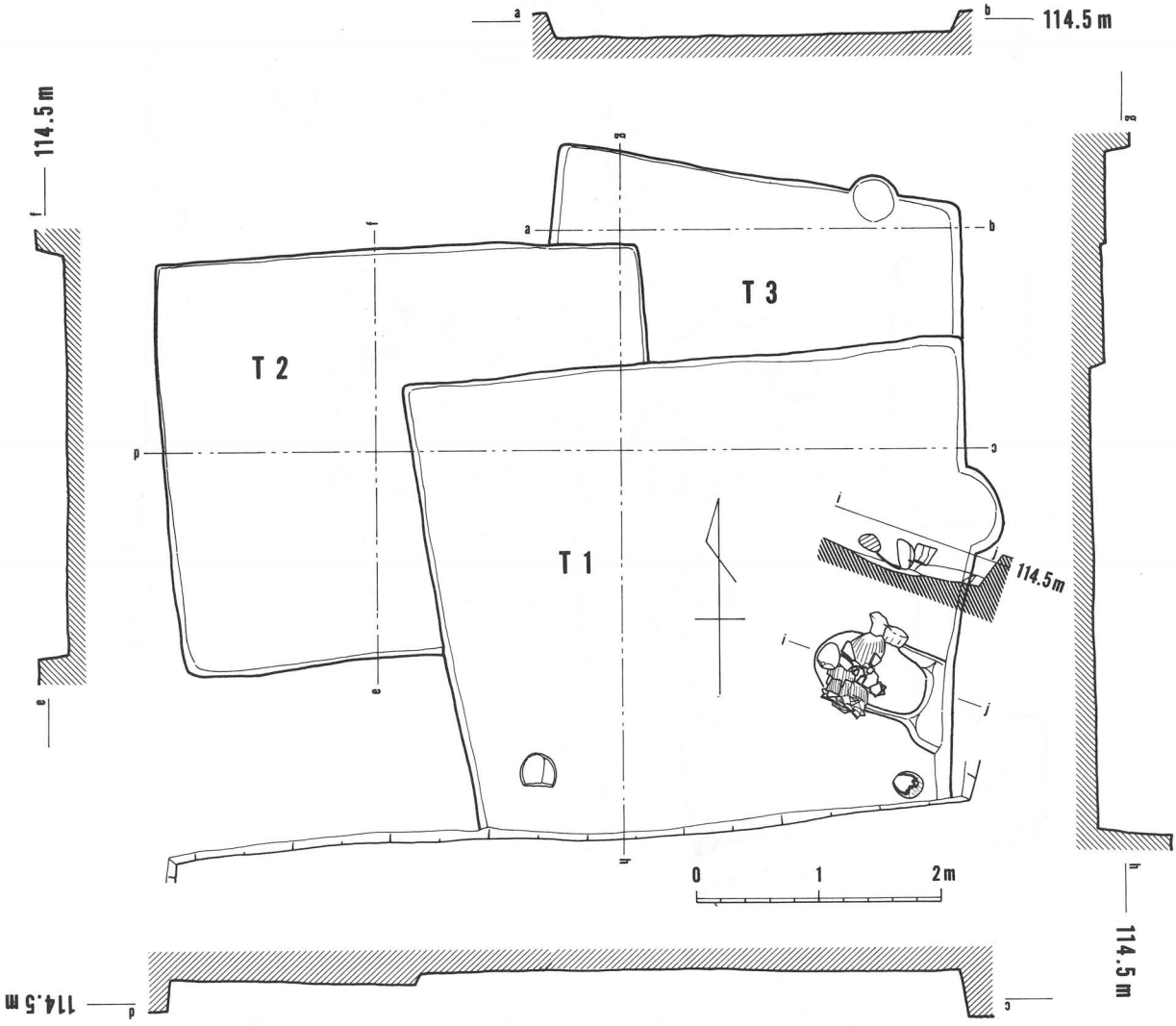


第９図　Ｐ地区Ｔ２、Ｔ３、Ｐ１、Ｐ２、ＢＰ３、ＢＰ４実測図

検出した範囲で東西長3.8～4.6m、南北長は3.8m以上である。南北軸はN5度30分Wにある。カマドは東壁側に設けられている。長さ80cm、幅60cmの大きさで馬蹄形に焼土塊が残り、深さ10cm程凹む。焚口両側には割石を立てておいている。周溝、柱痕は検出することができなかった。

WT1からは、カマド焚口の立て石に横架をせるような状態で、土師器長胴甕2個体が口縁部を南に向けて、入れ子の状態で出土している。また、カマドの南側で、東壁にほぼ接して、球体の土師器甕が正位置で出土している。その他、カマド前面の床面より須恵器高台付埦等が出土している。

WT2（図10） WT1により切られ、WT3を切っている。南東部4分の1が欠失しているが、南北長3.34～



第10図 W地区T1、T2、T3実測図

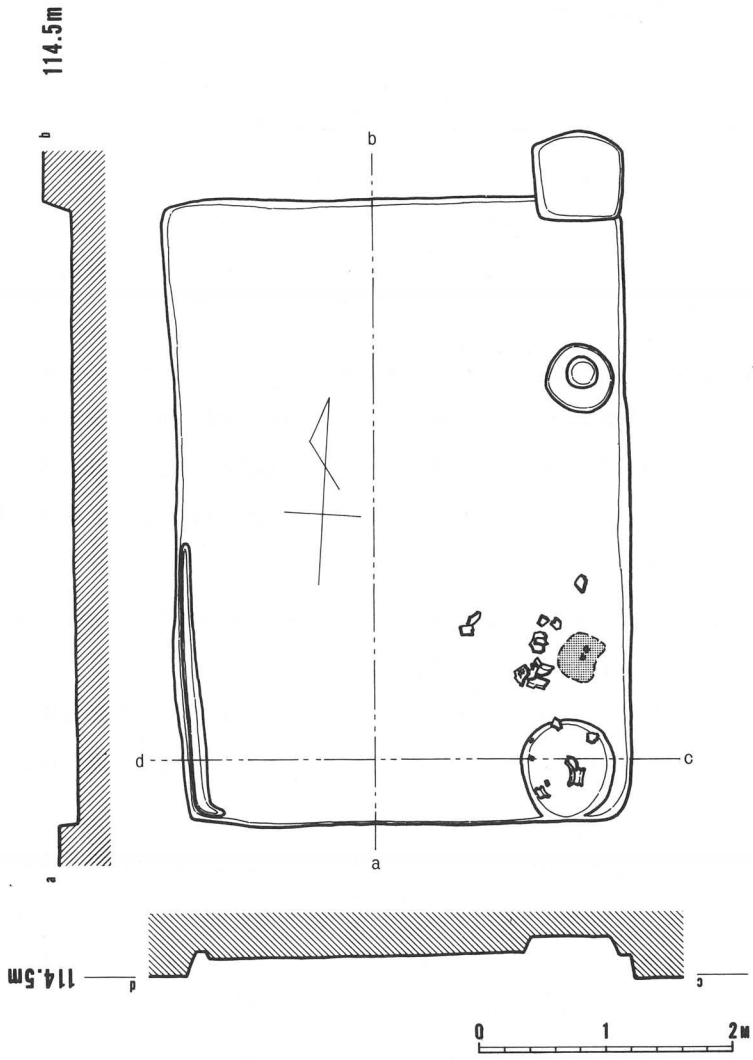
3.4m、東西長3.95mを計ることができ、やや東西に長い住居跡であることがわかる。軸線はN5度Wにあり、WT1とほぼ一致する。遺存部に焼土等を確認できなかったので、カマドはWT1により欠失した部分にあったものと思われる。周溝、柱痕等は認められず、また、遺物も土師器、須恵器の小片が若干出土したのにとどまる。

WT3（第10図） WT1及びWT2により切られ住居跡の北辺部を残すのみである。東西長は3.35mを計り、南N10度Eにあって、他の2棟より東に大きく振れる。

WT4（第11図） 南北長4.87～4.9m、東西長3.5～3.62mを計り、南北に長い平面プランを示す。南北軸はN5度30分Wの方向にあり、WT1、WT2にほぼ一致する。カマドは遺存していなかったが、東壁に沿って南寄りに焼土が散乱しており、その位置を推定することができた。焼土散乱部分の南側、住居跡の南東コーナーには径75～80cmの円形で、深さ15cm程の土壙が認められた。遺物はこの円形土壙と焼土散乱部分に集中している。円形土壙内からは土師器の大鉢、焼土散乱部分からは長胴甕の出土を見ている。

なお、WT4においても柱痕は認められず、周溝も西壁側でその南半部に幅10cm、深さ5cm程の溝が認められたのにとどまった。

WT5（第12図） 南北長3.75～3.95m、東西長4.7～4.75mで、隅丸の長方形プランを呈す。南北軸はN13度Wにある。カマドは遺存しなかったが、東壁中央付近に焼土が散乱し、土師器の長胴甕があった。WT5は他地区と異り、その平面形が隅丸となっているが、住居跡埋土中よりカエリを持つ須恵器杯身等が出土しており、他の住居跡よりやや年代がさかのぼる。また、当住居跡はWH2及びWH3、さらにはWT6によって切られており、この点からも平面形の差が年代差を示している可能性がある。

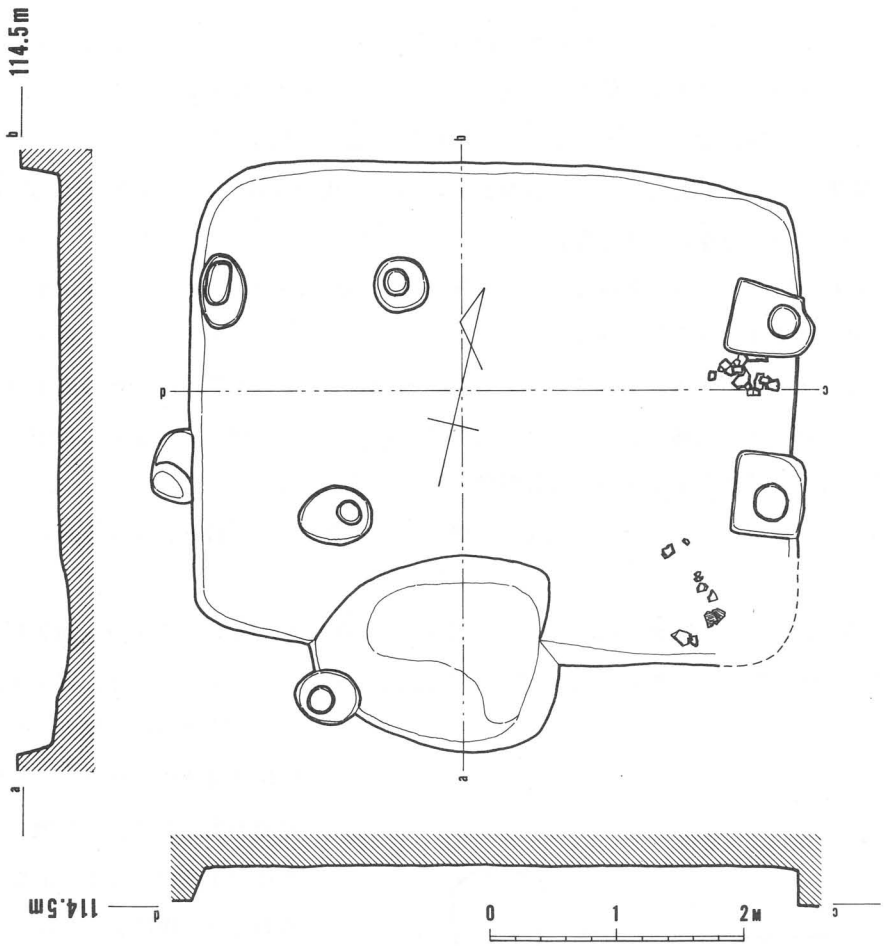


第11図　W地区T4実測図

iv　X地区

XT1（第13図）西側半分を確認している。南北長4.0～4.3m、東西長2m以上。N13度Wに南北軸がある。周溝、柱痕は認められない。また、住居跡の北壁は一部攪乱を受けている。

XT2（第14図）南北長3.55m、東西長4.3mで東西に長い長方形プランを持つ。南北軸はN10度Eにある。カマドはなく、かわりに、住居跡北東コーナー附近に径54cm、深さ約0.5mの円柱状のピットがあり、多量の灰と土師器の細片少量を含んでいた。このピットの北側には、幅28～40cm、高さ10cmを計り、横断面台形状の掘り残し（土壇）があった。ピットを囲むように、長さ1.12mで弧形を描いている。ま



第12図　W地区Ｔ５実測図

た、ピットの部分から東壁及び南壁の２辺に沿って幅36～40cm、深さ10～18cmの溝がめぐっている。柱痕、あるいは西、北側の溝は認められなかった。

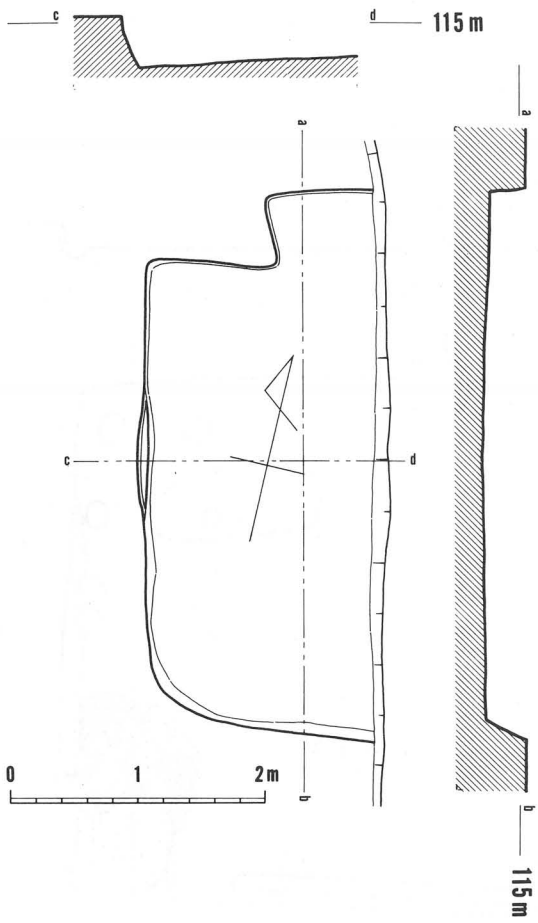
ＸＴ３（第15図）　南北長4.0～4.25m、東西長５m、南北軸線Ｎ４度50分Ｗにある。カマドは住居跡の南東コーナーにある。カマドの焚口は北側に開く。カマド壁の東側は住居跡東壁を約18cm程内側に掘り残し、又南壁は住居跡の南壁を利用している。従って、カマドは、西壁だけを粘土塊で構築している。幅76cm、長さ約75cmを計る。カマド底は約７cm程凹み、焼土が堆積し、その前面には灰及び炭が堆積していた。柱痕は認められず、周溝も北壁側を除く３辺に 1.4～3.25mの長さで一部に遺存していた。

ＸＴ４（第16図）　西側半分を確認した。長北長６～6.3m、東西長3.3m以上、南北軸線Ｎ13度Ｗ。柱痕、周溝はれないが、西壁及び南壁側に、幅８～35cm、高さ５cm程の土壇が認められた。

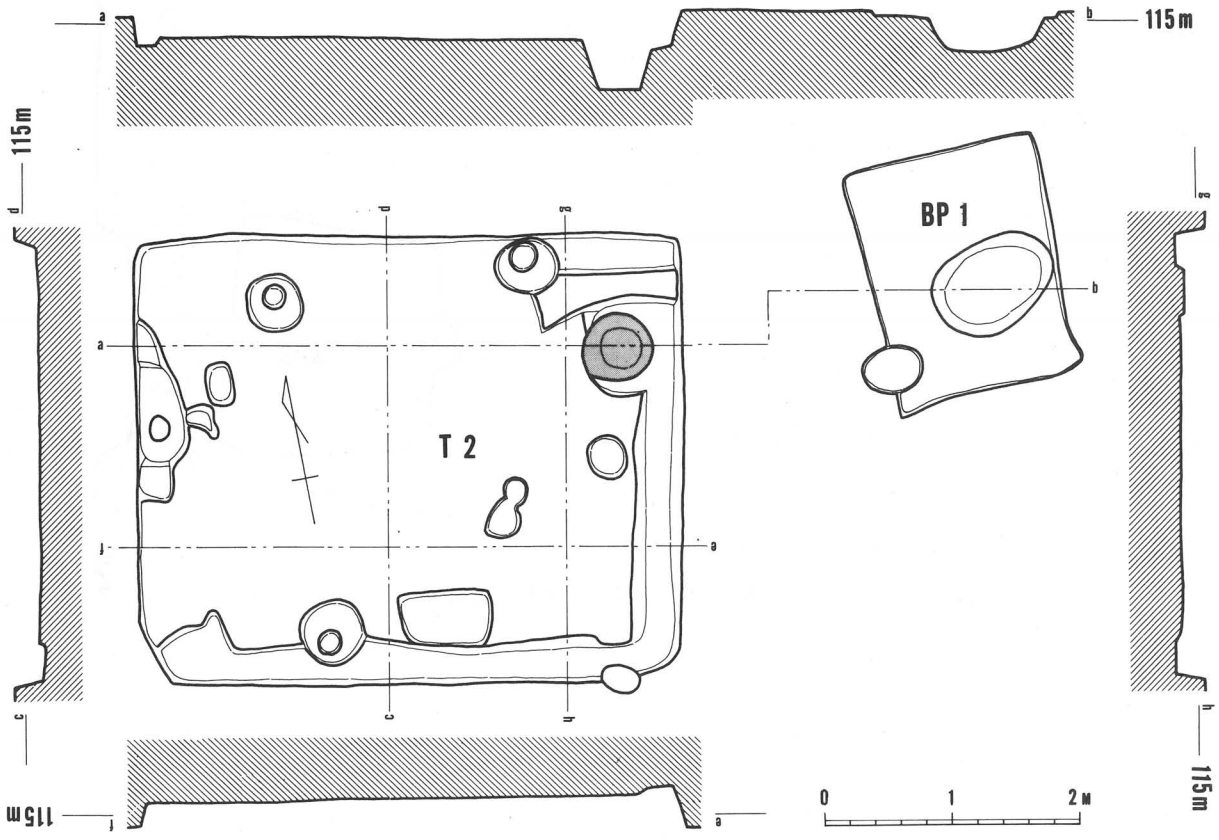
ＸＴ５（第17図）　ＸＴ６によって切られている。南北長4.6m、東西長3.8～3.95m。南北軸はＮ14度45分Ｗにある。遺存状況は不良で、カマド及び、それを示す焼土を認めることができなかった。また、柱痕、周溝も検出できなかった。

ＸＴ６（第17図）　ＸＴ５を切り、南北長3.5～3.6m、東西長2.7～2.85mを計る。南北軸はＮ14度ＷでＸＴ５とほぼ同じである。

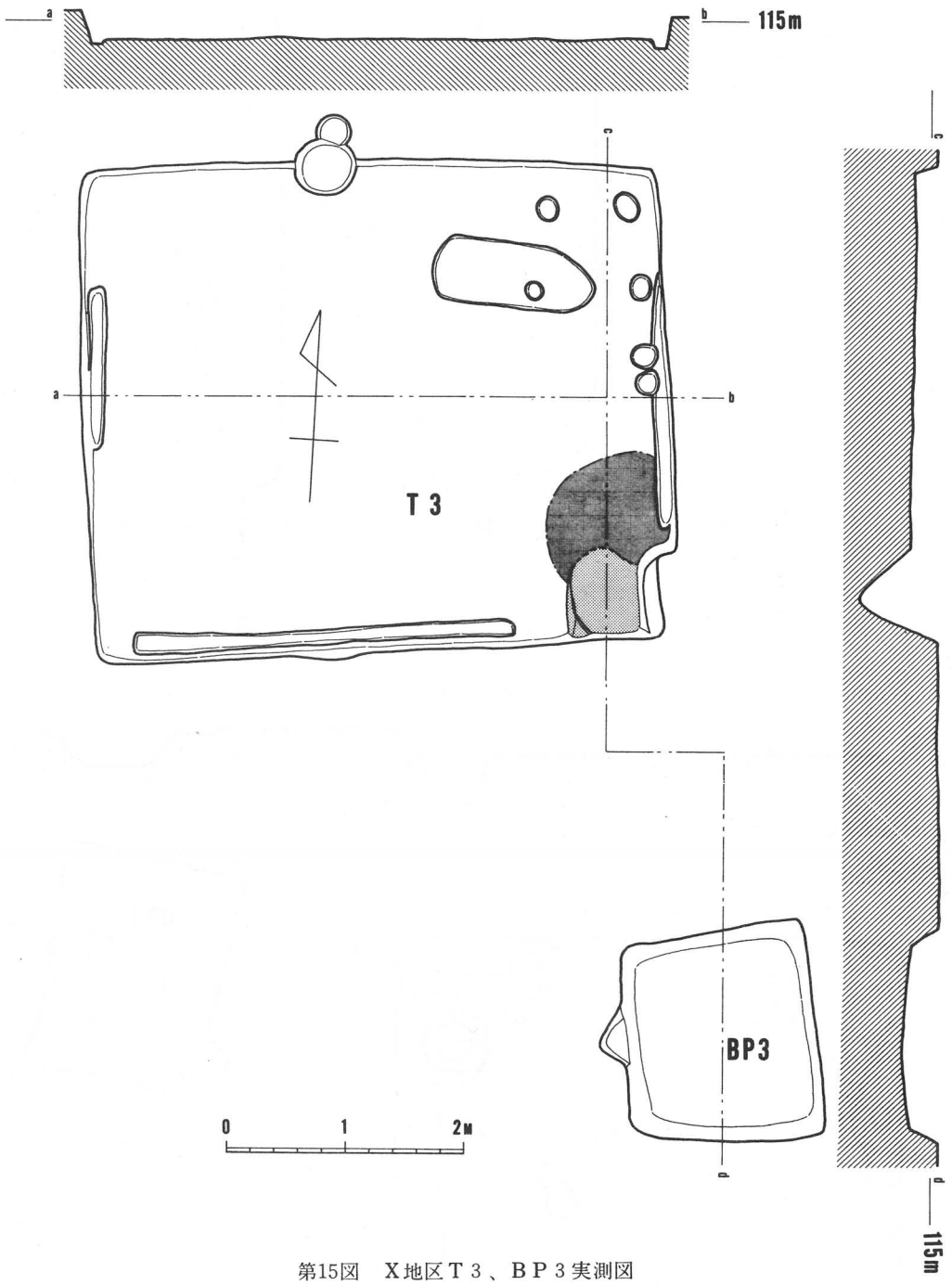
ＸＴ７（第18図）　遺存状態は悪く、住居跡南辺は痕跡程度にしか検出できなかった。南北長4.4～4.7m、東西長3.5～3.75m。南北軸はＮ10度50分Ｗにある。カマドは、東壁に接して南寄りに焼土が散乱しており、この付近にあったものと思われる。この附近からは須恵器の短頸壺、蓋等が出土している。



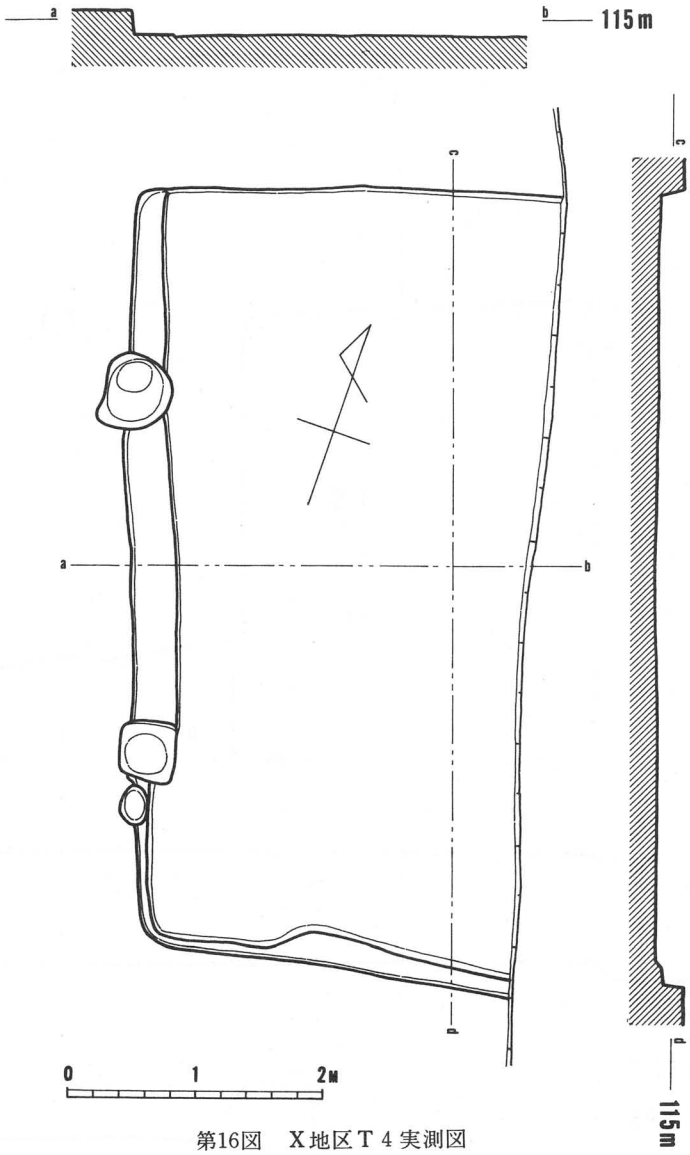
第13図　X地区T１実測図



第14図　X地区T２・BP１実測図



第15図　X地区T３、ＢＰ３実測図



第16図　X地区T４実測図

㈡　掘立柱建物跡

ⅰ　P地区

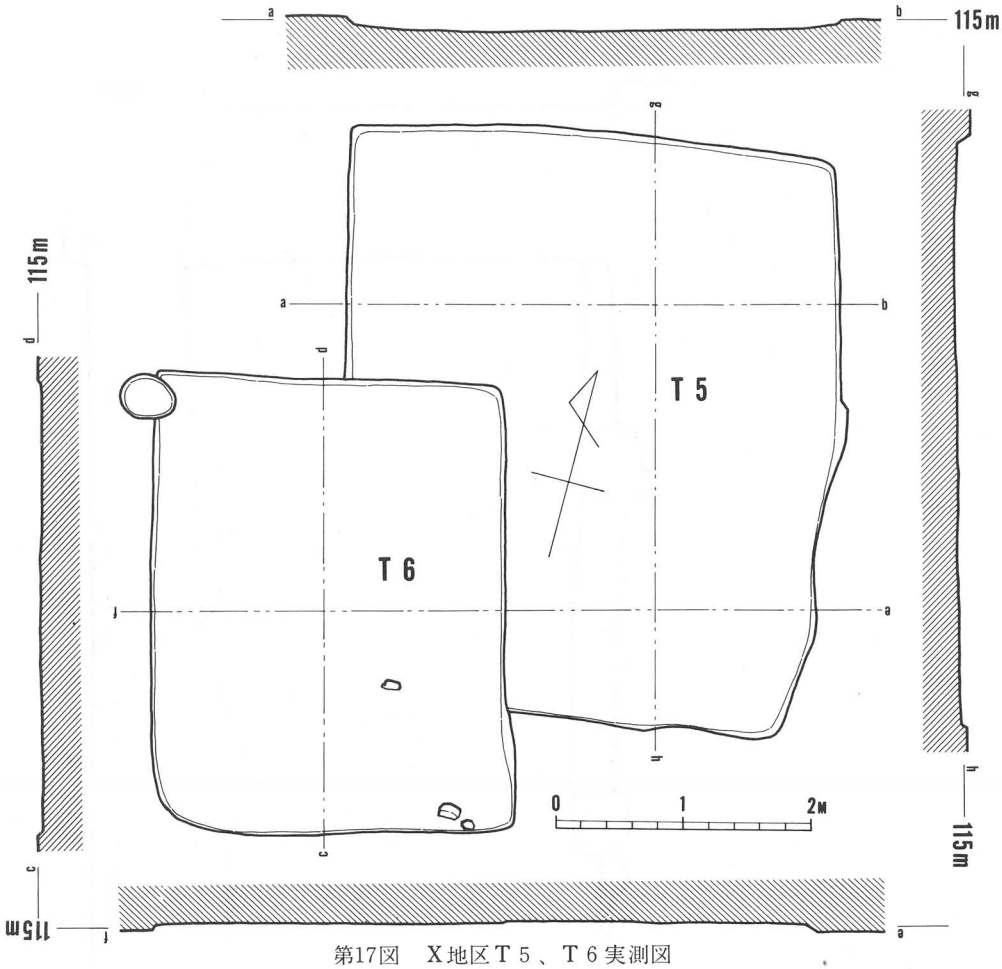
PH1（第19図）　N10度Wの方向に、4基の柱通りが認められる。柱穴は円形及至ダ円形で径12～30cmの規模を計る。柱痕の認められるものでは、柱規模は約10cmと小さい。柱間は南より2.2m×2.1m×2.7mを計る。

PH2（第20図）　N４度30分Wの方向に３基の柱通りを持つ。柱間は南より2.25m×1.35mで不等間隔である。掘り方は径25～53cmで、ほぼ円形を呈す。

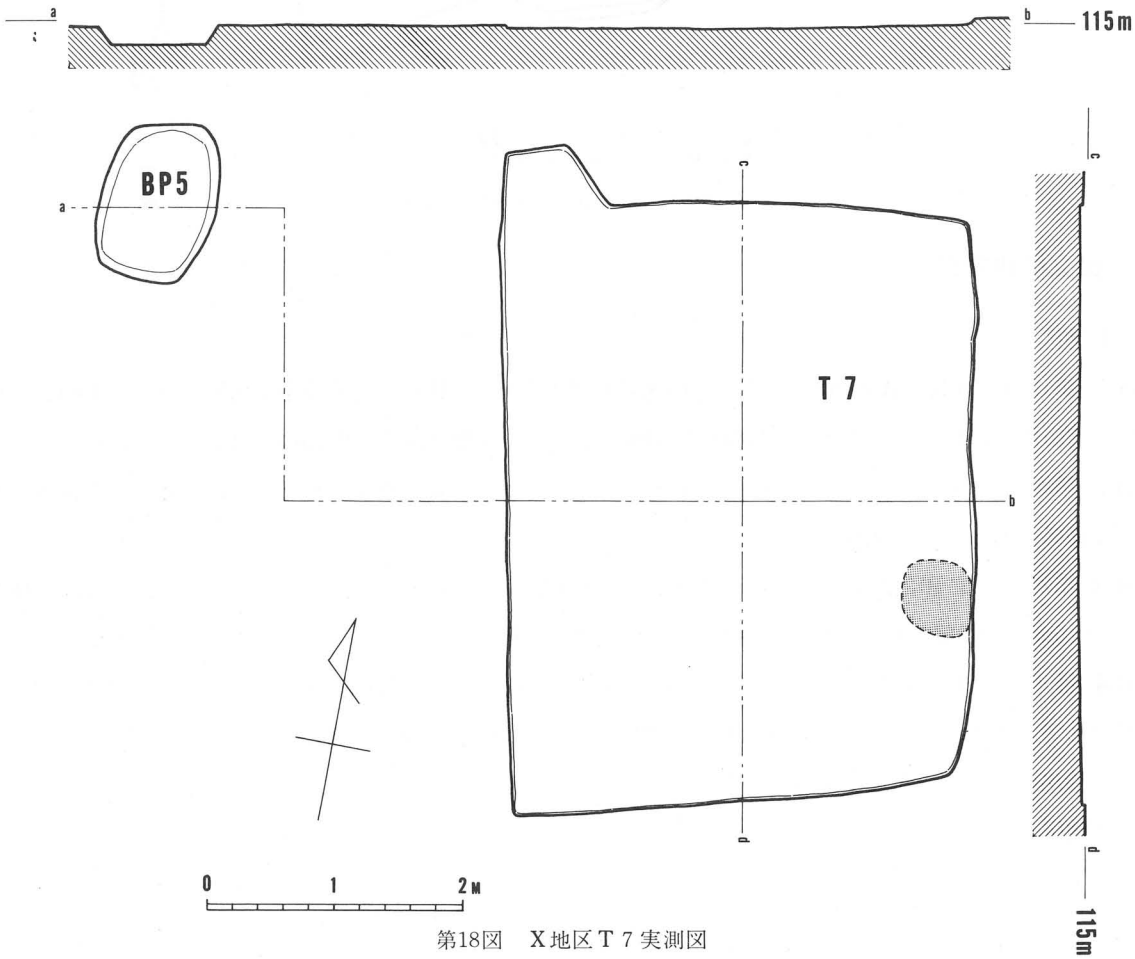
PH3（第20図）　PH２によって切られているがほぼ同じN4度Wの方向に3基の柱通りが認められる。柱間は1.5m×1.5mで等間隔である。掘り方は径27～45cmを計る。PH３は、また、井戸（PP１）にも切られている。

PH4（第８図）　PT１を切り込んでおり、N12度Wの方向に並ぶ柱穴２基を確認している。一辺26～38cmの方形の掘り形で、西側のものには抜き跡がある。北側のものには柱痕が残り、径15cmの柱規模を持っていたことが知れる。検出状況から、北及び東へのびる建物跡と考えられる。

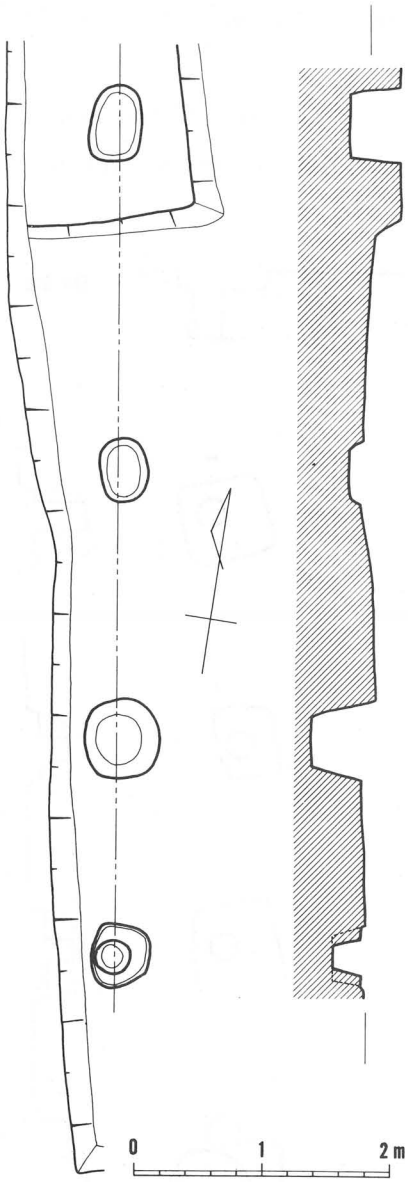
ⅱ　W地区



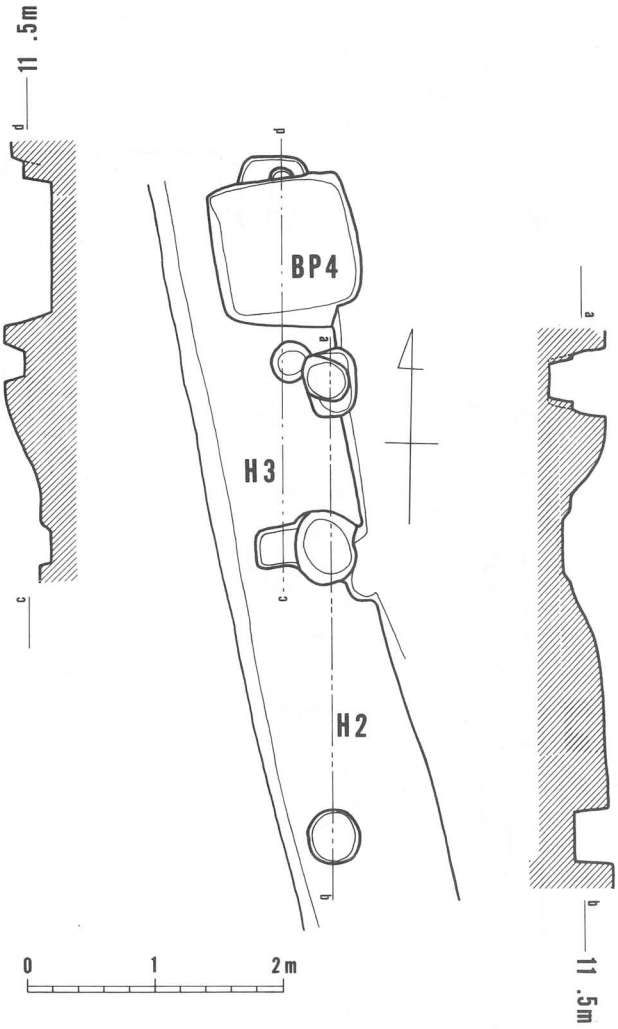
第17図　X地区T５、T６実測図



第18図　X地区T７実測図



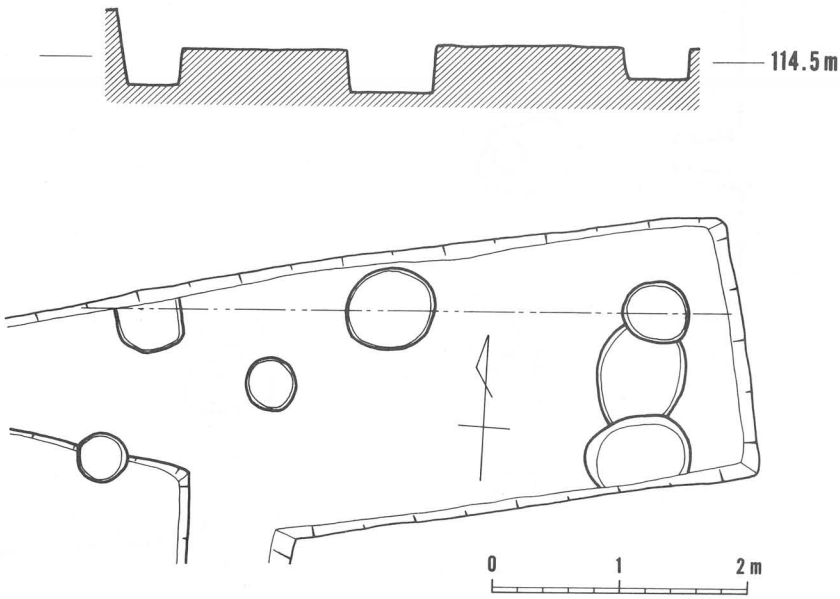
第19図　P地区H１実測図



第20図　P地区H２、H３実測図

WH１（第21図）　N4度Wの方向に並ぶ。柱通りは東より２.１m×２.０mとほぼ等間隔で３基を確認している。径50～75cmの掘り方規模で、柱痕は確認できなかった。検出状態から、北側へのびるものと思われる。

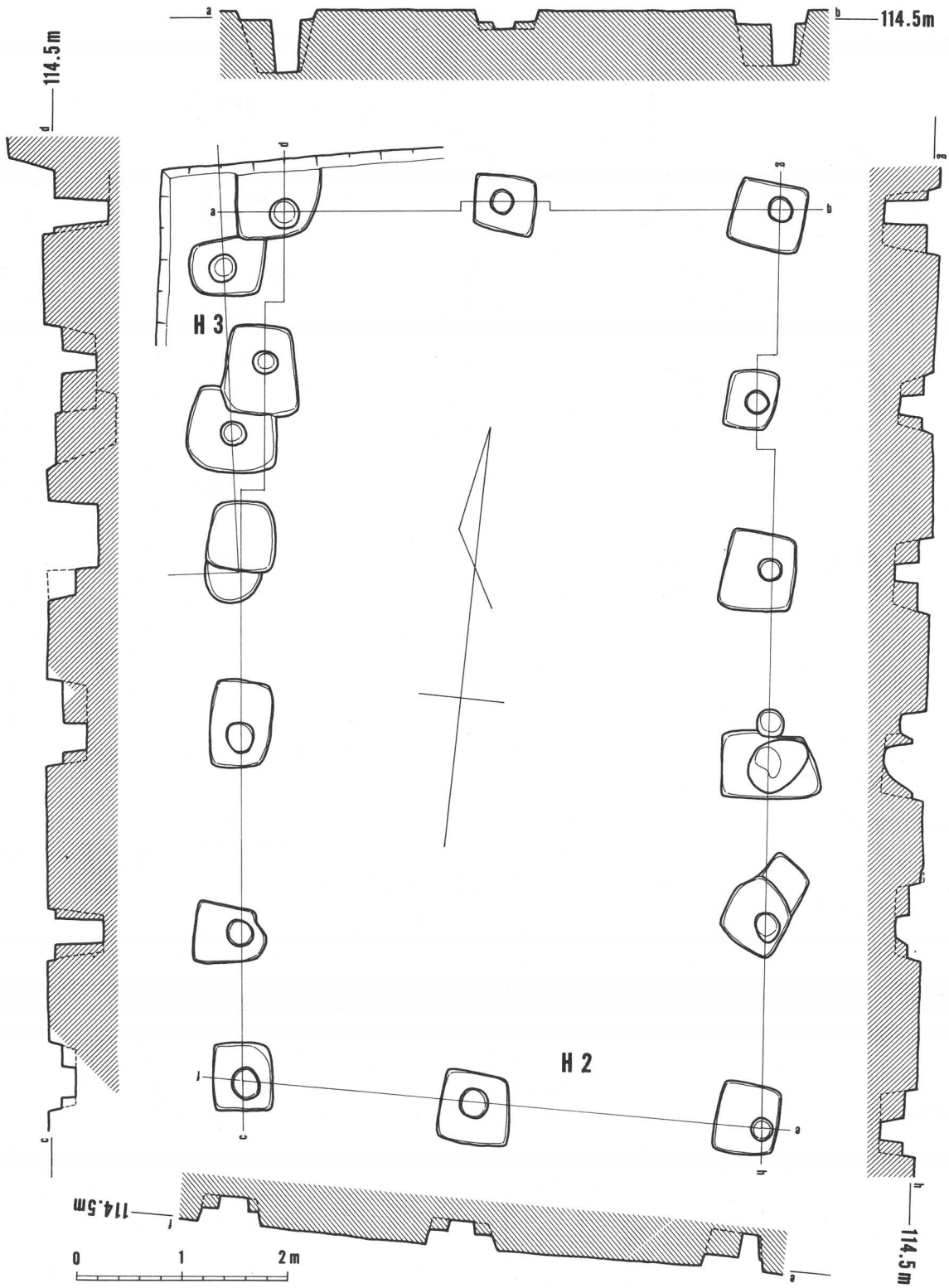
WH２（第22図）　南北8.3～8.75m、東西4.75～4.9mで５間×２間のやや大型の建物跡である。一辺60～70cmの方形の掘り形を持つ。ほとんどに柱痕が残り、



第21図　W地区H１実測図

径22～30cmの柱規模を持つ。柱間は北辺が2.65m×2.07m、南側が2.75m×2.15m、東側が1.95m×1.5m×1.85m×1.6m×1.85mと不等間隔で、柱通りも悪い。およそN4度Wに軸線を持つ。

WH4（第23図）　西側へのびると思われるもので、2間×2間以上（3.35m×1.65m以上）で束柱を持つ。倉庫跡と思われる。WH2と同様、N4度Wの方向に軸線を持つ。径35～50cmの円形及至不整円形の掘り方で、柱痕は径22～27cmの規模を持つ。



第22図　W地区H2、H3実測図

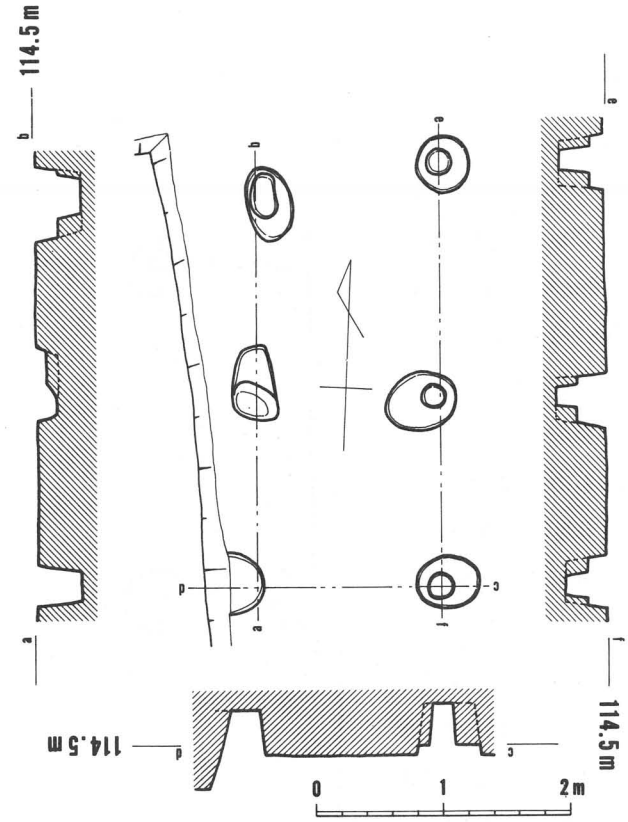
WH3（第22図） WH2によって切られている。N２度30分Wの方向に３基まで確認している。西及至北へ広がるものと思われる。掘り方は、一辺50～80cmの方形のものと径55cmの円形のものとがある。柱痕は径19～30cmを計る。柱間は1.5m×1.85mを計る。

ⅲ　X地区

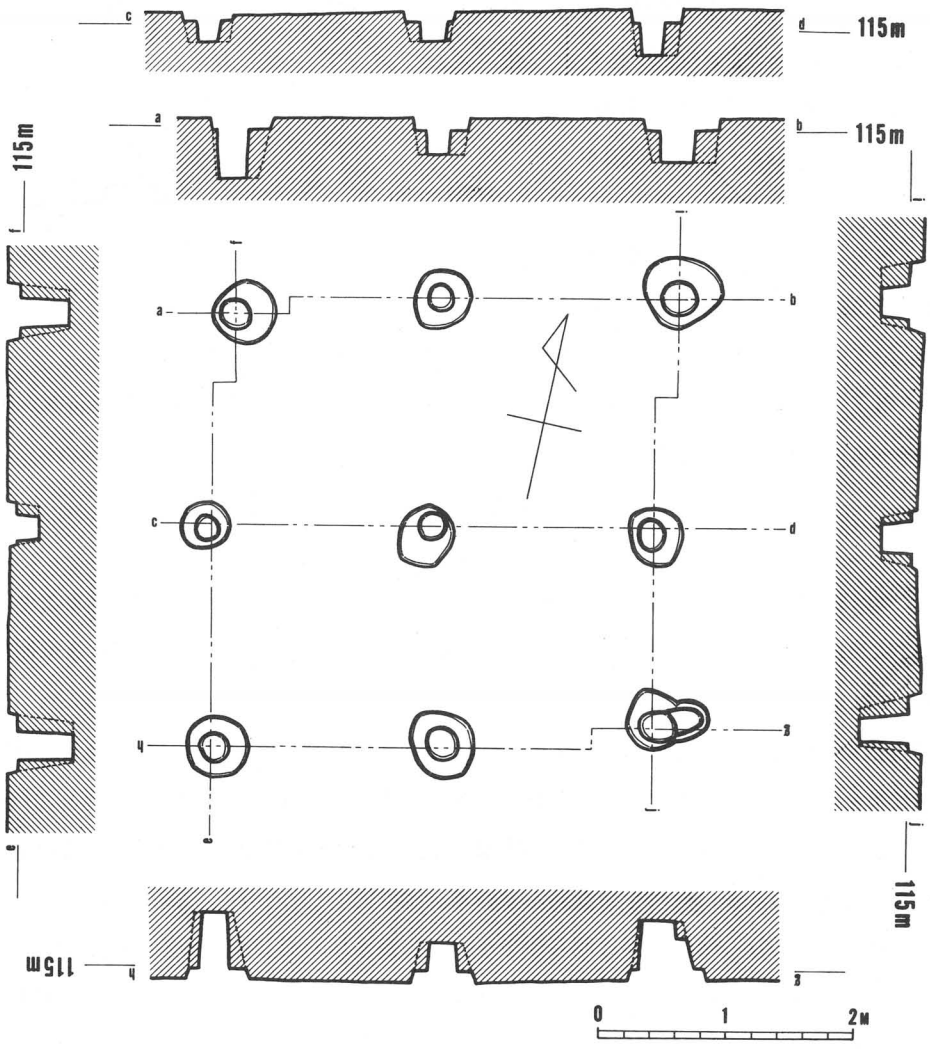
XH1（第24図） 2間×2間（3.4m×3.5m）のほぼ方形の建物である。束柱を持ち、倉庫跡と思われる。柱間は北側が1.87m×1.63m、南側が1.7m×1.8m、東側が1.52m×1.85m、西側が1.7m×1.7mで間隔は一定しない。径40～60cm程の掘り形で径20～30cmの柱痕を検出した。軸線はN12度Wの方向にある。

XH2（第25図） 2間×２間（5.0m×3.52～3.8m）で、やや南北に長い建物である。掘り方は円形及至ダ円形で、径16～26cmの柱痕を残す。およそN３度Eに軸線を持つ。束柱はなく、倉庫と断定できない。XT２を切って構築されている。

XH3（第26図） 3間×8間（4.98m×9.3～9.8m）の南北棟の大型建物である。建替えがあるが、南及び東側柱

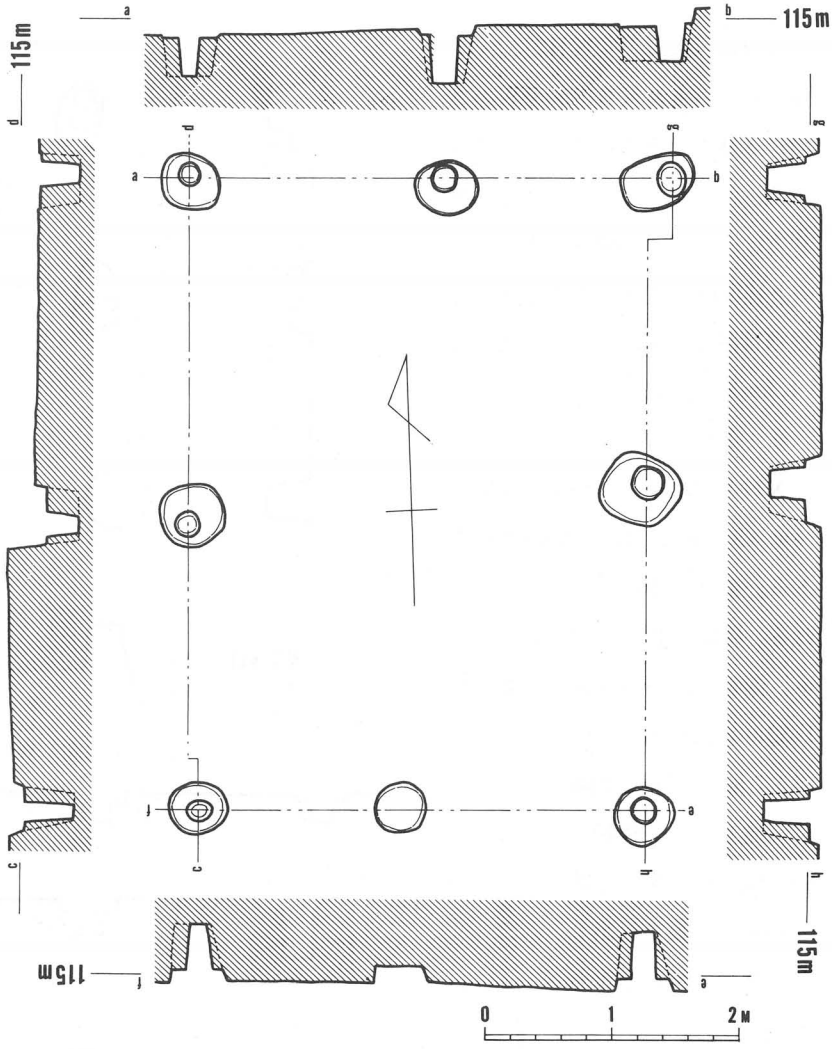


第23図　W地区H４実測図



第24図　X地区H１実測図

列では柱穴の重複は認められない。柱間は南辺が1.55m×1.56m×1.84m、北辺が1.75m×1.48m×1.75m、西側が1.0m×1.4m×1.1m×1.9m×1.0m×1.05m×0.8m×1.35mと不等間隔で柱通りも悪い。掘り方は不整形である。柱痕は径15～32cmのものが残っている。軸線はおよそN5度30分Wの方向にある。なお、東側柱列はXT4により切られている。



第25図　X地区H2実測図

XH4（第27図）　南北2間(3.8m)、東西1間(1.54m)まで検出した。西側へのびるものと思われる。柱間は2.0m×1.85m及び1.54mを計る。

XH5（第28図）　南北2間(3.8m)、東西1間（1.8m）まで確認できた。柱間は1.85m×1.95m及び1.8mを計る。柱痕は18～32cmの規模を持つ。

XH6（第29図）　南北2間を確認し、西側へのびる建物と思われる。長さ4.05mを計り、柱間は2.0m×2.05mである。柱痕は20～26cmを計る。

XH7（第30図）　南北5間(8.25m)の柱列を検出した。柱間は1.35m×1.45m×2.0m×1.35m×1.9mを計る。西側へ広がる南北棟の建物と考えられる。

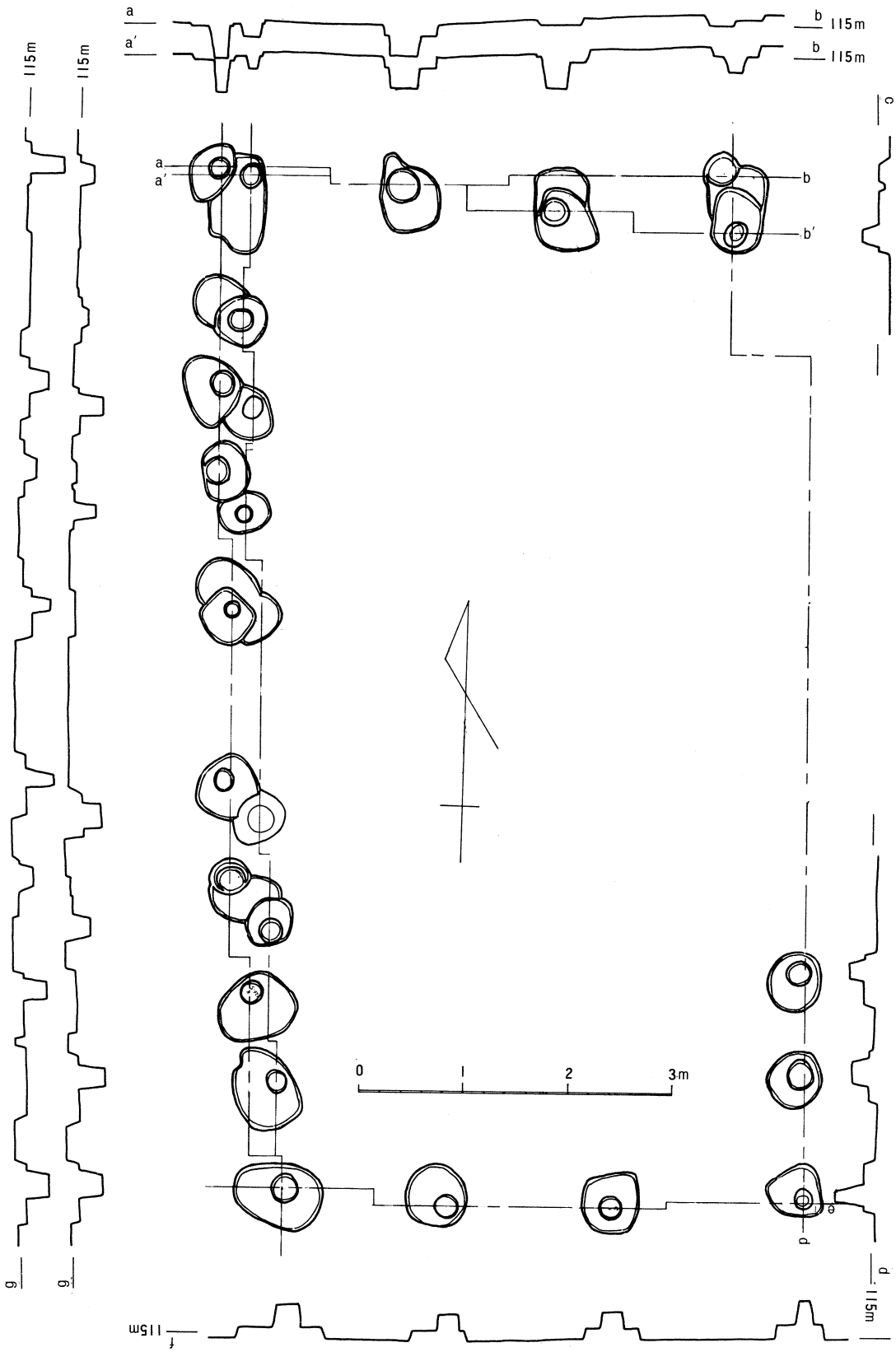
(ハ) 井　　戸

P地区で検出した次に掲げる3基のピットについては、井戸である確証を得ることができなかったが、掘り方の形状から他のピットと性格の異るものであることが明らかであり、井戸である可能性の強いものとしてここで取り上げることにした。

PBP4（第9図）　1.12m×0.95mの方形に近いプランで、ほぼ垂直に掘り下げ、深さ約40cm程遺存している。南北軸をおよそN9度Wに持ち、PH1（N10度W）やPH4（N12度30分W）の柱通りの方向に近い。ピット内には、土方より下落した状況で、須恵器、土師器、灰釉陶器等が比較的良好な状態で出土している。なお、PP1はPH3の北端の柱穴を切り込んでいる。

PBP3（第9図）　全体規模は明らかでないが、長さ1.3～1.7mを計る。深さは約1mで、やはり、ほぼ垂直に切り込んでいる。西辺の方向はN15度30分Wにあり、PT1（N17度30分W）やPH4（N12度30分W）に近い。

PBP2（第8図）　1.6m×1.5mのほぼ方形プランで、垂直に約1m掘り込んでいる。このピットの西辺から北



第26図　X地区H３実測図

方に向けて、幅約40～50cm程の溝が出ている。検出した範囲で、この溝底は北ほど低いが、ピット西辺より長さ 1.5mで溝底が一度高くなり、再び下って北方にのびている。溝はN20度Wの方向にのび、ピットはN10度Wに南北軸を持っている。ピット内には、上層に黄灰色、下層に青灰色の粘土の堆積が見られ、遺物は両層とも皆無であった。

㈡ 大型土壙

各地区のピット群のほとんどは円形あるいはダ円形の小ピットであるが、その中で、掘り方の大きいもの、その形状の特異なもの、また、包含されているものに特徴のあるもの等が見られる。ここではこれらを取り上げる。

ⅰ P地区

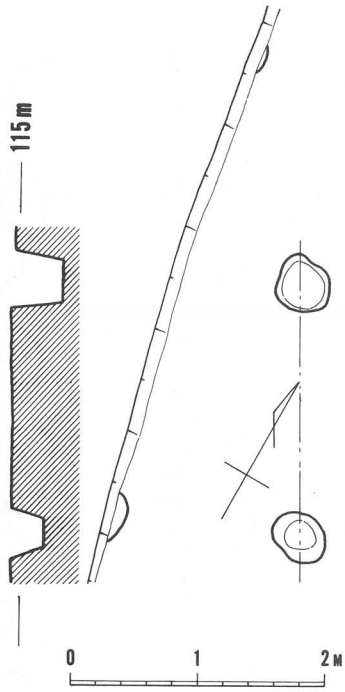
PBP1（第８図） ＰＴ１の南約 1.5mのところに位置する。検出した範囲では 1.6m の大型の土壙である。ピット内には、須恵器、土師器等の他に、多量の灰、木炭、焼土等を含んでいた。

ⅱ W地区

WBP1 径２m程の不整円形土壙で、鉢底状の掘り方をしている。壙内には３層程の堆積が認められる。ＷＴ５より西方 4.4m程のところに位置する。

WBP2 2.1m×1.5mの卵形をした土壙で、ＷＴ５の西辺を切っている。壙内には土師器の長胴甕の破片一個体分を包含していた。

WBP3 2.5m×1.5mのダ円形の土壙で、北側が一段深くなっている。その段落附近で土師器の小型甕が完形で出土している。これはＷＴ３の東方20m程のところにあり、周辺ではピット等遺構の分布は認められなかった。



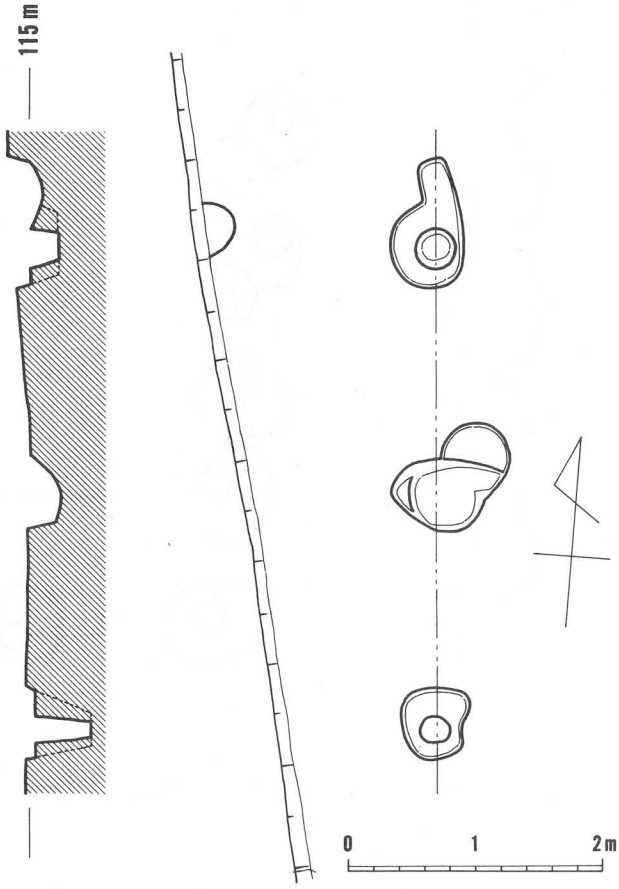
第27図 Ｘ地区Ｈ４実測図

ⅲ Ｘ地区

XBP1（第14図） 1.46m×1.86mの長方形プランで、さらに、長径１m、短径68cmのダ円形の掘り込みがあって、二段掘りになっている。一段目は深さ10cm、二段目は64cmの深さがある。遺物の包含は少ないが、一段目で、北寄りに焼土の溜りがあった。南北軸はＮ３度ＥでＸＴ３に最も近い。

XBP2 ＸＴ２の南 2.5m、ＸＴ３の西２mのところにある。東西に長く、東西長 3.8m、南北長2.3mのダ円形に近い長方形である。南北軸はおよそＮ１度Ｅにあって、ＸＰ１やＸＴ３に近い。

XBP3（第15図） 南北長1.6～1.8m、東西長 1.6

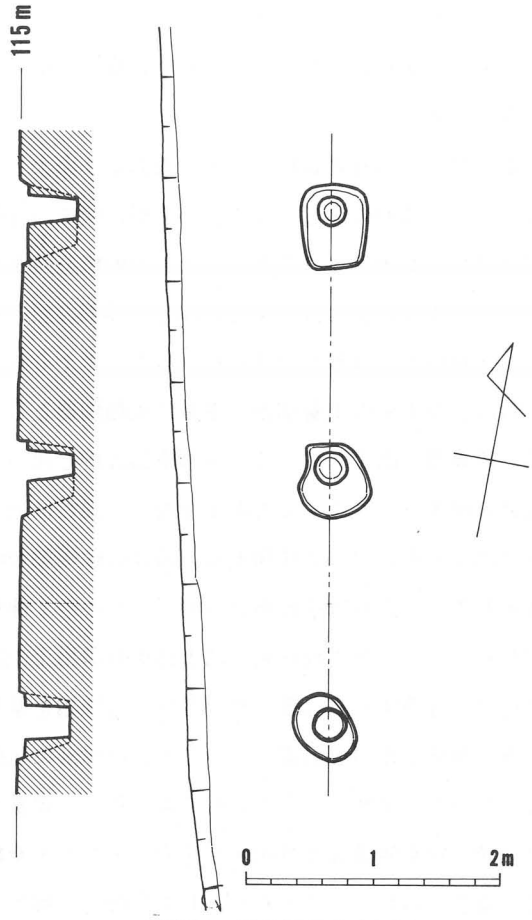


第28図 Ｘ地区Ｈ５実測図

mの台形を呈している。深さ0.78mある。N８度Wに南北軸があり、ややＸＴ３に近い。

㈱ 溝状遺構

Ｐ地区で南北にのびる溝状遺構（ＰＭ１）を検出した。ＰＨ２、PBP１、PBP３、ＰＴ２、ＰＴ３等その他これにかかるピットをすべて切っている。ＰＴ２、ＰＴ３附近で少し西側にカーブするが、ほぼ一直線にのびる。幅約70cm、深さ10cmを計る。高低差はほとんどなく、その埋土にも流水あるいは溜水を思わせる痕跡は認められなかった。



第29図　Ｘ地区Ｈ６実測図

4　遺　　物

各個の遺物観察は別表にまとめた。ここでは各遺構別に出土状況、年代等をおさえておくことにする。

ⅰ　Ｍ地区

ＭＴ１　ここでは、カマド内の堆積土中より長胴の甕、カマド北側で、住居跡の床面より蓋、埦が出土している。須恵器の蓋は平坦な天井部に屈曲した口縁部が付き、小さな宝珠ツマミがついている。これは、長岡京廃都時（延暦13年＝794年）に埋められたとされる京都府長岡京跡ＳＤ51[①]出土須恵器群中に類品が見られる。共伴した高台付埦もこの頃に考えられる。従って、ＭＴ１の年代も８世紀末におくことができよう。

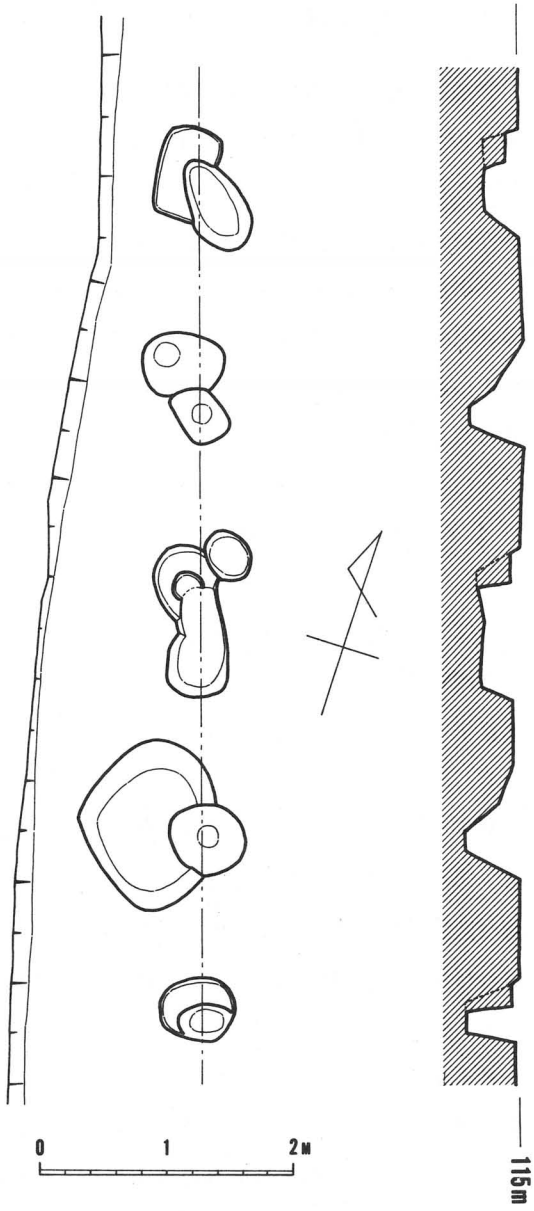
ⅱ　Ｐ地区

ＰＴ１（第31図）　ＰＴ１の年代を示すものとしては、住居跡北西部床面より正位置で出土した須恵器平瓶、北側周溝内より出土した土師器甕及び須恵器杯、支柱穴内の蓋であろう。平瓶は２種類あるが漏斗状の口縁部と肩部および胴部と底部との境界に稜を持ち、平底状の底部を持つ点共通している。蓋は天井部と口縁部との境界の稜がほとんどなくなっている。これらは、大阪府陶邑古窯跡群[②]ＴＫ 217に類品がある。また、埋土中であるが、口縁部にかえりを持つ蓋や体部と底部との境界の明瞭な埦等が出土している。さらに、周溝内出土の土師器長胴甕は、口縁部が内側に屈曲するもので、比較的長く同形態を保つものであるが、７世紀初頭に比定できる長浜市諸頭山２号墳[③]の出土品中にも見られるように、他の須恵器類の示す年代と矛盾するものではない。平瓶が諸頭山２号墳のものに比べて、口縁部の形態に新しい要素を持つこと、蓋に口縁部のかえりを持つものと持たないものが共伴すること等を考えるとＰＴ１はおよそ７世紀中頃に比定できるものと思われる。

なお、ＰＴ１の北東コーナーを切り込んだピットより、ＭＴ１出土の須恵器蓋と同一形式のものが出土している。また、住居跡埋土中に混入して、須恵器高台付埦、蓋、土師器皿、灰釉の埦等が出土している。高台付埦は底部と体部との境界に明瞭な稜を取るが、高台は外反しない。蓋は口縁部が小さく垂下し、端部に稜を取るもの。灰釉の埦は口縁部が小さく外反し、逆三角形に近い低い高台を持つ。これらは、蓋をのぞけば平安時代前期のも

ので、ＰＴ１を切り込んだピット、特にＰＨ４の年代を考える上に有用である。

ＰＴ２　ＰＴ２の有効資料は、その床面より出土した土師器の甕である。球形の体部と「く」の字形に開く口縁部を持ち、口径は胴部最大径より小さい。大阪府船橋遺跡④土師器Ⅱに比べるとＰＴ２のものは完全な球体で、頸部の屈曲も鋭い。従って、奈良時代にはさかのぼらないものと考えられる。ＰＴ２からは、埋土中の上層部から多量の灰釉陶器と若干の緑釉陶器、須恵器が出土している。灰釉陶器は埦と皿の二種類で、埦は口縁端部の外反するものが少ない。高台は逆台形のものと外湾するものとの２種類ある。皿は口縁端部が内側に屈曲するもので、高台は逆台形と外湾するものの２種類がある。これらは、奈良県平城京東三坊大路東側溝⑤出土の灰釉陶器に比べて、外湾する高台等はやや退化した様相を呈している。また、共伴した須恵器蓋についても、口縁部の屈曲が小さくなっていて、平城京跡出土のものより新しい要素といえる。東三坊大路東側溝は９世紀後半を中心とした土器群を出土しているといわれるところから、ＰＴ２埋土上層出土のこれら土器群は平城京跡のものよりやや新しく、10世紀代に入る可能性が強い。従って、ＰＴ２床面出土の甕は、住居跡埋土上層土器群埋没以前のものであり、かつ、奈良時代にさかのぼらない年代、すなわち、９世紀代におくことができよう。



第30図　Ｘ地区Ｈ７実測図

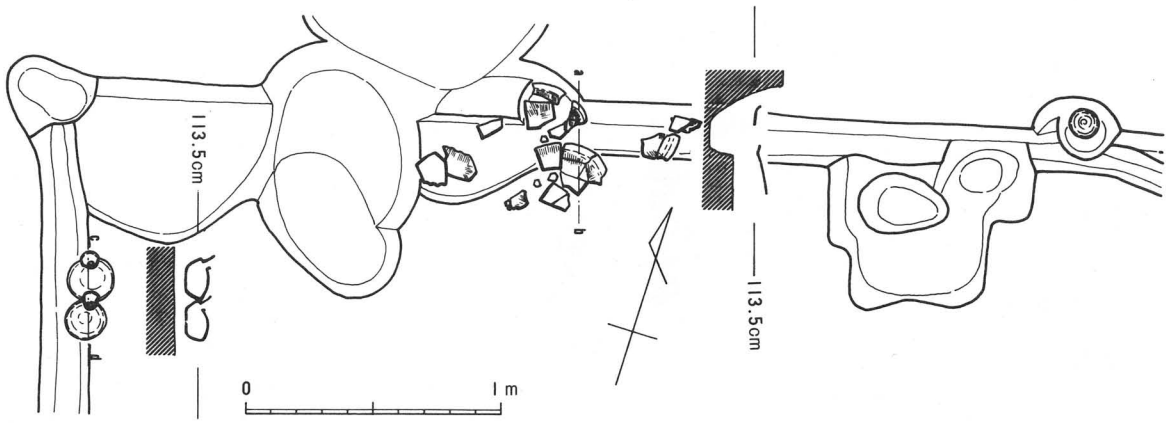
ＰＭ１　PM1はPT2、PT3をはじめほとんどの遺構を切り込んでいるため、その包含遺物には混入品が多い。灰釉陶器、須恵器、土師器等が出土しているが、これらのうち最も年代の下るものは土師器の皿である。皿は口縁部を屈曲させ、端部を内側に曲げている。類品が長岡京跡ＳＫ03⑥から出土しており、10世紀末～11世紀初頭のものとされている。ＰＭ１が切っているPT2埋土上層が10世紀代と考えられるところから、この土師器皿がＰＭ１の年代を示す遺物である可能性が強い。

ⅲ　Ｗ地区

ＷＴ３　住居跡埋土中より土師器甕、須恵器壺等の破片が出土しているが、原形を推察し難い。

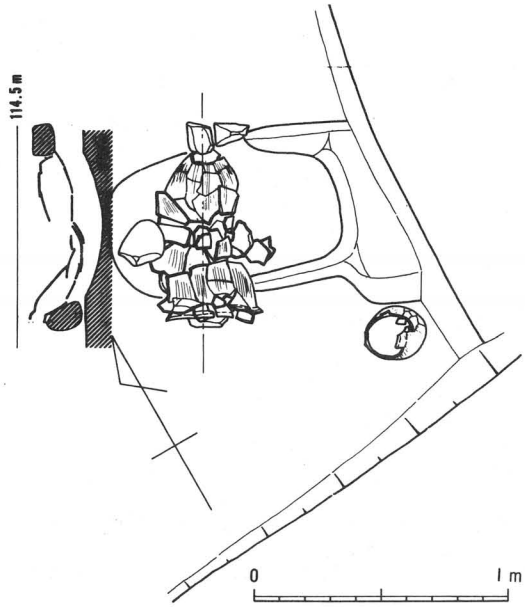
ＷＴ２　須恵器杯身、土師器小型甕等少量出土している。杯身は底部片で、受部を持つものと思われる。甕は「く」の字形の頸部と短かく開く口縁部を持ち、内外面とも刷毛目調整している。およそ７世紀代のものと思われるが、いずれも埋土中のもので、住居跡の年代を直接決め難い。

ＷＴ１（第32図）カマド焚口に横架した状態で出土した土師器の長胴甕、カマドの南側で正位置の状態で出土した甕、および、カマド前面で床面より出土した高台付埦が有効資料である。長胴甕は口縁部上半を内側にカー



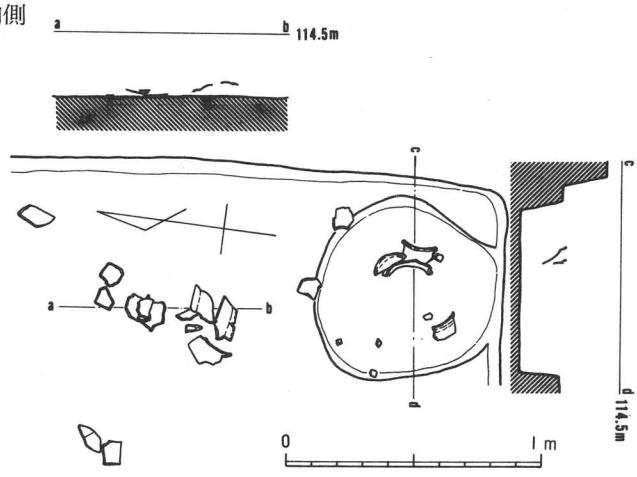
第31図　ＰＴ１遺物出土状態実測図

ブさせた近江地方通有のもの。小型の甕は頸部が曲線を描いて大きく外反し、頸部内面には稜線が走る。類品を求めるなら船橋遺跡土師器Ⅱの壺型土器に近い。高台付埦は、高台の形態や体部と底部との境界の状態は陶邑古窯跡群ＭＴ21に近い。その他、埋土中より、須恵器蓋、杯、等が出土している。蓋は２種類あって、口縁部にカエリをもたないものは、扁平で、中央部がやや高かくなるツマミと口縁端部を短かく下方へ屈曲させ、端面に稜を取るもので、陶邑古窯跡群ＭＴ21に相当する。カエリを持つものは小さくつまみ出した程度のものである。陶邑古窯跡群ではＭＴ21からの出土は皆無とされるが、ＴＫ 217よりやや新しい感じがする。杯身は受部の立ち上りが非常に小さく、やはりＴＫ217より新しい。このように、埋土中をも含めて、蓋にカエリを持つものともたないものとの２種類あること、受部を持つ杯身があること、長胴甕が諸頭山２号墳出土のものと同様に口縁端部の面取りが明瞭になされていること等より考えて、ＷＴ３はおよそ８世紀の前半に位置づけられるものと考える。



第32図　ＷＴ１遺物出土状態実測図

ＷＴ４（第33図）　ここでは貯蔵穴状土壙出土の土師器鉢、把手付壺、焼土とともに床面より出土した長胴甕が有効である。また、須恵器では高杯、杯が床面近くより出土している。土師器鉢は平城宮跡ＳＫ219[7]（造営期の第Ⅱ－２期、天平宝字７年763年）に類品がある。また、口縁部を内側に屈曲させ直立させた杯もＳＫ 219や同段階のＳＧ180にも見られる。把手付壺は扁平な三角形の把手で、肩部の張らない、やはり奈良時代中期のものである。長胴甕も通有のものであるが、口縁端部は丸く終るか、面を取っても幅が狭い。従って、ＷＴ４はおよそ８世紀中頃におくことができよう。



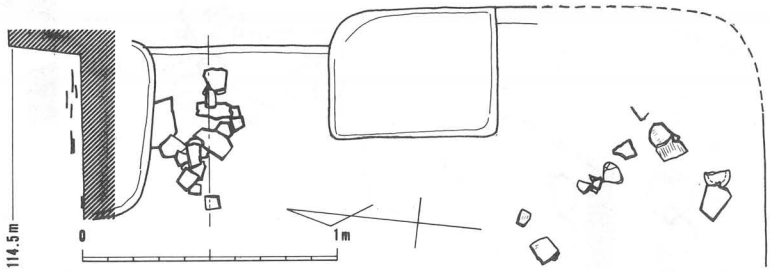
第33図　ＷＴ４遺物出土状態実測図

ＷＴ５（第34図）　ここでは、住居西東壁側南寄りに焼土が見られ、その北側で長胴の土師器甕が出土した。また埋土中より、陶邑古窯跡のＴＫ217

頃と思われる須恵器蓋、身が出土している。

ⅳ　X地区

ＸＴ１　陶邑古窯跡群ＴＫ 217の須恵器杯身やＴＫ７の須恵器高台付埦等が混在して埋土中より出土している。ＸＴ１は一部攪乱を受けており、杯身の示す年代を当てるほうが妥当であろう。



第34図　ＷＴ５遺物出土状態実測図

ＸＴ２　須恵器蓋が住居跡床面、土師器の小型甕と長胴甕が埋土中より出土している。蓋は口縁部の屈曲がなく、端部を下方へ折り曲げて、端面に稜を取るもので、陶邑古窯跡群のＭＴ21に相当するものと考える。又、平城京跡のＳＫ219に類品がある。

ＸＴ３　カマド内より長胴甕と小型短頸の甕が出土している。小型短頸の甕はＸＴ２住居跡埋土中のものと類似している。また、埋土中であるが、ＷＴ４出土の口縁部を屈曲させて立ち上がらせる杯と同様のものが出土している。従って、ＸＴ３もＷＴ４、ＸＴ２と同じ時期のものといえよう。

ＸＴ４　住居跡床面からは土師器の皿１点のみ出土している。これは、平城京跡ＳＫ 219等造営第Ⅱ－２期に相当する一群のものと口縁部の外傾指数[8]が一致する。埋土中からも同類の皿が数点出土している。また、埋土中からは須恵器高台付埦、蓋等が出土しているが、やはりＳＫ 219に相当するもので、ＸＴ４も８世紀中頃に当てることができる。

ＸＴ５　埋土中より須恵器の蓋と埦が出土しているが、埦はＸＴ６の切り込みにより混入したと考えられる小片である。蓋は中高の宝珠の思影を残した扁平なツマミを持つもので、口縁端部を下方に折り曲げ、その外面が凹む。ＳＫ219に類品がある。

ＸＴ６　ＸＴ５を切り込んで構築されている。床面より須恵器埦が出土している。埦は逆台形の高台が付き、口縁部は底部よりゆるやかなカーブを描いて開く。平安時代に入るものであり、切り合い関係からも矛盾はない。

ＸＴ７　削平されてほとんど痕跡程度に遺存していたが、カマドの存在を示す焼土があり、その附近より須恵器蓋と短頸の把手付壺が出土している。蓋はＸＴ５出土のものと同形態である。壺は類品をあまり見ないが、短頸で、肩部から垂直におりる体部を持つものとして平城京跡ＳＫ 234の出土品がある。これは把手を持たず、口縁部が外反する。ＳＫ 234は平安時代初期に比定されているが、ＸＴ７のものは口縁部が垂直に立ち、やや古い形態と考えられる。蓋と同様８世紀中頃までさかのぼるものと考えられる。

ＸＰ３　高台を持たない埦が出土している。口径に対して器高が大きく、体部と底部との境界を篦削りしているが稜を持たない。口縁部は内側にカーブしながら開く。陶邑古窯跡群ＴＫ７に相当すると思われるが、陶邑古窯跡群では底部と体部との境界に稜を持ち、口縁部が直線的に開くものが出土している。

5　年　　代

遺物、遺構の年代については、３．遺物の項で記述してきたが、それは主に竪穴式住居跡であって、掘立柱建物、その他多くのピット等については有効な資料を欠いた。しかし、その中で、竪穴式住居跡等との切り合い関係等により、その年代をある程度おさえることのできるものがある。ここでは、主に、掘立柱建物跡の年代をお

さえておくことにする。

ⅰ　P地区

4棟の掘立柱建物跡のうち、ＰＨ２はＰＭ１により切られている。ＰＭ１が10世紀末～11世紀初頭のものと考えられるところからＰＨ２の下限をここにおくことができる。さらにＰＨ２はＰＨ３を切っており、また、ＰＰ１に切られている。ＰＰ１は９世紀代の遺物を出土しており、ＰＨ３の下限をここに求めることができる。ＰＨ４については、ＰＴ１を切り、ＰＴ１の埋土中に９世紀代の遺物が混入していたことから、およそそのころの年代を考えた。以上のことから、ＰＨ２～ＰＨ４の年代を８世紀後半から９世紀代、すなわち平安時代前期におくことが可能であろう。ＰＨ１については、切り合い関係等から年代を考定しにくいが、他のものとおよそ近似した時期のものであろう。

ⅱ　W地区

4棟の掘立柱建物跡のうち、切り合い関係については、ＷＨ２とＷＨ３とがＷＴ５を切り、ＷＨ３がＷＨ４を切っている。ＷＴ５が７世紀中頃と考えられるところから、ＷＨ２とＷＨ３は７世紀後半以降のものとすることができる。また、ＷＨ４はＷＨ３に先行する。さらに、ＷＨ２はＷＨ５を切っているＷＴ６をも切っており、ＷＨ２の上限がさらに下降することになる。ＷＴ１～ＷＴ３の切り合い関係において、７世紀前半のＷＴ２を切るＷＴ３が８世紀前半と考えられるところからＷＴ５とＷＴ６の切り合い関係を考えるとＷＴ６が少なくとも８世紀代とすることができ、また、切り合い関係はないがＷＴ４が８世紀中頃で、多くの掘立柱建物が竪穴式住居跡を切っている事から、ＷＨ２の上限を８世紀後半におけそうである。ＷＨ４はＷＨ２を切っているところからＷＨ２に先行する。ＷＨ３については、上限を７世紀後半とできる。ＷＨ１もこれらと近似した時期を当ることができよう。

ⅲ　X地区

X地区ではＸＨ２がＸＴ２を、ＸＨ３がＸＴ４を切っている。ＸＴ２が８世紀中頃、ＸＴ4も８世紀中頃と考えられたので、ＸＨ２、ＸＨ３とも上限を８世紀後半におくことができる。他については直接年代を考定しにくい。

以上各地区の掘立柱建物跡の年代を考定した。竪穴式住居跡と切り合い関係のあるものはいずれも住居跡が先行する。Ｐ地区では７世紀中頃の住居跡を切り、９世紀代のピットあるいは10世紀末～11世紀初頭の溝で切られている。従って、Ｐ地区の掘立柱建物は７世紀後半～10世紀後半の間におくことができる。さらに住居跡埋土中混入遺物から、およそ８世紀後半～９世紀代あるいは10世紀代におくことができた。

W地区については、７世紀後半を上限とできる。X地区については８世紀後半を上限とできた。その他、表土中よりの出土遺物等を考慮すると、掘立柱建物跡は、ほとんどの竪穴式住居跡より後出と考えられ、従って、８世紀後半～10世紀後半の間に入るものと考えて大過ないものと考える。

6　考　　察

今年度の調査は、およそ 400.000㎡ に及ぶと推測される遺跡の北半分に当り、しかも、発掘面積は、試掘部分を除いて、約5800㎡で、全体の約70分の１であって、およそ遺跡の全体像を明らかにし得るものではない。従って、ここでは調査範囲内に限って得られた知見、問題点をまとめておくことにする。

まず、検出した遺構は竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、大小のピット群である。竪穴式住居跡は

7世紀前半から9世紀代の間に入り、8世紀中頃のものが最も多い。8世紀前半と8世紀末のものを加えると8世紀代におさまるものが過半数を占めている。掘立柱建物跡は8世紀後半から10世紀後半の間に入り、竪穴式住居跡と切り合い関係にあるものでは、すべて、住居跡を切り込んで構築されている。井戸跡、大型の土壙はおよそ8世紀末から9世紀代のもので、掘立柱建物跡に伴う可能性が強い。溝跡は10世紀末～11世紀初頭で、最も新しい。その他小ピット群は多くが9・10世紀代のものである。以上のことから、竪穴住居跡から掘立柱建物跡への変化が早くて8世紀後半に入る。井戸跡、大型の土壙は掘立柱建物群に伴う可能性が強い。竪穴式住居跡に確実に伴う掘立柱建物跡を見出すことができない、等の点が指摘できる。

次に、遺構別に見てみる。

竪穴式住居跡の構造について、その面積は、7世紀のものが17.2～18.2㎡で、平均17.7㎡、ＰＴ１のみ37㎡の規模を持つ。8世紀代のものでは、13.3～20.4㎡、平均14.5㎡で、ＸＴ４が37.8㎡と30㎡代の大型住居跡である。9世紀代のものでは 9.8～18.4㎡で平均14.1㎡である。概して15㎡前後の規模の小さいものが多く、7世紀から9世紀の間で、規模の上では大差がない。ただ、7世紀、8世紀代の中で、37㎡あるいは37.8㎡の大型のものが各1基づつみられ、住居跡のグループ構成上注意される。次に、南北軸線の方位をみると、7世紀代がＮ５度～17度６分Ｗ、8世紀代のものがＮ４度50分～16度ＷとＮ10度Ｅ、9世紀代がＮ14度～28度Ｗで、いずれも規格的な方位を示さないが、およそＮ５度～28度Ｗの間にあって、比較的軸線方位のバラつきは少ない。このことは、住居跡の立地する微地形により方位が制約された結果とみることができよう。このことは、カマドの付設される位置についても言える。すなわち、カマドはＰＴ２を除いて、ほとんどのものに見られるが、住居跡東壁側にあるものが8例中5例、南東コーナーにあるものが2例、北壁にあるものが1例で、焚口の方向、煙出の方向もこのことによって規定される。

井口遺跡の竪穴式住居跡の構造上の特色としては、前述のカマドが付設されることの他に、ＰＴ１をのぞいて、すべて主柱穴あるいは支柱穴の認められないことである。また周溝についても、ＰＴ１、ＸＴ２を除いて認められない。このことは、住居跡に柱の存在しなかったことを意味するものでないことは当然である。柱は、掘立てにされなかったのであり、一つに、住居跡床面直上に置かれる場合、二つに、柱基礎として井桁を組み合せた方法の場合等が考えられるのである。前者の場合、掘立てにしないだけ主柱の安定を生み出すための上部構造が必要になろう。後者の場合、礎石を持たない井桁組み構造の初例としては、951年建立と伝えられる京都市醍醐寺の五重塔であり、7世紀代以降の一般住居跡でこの方法があったとは考えにくい。もしこの方法であれば住居跡床の構造も異るであろう。しかし、カマドの付設方法やその焼土、灰の散布状況から考えて、床の構造は通有住居跡と異ならない。従って、前者の構造が最も妥当と考えられる。これら柱穴を持たないものに対し、ＰＴ１は逆に主柱穴４本、支柱穴12本、そして周溝を四周にめぐらす特異な構造である。主柱穴は通有の４本柱である。支柱穴は、各コーナーと各辺２基づつあり、柱規模は小さく、垂直に立ていたと考えられる。支柱穴がいずれも住居跡側壁肩部から周溝にかけて掘穿されており、柱痕そのものを確認し得なかったが、支柱は側壁にほぼ接して建てられていたようである。支柱の規模から考えて上屋構造を支えるだけの太さはなく、従って、ここで考えられるのは、住居側面の板壁の存在とそれを固定させる支柱の存在である。すなわち、主柱以外に住居掘り方に沿って支柱を建て、その支柱間に横板を打ちつける構造である。この場合、支柱間に横棒を通し、壁板を縦方向に貼り付ける方法と壁板を横方向に打ち付ける場合が考えられるが、周溝を壁板の下部を埋め込み、安定させるためのものと考えれば、前者の方法が妥当と考えられる。

ＸＴ２の場合周溝が２分の１周している。ここの場合、周溝が半周しかしないこと、支柱が存在しない事等よ

りＰＴ１と同様には考えられない。またＸＴ２の場合、カマドがなく、径54cm、深さ１ｍの円柱状のピットがあり、灰を多量に包含していた。周溝はこのピットと接続し、幅40cmと広い。性格は不明である。カマドを有さないものにＰＴ２がある。浅い皿状のピットが２ヵ所で認められただけである。

とにかく、１・２の例外的構造を持つものがあるが、1) カマドを持つこと、2) 主柱穴、支柱穴を持たないこと。3) 周溝を持たないこと等を構造上の特色としてあげることができる。さらに、遺物のセットにおいては、土師器の長胴甕、小型の甕、壺、須恵器椀あるいは杯、蓋を主とし、土師器の皿等がそれに加わる。このセット関係においても時代差は認められない。遺物で特異なものはＰＴ１の平瓶とＷＴ４の高杯である。特に、特異構造を持つＰＴ１に平瓶が加わることは、ＰＴ１が他の住居跡と異る性格のものであるのかも知れない。床面積も37㎡と通有の２倍の広さを持っており、その可能性が強い。

以上は竪穴式住居跡個々の特色であるが、比較的広範囲に発掘したＸ地区において、８世紀中頃に考えられるＸＴ２～ＸＴ５、ＸＴ７が半円形の弧線状に並び、その内側が空所として残っているという配置を示しているという点が注意される。この５基の住居跡の構成は37.8㎡(復元)と他の床面積の２倍以上のものが１基（ＸＴ４)、先述の特異構造をもつもの（ＸＴ２）１基、通有の規模、構造を持つもの３基からなり、これら５基で何等かの単位を構成している可能性があり、単位住居跡群の配置状況及び構成を示す一例とし得るであろうか。

掘立柱建物跡については８世紀後半から10世紀後半の間のものとし得るのみで、厳密に時代考定はしがたい。構造上では、２間×２間で束柱を持つもの（ＷＨ３、ＸＨ１）と２間×５間（ＷＨ２)、２間×２間（ＸＨ２)、３間×８間（ＸＨ３）で束柱を持たないものに区別できる。また、柱穴の掘り方では、方形のもの（ＰＨ４、ＷＨ２、ＷＨ４)、と円形のものとに分かれる。束柱を持つものは倉庫跡と考えられ、いずれも円形の掘り方を示す。平面面積については、ＷＨ２が約41㎡、ＸＨ１が11.9㎡、ＸＨ２が18㎡、ＸＨ３が47.5㎡ある。倉庫跡と考えられるＸＨ１と束柱のないＸＨ2とが近似した平面積であり、ともに倉庫跡の可能性が強い。ＷＨ２、ＸＨ３はその面積から住居跡とできよう。掘立柱建物の群構成については、各年代の考定が困難であるため明確でないが、Ｗ地区では住居跡ＷＨ２と倉庫跡ＷＨ３が近接し、Ｘ地区では、ＸＨ３にＸＨ１とＸＨ２の２棟の倉庫跡（ＸＨ４を倉庫跡と考えた場合３棟の倉庫跡）が付随する状況にある。また、Ｘ地区南西部で５間の柱通り１棟と２間の柱通りのもの２棟が近接してあり、５間のものを住居跡、２間のものを倉庫跡と考えるとＸＨ１～ＸＨ４の構成単位と近似する。

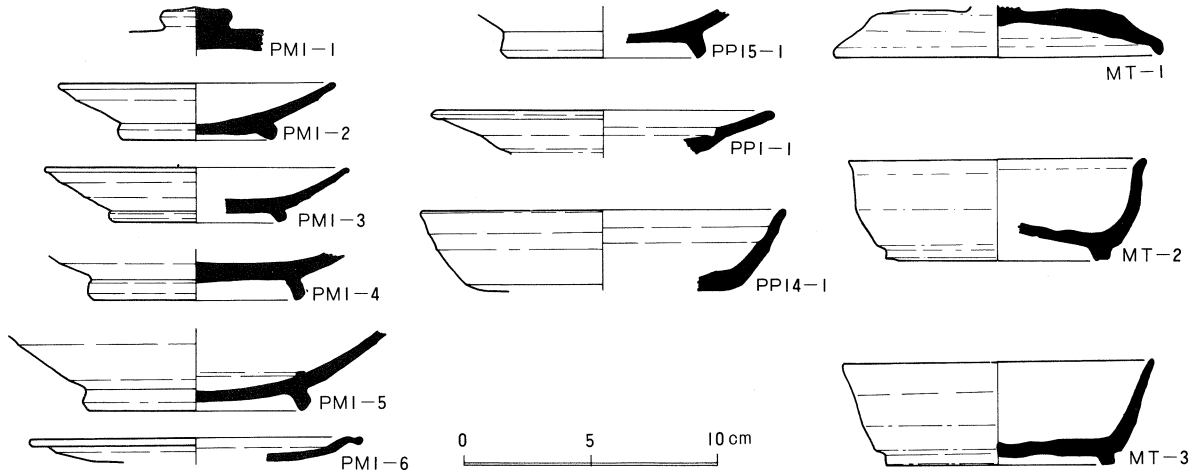
掘立柱建物群を考える場合で、倉庫跡とし得るもの以外を住居跡とした場合、カマドの存在が問題になろう。Ｘ地区の場合、方形の土壙が２カ所に見られ、時期的に掘立柱建物跡に符合した。土壙のうち、特に、ＸＰ１に焼土があった。また、ＸＰ３からは須恵器椀が出土した。これら方形土壙が掘立柱建物群の屋外炊事施設とすることもできるが、この場合、竪穴式住居跡で通有の長胴甕の出土を見ていない。掘立柱建物跡と同年代にあてられるＰ地区の３基の井戸（ＰＰ１～ＰＰ３）からも長胴甕の出土はない。掘立柱建物跡の場合、それに伴う遺物の同定はむつかしいが、上記の現像が事実とするなら、竪穴式住居跡から掘立柱建物跡への住居形式の変化は、同時に食生活の変化をももたらしたことになり、その内包する問題は重要である。

最後に、遺物について、竪穴式住居跡に伴うものとしては、各時期通じて存在する長胴甕の形態変化の問題、掘立柱建物跡に伴うであろうものとしては、施釉陶器が比較的多量に出土している事等を考えておく必要がある。

長胴甕は各時期通じて、ゆるやかな「く」の字形のカーブを描く頸部と中程で内側にカーブして開く口縁部を持ち、製作手法においても、体部外面上半分が縦から斜方向に刷毛目調整し、下半分を縦方向に篦削りしている等共通した特徴を示し、およそ 300年の間形態、手法において全く顕著な変化を示していないように見える。長

胴甕は竪穴式住居跡に造り付けのカマドが出現して以来、それと並行して現われる形態のものであり、カマドの構造上不可分一体のものであり、そのために形態上顕著な差異を見せないのかもしれない。

施釉陶器はほとんどが灰釉陶器で緑釉陶器が若干見られる。ともに埦と皿が主流を占め若干の壺型品が見られる。灰釉陶器は東海地方の産物と考えられるが、当遺跡が岐阜県関カ原へ通じる北国脇還道沿いに位置すること等からその流通圏に係ることが当然考えられるし、比較的早い段階で一般集落で日常用器として用いられていた事をうかがい知ることができよう。また、ＰＴ２埋土上層部出土の灰釉陶器は、共伴する須恵器から10世紀前半のものとして、位置付けられる一括資料として有用である。



第35図　Ｐ地区、Ｍ地区出土遺物実測図

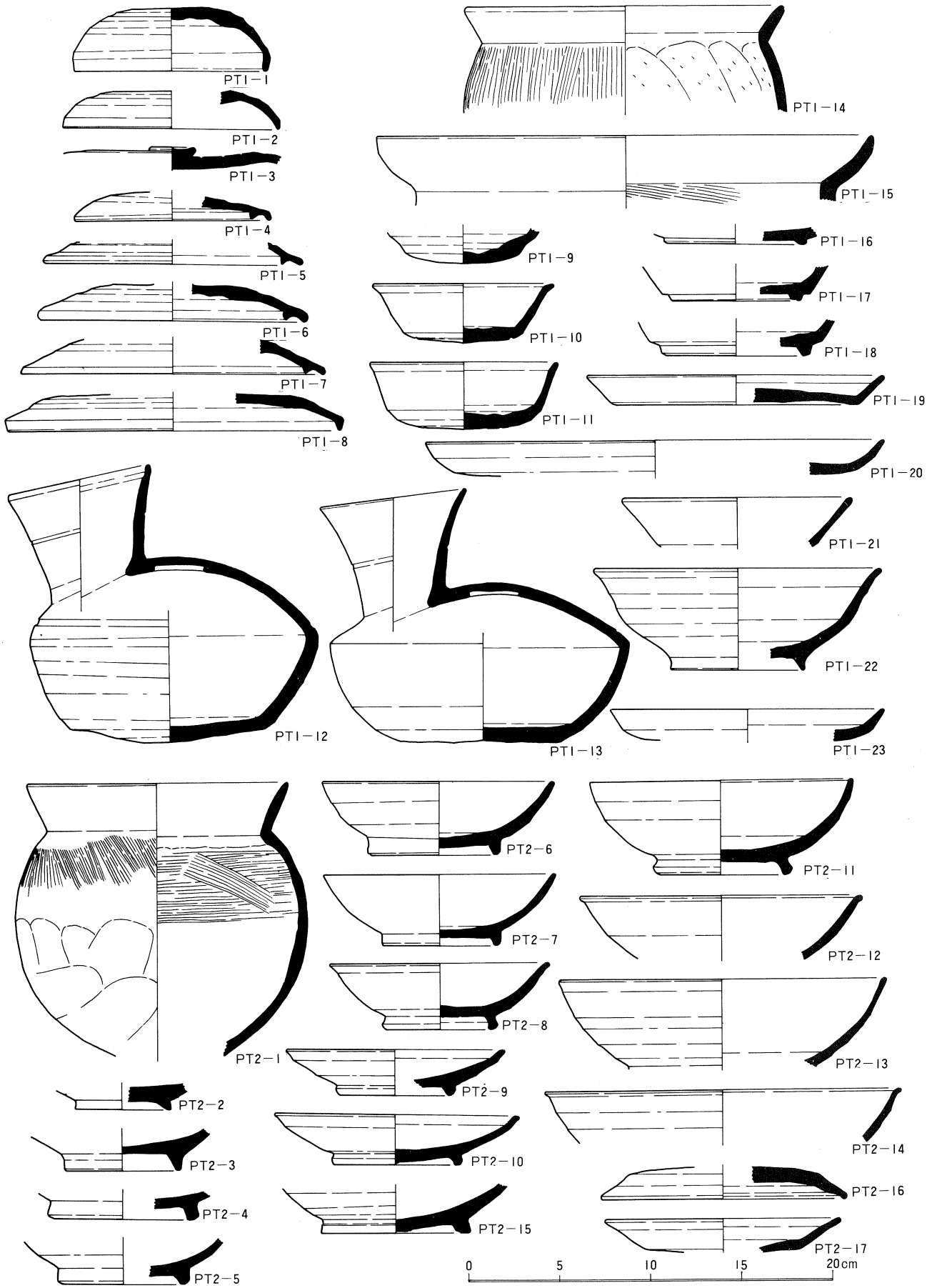
おわりに

井口遺跡は、昭和51年度と今年度の調査によって、南北１km、東西 400ｍの約 400.000㎡ に及ぶ広大な遺跡地である。両年度の調査はそのほんの一部にすぎないが、およそ、７世紀から11世紀に及ぶ集落跡があることが判明している。遺跡の遺存状況も非常に良好で、今後の精査によっては、この時期の集落論に大きく寄与するものと考える。

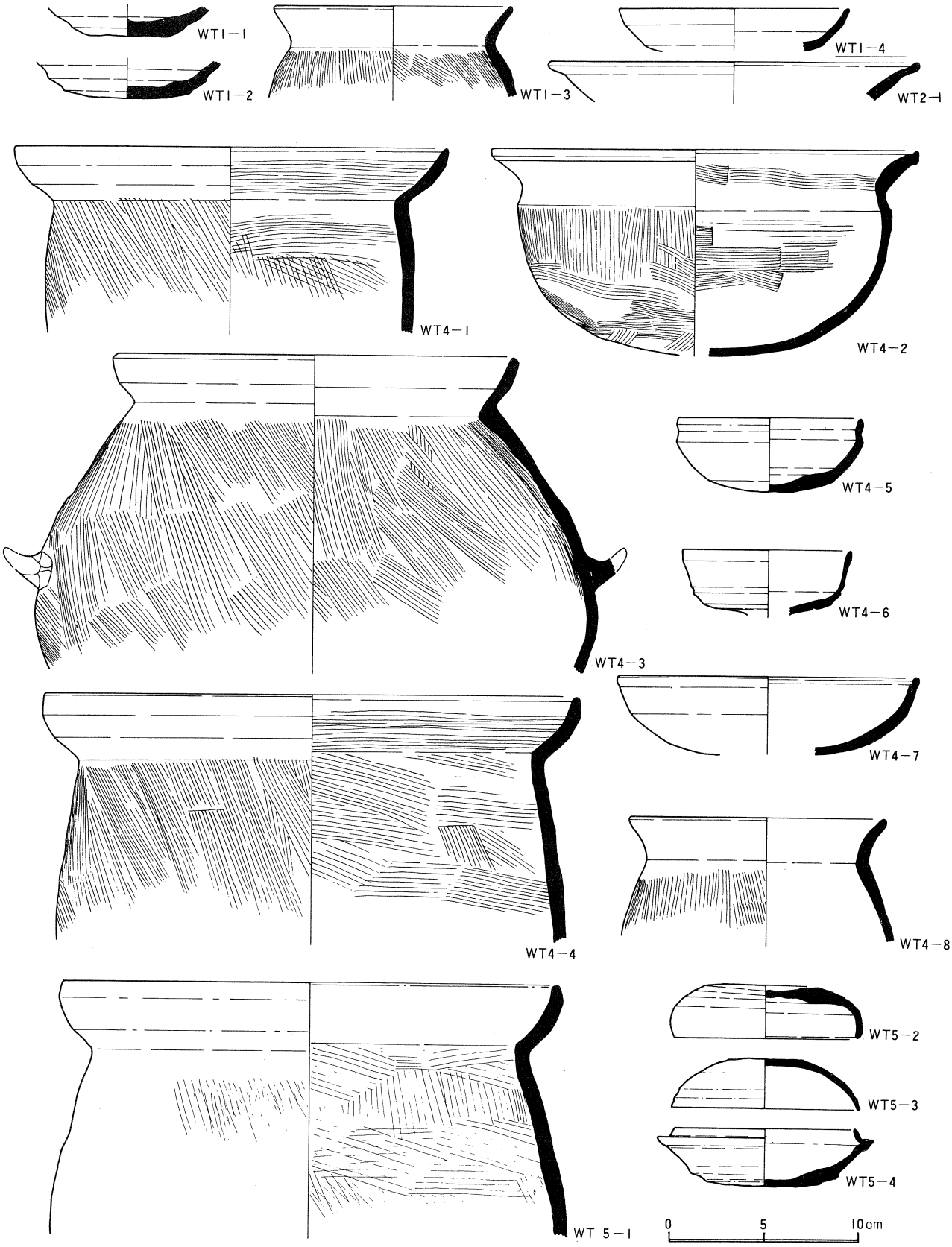
（田中勝弘）

注

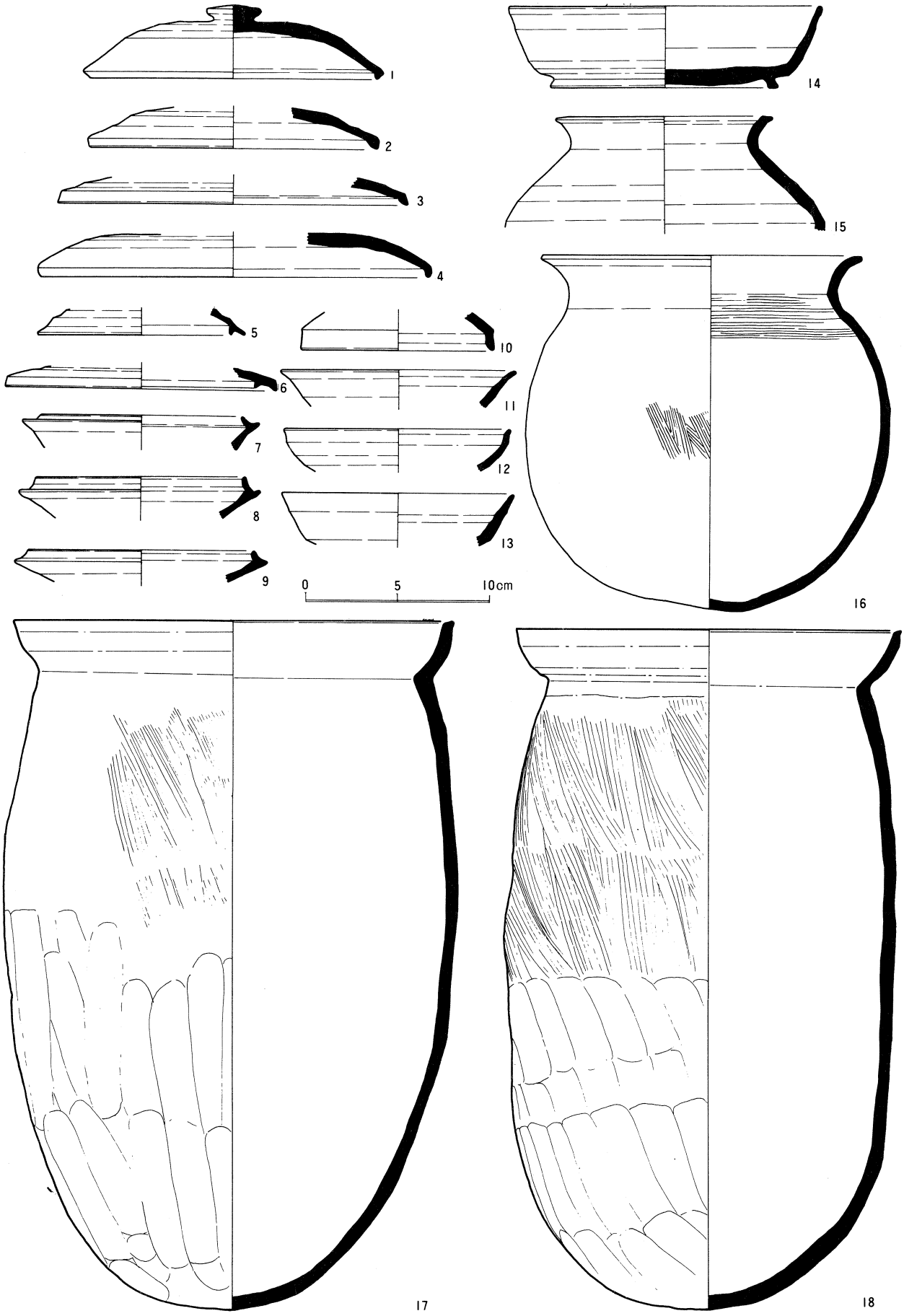
①徳丸始朗他「長岡京跡左京三条二坊第２次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、昭和51年)
②田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ、昭和41年)
③田中勝弘「諸頭山古墳群の発掘調査」(『北陸自動車関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会、昭和49年)
④原口正三『船橋Ⅰ』(平安学園考古学クラブ、昭和33年)
⑤高島忠平「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」(『考古学雑誌』第47巻第１号、昭和46年)
⑥前掲書①
⑦『平城宮発掘調査報告』II（奈良国立文化財研究所、昭和37年)
⑧『平城宮発掘調査調告』II（奈良国立文化財研究所、昭和37年)



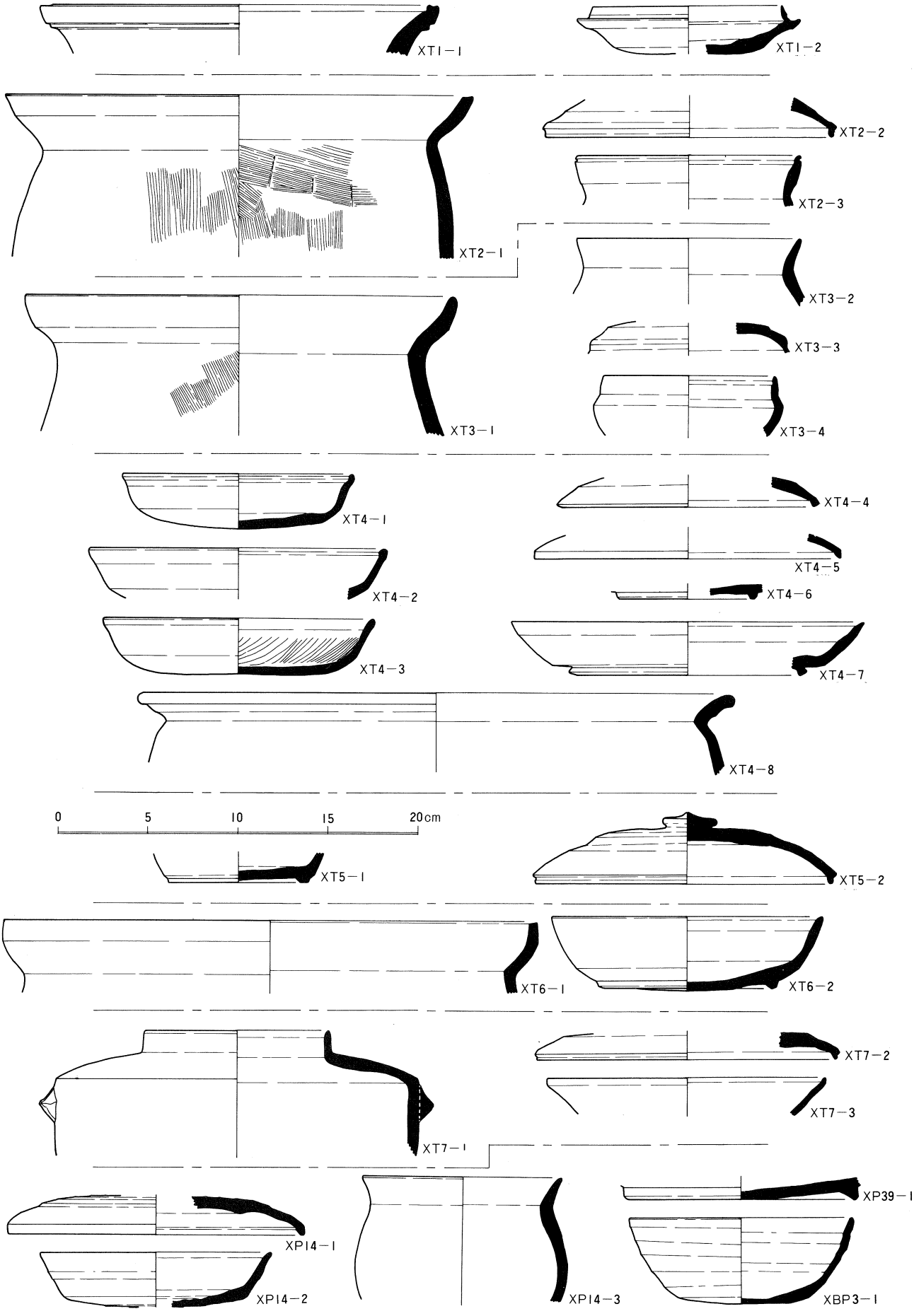
第36図　P地区出土遺物実測図



第37図　W地区出土遺物実測図



第38図　ＷＴ３出土遺物実測図



第39図　X地区出土遺物実測図

第１表　出土遺物観察表（ＰＭ1・・ＰＰ15・ＰＰ１・ＰＰ14・ＭＴ１）

地区名	遺構番号	種類	器形	挿図番号	法量(単位cm)	形態の特徴	手法の特徴	その他	備考
Ｐ	Ｍ１	須恵器	坏蓋	ＰＭ１－１		中央が平らで，僅かに出る程度の偏平な宝珠形のつまみ。	ヨコナデ。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は黄褐色。 焼成は悪く軟質。	
		灰釉陶器	皿	ＰＭ１－２	口　径10.9 器　高 2.2 高台径 6.2	口縁部は屈曲して外弯気味に伸び，端部は丸味をもってやや水平に面を取る。 体部は短く内弯して開き，底部と体部の境界は丸く底部は平らで，高台は小さく，断面逆台形で外方にふんばり，端部は丸く面を取る。	口縁・体部内外面はヨコナデし，底部は糸切りをヨコナデで消す。 灰釉は口縁部・体部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＭ１－３	口　径12　（復原） 器　高 2.1（復原） 高台径 6.8（復原）	口縁部は僅かに外弯し端部は水平に突出し肥厚して丸くおさめる。 体部は短く浅く開き，底部と体部の境界は丸い。底部は平らで，高台は小さく全体に丸く，やや外方にふんばり端部は丸く面を取らない。	同上。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成はやや良く硬質。	
			埦	ＰＭ１－４	高台径 8（復原）	底部と体部の境界は丸く，底部は平らで高台は断面長方形でやや高く外方にふんばり，端部は丸く面を取る。	体部内外面はヨコナデし，底部外面は糸切り痕をヨコナデで消す。 灰釉は体部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＭ１－５	高台径 8.5（復原）	体部は内弯して開き，底部と体部の境界は丸く，底部は平ら。	同上。	胎土は精良。 色調は白灰色。	

						高台は断面逆台形に近くやや内弯気味で端部はやや丸味を帯び面を取る。		焼成は良好で堅緻。	
		土師器	皿	PM1－6	口　径13.2(復原)	口縁部は断面逆「S」字形に屈曲し，端部は肥厚して上方につまみ出し，丸くおさめる。 体部は非常に偏平で，浅く底部は平ら。	口縁部内外面はヨコナデし，体部はナデ。	胎土は精良。 色調は黄褐色。 焼成はやや良く硬質。	
	P15	灰　釉 陶　器	埦	PP15－1	高台径 7.7(復原)	底部と体部の境界は丸く，高台はやや高く断面長方形でややふんばり，端部は丸味をもって面を取る。	底部は糸切り痕を残す。体部内外面はヨコナデ。 灰釉は体部に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
	P1	灰　釉 陶　器	段　皿	PP1－1	口　径13.5(復原)	口縁部は僅かに外弯し，端部は肥厚し水平に近く突出する。 体部は浅く大きく直線的に開き，底部と体部の境界の内面で大きな段をなす。	口縁・体部内外面はヨコナデ。 灰釉は体部・口縁部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
	P14	須恵器	坏　身	PP14－1	口　径14.5(復原)	口縁端部は僅かに外反する。 体部は内弯気味に開き，体部と底部の境界は，やや屈曲して稜をもつ。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄灰色。 焼成はやや軟質。	
M	MT1	須恵器	坏　蓋	MT1－1	口　径13	天井部は平らで，中央に宝珠形のつまみが付く。 天井部と口縁部の境界は屈曲する。 口縁部は短く下方に屈曲し，断面三角形を呈す。	天井部はヘラ切り。 口縁部内外面はヨコナデ。		
			坏　身	MT1－2	口　径11.8(復原)	口縁端部は僅かに肥厚して外反	口縁部・体部内外面はヨコナデ。		

					器　高10　(復原) 高台径 9　(復原)	する。 体部は内弯して開く。 体部と底部の境界はやや屈曲し，高台は小さく垂直に付く。	底部はヘラ切り。		
				ＭＴ１－３	口　径12.5 器　高 4.2 高台径 9	口縁端部は尖り気味である。 体部は直線的に開く。 体部と底部の境界は屈曲して稜をなし，高台は小さくやや外方にふんばる。	同上。		

第２表　出土遺物観察表（ＰＴ１・ＰＴ２）

地区名	遺構番号	種類	器形	挿図番号	法量(単位cm)	形態の特徴	手法の特徴	その他	備考
P	ＰＴ１	須恵器	坏蓋	ＰＴ１－１	口　径10.8 器　高 3.5	天井部はやや平らで天井部と口縁部の境界は稜をとり丸味をもって伸び，口縁部は屈曲して内弯し，端部はやや内方に向い丸くおさめる。	天井部はヘラ切り後ヘラ押え，口縁部内外面と天井部内面はヨロナデ。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は暗灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ１－２	口　径12　（復原）	天井部はやや高く丸味を残し，天井部と口縁部の境界は丸味をもつ。 口縁部は下方に屈曲し端部は断面三角形を呈す。	天井部の$\frac{2}{3}$はヘラ削り，口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は小石を含む。 色調は淡灰色。 焼成は悪く軟質。	
				ＰＴ１－３		天井部は偏平で，中央は凹み，偏平な宝珠形のつまみが付く。	天井部はヘラ切り跡を残す。	胎土は細砂を多く含む。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ１－４	口　径10.7(復原)	天井部は偏平で天井部から口縁部にゆるやかに伸び，口縁部は屈曲して下方に突出し，内面のかえりはやや大きく断面三角形を呈す。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は暗灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ１－５	口　径14.3(復原)	口縁部はやや下方に向き，端部はやや肥厚して丸くおさめる。内面のかえりはやや小さく，断面三角形を呈す。	同上。	胎土は砂粒を少し含む。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ１－６	口　径14.8(復原)	天井部はやや丸味を持つが偏平で，天井部から口縁部へゆるや	天井部の$\frac{1}{3}$は幅の細いヘラ削りを施し口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は淡灰色。	

						かに伸び，口縁部はやや下方に向う。端部は丸くおさめる。内面のかえりはやや大きく断面三角形を呈す。		焼成は良好で堅緻。	
				PT1－7	口　径16.8(復原)	天井部から口縁部にゆるやかに伸び，口縁部は下方に向う。内面のかえりはやや小さく，断面三角形を呈す。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は砂粒を含む。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				PT1－8	口　径18.4(復原)	天井部からやや丸味をもって屈曲して口縁部に続く。口縁部は屈曲して下方に突出し，端部は断面三角形を呈す。	天井部はヘラ切り後ヨコナデ，天井部の口縁部の境界はヘラ削りを施す。口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。 自然釉が天井全体に付着。	
			坏　身	PT1－9		底部と体部の境界は丸味をもつ。底部は丸味をもつ。	底部はヘラ切り後ナデ調整，体部内外面はヨコナデ。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				PT1－10	口　径10 器　高 3.3	口縁部は大きく外弯し，端部は肥厚し丸くおさめる。体部は直線的に開き，底部と体部の境界は屈曲して稜を取り底部は僅かに丸味を残す。	口縁部・体部内外面はヨコナデ，底部外面はヘラ切り後ナデ調整。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				PT1－11	口　径10.3 器　高 3.7	口縁部は外弯し端部は丸くおさめる。体部は直線的に伸び，底部と体部の境界は丸味をもつ。底部は丸味をもつ。	同上。	胎土は精良。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
			平　瓶	PT1－12	口　径 8 器　高15.3	口縁部はやや外弯気味に開き，端部はやや内方に傾いて丸くお	底部はヘラ切り後ナデ調整し底部と体部の境界はヘラ削りを施	胎土は砂粒・小石を多く含む。	在地の製品？

						さめる。口縁部中程で一条の浅い凹線を巡らす。 体部はやや丸味を残し，肩部はやや屈曲するものの丸味をもち，凹線を一条巡らせる。胴部は丸味をもち，底部と体部の境界は屈曲し稜をなす。底部はやや丸味を残す。	す。口縁部・体部の内外面はヨコナデ。	色調は黒灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				PT1－13	口　径 8 器　高14	口縁部は外弯し開き，端部は丸くおさめる。口縁中程で一条の凹線を巡す。 全体的に偏平で，肩部は屈曲し，稜をなし，胴部はやや丸味をもち，体部と底部の境界は屈曲して稜をなし，底部は平ら。	同上。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。 器表上面に自然釉付着。	東海地方の製品？
		土師器	甕	PT1－14	口　径17.5(復原)	口縁部は単に「く」字に屈曲し，短く開き，端部を丸くおさめる。体部はあまり張らない。	内面は口縁部はヨコナデし，体部はヘラ削り，外面は口縁部をヨコナデし体部は縦方向の刷毛目調整。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は黄褐色。 焼成は悪くもろい。	
				PT1－15	口　径27.2(復原)	口縁部は内弯して開き，端部は丸くおさめる。頸部は「く」字に屈曲し内面に明瞭な稜をもつ。	口縁部内外面はヨコナデし，体部内面は横方向の刷毛目調整。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は黄褐色。 焼成は良く硬質。	
			坏　身	PT1－16	高台径 7.8(復原)	底部は平らで高台は非常に小さく断面逆台形でややふんばる。	底部はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は黄褐色。 焼成はやや悪く硬質。	
		須恵器	坏　身	PT1－17	高台径 8.2(復原)	底部と体部の境界は屈曲して稜をなす。高台は断面逆台形で小さく，底部と体部の境界のやや	体部内外面はヨコナデ。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は淡灰色。	

						外方に付く。		焼成は悪く軟質。	
				PT1－18	高台径 7.1(復原)	底部と体部の境界は屈曲して稜を取り，やや外方に断面逆台形の低い高台が付く。	同上。	胎土は精良。 色調は淡灰色。 焼成はやや悪く軟質。	
			皿	PT1－19	口　径16.5(復原) 器　高 1.6(復原)	口縁端部は丸くおさめ，体部は短かくやや外弯し，底部と体部の境界は屈曲して稜を取り，底部は平らで，やや凹む。	口縁部・体部の内外面はヨコナデし，底部はヘラ切り。	胎土は砂粒を含む。 色調は淡灰色。 焼成は悪く硬質。	
				PT1－20	口　径25.3(復原)	口縁端部は丸くおさめ，体部は短かく，大きく内弯し，底部と体部の境界は丸味をもつ。底部は平ら。	口縁部・体部の内外面はヨコナデ。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	大形の皿である。
			坏　身	PT1－21	口　径12.8(復原)	口縁部は肥厚し，端部は丸くおさめる。 体部は直線的に開き，底部と体部の境界は屈曲して稜を取る。	同上。	胎土は細砂を含む。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
		灰　釉 陶　器	埦	PT1－22	口　径15.9(復原) 器　高 5.6(復原) 高台径 7.4(復原)	口縁部は外弯して丸くおさめ，体部はゆるやかに伸び中位で大きく内弯して深い。 底部と体部の境界は丸味を帯び，底部は平らである。高台はやや小さく，断面三角形を呈し，端部は丸くおさめる。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
		土師器	皿	PT1－23	口　径15　(復原)	口縁部はやや尖り，端部は丸くおさめる。体部は浅く大きく開き短い。底部と体部の境界は丸味をもつ。	同上。	胎土は精良。 色調は黄褐色。 焼成はやや良く硬質。	

	ＰＴ２	土師器	甕	ＰＴ２－１	口　径14.4(復原)	口縁部は直線的に短く開き，端はやや尖り気味に丸くおさめる。頸部は「く」字に屈曲し，体部は球体に近く，底部は丸い。	内面は，口縁部はヨコナデし体部は横又は斜方向の刷毛目調整。外面は口縁部はヨコナデし体部上半の⅓は斜方向の刷毛目調整し，下半は不定方向のヘラ削り。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄灰色。 焼成は良く硬質。 体部外面にスス付着。	
		灰　釉 陶　器	埦	ＰＴ２－２	高台径 5.3(復原)	底部と体部の境界は丸く，底部は平らで厚い。高台は断面逆三角形でややふんばり，端部は尖る。	体部内外面はヨコナデ。 灰釉は体部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ２－３	高台径 6.3(復原)	底部と体部の境界は丸く，底部は平らで，高台は垂直で断面逆三角形でやや外弯し端部は丸くおさめる。	底部は糸切り，体部内外面はヨコナデ。 灰釉は体部内外面に付く。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ２－４	高台径 8.4(復原)	高台は断面が長方形で，端部はやや丸味を帯び面を取る。	体部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ２－５	高台径 6.6(復原)	底部と体部の境界は丸く，底部は平らで高台は断面逆台形で端部は丸味を持つ。	体部内外面はヨコナデ，底部は糸切り。 灰釉は体部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ２－６	口　径12.8 器　高 4.1 高台径 7	口縁端部は丸くおさめ，体部は内弯して開く。 底部と体部の境界は丸く，低く断面逆台形で端部に面を取る高台が付く。底部は平ら。	口縁部・体部内外面はヨコナデ，底部は糸切り，灰釉は口縁・体部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＰＴ２－７	口　径12.8 器　高 3.9 高台径 6.6	口縁端部は丸くおさめ，体部は内弯して開く。 底部と体部の境界は丸く，低く断面逆台形で，端面を僅かに取	同上。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	

						る高台が付く。底部は平ら。			
				PT2－8	口　径12.2 器　高 3.7 高台径 6	口縁部はやや外弯し，端部は丸くおさめる。体部は内弯して開く，底部と体部の境界は丸く，外方に小さくふんばり，やや肥厚して内側へ弯曲し，端部は面を取る。底部は平ら。	底部外面は　糸切り，体部外面下半にヘラ削りを施す。口縁部・体部内外面はヨコナデ。 灰釉は口縁部・体部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
			皿	PT2－9	口　径12　(復原) 器　高 2.5(復原) 高台径 5.8(復原)	口縁部はやや屈曲し，外弯気味で，端部は丸くおさめる。 体部は内弯して浅く大きく開き，底部と体部の境界は丸く断面逆台形で低く，端部は丸くおさめる高台が付く。底部は平らである。	底部は糸切り，体部外面下半にヘラ削りが見られ，体部上半・口縁内外面はヨコナデ。 灰釉は口縁部内外面・体部内面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				PT2－10	口　径14 器　高 2.7 高台径 6.8	口縁部はやや屈曲して外弯気味となり，端部はやや肥厚し小さく外弯する。体部は内弯し浅く大きく開き，底部と体部の境界は丸く，僅かに外方に踏んばり，内弯気味の高台が付く。底部は平らである。	底部は糸切りで中央に凸状の切り離しの突出が見られる。 口縁・体部内外面はヨコナデ。 灰釉は口縁・体部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
			埦	PT2－11	口　径14.5 器　高 5.1 高台径 7.4	口縁端部は丸くおさめ，体部は内弯して開き，体部と底部の境界は丸く，外方に小さくふんばり，内側にやや弯曲し端部はやや肥厚して面を取る高台をもつ。底部は平ら。	底部は糸切り。体部・口縁部内外面はヨコナデ。 灰釉は口縁・体部内外に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				PT2－12		口縁端部は小さく外反する。		胎土は精良。 色調は白灰色。	

								焼成は良好で堅緻。	
				PT2－13	口　径18　(復原)	口縁端部は丸くおさめ，体部は深く内弯して開き底部と体部の境界は丸い。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。灰釉は体部・口縁部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				PT2－14	口　径19.6(復原)	口縁部は外弯し，端部はやや肥厚して丸くおさめる。 体部は内弯して開く。	同上。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
		緑　釉 陶　器	埦	PT2－15	高台径 8　(復原)	体部は内弯して大きく開き，底部と体部の境界は丸く，底部は平らである。高台は垂直に立ち，端部に面を取り，タタミ付きで，内面はヘラ削りで稜を取る。	体部の内外面はヨコナデし，体部と底部の境界はヘラ削りを施し，底部はヘラ切りにより中央は凸状に突出する。 緑釉は体部内外面に付着。	胎土は精良。 色調は胎土は白灰色。 釉は緑色。 焼成は良好で堅緻。	
		須恵器	坏　蓋	PT2－16		天井部と口縁部との境界に稜を取って屈曲する。 端部は小さく屈曲する。		胎土は砂粒を含む。 色調は灰白色。 焼成は悪く軟質。	
			皿	PT2－17		底部と体部の境界はにぶい稜を取って屈曲する。 口縁部は僅かに外反する。		胎土は精良。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	

第３表　出土遺物観察表（ＷＴ１・ＷＴ２・ＷＴ４・ＷＴ５）

地区名	遺構番号号	種類	器形	挿図番号	法量(単位cm)	形態の特徴	手法の特徴	その他	備考
W	ＷＴ１	須恵器	坏身	ＷＴ１－１		底部と体部の境界は丸味を持って僅かに屈曲し，底部はやや丸味をもつ。	底部はヘラ切り。 体部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＷＴ１－２		底部と体部の境界は僅かに屈曲して段をなす。 底部はやや丸味を残す。	底部はヘラ切り，体部内外面はヨコナデ。	胎土は細砂を僅かに含む。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	
		土師器	甕	ＷＴ１－３	口径12.5(復原)	口縁部は「く」字に屈曲して開き，端部はやや面を取るものの丸くおさめる。体部は丸味を持つ。	外面は口縁部はヨコナデ，体部はタテ方向の刷毛目調整。 内面は口縁部がヨコナデ，体部は斜方向の刷毛目調整。	胎土は細砂を多く含む。 色調は黄褐色。 焼成は悪く軟質。	
		須恵器	坏身	ＷＴ１－４	口径12.1(復原)	口縁端部は丸くおさめ，体部は内弯気味に開き，底部と体部の境界はやや屈曲して稜をとる。	口縁・体部内外面はヨコナデ。	胎土は小石を僅かに含む。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
	ＷＴ２	土師器	坏身	ＷＴ２－１	口径19.4(復原)	口縁部は軽く屈曲し，端部は肥厚してやや上方につまみ上げる。体部は大きく開く。	同上。	胎土は小石を含む。 色調は黄褐色。 焼成は悪く軟質。	
	ＷＴ４	土師器	甕	ＷＴ４－１	口径17.8(復原)	口縁部は，内弯して開き，端部内面に狭い面取りが見られる。頸部は「く」字に屈曲し，体部は開かづ，直立し最大径は，口縁径より小さい。	外面は口縁部はヨコナデし，体部は粗い刷毛目調整が斜方に施される。 内面は口縁部は横方向の刷毛目調整し，体部は横又は斜方向の粗い刷毛目調整。	胎土は砂粒を僅かに含む。 色調は黄灰色。 焼成は良好で堅緻。	

			鉢	WT４－２	口　径17.6(復原) 器　高10.9(復原)	口縁部は大きく外反し，端部は面を取り僅かに上方に肥厚する。頸部は大きく弯曲し稜をとって体部に続き，体部はすぼまり，偏平な胴部を作り丸底に移る。	外面は口縁部はヨコナデし，体部上半は縦方向の細い刷毛目調整し，下半は横方向又は斜行に刷毛目調整する。 内面は，口縁部下半に刷毛目調整の上からヨコナデし，体部上半に刷毛目調整の上からヨコナデする。	胎土は細砂質。 色調は茶褐色。 焼成は良く硬質。	
			甕 (把手付)	WT４－３	口　径20.8(復原)	口縁部は中程で僅かに内弯し，端部は面を取る。頸部は「く」字に屈曲し，内面に稜を残す。体部は把手までやや直線的に開き，胴部最大よりやや上方に把手が付き，把手は偏平で上方に伸びる。	口縁部は内外面はヨコナデ，体部は内外面は刷毛目調整。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄灰色。 焼成はやや良く硬質。	焼土付近出土。
			甕	WT４－４	口　径28.5(復原)	口縁部は内弯して開き，端部は直立して丸くおさめる。 頸部は「く」字に屈曲し，体部は開かづ直立し，最大径は口径より小さい。	外面は口縁部がヨコナデし，体部は斜方向の粗い刷毛目調整し，内面は口縁部が横方向の刷毛目で体部が横又は斜方向の刷毛目調整を施す。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は黄灰色。 焼成は悪くもろい。	
		須恵器	坏　身	WT４－５	口　径 9.6 器　高 3.9	口縁部は僅かに「S」字に立ち，底部との境界は丸味を持ち，体部も丸味をもっている。	底部はヘラ切り後にナデ調整。 口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
			高　坏	WT４－６	口　径 8.8(復原)	口縁部は僅かに開き，端部でやや肥厚する。 坏部底部との境界は僅かに凹み，明瞭な段をとる。坏部底部に脚部までの間に一条の凹線が走る。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は黒灰色。 焼成は良好で堅緻。	
		土師器	坏　身	WT４－７	口　径16　(復原)	底部から口縁部に大きく内弯し，		胎土は細砂質。	

						口縁部内面に一条の沈線が走る。底部は丸味をもつ。		色調は黄褐色。焼成はやや良くやや硬質。	
			甕	WT４－８	口　径13　(復原)	口縁部はゆるやかに外弯し，端部はやや外弯し丸くおさめる。体部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ，体部内外面は刷毛目調整。	胎土は細砂質。色調は黄褐色。焼成はやや良くやや硬質。	
	WT５	土師器	甕	WT５－１	口　径29.4(復原)	口縁部は内弯して開き，端部は直立し，丸くおさめる。頸部は「く」字形に屈曲し，体部はやや開く。	口縁部内外面はヨコナデ，体部内外面は刷毛目調整。		
		須恵器	坏　蓋	WT５－２	口　径 9.8 器　高 2.8	天井部は偏平で丸味がなく，中央はやや凹む。天井部から口縁部へ丸味をもち内反して伸び，天井部と口縁部の境界は全く段を有しない。口縁部は内弯して伸び，端部は丸くおさめる。	天井部はヘラ切り後にナデ調整。口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は小石・砂粒を含む。色調は黒灰色。焼成は良好で堅緻。	
				WT５－３	口　径10 器　高 2.7	天井部はやや偏平で，天井部から口縁部にゆるやかに内弯し，天井部と口縁部の境界は全く段を有しない。口縁部は僅かに外反し，端部は丸くおさめる。	同上。		
			坏　身	WT５－４	口　径 9.6 器　高 3	たちあがりは小さく内傾し，端部は丸くおさめる。受部は外上方に僅かにのび，丸くおさめる。体部は内弯し，体部と底部の境界はやや屈曲する。底部は平ら。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。底部はヘラ切り後ナデ調整。		

第4表　出土遺物観察表（WT3）

地区名	遺構番号	種類	器形	挿図番号	法量(単位cm)	形態の特徴	手法の特徴	その他	備考
W	WT3	須恵器	坏蓋	WT3－1	口径15.7 器高 4	天井部はやや丸味を持ち，中央に偏平な宝珠形のつまみが付く。天井部から口縁部にゆるやかに伸び，口縁端部は下方に短く屈曲し断面三角形を呈す。	天井部の½にヘラ削りを施し，口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				WT3－2		天井部から口縁部にゆるやかに伸び，口縁端部は下方に短く屈曲し，断面三角形を呈す。	同上。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				WT3－3	口径19.1(復原)	天井部は低く，天井部から口縁部へゆるやかに伸び，僅かに2段に屈曲し，口縁端部は，外下方に伸び，断面三角形を呈す。	天井部・口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は灰色。 焼成は悪く軟質。	
				WT3－4	口径21.4(復原)	天井部は偏平で，天井部から口縁部へゆるやかに伸び，口縁部はゆるやかに屈曲し，端部は丸くおさめる。	天井部の⅔はヘラ削り。 口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は小石を多く含む。 色調は白灰色。 焼成は良好で硬質。	
				WT3－5	口径11.3(復原)	天井部から口縁部にゆるやかに伸び，凹凸が激しく，口縁部は外下方に伸び丸くおさめ，内面のかえりはやや大きく，下方に突出し口縁部とほぼ同じになる。	口縁部と天井部内外面はヨコナデ。	胎土は細砂を多く含む。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				WT3－6	口径14.9(復原)	天井部は低く，天井部から口縁部にゆるやかに伸び，口縁部は短く屈曲し断面三角形に下方に突出する。	同上。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は淡灰色。	

						内面のかえりはやや小さく，断面三角形を呈す。		焼成はやや悪くやや軟質。	
			坏　身	WT３－７	口　径11　(復原)	立ち上りは大きく内傾し，非常に小さく，口縁端部は丸くおさめる。受部は小さく丸味をもって水平に突出する。 体部はやや内弯気味である。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				WT３－８	口　径11.4(復原)	立ち上りは内傾し非常に小さく，口縁端部は丸くおさめる。受部は小さく上方に向いて突出し，体部はやや内弯気味で浅い。	同上。	胎土は細砂を多く含む。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				WT３－９	口　径12.3(復原)	立ち上りは内傾して非常に小さく，口縁端部は丸くおさめる。受部は小さく，僅かに外方に突出し，体部は非常に浅く偏平な感じである。	同上。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は灰色。 焼成は悪くもろい。	
			蓋	WT３－10	口　径10.5(復原)	天井部はやや高く丸味をもち，口縁部は屈曲し稜をとって下方に向い，端部は内傾する面をとって尖り気味に終る。	天井部・口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は砂粒を少し含む。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	短頸壺の蓋。
			坏　身	WT３－11	口　径12.8(復原)	体部は内弯気味に伸び，口縁端部は丸くおさめる。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。	胎土は小石を少し含む。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				WT３－12	口　径12.4(復原)	口縁部は外弯し，端部は丸くおさめる。体部は内弯して開く。	同上。	胎土は小石を少し含む。 色調は淡灰色。 焼成は悪く軟質。	

				WT３－13	口　径12.7(復原)	口縁端部は尖り気味に終り，体部は直線的に開く。底部と体部の境界は屈曲して稜をなす。	同上。	胎土は砂粒を多く含む。 色調は淡灰色。 焼成は悪く軟質。	
				WT３－14	口　径17.1 器　高 4.5	口縁端部は丸くおさめ，体部は直線的に開き，底部と体部の境界は屈曲して稜をなす。 底部は平らで，高台は小さくふんばり，端面は水平で底部のやや内側に付く。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。 底部はヘラ切り後ヨコナデ。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は淡灰色。 焼成はやや良く硬質。	
			短頸壺	WT３－15	口　径12　(復原)	口縁部は短く，大きく外弯して開き端部は水平に面を取り外方に突出する。 体部は大きく直線的に開き，肩部で屈曲して稜を作る。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。	胎土は小石・砂粒を多く含む。 色調は淡灰色。 焼成は良好で堅緻。	
		土師器	甕	WT３－16	口　径16.5 器　高19.4 胴部最大径19.9	口縁部は短く，大きく開き上半部で僅かに外弯し，端部は面を取るものの丸味をもつ。 体部は，ほぼ球体に近く，器高・胴部最大径はほぼ同じである。 底部は丸底である。	外面は，口縁部はヨコナデし体部は僅かに刷毛目調整を残す。 内面は頸部に刷毛目調整を施し，体部はナデ。	胎土は細砂質。 色調は黄灰色。 焼成はやや良く硬質。	カマド付近出土。
				WT３－17	口　径24.1 器　高37.7 胴部最大径24.8	口縁部は「く」字に開き，中程で内弯気味に立ち，口縁部は面を取り，やや内側へ傾斜し頸部は屈曲し，内側で明瞭な稜を取る。 体部は長胴で，胴部最大径は口縁部より僅かに大きい程度で，底部は丸い。 器高は口径の約 1.5倍である。	外面は口縁部はヨコナデし，体部上半は刷毛目調整し，下半はヘラ削りを施す。 内面は，刷毛目調整後にナデ。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄灰色。 焼成はやや良く硬質。	カマド上部出土。

				WT 3 —18	口　径21 器　高37.3 胴部最大径21.4	口縁部は「く」字に開き，中程で内弯気味に立ち，口縁端部は面を取り内傾する。 頸部は屈曲し内側に稜を取る。 体部は長胴で，胴部最大径は口縁部より僅かに小さく，底部は丸い。	同上。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄灰色。 焼成はやや良く硬質。	カマド下部出土。

第５表　出土遺物観察表（ＸＴ１・ＸＴ２・ＸＴ３・ＸＴ４・ＸＴ５・ＸＴ６・ＸＴ７・ＸＰ14・ＸＰ39・ＸＢＰ３）

地区名	遺構番号	種類	器形	挿図番号	法量(単位cm)	形態の特徴	手法の特徴	その他	備考
X	ＸＴ１	須恵器	甕	ＸＴ１－１	口　径22.2(復原)	口縁部は外弯して伸び，端部は肥厚して段をなして面を取り，その下端に凹線を施す。 上端は面を水平にとり，やや中央が凹み，内方にも，やや肥厚する。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
			坏　身	ＸＴ１－２	口　径10.6(復原) 器　高 2.7(復原)	立ち上りは短く内傾して立ち，端部は丸くおさめる。 受部は溝状に凹み，斜上方に突出する。 体部はやや外弯気味で，底部と体部の境界はやや屈曲し，底部は浅く平らである。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。 底部はヘラ切り。	胎土は精良。 色調は灰白色。 焼成は良好で堅緻。	
	ＸＴ２－	土師器	甕	ＸＴ２－１	口　径26　(復原)	口縁部は「く」字に屈曲し外弯して開き，端部は水平に面を取り，中央はやや凹む。 体部はあまり張らない。	外面は口縁部はヨコナデし体部は縦方向の刷毛目調整。 内面は口縁部がヨコナデし，体部は横又は斜行の刷毛目調整。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄灰色。 焼成は良く硬質。	
		須恵器	坏　蓋	ＸＴ２－２	口　径15.8(復原)	天井部はやや高く，天井部から口縁部にゆるやかに伸び，口縁端部は屈曲して断面三角形に下に突出する。	天井部・口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は暗灰色。 焼成は良好で堅緻。	床面出土。
		土師器	甕	ＸＴ２－３	口　径12.4(復原)	口縁部は短く開きも小さい。端部外面下端に一条の凹線が走る。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は外面黄白色。 内面黒色。 焼成は悪く軟質。	

	XT3	土師器	甕	XT3－1	口　径23.8(復原)	口縁部は屈曲して開き，中程で内弯し端部は丸くおさめる。頸部は内側で明瞭な稜をとる。体部はなだらかに伸び，体部は張らない。	外面は口縁部がヨコナデし体部上半は刷毛目調整，内面は口縁部がヨコナデし，体部はナデで刷毛目調整を消している。	胎土は砂粒を多く含む。色調は黄褐色。焼成はやや良くやや硬質。	カマド付近出土。
				XT3－2	口　径12.4(復原)	口縁部はゆるく屈曲し，短く開きも小さい。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。色調は黄灰色。焼成はやや悪く軟質。	カマド内出土。
		須恵器	坏　蓋	XT3－3		天井部は偏平で，やや丸味をもち，天井部と口縁部の境界は明瞭な稜をとらづに屈曲する。	天井部はヘラ切り。	胎土は細砂を少し含む。色調は灰色。焼成は良好で堅緻。	
			坏　身	XT3－4	口　径 9.4(復原)	口縁部は短く僅かに屈曲して内傾し，やや直線的に立ち上る。端部はやや尖り気味に終る。体部の肩部の張りはやや弱い。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。色調は灰色。焼成は良く硬質。	
	XT4	土師器	坏　身	XT4－1	口　径12.7 器　高 3	口縁部は外弯し，端部は内側に肥厚し内面に凹線が走る。体部は内弯して開き，底部と体部の境界は丸味をもち，底部は平ら。	外面は口縁部・体部はヨコナデし，底部はヘラ削り。	胎土は精良。色調は黄白色。焼成は良好で硬質。	
				XT4－2	口　径16.2(復原)	口縁部は外弯せず，端部は内側に肥厚し丸くおさめる。体部は内弯して開く。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。色調は黄褐色。焼成はやや悪く軟質。	
				XT4－3	口　径14.8 器　高 3.1	口縁部は僅かに外弯し，端部は丸く肥厚する。体部は内弯して開き，底部と体部の境界は丸味をもち，底部は	内面は，口縁部はヨコナデし，体部は巾２cmの間隔で放射線状に暗紋が見られる。外面は口縁部・体部はヨコナデ	胎土は精良。色調は茶褐色。焼成は良好で硬質。口縁部外面にスス付	床面出土。

						平ら。	し，底部はヘラ削り。	着。	
		須恵器	坏　蓋	ＸＴ４－４	口　径13.8(復原)	天井部から僅かに屈曲して口縁部につづき，口縁部は屈曲し稜を取って下方に短く突出し，端部断面は三角形を呈す。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は細砂を含む。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＸＴ４－５	口　径17　(復原)	天井部から口縁部へゆるやかに伸び，口縁部は屈曲して稜を取り，下方に突出する。 口縁端部は断面三角形を呈す。	同上。	胎土は細砂を含む。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
			坏　身	ＸＴ４－６	高台径 7.6(復原)	底部は平らで，高台は非常に小さく逆台形を呈す。	底部はヘラ切り後にナデ。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
				ＸＴ４－７	口　径19.6(復原) 器　高 3　(復原) 高台径13.2(復原)	口縁端部は尖り気味に終り，体部はやや短く大きく直線的に開く。 底部と体部の境界は屈曲して稜を取り，高台は底部のやや内側に付き，低く方形でややふんばる。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。 底部はヘラ切り後にナデ。	胎土は砂粒を含む。 色調は白灰色。 焼成は良好で堅緻。	
		土師器	甕	ＸＴ４－８	口　径33.2(復原)	口縁部は外弯して大きく，短く開き，口縁部中位で段をなす。 口縁端部はやや肥厚気味で丸くおさめる。頸部は「く」字に屈曲し，体部の張りは小さい。	口縁部内外面はヨコナデし，体部内面はヨコナデ。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄灰色。 焼成は良く硬質。	
	ＸＴ５	須恵器	坏　身	ＸＴ５－１	高台径 7.7(復原)	体部は内弯して伸び，底部と体部の境界は屈曲し，逆台形の低い高台が付く。 底部は平らである。	体部内外面はヨコナデ。 底部はヘラ切り。	胎土は精良。 色調は白灰色。 焼成は悪く軟質。	

			坏　蓋	ＸＴ５－２	口　径16.4 器　高 4	天井部は丸味を持ち，中央に中高の偏平な宝珠形のつまみが付く。 天井部から僅かに段をなして口縁部に至り，口縁部は短く下方に突出し，端部は丸くおさめ外面に凹線が走る。	天井部はヘラ切りで，天井部と口縁部の境界はヘラ削り。 口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は暗灰色。 焼成は良好で堅緻。	焼土より出土。
	ＸＴ６	土師器	甕	ＸＴ６－１	口　径29.7(復原)	口縁部は大きく開いた後，中位で直立する。 端部はやや内傾気味に面を取る。 頸部は「く」字に屈曲し内面に明瞭な稜をとる。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄褐色。 焼成は悪く軟質。	床面出土。
		須恵器	坏　身	ＸＴ６－２	口　径15.3 器　高 4 高台径 9.9	口縁部はやや肥厚し端部は尖り気味に終る。体部は内弯して開き，底部と体部の境界は丸味を帯びて屈曲せづ，底部は丸味をもっている。高台は逆台形で低くやや内側に付く。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。 底部はヘラ切り後ナデ。	胎土は精良。 色調は黄灰色。 焼成は悪く軟質。	床面出土。
	ＸＴ７	須恵器	把手付短頸壺	ＸＴ７－１	口　径10.2(復原)	口縁部は屈曲して短く直立し，端部を丸くおさめる。 肩部と体部の境界は屈曲して稜をとり，体部はやや内弯気味に張らむ。 体部上端に断面三角形の把手が付く。 把手数は不明。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。 把手は手づくね。	胎土は精良。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	
			坏　蓋	ＸＴ７－２	口　径16.4(復原)	天井部は平らで，天井部から僅かに屈曲して口縁部に続き，口縁部は屈曲して下方に突出し，端部は断面三角形を呈す。	口縁部内外面はヨコナデ。	胎土は精良。 色調は灰色。 焼成は良好で堅緻。	

		土師器	坏　身	ＸＴ７－３	口　径15.4(復原)	口縁部は内弯し端部は肥厚して内方に向う。 体部は直線的に開く。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。	胎土は砂粒を含む。 色調は黄褐色。 焼成は悪く軟質。	
	ＸＰ14	須恵器	坏　蓋	ＸＰ14－１	口　径16.6(復原)	天井部は偏平で低い。 天井部から口縁部にゆるやかに伸び，口縁部は下方に短く屈曲する。	天井部はヘラ切り後ヘラ削り。 口縁部内外面はヨコナデ。		
		須恵器	坏　身	ＸＰ14－２	口　径13.2(復原) 器　高 3　(復原)	口縁部は外反し，体部は内弯気味に伸びる。 体部と底部の境界は屈曲し，底部はやや丸味を残す。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。 底部はヘラ切り。		
		土師器	甕	ＸＰ14－３	口　径11.7(復原)	口縁部は短く外反し，端部は丸くおさめる。 体部は球体に近い。			
	ＸＰ39	須恵器	坏　身	ＸＰ39－１	高台径13.2(復原)	高台は非常に小さく，断面三角形を呈す。			
	ＸＢＰ３			ＸＢＰ3－1	口　径12.6 器　高 4.8	口縁端部は単に丸くおさめる。 体部は内弯して開く。 体部と底部の境界は丸味をもつ。 底部はやや丸味を残す。	口縁部・体部内外面はヨコナデ。 底部ヘラ切り後，ナデ調整。		

第14章　秦荘町上蚊野古墳群

1　はじめに

当該調査は、ほ場整備に先立ち昭和51年度に６基、52年度に残り２基の計８基を発掘調査した。

調査は県文化財保護課技師近藤滋が担当し滋賀大学助教授林紀昭氏を現地の主任調査員に昭和51年度は依頼した。また調査に補助員として滋賀大学考古学研究会の諸氏、とりわけ今回の報告を分担担当していただいた藤川清文、吉井源三郎、清水万喜夫、三輪芳子、矢倉裕子の諸氏に多大の協力を得た。同時に二年間の調査に当り、秦荘町教育委員会の北川嘉夫、同町耕地課山田清孝の両氏にもなみならぬ多大の御助力を得た、ここに記して謝意を表したい。

なお、最後に２点ばかり、ここでおことわりしなければならない。一つは、遺跡の立地環境等については前年度調査に伴なう報告で記したことと、遺物実測図も掲載したので、『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ－Ⅱ（1977年）を参照して頂きたいこと。

二つは、１号墳もさることながら、昭和52年度に調査を実施した７および８号墳の図面関係が、現場より保護課分室に持ち帰えったものの、管理の不行届もあって、今報文には掲載できなかった。このことについては改めて図の見付かりしだい報告をすることで、大方の御了解を得たいところである。

2　各墳の調査

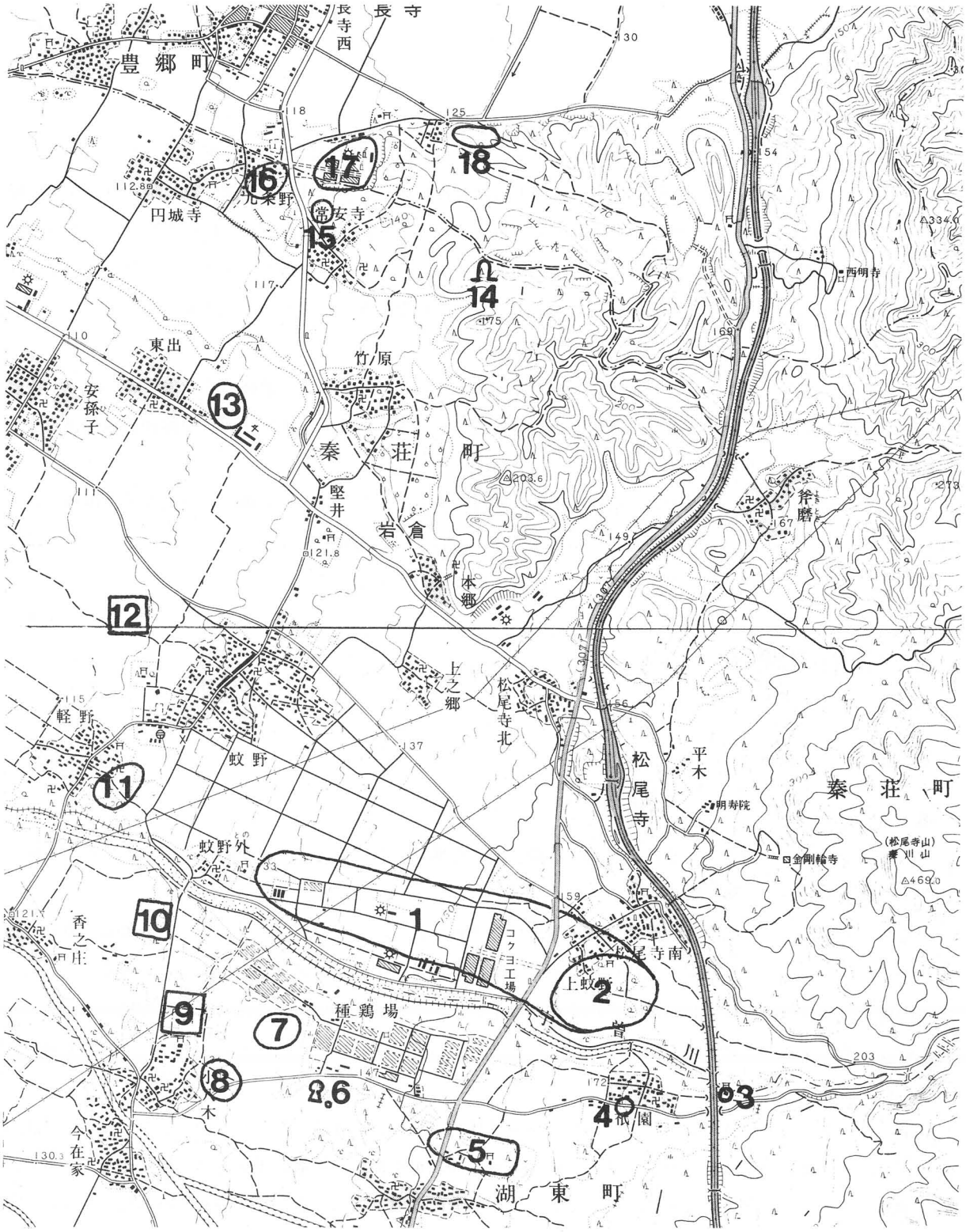
（1）２　号　墳

墳　　丘

当古墳は、東方より西方に緩やかに傾斜する微高地に立地し、周辺には、水田が広がっている。北東方向に、約20ｍの地点には、３号墳が隣在している。

調査前の測量において、墳丘の直径は８ｍ前後高さ２ｍを計るほどであった。であるので、墳墓の遺存状態は、悪いと思われたが、主体部の竪穴系横口式石室とともに、墳丘西半部も良好に遺存していた。後述のように、古墳は円墳で、規模は、直径約13m、高さ約２ｍと推定できた。石室は、地山整備後に掘られた掘り方（長さ 6.5ｍ、幅 2.5m、深さ 0.5m）内に構築されている。また、石室のまわりにいれたトレンチによって、周溝を確認することができた。

周溝は、トレンチで確かめえたので、その全様を具体的に知ることはできない。しかし、だいたいの状況は確認できた。その幅は、約１～３ｍ、深さは、約 0.2m～ 0.6mを計る。周溝の東半分は、地山掘り込みが垂直に近く溝幅も西半分に比べて約１ｍ広くなっている。西半分の周溝は、はっきりした掘り込みは見られない。溝の外側の掘り込みが、トレンチで確認できなかったものもあり、断言はできないが、西半分の周溝は、積みあげた盛土と墳丘外側の地山との接点の、傾斜の転換部を利用してつくられているようである。この東、西半分の溝の



第1図　遺跡位置図

1．金剛寺野古墳群　2．上蚊野地区　3．祇園東古墳群　4．祇園古墳群
5．平柳古墳群　6．小八木東古墳　7．木戸口遺跡　8．小八木古墳群
9．小八木廃寺　10．妙園寺遺跡　11．正境遺跡　12．軽野(塔ノ塚)遺跡
13．南深田遺跡　14．高坪古窯跡　15．大塚古墳　16．常安寺北遺跡
17．九条野古墳群　18．西ケ丘古墳群

第２図　上蚊野２号墳石室実測図

あり方の違いは、地形によるとも考えられるが、隣在する３号墳との墓域を区画するためとも推察できる。

周溝下底の絶対高は、南半分が、北半分より約 0.5m低くなっており、前方部からの景観を幽玄にするために工夫されたと考えられる。

この周溝に囲まれた墳丘の盛土積み上げ過程を、玄室の西側にもうけたトレンチで、検討すると、石室の構築と盛土積み上げは並行しておこなわれ、５段階にわたって盛土が積みあげられた模様である。

上述のとおり、地山整備後、掘り方を穿ち、石室を架構しているのであるが、地山整備時に、墳丘裾部にあたる所を、緩やかに傾斜させていて、墳丘裾の基盤をつくっている。この黄褐色の地山面には、礫が多く見られ、人為的に、基盤を補強するため敷きつめられたとも推察できるが、自然的要因、たとえば、河川の氾濫によるものだとも考えられる。

以上のような基盤上に盛土が積み上げられたのである。まず第１段階は、石室基底石と並行した段階で、玄室西側（左側壁側）は、石材と掘り方との空間を、黒色粘質土、淡黒褐色土等の６層の土砂で充填されている。

上層には礫（５～10cm各）が混入していて、床に敷く小型石の粉れ込んだものか、側壁の間隙をうめる小型石の粉れ込んだものとも考え得る。上層に特にみられるので、床石の石材の混入したものと考えられ、この段階に床石が敷きつめられたと推定できる。

玄室東側（右側壁側）は、黒色黄色土、黒色泥土等の３層で充填されている。奥壁側（北側）は、東側のトレンチと同じく、墳丘の遺存が悪かったので、第一段階の盛り土状況しかわからないが、基底石と掘り方の空間は、黒褐色土、黒色土等の５層で充填されている。この第一段階の盛り土は、掘り方を埋めもどしたもので、本格的墳丘形成は、第二段階以降である。

第２段階は、玄室側壁の２段目あたりに相当し、石材から約 1.5m離れたところに、淡黒褐色黄褐色砂礫質土を盛土したあと、暗黒褐色土、茶褐色土の一層で、そこにできた凹部を裏ごめしている。

第３段階は、玄室側壁の３、４段目あたりに相当し、前段階にできた凹部を利用しながら、石室方向に高く盛り上げ、墳丘を形づくっている。この段階の盛土は、黄褐色土、黒褐色土等を３層にわたって盛りあげている。

第４段階は、側壁の最上部に相当し、淡黒褐色土等を一層に盛っている。

第５段階は、天井石を覆う盛土で、黒褐色土層一層を盛りあげ、墳形を整えている。これは、現在の表土にあたる。裾部は攪乱されている。

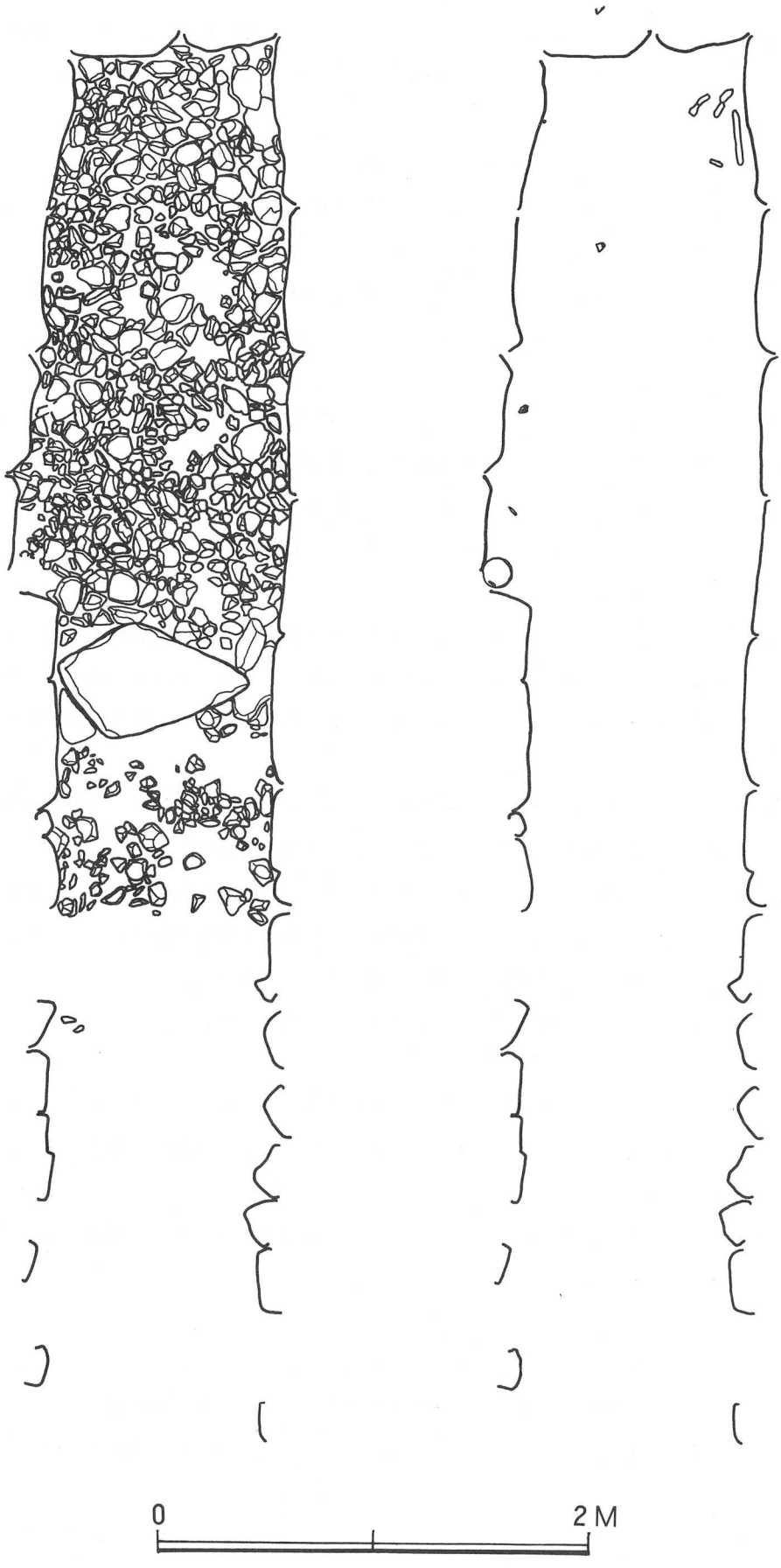
前述したように、墳丘裾部の地山は、周溝に向かって、掘り方下底面に相当する高さまで、斜めに整形されている。裾部は攪乱されていて明瞭でないが、この地山面に並行して、上記の５段階の盛土が盛られたと推定でき、周溝付近の裾端部には裏込めがみられる。

以上より、墳丘高は、掘り方下底より、約 2.5mは、あったと推定できる。また、周溝の地山切り込みまでを墳丘と考えるならば、直径は、約13mあったと推定できる。

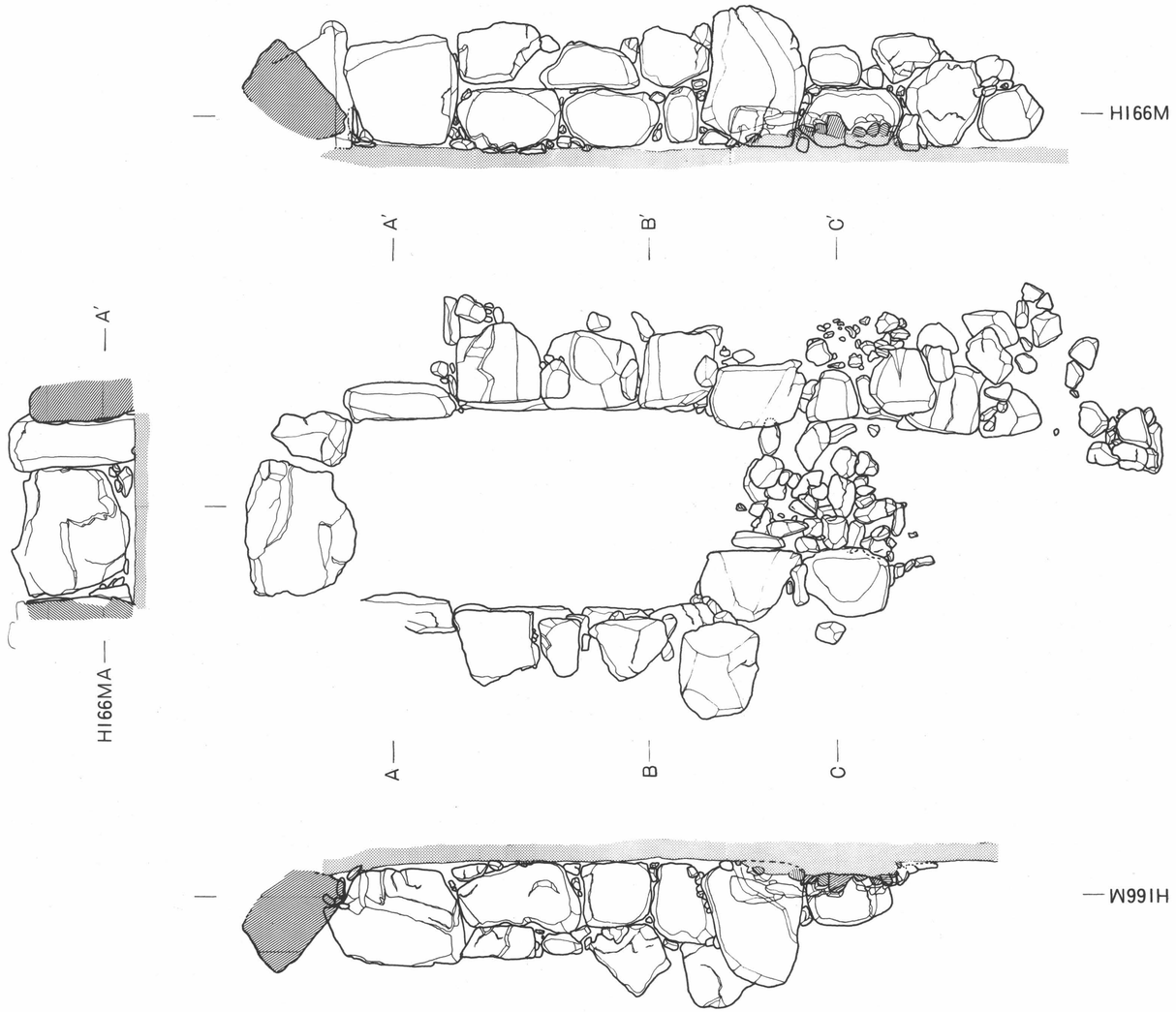
内部構造

内部主体は、竪穴系横口式石室と呼ばれているもので、羨道部に、階段を有する横穴式石室であった。石室は、奥壁側から盗掘を受けたらしく、奥壁の基底石は、２石を残すだけである。奥部両側壁は、２、３段までの石積みを残している。また、後代の耕作による盛土削平のためか、右側壁は石材の抜き取りがはげしく、側壁石材が外側にずれている。

天井石は、３石を残すだけであったが、石室高を知る手がかりとなった。左側壁、羨道部の遺存は良好で、旧状を示していると思われる。



第3図　上蚊野2号墳石室平面及遺物分布図



第4図　上蚊野3号墳石室実測図

第5図　上蚊野3号墳石室平面図

石室は、ほぼ南に開口しており、石室全長は約 6.5mで、左に袖のある片袖式石室であった。この袖は、立石によって形成されていて、玄門床にある敷居石とともに、玄室と羨道を区分している。

石室は、地山整備が、おこなわれたあと、長さ 6.5m、幅 2.5m、深さ 0.5mの掘り方内に構築されている。この掘り方は、通常みられる石室の掘り方より深く、２段階の作業によって掘られている。

以上のような掘り方内に石室は構築されていて、羨道端部は、掘り方の外に出ている。玄室長は、奥壁から敷居石までで、 2.5mあり、その幅は、奥壁部で0.96m、玄室中央部で1.10m、袖の玄室側で1.28m、玄門部で1.04mをはかる。袖の出幅は、0.24mを示す。

一方、羨道長は、 4.0mあり、幅は、ほぼ 1.0mである。玄門より 1.6mの羨道中央部に階段があり、ここから 0.8mのところに、閉塞石が積み上げられている。

石室の床からの高さは、一部残存していた天井石より、約 1.9mと推定できた。

天井石は、幅約 0.5m×長さ約１m×厚さ約 0.3m台の石が３石残存していて、この規模でいくと、10石ほどで石室を架構していたと推察できる。

石積みの石材は河原石で、ほとんどが自然石で使用され、一部割石も含まれている。

奥壁は、基底石だけが遺存していて、長さ90cm、幅65cm、厚さ25cm、の比較的大型石を左に、長さ75cm、幅40cm、厚さ20cm、の比較的小型石を右に縦長に立てられていた。この奥壁の基底石の高さは、側壁の２段分の石積の高さに相当する。

玄室の側壁の基底石は、規模の類似した石が、４石横長に立てられ、奥壁から５石目が袖石となっている。続いて、２段目は、平積みで積まれ、３段目、４段目は、ほとんど足の長い石によって小口積みで積まれている。側壁は、左右の高さが同じになるように工夫されていて、右側壁では、基底石と２段目の間隙に小型石をうめ、高さを調節している。

袖石は、玄室側壁の３段目までに達する大型石が立てられている。その袖の出幅は、左側壁の基底石を、奥部より徐々に外側にさげることによってつくりあげられている。この袖の出幅は、床平面において顕著にみられ、側壁の上部になるほど、出幅はなくなり、無袖式石室の平面企画を示すようになる。事実、石室発掘当初、無袖式石室と考えられていた。この床平面と石室平面の違いは、持ち送り技術によってつくられたものである。すなわち、左側壁の持ち送りを比較的急傾斜にすることによって、床における袖の出幅を覆い、天井石を架構する時には、袖のないものとしている。これは、天井石を架構しやすくするための工夫と考えられる。このあたりの側壁のせり出し幅は、約40cmで、他の部分は緩やかな持ち送りで垂直に近く、せり出し幅は、せいぜい10cmほどである。

袖石の上部側壁には、比較的横長の石が２段に積まれていて、ここから羨道部の石積みは雑になり、小型石が、小口積みされている。この転換は、掘り方の２次段階の境と一致する。右側壁で、小型石に変わるのは階段以降である。

袖から階段までの左側壁の基底石は、２石で玄室の基底石台の石と、比較的大きい石が置かれている。右側壁は、玄室基底石より大きい石、２石と、小型石で左側壁の袖石分の長さを補充しながら、階段部で両側壁があうように構成されている。

階段付近の左側壁に、石と石が横方向に組みあわさらず、石積みに、トギレ目がみられる。右側壁の場合、石積みの残りが悪いので、上記の現象があったとは確定できないが、階段部から急に、小型石にかわっているのを見ると、トギレ目があったと推定できる。

このトギレ目より側壁は基底石も小口積みで積まれるようになっている。

玄室床には、5㎝×5㎝～10㎝×10㎝の栗石が敷かれている。この敷石は、地山に黒褐色土を厚さ5㎝ほど敷いたあとに、しきつめられている。そして玄門の床には、石室中軸に垂直に、敷居石が置かれている。この敷居石は、玄門幅いっぱいにわたって置かれていて、側壁との間隙には、石がつめられている。また、この石の下底は、地山に達していて、床土を掘って、敷居石が置かれたと思われる。そのあとに、玄室床に栗石が敷かれたのであろう。敷居石は、玄室床より約20㎝の高さを持つ。

この敷居石と同じ高さで、階段まで、軟弱な土が敷かれている。発掘当初、この面が、床面であるとは考えられず、この下層の、玄室と同位の礫を含む面を床面と考えた。しかし、この軟弱土層が、階段後方の羨道床土の下層と通じる層を形成していることより、軟弱層上面こそが、床面と推察することができた。

以上の床面から約25㎝の高さをもつ階段が、羨道中央部につくられている。この階段をつくるために、地山上に、3層に土が敷かれている。この土層は、前述したように羨道前半部の軟弱床土に通じる土層であり、敷居石から、敷居石と掘り方南端との中間まで、地山に平行に敷かれている。中間点からは、掘り方端の方に高く盛られ、傾斜している。この中間点に、階段がつくられていて、階段は、石が、2段に、横積みされている。そして、前述の傾斜土層と階段との間にできた凹部に、黒褐色土を裏込めしている。これによって、階段以降の羨道は、掘り方をうめもどしたことになる。

以上、敷居石、階段石によって、石室の床の高さは3つに区分されている。

羨道は、階段より南に、約 2.5m続き、その中間点が、掘り方端で、羨道入口部の床面は、掘り方外に位置している。階段から、 0.8mのところに、閉塞石が幅 1.0m×長さ 1.6mにわたってつまれている。

閉塞石は、石室の中軸に直交して石を4段に横積みして壁をつくったのち、外側に裏込めするように石積みされている。

遺物出土状況

右奥壁部の床面より、直刀片が、左奥壁部床面からは、須恵器数片が、出土している。袖のコーナ床面からは、坏蓋身が出土していて、その付近からも須恵器数片が出土している。

このほか、床面に達する前に、攪乱層の、玄門あたりから、須恵器の破片が数点出土している。

（三輪芳子）

（2）3　号　墳

墳　　丘

当墳は、周りが田圃であるため、北側（奥壁側）と東側（右側壁側）においては、その畔が墳丘を切っており、正確な墳丘を推定することは困難であるが、現存では直径　8　m高さ 1.3 mを測り、推定直径は周溝の内側で約11m、外側で約15m、高さは約 2.5mの円墳である。

そこで、奥壁側と両側壁側にトレンチを入れ、断面をみながら築造法を考えてみたい。まず、黄褐色砂泥（又は黄褐色砂礫）の地山を平担にした後、各方向共、基底石を配し、裏込めのための凹部を築くために、石材の50㎝程後方から、黒色砂泥によって厚さ40～50㎝の盛土を行って墳丘の基礎を固めている。その後、裏込めを行い、石積みと並行しながら、今度は裏込め用の凹部を築くことなく、直接土を盛りながら、次第に墳丘を整えていってある。

具体的には、少しずつ三方に違いが認められる。まず、奥壁は、黒色砂泥の上層土、それと同様の働きを成す

と思われる黒褐色砂泥を盛り、裏込めとして、同じ黒褐色砂泥ではあるが、下層から順に、黄褐色砂を含むもの。堅緻なもの、砂粒状のもの、の三層を成して充填している。その後、暗褐色砂泥を２層、そして最上層に暗黒褐色砂泥を盛っている。

また、右側壁側では、奥壁側と同様、黒色砂泥と黒褐色砂泥で凹部を築いた後、まず石材が入れてあり、そして下層から順に、黒褐色砂泥、黄褐色砂泥、暗褐色砂泥、堅緻な黒褐色砂泥の４層が裏込めとして充填されてある。その最上層と並行する形で、黒褐色砂泥による墳丘築造が行われ始め、以後下層から、堅緻な暗褐色砂泥、暗褐色砂泥、黄褐色砂泥、再び暗褐色砂泥、黄褐色砂泥の順で、直接石材を覆いながら墳丘を築いていったものと考えられる。

一方、左側壁側では、裏込めとして、下層から、黒褐色砂泥、暗褐色砂泥（２層）の３層が充填され、３層目は、黒色砂泥の上部にも盛られ、墳丘が築き始められている。そして、その上層に、黒褐色砂泥、暗褐色砂泥を盛ることによって、石を覆うと同時に、墳丘を築造している。更に褐色砂泥と黄褐色砂泥の２層が認められ、ここまでが築造当時の墳丘であったと考えられる。

外部施設として、周溝が認められる。それは左側壁の外側から 4.8mの所で黒色砂泥が切られており、更にそこから 1.8m程地山が掘り下げられていることから確認しうる。なお、その上面に、黒褐色砂泥と、田土である灰褐色砂泥が流れ込んでおり、最上面には、築造当時の墳丘盛土と考えられる褐色砂泥が流れており、そのことからも、築造当初の高さは現存以上であったことが容易に理解できる。

それから、羨門の前面に、羨道の床面より30～70cm下方に礫石群が認められ、前庭の可能性もあると考え、発掘を進めていった。その結果、同種の礫は、本墳の盛土中に、多数存在するため、とりたてて前庭部を築いたものではないと思われる。しかし、他の部分に比べ、やや密集している点を考慮するなら、築造時に、同墳中の礫を、何らかの意識の下に集めたのではなかろうかと考えられるのである。

内部構造

石室は、南方向に開口する、左片袖式の横穴式石室であり、その規模は、玄室長が左側壁部で3.25m、右側壁部で3.15mであり、玄室幅は、奥壁部では1.70mを測るが、次第に大きさを増し、中央部では1.90mとなり、玄門部では1.85mと、若干減じており、わずかではあるが、中ぶくらみの様相を程している。

一方、羨道部の長さは、確定はできないが現存では3.20mを測り得る。また、羨道幅は1.20mである。

高さについては、天井石が欠損しているので明らかにはできなく、奥壁石、左袖石及び右側の袖石に当たる石が、それぞれ床面から1.20mの高さで立てられてあり、それらに揃える形で、他の側壁は２段に積まれているが、左側壁の最高所は1.30mを測り、必ずしも一致していないため、これらの高さをそのまま採用することは困難である。よって、高さは1.30m以上が推定できるというのみに留めておく。

石積法をみると、奥壁は２材の巨石が使用されており、１枚は 110cm×50cmで厚さが70cmの石材が縦長に、もう１枚は 120cm × 120cm、厚さ50cmの石が、それぞれ立てられてある。但し、後者は発掘時、既に外側に傾いていたため、現存高は 110cmであったが、元はもう１石と並んで、 120cmの高さで、垂直に立てられていたものと考えられる。

側壁は、まず左側壁をみると、基底石４石が、縦長あるいは横長に立てられ、奥から５石目が袖石とされてある。それらのうち、最奥部は、 120cm×90cmの巨石が横長に立てられており、他の３石は、それよりも小ぶりの石が立てられてある。更に、その最奥部の石の上部の高さに揃える形で、２段目が、平積みか小口積みにされている。ただ、基底石の３石目と４石目の２段目は、それらの積み揃えに従ってはいない。

袖石は、高さ 110cm、上底60cm、下底80cmの台形状の石材が縦長に立てられてあり、その出幅は50cmを測る。

一方、右側壁も、左側壁と近似した積み方であり、対称を意識していると思われる。即ち、４石の基底石のうち、最奥部は 100cm × 100cmの巨石であり、その上部に高さを揃えるように、２石目からは２段目が積まれており、その積み方も、左側壁と同様である。なお、４石目の基底石が明らかに小さい点、５石目が縦長に立てられた、 120cm×80cmの巨石である点は、左側壁を意識して、奥壁から同じ長さの所に、袖石と同じように石が置いてあるものと思われる。実際、その、袖石を意識した石は、床面では他の側壁と揃えて置かれているものの、上にいくほど内側に向かってせり出しており、最上段では20cm程の出が認められる。もっとも、それが当初から意識して斜めに立てられたのか、後世に何らかの力によって倒れてきたのかは不明である。

以上の点を考慮して築造順序を推定するならば、まず奥壁を立て、（両側壁同時か、先に左側壁を築いたかは不明であるが）次に、最奥部の側壁が立てられ、そして袖石を先に置いたであろう。そして、その間を埋める形で、他の側壁が築かれたであろうことは、袖石の形に合ったように側壁が積まれている点からも推定できるのである。

また、羨道側壁は、左側はわずかに１石が残存するだけであるので言及できないが、右側においては、基底石のみが立てられているという点は玄室と同様である。また、使用石材の大きさにも大差は認められない。

なお、以上に述べた石材は、すべて花崗岩の割石が使用されている。

内部施設としては、閉塞石が認められる。これは、必ずしも明確に認められなかったが玄門部分に、人頭大の石が、高さ30cm、羨道幅一杯で、 1.5m程の広がりをもって密集しているため、そうであると考えられる。

また、当初、床面に河原石による、石敷らしき面が予想されたので、注意しながら発掘を進めていったところ、大きさが不統一で、散在していること。板石もあるが、それらは位置からは棺台と認め難いことを考慮し、これらは、築造当初の石敷ではなく、後世において入ってきたものであると判断した。

遺物出土状況

左側壁よりに、袖石から約70cmの所に、短頸壺１ケ。袖石ぞいに鉄片３ケが出土している。そして、それらのいずれも、河原石が点在している面よりも下層であり、そのことからも、上記の通り、これらは石敷ではないと言えるのである。

（藤川清文）

（3）4　号　墳

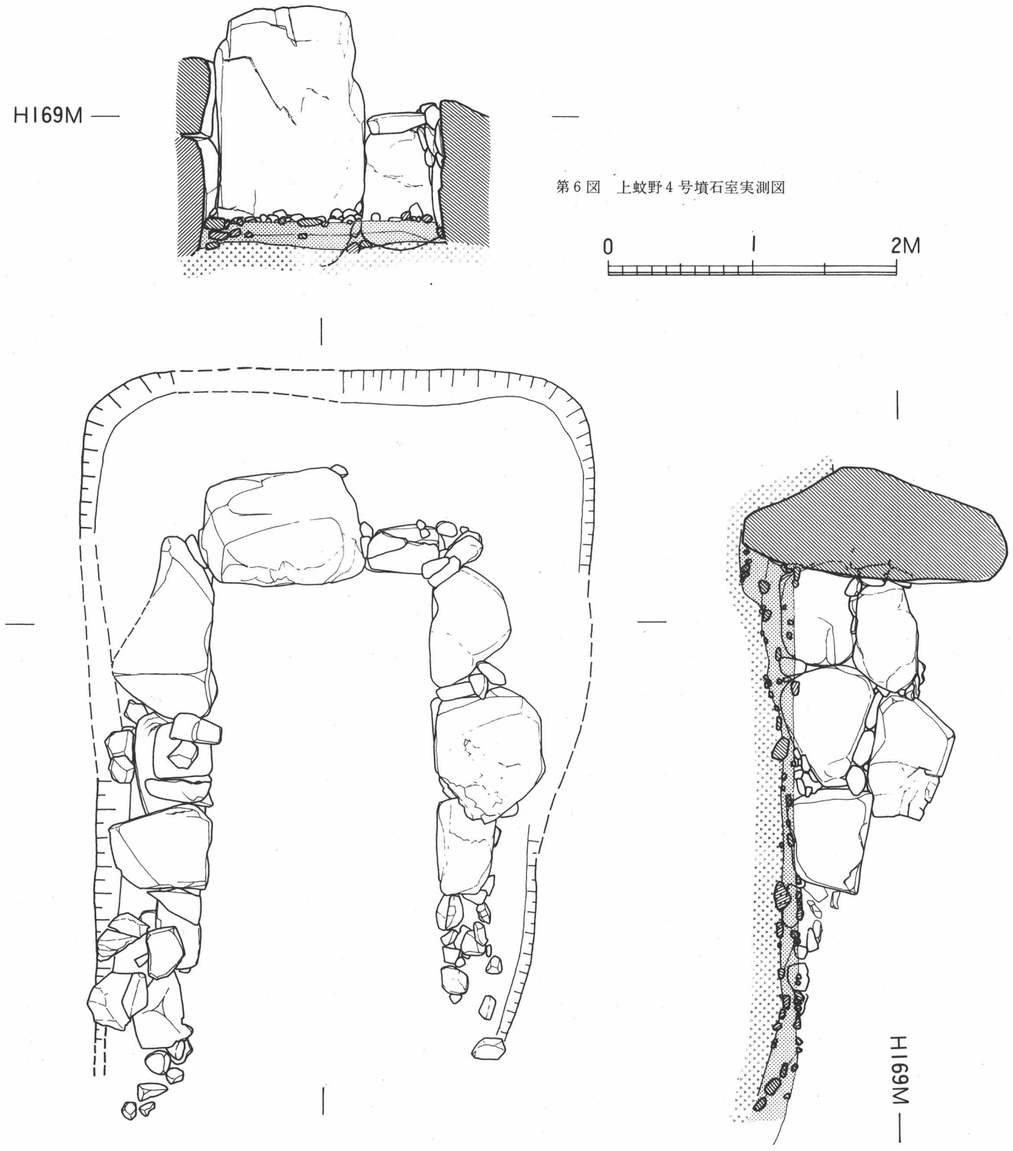
墳　　丘

当墳は、５号墳で述べる川の岸辺に築造されている。測量段階で半壊していて、遺存状態は当初から悪いものと予想された。

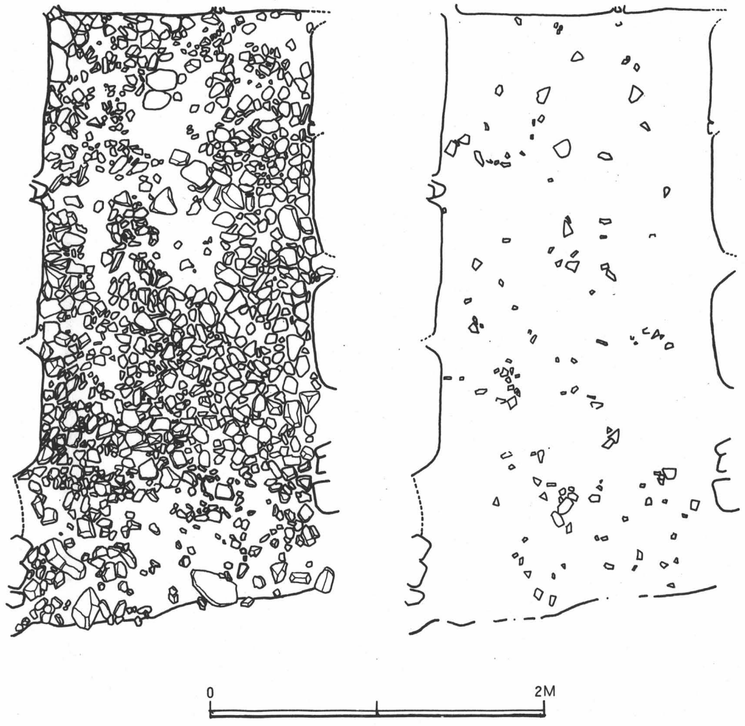
現存の高さは 1.5m、直径は10mを測ったが、後述するようにトレンチによって築造時の規模を推定すると、高さは約２m、外護列石が石室中央より約５m～６mの距離をおいて形成されていると思われるので、直径は10m～12mの円墳である。

そこで、墳丘の東側、西側、北側の３方における断面図から、墳丘盛土の築成過程を検討してみる。

それによると、３方向ともほぼ同じような盛土の形成を示しており、おそらく墳丘全体が同様の築成過程を経たものと考えられる。即ち、地山の上に両側壁、奥壁の基底石を置き、その石材の後方数10cm（東側では50cm、西側では30cm、北側では60cm）から高さ40cm～50cmの黒色砂泥を盛っている。この黒色砂泥と石材との間は掘方



第6図　上蚊野4号墳石室実測図



第7図　上蚊野4号墳石室平面及遺物分布図

で、この掘方を褐色砂泥と黒褐色砂泥によって交互に２～３層（東側、北側では２層、西側では３層）につき固めている。ここまでが墳丘築成の第１段階であり、基盤構築を行ったものと考えられる。

これ以後は、北側墳丘においては、下から暗褐色砂泥、褐色砂泥、黒褐色砂泥の３層に、また東側、西側墳丘では、黒褐色砂泥、暗褐色砂泥、黒色砂泥を交互に数層にわたってそれぞれ石室方向へ高く盛り上げては墳丘を徐々に形づくり、最後に黒褐色砂泥で天井石を覆い、墳丘を整えていたものと考えられる。

なお、外部施設としての周溝は認められなかった。また、墳丘東側においては、直径約20cm～30cmの石材が散乱しており、特に墳丘北東部では列を成すような様相を程し、外護列石の一部と考えられる。

内部構造

掘方については、奥壁と両側壁の一部で検出されたが、玄門部以前は削平されているため、その全容は不明である。

石室は横穴式石室である。ただ、後代の盗掘によると思われる損壊が著しく、天井石並びに両側壁上部は遺存しておらず、また玄門部以前も削平されていて、全く旧状を留めていない。

石室は、ほぼ南方向に開口しており、主軸は Ｎ－14°36'－Ｅ を示す。玄門部以前が破壊されているため、玄室と羨道の境界は不明であり、したがって両袖、片袖の如何もわからない。

玄室は、長さ 3.2m 以上、奥壁幅 1.6mで平面形は長方形プランを呈する。高さは、天井石及び両側壁上部を欠くため明らかにできない。しかし、現状では奥壁の石材が床面から約 1.5m、両側壁とも２段で約 1.2mの高さが残されているため、 1.5m以上はあったものと推定しうる。

羨道部については、現状ではその名残りすら窺い得ない状況であった。

使用石材は、大型の花崗岩で、割石である。奥壁は、長さ 180cm、幅 100cm 余り、厚さ80cmの巨石を縦長に立て、またその右に高さ 100cm 弱の石を縦長に立てて基底石としている。したがって、奥壁は大きい方の石の高さまで、小さい方の石の上にさらに１段あるいは２段の石を平積みまたは小口積みにしてあったものと考えられる。

側壁は、両方とも２段しか遺存していない。基底石を安定させるために地山を10cm～20cmほど掘って、横長に立ててある。奥壁においても同様であった。側壁２段目は平積みである。この上におそらく、もう１段あるいは２段の石材が同様の平積みにされてあったものと推定される。

なお、これらの石材は、いずれも１m前後の巨石を用いており、その間隙を小さな割石で補っている。

それから、現存段階まででは、持ち送りについては認められなかった。

床面については、直径５cm前後の河原石と１辺20cm前後の扁平石で石敷を成している。ただし、石敷下からの遺物出土が多く、また乱雑な敷き方であるので、本来の状態とは考えられない。

ところで、当墳の石室構造を推定するならば、現存の石積みの範囲では、２号墳や５号墳より、３号墳のそれにより近いため、「竪穴系横口式石室」ではない、通常の石室であったと思われる。

遺物出土状況

ほぼ全面に、須恵器片や鉄片が散在していた。

また、先述したように、遺物は石敷の上面と下層の両方からの出土があり、さらには黒色土器の出土がみられることから、後世の攪乱が著しい。

（清水万喜夫）

（4）5　号　墳

墳　　丘

5号墳は、近辺に流れる小河川によって形成された自然堤防上の斜面を利用して築成されていて、これは隣接する4、6号墳にも共通する。墳丘は天井石、封土の欠損、流出や松根による攪乱等により遺存状況は必ずしも良いとはいえないが、西、東側墳丘断面の観察から石室床面での中軸線から墳丘裾部までの距離を算定すれば復元径11mの円墳であったと推定される。高さは現状では明らかにできないが、西側遺存墳丘面の傾斜角や石室側壁上段石材から推定すれば石室側壁最下段石材の基底面から2.1m前後であったと考えられる。

次に墳丘築成及び構造に関して触れておきたい。西側墳丘では地山面（黄褐色砂泥）を掘り下げ調整し墳丘築成、主体部の基礎を形成していくが、側壁より約1.2mの地点に自然に配置したと考えられる大型の石が三石みられ、地山面削平時に除去することができず、また築成上障害にもならず地山面上に残したと考えられる。この石を安定させ、また裏込めの凹部形成のために厚さ20cmに亘い暗褐色砂泥、黒色砂泥を堆積させている。

まず、削平した地山面上に暗褐色砂泥を形成し基底石を配置する上での基礎とする。

石材配置後黒色砂泥を裏込めとして積み上げ、暗褐色砂泥を第二石の基礎として置き裏込めの褐色泥砂が堆積される。黒色砂泥層とほぼ同じレベルまで順に暗褐色砂泥層、褐色泥砂、黒色砂泥、褐色泥砂を盛り下層と同様にこの作業は側壁の築造と並行して進められる。黒色砂泥上からは墳丘面の築成に関連してくる。まず、黒褐色砂泥を小さく堆積させその両側に暗褐色砂泥、黒褐色砂泥を積み上げ、前者は裏込めの役割を果たし後者は西側にやや傾斜をもちながらのびる。

その上に再び黒褐色砂泥を固めた後に、側壁の裏固めに灰褐色砂泥を積み上げるが、この層から墳丘面の堆積状況が明瞭となってくるが、灰褐色砂泥とともに黒褐色砂泥は松根による攪乱を受け側壁との関連を明らかにできない。

その上に当時の墳丘面と考えられる暗褐色砂泥が15cmに亘って盛られる。後の削平を受け流出しており、天井石との関連を明確にできないだけでなく墳丘面もほとんど残していない。

裾部築成には、地山上の自然石が障害となっている。黄褐色泥砂を残して地山面を西に傾斜をもたせて削り、その上に暗褐色砂泥、黒褐色砂泥を積み上げる。その後に墳丘面である暗褐色砂泥を盛ったと推察されるが、おそらく下方へ流出し当時の状況を残さない。黒褐色砂泥上の褐色泥砂は西に傾斜するに応じて層の厚さが増し石が多く含まれており、当時の墳丘面が流出して堆積した層と考えられる。地形的に考えて、当時の墳丘面の裾部は暗褐色砂泥の西端とほぼ一致するのであろう。

一方、東側墳丘は層序を明確に検出できなかったため下層の様相しか明らかにできないが、地山面を掘り下げ西側同様暗褐色砂泥、黒色砂泥を平担に20～30cmの厚さで盛り基底面を形成して基底石を据えた後に黄褐色砂、暗褐色砂泥を裏込めとして固める。第二石を積みあげ暗褐色砂泥、黒褐色砂泥を盛り、その上に黒褐色砂泥を置き第三石の基礎を形作り、第三石を黄褐色、黒褐色砂泥で固めていく。

上層は層序が不明であるが、ある程度まで側壁の築成と並行して作業が進められ、以後墳丘面の築成に関連した積み上げがなされたと考えられ暗褐色砂泥が天井石、側壁最上段のあたりまでのび、西側同様に当時の墳丘面であったと推察される。

裾部は黒色砂泥、暗褐色砂泥が黒褐色砂泥と不自然な切り合い関係を示しているところから、前者二層を掘り下げた後に黒褐色砂泥を置きその凹みを黒褐色泥砂、で固めている。三層暗褐色砂泥、黒褐色砂泥、暗褐色砂泥

第8図　上蚊野5号墳石室実測図

第9図　上岐野5号墳玄室内遺物出土状況図

が順に堆積しているが、当時の墳丘面が流出して、凹部をうめたのであろう。当時の裾部は黒褐色泥砂の端部に対応し、この辺りから墳頂まで斜面を形成していたと考えられる黒褐色泥砂の部分を端部と考えれば裾部は落ち込み、形成していたことになり、この落ち込みは西側墳丘にも認められることから、この落ち込みが周溝として墳丘を取り巻き５号墳の墓域を区画していたのかもしれない。

奥壁部は、基底石設置後三層（黄褐色土、黒色砂泥、褐色泥砂）を裏込めとして盛り、次に後方の掘方を黒褐色泥砂で固め、二層を第二石の基礎として置く。石材配置後に６層で固めるが、その前に後方の掘方に黒褐色土を盛り石材との隙間の裏込めが堅固、容易になるようにする。黒色砂泥、暗褐色砂泥を同じレベルまで盛った後に、ほぼ水平位に暗褐色砂泥、褐色砂泥を盛っている。

外部施設として前庭部に列石が玄室右側壁西端から羨道左側壁に並行するあたりまで環状にめぐらされている。石材の規模は30～40cm程度で0.5 ～ 1.0mの幅をもって配置されるが、一部破壊を受けており墳丘南東部の遺存状況が最も良かった。墳丘斜面には列石に近接して10cm前後の小石が約1.5mの幅でみられるが、これらは北東から南西にほぼまっすぐに残り墳丘裾部にまで及ぶことから古墳の南東を近接して流れていた小河川によって自然堆積した小石であると考えられる。

周溝は、羨門から西に約3.9mの墳丘南西部で約２mに亘って検出され、その幅は90cm程度で列石下部に接するあたりに環状にめぐらされていたと推定される。周溝からは土坑が検出され、中からは須恵器、土坑のすぐ近くで須恵器、銀環が出土した。土坑の規模は0.4m × 0.5mで円形に近いと推定される。土坑の規模、須恵器、銀環の出土状況から、この土坑は墓前祭というよりは追葬の際に第一次被葬者の副葬品を整理したためのものと考えられる。遺物が周囲に散在していたことから、後世に何らかの破壊を受けたのであろう。

内部構造

内部主体は、階段を有する「竪穴系横口式石室」である。発掘当初、石室上に径60～70cmの松の大木が両側壁に根を張っていたため石材の残存状況が心配されたが、上段の石材がわずかに欠損し天井石は欠損、落石しているに留まり玄室内はほぼ旧状通り知り得た。羨道部は構築が堅固でなく発掘時にも若干の損壊を受け、良い状態で検出できなかった。

石室は南方向に開口し、主軸はN－ 53° 21′ 40″ －Wを計り、平面形態は左片袖をもつ長方プランである。石室の掘方については、玄室と羨道部を含む形でまず掘り、その後に玄室、階段部掘方を掘る二段階の作業が確認され、前者の規模は5.5× 2.7m、後者の場合 4.4 ×2.5× 0.4mに亘っていた。また奥壁部には、20cm程度の凹みが作ってあった。

玄室については、玄室長2.65m、幅は奥壁部で1.38m、入口部で1.34m、中央部で 1.4mという数値を得、かなり正確な長方形プランであることが判明した。

高さについては、天井石、側壁上段石材の欠損により明らかにできないが、奥壁部が７段で床面より 1.3m、左右側壁が８段で各々1.34m、1.28mであることから、天井石を含めて 1.5m 以上はあったと推察される。

扁平に削平された羨道部は、羨道南端の小石より南では床面より10cm程度落ち込んで以後ゆるやかな斜面を形成していることから、この石までが羨道部にあたると考え、その長さ 1.9m、幅 0.8m という数値を得た。幅は入口部～玄室との境界点までほとんど変化なく、まっすぐに伸びる。高さは欠損が著しいため、現状では床面より 0.9m、基底石より 1.1m 以上はあったという推察に留めたい。

次に石積法をみれば、まず奥壁については基底石として60×50×20cmの大型の石材を二石横置きしている。基底石より上段は30～40×15×30cm程度の細長い石材を６段に横置きし、奥行きは30cmに亘る。隙間には小石を置

くが顕著ではない。作業は基底石～三段目、四～五段、六段以降の３回に分けて積み重ねられたと考えられる。

側壁は、右側壁をみれば奥壁より約1.5mの地点で縦に組み違いの線が認められる。基底石は組み違いの線を境として60～80×30×40cmの大型の石材を各々二石横置きし、上段は30～40×20×30cm程度の石を現状では５段に横積みしている。奥壁同様３回に作業は分けられたと考えられる。隙間を小石で埋める例は奥壁より多くみられる。

左側壁にも右側壁同様、奥壁より約1.6mの地点で縦に組み違いの線が認められる。普通は左右前後の石材と組み合うため石材の隙間がそろわずアミダクジの様になっているが、この様に直線的であることは明らかに積み人が異なるからで各々一人の作業量と考えられ、玄室側壁だけで４人の作業量が必要となる。基底石は40～60×30×30×cmの石を各々３石横置きとし上段は７段横積みし、これらは３回に分けて積んだと考えられ、奥壁、右側壁と全く同一の構築法を示す。全体的に石材は右側壁に比して小ぶりであった。

また、左片袖部は50×20cmの細長い石を横置きし、以後六段に亘って横位に積んでいた。なお基底石より三、六段目の石材は左側壁と袖部両方にかかりコーナーに斜めに置かれ、斜め積みが認められた。

一方、羨道部は玄室側壁とは様相を異にし、階段以降の掘方内は縦置きの基底石で足を固め二段目からは横置きとしている。基底石は大型の石材を使用し、なかでも左側壁基底石は石室に使用された中で最も大きい。二段目は、玄室上段で使用された程度あるいはやや小ぶりの石材を置く。が、羨道部掘方以降は基底石から横置きされている。これは、羨道部掘方との関連によると考えられる。

右側壁では玄室付近で小石を縦に積んで玄室部との調整を計っているが、一方玄室側でも羨道部付近はやや小型の石材を使用している。

右側壁に比して左側壁は石材が大型化しており積み方に若干の差違が認められるため、羨道部では二人の作業量が必要と考えられる。玄室側壁の構築は４人の作業量であることから側壁だけで六人の作業量となり、奥壁を一人の作業量とすれば壁だけで七人の作業量となる。が、これらは各々の分担を個々に積み上げたものでなく袖部と玄室側壁と同様に奥壁と側壁の接点にも斜め積みが認められ、両者の間で積み揃えがあって各々壁の高さを確認しながら作業をしたと考えられる。

持ち送りは、二段目まではほぼ垂直に積み上げられ三段目からわずかに持ち送られているが、せり出し幅は左側壁は15cm、右側壁で23cmであることから、ほとんど直立した側壁を構成していた。

天井石は石室が比較的小型であるため小型の石材を３～４枚架している。

床面には（削平した掘方上に）黒色土を10cm程度盛り、石室基底面より高位に設けられている。ほぼ水平位を保ち平担な面を形成する。小石が散在しているが、崩れ落ちたもので、礫石、敷き石等の施設はみられない。ただ、奥壁より約10cmのところに石室に使用されたものと同じ程度の40×20×10cmの扁平で細長い石材が主軸よりやや西に寄って二石連なって並べられている。石材の周囲には須恵器、鉄鏃、刀子が確認され、この二石が棺台の役割を果たしていたと考えられる。

階段部については、左側壁片袖部石材に並列し90×50×30cmの規模が三段に横積みされている。階段部掘方は８回に分けて盛土される。築造法は、基底石を据えた後にその裏込めとして暗褐色、黒色土層を盛り、次に第二段を積み上げ石材と間隔を置いて４層（暗褐色、黒色、暗褐色、黒褐色土層）を裏込めとして置きその隙間を暗褐色土層で固める。最後に最上段石材を据えて裏込めに黒色土層を盛り土層上面を削平する。羨道部床面は羨門から階段までほぼ水平位を保つ。

なお羨道部床面に石材が認められるが、これは側壁が落石したもので、発掘時には閉塞石は確認できなかった。

石材はすべて一人で持ち上げられる程度の細長い河原石で、小口面が比較的短形を呈するものを用いて小口積みを行なっている。

遺物出土状況

5号墳は石室上の松の大木によって盗掘を受けず、他の古墳に比して多くの遺物を検出し遺存状況も良好であった。遺物は玄室中央部には見られず、多くは壁に接した部分に集められていて、遺骸をとり囲む状態で置かれていたと考えられる。

土器が多く大部分は須恵器で、杯蓋8点・杯身6点・壺4点・有蓋短頸壺1点・脚台付有蓋短頸壺1点・高杯1点・提瓶1点・横瓶1点が確認された他に、棺台付近では刀子1点・平根鏃2点・黄色ガラス小玉1点が検出された。なお、各種遺物はすべて床面直上あるいは床面上数センチにあった。

また、周溝内の土坑からは須恵器の杯蓋1点・杯身3点・短頸壺3点・壺3点とともに銀環が1点出土しており、土坑の位置、遺物状況から追葬の際に第一次被葬者の副葬品を整理したためのものと考えられる。

（吉井源三郎）

（5）6　号　墳

墳　　丘

6号墳は、他の上蚊野古墳群中の古墳と同じく、宇曽川の自然提防上に位置し、墳丘の形も他と同様円墳である。開口方向は、ほぼ南で、開口部前面では、なだらかな傾斜をもって、田畑へと広がっているが、すぐ前が道になっているため、トレンチを入れることができず、この6号墳では、1本のトレンチですべてを代表させることにした。

現在状況はあまり良くなく、墳丘の裾部もはっきりしないが、墳丘の北側後方から東側にかけて、幅 0.5～0.6mの小川が流れており、これが当時の周溝の名残りか、墳丘裾部であろうという判断から、6号墳の規模を12mと想定した。

まず、墳丘封土を見るために、石室を横断すを形で、石室の西側を北西一南東方向に墳丘を切って、封土の築成過程を調べてみたが、それによると、まず地山を平らにするために、暗褐色砂礫の土を 0.7m ほど敷き入れ、地面を水平にしてから、その上に、混礫黒褐色泥砂の土と、黒色砂泥の土を重ね入れ、墳丘の基底面を固めている。

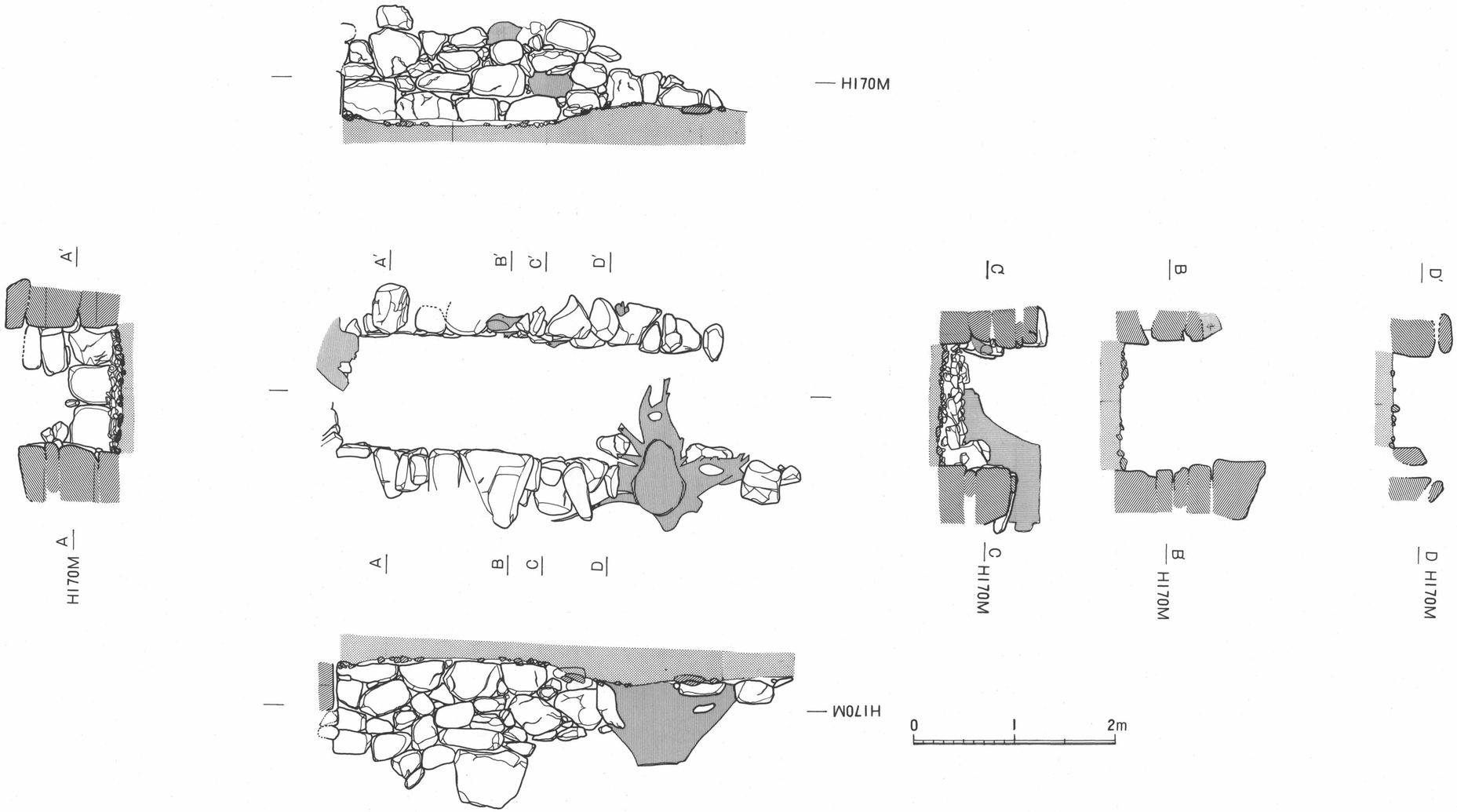
そして次からは、石室の側壁石材の積み上げと平行して、順次マウンドを形づくっている。詳しく述べると、まず、基底面に側壁の石材を2段に積み上げ、その裏込めのために、黒褐色砂泥の土を0.2～0.3mくらい盛り入れ、さらに石材を2段積み上げて、再び暗褐色砂泥の土を 0.3m くらい盛って裏込めをおこなっている。

後世の盗掘や開墾などによって、天井石や側壁の石材がかなり抜き取られてしまったため、盛土がどれくらいの高さまでなされていたかは明確にしえないが、残存する盛土から、封土は約3層に大別でき、さらにその傾斜角や、推定石室の高さなどから、マウンドの高さは、石室基底石から2m以上はあったと推測される。

これら3層の封土の中には、直径約8cmの河原石が数多く含まれ、中には、直径28cmにもなる大形の石も混ざっており、かなり石の多い土と言える。

内 部 構 造

6号墳は、松の木の根による破壊が激しく、しかも時間の関係から、掘方の構造を調べることができなかったが、床面の高さは、明らかに羨道部の方が高く、ゆるやかなカーブを描いて、羨道部から玄室部に向って落ちて



第10図　上蚊野6号墳石室実測図

第11図　上蚊野6号墳床平面図

いる。しかし、石室の断面図からも明らかなように、他の敷石より大きな石(階段石か敷居石か判断ができない)を境として、羨道部と玄室部の比高が極端に異なり、その比高差は、およそ 0.2m を計る。

石室は、ほぼ南南西方向に開口していて、主軸方向は、N－29° 01′ － Eである。

石室の平面形態は左片袖で、左袖部は一石で築成されており、側壁面より0.24m、内側に入っている。袖石は、高さ40cm弱、幅25cmの割石で、縦長に立てられている。

石室の築造は、床面から数cm掘り下げたところに、奥壁の石材、両側壁最奥部の石材、玄室側壁の基底石を順次置いたと推測されるが、玄室部と羨道部の比高が異なることや、奥壁・玄室部の東側壁・同じく西側壁・羨道部の側壁の石積法が全く異なることから、異なった手による築造とも考えられる。

石室プラン図によれば、玄室部では玄室の幅が、奥壁に接する部分で1.22m、中央部で1.30m、入口部で1.24mを計り、玄室の長さは2.60mで、幅と長さの比が、ほぼ１：２を示す、整然とした長方形プランを呈している。

羨道部は、西側壁が松の木の根によってほとんど覆われているうえ、東側壁は大規模な破壊を受け、かなり削平されていたが、現存する側壁の石材を計測すると、羨道部幅は約 0.9m、長さ約２mである。

石室の床面は、玄室部から羨道部にかけて一様に、直径６～８cm程度の河原石を１回だけ敷きつめ、玄室部入口付近に、これらの河原石とは異った大きさの自然石が、主軸に垂直に数石並べられているが、これらの自然石はいずれも、直径20～30cmの大きさで、玄室床面から８cmほど高いところに位置している。この部分は、段を設ける意図があったことは確実で、これらの自然石は、階段の石である可能性も強い。

この自然石を境として、羨道部は玄室部と８cm程度の比高差をもち、高くなっているが、ここでも玄室部と同様、直径20～30cmの河原石が１回敷かれている。

さらに、羨道部では、比高差のある地点から約1.2m 入口寄りの地点に、直径30cm前後の自然石が散在している。これらは、羨道部側壁の石材が落ち込んだものと考えることもできるが、散乱の状態から考えると、閉塞石の可能性が大である。

次に、石室の高さは、天井石が抜き取られているので、はっきりした数値は出し得ないが、玄室床面から現存する玄室部側壁の最上端までを計測し、さらにその上に天井石が架構されたと考えると、玄室部の高さは、２m以上と推定できる。

石積法を述べると、まず奥壁は、最初高さ60cmほどの基底石を３枚、縦長に立て、２段目からは、基底石と同じ、花崗岩の割石を平積みにしている。奥壁部の石材のほとんどが抜き取られているため、現存する石材だけで、石積法を判断することは危険であるので、これ以上述べることはさしひかえるが、かなり整然と築かれているように思われる。

次に玄室部東側壁の石積法は、幅40～60cm、高さ20cm前後の基底石を４石、横長に立て、２段目から４段目までは、同規模の割石を平積みに置いている。しかし、２段目からの石材は、前段の石材と石材の間に、２石に渡って、水平に並べられ、その間隔には、直径10～20cmの割石がつめ込まれ、その間隔をうめている。

さらに、玄室部西側壁の石積法は、東側壁ほど整然とは積まれておらず、また石材の大きさも東側壁のものより小規模で、幅30cm前後のものがほとんどである。基底石は、幅40～60cm、高さ30cm前後の割石を４石、横長に立て、２段目からは、小規模の石を平積みか、小口積みに置いている。ここで注目しなければならないのは、２段目からの石材の積み方で、東側壁の２段目、３段目の石材は、そのほとんどが水平に積まれているのに対し、西側壁の２段目、３段目の石材は、前段の石材と石材の間隔をうめるように、大小様々な大きさの石材を取り混ぜて積んでいる。さらに、西側壁で注目しなければならないことは、最上部に、60×50×70cmの巨石が積まれて

いることで、このように大きな石材が、石積みの最上部に見られるのは、これのみである。

6号墳では、持ち送りはほとんど認められないが、西側壁で、わずかに持ち送りの可能性が認められ、3段目から4段目にかけて、10cm程度せり出しが見られる。しかし、このせり出しも、石室の破壊によるものかもしれない。

最後に、羨道部の側壁の石積法は、基底石以外は残存しないので、はっきり把握することが出来ないが、基底石は、小口積みで、側壁の基底石の置き方と全く異っている。

玄室部と羨道部の構築法は、基底石以外、比較できないが、石の大きさについて見れば、さほど差異は認められない。

遺物出土状況

6号墳は、後世にかなりの盗掘を受けているらしく、遺物もほとんど残っていなかったが、それでも完形の須恵器の杯が2個出土している。この杯は、玄室中央部、西側壁から10cm離れた地点で、床面から約5cmのところで検出された。

（矢倉裕子）

3　上蚊野古墳群の特色

(1)墳丘築成

各古墳の墳丘断面図から、どの古墳とも石室の建築と並行して墳丘が形成され、それは一定の高さまで裏込めを中心に行ない、以後は墳丘盛り上げに関連した築成をしていることが共通して認められる。これは、石室掘方の凹部の様相との関連が強いといえよう。現状では盛土は少なくとも三段階に分けて作業され、第一段階が地山面凹部までの埋め戻しで数回に亘って側壁の裏込めを行なっている。3・4・5号墳では掘方を形成するために地山面上に新たに層を盛っている。第二段階では、裏込めを行ないながら厚さを増し水平位にのばして墳丘面及び裾部のキソを形成し、そして層を傾斜させて墳丘面を形作っていく第三段階へと移行していく。2号墳の様に5段階に細分される場合もあるが、基本的には大きく三分されると考えられる。尚、当時の墳丘面を残すものはみられない。

が、各古墳の建築法に差異が認められることは墳丘築成にも影響していて、大型の石材を使用する場合と小型の石材を数段に分けて積み上げる場合では第一段階で相違がみられ、前者が地山面にそのまま石材を据えて三層ほど裏込しているのに対し、後者では地山面上に基底面を形成してから石材を置き6～8層に亘って細かく裏込めしている。前者は3・4号墳に、後者は2・5号墳に顕著にみられる。また、2・5号墳では第一段階の裏込めとして礫・砂泥等を混ぜ合わせた混合層を使用していて、石材が小型のため裏込めによって側壁を堅固にある必要があったと考えられ、3・4号墳には認められない。

次に各古墳の相違について検討したい。

2号墳の西側墳丘は当群集墳の中で最もていねいで緻密な作業を行なっており、墳丘面の築成に関する盛土になっても石室の裏込めの層と裾部を形成する層に分けられている。一方、東側墳丘では裏込めが三層で西側に比して層位が厚く作業のていねいさに欠けるが、これは地形的な条件・石室の積み方・石材の大きさだけでなく、作業者の違いにも起因するのであろう。3号墳では墳丘盛土の中に石を含むことが多い。また、墳丘は傾斜がなだらかで他に比べて水平位の層位が比較的長いことに気付く。4号墳は、西・東側墳丘ともに下層に比べ上層では層位の薄い盛り方をしている部分がみられ、これらは墳丘を形成しながら裏込めの役割を果たしており、裾部を形成する層と明らかに区分される。他はゆるやかな傾斜をもって堆積しているのに対しこの部分で傾斜が変化しており、石室や墳丘規模との関連から高く盛り上げる必要性があったのかもしれない。5号墳は盛り方が2号墳の西側墳丘に類似しているが、緻密さに欠けている。

2・3号墳からは裾部から幅の広い周溝が検出されており、これらは隣接する他の墳丘との区画のために設けられたのであろう。5号墳は周溝を同じく裾部にもっているが、若干幅が狭いものであった。

（吉井）

(2)掘　　方

今回発掘調査した8基のうち、掘方が検出できたのは、1号墳、2号墳、4号墳、5号墳の4基であった。以下、これら4基の掘方について詳しく見ていく。

まず、1号墳では、形は隅丸の長方形である。4号墳では、奥壁と両側壁の一部で確認できた。玄門部以前が

削平されているため、その範囲の全容は不明であるが、羨道部をも含んでいたと推定できる。1号墳、4号墳の掘方は、後述する2号墳、5号墳の掘方と異なり、ともにその形が羨道部を一部含んだ隅丸長方形であり、1回の作業で掘っているということがいえる。

2号墳の掘方で注目すべきことは、玄門部左側において、2重の掘方が検出されていることである。これは、もっと精査をすれば、玄門部右側あるいは玄室部全体において検出できたと思われる。検出できた玄門部左側の2重の掘方は、明らかに内側の方が深く、また外側の掘方は羨道部を含む範囲で続いている。このことから、2号墳の掘方は、まず玄室、羨道を含む範囲で掘り、その後に、おそらく、一部羨道を含んで主に玄室部の掘方を掘ったのであろう。形は、1号墳、4号墳よりもさらに丸味を帯びた長方形である。この掘方の2段階作業は、5号墳においてはさらに顕著に見うけられる。5号墳では、やはり玄室、羨道を含む範囲でまず掘り、次に玄室床面の深さまでほぼ同じ範囲で掘っている。ただし、奥壁部においては、基底石を安定させるために、床面よりもさらに20cm余り深く掘っている。形も、2号墳同様丸味を帯びた長方形である。2号墳と5号墳の掘方は、2回めの作業の範囲は異なるが、ともに2段階の作業を行なっていることがわかった。

以上のように、掘方の様子に、2種類の明確な違いが見い出された。すなわち、1号墳、4号墳の掘方は1回の作業で終わっており、言わば一般的な掘方である。ところが、2号墳、5号墳の掘方は、2段階の作業を行なっており、その2回目の作業で、玄室部分をさらに深く掘っている。詳しく見ると、2号墳では、階段が羨道部中央に位置しており、その掘方は羨道を一部含むが、階段は含まない。これに対して5号墳では、階段が玄門部に位置していて、階段を含んで2回めの掘方が掘られている。このような若干の違いはあるが、2号墳、5号墳ではともに階段を意識し、玄室部を低くすることが必要であったために2段階の作業を行なったものと思われる。すなわち、階段を有しない一般の横穴式石室では掘方は1回の作業で済むが、階段を有するいわゆる竪穴系横口式石室では、玄室部を低くする必要から、2段階の作業が行なわれたものと思われる。

（清水）

(3)石積み法

今回の調査における古墳は、すべて円墳で、南に開口する石室を持つ左片袖式の横穴式石室であった。ここでは、石積み法を、全体に通して考察することによって、石室の関連性を追求してみたい。

調査した古墳は、6基あり、1号～6号の名称で呼んでいる。石積みの方法は、石材の種類、石室の企画等によって、差異がみられるが、だいたいにおいて、6基とも共通している。以下にその共通点をあげてみよう。

○奥壁の基底石が、縦長に立てられていること。5号墳は、横長に立てられている。

○玄室側壁の基底石が、袖まで、4・5石で横長に立てられていること。構築上の調節のために、袖付近で縦長に立てられている石室もある。

○側壁は、平積みか、小口積みで積まれているが、特に、2段目は平積みがみられ、中・上段目になると小口積みで構築されていること。

○袖石が、5号墳を除いて、側壁の2・3段分に達する高さの石が縦長に立てられていること。4号墳は、石室が半壊しているので不明である。

上記の共通点の列挙からわかるように、5号墳は、他とは違う特徴を持っている。すなわち、奥壁の基底石、袖石が、横長に立てられていること。また、石室のコーナに石を斜めにかけ、高さの積み揃えをするという特徴をもっている。

この特徴は、他の石室にはみられず、５号墳は、特異な存在と言えよう。

ところが、５号墳は、階段を有する石室であり、１号、２号、６号と共通している。これらの階段を持つ石室の石積み法は、羨道と玄室とにおいて、異なっており、石積み法の変化のあまりみられない３号墳とは、特徴を別にしている。この羨道と玄室の石積みの違いは、階段の有無に起因していると思われ、羨道の石積みは、竪穴系横口式石室を考察する上において、重要な知見をあたえてくれるであろう。階段は、その位置によって、２つに類別でき、羨道の石積みも、２つに区分できる。

一方は、階段が玄門部にある５・６号墳の場合である。側壁基底石は、階段以降の掘方内では、縦長に立てられ、掘方以降の羨道では、横長に立てられている。また、使用されている石材は、玄室に比べて不揃いである。

もう一方は、階段が、羨道の中央にある１・２号墳の場合で、羨道側壁の基底石は、１号墳においてはすべて、横長に立てられている。ところが２号墳は、１号墳とは少し違い、石材の都合上のためか、玄門から階段までで、縦長に立てられているものもある。階段以降は、玄室より小規模な石で、小口積みされ、そこに石積みのトギレ目がみられる。このトギレ目は、５号墳においてもみられる。１号墳の側壁の残りぐあいが悪いので、明確なことは言えないが、玄室よりは、不揃な石材が使用されて、２号墳ほど大きな違いはない。以上、１・２号墳は、階段の位置を同じにしながらも石積みにおいては、若干の違いがある。しかし、玄室の持ち送りによって、袖部の出幅を覆う技術、玄室の石材の規模等のように、石室全体を見るならば、同じものに類別できる。

同じように階段を持ちながらも、前者と後者において、石積み法は違い、５号墳と１号墳では、甚だしい差異がある。

以上のように、この古墳群の石積みは、石材の規模、石室の企画にかかわりなく、小口積みが中心になされていて、石積みの差異を、基底石の立て方にみることができる。特に、１・２号墳の羨道の石積みと５・６号墳の奥壁、袖石の石積みのそれぞれの違いは、石室の構築の時期差にあらわれた過渡的現象と思われる。また、使用されている石材は、花崗岩大型石、河原石中型石、小型石に区分でき、階段のないもの、階段の羨道中央にあるもの、玄門にあるものの３つの区分と一致する。

(4)床面の施設

敷　　石

今回調査した上蚊野古墳群の８基の古墳のうち、石室床面に敷石が存在したのは、２号墳、４号墳、６号墳、８号墳の４基のみであったが、これらの古墳の敷石はいずれも、直径５～10cmの河原石と、それらに混ざって、大きさ10×20cm前後の扁平石で形成され、これらが、玄室床面と羨道部床面全体に敷きつめられている。

しかし、２号墳と６号墳の敷石は１回だけであるのに対し、４号墳では、敷石の下から遺物が出土することが多く、また敷石の並び方が雑であることから、現存する敷石が本来の状態とは考えられず、２回の敷石を想定することも可能である。

つまり、追葬の際に、石室床面を整地し直して敷石を設けるのである。

敷 居 石

さて、石室床面の石の敷き方から考察してみよう。

まず初めに、玄室床面の地山に数cm盛土をし、整地した土の上に河原石を敷きつめ、次に、玄室と羨道の境界あたりに、玄室の敷石よりかなり大きな石を数石、主軸と垂直に並べ、それより羨道部側には、さらに10～20cm程度の盛土をして、段を設けてから、玄室部と同じ大きさの河原石を敷きつめているのである。

この玄室と羨道の境界に置かれた石材は、２号墳のものは割石、６号墳のものは自然石で、石材の大きさや数も、２号墳のものは玄門幅いっぱいにわたる大きな割石を１石、６号墳のものは、直径20～30cmの自然石を数石並べており、その置かれた位置も、２号墳では少し羨道部側に、６号墳では少し玄室部側に置かれている。

このように、これらの石は２号墳と６号墳で多少形態は異なるが、２号墳のそれは敷居石と推定されるので、６号墳の石材も、２号墳のものと同じ性格をもつものかもしれない。

この他、１号墳では、敷石は認められなかったが、玄室入口付近に、大きさ30×15cm、25×25cmの２石の自然石が主軸に垂直に並べられており、玄室と羨道の境界点にも、直径15～20cmの自然石が２石、これも主軸に垂直に置かれているが、これらは、２号墳や６号墳に見られる敷居石や段を形成する石と共通する性格をもつと考えられる。

また、２号墳と６号墳では、段を形成する自然石以外に、羨道中央部において、他の羨道部敷石より大きい自然石が存在する。２号墳では、羨道前半部床面より、さらに25cm高く盛土がなされ、その階段部分に、50×30cmと40×45cmの自然石が敷居石と平行に並べられているが、６号墳の場合は、直径30cm前後の自然石が羨道中央部に散在しているのみで、それらの位置関係は規則性をもたず、階段も形成しない。

４号墳については、敷石は認められるものの、羨道部がすべて破壊されてしまっているので、敷居石の有無は判断でき得ない。

最後に、敷石を有する古墳と、敷石を有しない古墳を比較してみよう。

２号墳、６号墳は階段を有する竪穴系横口式石室で、４号墳は普通の横穴式石室であるから、敷石の有無は石室形態による違いはなさそうであるが、今後、築造時期や被葬者の性格などを検討する必要があろう。

（矢倉）

(5)階段について

階段の定義をどう決めるかということが、まず問題となるが、本稿では、敷居石と区別するために、２段以上の石積みを有する場合を、階段として扱うことにする。なお、明確な階段とは決し難いが、類似すると考えられるものについても後述したい。

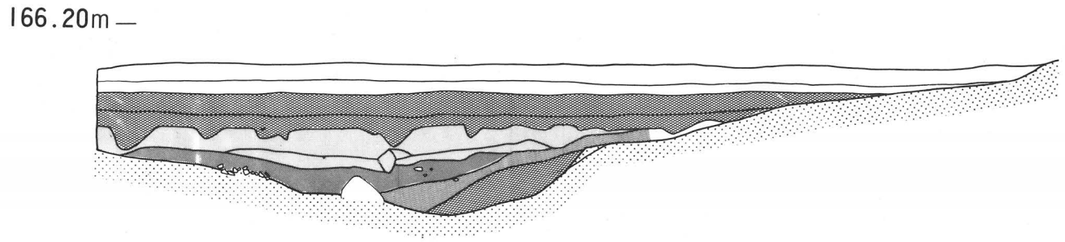
既に、各論の稿で述べてきたように、２号墳と５号墳が、これに該当する。しかし、両者の間には、少なからず差異が認められるので、それらについて、少し詳細に検討してみたい。

まず、共通すると考えられる点からあげていく。すると、(1)主軸に対し、直交する形で積まれている。(2)平積みとされている。(3)１段は、２石から成っている。(4)本当の意味の階段でなく、垂直に積まれている。の、４点にまとめられる。

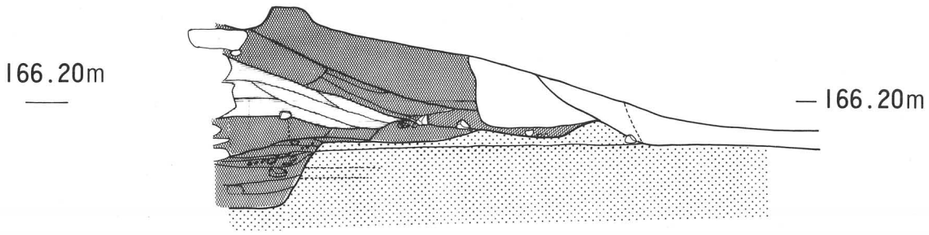
次に、相違する点をみていくと、(1)２号墳は、２段40cmであるのに対し、５号墳は、３段40cmである。(2)築造位置については、２号墳が、玄門から 1.7m 出たところの、羨道中であるのに対し、５号墳は、玄門部である。(3)使用石材は、２号墳は、側壁を成す石材と明らかな差異を有するが、５号墳は、側壁と類似の石材と考えられる。

以上のような点より、興味ある事実が、浮かび上がってくる。その一つは、どのような積み方を意識していたかということである。即ち、前述した、共通な点は、当初から意識して築造したことを物語り、段の数の違いにしても、高さを揃えるということを考慮した当然の結果だと考えられることである。

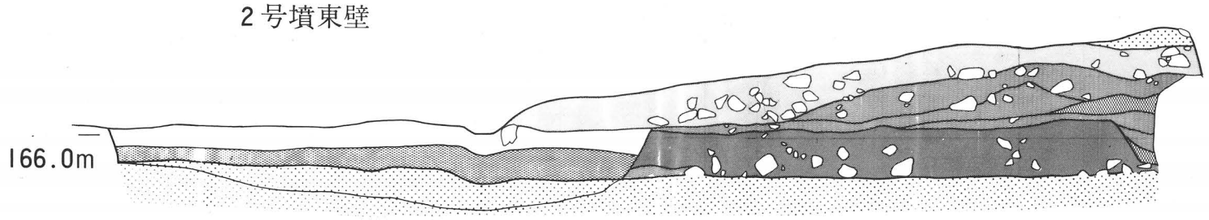
それに対し、使用石材の、側壁と比べた場合の相違や、築造位置の違いといったことはどのように解釈すれば



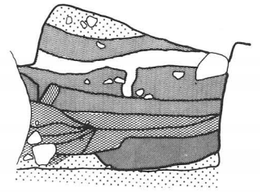
2 号墳東壁



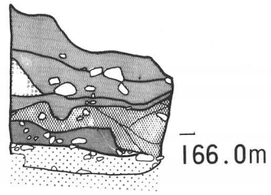
2 号墳西壁



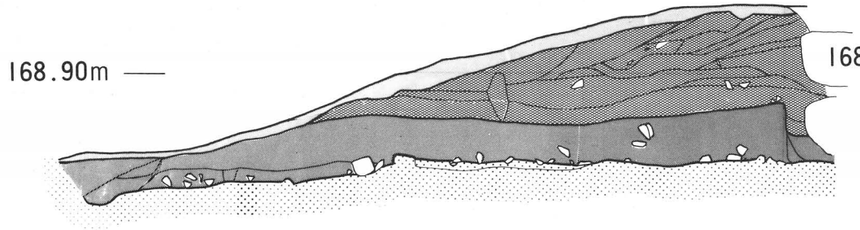
3 号墳西壁



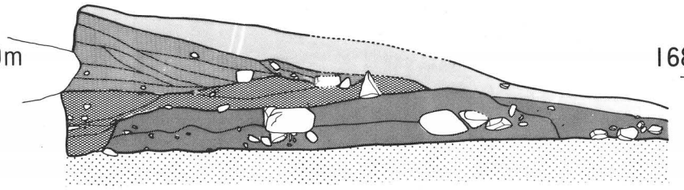
3 号墳東壁



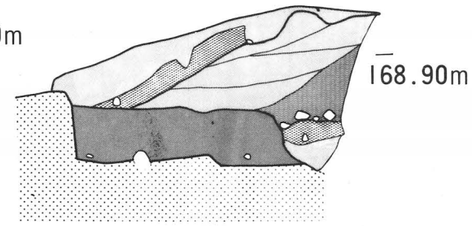
3 号墳北壁



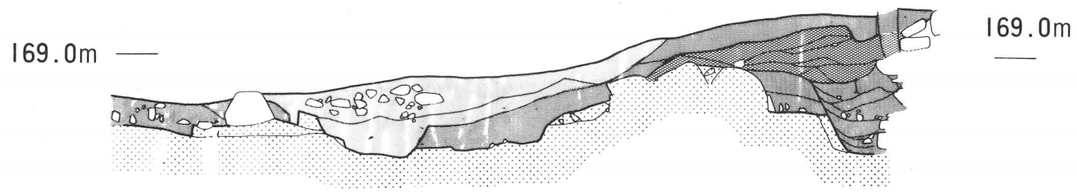
4 号墳西壁



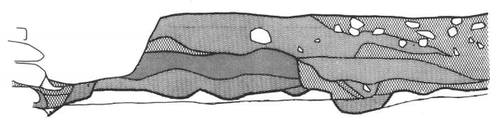
4 号墳東壁



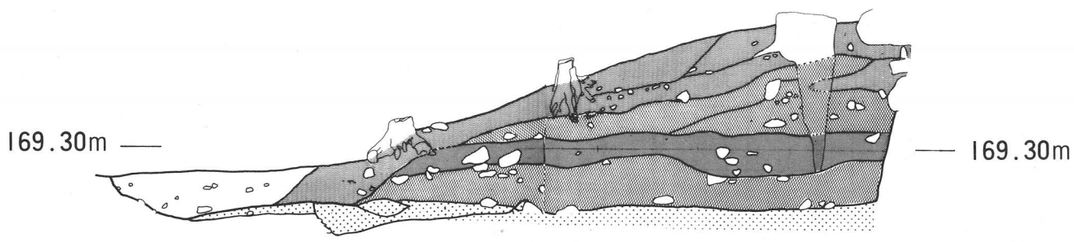
4 号墳北壁



5 号墳西壁



5 号墳東壁



6 号墳西壁

凡　例

- 黒色砂泥
- 黒褐色砂泥
- 暗褐色砂泥
- 褐色砂泥
- 灰褐色砂泥
- 黄褐色砂泥
- 黄色砂泥
- 黄色砂

第12図　上蚊野２～６号墳墳丘断面図集成

いいのだろうかということが問題となる。この点については、近江の、他の類例との比較検討を通して、後述したい。

次に、類似する形態について、考えてみたい。それには、1号墳と6号墳があげられる。

1号墳については、閉塞石との区別が難しく、前述の2基のような、明確な階段が認められないため、閉塞石として扱っておく。しかし、階段としての可能性も、勿論有するのである。

6号墳は、階段という性質のものではないが、明らかに床面に段差があり、しかも、その境界には、他の石敷と異なる板石が、主軸と平行に、数石並べられてある。これらが、単なる敷居石としてのものなのか、それとも階段が変化した型態であるのか、というこそについては、これだけでは決し難い。よってもう少し、総合的な立場より考察する必要があり、この点についても、後述することにしたい。

（藤川）

(6)分　　類

土器編年による分類

出土土器によって、本古墳群の築造年代を推定してみるなら、次の4期に分けることができる。

第1期（6C中半）…4号墳・5号墳

第2期（6C後半）…2号墳

第3期（6C末）　…1号墳・3号墳

第4期（7C前半）…6号墳

石室構造による分類

本群には、玄門部あるいは羨道中に階段を有する、いわゆる「竪穴系横口式石室」なる特殊な形態の石室が含まれている。よって、その点に着目して分類を行うなら、次の3形態が可能となる。

○甲類（明確な階段を有するもの）…2号墳・5号墳

○乙類（階段とまでは言えないが段差を有するもの）…6号墳

○丙類（段差のないもの）…1号墳・3号墳・4号墳・7号墳・8号墳

なお、甲類とそれ以外との差違については掘方や墳丘築成においても認められており、その特殊性について、県内の他の類例からも比較検討を加える必要があると考え、後に詳述したい。

その前に、先に試みた、土器編年による築造年代との関係をみた場合、必ずしも各形態による前後関係は確定できないということを述べておく。

（藤川）

4．近江における「竪穴系横口式石室」

(1)近江の後期群集墳における横穴式石室

初めに石室構造の上から分類を試みたい。その時、上蚊野古墳群だけでなく、湖東の、他の古墳群との比較検討の上から、まず、次のような分類を行った。

それは、袖石に着目したものである。即ち、袖石が側壁と同様に、横長に立てているかまたは、平積みか小口積みにしてあるのをA型式、巨石の1枚石あるいは、側壁石と変わらない大きさの石であっても、縦長に立てて

側壁と区別してるのをB型式とした。

それによると、A型式に入るのは、上蚊野古墳群では、5号墳のみである。しかし、湖東全域に目を転じると、竜石山2号墳[(1)]・三ツ山4号墳[(2)]・同6号墳・祇園西塚[(3)]の、合計5基が上げられる。

一方B型式は、上蚊野古墳群では、1号墳・2号墳・3号墳・6号墳・7号墳・8号墳の6基（4号墳は不明)。竜石山古墳群の、3号墳・4号墳・5号墳・三ツ山2号墳・狐栗古墳群[(4)]のA－2号墳・B－2号墳・B－3号墳・C－1号墳・丸山古墳群[(5)]の1号墳・2号墳・3号墳、それに、波涛平2号墳[(6)]・石渕山古墳が上げられる。

そこで、この両型式の間には、袖石の他にどのような違いがあるのか見てみたい。まず側壁の石積みについて言えるのは、いずれも、基底石は立ててあり、その上段は平積みか小口積みにしてあるのだが、B型式のそれは、大きさ、形とも変化に富んだ石で構成されているのに対し、A型式では横長の長方形に近い、比較的大きさの揃った石が使われており、基底石と上段の差もあまり認められないということが言える。なお、奥壁に関してはA型式では、基底石にわずかに大振りの石を使用しているに過ぎないが、B型式ではその基底石の巨大化が目立ち、中には三ツ山2号墳のような一枚石も現れる。

築造企画の面からみると、表1に玄室の長さを羨道の長さで割った比を示したが、それによると、（竜石山2号墳は羨道長が明らかでないが）A型式に属する4基の比の値は、いずれも他の石室に比べて、その値が大きいということが言える。つまり、A型式においては、玄室の長さに比べ羨道の長さが著しく短いという特徴を有する。

さらにもう一つ、これはA型式とB型式を区別する事項ではないが、A型式に共通して言えることは、玄室床面のレベルが羨道のそれより低いために、3～4重の石積みが、垂直あるいは階段状に築かれている、いわゆる「竪穴系横口式石室」となっている点である。もっとも、この「竪穴系横口式石室」は、B型式中にもその存在が認められるため、両型式と「竪穴系横口式石室」の関りが問題となってくるが、そのことについては後述したい。

以上のように両型式の違いをみてきたわけであるが、ではこの差違はどこに起因するのであろうか。そこで、表2によって、築造年代と型式についてまとめてみたので、それによって考えてみる。すると、湖東の群集墳に横穴式石室が築造されるのは、6C中葉から7C前葉に集中していることが分かる。そこで、先のA型式の築造年代をみるならば、5基共6C中葉に比定できる。なお、他で6C中葉と考えられるのは、B型式の三ツ山2号墳と、型式不明の上蚊野4号墳だけである。つまり、以上のような事実より、いまA型式と分類した古墳は、湖東の群集墳における、横穴式石室の初期の形態であるということが理解できよう。

では、ここで目を転じて、畿内の大型群集墳地帯である、河内の横穴式石室の編年[(7)]との関係において、湖東の群集墳をみることにする。まず、湖東において群集墳に横穴式石室が採用される6C中葉は、河内では第3期から第4期にかけてである。その石室形態を較べてみるなら、石積み法は、湖東の場合も、河内の同時期のものとして択えることができる。しかしながら、河内においては第3期に既に羨道の長大化が始まっているのに対し、湖東では第2期なみの規模である。また、以降の変遷については、石材の巨大化等、時期的にも河内のそれと、ほぼ足並を揃えている。次に、筆者が湖東において採用した、袖石による型式分類を、河内についてあてはめてみるならば、第3期がA型式、第4期を過渡段階として、第5期がB型式に、それぞれ比定でき、その点からも両地域の変遷の近似性が確認され得る。しかし、ここで注意せねばならないことは、河内では見られない、「竪穴系横口式石室」が、湖東においては多く見られるという点である。よって、その形態の考察なしで近江の横穴式石室の変遷を考えることは不可能と思われる。そこで、以下、「竪穴系横口式石室」の持つ意味について考え

ていきたいと思う。

(2)「竪穴系横口式石室」について

分　　類

前述してきた、二つの型式分類を基本に、「竪穴系横口式石室」を分類してみたい。まず、両型式を列挙する。

A型式…上蚊野5号墳・三ツ山4号墳・同6号墳・竜石山2号墳・祇園西塚

B型式…上蚊野2号墳・三ツ山2号墳・竜石山4号墳・波涛平2号墳

次に、各型式をさらに幾つかに分けることを試みたい。その際、「竪穴系横口式」たらしめている、階段部に着目すると、次の二点に気が付く。その一は、一口に階段と言っても、上段が控え積みにされて、文字通り階段が築かれているものと、2～4石が重ねられてはいるが、控え積みはなく垂直に築かれているものの2種類があるということ。その二は、階段の築かれている位置の問題で、袖石と並んで、即ち玄室と羨道の境部に築かれているものと、羨道中に築かれているものの、これまた2種類に分けられるということである。そこで、以上のことを考慮すると、次の8型式の分類が可能になる。ただし、本資料中には、6型式しかなく、他の2型式は、本来なら可能性があるということで、AX型式・BX型式と表現した。（なお、以下の文章中で「多石」とは袖石が側壁と同様に多石で構成されている場合を、逆に側壁と区別がない場合を「1石」。階段が控え積みで段築されているのを「階段」、段築されていないのを「垂直」。また、階段が玄室と羨道の境部（玄門部）に築かれているのを「境」、羨道中に築かれているのを「中」と、それぞれ略記する。）　（図1参照）

A1…多石・垂直・境、A2…多石・階段・境

A3…多石・階段・中、B1…1石・垂直・中

B2…1石・階段・境、B3…1石・階段・中

（AX…多石・垂直・中、BX…1石・垂直・境）

次に、各型式に該当する古墳を紹介する。

○A1…上蚊野5号墳・三ツ山4号墳

○A2…竜石山2号墳・三ツ山6号墳

○A3…祇園西塚

○B1…上蚊野2号墳・波涛平2号墳

○B2…竜石山4号墳

○B3…三ツ山2号墳

そこで、このような型式間の関係を考えてみたいが、その前に、各古墳群別にみていこうと思う。

各群集墳別の「竪穴系横口式石室」

上蚊野古墳群については前述してあるのでここでは、三ツ山古墳群と竜石山古墳群について考えてみる。

三ツ山古墳群

4号墳（A1）・6号墳（A2）・2号墳（B3）の3基である。まず、A型式がB型式に先行することより、4号墳と6号墳が2号墳に先行することは既知となる。そこで、変遷という点に考慮してもう少し詳しくみることにする。

袖石について、さらに言うなら、4号墳や6号墳は、袖石というより前壁と呼ぶにふさわしく、基底石2石分によって袖が築かれている。そして3石目が階段であり、その階段と言っても前壁の上段が1石分取られてある

に過ぎないと思われる。さらに、４号墳と６号墳を比べてみるならば、前者の階段は垂直であるのに、後者は段築が成されている。その両者の違いについて、２号墳が何らかの示唆を与えてくれそうである。即ち、当墳は既に袖石も、細長い１石を縦積みとして用い、そこには最早前壁の面影はない。一方、階段は玄門より約80cm出た羨道中に築かれている。そして、２重で段差は60cmでありながら、２段の段築を行っている。つまり、４号墳は60cmで垂直だったが、６号墳は75cmで段築になったのは、必ずしも高さだけに帰因するのではないということが言える。

その、別の要因として、羨道としての意識があげられるのではなかろうか。つまり、A型式の２基においては、玄室は玄室として、羨道は羨道としての区別があまりにも明確である。例えば、羨道部の石の積み方が玄室のそれより乱雑であり、掘方も別々であるということがそうである。これらのことは、B型式である２号墳にも該当するが、それは必ずしも玄室と羨道によって区別されているのではなく、羨道の途中（階段が構築されている位置）で分けられているのである。つまり、後者においては明らかに羨道の一部は玄室の延長という性格のものであり、前者のような付加的な羨道とは区別されるべきであろう。

以上のように考えたとき、前壁としての垂直な階段が、段築されることにより、羨道とのつながりがより濃くなってきたと考えられる。そして、本群においては、段築したまま袖石を１石にしながら、階段の位置を羨道中まで持ってきたという変遷を辿ったと考えられる。つまり、４号墳→６号墳→２号墳の順となろう。

竜石山古墳群

３基の「竪穴系横口式石室」のうち型式分類が可能なのは、２号墳（A２）と４号墳（B２）である。これも、２号墳→４号墳という変遷は明らかなので、そのことと型式分類との関係について少し考えてみたい。

型式的には、袖石以外はどちらも段築があり、玄門部に築かれているという点で共通しているものの、若干の差違が認められる。つまり、階段石の積み方を見たとき、２号墳は３重で、いちおう３段にはなっているものの５～10cmの控え積みであり、階段というより垂直に近いと言えよう。そして、三ツ山４号墳と同様、袖石と一緒に前壁を構築しており、一部に上段の石が積まれていない結果として階段が築かれていると考えられる。しかしながら、そこに階段としての意識の現れをみることができるのである。

一方、４号墳は高さ75cmの４重４段で、控え積みの幅も２号墳より大きく（写真のため、正確な数値は不明）階段として利用することが可能だったと思われる。さらに大きな違いは、側壁に比較的大型化された石材が使用されているのに対し、階段では板石が平積みか小口積みにされている点で、明らかに階段としての意識の下に、側壁とは別に構築されたものと思われる。なお、両者とも、羨道は墓壙外、地山上に設置されている。

以上のことを、変遷という点からまとめると、築造年代は変わらないものの、細かくみれば、袖石が多石積みの前壁から１石になるに従い、階段部も前壁の延長ではなく、段築された文字通りの階段へと変化していったと言える。

近江における「竪穴系横口式石室」の変遷

以上のように、各群別に変遷という点に注意して考えてみた。そこで、そのまとめを兼ねて近江全体としてどのような変遷を辿ったのかを考えると共に、残りの２基の位置付けをも試みようと思う。

まず、A型式がB型式に先行するのは前述の通りである。それから、位置では玄室と羨道の境の後に、羨道中に築かれるということも三ツ山古墳群や上蚊野古墳群の例から指摘できる。しかしながら、突発的に位置が変化するのではなく、前壁として玄室と羨道を区切る一部を成していた階段が、羨道の一部をも玄室に含め、両方の羨道をつなぐ役割を持つ段階がくる。それが、祇園西塚や波涛平２号墳にみる如く、袖石分だけ羨道中に築かれ

る時である。そして、両者の移行的段階として、三ツ山６号墳のように基底石は袖石と並んでいるが上段は控え上積みによって段築が成されている時期をあげることができる。ただし、この段築は必ずしも移行期だけのものではなく、例えば祇園西塚のように、羨道中に移ってからもなお段築を続けている時期もある。

以上のように、三点の移り変わりをみてきたが、それらがどのように絡み合って変遷していくかが次の問題となる。まず、A型式内の変遷をみていく。そのとき、河内の横穴式石室の変遷がそうであるように、羨道が玄室と区別された付加的なものから、次第にその存在が玄室と同等に意識されていくのではなかろうかという点に着目してみた。すると、Ａ１型式がまず先行し、上段が控え積みにされたＡ２型式へと進み、段築されたまま羨道中に移ると、Ａ３型式となる。ただし、全体としての流れは以上のように考えられるにしても、それが必ずしも同一コースとは言い難い。例えば、上蛟野５号墳と竜石山２号墳との間に企画上の共通点を見出すことは困難であるが、三ツ山４号墳と竜石山２号墳・三ツ山６号墳は玄室幅がほぼ同じであり、何らかの結びつきが考えられる。一方、祇園西塚の場合、竜石山２号墳と玄室幅がほぼ等しく、階段の高さも等しいという様に、つながりが考えられる一方、上蛟野５号墳と、奥壁から階段石までの長さが同じであり、上蛟野５号墳では基底石の６石目を袖石としているところを、１石分縮めて５石目とすると、丁度祇園西塚になる点など、Ａ１型式とＡ２型式の両方とのつながりが考えられる。あるいは、上蛟野５号墳と竜石山２号墳の間に媒介的なものがあり両者は同一コースで結べるかもしれない。

そこで、次にB型式との関係をみたいが、B型式が時期的にA型式に続くとはいえ、直線的に並べることには問題がありそうだ。というのは、Ａ３型式において、既に羨道が意識されているにも関らず、Ｂ２型式のように再び玄室と羨道の境に戻るということは考え難いからである。故に、むしろB型式自体の変遷をみるより、個々にA型式とのつながりという点に着目した方が妥当に思われる。しかしながら、そうした場合でもいくつかのコースが考えられるので、それらは整理のため図２にまとめた。

そこで、個々の型式について調べてみると一番古いと考えられるのは、該当するものがないものの、ＢＸ型式としたい。というのは、Ｂ１型式中の波涛平２号墳は、祇園西塚同様袖石分だけ羨道中に築かれているので、Ａ１型式に極めて近く、両型式の過渡的な段階としてＢＸ型式の存在を考えざるを得ないからである。つまり、垂直ということを考慮すると、Ａ１型式→ＢＸ型式→Ｂ１型式というコースが考えられる。そして、その裏付けとして、上蛟野５号墳と波涛平２号墳の玄室幅がほぼ等しいということがあげられる。

さらに、上蛟野５号墳に端を発するもう一つは、同じくＢ１型式の上蛟野２号墳である。この両者には、前述したように、玄室の長さが等しいという関係が認められたが、なお祇園西塚と上蛟野２号墳を較べてみるなら、前者の階段部と後者の敷居石の位置が、共に奥壁から等距離の所であり、さらには（上蛟野２号墳は羨道と玄室の幅がほぼ同じであり、袖部のみ広がっているのだが、その）袖部以外の幅が同じであり、上蛟野５号墳より祇園西塚の方が上蛟野２号墳に近いということが指摘できる。以上のような点から、上蛟野２号墳の場合は、Ａ３型式である祇園西塚を経由していると考えられる。

最後に、Ｂ２型式及びＢ３型式についてみると、同じ、境に築かれ段築を持ったＡ２型式がＢ２型式に移り変わった様相を呈している。Ａ２型式（特に三ツ山６号墳）と、Ｂ２型式である竜石山４号墳の幅が近似している点が両者の関連を物語ってくれる。さらに、Ｂ３型式である三ツ山２号墳は、Ｂ２型式の竜石山４号墳と、玄室の長さ、幅とも同じであり、段築を有したまま境から羨道中へ階段が移行したと考えられ、Ｂ２型式→Ｂ３型式の関係が成り立つと言える。

以上のように、「竪穴系横口式石室」の変遷を試みたわけであるが、必ずしも資料が十分であるとは言えず、か

なり近似しているものもあるが、わずかな関連を手掛りに変遷を行ったのも少なくなかったため、あるいは独断に走った点もあるかもしれない。しかしながら、上蚊野５号墳あるいは三ツ山４号墳に端を発する、近江の「竪穴系横口式石室」は上蚊野２号墳・波涛平２号墳あたりで終結を迎えるであろうということは言えたであろう。ただ、本当にそれで終わりなのか、さらに系統を引くものがあるのかということを、類似する形態をみることによって考えてみたいと思う。

「竪穴系横口式石室」に類似する古墳の検討

ここでは、明確な階段はないが、何らかの形で高低差のある古墳についてみていく。まず、該当するものを列挙すると、a類…上蚊野６号墳・竜石山３号墳・狐栗Ａ－２号墳、b類…石渕山古墳[8]・丸山１号墳・同２号墳の６基である。いま、a類としたのは、床面自体に段差があるもので、敷居石のような特殊な石を媒介としないものをいい、b類は、敷居石のような石を契機として羨道が高くなっているものをいう。

まずa類からみていくと、狐栗Ａ－２号墳については、10cmの高低差で段があるものの、全く通常のものと変わりはない。ただ表１より玄室の長さに比べて羨道の長さの割合が小さいという、「竪穴系横口式石室」の多くと類似する特徴を持つ点から、あるいは何らかの意識があったかもしれないが、直接系統を辿ることは不可能である。

竜石山３号墳の場合、同群中の他の三基が「竪穴系横口式石室」であるので、それらとの比較を行ってみる。すると、築造企画や石積み法等、共通な点が多い。これらの古墳の関係について水野氏は、「首長家族を含む有力家族で構成されるこの村に、６世紀中葉以前に帰化系氏族の編貫があり、その一つが墓域を獲得し、故国の墓制にならって横口式石室を造墓した…」[9]とされているが、筆者なりに解釈を加えるならば、墓域を獲得した渡来系の人々は、２号墳の築造者達であり、３・４・５号墳の各基は、その流れを引く者であろう。ところが、３号墳の築造者だけは、１石の高低差にすることによって、階段を築くという伝統を有名無実化した、特徴ある存在ではなかったろうか。

一方、上蚊野６号墳の場合、b類との中間とも言うべきである。即ち、玄室と羨道の両床面に栗石敷が認められ、両者間に20cmの高低差があるのだが、その段には、他の栗石と比べ明らかに大きな板石が並べられており、敷居石としての性格も有すると思われるからである。それはさておき、「竪穴系横口式石室」との類似性を考えてみると、玄室の企画がほとんど５号墳と同一である。その上、段差のある位置も同じであり、年代的には６Ｃ中葉と７Ｃ前半と、少し開きがあるものの、同一系譜と考えるに難くない。ただ、ここで２号墳との関係を考えておかねばならない。年代的には、丁度５号墳→２号墳→６号墳となる。しかし、前述してあるように、２号墳の階段は既に羨道中に築かれているのに対し６号墳において再び玄門部に戻るというのは考え難い。むしろ、５号墳から２号墳方向と６号墳方向の別系統を考えるのが妥当であろう。ただ、その場合時代的にも、形態的にも５号墳と６号墳の間に、過渡的なものが存在した可能性もあるが、今は知る由もない。

次にb類をみると、石渕山古墳はその大きさ（幅及び全長）が波涛平２号墳のそれと、ほとんど同一であり、比較的大型の不整形な石を使用し、間を小石でつめてあるなどの築造法が似ている点、あるいは階段（敷居石）の位置も同じように袖石分だけ羨道部に築かれている点、出土遺物より築造年代が６Ｃ末に比定できる点等の類似点が多い。よって、当墳は、波涛平２号墳同様「竪穴系横口式石室」の後期形態の一つだと言えよう。

最後に、丸山古墳群の２基は、どちらも敷居石を境に羨道が傾斜している。敷居石という点では石渕山古墳に一番近いわけだが、１号墳の桁外れの規模や、２号墳の長方形の袖石。それに、両基とも奥壁基底石に巨大な１枚石を使用している点など、あまりに特異な形態だと言わざるを得なく、おそらく、「竪穴系横口式石室」とは別

系統だと思われる。

以上のように、竜石山３号墳・上蚊野６号墳・石渕山古墳において「竪穴系横口式石室」の終末的形態をみることができた。そしてやがては、全く段差を持たない横穴式石室へと移行していく様子がつかめたといえる。しかし必ずしも直線的に変化していくのではなく、例えば竜石山古墳群のように、同時代でも、その形態を守っている者と変化させている者が並存しているし、上蚊野古墳群のように、横穴式石室を取り入れながらなおかつ階段を残しているもの（２号墳）も存在していたのである。

(3) 遡源を求めて

近江における「竪穴系横口式石室」という特殊な形態の原形をどこに求めるかということが次に問題になる。その際に、筆者は以下の点に着目してみた。

この形態は、竪穴式石室が横穴式石室へと移行する過渡的なものであるが、近江の初期をみた場合、それは当初から横穴式石室を意図して築造されているということが言える。その根拠として、階段部に着目した場合、前壁の一部が階段として残り、開口部は単なる横口部ではなく、羨道と玄室をつなぐ連結的役割を担っているという点があげられよう。また、玄室プランが比較的正方形に近いという点も、横穴式石室の初現的形態[10]との関連が考えられるのである。このような観点から、従来「竪穴系横口式石室」と言われているものとの比較検討を通して、近江の源流を考えてみたい。

イ．畿内及びその周辺との比較

現在までに、大和の北葛城郡新庄町二塚古墳の造出部石室[11]・丹波の天田郡夜久野町流尾古墳[12]・及び河内の南河内郡河南町一須賀古墳群[13]中に確認されている。

まず二塚の場合、築造年代が６Ｃ前半に比定されているところより、近江に先行しうる。そこで、近江の初現的形態の一つと考えられる上蚊野５号墳と較べてみる。初めに、石室規模をみると、上蚊野５号墳が比較的正方形プランに近いのに対し、極めて細長である点が指摘できる。また、階段部については、同じように前壁として築かれているのであるが、二塚のそれは石の積み方は側壁とは違うし、前壁全体が即ち階段であり、90cmの高さを測り、棺を運び入れるための段ではなく、報告書にも記されているように、閉塞のための前壁であると言える。それに関連して、羨道部の石積みが成されてはいるものの、これまた報告書で述べられているように、天井石が架けられていない可能性が強く、仮に架けられてあっても、羨道としての役目は成していないのである。それに対し上蚊野５号墳は前壁の一部が築かれずに階段となり、それは昇降可能であり、羨道と玄室を区切るのではなく、両者をつなげる働きをすると考えられる。その違いに、最も隔りがあると思われる。その違いに、塚が変化してこのようになったとの考え方も否定はできない。しかし、両者の中間的存在が確認されていない今、一飛びにこのような変化を遂げるとは考え難いのである。

次に、流尾古墳であるが、これはむしろ二塚に類似する形態としてあげたい。つまり、当墳は、壁体はすべて小口積みであり、玄室の長さが幅の 4.3倍と極めて細長く、より竪穴式石室に近いと言える。また、階段部の高さは40cmであり、昇降は可能なものの、 1.5m の羨道は、天井石は架けられてあるが入口に向かって高さを増し、羨門部ではわずか40cmの上下間隔しかなく、出入りは不可能であり、これも羨道としての働きはなかったと思われる。このように、当墳も近江の源流とは考え難い。なお、その築造年代は６Ｃ中頃に比定されており、あるいは二塚に続くものかもしれない。

最後に、一須賀６号墳についてみると、図等詳細な資料はないが、概報により判断すると、階段部が袖石より

若干羨門側に置かれている点は、どちらかというと近江のB型式に近く、壁体石と異なる人頭大の自然石によって構築されている点、羨道が傾斜している点など、近江初期のものとは様相を異にしていると言わざるを得ない。よって、これも源流とは考え難い。

なお、本稿に直接関係はないものの、先の二塚古墳においては、造出部のみがこの特殊な形態である点、出土遺物中に、朝鮮の達西面古墳群（後述する）からの物と近似した農具が認められている点等、興味ある事実が浮かび上がり、今後より一層の研究が必要とされる。また、一須賀古墳群中からは、炊飯具のミニチュアが出土しており、水野氏の指摘[14]を考慮すれば、これもまた渡来系氏族との関係を考えねばならないだろう。

ロ．北部九州との比較

そもそも「竪穴系横口式石室」なる名称は九州において、竪穴式石室から横穴式石室への移行期の形態に対して用いられた如く、当地では多数認められている。近年、それらをまとめて検討を加えた論文があるので[15]、それに従って比較してみたい。その前に、同書により「竪穴系横口式石室」の形態概念が定義付けられているので、それを確認しておく。

1．「玄室プランは狭長な長方形を原則とし、…石室部に連結する羨道を付設しない」

2．「壁体と天井石の構築法では…割石平積みあるいは塊石積みが基本形である。」

3．「石室の閉塞はすべて横口部で行う。」

4．「石室の横口部前面には、羨道の代わりに、墓道か前庭部が付設されることが多い。」

そこで、これらの定義と近江の場合とを比較するために近江の特徴をあげると次のようになる。

1．玄室プランは初期のものは比較的正方形に近いものの、九州の「竪穴系横口式石室」と大差はない。しかし、必ず玄室と連結する羨道を持つ。

2．基底石は横長か縦長に立て、上段は平積みか小口積みである。

3．閉塞の位置は不明である。

4．前庭が付設されることもあるが、その場合でも羨道の前面である。

以上のようになり、特に羨道の存在についての差異が目立つ。

そこで今度は九州のそれが具体的に源流となる可能性があるか否かについて考えていきたい。まず、近江のそれに一番近似する形態として、第Ⅲ類が上げられる。しかしながら本類の石積みをみるならば、５Ｃ末から６Ｃ中葉に比定されているが、既に石材の大型化が進み、何よりも袖石が立てて置かれているという特徴を有する。しかるに、この形態が近江の初期の源流であるとするなら、既に近江のB型式の段階に入っていながらA型式の築造を行うという逆行を考えざるを得ないという矛盾が生じる。

一方、Ⅱ類をみると、基底板石により前壁を構築しているが、それは上段の板石と共に閉塞石に他ならず、竪穴式石室を横口部によって出入りを可能にした、文字通り横口式石室だと言える。それは、当初から羨道との連結を旨とした近江の階段とは、やはり性格を異にするものと考えるのである。

ところが、Ⅰ類ではまた少し様相が違い、横口部が側壁を細めて構築されていることは羨道の起源を思わせる。しかし、下部は箱式石棺状に板石を立て、その上部に典型的な竪穴式石室を思わせる板石の平積みがなされている点は、やはり近江のそれとかなりの隔たりがあるとせねばならない。それに、本類の築造年代は５Ｃ中期～後期に比定されているため、もしこれが近江の初現的型式の源流となるものなら、 100年近くかかって型式が変遷してきたと考えるか、このような被葬者が直接近江に来たと考えねばならない。しかしながら前者の場合、中間的型式がある筈だが未だそれが認められていないこと。後者とすれば、代を重ねて 100年経った後忽然と、それ

もかなり移り変わった型式の石室を開花させたということであり、どう考えても無理が生ずると言わねばならない。なお、これらのことは、築造年代が５Ｃ後半から６Ｃに比定されるⅡ類についても言えるのである。

以上のように、北部九州にも遡源が求められないいま、それを大陸に求める以外に残された道はないのである。

ハ．大陸に遡源を求めて

朝鮮半島においては、「竪穴系横口式石室」なるものが新羅の慶尚北道達城達西面古墳群[16]の37号墳と55号墳に確認されている。しかしながら、これらの形態は横口部において、40～50cmの垂直の階段が構築されているものの、次の諸点で相違がみられる。

第一に壁体はすべて巨大な板石を立てることを基本としている。第二は、階段部は上面の板石と共に閉塞施設となっている。第三として、第二に関連して、玄室に連結する羨道がない。だいたい以上のようなことがあげられる。

このようにみると、むしろこれらは九州のそれに類似していることが分かる。しかし、達西面古墳群は５Ｃ～６Ｃと推定されており「南鮮と北九州で時を同じくしてあらわれた同性質の文化現象」[17]と言われる如くである。なお、こうした達西面古墳群の築造者達が直接近江に渡来したと考えた場合、その型式間にあまりの差があることを認めざるを得ない。ただ一つ可能性があるとすれば、半島において、さらに近江に近い形態にまで変遷があり、しかる後の築造者が渡来したと考えることであろう。

次に、「竪穴系横口式石室」とは呼ばれていないが、階段を有する横穴式石室例について検討してみる。百済の驪州郡州内面梅龍里８号墳[18]がそうである。当墳は、横長プランである点、石積みが塼のような小型石の小口積みである点は、近江と異なるが、階段部を見ると、前壁の一部が除かれて開口した結果だということが言える。また、それは玄室と羨道を区切るものではなく、両者を結び付ける役割りを担っていると考えられる。

このようにみていくと、階段の性格という点から、当墳が近江の初期の形態に最も近似していると考えられる。ただ、築造年代が５Ｃ初期～中葉までに比定されるため、直接この時代にこの地からの渡来者があったとはできない。むしろ、今のところ発掘例はないが、この地において、あるいは他の地に伝播し、玄室の企画等において近江のそれに近い変遷が行われ、その人達が６Ｃ中葉に近江に渡来してきたと考えるのである。

以上のように、近江の「竪穴系横口式石室」は、直接、的を得た遡源は求められないものの、朝鮮の百済の横穴式石室の形態が一番近いと考えられたのである。このようにみたとき、近江のそれは初期の形態から横穴式石室を意識しているという点で、「竪穴系横口式石室」とは呼び難い。そこで、敢えて言うなら「階段式横穴式石室」という名称を提唱したい。

(4)ま　と　め

このように、近江における「階段式横穴式石室」について考察を進めてきたが、最後にその築造者の性格という点を考えて、本形態に関するまとめとしたい。

先述したように、「階段式横穴式石室」を築いたのは、６Ｃ中頃に百済より渡来した人々である。そして近江の群集墳の初現的形態がこれであるという辺りから、その性格を考えていきたい。

古墳時代後期になって各地で生産力が増大し、その中で特に力を持った有力家族が次々に群集墳を築き上げる時、近江ではこれらの渡来系の人々が、まず営造できる力を有していたと考えることができる。そして彼らは、上蚊野５号墳や三ツ山４号墳を築いた人々であった筈である。

しかし彼らは執拗に身らの形態を固守するのではなく、むしろ積極的に畿内の横穴式石室の形態を採り入れて

いく。例えば袖石を他の石と区別して立てるようになるし、狐栗古墳群ほどではないにしろ、羨道の長さもA型式に比してB型式は長大化する。そして何よりも、羨道を玄室と一体化させようとする意識がさらに強まる。その現れが、ある時は段築であったり、またある時は羨道中に階段を築くことであった。そしてそれが終局的には上蚊野6号墳や石渕山古墳のように「階段式横穴式石室」たらしめていた段差を無意味化させるのである。

ただ、こういった変遷を、いま同化という形で捉えようとしたが、あるいはそれは単なる、横穴式石室への当然の変化であったかもしれない。しかし、比較的たやすく自らの文化をかなぐり捨てようとする者と、守ろうとする者のいることも、竜石山古墳群の例からわかる。

いま一つ問題になるのは、彼らがどの地に渡来して、どのような発展をみせたかということである。筆者が先に試みた変遷に従えば上蚊野あるいは三ツ山の地に来た彼らは、竜石山や祇園（祇園は本来上蚊野と同一地域であったかもしれない）の地とも交流を行いつつ（三ツ山古墳群中で2号墳だけ様相を異にするのは、単に時代の変化だけでなく竜石山4号墳の影響を考えねばならないであろう。）現在の水口（波涛平）や米原（石渕山）の地にまで、その勢力の広がりをみせた。それは婚姻によるものとも考えられるし、古墳の築造を専門に請け負った結果だとも考えられる。いずれにしろ、その活動範囲の広さに彼らの性格の一端をみる思いがするのである。

5 結　　語

以上のように、「階段式横穴式石室」を中心にみてきたが、最後にこのような特殊な形態と一般の形態とが、時代的にも地理的にも並存しているという点について考えることによって上蚊野古墳群のまとめとしたい。

ところで、先にも述べたように、この形態の横穴式石室の築造者は、百済系の人々であろうと考えた。しかも、彼らは一定の地域にのみ定住していたのではなく、かなり広範囲に活動したと思われる。よって、上蚊野古墳群が築かれたこの地にも、彼らは生活していたであろうが、決して本拠地といった性格のものではなかったと思われる。それは、他の人々とも共存していたということにもつながろう。なお、雑居性の裏付けとして、3号墳と福王子1号墳[19]の築造企画の近似という点があげられる。つまり、両者の玄室の長さと幅はほぼ同一である。その上、玄門部で閉塞されているという特徴を、共に有する点でもその類似が示される。福王子の地は、水野氏によって漢人系氏族の本貫地とされているだけに、このことからも本群の性格が理解されよう。

なお、そのことに関連して、今回調査を行った8基の他に、上蚊野古墳群中には、百塚や蝙蝠塚等の大型墳は通常の形態であり、「階段式横穴式石室」とは出自を異にする氏族の築造と思われる。

以上のように、本群の石室構造の違いは、築造者の違いによるものであろうと考えた。それも、渡来系の人々の影響である可能性が強いと思われる。よって、近江における古墳時代の考察を行うに際して、渡来系の氏族との関係を抜きにしてはなしえず、今後より一層の研究が期待されるのである。

最後になったが、4は卒業論文の一部を修正加筆したものである。その指導にあたっては都出比呂志先生に助言・御教示いただいた。ここに謝意を表したい。しかしながらいたらない点は、ひとえに筆者の不徳とするところであり、今後御教示いただければ幸いである。

(1) 水野正好他「竜石山古墳群」（『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1965）

(2) 中谷雅治「階段状積石のある横穴式石室について」（小江先生還暦記念論集刊行会『水と土の考古学』1973）

(3) 報告書未刊のため詳細は不明。ただし、実測図は滋賀県教育委員会提供。

(4) 滋賀県教育委員会『甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要』1967）

(5) 江南洋「丸山古墳群」((1)前掲書)

(6) 『水口町志・上巻』に若干の記述はあるが、実測図は滋賀県教育委員会提供。

(7) 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する—試考—河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として—」(『古代学研究42・43合併号』1966)

(8) 滋賀県教育委員会「坂田郡米原町河南石渕山古墳群調査報告」(『滋賀県史蹟調査報告第十二冊』)に記述はあるが、実測図は滋賀県教育委員会提供。

(9) 水野正好「群集墳と古墳の終焉」(『古代の日本5　近畿』)

(10) 白石太一郎「日本における横穴式石室の系譜—横穴式石室の受容に関する—考察—」(『先史学研究5』)

(11) 上田宏範他「大和二塚古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第21冊』1937)

(12) 村史編纂委員会編『夜久野村史』
「第二章　原史文化の時代」

(13) 大阪府教育委員会「一須賀古墳群発掘調査概要(1)—南河内郡河南町一須賀—」
(大阪府文化財調査概要1973—9』1974)

(14) 水野正好「帰化人の墳墓—滋賀県における漢人系帰化氏族をめぐって—」(『月刊文化財』1969、10)

(15) 柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開　Ⅳ竪穴系横口式石室の検討」(『九州考古学の諸問題』1975、3)

(16) 小泉顕夫、野守健「慶尚北道達城達西面古墳調査報告」(総督府『大正12年度古蹟調査報告』1、京城1931)

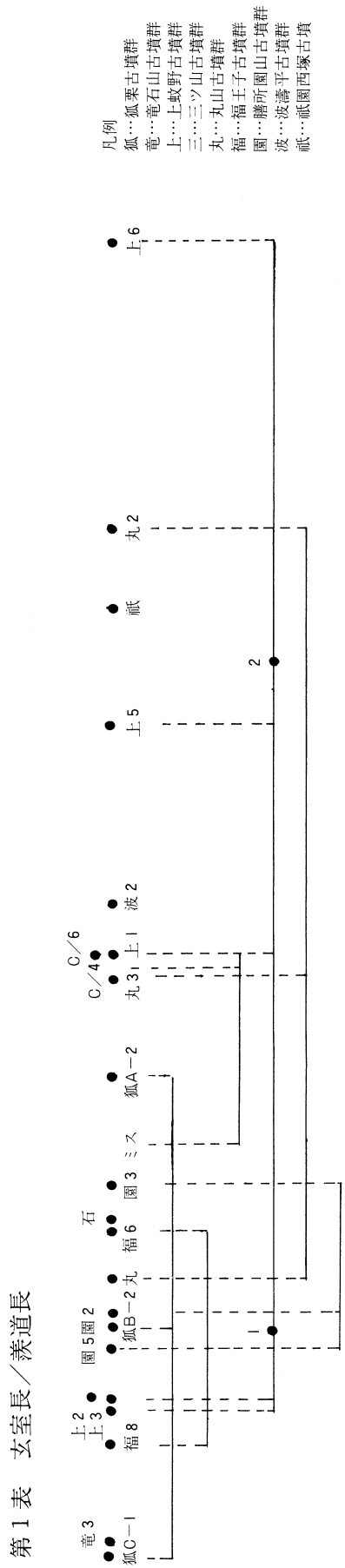
(17) 小田富士雄「Ⅲ　古墳文化の地域的特色2、九州」(近藤義郎・藤沢長治編『日本の考古学Ⅳ・古墳時代上』1966)

(18) 野守健・神田惣蔵「公州宋山里古墳調査報告」(総督府『昭和2年度古墳調査報告』2、京城1927)

(19) 滋賀県教育委員会「福王子古墳群発掘調査報告」(『滋賀県文化財調査報告書　第4冊』1969)

(藤川)

第1表　玄室長／羨道長



第2表　袖石の形態と築造年代

古　墳　名	袖石形態	築造年代
上蚊野1号墳	B	6c末
〃　2　〃	B	6c後半
〃　3　〃	B	不定（6c末葉）
〃　4　〃	不明	6c中葉
〃　5　〃	A	6c中葉
〃　6　〃	B	7c前半
竜石山2号墳	A	6c中末
〃　3　〃	B	6c後半
〃　4　〃	B	〃
〃　5　〃	B	〃
三ツ山2号墳	B	6c中葉前半
〃　4　〃	A	〃
〃　6　〃	A	〃
狐栗A－2号墳	B	7c前葉
〃　B－2　〃	B	〃
〃　B－3　〃	B	〃
〃　B－4　〃	なし	（B－3より新しい）
〃　C－1　〃	B	6c後葉
波濤平2号墳	B	6c末～7c初
祇園西塚	A	6c中期後半
石渕山	B	6c末～7c前半
丸山1号墳	B	不定
〃　2　〃	B	〃
〃　3　〃	B	〃

（凡例）
A…1石
B…多石

第15章　秦荘町野々目（はたしょう　ののめ）遺跡

1　はじめに

当該遺跡の発掘調査は、ほ場整備に先立ち県遺跡目録掲載の白鳳時代寺院跡（伝大国寺跡）の明確な位置、寺域の規模、遺存状況等を把握する目的で実施したものである。

調査は県文化財保護課技師近藤滋が担当した。なお調査に際しては秦荘町教育委員会、および同町耕地課の皆様、調査に参加いただいた地元の方々に多大の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

最後に大変恥しいことであるが、当該調査で作製した図面類が、当報告書作製時点で、分室内で埋没し行方不明となったため、今回は概要を記すに止めて、詳細は後稿に譲りたい。

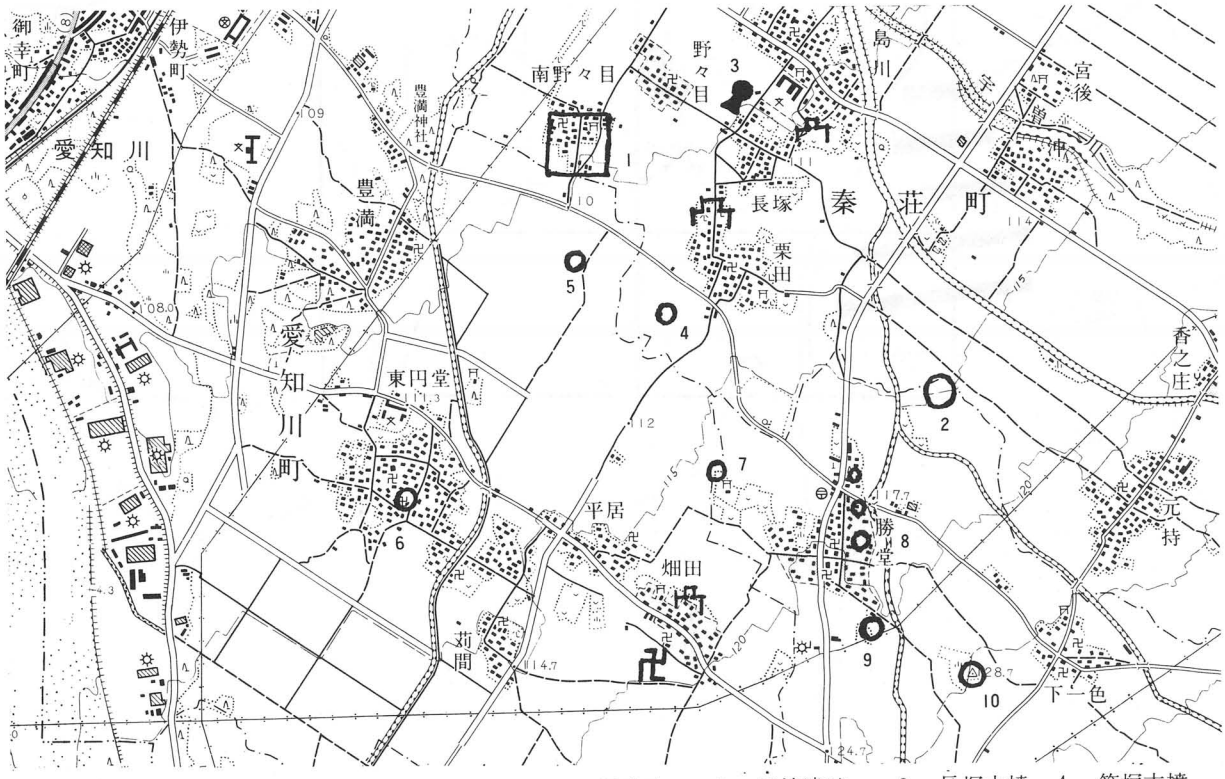
2　遺跡の位置と環境

当該遺跡は本県愛知郡秦荘町大字南野々目と同郡愛知川町大字東円堂の２町の町境にまたがる遺跡である。今回の調査地は愛知川町地先であるが、土地所有者は秦荘町民であり、地理的にも遺跡の南を通る町道で区切の良いことから、工事も秦荘町管内の工区で実施された。

遺跡は、いわゆる愛知川の扇央部で洪積世台地化したところに立地し、用水は愛知井の支流と深井戸による揚水にたよっている。

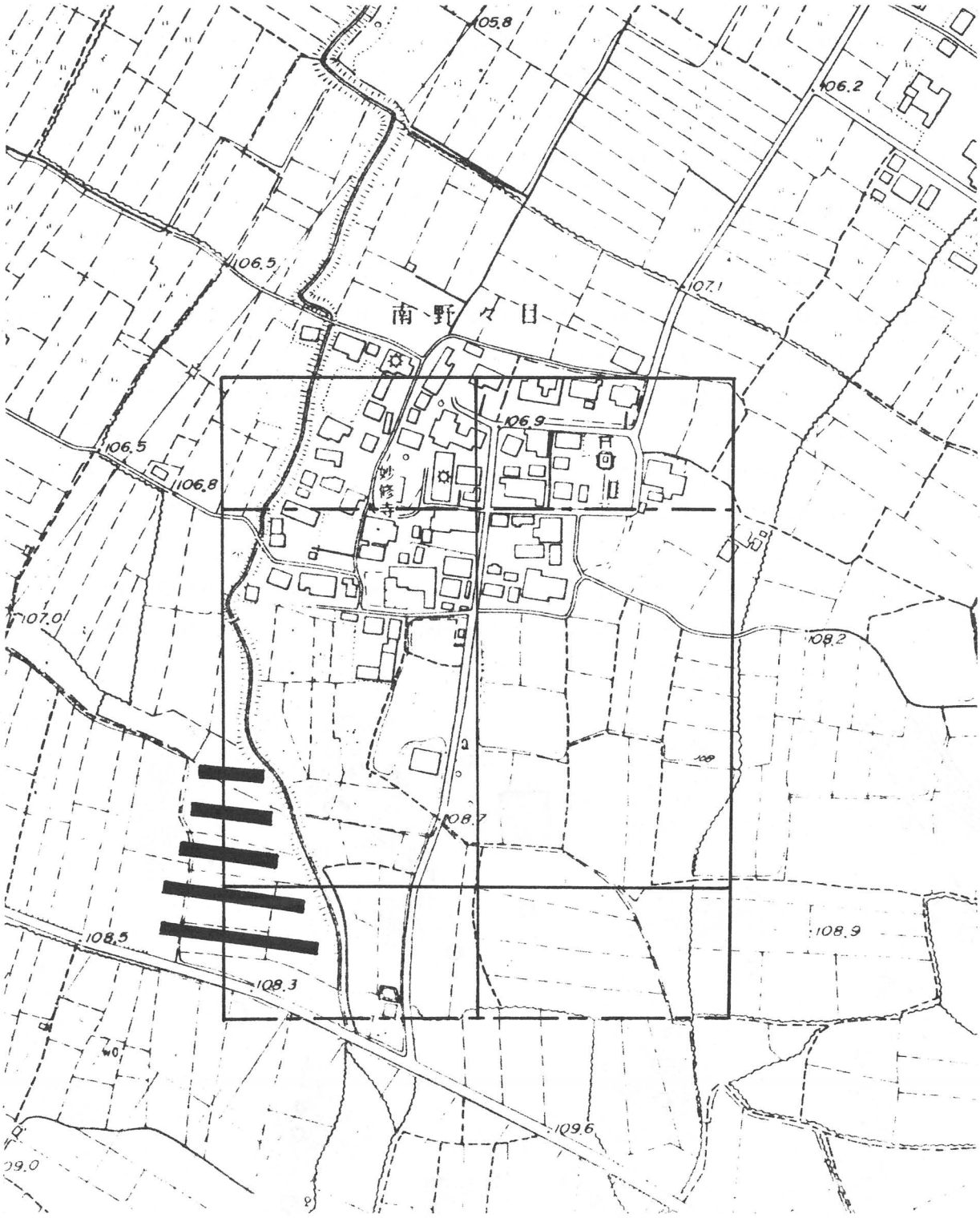
当該遺跡を包む歴史的環境としては、もっとも古いところで南約 800ｍの東円堂字内に弥生時代の集落遺跡があり、かつて石鏃の出土が報じられている。また、近年では、一部安壺川の改修や、ほ場整備に伴い古式土師器も出土している。

古墳時代は、先の古式土師器以降若干の空白を持って、当該遺跡の東北東約400ｍに長塚古墳が所在し、南東500ｍには笹塚古墳、南200ｍに塚原古墳が所在する。これらは詳細は不明であるが、いづれも後期に属すると考えられ、長塚は愛知郡内に所在する前方後円墳２基のうちの１基で、現在では後円部の大半が削平され、前方部墳丘



第１図　位置図

1．野々目遺跡　2．元持遺跡　3．長塚古墳　4．笹塚古墳
5．塚原古墳　6．東円堂遺跡　7．骨塚古墳　8．行者山古墳
9．おから山古墳　10．赤塚・弁天塚古墳



第２図　トレンチ設定図
寺域を２町四方と考えた時の範囲

上に八幡社の社が鎮座している。また、塚原古墳は明治時代に墳丘は削平され、現在は水田と化しているが、削平当時、検出された石が赤かったと伝えられ、出土した須恵器の一部も東円堂内の寺に保管されており、これにも丹土の付着が確認されている。このことから当墳は石室内部に丹彩をほどこした横穴式石室を持つ円墳の可能性が考えられる。なお箭塚については現在径７ｍ高さ１ｍ程度の竹藪で単独墳として残存しているが、地形的には先の塚原古墳と、さらには湖東町に所在する勝堂古墳群と同一の微高地上に立地していることから、かつてはさらに数基の古墳が周辺に有ったと考えられる。

以上が、当野々目遺跡周辺の主な遺跡の概要であるが、遺跡とは別で、なお注意を要することが２点ほどある。その一つは遺跡地の西約300ｍに所在する豊満神社である。この神社は愛知郡二座のうちの一つで、いわゆる式内社であり、古くから愛知郡大国郷の信仰の中心と考えられ、ここことの関係から『伝大国寺跡』の名が出たと想像されるからである。次に注意を要することとは、この野々目集落と東の栗田集落の間の田畦畔が、周辺の愛知郡条里の方向と異なっていることである。そして、その方位は、まさに東西南北を示しており、愛知井に伴なう湖東地区の古条里とされている愛知川町畑田や、湖東町勝堂に続く可能性があるからである。また、小字名にも安堂等があり、今後の調査に期待の持たれるところである。

3　遺構と遺物

先にも述べたように、今調査にかかわる図面類の紛失のため詳細は後稿に譲り概要を以下にまとめてみる。

今調査の目的は野々目廃寺の正確な位置、規模等が不明確であったため、調査前の検討で、遺物の散布状態、畦畔、水路等の地形から一定の想定をしてみた(第２図)。そして、この想定に基き、寺域西側の外郭大溝、あるいは築地痕を明らかにすることでトレンチの設定を行ない発掘を実施した。

調査は耕作土を除去し、第２層の暗褐色砂泥気味の床土を除去すると、現田面下約30cmで遺構が検出された。しかし遺構の大部分はまとまりのない柱穴で、他に数条の溝が検出されたにすぎず、結果的には寺域の外郭は不明であった。

では発見された遺構の概要とは、まず最南端の第１トレンチで南北に方位を持つ幅60cm深さ50cmのＶ字溝が確認されている。そしてこの溝の中からは須恵器の坏片が１片出土した。また、このトレンチでは約径40cmの掘方径15cm程の柱を持つ５間×２間の掘立柱建物が１棟検出されている。その他の遺構としては第４トレンチで若干の柱穴があり、一部は第１トレンチの建物と方位を同じくする３間×２間の建物が考えられた。

遺後に遺物としては、まったく遺構とは別で、床土内より６世紀後半の須恵器片や古式土師器の破片等も若干出土した。また瓦片もわずかであるが確認された。

4　まとめ

先にも述べたとおり、今回の発掘調査では当廃寺跡が２町四方の規模を有していた場合の西側溝等の検出を目的としていたが、結果は南北に方位を持ち、かつ寺の存続期間に等しい時期の溝が一条確認されたものの寺域の西を画する遺構ではなかった。このため、当寺跡は１町四方程度の寺であっただろうことが推測できた。また掘立柱遺構については、その方位が、寺の方位とは異なり、むしろ、愛知郡条里の方向に近かった。このため現在に残されている愛知郡条里が、いつ頃に施行されたものか不明であるが、建物全体の感じから平安時代以降の時期で、周辺条里に規制され、建った建物と思われた。

（近藤　滋）

第16章　秦荘町元持遺跡

1　はじめに

当該遺跡も野々目遺跡同様、秦荘町と湖東町の２町にかかり、地主は秦荘町の人々であったことから、秦荘町元持工区で工事を実施した。そして調査地自身は湖東町内を主に調査した。

調査は県文化財保護課技師近藤滋が担当し地元区長を始め多くの方々に協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

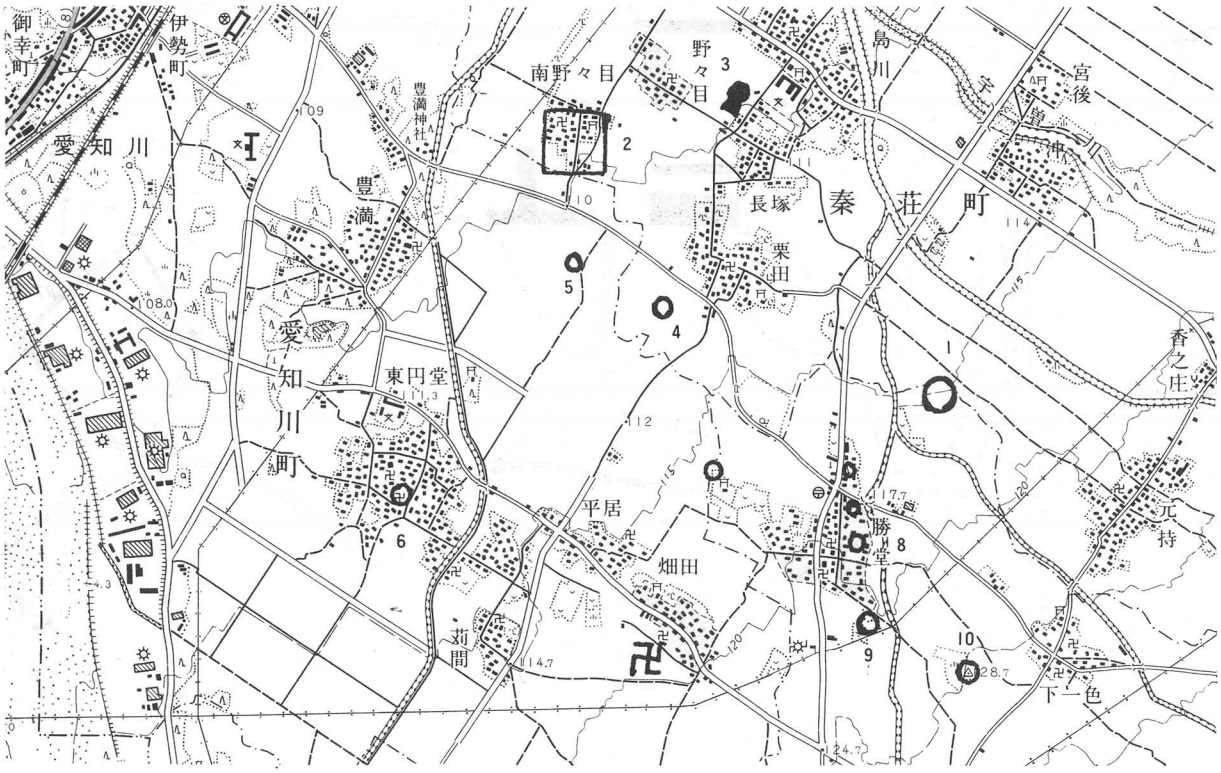
なお当該遺跡は、たまたま当該工区の設計図を見る機会に当り、何気なく見ているうちに、田畦畔の方位が部分的に異なり、かつ東西南北に近いことから発見したもので、現地を事前に踏査したさい遺物の表採すらなかったが、地割りが気になり発掘調査を実施したものである。

最後に再度お断りしておくが、当遺跡の遺構図等についても野々目遺跡と同場所に保管していたため不明となり、詳細は後日にということでお許し願いたい。重ねてお詫びしておく。

2　位置と環境

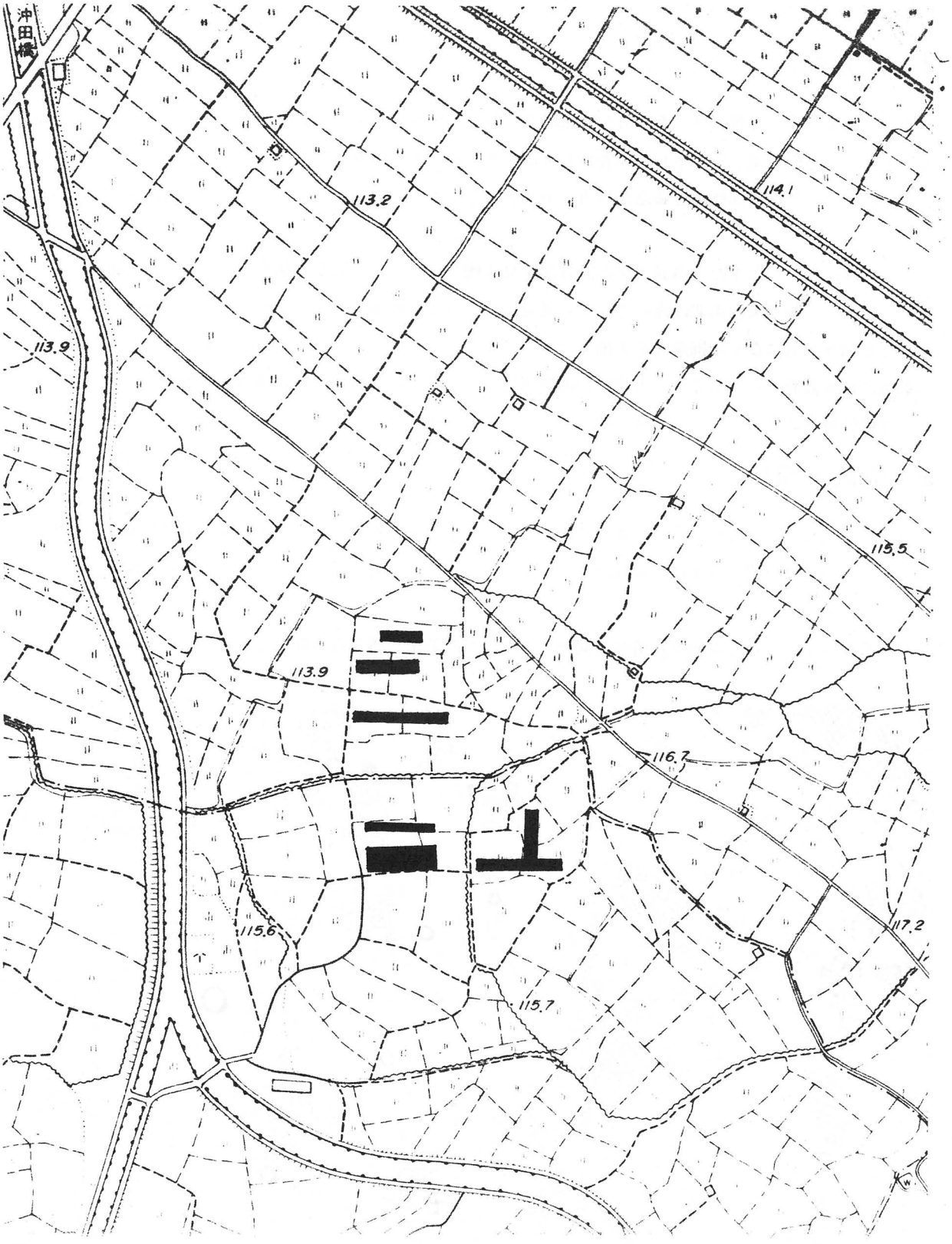
当該地は元持というより、むしろ勝堂の集落に近く、宇曽川の支流である淵川、広田川の合流点の東で、さらに広田川と南川の中間に挟まれた地域内に所在する。そして小字名では「中ブケ」等とあり、深田、湿田で有名なところである。

歴史的な環境についても野々目遺跡と同様であり、ただ若干、勝堂古墳群に近く位置している。



第１図　遺跡位置図

１．元持遺跡　２．野々目遺跡　３．長塚古墳　４．箱塚古墳
５．塚原古墳　６．東円堂遺跡　７．骨塚古墳　８．行者山古墳
９．おから山古墳　10．赤塚・弁天塚古墳



第2図　トレンチ設定図

3　遺構と遺物

当該地は発掘前の現地調査では遺物の表採は認め難かったが実際に発掘をしてみると、多くのピットと性格不明の舟底形土坑、溝、そして掘立柱高床式倉庫の掘方等とともに、古墳時代後期から中世に至る遺物が出土するに致った。さらには県下でも数少ないチャート製の有舌尖頭器とも言える石器や石鏃おも出土するに到った。

遺構としては第１トレンチの中央付近を南から北に向け幅約１ｍ、深さ30cmの、やや東に張り気味の溝と、東から西に向う幅50～60cm、深さ10cmの溝がいずれも古墳時代末の遺物を伴なって確認されている。また、同じ第１トレンチの西端近くでは、柱直径約20cmの２間×３間の掘立柱倉庫跡が確認された。

これ以外では多くのピットと性格不明の土坑が多数あるものの、まとまりはなかった。

また他のトレンチに於いても遺構として溝やピットが検出されているが、いづれもまとまりはなく、かつ少ない状態で、遺跡の中心は第１トレンチ以南から南東方向にあったと考えられる。

4　まとめ

当該区域は小字「中ブケ」の名が示すような湿地であり、深田であったことから、地元の人々は遺跡の存在性を否定していたところである。このため調査に入いる前に外周に仮排水溝を切り、当初から水中ポンプと一体で調査を実施した。しかし、いざ発掘をしてみると耕作土にも若干あるが、第２層の床土内から多くの須恵器等が確認され、かつ遺構面までの深さも平均20～30cm程度で検出された。

遺物は古墳時代末から鎌倉期の陶磁器、羽釜等に到り、長期の居住を明らかにした。

（近藤　滋）

1978
昭和53年３月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ
本文編

編　集　滋賀県教育委員会
発　行　滋賀県教育委員会
財団法人　滋賀県文化財保護協会
印　刷　有限会社　真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル
ＴＥＬ（０７５）３５１－６０３４

3570